キル夫は冒険者養成校で夢を繋ぐようです。

せかいちっ！

【注意事項】

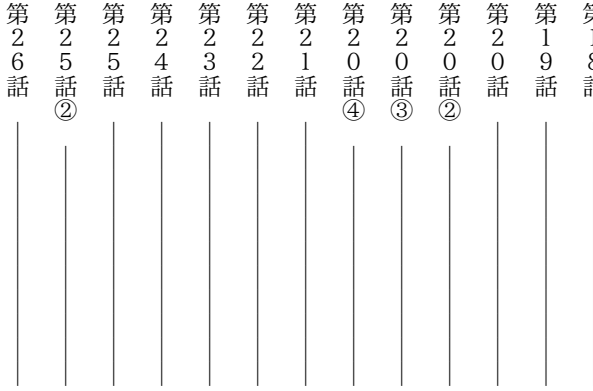
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

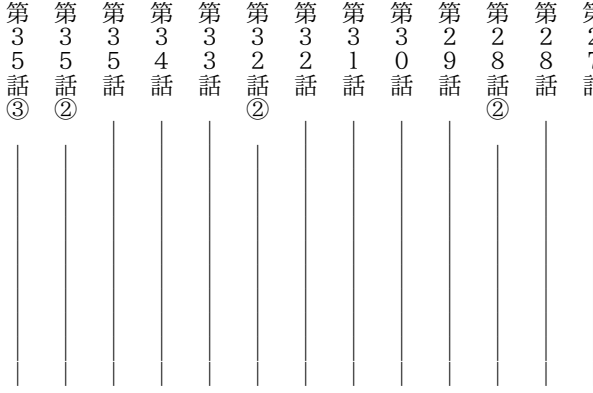
【あらすじ】

大豆　◆ｇ５ＶＴＳ３ｑＢＳ６氏による作品「やらない夫は冒険者養成校で夢を見るようです」
その本編が始まる１年前の物語
とある養成校へ通い始める少年とその周りの溢れ話

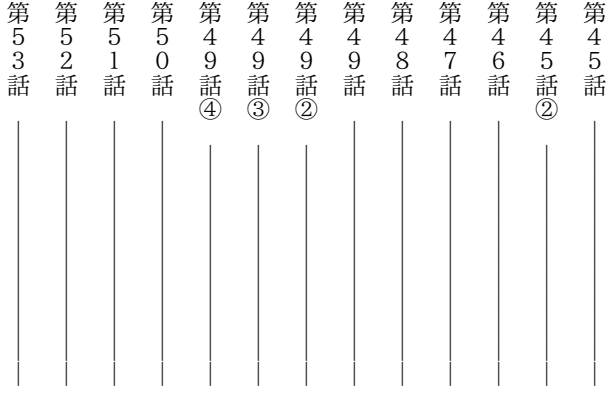
目次

プロローグ 1
第1話 16
第2話 41
第3話 80
第4話 112
第5話 147
第6話 191
第7話 249
第8話 285
第8話② 323
第8話③ 363
第9話 396
第10話 435
第11話 470
第12話 502
第12話② 541
第12話③ 574
第13話 611
第14話 650
第15話 683
第15話② 725
第16話 762
第16話② 798
第17話 848
第17話② 880


第26話 1337
第25話② 1301
第25話 1264
第24話 1238
第23話 1197
第22話 1164
第21話 1129
第20話④ 1094
第20話③ 1061
第20話② 1023
第20話 991
第19話 959
第18話 920


第35話③ 1802
第35話② 1767
第35話 1732
第34話 1694
第33話 1657
第32話② 1622
第32話 1588
第31話 1555
第30話 1518
第29話 1487
第28話② 1449
第28話 1413
第27話 1377

第44話
第43話
第42話
第41話
第40話③
第40話②
第40話
第39話
第38話
第37話②
第37話
第36話
第35話④
2283224322072171213721032068203419921955191318771838


第53話
第52話
第51話
第50話
第49話④
第49話③
第49話②
第49話
第48話
第47話
第46話
第45話②
第45話
27092675264126102576254225092476244324152386235123 18

第５４話 ―― 27
第５５話 ―― 62
第５６話 ―― 74
第５７話 ―― 81
第５８話 ―― 102
第５８話② ―― 128
第５９話 ―― 229
第５９② ―― 293
最終決戦：沙都子編 ―― 297
最終決戦：カズマ編 ―― 329
最終決戦：正義編 ―― 430
最終決戦：シノン編 ―― 643
最終決戦：臨也編 ―― 943
最終決戦：キル夫編 ―― 1309
キル夫編② ―― 1313
キル夫編③ ―― 1316
エピローグ ―― 1323
エピローグ② ―― 1327
後書き、キャラ秘話 ―― 1331
後書き、キャラ秘話② ―― 1334

プロローグ

――――――――――――――――――――――――――――――

この世界ヌカリアは、剣と魔法が世界を支配しあらゆる種族が混在している
その中で生まれる人間も数多の生物の一つにしか過ぎない
そして何より、この世界で暮らしていく上で大切な資質と言うものは親に関係する者らしい
日々平凡に暮らす墓守とかであったら俺ももっと平和な人生を行えていたかもしれねぇ
ただ俺の父親はそんな平和な人間じゃなくて

2．荒くれ者の海賊

次に……ザザッ……

―――――――――――――――――――――――――――――――

海賊たるもの達に善人と胸を張って言える奴はいないだろう
俺の父さんも大きな船を何隻も携えた親分をやっていた
父さんを始め多くの部下たちに可愛がられ育てられたが父さんが言うには俺は加護が一切ない人間らしい、神に見捨てられた人間なのかもしれない
その事がコンプレックスでもあったが、俺たちはそもそも神に正面切って真人間だって言えることをやっちゃいねえし気にしねえと父さんもみんなも笑いながら言ってくれた
俺はみんなのために何ができるかと言うのと、玩具の一個すらない海の上で宝箱を開ける事が皆のために出来ることだった
何より開けることが楽しみだったってのもある
この言い方だとおかしいが、実際手にした宝箱をいじる事が好きで、皆こぞって渡しに来てくれたのを開ける事が何よりの幸せだった

「キル夫さん、コイツを開けてくれますかい？」

「おっ了解っと」

俺はこなれた手付きで鍵を開ける
多くの宝箱を開けさせてもらったおかげでだいぶ手先が器用になり、開錠やトラップ等を仕掛けたり解除したりが手早く正確になっている

「ちょっ、罠気をつけてくださいよ!?」

「あっ……」

失敗！　罠が発動して毒針を食らう！

「痛えな、油断した」

「大丈夫ですかい!?」

「ああ、〝いつも通り〟だ」

俺は小さい頃から宝箱を開け続けて多くの罠を浴びているウチに状態異常に対してかなり耐性が出来ているらしい
致死量の毒じゃなきゃ待ってりゃそのうち治るし、軽毒なら支障すらねぇくらいだ
時折油断して刺されることはあるが、普段は気をつけていれば回避して解除できるしこぞって俺に宝箱が回って来てＷＩＮ　―　ＷＩＮの関係だった
俺たちは無法者だからこそ、そう言ったことに皆で喜び、略奪した品を皆で見せ合い喜び合う
そんな大人達を見ているのが俺は好きだった

ただそんな生活は長く続かない
出来事っていうものは時折良い方向に向かうことはあるが、それが全員が全員喜ぶものではなかった
父さんを恐れたのか、ただ利用したいと考えたのか父さんの海賊団は国に海軍としてスカウトされた
父さんはこれで諸手を挙げてそれを受け入れた
そりゃ理解は出来る、悪党で居続けるよりリスクのない善人になれるならそうなりた

い人間は多く居てウチもその一つだった
今までは確かに襲える商船などが無ければ食糧も金品も手に入らず飢えることもあったが……軍となればそんなことはない
俺の様なガキを育てるにはこれ以上なくいいこと尽くめだった
ただし当時の俺は十代も半ばといったところにも関わらずガキだった
軍としての父さんよりも、海賊の時の父さんの方が輝いていたと
皆で奪って喜び合ったり、宝箱を開けていたあの時代の方が良かったと
何より胸の中で一番重くのしかかった
神に見捨てられた俺よりも正道を歩くことを善しとすることに心が変わって行ったんだと思い込んじまったから

だから俺は家を飛び出した、行く先も決めず憧れを再び掴むために
しかし父さんが神に愛されていたか、俺が神に見放されていたのかは分からないが
人望も父さんに比べてなく、慌てて数人で航海を始め飛び出した俺は数日もしないうちに嵐に巻き込まれ、海に放り出された
父さんが悪党をやったように俺だって悪党だった
だからこその報いなのだろうと海の中、抵抗するも虚しくそのまま意識を失った

―――――――――――――――――――――――――――――――

「痛え……」

意識は朦朧としている、いくら状態異常に耐性があっても肉体が喰らうダメージを我慢することは出来ない

名も知らぬ浜に打ち上げられた俺は全身を酷く怪我しており、歩行どころか指一つ動かせなかった

このまま誰も来なければ死ぬだろうし、誰か来ても余程のお人好しで無ければ助けないだろう……それほどの怪我だと分かる

「ほんっっっっっっとなにがしてぇんだろうな」

勝手に父さんに反発して家を出て目的もなければ、未来すらも自分で捨ててオマケに死ねばよかったのにこうやって後悔する時間が出来てしまったのが心苦しかった

「まっ足掻いたところでなんら変わりはしねえな、大人しく最後を待つか」

「え?もう諦めちゃうの?」

「ッ!?」

俺は慌ててそちらを向こうとするが首が動かない、それを知ってか知らずか俺の顔を覗き込む様に少女が顔を出す

「ふーん、もっと喚くかと思ってたけどもう諦めるんだ」

紫色の髪で整った顔立ち、まず多くの男は可愛いと答えるだろう
それに肩をはだけさせてだらしなく着崩した制服、そしてなによりその姿によって強調された胸、これを見ないのは失礼ではないのか?

「おーい、もう死んじゃったの?瞳孔は開いてないけど」

「アンタ……いつから？」

喋る事もだいぶ厳しいが、誰かいるなら精一杯話す

「ん？キミが流れ着く前からだけど」

「そっか、運が良かったのか俺」

死ぬしかなかったと思ったがどうやらそうではなかったらしい
どうしようもないなら俺を待たずに見捨てたり追い剥ぎするはずだしな
今ここにいると言うならばそう言う事なのだろう、彼女はもしや天使なのではと思い始めて来た

「え？どうして？」

「ん？そりゃ助けてくれるんだろ？」

「え?なんで?」

彼女は驚いた様な表情をする、待てどう言う事だ?

「なら何故ここにいるんだ?」

「えっと、キミが死ぬのを待ってるから?」

「は?」

ちょっと待て、今なんて言った?

俺が死ぬまで?何がしたいんだコイツ

「いやぁ、キミが死んだら脳髄貰って行こうかなって」

「脳髄……っ……それがどうかしたのかよ?」

脳が理解に及ばず恐怖から少しだけ震え始める
その振動で身体に痛みが走り苦悩する

「あー、学園の生徒じゃないもんね知らないか、強くなるために使うの」

「……そりゃなんかやべー学園でして」

どうすることも出来ない、俺はどうやら死ぬしかないみたいだしな
物どころか最後は脳髄までも奪われて死ぬらしい
本当に、本当に

「俺はどう足掻いても神に見捨てられてるらしいな」

「うん？どう言う事？運がないから？」

「いや、加護がねーんだ俺は神に嫌われてんだろうなって」

「ふーん」

これから死ぬと言うのに俺は何を話しているんだろうな
しかも俺を見捨てる少女に、何か託すわけでもないのに自分語りを始める
自分の弱った体を確認し、そろそろ限界なのだと気付く

「わりーが限界だ、まぁ脳髄使うのは止めねーが無駄にしないでくれよ?」

「ねえ」

「なんだ今更なんかあったのか?」

唐突に尋ねられる、もう眠くなってきすらしたのに今更なんなんだ?

「加護がないって本当なの?」

「ああ、そうだがもういいか?」

後悔は山ほどあるが、今更になってしようがないと神に嫌われた自分は死んだらどこに行くのかなどとくだらない妄想をしているうちに

少女が何かを施した

「おい、なんだこれは?」

「ポーションだよ、最低限だけどね」

「……何がしてえ?」

体力が全回復したわけでもなければ苦痛が続く、手くらいなら動かせるが死なせずに苦しめたいのだろうか?

「ちょっとキミが気になったんだよね」

「だから実験材料にするってか？」

「別にそうじゃないよ確認したいだけ」

確認？今更何をする気だ？

何か出来るとは到底思わねえが

「ねえ、神に見捨てられたならさ……悪魔はどう？」

「アンタが悪魔だって言いたいのか？」

「いや、人間だけどさ」

「何が言いたい？」

勿体ぶる様に少女は続ける、痛みは続くから要件は手身近にして欲しいが

「神に見捨てられたならさ、キミを助けるのって十分悪魔に思えるかなって思っただけかな。でさ助かりたい？」

「……助かるならな」

今まで死ぬと思ってたし仕方がないとは思うが後悔もあるし生きられるならそりゃ生きたい

「じゃあ……脳髄だけじゃない、キミの全てを貰うよ。生きたいなら悪魔の手を取って？」

「……」

戸惑いは勿論ある、文字通り悪魔に魂を売る様な場面と差し支えない様に思える

他人の死すら気分で決める様な少女だ、俺も悪だったが倫理観はそれでも違う気がした

「ん……仕方ないから治してあげないとね手を取ったなら」

「……岡島キル夫だ」

「ふーん、私は新条アカネよろしくね」

だがそれでも俺は生きるために悪魔に魂を売った

――――――――――――――――――――――――――――――

第1話

――

「さて、結局俺はどうすればいい？」

彼女の手を取った後はすぐに治療された
神官などの類ではないらしいが、それでも治療は丁寧で助かった
正直、性格的に彼女が治療するならロクなことにならないと考えていたのもあるが心配はすぐに払拭された
しっかりと治療を受けた俺は次の行動を訪ねる
文字通り魂を売ったわけではないものの、基本的に彼女の奴隷になったも同然だ

「んー、今すぐなんかやれって言ってもなー」

アカネは困った様な仕草をする、直ぐに何かさせたかったわけじゃなかったのか

てっきりいきなり死兵になれとか脳髄寄越せとか言いだされたらどうしようかと考えたが、その点は安心した

「まぁ一応さー、私は冒険者の養成校に通ってるんだよねー」

「冒険者じゃなくて養成校……？」

名前は聞いたことある、冒険者を養成するための学校で各地に作られてると聞く
海を転々としていた俺にとっては何処にあるか知らなかったが、それでも寄った港の近くにあった場所もあるかもしれない
普通の学校と違って冒険者になるための練習などに特化してると聞くが

「ん？どうしたの？」

「正直疑問に思うことだらけだ」

冒険者になるのに養成校に通うのか

わざわざ面倒だし金がかかりそうだ
それに教師に教わるとかも勉強になるがそれなら誰か師事した方がよくないかなど
と疑問を並べる

「んー、疑問はまあ分かるけど師匠ってそう簡単に見つからないだろうし」

「まあそれはそうだな」

冒険者達の集まる酒場やギルドに行けばそれなりの人物はいるだろう
ただ一番はその人達がわざわざ弟子を取って教えるメリットがない
自らの飯の種を話す必要もないだろう
特に強さが金になる仕事なのだ

「そしてこう言うことにお金を躊躇うのはよくないよ」

「そうは言っても大金で成果がねぇとな」

流石に何も成果がないとは思わない
ただし支払った金や、かかった時間に見合う技能が入らなければ辛いものがある
簡単な仕事だってお金にはなる、入学費用だけじゃなくその時間さえも潰すのだから

「でも一番はさ、無駄死にするくらいなら通ったほうがいいしねー」

「そう言うものなのか？」

正直言って海賊をやっていた俺たちにはピンとこなかった
命を賭けた仕事をしていた故に死ににくいのは悪くはないが……
まぁ冒険者になって死ににくいとなれば好都合なのだとは思う
ただ、命のやり取りを常にしてきた俺たちはあまり死を恐れていないものがある

「正直ピンとこねぇな」

「少なくとも、生き延び方とかは覚えないと簡単に冒険者って死ぬし」

「うわぁ……」

正直今一瞬冒険者になるの辞めたくなってきた
言った通り死ぬことが怖くなくても死ぬぞと言われれば流石に躊躇う

「まあさー、きっ君だって結局は何か技能を覚えるためにすぐ冒険者になりまーすじゃまず無理だよ？」

「きっ君？」

「ダメだった？」

「ダメではないが……」

海賊時代には年上しかいなかった、一応立場が上のこともあって大概は呼び捨てか、さんや人によっては様などとへりくだっている人とかが多かった
だから渾名の様な呼び方をされたのは初めてだってのもある

「確かに技能を覚えるにはちょうどいいのかねぇ」

俺はあくまで開錠も自己流だ、親からも特に教わらずにやってきた
だからこそ素直に成長したのかもしれないが限界はある
俺でさえこれなのだから新条さんはもっと必要ということだろう

「ってことは相当為になったりしてるんですかい？」

「んーそうだねー一年間で通って良かったと思ってるよ」

養成校は聞いた話だと相当高かった筈だがそれでも為になるのか
多少の教養はあるものの、技術などは知らないことばかりだった
親や仲間から聞かなかったってのもあるが、それでも海賊仲間だけからなら未熟で終わっていただろう
海にまた憧れる気持ちがあるがそう言った学生生活も確かに憧れがあった

「うーん……きっ君も通ってみる？」

「はぃ？？？」

何を言い出すんだこの人は

理解もできないし、あくまで俺が奴隷的立場だった筈だが

今までそう言う話をしていたから俺が通いたいことがバレたのだろうか？

どっちみち安い話ではないしただの世間話の延長だろうけど

「と言うかさ、何も出来ない無能でも困るんだよね」

「いや、手先も結構器用ですし鍵開けとかなら……」

「そんなの盗賊コースを専攻で学んだ人たちにとっては当たり前に出来ることだけど？」

「あらまぁ」

予想はしていたが本職ではなくて養成校の人達での朝飯前のことなのか
今までの全てが否定されたわけではないが悲しくなる
と言うか当たり前にできるなら為になるじゃん……なるじゃん……

「それにちょうど私ももうすぐ2年生になるし、新人募集の時期と被るから入校いい機会なんだよね」

「いやでも俺、親の元に戻れないっすし金もないっすよ!?」

先程新条さんに地図を見せてもらったが相当遠くまで流されてきた、自分でもよく生きてこれたなと思うくらいには漂流していたらしい
当然だが帰ることはしばらくは困難だし親の元へ帰るなら本当に冒険者にでもなって一山当てるしかないと思っていた

「いいよそれくらい、私も貧乏じゃないし」

「貧乏じゃないで払える額じゃ……」

「だからー言ってるじゃん、そのままでも困るから申し訳ないと思うなら成果で出してよ」

期待しているぞと言わんばかりに背中を叩く

俺自身何処まで出来るか分からないのにここまでされると流石に緊張する

「分かりました新条さん、言われた通り成果を出せる様に努めます」

「なーんかなー、違うかな」

「え、すみません」

「んー……アカネでいいよ」

「はい？」

呼び方が気に入らなかったのかフランクにと言いたげに提案してくる
しかし流石に命の恩人どころかお金も出してもらってるのにそうするのもどうか……

「ならば、アカネ……先輩？」

「先輩？」

「はい、俺が1年になると同時に先輩も2年になるわけで先輩だーってことで」

「ふーん、先輩先輩……まぁいっか」

まぁいっかと言いつつ少し嬉しそうな顔をしている……気がする
よかったと勝手に安堵しつつ気持ちを切り替える

「冒険者養成校か、流石に縁があるとは思わなかったな」

だからと言ってただ流されるままではなくて、多くのことを学ぶことに決めた
海賊と言う未来を全て捨てたわけではないが、冒険者という未来も1つの未来として持っておきたかったから
何より受けた恩は返すのが真の海賊というものだろう
……本当にそうかは不安だが

「そういや、同世代の友達もいねーしな俺」

「……え、うん……頑張れ」

初めての友達も出来るかと言うとワクワクが止まらねえ
少なくとも貰えたこのチャンス100%以上生かせるように考えることだらけだった

「そういえばきっ君、入学には試験あるから落ちないでね？」

「え？」

ちょっと待って、そんなの聞いてないし急に言わないで……

――――――――――――――――――――――――――――

「全くもって分かんねぇ」

キル夫は困り果てていた、理由はいとも簡単なことで養成校の集合場所が検討もつかなかったからである

アカネ先輩からこの街で行われるとは聞いたが探すのも試験のうちだと聞いたただ分からん、陸怖い

「アカネ先輩にもうちっとヒント聞いておきたかった」

つか俺が必要だって言うならもっと言ってくれてもいいと思うんですー

こんな捨てられた子犬みたいにならずに済んで良かったと思ってるんですー

飼い主は最後まで責任取るべきだと思いますー

「はぁ……」

まぁ文句言っていても仕方ないから周りを探り、どうするべきか動く

街の人に聞いても知らないと言われるから、本当に試験なのだろうなと改めて実感する

「見つからね……ん？」

キョロキョロ探していると明らかに同じく挙動不審にも思える青年がいた

「流石に声掛けて見るかねぇ……」

いきなり話しかけられたら戸惑うかもしれないが、このまま手当たり次第でも進展しないきがしたので話しかけに言った

「ちょっといいかい兄ちゃん」

「……」

こちらの顔を見て顔を青くする、何かやましいことでもあったのだろうか？

「どうした？」

「あの……お金とかはないです」

「……」

俺もしかして強盗とかと勘違いされてない？

そんな怖い？怖いか？誰にもそう言われたことないんだが

泣きたい気持ちをぐっと抑えて話を続ける

「いや、冒険者養成校へ行く途中なんだが」

「あー、悪い勘違いしたわてっきりカツアゲとかかと」

「泣くぞ」

そうだと思っていたが改めて言われると泣きたくなる、そんな顔していたのか俺

「俺も同じ目的だったところだ、今来たばっかで探し始めたところだけどよ」

「そうなのか？俺探してて見つからなかったんだが一緒に探さね？」

これは運がいい、協力者を手に入れられそうだ

流石に一緒に入校を目指す人ならアカネ先輩も文句言わないだろう

「おう、構わないぜ俺も一人で探すよりかいいと思ったしな」

「そりゃよかった、俺は岡島キル夫だよろしくな」

「俺は佐藤和真、まっ頑張っていこうぜ」

あれ?これって初めての同性の友達じゃね?凄くね?俺流石じゃね

っくー、俺の伝説はここから始まったな

見てろよアカネ先輩友達たくさん作って驚かせてやるから

「よーし、んじゃ行こうぜ……と言いたいんだが」

「どうしたキル夫?」

「ここら辺り探し回ったわけよ、んで手がかりなしと」

そう、格好いいところ見せようとか考えもしたが全く分からない状況だった

街全体流石に知らない人はいないだろうからアカネ先輩が言っていたように試験なんだろうけど

「手がかりないのは逆にすげーな、毎年別の場所でやってるわけじゃないだろうし」

「だよなぁ、闇雲に探し回ってもいいが……」

「まっ一緒に探そうぜ？急に試験だとか言って襲われても嫌だしよ」

そう言われるとそうだな、冒険者養成校に入りたくば力を示せとか言いだされたらそうも行かないだろうそれならカズマと一緒の方がいいか

ただまぁアカネ先輩でも入れるならそう言うのはないか？（酷い）

変なことを考えながらも俺達はもう一度探し回った、街の裏通りやスラムのような場所まで

途中ガンつけて来るやつとかこっちをチラチラ見て来る奴はいたがなんか用か？と振り向くと逃げて行った

酷くね？

「いや、だって顔こえーじゃん」

「カズマまでそんなこと言うなら泣くぞ？」

「やめろ、もっと怖くなる」

「俺が何をしたと言うんだ」

軽口を叩きながらも俺は少し焦りを感じている

なにせ見つからないのだ、入校できなければどうなってしまうのか

きっとアカネ先輩なら

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ふーん、入れなかったんだ」

「すみません、でも俺だって頑張ったんですよ!!」

「人間、結果がなきゃ生きる価値なし、きっ君は敗北者だ」

「ハァ…ハァ…敗北者？取り消せよ今の言葉」

「いや本気で敗北者だしどうすんのさ？」

「一足先に冒険者になってます、土壌作っておきますんで」

「ふーん、期待しないでおく」

アカネ先輩の言う通り剣の振り方さえまともに出来ない俺は誰とも組むのも厳しく、そのまま一人で挑んで死んだ

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「……」

「どうしたキル夫？」

「絶対に見つけなければ!!」

「うわっと、驚かすなよ」

「すまないカズマ、でも見つけなきゃならねーからよ」

そうだ、見つけなきゃ俺は死ぬ、頭の中で死んだんだから生きるのも相当厳しいだろうし

やっぱ養成校って必要不可欠なんじゃ?と今更思い始めた

「だがどうすっかねー」

「だよなぁ、まだ諦めはしねぇから探した方がいいんだろうけど」

「仕方ねぇ、手分けして探すか?」

最終手段だが期限がいつまでか分からない以上妥協をしてられない
見つけりゃ勝ちで見つけられなきゃ負けなのだ、ならそういう手段も取らなきゃならないかもしれん
友と別れるのは寂しいが

「分かった、んじゃ俺はこっち行くぜ」

「んじゃ俺はこっちから」

そうして俺達は探すために別れ……

「うわあああああああ」

「カズマどうした!?」

慌てて後ろを振り向く、カズマがいない

「しまった、もう試験は始まっていたのか!?」

それで別れた所を……なんてことだ
急いで探さないといけなきゃまずい

「しかしどっちだ?右か左か?」

「おい、下だ!!」

「うおっ!?」

唐突に下から声がして驚いた、よく見ればマンホールの蓋が開いている
偶然か誰かの仕業か、落ちるなんてカズマもツイてない

「早く上がってこいよ」

「いや、キル夫も降りてこいよ」

「なんで!?」

まさかの八つ当たり!?お母さんそんな子に育てた覚えはありませんよ

「下に人が集まってんだ」

「え?」

いやいやいや、なんで?下水道好きなマニアなんて流石にいないだろう?
下水道に人が?依頼でもあったのか?
とりあえず流石にそう言われて放置するわけにもいかないので、カズマが言うように
俺も下に降りて行った
確かに人が集まっている
しかも見たところベテランのようではなく初々しい感じがするメンツだらけだ

「まさか、ここか?」

「かもしんねーな、俺昔から運いいし」

「マジかー早くいえよそう言うの」

運が悪いと思ったら良かったのかカズマ、知らなかった
運がいいなら一山カズマと組んで稼げるかもしれねぇ、こりゃ今後もズッ友でいたいレベルだ

「とりあえずこれで合格かねぇ」

ひとまずこれでアカネ先輩に見捨てられることはない
いやそもそも見捨てるかは……いや見つけることすら出来ないなら見捨てるだろうな！
どっち道セーフセーフ、カズマと俺の最高のチームワークだ！
そうやって一人で盛り上がっているところ声をかけられた

「流石にそれは無いんじゃないかなー？」

ん、聞き覚えのあるこの声は

と言うか何故ここで聞こえるのか、まさか待っていてくれたのかアカネ先ｐ……

「キミ達も同じ養成校に入ろうとしてる２人かな？私も同じく入学希望の新条アカネだよ、よろしくね」

え……は……？どう言うことです？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

第2話

────────────────────────

「キミ達も同じ養成校に入ろうとしてる2人かな?私は新条アカネ、よろしくね」

アカネ先輩が何を言っているのか分からない
俺達を試している?なんでだ?
実は同じくニューフェイス?いやそれならわざわざ俺と別行動しないだろうし、わざわざ別行動したなら今俺達に接触して来る意味はないだろう

「あの、アカネせんpグフッ!?」

唐突に何か衝撃が走った
と言うか今見えなかったけどアカネ先輩が何か投げた、とても痛い
と言うかめっちゃ睨まれてるなんで!?ねえなんで!?

「おい、キル夫どうした？」

「いや、ちょっと疲れただけだ」

「分かるけど、なんかあるっぽいし気張れよな」

とにかくなんで攻撃されたのかは分からないが、余計な発言は控えよう

「新条さんか、俺は佐藤カズマ。んでこっちの疲れてる奴が岡島キル夫」

「……よろしく」

「なるほど、急に疲れたのは仕方ないけど……いつ始まるか分からないからね？」

「分かりましたアカｎグフッ!?」

「おいキル夫!?」

「大丈夫ですか?」

本気で心配してくれるカズマと、心配したように睨みつけて来るアカネ先輩……

知り合いだからシゴキを入れられてるわけではなさそうだが

「あの……新条さん?」

「なんでしょう岡島君?」

「俺嫌われてたりします?」

「急に意味わからないこと言われても困るんですが……」

もしかして、先輩何か密命的なの受けてる?

俺やっちゃいました?

いやセーフ、セーフに決まってる周りざわついてないしセーフだろ

「急にすみません、よろしくお願いします新条さん」

「本当に大丈夫？死にそうだけど」

流石にトドメ刺してきた人間に言われたくはない……

「とにかく、なんか始まるらしいぜ？」

カズマがそう言うとだらしいないオッサンが一人前に来る
ついに何かが始まるか

「俺は一次試験官を勤める長谷川泰三だ、しかし結構な人数が集まったもんだ」

周りをよく見る、埋め尽くすほどではないがそれでも多い、冒険者養成校ってやはり人気なんだなと

「確かに周りにゃ人数が多いなっと」

ふと、金髪の子に目が止まるすげー胸がでけー
隣に紫髪の子とイケメンがいる、イケメンってすげー、けどイラつく
しかしやはり、あの大きさは……

「……」

後ろからアカネ先輩に蹴られた、痛い
しかし、そう考えるとアカネ先輩も結構あったような……
後ろを振り向くとやっぱり蹴られた、凄く痛い
しかし、蹴られたことでみんな一次試験に注目する中、俺だけ別のことやってることを思い出し慌てて聞きに戻る
そこまで難しくなけりゃいいんだがな

「一次試験は簡単、二次試験会場まで俺についてくること」

着いて来ることと言った途端周りがざわつき始めた、確かに体力勝負や競争なら始めの位置取りでだいぶ差がつく
俺達は来たのが遅かったためだいぶ不利だろう

「しまったカズマ、俺達もっと前に出てれば、急いで行かなきゃまずい」

その言葉と同時に「始め」と長谷川先生が走り始めた
多くの冒険者が前を陣取り長谷川先生の姿が見えなくなる

「ああっくそっ……こんなのありかよ」

「まあ焦っても仕方ないんじゃない？」

悔しがる俺を前にアカネ先輩が言葉をかけて来る

「どうしてですか？」

「んー、だってこの状況で急げば怪我するだけだと思うよ？」

確かに言われた通り後続に無理して着いていけば何かあった時巻き込まれて大怪我もあるだろう

「けど、急がなきゃ間に合わなくないか？」

カズマも不安そうに反論する

確かにそうだ、間に合わなくなったらアウトだ、見つけられなきゃダメになるんだぞアカネ先輩!!

「んー、別に後続の姿さえ見えればそこ目につくくらいで追えばよくない？」

「確かにそうか……」

これが冒険者養成校で一年間やってきた経験の差なんだろうな

俺は感心しながらアカネ先輩に従うことにした
そして事件は起きた

「ちょっと休憩な」

そう言いつつ長谷川は座り込み追いかけていた生徒達も慌てて止まる
大事には至らなかったがもつれて多少怪我した生徒も出たようだ

「冒険者は体が命だからねー」

「はぇー流石っす」

俺とカズマは感心しながら少し前線と離れた位置で休憩し始めた
ただ待つのもなんなので前列と少し交流しようと会話しに行くことにすぐ切り替えた
勿論気になったさっきの組がいたのでそこに

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「あのー、すみません」

「ん？何か用か？」

　先程気になった金髪の子が答えてくれた

　しかし正面から来るとやはり……

　っとだめだ、またアカネ先輩に蹴られる

「いや、折角ですしどっかに声をかけに行こうって感じでね」

「そうか、まあこれも縁だし大事にした方がいいかもな」

　金髪の子はそう言いつつ他の２人も呼んできた

　何というかちょっとこのイケメンにイラっとした

「と言うわけで私達も同じく冒険者養成校の入校希望者ってわけだ。私は三宮三葉だ、この2人のお姉ちゃんって感じで覚えてくれればいい」

「お姉ちゃん……」

「なんだ?そう呼びたいなら呼んでもいいぞ?」

「いやそうじゃなくて……」

どちらかと言うとあのイケメンの妹……と言うかこの3人の中なら末っ子な気がする

ただ言うのも無粋なので言わぬままにした

「俺は岡島キル夫です、お姉ちゃんにはならなくていいかな……」

「そっそうか……なりたかったらいつでも言ってくれていいんだぞ?」

なりたかったらとはどう言うことだろう……と言うレベルでの謎だった

「あっ私は柊シノアですー、みっちゃん達とは同郷で王国付近の人間ですので」

「王国か、よく分かってないが凄い人が住んでるってイメージはある」

「それ田舎丸出しっぽい言い方なのでやめたほうがいいかと」

ガーンとしながら話を聞く

田舎っぽいのかこれ、確かに城の周りに住んでるから偉いと考えちゃダメ……なのだろうか?

「で、こちらが」

「……」

「あのー?義勇さん?自己紹介は?」

「何故だ?」

「ああもういいです」

柊さんは諦めたように肩を竦めてしょうがないと言う、とても苦労してそうに感じた

「こちらは冨岡義勇、見ての通り口下手です」

どんな自己紹介の仕方だと思ったが、なんでって表情をしているのを見て察した
俺も苦手だと思っていたが、上には上がいることを知った
バットコミュニケーションってレベルじゃねぇだろこれ

「ああ、分かったよろしくな」

挨拶とともに冨岡さんはフフンとする、満足げにしているが……と言うか何処が満足なのか分からない

「女の子に説明させて恥ずかしくないのか?」

言ってはならないことな気はしたが我慢が出来なかった
デリケートな問題だと悪いが、流石にこれでは冒険者としてやっていけないと言う不安もあったことも理由にある

「???」

「ああ、もういい」

しかし結局は俺の根が折れた
と言うか勝てる奴はいるのかよいねーだろ絶対

「……ごめんなさい」

「いいよ別に怒ってないし」

2人が苦労してるんだろうなぁと思いつつ心の中で応援することにした

「所でどうする？合流するか？」

「ん？」

唐突に三宮さんが提案してきた、合流か
してもいいような悪いような、どっちみちカズマとアカネ先輩に話す必要があるが
まぁそれ以上に問題があるのだが

「冨岡さん大丈夫なんですか？」

「え？勇くんは大丈夫だと思うけど、大丈夫だよな？」

「いい」

「「……」」

少しの沈黙が流れる、その間に彼がこれ以上を喋ることはなかった
と言うかいいってまた曖昧な言い方しなくてもいいじゃないですかあああああ

「……」

「あの岡島さん……」

「キル夫でいいです、それでまぁ……今回は帰ります」

「ごめんなさい」

「いえ、謝ることでは冒険者養成校に入学出来たら一緒に討伐とかしましょう」

「はい、出来るといいですね」

シノアさんは一応合流したければしてもいいとは言ったが、正直読めなすぎるのでやめておいた、カズマ達とアカネ先輩の3組でも十分に期待できるし

冨岡さんとだけはまだ不安だけどあの2人とも友達になれるといいと考えつつ、前列が動き始めたのを見て俺らも準備して後続に少し離れて後を追い始めた

「……」

「あの義勇さん、良かったんですか？折角同性のいいお友達にもなれそうだったのに」

「……アイツは？」

「えぇ……」

ああこれは肯定の意味だったのかと、シノアはキル夫と別れてすぐに後悔した

――

「おーい、そろそろ動き始めんぞ」

「悪い少し遅くなたかもしれねぇ」

動き始めたばかりで間に合ってはいるが、一応謝罪
カズマもアカネ先輩も怒ってないし問題な……あれー？アカネ先輩笑顔だけど何故か怖いぞー？

「あのー、新条さん何か俺しましたか？」

「んー？どうしてー？」

「いや、何故か笑顔で俺の体が寒気してきまして」

「私の笑顔が怖いってことは何かやましいことあるんじゃないのかなー？」

やましいことはないはず、さっき三宮さんの胸を見ていたのは……はいやましいことですね……と言うか見てたのか

「もしかして新条さん嫉妬してるんですか?」

おいカズマやめろ、俺が危ない
つかマジで身の危険を感じる気がするし
あの笑顔は嫉妬のわけないだろ、分かってくれ

「えー?そう思う?どうしてかなー?」

少し頬を染めて照れたようにアカネ先輩が返答する
あっ凄く可愛い、じゃないぞ騙されねぇ!!
そうやって俺を騙すんだろと普段のアカネ先輩の発言から信用していない

「まぁ、新条さんもそんなからかわないでください、俺ピュアなんですから」

「ごめんねー、なんか手慣れてそうに思えたけど」

畜生、やっぱ騙されかけたいやそうだと思ったけど！思ったけど!!
アカネ先輩、俺手慣れてないの知ってるでしょ！虐めないでください!!

「まぁいいです……行きましょう」

「おっおう……」

少し悲しそうな顔をしている顔を見てカズマは気まずそうにしている、いっそ放っておいてくれ
悲しい気持ちを抑えて長谷川先生を追いに行く、しかし問題が起こった

「休憩多くね？」

冒険者養成校の教師はもっと強いイメージあるし体力がある感じがしていたがオッサンだからなのか少し走って少し休憩を繰り返す

「長いのはまぁいいが、腹が減るな」

「つか先行していく奴らがいるが追いかけなくていいのか？」

「別に追い駆けろって試験でしょ？わざわざ先行する意味なくない？」

「まぁそれもそうか、焦らずいくか」

やっぱなんか知ってるんだろうなとただ露骨に気にするとまた蹴られそうなのでアッサリと肯定に済ませる

ただそれはそれで問題がある

簡単な話、食糧の問題だ

「しかし、食糧はどうすっか……」

「キル夫、持ってきてないのか？」

持って来てないどころか用意するお金ないです、なんかごめんなさい
と言うかそう言う必要なら言って欲しかったぜアカネ先輩……

「ああ、耐えりゃいいが……つか耐えるしかないんだが」

「流石にこのペースで走られるとキツいんじゃない？」

「そう言う、新条さんは大丈夫なんですかねぇ？」

「え？そりゃ持って来てますし」

おい、マジで言ってくれないの酷くないか？
こう言うのもって言われるかもしれないけど、そもそも俺金ないの知ってたじゃん
……

「あーキル夫……いるか？」

そう言ってカズマは俺に缶ジュースを差し出す

「いいのか?」

「まぁ余計に持って来てるしな、食糧もまぁ多少なら」

「カズマ様、犬とお呼びくださいませ」

唐突に俺は謙る、だって逆らえないし
持つべきものは友って言うと現金だがそれでも嬉しく感じる
助かったと言う感情とともにカズマが神々しく見える

「あっ新条さんもいります?」

「……自分のあるからいい」

「まっ持ってるのにわざわざ貰う必要もないか」

そう言いつつ俺は貰ったものを飲み干す、味とかそもそも気にしないタイプだしどうでもいい

つーかなんだろうなこの味、よく分からん

「……」

俺は唐突に奥側へと駆け出す

理由はその……

「き……岡島君!?」

「おっと油断禁物ですよ」

カズマはナイフを向けている

それは、殺意というよりはこなれていると言った感じだ

何がしたいんだか、ひとまず話だけ聞きますか

「ふーん、でどうするの？」

「アイツは馬鹿だし、運良く食糧無かったから助かったがまぁアンタはこうするしかないかなって」

きっ君が馬鹿なのは同感かな、いきなり何も確認せずに飲み出したし……ここら辺は後で説教かな？

確かに色々と持たせなかったのは悪いけど過剰な協力もしちゃうとマズイし

ただ少しだけ反省かな、まぁそれ以上にきっ君やらかしてるから謝りはしないけど

「何飲ませたの？毒薬？」

「いやただの下剤だし死んだりはしないだろうけど」

「何がしたいの？」

正直毒とか盛ったり殺意も無いのならわざわざこうしてくる意味も分からない？学校で見たこともないし本当の新人だろう？ならば目的は？

「簡単な話だよ、試験に落ちてもらうんだよ」

「誰からとか依頼された奴？」

「いや、全然違うが」

なら愉快犯とか言うやつかな、きっ君面倒臭いのを気に入ったねー
本当に神に見放されてるだけじゃなくて不運で笑うんだけど
まぁ今回きっ君面白いから許そうかな？

「試験ってさ、条件が緩すぎやしないか？」

「うーん、まぁ耐久すれば良さそうだしねぇ」

確かに緩いかなぁとは思うけど、最低限冒険者に必要なことの試験だし
と言うかここで死にまくられても困るしねぇ……とは思ってるけど

「学校も流石に限度あると思うんだ」

「うん？まぁ流石に寮とか限度はあるけど」

ただまぁ、足りるんじゃ無いかな？
と言うか年内にも死者多過ぎるし寮も結構空いてたはず
私の同部屋の子も死んじゃったし今年の一年とペアになるのかなぁ？

「だから、俺が入れるように少しでも策を講じたわけだが……」

なるほど、そう来たか
真面目ではあるけど友を裏切るのは減点っぽいかな
それならきっ君誘って他を嵌めた方が良かった気がする、まぁ言い出さないけど

「で、強硬策に出たと」

「出来ればこのまますんなりと帰ってくれると有難いが」

「あーうん……」

これはどうしようかなぁ、普通に敵対して来たなら落とすっていうか処理しちゃってもいいかな

色々と有望そうなところはあるけど先見えてないし

「勝てると思ってるの？」

「さあな？ただキル夫がいるよりはマシかと思うしな」

「ふーん、実力見誤ったね」

まぁ大した足しにはならないと思うけど脳髄だけ貰いますか
きっ君には悪いけど止められなかったきっ君が悪いと言うことでこれも勉強ね
そうしてアカネは隠しておいた毒針で一撃で仕留めようと

「おーい、お待たせ悪かったな」

馬鹿が帰ってきた

「ん???」

俺が帰るなり2人は驚いているんだが、何かあったのか?
もしかしてカズマがアカネ先輩にアタックしてたり?それだったら悪かったが

「岡島君……大丈夫なの?」

「ん?ああ大丈夫だこの程度問題ない」

「問題ないって結構な奴だった気がするんだが」

あー、俺の心配かと言うかこの反応分かっちまってるのかー
こっそりやるつもりがアカネ先輩はともかくカズマも気付くなんてすげーな

「あの程度で俺がどうにかなるわけないだろって」

「俺……騙されてたのかな……？」

カズマが急に自信喪失気味になっている
これ俺何かやらかしたか？つか騙されたて俺悪いことしちゃったんだろうな

「すまない、カズマ!!」

「はぁ!?」

謝ったら驚かれた、酷い！

と言うかアカネ先輩急に笑い出したしどういう事ですかアカネ先輩!!!

「ほんっと面白いね」

「なっ何があったんすか、新条さん」

「いや、むしろ岡島君の方で何があったの?」

疑問に思われてるが、気付いているんでしょ?まさかこれ俺試されてる?

「いや、俺の方で何があったか知ってるでしょ?」

「いやまぁ、予想はつくけど」

ほらー、やっぱり予想ついてるじゃないですかー、俺だって頑張ったんですからね

少しばかり褒めてもらいたい気分もありますがまぁいいや

「んでキル夫、なんともないんだな……？」

「大丈夫だってのカズマ、あの程度の雑魚にやられるわけないって」

「雑魚……？」

カズマはまた疑問のような顔をしている

よく分からん、と言うかアカネ先輩もクエスチョンマーク出したそうな顔しているんだがどう言うことだ？

「何してきたの？本当に？」

「いや、飲み物のお礼に向こう側からなんかのモンスターの声がしたんで討伐に行ったんすけど……」

「……あー」

アカネ先輩は察したように頷く、何か俺がおかしいのか？いやでも勝手にするなってことなら分からん
独断行動が危ないって意味なら確かにやらかしたが恩を少しても返したかったし

「あの佐藤君」

「……なんでしょうか新条さん」

カズマが青い顔で返答する、俺がいない間に何があったんだよ本当に!!
一人ぼっちで置いてかないで俺だって寂しいの

「ごめん……きっ君昔から状態異常への耐性出来てるって聞いたしそういうの効かないや」

「……」

カズマあああああああなんて目をしてやがる、今すぐにでも死にそうじゃないか！

生きてくれよ……

「あー、なんだもういいや好きにしてくれ」

全てを諦めたかのようにカズマが横たわる
アカネ先輩相手にそれは不味いんじゃ……

「なるほど、遺言はそれでいい？」

「は？」

ニコニコとアカネ先輩は武器を取り出す、と言うかアカネ先輩マジでやる気だ!?
カズマも急に蒼白してないで命乞いでもなんでもって

「待ったあああああああ」

考えるよりも結局体が先に動いて2人の間に入る、よくやったよく動いたぞ俺

「何しようとしてるんすか!?」

「いや、トドメを刺そうと……」

「ダチを虐めないでください!!」

「キル夫……」

お互い困惑したように俺を見る、だから！何が！あったの!?

「ふーーーーーん……」

アカネ先輩は不満そうにも満足そうにも見えるような顔で俺を見て武器を引っ込める

とりあえずはカズマを救えたみたいだ、よかった

「カズマ、もう大丈夫そうだ安心しろ」

「ああすまんキル夫、俺は殺されかけたのを助かったらしい」

「心配すんなって友達のことは守るさ」

「……」

まさかコイツアカネ先輩を怒らせたのか!?
俺でさえ怖くて出来ないことをやらかして……そりゃ死にかけるわ
尊敬に値するが見習いたくないね

「マジでカズマ何したんだ?」

アカネ先輩の方へ向く、俺も気をつけなきゃいけない事だろうし出来れば聞きたいが
命は惜しいしフラグは回避したいので

「んー」

少しだけアカネ先輩は悩むそぶりをしている、いけるか……？

「教えるのやーめた」

デスヨネー、まぁいいか怒らせることは出来るだけ避けりゃいいし俺がそう簡単にやらかすわけないだろ！

フラグ？なんだそれ？俺にゃ関係ないだろ

「とっところで新条さん」

「なーに？」

「俺どうなるんでしょうか？」

結局俺が止めたけどほんと何したんだこいつ、俺でさえアカネ先輩に何かしたら震え

て夜も眠れなくなりそうだ

「んー？別にいいんじゃない？」

「ほっ……」

無事そっちも終わったみたいでよかった、これで無事にすんだ、友達を救えたようだったし咄嗟の行動もしてみるもんだ

「んじゃ先行こうぜ？あっ悪いがカズマ様後で飯もください」

「おっおう……構わねーが」

流石！これで俺もやっていける！

味は美味しいわけじゃなかったが冒険者はもっと劣悪な環境があるだろうし喰えるだけでも満足だしな

「しかしなぁキル夫」

「ん？どうした？」

「新条さん怖いっつーか爪を隠してそうっつーか気をつけろよ？」

忠告された、まぁ実際に強いのは事実だろうし俺も敵うわけない相手だしな
当面の目標にしようとも考えてたし流石に怒らせちゃいけない相手だぞカズマ

「まぁ、そんだけ1年の差が広いんだろうな」

「1年？」

あっ、やべっ……口が滑った

「きっ君？」

「な……なななんでしょうか新条さん？」

声が震えている、ああ俺も恐怖ってものは感じるらしい

よかった、身体的には正常そうで

そう言いつつ自分の体が健康そうなことに安堵しつつ

今から起こる恐怖から目を背けたかった

具体的に言えば、俺が目が覚めたのは二次会場付近で、カズマに背負われたらしい

ただまぁあれだ、カズマからどうしたか聞こうとすると震えてしまって教えてもらえなかった

今回の一次試験、俺にとって一番勉強になったことは俺はやらかす男だと言うことだった

――

第３話

――――――――――――――――――――――――――――――――

「さて一次試験も終わりだ、来れなかった奴やだいぶボロボロになってる奴がいるが、まぁそこは自己責任だ」

ボロボロになったって言葉の時間違いなく俺の方を見た、違うんですわざとじゃないんです

ちょっとだけやらかしちゃっただけなんです……

「すぐに二次試験始めっからな、油断すんじゃねーぞ？」

待ってください、休憩時間をください

俺体痛くて何も出来ないんです

口走った俺が悪いですけどお慈悲を誰か……

「と言うわけで二時試験官のオールマイトだ」

あっ終わった終わったよこれ、明らかにムキムキじゃん、腹筋が鬼に見えるようなやつじゃん？

先生と組手かなー？あははは死んだなー俺

入学できないどころじゃないなーこりゃ遺言が必要なレベルだなー

「おい大丈夫かキル夫？」

「んー？何がー？」

「えっと……」

「あはははは一、無理に決まってんだろー」

さて、せめてでも順番が最後の方に来ることを期待しますか

じゃないと無理、アカネ先輩これ知ってんだろー?それとも前回と違うのかねぇ

「で、二次試験ですが」

まぁいい、俺は腹を括った、やってやるよ
なんでも来いやあああああ

「筆記試験です」

「は?」

まさか……見せ筋?
なーんだ見せ筋だったのかー、じゃあ俺は大丈……
あれ、俺って勉強大丈夫なのか?
どうしよう、出来ねー自信あるぞ!!
この後も何度も何度も俺は苦悩した、正直始まるまではプレッシャーで押し潰されそうだった

ただいざ始まって見ると、解けるような問題だったので……
いや一部分かんなかったよ？だって難しいし
簡単じゃないのかって？俺やっぱ頭脳にも限界があったわ

「おう終わったかー？」

「おうカズマか……なんとかな」

終わったと同時にカズマがこちらへやって来る、満身創痍だったので試してはないが、絶対にそちら行くのも辛かっただろうし有難い
カズマの顔を見れば少なくともカズマは大丈夫そうだが

「何とかって全く難しくなかっただろうよ」

「やっぱそうなのかー」

そうなると俺まずいか？自信なくなって来たんだけど助けてアカネ先輩ーーー!?

俺馬鹿で落とされたとか困るよー

「きっ君表情コロコロ変えるのは面白いけど何やってんの」

「新条さん……」

俺はもう終わったんだ、笑いに来た……出ないといいなぁ

正直何しに来たか分かんないし、結果知ってるとかならいいんだけど

「いや、テストで自信がなくて」

「マジ?アレ簡単すぎだったんじゃねぇか?」

カズマにとってはそうなんだろうなー!ただ俺にとっては簡単じゃねぇんだよ!!

蛮族の生まれのせいだって言えばそうだって話だが

「馬鹿で悪かったな!!」

「いや……そこまで言う気はなかったが……すまん」

「カズマ……俺の分も頑張ってくれ」

「なんで諦めたモードになってるの」

「まさか合格なのか!?」

良かった、不安だったが予想以上の点数を取れていたわけだ、これならば輝く俺の養成校ライフも始まるはずだ

待ってろよキャンパスライフ!!

「いや……そもそも今回のテストって字を読んだり書いたり最低限が出来るかの話だしきっ君出来るでしょ」

「まぁそれくらいなら……」

難しけりゃ確かに苦手だが、最低限は出来る
と言うか心配したがボロボロになっても助けてくれないのってそういった理由……
いや違うだろうなアカネ先輩だし

「んじゃセーフかねぇ、ヒヤヒヤしたわ」

「でもよっぽど正解できない馬鹿なら落とされるかもねー」

「おぶあああああああ」

やめろ!!やめて!俺のメンタル削らないで!!
今胃が痛いの!キリキリしてるの!!
最低限は出来るって思ったけど合格点あるなら不安なの!!助けて!

「○番、○番、○番……○番、呼んだ順に面会室に来なさい」

「ほらほら始まったよ」

「俺呼ばれてないんですけどおおおお!?」

「安心しろ俺もだ」

「なーんだ……そろって失格かー」

「なんですぐそうなるかなぁ……」

あーダメダメ閉廷！俺落ちた呼ばれないもん！
実家に帰らせていただきます！遠いけど！

「次○番、○番……」

「あっ俺呼ばれたわ、んじゃ行ってくる」

「カズマあああああああ置いてかないでくれえええええ」

「悪いが世の中は弱肉強食だからよ、じゃあなキル夫」

そうしてカズマは面会室に入っていった
俺は置いてかれた、泣いても助けてくれない
まぁそれは当然なんだが、尚更不安が残るんだよ
俺だけ置いていかれるかもしれないって

「きっ君不安？」

「先輩……不安っすよ、俺落ちちまうんじゃないかって」

もっと頭が良ければ良かったんだけど、勉強とかして来たわけじゃないからなぁ……
あぁ情けねぇったらありゃしねえ

「心配なさそうだけどなぁ」

「でも……ただ棒振ってるよりこう言うのの方が不安で」

涙まで出て来そうになって来た、本当に情けねえまだダメだって言われたわけじゃないのにメンタルは予想以上に弱いんだな俺

出来てる出来てるはず……なんだが不安で不安で……

「はぁ……」

アカネ先輩も溜息をついている期待はずれなのかなやっぱ、まぁそうだよなこんな自身がねえと……

「しょうがないなあきっ君は」

ギュッと、不意にアカネ先輩に抱きしめられた

「!?」

しどもどと、唐突な行動に俺は戸惑うと言うか先輩のキャラじゃないし
ドキドキするが、不安も混じり一層胸の鼓動が早くなる

「あの……先輩？」

「君は私のものなんでしょ？勝手にくよくよされちゃ困るんだよ」

「……だからこそ、だからこそアカネ先輩の期待に応えられないって不安になるんです」

彼女の期待に応えたい、だからこそ失敗は許されない
そりゃそうだ、こんな所で簡単に躓くわけにはいかないだろう
躓く俺はどうしようも……

「……私が信じてるんだからもっと信じなよ」

「え？」

「ふーんだ」

ボソッとだけ耳元で用件を伝えた後、抱き着いていた体を離して近くの椅子に座る
そのままこちらをじーっと見て来る
背けたくなる気持ちもあるが、逃げても仕方ねえだろうな

「分かりましたって先輩、俺もくよくよすんのやめますんで」

「それでいいんだよ、私専門じゃ無いしメンタルケア頼まれても困るんだからね」

「そこはほんとありがとうございます」

待つのは確かに未だに気は重いけど、それでも信じることにした
じゃねえとそれこそ期待を裏切ることだって思ったからだ
なんの、いつも通り馬鹿を突き通せばなんでもなるっつーわけだしな

「ところできっ君？」

「なんでしょう？」

「確かにカズマ君が居なくはなったとはいえ今声抑えずに先輩って言ったよね？」

「あっ……セーフは？」

「だーめ」

まぁ後にはしてもらえると言われたし一応はセーフ、いやアウトだが入学してからなら気は楽だ

一先ず俺は待つことにした

「〇番、〇番……〇番は順番に入れ」

カズマが帰って来た後、俺も順番を待って居たがついに呼ばれた

これで一安心か、アカネ先輩のお陰で助かった

「いや、まだだからな？あまり言えねーけど」

「マジ？」

何するの？怖いんだけどでもまぁ腹括ったから行く!!

身だしなみとか顔にゃ問題ねえな、少し泣きそうで汚れた顔は洗って来たし大丈夫

「あー、キル夫」

「どうしたカズマ？」

「これやるよ、あとで開けりゃいい」

カズマから何か貰った、本のような気がするんだが……まぁ袋に入ってるし中は確認できんのだが……

後で確認するか、正直ここで渡す理由が分からんが友を信じよう

「んで、どうしてだ？」

「ん？入学のお祝いみたいなもんだな」

「お前も入学だろうよ……まぁいいかありがとうな」

カズマに感謝しながら受け取って行く、あらかじめ合格言われるのは驚くがただカズマが信じてくれた以上俺も応えなきゃいけないと俺はそう信じて扉をノックして開けるのだった

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「失礼します」

「入りたまえ」

先生の言う通り入室して……っと
あれ？マジで？

「オールマイト先生？」

「うむ、今からキミの面接を始めるこれが最終試験だ」

この先生がするの？正直面接とか苦手そうだし元気とかで全てゴリ押しそうな人に見てるんだけど大丈夫なのか？

「よろしくお願いします……」

「若干君から不安が感じられているがいいだろう、慌てないでいいからゆっくり答えてね」

前言撤回、この人なだけ良かったかもしれない

一次試験の人とかだったらもっとヤバそうだったし、そういう意味では裏表のない人な気がするしいいかもしれない

「で、まずは聞かなきゃならないことはっと……」

そう言うとオールマイトはメモを見始める、コロコロ印象変わるが不安になるんだが一回一回印象変わるって意味では面白いかもしれねぇけど

「ああ、あった冒険者になろうとする理由を聞きたい」

「……」

何というかそれ聞くなら重要そうなことじゃないですか？
それをメモで思い出すって……何というか何言っても受かりそうな気がするいやまあここまでが仕込みの可能性もあるし真面目に答えるけどさ

「俺の親って海賊だったんすよ」

「まあ海賊も居なくはないね、それで？」

「俺は父さんと一緒に未知の開拓をするのが好きだった、中身の分からない宝箱を開けるのが好きだった」

「うん、そういうのはワクワクするね」

「けど父さんは海賊をやめたから……俺はまだ冒険がしたかった、ダンジョンとか未開の地を潜りたい中身のわからないモノを開けて喜びを得たい」

「ふむ……問題なく合格でいいだろうね」

オールマイトは少しでも悩むかと思ったが、迷わずに合格が出たそれは嬉しい
これでアカネ先輩にも胸を張って受かったと言える

「ありがとうございます!!」

「そこまで喜ばれると嬉しいね、こっちも期待の新人が入ってくれて嬉しいよ」

先生も祝福してくれている、よし頑張ろうという気が漲ってくる

さっきまでのくよくよしてたままではどうなっていたか、アカネ先輩に本当に感謝だ

「いえ、先生俺も学園内で頑張りますので」

「ああ、戦士コースの先生として君を直々に鍛え上げられるのを楽しみにしてるよ」

「え？」

「ん？」

「俺、盗賊コース予定なんですけど」

と言うか多少の腕っ節はあるかもしれねえけど俺この学園に解錠を始めて盗賊目指

す気だったし……
戦士も全くしないとは言わないけどほとんど行かない気がする

「……君は下水道でモンスターを割と率先して狩ってなかったかね？」

「ええまぁ、恩返し代わりにですが」

そこも見ていたのか、まあ試験だし当然っちゃ当然だろうけど
ただあの程度戦士でなくてもってレベルだしな

「……君には戦士の適性あるよ？」

「そうは言っても俺が習いに来たのは盗賊分野ですし」

オールマイトはガックシした態度になる、悪いことをしただろうが嘘を言うわけにもいかないし
そりゃ自分の教え子だと思ったからあんな気分が良かったわけか

「ああそうか……長谷川君の所か」

「ただまあ、戦士コースも重要なことありそうですし流石に行きますんで」

「うむ、期待しているよ！」

急に元気になったなぁ、本当に分かりやすい先生だ、ただ真面目なんだろうなと心底思った

「俺とて、ダンジョン潜ってただの盗賊ごときじゃ死にますからね」

「そうだ、盗賊のひよっこじゃあたちまち体力なくなるし、神官や魔術師のように敵をどうにか出来るわけでもないから死ぬ可能性が高いね、だから戦士のことも重要なんだ」

「あのー、先生……俺一応盗賊コースに入るんすけど」

流石に今から通うコースをメッタメッタに言われるのはどうかと思う、確かにそう言う面で心配はあるんだろうけど
盗賊は一人はいた方がいいだろうけど、戦闘でなんも出来ないならその分邪魔になる難しい職業とも言えるだろう

「ああ、すまないね……ただ今言ったことは覚えておいて欲しい！誰だって死ぬために冒険者になるわけじゃないんだから」

「ええ、そうですね」

そりゃそうだ、死にたい人間なんざいない
俺だって死にたくないからこの学園に通う事を始めたんだし
何より死にたがりが冒険者になるわけねえしなもっと行儀悪い職業になるだろうよ

「さてと、流石に疲れているだろうしこれを渡しておこう」

そう言いオールマイトから何かを受け取る

どうやら鍵のようだが

「何の鍵ですかこれ？」

「ウチの学園は全寮制だからね、君の部屋の鍵だよ」

「ああ、ありがとうございます」

部屋番号は３０２か、普通だ

「それと、まあ部屋は一人部屋じゃなくて二人部屋だから」

「それは分かりましたが」

そもそも海賊時代は雑魚寝状態だし二人部屋でも問題ない、むしろベッドが貰える分前以上にいいだろうしな

だから何も問題ないが

「特に私からは咎めはしないけど、女の子連れ込む時にはルームメイトには話しておくんだよ」

「ぶーーーーーっ!?」

流石に吹き出した、いきなり何を言い出すんだこの人は

大体俺がそんなチャラ男に見えますか!見えるわけないでしょう純情なんですよ!!

「いや、君アカネ君と仲良さそうだったしデキてるのかなって……さっきも抱き合ってただろう?」

「ちゃうんです……」

なんでこの人達全部見てるんだ?試験中で面接してたんだよな?こっわ

「アカネ先輩とはそう言う関係じゃないんです……」

「まぁいいさ、そこまで関係を気にしてないしね、ただそう言う時は同室とか隣室の人には言うんだよって話だ」

「は……はあ」

なんかこれ以上留まると針の筵にされそうな気がする

流石にそれは困るので挨拶だけして部屋を出て行った

「あっ終わったの？」

「あーアカネ先輩無事合格しました」

報告はまあ一応アカネ先輩にするんだが……

「んー？さっきまでテンションアゲアゲになったのに急に落ち込んでない？どうしたの？」

「いやー嬉しいっすよ、わーいわーい」

何と言うかさっきのオールマイト先生の話のせいで気まずいいや誘う気ないけどね！一生そんな機会無いけどね!?

「本当に喜んで無さそうなんだけど何かあったの？」

「いや、アカネ先輩急にグイグイ来ますね……どうしました？」

いや、近い近いって
今近づかれると意識しちゃって顔が赤面しちまう

「どうしたってさ……流石にきっ君の合否も気になるし先程アレだけ意気込んでたのにダウナーになってると流石に気になるよ」

「あー、すみませんきっと疲れとかそんなんなんで」

とりあえず誤魔化そう、そうしようこれ以上はまずい
まずいってばほら、アカネ先輩今日は終わりにしよ?

「ふーん、そう言えばきっ君部屋どこだった?」

「……３０２号室です」

「あっ同じだよろしくね」

「ぶーーーーーーーー!?」

今日二度吹いた、と言うか人生でも二度目な気がする

「なっなっなあ!?」

アカネ先輩と同部屋ぁ!?何を言っているか分からないし全然分からない

と言うか何やってんの学園？やっちゃいけないことでしょ!!

「流石に嘘だってば……そんな信じると思わなかったけど」

「……」

嘘ですかそうですか、と言うかそりゃそうですよね真面目な学園に感謝です
色々と想像してしまった自分を消し去りたい、と言うかいっそ自分ごと消えてしまいたいんだが……

「何と言うかごめんねきっ君」

「いや、俺が当たり前のことを気付けない馬鹿なだけですし……」

「そんなしょげないで欲しいかな」

まぁむしろセーフだから、いつまでもしょげてるのおかしいな！と言うかこれじゃあ

俺まるでアカネ先輩が好きみたいな勘違いされそうだしダメだろう
感謝こそあるが恋愛感情があるわけじゃ無いのに失礼にも当たるな
流石にここで恋愛感情抱いてたらチョロインだろ俺ってレベルだし

「まぁ、同部屋だったら面白そうだったですが流石にそりゃあかんでしょですしね」

「んー、まあ退屈し無さそうではあるかな」

あっあの目は悪巧みを企んでる顔だ、これはよくない同室ｉｓやっぱ危険

「とりあえずアカネ先輩色々とありがとうございました、これから色々返せればと思ってますんで」

「んっまあ精々役に経ってね」

そりゃ当然だがアッサリしてるとなんか悲しい
ただやることは変わらないわけだが

「それじゃ、きっ君元気戻ったようだし私行くから」

「……ありがとうございます」

そこまで心配されてた、ほんっとうに申し訳ないな
ただまあ負い目に感じても先輩には迷惑なだけだろうし気持ち切り替えていきますか
そうして俺は３０２号室の鍵を取り出す
えっと、ここではないな
そうして部屋に向かっている途中ルームメイトについて考える

「カズマだったらいいな、何も考えずに済むし」

アイツとなら間違いなくトラブル無く生活できるだろう
まあカズマにも恩が結構あるしルームメイトだと家事やらなんやらで返せる場面だ

「後は下水道で一緒になった冨岡義勇……」

あれ？俺やっぱり友達少なくね？と言うか普通に初対面の相手の可能性多いよな？
どうしようちゃんと話せるかな？手土産必要かな？
少しだけ悩みながらも部屋の前に着いてしまい逃げ場は消えた
よし、逃げても意味ないんで諦めて入る

「失礼しまーす！」

「やあ、キミがルームメイトかな？」

見る限りは初対面、白い髪に緑のコートを着ている後やっぱイケメンだわ
多くね？イケメン

「新入生の岡島キル夫だ、志望は盗賊コースだよろしくな」

掴みは問題ないはず、相手の性格によるが問題発言はないからセーフなはずだ

「ボクの名前は狛枝凪斗、同じく新入生で魔術師コースだよ」

よかった、普通のルームメイトそうで、むしろ当たりな部類な気がする

「ああ、しかしごめんねボクみたいなゴミクズとキミのような希望溢れる人間がルームメイトだなんて……キミに迷惑そうだしずっと外にでもいた方がいいかな？」

……普通って何だよ俺……すっごく胃が痛くなって来たしこれからが不安になってきた

―――――――――――――――――――――――――――――――――

第4話

キル夫です……ルームメイトが不安です……キル夫です……
狛枝とルームメイトになったのはいいんだが、何と言うか落ち着かねえ
さっきの続きだって……

「いや、出なくていい……流石にと言うか俺が罪悪感に苛まれる」

「ボクの事なんか気にしなくていいのに」

「気にするわ!!」

「んんんんんん……キミ迷惑をかけるだなんてなんて災難なんだボクは」

なんか俺が不快に感じてると思い込んでるのか迷惑がってると思い込んでいるのか、寝る前のはずなのに部屋を出ようとしている

慌てて止めるが、なあどうすりゃいい？

俺もさっきまで自己評価は低かった気がするが、ここまでではない気がする

と言うか自己評価が低いだけじゃ無くて他者への評価も異様に高い、だからこそ気にするんだが……

「まあなんだ……詳しいことは明日以降詰めていこうぜ」

「まぁそうだね、疲れがないと言ったら嘘になるから」

「同じルームメイトなんだ、仲良くしたいと思ってるよ」

「本当にこんなゴミクズにそう言ってくれるならいい人なんだねキミは」

もう少なくとも今日は気にしないことにする

気にしたらキリが無いだろうから

「んじゃ、悪いが寝るわ試験中はまともに寝れなかったしな」

気絶はしていたが今はまあそれはどうでもいいだろう
と言うか気絶して体力回復したわけじゃ無いし、むしろ痛かったし

「うん、それじゃあお休み」

そう言って狛枝は布団を持って外へ出て行く

「部屋のベッドで寝ろおおおおおおおおおおお」

前途多難で済むレベルではない気がしてきた

翌日、狛枝はさっさと起きていたが正直やること多いしまずは学園内の行事を終わらせねえと……ただ言ってもそう難しいことではなかった
と言うわけで保健室へ向かう

保険医の先生は若いなと思ったがなんなんだろうあのうさ耳？気にしたら多分負けなんだろうなぁ……

一先ず予防接種、なんの予防接種だかは分からんが言われた通り受けた

問題はその先だ

「脳髄か……」

「あれ？なんか忌避感あったり？キミそう言うタイプに思えないけど」

アカネ先輩も前からずっと言ってる脳髄、自分を強化するアイテム

リスクもそれなりにあると思うんだが、どうなんだろうな実際

「なあ、脳髄って本当に平気なのか？」

「平気って何が？」

「いや……拒絶反応とか起きたり何かやべーこと起きたりとかよ」

「んー……」

束先生は少し言い淀んでる……ほらー何かあるじゃないですかー!!
やだもうこの学園怖い人ばっか

「今すぐには問題ないよ?」

「ほらー!すぐそんなこと言うー!!」

つい駄々をこねるように言ってしまったが流石に言うだろ!と言うかやべーよこれ!
遅効性の爆弾みたいなものか?つーかそれアカネ先輩もマズイんじゃ?

「でも、いつ死ぬか分からないのに強くなるの躊躇うの?」

「うぐ……」

「死んだらそこでおしまいなのに冒険者舐めてない？」

「いや、そう言うわけでは……」

当然冒険者は死にやすいのは散々聞いてるし俺自身も気にしている
何度も言うが死にたい奴なんていないしな
だからと言って目に見えた爆弾を抱えるのも悩む
束先生が確実に何かあるって言ってるんだから

「いくら養成校に入ったからって死ぬ奴は死ぬんだ、受け入れなよ」

「……」

「キミは、楽して手に入れるとかは嫌いそうだけどそう言ったの以外でも、生きるためじゃなくて守るためとかにも強くなるってのは必要だよ」

言われなくても分かってんだよ、俺が聞きたいのはそう言うことじゃなくて
もっと大切なことを聞きたいんだよ

「具体的には……」

「うん？何かな？」

「具体的には何が起きるんですか？」

「あー……分かったよ、しょうがないなー」

諦めたような顔をした、こりゃ折れたと言うわけじゃなさそうだが
どっちみち聞かなきゃならないことだろうし問題ない

「脳髄とか吸血鬼とかモンスターの血液とか体内に入れ過ぎるとレベルが上がるんだ」

「レベルが上がるのは良いことでは？」

ゲームとかでレベルが上がれば強くなる、と言うかレベルが高くて悪いことは敵が弱くなるくらいでそこまでないんじゃ？

「上げすぎるとバケモノになる」

「!?」

バケモノかーそっかー、大変だなー
いやちょっと待てや、今何つった？
バケモノ……んなこと隠すなよ!?

「いや……いやいやいやはあああ!?」

「と言っても脳髄じゃまず上がらないし吸血鬼とか上位種族の血を入れ込まなきゃまずならないよー」

「そうは言ってもなぁ……」

まぁバケモノにまずならないのは本当だろうな、なった例があるなら俺にも死ぬ気で伏せたいだろうし
言ったってことはそこは問題ないんだろう

「まあそこは信じます、ただこれだけですか？」

だったら脳髄は何も問題ないだが流石にそういった雰囲気ではさっきなかったがまだなんか隠してそうと俺は思ってる、俺の予感はよく外すけど

「後は脳髄キメすぎると幻覚が見えたり、性格が変わったりするくらい？流石に幻覚見えるクラスになるなら止めるけど」

「幻覚……そして性格か」

幻覚にゃならないだろうけど性格が元から大きく変わっちまうか

それもそれで問題があるんだが……
ただバケモノとかになるよりはマシか、なんならならねえって言ってたしよ

「別に全部言ったし無理強いはしないけど、生半可でそれで死ぬなら笑うだけだから」

「分かってます」

学園だってそこまで強制したり面倒みたりしねーのは予想つく、と言うか学園の方針に背くかって話だしな
まあ、実際強くなる意味はある俺とて強くなりに来たんだから貪欲に生きるのだって海賊らしい
早く覚えてやりたいこともある
ただその一方で躊躇いもある、これで良いのかって感情や……まあ色々ある
今言う必要はないだろうがそれでも俺は

1．脳髄をドンドン使って強くなる
2．消したくないものがある

１ｄ２　結果２

「どうしてもならともかく、俺は基本使わないかなと」

「別に良いけど、今それ言うなら理由を聞いて良い？」

「宝箱を開けるのって楽しいんすよ」

「私には分からなけど、危ないし」

実際危ないと言われれば罠とかあって危ないだろう、でも俺は開けるんだ

「だからそのワクワクする気持ちを無くしたくない、それにとある人のおかげで俺は生きているしここに来れたその感謝の気持ちを無くしたくないから」

「……甘ちゃんだねー」

「でしょうね、冒険者らしくないかもしれませんが」

「別にー？死んだら笑うだけだし」

「ありがとうございます」

ドMにも取られるようなことを言った気がするが決してそんな意図ではない
学園の方針にケチつけて済んだだけ助かったとかそう言った意であって殴られて喜ぶ人間じゃないからな俺は

「もしかしてドM？」

「違う!!」

違うって言ってるでしょ!!
勝手に変なレッテル貼らないでくださいよ

―――――――――――――――――――――――――――

さて、そのまま無事に終わったが本格的な授業は明日からしい、まだ部屋に戻るにも早いか

コミュ相手　1d7　5．三宮三葉

「ん？確か岡島だったかな予防接種は終わったのか？」

「ええ、終わりました三宮さんでしたね」

下水道で知り合った三宮さんが話しかけて来た
やべー唐突すぎて何も浮かんでねー
ただこのままバイバイも気まずいので相手に合わせるとしよう

「あの……この前はごめんなさい」

「いや、三宮さんが悪いどころか別に誰も悪くなかった気がしますが」

律儀に謝ってこられると相手を一切悪いと思ってないために逆に申し訳なくなると言うか本当に根っから善人なんだなと

「いや、あの後勇くんが言ってたんだけど……岡島はいないのかって」

「……」

あーそう言う意味だったかー、俺勘違いしてたわーと言うか本当に分かり辛いなおい

「だから何と言うか私達のせいで別れることになっちゃったかなと」

「いや、アレは本人以外完全な理解無理でしょ」

「まあ……否定は出来ない」

幼馴染さんに否定は出来ない言われてますよ!!冨岡さんしっかりしてください!!

「ただ、そう言ってくれたおかげで助かる」

「何がだ?わざとじゃないから勇くんをあまりいじめないで欲しいが」

わざとじゃないの分かってるからなあ……むしろ知らない方が幸せだったまであるただそう言ってても仕方ないのだが

「いやさ、三宮さんに会う前に冨岡さんに会ってたら俺多分避けてたし……流石に嫌われてると思ってるんで」

「あー……」

ホウレンソウって本当に大事だな、俺は知らぬ間に溝を作るところだった

「だから、困ったことがあったら勇くんとかにも言って良いからな……?言葉足らずで

悲惨になるかもしれないけど」

「それで頼る人も珍しいと思うんですが」

「それは……そうだが……ただ根は優しいから……」

「ああ、それはまあなんとなく分かるわ……友達は少なそうだとも思うが」

「……」

「ごめんって」

やっぱかー、こりゃ俺も一肌脱がなきゃダメなパターンかな、頼られるのは悪い気がしねーな！なんたって友達の頼みだしよ！

冨岡さんに友達を増やすのは難しいかもしれねえが俺なら出来る、１００人も夢じゃない!!

「まあ俺も出来ることはやってみるよ、三宮さん」

「助かる、本当にどうにかしないと学園内でも立場が危うくなるかもしれないからな……後三葉でいいしもっと砕けた感じでいいぞ」

「了解、三葉さん」

いきなり下呼びとはこりゃ友達通り越して親友になれたのか……？

俺今、幸運の絶頂が来てる？明日死んだりしない？大丈夫か？

「絶対にやってみせますから!!」

意気込みに気合を入れ過ぎてしまってついつい手を包むように握ってしまう、これはまずい……アカネ先輩だと確実に蹴られるパターンなのに

「おっおう頼むぞキル夫、後流石に手を握られると照れる」

「すっすみません!!」

慌てて手を離す、怒ってないようでよかった
しかし手だいぶ小さかったな……

「後テンションによってか混じっているが敬語じゃなくても良いからな？姉のようにフランクで良い」

「あっやっぱ姉に拘るんすね」

謎の姉の拘りはなんなのか知らないが、ひとまず覚えておくとしよう
覚えたところで姉呼びはしないから意味はないだろうけど

「それじゃあ、今度みんなで冒険とかしよう」

「おう、三葉さん達と組めるの楽しみにしてるんで！」

名残惜しさはあるが、俺達は別れた
まあ冨岡さんに嫌われてないと知れただけでも大前進だしなんなら友達のように思ってくれてるっぽいし、俺もやれることはやってあげたいと思った

――――――――――――――――――――――――――――――

もうちょっと時間がありそうだ

コミュ相手１ｄ７　７．新規キャラ

「さて、どうすっかなと」

今帰ると間違いなく狛枝が騒がしい、出来りゃもう少ししてから帰りたいが
ふと寮の外を見る窓から見えるのは、オールナイト先生が話していたが戦士コースが使う訓練場らしい
結構大きなスペースでって言っても大技使う人とかもいるだろうしそんなものか

「まあ全くお世話にならないわけじゃないんだが……ん？」

よく見りゃ木の下に誰かいる？
小さな女の子に見えるがあんな子でも学園に入るのか
不安と同時にすげーって羨望の気持ちが浮かぶ

「流石に話しかけに行くのは不審がられるか？」

ただ色々と気になったものがあった
それに最初ぱっと見ただけだったので気付きはしなかったがあの少女なんつーか〝俺に無いもの〟を持ってる気がする

「まあ、一人ぼっちとかかは知らんが行ってみるか」

そうして俺は駆けて行った
居なくなっていたらと思っていたが、そのまま木の下に居続けてくれたようで幸いだ、途方に暮れずにすんだ

「よう、1人かい？」

「何……？」

明らかに見れば1人だと言うことは分かるだろうに俺は何を言っているんだろう
と言うか側から見たら危ない人にも見えるんじゃないかって焦る
ただ今更気にしてもどうみもならないしポジティブに行こう

「いや、寮内で外見たらふと見えたから気になっただけだ、今日は戦士コースがあるわけでもないしよ」

「そう……」

こちらへの興味はなさそう、ってかそれが普通か
むしろスルーされなかっただけでも有難いかもしれない
とは言ってもすぐにこっちへの興味を無くしてる気がするしどうするか本当に

「今日はいい天気ですね」

「???」

何言い出してるのか分からない、俺もテンパってるのは分かるがそれはねーだろそれは

「もう日が沈むけど……」

「ははは一、そっすねー」

何だろう、凄く気遣われた気分だ、つか話が続かねえしこうなりゃヤケだ自己紹介でいいや！何もしなきゃ始まらねえ

……やべえ自分でもナンパに見えて来た

「1年の盗賊コースの岡島キル夫だ、アンタは？」

「……」

まあそりゃ答えませんよね、完全に俺不審者ですし
むしろそろそろ通報されそうなんで帰ったほうがいい気がして来た
仕方ない諦め……

「立華かなで……同じく1年で神官コース」

「……ん？」

「……どうしたの？」

「いや答える気無いのかと思ったからさ」

と言うかそもそもこちらに興味がないと思ってたから驚きだ
通報されるレベルで覚悟してたし普通に自己紹介を返してくれるとは全く考えてな

かった

「……別にそんなことは考えてなかったけど」

「ありがてえ……」

ついつい拝むようなモーションをしてしまったがこれは後々無礼な気がした
ただ今はそれよりも現状に喜ぶ、俺ってやっぱ友達沢山作れるんじゃ無いかって思えて来た

「何を有り難がってるか知らないけど……」

「いえ、こちらが勝手に舞い上がってるだけなので」

「そう……」

まだまだ気になるところはあるし話して見たくはある、ただ流石にこれ以上長話する

には日が傾き過ぎた
　またここにいるなら話に来ればいいし、いなければ探しに行けばいいかな
「っと流石にもう夜になるな」
「そうね……」
「送りましょうかねー？」
　流石に寮近いとは言え不安が残る、なんつーかやっぱりこの学園胡散臭いし
「いや……女子寮……」
　はーいそうです、女子寮ですまた俺やらかしましたー
　これじゃあ女子寮入りたい変態じゃないですか
　いい加減不名誉なレッテルを貼られそうで少しだけ怯えている

「……すみません、今の言葉忘れてください」

「でも……心遣いは有難う」

「え？」

普通に怒られると思ったらむしろ感謝された、何このいい子、学園内学園はやばいのにいい子多すぎない？

感動と自分の酷さに泣きかけながら別れる、流石に女子寮に入ることなんてしないそこまでの度胸もない弱虫だが仕方ないのだ……

「それじゃあ立華さんまた今度」

「ええ」

最低限の言葉だけ交えて話を終了する

これでも富岡さんよりも何十倍もマシなので本気で富岡さんが不安になる

せめてマシな案でも浮かべばいいのだがと願いながら男子寮に戻って行った
ここからは地獄になるが仕方ないだろう
話さなきゃいけないこともあるしなと諦めて部屋に戻る

――――――――――――――――――――――――――――――

「やあ、だいぶ遅かったね」

「別にいいだろうよ」

コイツはどうすればいいんだろうな……
そう思いつつも会議を始めた
何言っても喜びそうだが聞きそうにも無い……難敵だと思って居たが案外すんなり行った
え？マジでこんな簡単にすんでいいのか？
と言うか今まで来たくなかった徒労は

「まあ、部屋は普通にボクも使ってよくて掃除等は勝手にやらないで分担すればいいんだね」

「ああ、そうしてくれると助かる」

流石に俺今はほとんど持ってきてないけど、後々物が増えて勝手に何かされると困るしなあ

コイツは流石に何か盗んだりはしないだろうけど、変な場所行って探すのに時間かかると困る

「他ならぬキミのお願いだからね」

「出来ればそう言う態度もやめてくれれば困るんだが」

「流石にこれくらいは許してくれないかな」

「まあ……」

流石に俺も人によって態度変えたりもするしそれを止めることは出来ないか
ただ恥ずかしいってより一周回って怖いんだよなあ、俺狛枝に何かしたわけじゃ無いし
もしかしたら魔術師ってのが一癖二癖あんのかも知れねえけどよ
そりゃ俺に理解しろって言われても無理だ

「ありがとう、岡島クン」

「無理を通してもらうのはこっちだしよ……」

必要なお願いではあるので無理ではないと思いたいが、聞いてくれるしいいやっては思うけどあまり酷いことしてんのかねえ俺

「いや、全然ボクなんかお邪魔キャラにしかなってないようだから」

「そこまで卑下すんなっての」

「……」

自己評価がやたら低いが、そもそもそんなゴミクズって呼ばれる奴らは試験で落ちてる気がするんだがねえ……

俺も不安の中突破したし実際コイツのがすげーんじゃねーの？

「俺はアンタの事下に見る気なんざねーし、なんなら友達になれたらって思ってるぜ」

「ボクと……？」

「ああ、そうだがんで友達があまり自己評価が低いっつーか自分自身だとしても貶してるの見ると気分よくねーからよ」

「ごめん……」

「だからそこで謝るなっての、胸張っていいんだ」

勿論完全に治るなんちゃ思っちゃいねえ、ただ少しでもコイツが前向けりゃいい
ルームメイトと仲良くしたいのは当然だし友達になれない程のヤベー人間じゃねーしな
気の合う仲間がいた方が学園内ではいいと思うし

「掃除とかも一緒にやる気だし、あまり1人で全部任せてとか言わんでいいからな？」

「うん、分かったけど……」

「ん？どうした？歯切れが悪いな？」

少しだけ胸騒ぎがした気がしたが、結局今は原因が分からない
何かやらかしたっけと思ったが……何もやらかしてないはず……

「あの今日はもう掃除しちゃったんだけど……」

「まあして文句は言わねーけど、少なくとも今回は」

実際俺も疲れていたし、してくれるのは有難い
ただずっと甘えているわけにも行かねーが

「それでその……」

「なんだ？狛枝」

「こんなものあって」

そう言うと狛枝は謎の袋を渡してくる
なんだっけこれ？こんなものあったっけ？
袋……あーカズマに貰ったやつか
そういや中身確認してないな……

「……」

中を開けるとグラビア雑誌、エロ本じゃないだけマシだったかもしれないとか
健全な男性なんでセーフとか心の中から叫びたくなったが無意味だろう
つかカズマさあああああん？どう言うことですううううう？

「いやまあ、人の趣味にとやかく言う気は無いけどさ、岡島クン持ってきたのそれだけってさ」

「あー……確かに荷物少なめだっただしな」

「まあ、いいんじゃないキミの趣味を否定することなんてしないからさ」

「……」

すっげー泣きたくなって来た、いいかな？
と言うかマジで狛枝との掃除は一緒に行うことを確約していて良かった

「いっ一冊だけだし」

そう言って中を探る

〝グラビア雑誌を手に入れた〟

〝グラビア雑誌を手に入れた〟

〝グラビア雑誌を手に入れた〟

「……多い」

中から沢山出てきたのと、狛枝の生暖かそうな目を見て逃げ出したくなる

「カズマあああああああ!!覚えてろよおおおおおお!!」

こうした狛枝の態度やどうしようもない展開のせいで数日間は彼の胃を更に縛り上げるものとなった

「俺が何をしたって言うんだあああああ……」

悲しい男の叫び声が部屋中に響き渡るのであった
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

第5話

――――――――――――――――――――――――――――――

「それじゃあ盗賊コースの授業を始めんぞー」

翌日からは授業が始まった、先生はあらかじめ知っていたがこのオッサンなのかいやまあ、このオッサン体力なかったし盗賊コースが適任といえば適任なのか？いや何かできるとも思わんが……
ただ人を見かけで決めてると痛い目見るのですげー人なんだろうなとは思っとく

「そもそも盗賊……、なんて言うが普通にシーフなんて教えりゃド☆違法だ」

えー……いやまあそうだろうけど、シーフスキル聞けると思ったんだが……
と言うかそう言う技能が必要だからの冒険者養成校なんじゃ???
不満は残るが、ただ聞かないわけにもいかないにで聞く

「ここでは代わりにスカウトやレンジャーとかみたいな盤外で役に立つ知識や技術について教える」

スカウトは大体予想つくがレンジャー？正義の味方の戦隊モノでもやんのか？つかそれなら戦士コース向きじゃないのか？

「分かってると思うがスカウトは斥候みたいなもんで、レンジャーも似たみたいなもんで偵察とかが主な仕事だからな」

「なっ……正義の味方になれると思ったのに!?」

「おーい、そこのバカー授業続けんぞ」

しまった、つい騒いじまったでも男なら誰でも憧れんだろ？まあでもそれならヒーローっつーか？まあいいか切り替え切り替え

「んな元気な岡島君に問題です、ダンジョンとは？」

「ダンジョンか」

多少は海賊時代にも潜ってたのついて行ったことはある、説明しろか最低限のことしか知らんが……

「えっと、ダンジョンはあちこちに偏在していてそこにゃ特別な魔物つつーもんが存在してそう言うのを統治しているボスみたいなのがいる……んでダンジョンには特有のマジックアイテムや珍しいアイテムなどがあるっていったところか」

「それじゃあダンジョンを作ったのは誰だと思う？」

「そりゃそこの主とかか……？」

「不正解だ、ダンジョンを作ったのは神が作った創生領域だ」

「……」

ッチ、また神かよ……ワガママ言ってばかりもあれだがホント好き勝手ばかりしやがる……まあ普通の人間は神の寵愛受けて加護持ちなんだろうがね
加護欲しいとは言わんけど、なんつーか納得いかねえ

「ただ、初日でそれくらい知ってるなら合格点かね」

まあ一応合格は貰えたが……
ダンジョンねえ、宝箱とかあるからいずれは行くが流石にそのために色々と覚えておかないといけねえか
そう言う勉強を俺は優先してやりたいがね、そうもいかんか

「後は闇ギルドとか色々な裏の仕事系のことも話すつもりだがそれはおいおいな」

「まっいきなり話されても困るしな」

他の生徒たちも色々先生の話に質問等している
ん？よくみりゃカズマがいるじゃねえか
流石に授業中に話したら先生に怒られるだろうけど後で話すか
そのまま授業は進んで行き

「あー、予想以上に進んだなこりゃ少しやってみるか」

そう言いつつ長谷川先生は宝箱を出してくる
簡単なタイプのやつだな、俺でも苦せず普通に開けれそうだが
腕を見せるっつーか久々に開けれるのはワクワクすんな

「ここに宝箱を用意した本当は解錠の仕方、次回までに予習してもらうつもりだったが
試しに開けてみろってことで」

やったぜ、多分何も入ってないだろうけど
それでもいいんだ、俺は開けることに意義がある

「まっ最初だし一人で難しいって奴もいんだろ、二人組作って開けてみろ」

2人組か、まあ俺が開けたいが相方と話し合って……つか色んな奴いて気になりはするが

そうして、辺りを見渡す明らかに盗賊に見えそうなやつとか全然見えないやつ、後忍者っぽいのとかもいる

「まあ、ただ初回だしカズマと組みてーな」

面白そうな人はいるのだが、それはそれとして初回はダチと組む当然と言えば当然だろう

「おーいカズマ、組もうぜ」

「おっキル夫か構わねーぞ」

一先ず相方は決まった、解錠を始めてもいいがその前に……

「カズマ」

「どうしたキル夫?」

「あの贈り物はなんだ」

あれのせいで!俺はどんだけ悲しい気持ちになったと思うんだ!!
いや気持ちは嬉しいよ?でも唐突に渡されてどうしろと!?
色々叫びたいがそこは我慢する、これ以上目立ちたくないし

「あー俺のオススメだ、どうだった?」

「同居人が掃除中に気付いて生暖かい目で見てくれた」

「……すまん」

すまんですまないんだよなあああ、ただまあ友人だし許す……受けた傷は大きいけどいつまでもいじけてらんないし

「イイヨモウ」

「まあ、俺が掘り返してもあれだし開錠やるか」

「終わったけど？」

「は？」

俺はくよくよしながらも鍵を開ける、当然簡単に宝箱は開いた

罠とかあったら盾になろうと考えたが、無くて安心だった

「やっぱまあ空だよな」

空箱を見て少しだけガックシする

予想はついていても実際これだと悲しい
まあ簡単だったが今回の構造も面白みはあったが

「おいおい、開けんの早いな」

「こう言うことだけは出来たんで」

颯爽と開けた姿を見て長谷川先生が向かってくる
流石にこのスピードは予想外だったのだろう

「ただ気をつけなきゃいけない点はあんの分かるか?」

「もっと手早く即開けですか?ダンジョン中とか危険ですし」

「初日にこれな時点で十分早えわ、違う違う罠だよ」

罠か、確かに警戒心が薄かったのは事実だろう

ただ状態異常慣れした体なせいであまり怖くもないが……
ただ罠の調査を怠ったはダンジョンで通用しないのも事実か

「お前自身は開けた人間だしどうでもいいわけよ、ただ周りがその罠に巻き込まれたらどうするんだ？」

「確かにそこは油断してました……すみません」

「まあ罠もそこまで気にしてねーが」

「え？」

今なんつったこの人、罠気にしなかった俺が言うのもなんだけどもっと気にした方がいいんじゃ？
と言うかそれ以上に不味いのって何？

「状態異常はシャレにならねーもんもあるから警戒に越したこともねーが……大概宝

箱って安全な場所で開けるだろ?」

「まあ、そうですね……」

言われてみればそうだ、敵に囲まれていたり逃げながら宝箱を開けたりはしないだろう

「そう言う場合だしよっぽど何か起きても解除や対処出来るわけで」

「じゃあ何が問題なんですか?」

罠が無ければいいが、そう言う話ではなさそうだ

一体何に気をつけて欲しいんだ、この人は

「ミミックだよ」

「ミミック……」

聞いたことはある、宝箱に擬態したモンスターだ
釣られた人間を喰らう恐ろしいバケモノと聞く

「宝箱を開ける時なんざみんな警戒が薄れてる、そう言う場所じゃねーと開けれないしな……だからこそ危険だ」

「戦士とか多くてもですが？」

「勿論だ、即死技だって使うし、戦闘力も雑魚じゃない。まず対策なきゃ開けた奴は死ぬ」

「……」

俺が開ける時は誰かしらがミミックかどうかの調査したものを手渡されていたんだろうな、まあ罠自体はあっても渡されたってこと気付いて悲しいんだけどね
ただ、ミミック無関心だった俺も助けられていたと言うわけか……

「初日なのに褒めずに酷だとは思うが」

「いや、有難うございます知っておくべきことだったんで」

自分の腕に慢心しすぎていたところはある
お陰でより一層気をつけた上でやる気が湧いたもんだ

「ならいいが」

「あの、長谷川先生現状宝箱ってどうすればいいと思います？」

カズマも長谷川先生に尋ねる、確かに探知できないなら無駄にするしかないのか？
正直それはしたくない

「そうだな……まずはそう言う看破の技術を上げて行くことだが……」

「だが？」

「単純に力上げて強くなりゃよくね？」

「えー……」

事実だけど!?それは酷くね？最後はやっぱ力が解決するみたいな
それ俺ら要らなくなりそうじゃね？

「いや、実際大事だぞ？スカウトとかだって後ろで隠れてる程余裕ねえしな鍛えて思えも戦えよって」

「それスカウトの意義って？」

「いや実際スカウトいるといないで大違いだからな？その上戦えればまずスカウトの生存力が上がる意地でも多く生き残るのが冒険者だ」

「分かりはしますが……」

「流石に戦士コース程とは言わねえ、だが少しは鍛えろ長生きしたいならな」

「分かりました」

「時間か、今空いてない奴らもそこまでだ、残ってるなら宿題とするぜ」

もっと盗賊として今日中にでも学びたいことが多かったが、今日のことも大事だと頭の中に取り込む

正直鍛えろ言われたのは予想外だったが戦士コースも行くとオールマイト先生にも告げているし行ってみようと思った

「あんま無茶すんなよキル夫、俺らも本業を忘れないようにってな」

「勿論だ、忘れず鍛えず色々とやって自分を鍛え上げるぜ」

「あーまあ頑張れよ?」

ノートにも取りつつ、午後に向けての準備を始めた、そこまで準備するものは持ってすらいないが念のため

「剣技とかも覚えたほうがいいのかねぇ?」

この後何をするか分かってはいないが、満足できるようにやって行きたい
少なくともただ皆の背中に隠れて役立つ時に出てくるような人間に収まりたくない
誰かと隣に立って、それでいて感謝されるような人間になりたいしな
ちっぽけでもそれが俺の思いだった

――――――――――――――――――――――――――――――――

午後は初日は休もうかと考えていたが、折角だし戦士コースに行ってみようと思った
カズマは正気かと驚きながら、休むって言ってたしあまり気にしないで行こう
とりあえずと見に行くとすぐにオールマイト先生がやってきた

「やあ、やっぱ来たんだねキル夫君」

「他の生徒もいるんですが俺なんすか？」

つか俺盗賊コースで他戦士コースもいるだろうにいいのかこれで
どう見ても良くないと思うんだがなあ……

「まあ、私も気になった子をついつい優先しちゃうからね」

「はっはあ……」

正直返答にも困る、教師に気に入られるのもいいがここまで来ると逆に怖い
狛枝みたいになんでこんな急に好かれるんだ？
分からん、マジで分からん

「それで、私と手合わせでよかったんだね？」

「あー、流石に別の人とやります」

「そっそうか……」

この先生絶対最初からガチでやって来そうだし勘弁してくれ、流石に俺の状態そこまで出来てないし
死ななきゃ覚えないと下手すりゃいい出してきそうじゃねえか？勘弁してくれ

「なら好きな相手と組みたまえ、あちこち空いてる人間いるし君のコミュニケーション力なら問題ないだろう」

「まあ、そうですね」

誰かと特訓か、知り合いは今回はいないらしい
明らかに冨岡さんとかは戦士コースかなとは思ったが今はいないらしいな、午前中はいたかもしれんけど

さて誰に話しかけるかな

1．セーラー服の刀を持った少女
2．学ランの無骨そうな男性
3．魔法を使いそうな少女
1d3　結果3

「おう、ちょっといいか」

「え？私ですか？」

明らかな年下の少女に話しかける
男なら情けないって話だろうが他のみんな刀だったり、ドスだったり持ってるし……

「ああ、暇なら手合わせお願いしたいってな」

「わっ私で大丈夫かな？」

少女は戸惑うように答える、と言うかやっぱ俺が挑むには失礼すぎたんじゃ？
体格差とかもあるし……まあハンデみたいなものはあるけど

「俺はまだ武器の類がねーから無手だし、色々動き覚えたいなってところだからよ」

「それなら、私も素手の方がいいのかな？」

少女は弓を下ろす、明らかなメインな武器なのにむしろ素手で戦えるのだろうか？
と言うかこちらに合わせたら彼女が一方的にやられるわけでは？俺弱くはないし

「いや、使って構わねーぜ？戦士から武器奪うのなんざダメだろ」

「分かりました、まずは一戦して見ましょうか」

相手が弓を構える、俺も武器欲しいなあ何が合うか分からんけど
戦いながら慣れて行く感じかねえ

一先ず俺がどれだけ出来るか試させてもらいますよ

……

一瞬で負けた、なんだこれ？立てねえ
つか痛え!!なんだよほんとこれ
ボロボロの敗北……なんだろうなあ

「参りました」

「まだ始まったばかりだよ」

「あの……貴女は一体」

明らかな格上でついへりくだる、ここまで負けると只者じゃないし、見た目で決めつけないって言ってたはずなんだがなあ俺……

「冒険者養成校3年、神官界の星まどか先輩だよ」

「さっ3年!?マジですか……」

年下にも思ってたけどまさかアカネ先輩よりも上なのか
そりゃ勝てないけど……てかこれで神官なのか?
明らかに戦士以上に強い気がするんだが

「そうなんだよねー、私も3年まで上がれると思ってなかったね」

「神官もここまで強くなれるんすね……」

「そりゃ生き残った人間は強くなるよ」

それだけ過酷なんかねこの学園……
ただ神官でもこれだけ強くなれるなら、盗賊も期待ありか
そう思うとやる気が湧いてくるな

「そろそろ回復したかな？色々見てあげるから頑張って」

「ありがとうございます」

俺は立ち上がり構える、武器が欲しいが先輩に借りたり、模擬刀とか借りたりするより後で自分に合いそうなものを自分の行動を見て探したいから、それに今日は基礎訓練や体力作り目的だったし素手のまま再開する

まどか先輩も弓を置き素手で対応してくれる

果たして俺が何処まで出来るか

「そういえばまどか先輩」

「ん？どうしたのかな？」

「なんでさっき全力でボコされたんです？」

「ん？調子乗ってそうだったから」

言い返せねえ、確かに年下だし同じく1年だと思ってたそれに不慣れだと思ってたのがあったからどうしようもなかったのは事実だ

「ごめんなさい」

「いや、ちゃんと躾けたしいいよ」

躾けたって……先輩が凄く怖いです
後俺そんなドMじゃないんで躾けられて喜んだりしないし正直困りますからね!!

とりあえず、話しつつも拳を振る力強い一撃は避けられるのは分かっているので速さを重点にそれでいて軽過ぎないように
冒険者は貴族とかのように上品じゃない
回し蹴りで踏み込もうと試みるが軽くいなされる

「ダメだよ、それじゃあ星1のいろはちゃんにも及ばないよ」

「いや、誰ですか!?」

ただ星1にすら及ばないはカチンとくるものがある、間違いなく煽られているから
ただ狙ったところでしっかりと拳が入らない
せめて一撃をと思ったものも悉く捌かれる

「先輩、本当に神官コースなんですよね?」

「そうだけど、言ったようにこの学園は1年が重いよ」

何度も聞いたしアカネ先輩が強い時点で予想はつく……
ただ強いからってこっちだって何か出来れば
……と驕っちゃいけねえな、自分は出来ねえんだから
出来ねえからこそ冷静に、相手の余裕や隙を突かないといけない

「へー」

「……」

まどか先輩が何かを察したのかは知らんが……まあ気にしたら負けだ
今は集中しなきゃいけねえ
闇雲に殴っても負けるなら相手の行動をよく見なきゃいけない

「だいぶ真面目になったね、さっきまでの余裕そうな態度とは大違いだね」

「さて、どう来ますまどか先輩？」

「んー、私的には何もせずに待っててもいいんだけど」

そう呟いた瞬間口角をあげる、笑みを浮かべている
これはマズイと本能が騒ぎつつも逃げることはせず前を向き足を強く踏む

「にひひ、いいよ止めて見なよ」

その瞬間、一瞬で距離を詰めてくる
ちょっと待て早い、カウンター……いやこの一撃は止めなきゃいけない
殴りかかろうと言う考えを即座に捨て手で腹部の前にクロスを作り受け止める態勢をとる
そこに容赦のない一撃が叩き込まれる

「……っぐ」

カウンターを狙っていたら一瞬で気絶していただろう、全力で防御を取っても踏ん張った足でかなり引き摺られている
一瞬よろけかけたが……今しかない

「まあよく耐えたと思うよ?」

まどか先輩は完全にこちらが動けないと思っている、それは当然っちゃ当然だ

俺だって痛くて動けねえ……だが無理してでも動かす、無理以上のことをする
戦闘の作法もロクに知らねえんだ、勝ち目なんざハナっからねえなら、後先考えず隙を突いて突っ込んでやるよ

「うあああああああ」

大きく叫んでただ相手に飛びかかる、相手を舐めてかかったわけじゃなくてもそれでも素手なら致命的なリーチの差がある、利用できるなんざもう頭にも考えられないがただそれでもいい
無論相手は魔法使えるだろうからリーチなんざ関係ないのだが今はそんなことは頭から抜けている

「え!?」

当然相手はもう動けないと思って油断している、俺だって動けたのが謎だからこそ、その隙こそ相手に届くと思い伸ばす
当たってくれと願いながら振るう

「ん―……」

まどか先輩は避けきれないか？
当たるまでは確信しないがそれでもどうにか祈り続けるだけ
今俺はどんな顔してるのか
不安そうな顔なのか、それとも自身に満ち溢れているか
或いは笑顔なのか、分かりやしない
ただワクワクはしている、どうしてだろうなこの一撃が自分の精一杯だからかねえ

「ウェヒヒ、当たってあげたいのは山々だけど……気に入った子には意地悪したくなっちゃうなあ」

「え？」

攻撃をいなされる、だが弾き飛ばされるわけではなく軽くペシとされただけだ
つまりこのままだとまどか先輩に突っ込む

なんで俺は払われなかったんだ？
当然のごとくまどか先輩に突っ込んだ

「まあ我流が酷くて戦闘スタイルなんざあったもんじゃないけど一先ず今日は合格かな？」

「あの、まどか先輩？」

「ん？どうしたのかな？」

「なんで俺抱きしめられてるんです？」

宙を舞っていった俺はそのまま自分自身を制御出来ずにまどか先輩へと落ちる、そのままのまどか先輩は払うことをせず両手で受け止め抱きしめられた
ちなみに凄い恥ずかしいので今すぐにでも逃げたい

「まあ頑張ったご褒美かなあ」

「はっはあ……」

ちなみに抜け出せる体力もないので逃げたいとは思いつつも逃げ出せない、後甘い香りがするのがズルい逃げようって気が薄れてい……待て待て今の俺すっごく変態っぽい

「まあ、少し休んだら反省会ってことで」

「それまでまさか？」

「うん、ずっとこのままだけど？」

この人に今凄くお願いしたいことがあるが、少なくともそのお願いを聞いてくれることはないだろう、オールナイト先生もこちらを見ながら笑い始めてきたし助けてほしい当然ながらそのお願いは届かなかった

少しどころか結構な時間が経ってから俺は解放された

「それじゃあ反省会だけど、正直君って戦闘経験ほとんどないよね？」

「まあ、俺は盗賊コースですから戦いするコースじゃないですし、過去にはモンスターとかは戦ったことありますが対人はほぼ赤子同然レベルです」

「まあそうだよねえ……とにかく基本スタイルとかはあった方がいいかもね、キル夫君の場合は武器を持っても誰かから習ったわけじゃないからまだ闇雲に振るうだけになりそうだし」

「否定はできませんが」

「でもキル夫君そう言うスタイルの方が好きでしょ？」

「え？」

俺のスタイル……確かに行儀よく何かするなんざ似合わねえし暴れるようにしたい

のは確かだ
　多分鍵開けとか慎重にやる分戦闘ではっちゃけたいとかそう言ったのもあるのかもしれない
　ただこう言うのって迷惑かけそうなんだよな、他所が戦ってるの無視するスタイルだし

「そう言うのって迷惑じゃありません？」

「生兵法ならまあそうだけどしっかりと出来てるならいいと思うよ？」

　しっかりと出来ているって……出来てないからそうやって闇雲に振るうことになるんじゃ？
　だから仲間に迷惑になっちまうってなるんじゃ？

「そんなのあるんですか？」

「流石にただ振るうとは違うけど、喧嘩してるみたいな感じ？」

「喧嘩って……」

俺らは冒険者になるためにやってるわけで、喧嘩とか子供じみたことをやりたいわけじゃなくて、もっとしっかりしないとダメじゃん

モンスターと死ぬ気で殴り合いの喧嘩しますなんざ言ったらアカネ先輩にぶっ飛ばされる……

「実際に喧嘩ってわけじゃなくて、喧嘩するみたいに破天荒に戦うスタイルって言うのかな？ほら彼が」

まどか先輩が1人の男性を指差す、さっきの学ラン着てた人か

確かに荒っぽいイメージがあるが、と言うよりも俺よりも色々と凄そう

「彼は2年生の富樫源次って言うんだけど、戦い方がかなり独特で自分の戦い方をケンカ殺法って言うんだよ」

「ケンカ殺法……」

本当にぶっ飛んだ名前だな、それでモンスターとかに通じるのか？でもなんつーかケンカ殺法って言う名前はカッコいいな

ケンカ殺法で敵をぶっ潰すとかなんか名だたる流派名ぶっぱするよりは俺にあう気がするのは何となくわかる

「勿論実力は2年の戦士コースでも注目される程強いよ？だからダメなわけじゃないね」

「そうなんですね、あまり想像つかないけど」

「普段はドス使ってるし荒っぽい戦い方してるからキル夫君の目指すスタイルにも合うかもしれないね、今度話してみるといいよ」

「分かりました、ありがとうございます」

「ただこっちも来てねー寂しいと先輩は泣いちゃいますよ?」

「ウス……」

真面目だったり不真面目だったり本当に不思議な先輩だ、まあ嫌なわけじゃないし本当に今日のこと有難かったけど

「まあ今日は反省よりも覚えてほしいことだらけだったしこれくらいにしようか」

「ありがとうございましたまどか先輩、絶対に無駄にしないんで」

「少年よ、その意気やよし」

まどか先輩に励まされる、ケンカ殺法がどう言うものか分からずだが今度の戦士コースの時話してみたいな

……ん?そういえば流されかけたが

「まどか先輩……？」

「どうした少年？」

「いや、俺のこと少年言いますが明らかにまどか先輩の方が年下じゃ？」

「……」

まどか先輩は黙ってしまった、ちょっとどういうことです!?
なんで黙るんです？年齢聞いたら悪いと言うのは知ってるけど年下に見えるもダメなんすか!?

「ウェヒヒ」

「ちょっとなんですかその反応!?」

「さらば」

まどか先輩は行ってしまった、勿論俺じゃ追い付けないので諦める
帰る前に富樫先輩に挨拶だけでもと思ったがもういなかった本当にみんないなくなるのが早い

「一先ずボロボロだし帰るか……」

流石に手酷くやられすぎた、痛みはもう無いとはいえボロボロであることには変わりない
オールマイト先生に挨拶だけして寮へと向かった

「……」

帰る途中にアカネ先輩がいる、なんか機嫌悪く無い？
え？俺なんかしたっけ？

「アカネ先輩」

「ん？どうしたの？いきなり申し訳なさそうな顔して」

「いえ、そう言うわけでは無いですが……」

「まどか先輩との訓練楽しそうだったねー」

怒ってそうだなあやっぱり……と言うか自然と分かりやすくなってる？気のせいかな

「やっぱ一本も取れなかったからですか？」

「んー？まどか先輩から初日で一本取れると思うなんて調子乗りすぎじゃない？」

「ですよねー」

俺が不甲斐ないからでは無さそうか、じゃあ一体……

「いや、その後楽しそうだったなーって」

「その後……全部見てたんですか？」

確かに寮内からは見れるだろうけど戦士コースでアカネ先輩は見かけなかった以上、ずっと寮内から見ていたことになる

暇だったのかなという以上に、自室からでは見れない位置なのでずっと廊下にいたはずだ……マジか俺の成長ちゃんと見ててくれたんだ

「全部見てたかって何か気にしてることあるの？」

「いえ……その……」

原因は十中八九抱きつかれたことだろう

そのことに関して間違いなくアカネ先輩が思っていることも分かる

さっきの意見を撤回だな、抱きつかれたことに不甲斐ないと思っているに違いない!!

「まあ、今度はああはならないようにもっと鍛えるんで……」

「……鍛えて変わるの？まあいいや期待はしてるし」

「勿体無きお言葉!!」

とりあえずこれ以上機嫌損ねないようにしないとな、俺だって怒ってるアカネ先輩見たく無いし

「うーん……なんか気にするだけ馬鹿らしくなってきたな」

「いえいえ、期待されてるだけいいことですから!!」

あれー？今度は頭に？マークが出てそうだ噛み合ってないのか？

ただ正解は分からないしこのままにしておこう地雷を踏むと不味すぎる

「あーそれともう一つ、明日の午後空けておいてね」

「戦士コース行く予定でしたが」

明日富樫先輩の元に行こうと思っていたが何かあるのだろうか？

「きっ君に付き合ってもらって買い物行くから」

「そう言うことなら分かりました」

多くの人間はこの時の付き合ってで勘違いするらしいが流石はアカネ先輩！勘違いさせる間も無く説明してきた！

そこに痺れる憧れる!!

「きっ君の必要なものも明日買うつもりだしねえ」

「ありがとうございます」

金が無いのでお言葉に甘えるしか無い
必要なものが足りて無いのも事実だし
装備はねだるのは流石に値が張りそうだが使うために無いといけないものは他にも多い
それに俺を荷物持ちとして使うのも理にかなっているだろう

「それじゃあきっ君また明日」

「はい、分かりましたアカネ先輩！」

「午後にデートを忘れないように」

「はい！デートなこと忘れません！」

ちゃんと覚えておかないとな
明日は午前中盗賊コースの授業を受けて、午後はアカネ先輩とデート……ん？

「デート……？」

聞き返そうにもアカネ先輩は既に帰っていた

え？デート？ｄａｔｅ？デート・ア・ライブ？

「ちょっと待って話についていけないんですがどう言うことなんですかアカネ先輩」

勿論そこにはアカネ先輩は既にいないので１人の男の謎だけがその場に残った

いやマジでどうすればいいんすか？

――――――――――――――――――――――――――――――

第6話

――――――――――――――――――――――――――――――

「きっ君遅いよー」

「すっすみません」

俺も急ぎはした、盗賊コースが終わってすぐと
ただ前回張り切り過ぎたせいか座学なのに長谷川先生が指しまくるし……酷く無い？

とにかく授業終わってからという話で時間は決めてなかったが、こりゃ多分だいぶ待たせたんだと思う

「と言うかきっ君服装もそのままじゃん」

「替えそんな無いですからねえ!!」

行きのエレベーターの中でつい声を出すが、周りに誰もいなくて良かったと安堵する
ほぼ養成校で使う数着しか用意してないっつーか、オシャレ用の服は流石に用意できる余裕なんてなかった
と言うか今でもお金ないし、クエストとかあるみたいだし早めに受けた方がいい気がする

「まあ分かってるけど、期待するもんじゃないかなって」

「無茶言わないでえ……」

お金どころか武器もないのお……
クエストは武器とか使わずに済むの受けなきゃいけないだろうな

「で、どこ行くんですかアカネ先輩?」

「んー……どこ行きたい？」

「えぇ……俺ここら辺分からないっすよ？」

地元民でもないし学園も今年からの新入生だ分かるわけないだろ!!
アカネ先輩は1年間いたんだしそう言ったお店詳しいはずでは？

「別にー、きっ君の必要なもの探すわけだし欲しいもの言って考えればってね」

「欲しいものですか……」

分からない、俺が何を使わなきゃいけないのかとか、学園で何が必要なのかとか言われたように日用必需品は増やすかもだけど……

「ちょっと、分からないです……申し訳ないですが」

「次回からはちゃんとエスコートしてよね」

「はっはあ……」

こう言うのは苦手なのでアカネ先輩を頼りたいんですが……
まあ2度目は無いような人なので諦めて次回からは色々と調べておこう……ん？

「次回ですか？」

「何か問題あった？」

「いえ……むしろ俺の方がいいのかなって」

次回もまた付き合ってくれんのか、アカネ先輩優しいな……じゃねえよなあ
デートって自分で言っておいて、次回の話されるとなんつーか流石に意識するわけで……
いや待てよ、アカネ先輩からそう言って来たわけだしこうやっていきなり次回の話も持って来たわけだし……もしやデート慣れてるのでは？

じゃあ舞い上がってるの俺だけ……？

「何ボーッとしてるの……？」

「ああいやなんでもないです」

流石に集中乱しすぎた、と言うかアカネ先輩の過去探ってどうすんだよ俺
そんな権利があるわけじゃ無いし、やる意味も分からん
一先ずは今日を楽しめばいいだろうよ
って思って連れられたが……まず服屋ですか？

「服屋からでいいんですか？」

「何か文句あった？」

「いえ、先に必需品なのかなと」

メインは生活必需品だった気がしたから驚いた
軽い防具とかは既に買ってあるし本当に言われた通り趣味服になるし
こういうのも必要かもしれないけど、アカネ先輩入学費とか事前準備とかも出してもらってるしお財布が心配なんだが……
奢ってもらってる後ろめたさもあるが、そこは流石に自分じゃどうしようもないまで落ちぶれてるし諦めている

「あのさー」

「ん？」

「荷物持って歩き回りたい？服とかの方が軽いって思ったけど」

「あー」

そう言われるとそうか、俺がまず荷物持ちだろうし軽い方が助かるって話か……そこまで考えが至らなかった

「それにさ」

「まだ考えがありましたか……」

なんつーか本当に俺が勉強不足って感じだな
こう言ったことにも疎いとまずそうだし勉強しなきゃならねえだろうな

「きっ君は気にしなくても私が気にするの」

「あー……」

はい可愛い、アカネ先輩がすっごい可愛い
気にしてるって言いながら髪いじって拗ねたようなモーション取らないでください
また騙されてるの分かってるのに!!悔しい

「ってわけでまずはきっ君をオシャレさせるから」

「はーい」

拒否権はないし逆らう意味もないので素直に従う
服の事は正直よく分からんので着せたいように着飾ってくれと言う事で……

「ただこれは違う気がする」

「似合ってると思うけどなあ」

とりあえず言えることは俺が今着せられているのはワニの着ぐるみみたいなものだ
つかマジでなんでこんなの売ってるんだ？
後これが似合うって言われても反応に困ります……

「アカネ先輩は着ぐるみ着た男と一緒にデートしたいですか？」

「え？嫌だけど？」

そりゃそうだろうしなんでこれ勧めたんだよ……いや着せたかっただけだろうけど
何というか複雑……こうなったらアカネ先輩にもそう言ったの着せるしかないよなあ！

「じゃあアカネ先輩も試しに着たらどうです？」

「えー、きっ君が着たから楽しかっただけだし却下」

ダメだった……え？食い下がらないのかって？
そりゃ命が惜しいもん諦めるわ
結局着てくれることは無かったが、本人もある程度買ったようで満足そうな顔をしていた
よかったよかった、俺もまあよそ行きの服増えたしな

「先輩のオシャレももっと見たかったが次もあるしなあ……」

「んー？それは普段オシャレではないと？」

「滅相もございません!!」

普段からドキッとすること多いしな、魅力がないなんて言う奴いたらぶん殴るレベルだわ

いやそれよりか、先輩の良いところ１００個くらい熱演して……

これじゃあまるでアカネ先輩が好きみたいじゃないか!!

まだ1週間経ってないぞ!?しっかりしろ俺

「口は災いの元だから気をつけるように、次は雑貨屋行こうか」

「分かりました」

雑貨屋と言われたから小物とか買いに来たと思ったがそうではなかった

道具屋とかも兼ねている……いやどちらかと言うと道具屋よりかなここは？

「なんかこうやって可愛い小物とかも売ってるからここよく利用するんだよね」

「男1人では気づらそうでしが……」

そう、明らかに女子ウケすることは分かる
だからこそ俺1人で来ることは厳しそうなんだが……

「その時はまた誘ってくれればよくない？」

「えぇー……」

反対なわけじゃないが、流石にそう言われると戸惑う
何というか俺1人立ち出来ないんじゃねねえの？
まあ学園卒業したら間違いなくアカネ先輩と組むとは思うがそれでもおんぶ抱っこってのもなあ……

「まあでも、ここ実際いいもの売ってるよ？」

アカネ先輩が言うように見た感じ手入れなどもすっかりと行われていて、隅々まで綺麗だし商品の状態も良さそうなのは分かる

「ポーションとかも学園よりも質が良く見えはする」

変わらないのは分かっているが、本当にオシャレな店だってことで置いてある商品の価値も上がっている気がする

「まあポーションとかにミニポーチも一応……万が一のために携帯ろ紙とかも買っておこうかなー」

アカネ先輩が色々掴んでカゴに入れるのをただ見ている、正直どれが必要とか同じ効能でもどれがいいとか分からない

目利きは暫くは俺じゃ無理だろう

「んー、なんか無いかねえ……」

チラッと辺りを見渡すと、異様なものが目に入る

「……なんだこれ?」

ぬいぐるみ、ぬいぐるみではあるのだが……
元々の形状がこうなのだろう、じゃないとこれだけボロボロなのも分からない
包帯はぐるぐる巻きだし怪我してるような感じ……女の子ってこういうのが好きなのか?

「うん?それが気に入ったでありますか?」

「!?」

唐突に後ろから話しかけられて驚く、アカネ先輩は向こうにいたよなと確認しつつ後ろの人物を確認する

「あっ驚かせてしまってすみません、自分は店員をやっております秋山優花里です」

「ああ、店員さんか……こりゃどうもご丁寧に」

正直急に話しかけられてビビったがそうか店員さんなら話しかけて来るわな
正直ビクビクした俺の方に相手が驚かせてしまうかもしれんかったしそこはまだマシだったかもしれん

「んで、店員さんがどうしたんだい？」

「いえ、その人形が気になったのかと」

先ほど見ていたボロボロのクマのぬいぐるみを指す、確かに見てはいた
どちらかというと興味よりはなんだこりゃに近かったが

「それはボコと言って最近女性に人気なんですよ」

「そうなのか？」

これがか、よく分からん
もっと可愛いのあると思うんだが、まあ売るためかもしれないがひとまず聞いておこう

「ええ、結構買っていく人多くて中々の頻度で売り切れますね、ですが今日は入荷したばかりで新品でまだ残っていたのであります！なので買ってきますか？」

「いやー、そう言われると気になりはするが今回はやめておくわ」

金がねえしな……流石に俺が欲しいわけじゃ無いからあってアカネ先輩へのプレゼントだがそれは流石に自腹じゃないとダメだろ
だから今回は自重、早いうちに本当に仕事しねえとな
人形買うかはまだ分からねえが、とりあえずやるべきことも改めて思い知らされた

「まあ気になってそうなので取って置きはしますのでいつでもどうぞ、という事で」

「えぇ……」

人気商品なんだよな？本当に
若干呆れつつ視線を先輩の方に戻す

「んー、後は何が必要そうかなー」

「過保護かは分からんが、多い気がする……多分あれ過保護だ」

流石に必需品じゃ無い気がする物まで混ざってる気がする
と言うか目を離しているうちにだいぶ買い込もうとしているような

「アカネ先輩、一先ず持ちますね？」

「ん？ありがと」

そう言いつつ荷物を渡して来る、重い……
つーか多い、なんか分からんものまで入ってる

「これ、全部使うんですか？」

もしそうだとしたら盗賊コースって予想以上にやばいんじゃ？
逆に何も用意しなかった恥ずかしいやつで終わるかも知れんが

「いや、流石に私の分もあるけど？」

「ですよねー」

流石に多いなとは思った、そりゃ先輩の含めりゃこれくらいにはなるか

「でも8割くらいきっ君のだけど」

「え？」

8割だとやっぱり多い気がする……
便利品もそりゃ買ってるんだろうけど必需品だよね……？

「あの……店員さん？」

「はい、なんでありますか？」

慌てて店員を呼んでこっそり確認する
こんなに買うのが普通かなのと
今思えば店の店員は儲け重視なのに何を聞いてるんだ俺は

「いや……流石に多いかと」

ですよねー、ってか秋山さんちゃんと答えてるし後で怒られそう……

まあただ、間違ってますよとか言い出すのは筋違いだし有難く受け取りはするが

周り以上の期待とか持ってくれたって思い込んで、よりそれ以上のやる気を持って努めなきゃって気持ちにはなる

「本当にありがとうございます、アカネ先輩」

「いいよ、誰だって必要なものだから」

これ程まで気遣ってくれるのは本当に感謝しかない、本当に俺絶対役に立ちますからって思いを抱きながら

……ただ流石に全部を買ってもらうことは失敗した……なにせ潰れそうなほど重いからだ

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

俺のことを知ってか知らずか夕食ということになった、気付けば結構日も傾いていたがそれ以上に俺の荷物運びの疲れを察してくれたのかもしれない

「……」

「なんでそんな固まってるの？いつものきっ君らしくしてればいいと思うけど」

「無理……です」

何だこの店、なんか凄いお金持ちの人とかが来そうなお店なんだが……
俺が来ていいのか？ドレスコードは必須じゃ無いだろうけど
でも書いてある値段も高いです、とても高いです……海賊時代こんなもん無かったです……

「高いってほどでは無いよ、ほら例えば向こうとか」

そう言って向こうの方を示す
スーツを着たサラリーマンのような人がいるが……
と言うか凄い量頼んでるな、腹に入るかとかそんなお金があるのかとか気になるところがある

「で、あの人がどうしたんだ？」

「まあ……あまり怒られたく無いけど……」

「怒られるって何かあったんですか？」

「パパだよって言ったらどうする？」

そう言いつつアカネ先輩はスーツの男性の元に近寄る
知り合いなのか？いや結構３０代とか言ってそうな雰囲気だが
なんかおっさんと知り合いとか嫌な予感が一瞬したが、結局よく分からないので諦めた
なんかこう言うのはやべーとか聞いたことある気がするけど

「あっなんか怒られてる」

よく状況が分かってないので2人の元へ行く
揉めあってるわけではなさそうだが

「あのー」

「君も何か用かい……」

「いえ……アカネ先輩がこっちへ向かっていったので何かなって」

「ああ……後輩か」

なんか疲れているのか？
それともうんざりしているのかどちらにせよあまり良くなさそうだが……

「いえ……アカネ先輩がパパと言っていたので」

「……」

頭抱え始めてしまった、ごめんなさい！
なんかよく分からないけどごめんなさい!!

「アカネ君、俺は君の父親になった覚えはないが」

「ごめんなさーい」

アカネ先輩……反省してないなこれ
しかし父親じゃないならどう言うことだ？

「あー、俺は井之頭五郎だ。アカネ君と同じ学園2年でだ……まあ今後よろしく頼む」

それだけ伝えてまた食事の方に戻る
と言うかアカネ先輩と同じ2年なのか……

「きっ君案外驚かないんだね」

「まどか先輩みたいな先輩とか見て年齢で考えても仕方ないかなって……」

実際にそれが正しいのだと思う、と言うか多分まどか先輩天才みたいな感じで俺よりも歳下なんだろうなって……

「まあ言ったように、同じく2年なんだよね」

「はっはあ……」

「まあ簡単に言うとこれだけ食べても問題ないくらいだから心配しないでってことで」

「それだけなら俺の元に来なくても良くなかったか？」

確かにそれだけなら席で話してくれてもよかったんじゃ？

何というか井之頭先輩話しかけられて機嫌悪そうだし

「あー、食事の邪魔されると機嫌悪くなるんだよね」

「本当になんでこっち来たんですか!?」

「まあ驚かせたかったからかな」

驚かせたかったって井之頭先輩怒ってますよね!?
それで元から知ってるなら驚くことってなかったんじゃ？

「あまり驚くようには見えませんでしたか……」

「そうじゃないなあ……」

「？」

そうじゃないの理由がよく分からない
ただこれもやっぱり理解ができないだろうなので諦める、どうせアカネ先輩は答えて

くれないし

「あー……本当に恋人同士でじゃれ合うなら席でやってくれないか？」

アカネ先輩、不味いですってこれ怒りがテッペンくらいまで来てますって
本当に迷惑ばかりかけてるで済まないレベルですって……

「アカネ先輩……戻りましょう、流石にもうこれ空気読めないレベルじゃ……」

「んー？きっ君じゃれ合いたいのかな？」

「ふざけてる場合じゃないんで行きましょ」

食べ物の恨みは恐ろしいのは知ってるし、特に食べることが大好きな人はそうだろう
あまりに怒って俺たちを食べるとか言い出すんじゃねえのってレベルの恐怖を感じたし……ここはこれでいい

「……」

「やれやれ、だいぶ面白そうなことをやっているね」

「……何？」

「いや、だいぶ彼は手強そうだなとね」

「……そんなんじゃない」

「ふーん、君が言うならそれでもいいか、俺の食事は邪魔しないでほしいね」

「……」

アカネ先輩も帰って来たけどだいぶ機嫌が悪そうだ

まあアカネ先輩が悪いので同情はしないが

「パパではないんすね」

「本当にそう思ったの？」

「いや、正直分かんなかった」

似てるかと言われればそうでもないが、母親似とかもあるかもしれなかったしな
勝手な決めつけも難しいしなんとも言い出せなかった

「まあいいか、頼もうかきっ君」

「はい、分かりました」

お金に関してはさっきの井之頭先輩を見て考えないようにした
なんか時折気になるメニューがあるが……
嫌な予感を感じながらはどうかとも思ったので諦める

「わぁ……凄ぇ……」

勿論頼まれた料理は見たことないようなのばかりだが、騒ぎ立てると色々言われそうなのでやめておく

正直な話するとすげーって騒ぎたい……だってすげーんだもん

ただこれが割とあると言ってたし騒いだら迷惑そうだし

一先ず食べて……

「なんだこれ!?美味すぎんだろ」

勿論黙ることは出来なかった、だって美味いんだもん……流石にその喜びは我慢出来ない

「……っぷ」

アカネ先輩?一体何が?

笑いました!?なんで今笑いましたあ!?

ええ……なんでぇ?

「え？笑いました？田舎者丸出しなのはすみませんが」

「いやいや、きっ君がそうなのは予想出来てたし」

「じゃあ何故……？」

「だってきっ君料理来た時から叫びたいの我慢してるんだもん、それで我慢できなくて笑っちゃうよ」

「すみません」

「いいよ、笑って食べるほうがいいだろうし」

そりゃそうだ、俺もアイツらと食べる時はいつも笑ってたしそう言ったことが好きだった

こう言うところに来たら静かにしときゃって思ったがそうでもねえのか

「それならアカネ先輩ももっと笑ってりゃいいんじゃねえんですかい？」

「残念ながら乙女の笑顔はそう簡単に見せませんーっと」

まあそりゃそうだろうな、さっきは少しだけ笑ったが心から笑ったことあったように思えないし

俺じゃあ出来るか知らねえけど、それでもってな

「しかし、すげーなこの料理とかも」

「冒険者はいい時にいいもの食べないしねえ、冒険中とかはロクなものないし」

まあそうだな、冒険中に良いもの食えるわけねえしそれこそ俺たちの海賊飯とかそう言ったもんが普通だろ

しかしだからこそ良いものか

「良いものねえ、それなら装備とかにって考えちまうのは間違いなのか？」

「きっ君の言う事も分からなくはないけどさー」

「悪くないって思ったがそう言うことは何かあるのか」

アカネ先輩がこう言う時は何かある時だし結構大事なことを言うケース多いし

「楽しい？装備だけで全力出して？そう言う趣味の人もいるけどさ」

「楽しいか？どう言うことなんだ？」

冒険者で楽しい楽しくない？そう言うことでは無いのではないか

命を賭ける仕事で楽しむってマズくないのか？

「流石に死ぬか生きるかの冒険者で遊び心とか考えたくないんですが」

「……」

流石にアカネ先輩くらいになれば余裕も出来るだろうしそうした方が良いだろうが、俺はまだまだ新米だしそう言ったことしてるとすぐに死んじまうかもしれない

そう考えると楽しむと言う気分には至れない

「そう言う考えも嫌いじゃないけど……きっ君だとそれじゃあ生きていけないと思う」

「……マジっすか」

生きていけないまで言われたか、そこまでになるのは予想外だ

生きていけないのか俺、それじゃあどうしようもなくないか？

「きっ君が強くなることが好きならいいんだけど……」

別に強くなること嫌いじゃないんだが、それはどう言うことなのだろう？

俺じゃあ強くなれないと言うわけではないだろうが

「きっ君はさ、学園で何がしたいの？」

「そりゃ学んで冒険者になるためで」

「じゃあさ、冒険者になったら何したい？」

「知らない経験をしたい、宝箱を開けたいとかな、まあワクワクを知りたいんだ」

これはオールマイト先生にも言ったことだ
その思いを変える気は無い

「でしょ？だからこそだよ」

「なんで、でしょうか？」

「きっ君は楽しみを求めてるんだよ、自分で言ったようになのに冒険は全力で楽しむこ

とが出来ないときついよ」

流石に死ぬ程では無いはずだが、一瞬の隙がありゃダメなのか？

「アレクシス」

「ん？」

「退屈のことだよ、勿論それだけじゃ無いけど……強くなるために死んだような生活するのは生きているとは言えないし、心がいっぱいいっぱいだ」

「……」

「だらけろとか、遊びまくれとかは言わないよ。そうなるなら見捨てるし……ただそう言うことに焦って欲しく無いってのはあるね」

「あの、アカネ先輩……むぐっ」

そう言いかける俺の口に肉が詰め込まれる、食べるがやっぱ美味い
確かに偶に贅沢したくなるのは分かる
じゃなくて……言いたいことが

「今は食事中だしそろそろやめにして食べよっか、続きは後でね」

「ふぁい……」

ここで切るのかって思うところがあったが、これ以上は今は話してくれないだろう
だから食う事にした、まあ食ってりゃ文句は言われないだろうし美味いものから逃げるのも勿体無い……

「あっアカネ先輩」

「今は話さないよ？」

「そうじゃなくて、はい」

そう言って俺はアカネ先輩の方に肉を渡す

忘れてた忘れてたちゃんと返さないと

「……何？」

「いや、俺が先輩の肉食べちゃったんでっと」

さっき突っ込まれたのはアカネ先輩の奴だったしそれはよくないだろう

不公平とは言わないが、まあ美味いもんだし貰ったしちゃんとその分をと

「……よく恥ずかしげもなくこんな事できるね」

「???」

「……分かったよ、貰うよ」

そのまま肉をフォークでアカネ先輩の方へ持って行って食べさせる？させるとはちょっと違うか？まあいいか、さほど変わらないし

「いや、なんかありました……」

「きっ君は機微とか察しとかもうちょっと学ぼうね」

「はあ……」

正直察しろと言われても何かやらかしたのか俺になっちまうのが悪いかねえ
でもそう言ったってわからんものは分からん
そのままなんやかんや食って、食い過ぎた感じはしたが美味かったし仕方ない

「ちょっと寄り道するけどいい？」

「勿論」

少しだけ自分の足取りが重く感じた
ただアカネ先輩に逆らうことは出来ないし
なにより少しだけ遠い目をしていたアカネ先輩が気がかりだった
デートが終わるからだろうか？理由は分からないが先ほどまでと違って少しだけ寂しそうにも見える
俺がどうにか出来るか分からない……ただ今のアカネ先輩を1人にしたくなかった

――――――――――――――――――――――――――――――

そのままアカネ先輩に連れられついたのは広場みたいな所だ
アカネ先輩が噴水の淵に腰をかける
俺も座ろうか悩んだがアカネ先輩の前に立つ

「アカネ先輩」

「ん？何？」

はぐらかして来る気は無さそうだが、ただどうなんだろうな
聞いていいのかとか戸惑う事もある
ただ聞かないままも間違ってるか、答えるかどうかは分からないけれど

「なんかあったんですか?」

「……いきなり聞く?」

ちょっと戸惑ったような感じでアカネ先輩は答える
確かにいきなり過ぎたか?まあ気にするのは俺らしくないのは事実だが……

「まあでも、言う気は無いよ」

「どうしてもですか?」

今の先輩は悲しそうな顔をしているし、止まりたい気持ちと聞きたい気持ちがせめぎ

合ってる

「まあ、今度ね？今日は一応デートなんだし」

「分かりました」

アカネ先輩が話さないと言うなら聞かない
本来ならば聞くべきなのかもしれないが、いずれ話すってアカネ先輩が言ったのだ
だったら俺は信じるだけだ

「聞きたかったんじゃ無いの？」

「別に今じゃ無くても、話すと言ってくれたので」

「……そう」

「アカネ先輩、最後までデート楽しみましょうよ」

「うん、そうだねきっ君の言う通りだ」

俺は手を出してアカネ先輩がその手を取る
だいぶ月も見やすい位置まで降りてきたがそれでも帰るようなそぶりを見せず2人で夜の広場を歩く

「なんか今日はいつもよりも積極的だね」

「……」

積極的と言うわけでは無い、凄くこっぱずかしい
正直繋いでいるても汗ばんでこないか心配な気分だ
ただ自然と手を離すことが出来なくなっているし、離したいって気持ちもある

「いつもだったら後ろについて来たりするでしょうに」

「まあ、デートですから」

「それだけじゃ無さそうだけど」

当然それだけじゃ無いが……バレているか
出来るだけ隠しておきたかったが
ただ……腹を括ろう

「あの、笑わないでくださいね」

「そう言うケースって笑うと思うんだけど」

確かにそうか、そう言ったケースって大概のやつ笑ってるよな
むしろ笑わないケース見たことないかもしれない

「はっはっはっは……言いたくねえ」

「だーめ♪」

はあ、言いたくねえ流石に赤面ですまねえしなあ
やめてくれって言ってもこれはアカネ先輩もうやめてくれないもんなー

「……なんというかアカネ先輩が消えちまうって思ったんでな」

「消える……？」

ほらやっぱ、おかしなこと言ったよ恥ずかしいしなあ
女々しいとか言われてもおかしくないパターンだし言わなきゃ良かった

「うーん、そっかー消えちゃうかー私が消えちゃうと大変だもんねー」

ほーらアカネ先輩の顔が笑ってる、俺は言わないと決めたんだ！それを先輩が無理やり!!

「そんなのありえるけど？」

「……は？」

唐突なことであっけに取られた、冷たい風が足元を浚って一瞬呆けた意識が元に戻って来る

「冒険者ってそういうものでしょ？」

「ああ、そうだな……」

少しだけホッとする、そういう事かと実際に何かあったかもしれないって思うと怖くなった

いや寄生してるような俺が言える立場じゃないかもだけどそれでも恐怖だった

「気を引き締めろってそういう事だよ、油断すると死ぬ」

「でも真面目過ぎてもいけない」

「そう言う事、さっきのに加えるならいつ死んでもいいようにかな……」

「……いや、そう簡単に死なないと考えていますけどそれでも……はい」

ここに来る前に一度死ぬ未来を見た気がした、学園でも死なない保証なんてないまあそうだがな……

「きっ君が始めたとは言えなんかしんみりしちゃったね……ごめん」

「いや、俺が悪いですし……楽しく行こう言いましたのにね」

凄い微妙な雰囲気になりそうな気がしたが、すぐに切り替えるこのままじゃいいことにならなさそうだしなあ
ただ気付いていなかったが俺たちしんみりしたままでも手を離してなかったらしい

「ああそうだきっ君」

「なんですかアカネ先輩？」

そう言いつつ、アカネ先輩はなにかを取り出そうとしている
……だから手を離すハメになったのだが
名残惜しくない……名残惜しくないし

「これ、きっ君にって」

アカネ先輩から渡された物を受け取る、見た感じは武器っぽいがナイフ？なんだかブーメランっぽいが

「武器、ですよね」

「そりゃきっ君武器ないしねえ」

「あれ？気付いてて……あー戦士コースの見てましたもんね」

「そっだから合いそうなの」

　そう言うなら短剣とかそう言った感じなのだろうか？刺すような用途には見えないけど

「グルカナイフって知ってる？」

「いや……分かりませんが」

「まあククリとも言うんだけどね、面白い形してるでしょ」

　確かに面白い形はしてる、手にも一応フィットするが
　しかし投げたら本当に帰って来そうな形してること

「確かに普通のナイフとかよりは使いやすそうか」

「そうだね、ナイフや短剣だと刺すとかで敵に接触距離になっちゃうし」

確かに剣とかのようには使えないが腕の力で振り下ろせるのはいい
試しに少し離れて振ってみるが、うんいい感じだ

「確かに俺のスタイルとも合うのかなこりゃ」

ケンカ殺法、富樫先輩に話したわけじゃないから実際そうなるかは分からんが喧嘩スタイルならこうやった振り下ろせる系の方がよさそうだ

「私が前使ってた奴だしねえ」

「いいんですか？」

「いや、振り回せるほど力無いしナイフ代わりに使ってたけど他のがいいなあって」

確かにアカネ先輩が振り回すにゃ重いかもしれん、それならその分もうまく使いこなせりゃいいんだが

「この借りはすぐに返さねえとな、今日だって全部出してもらったし」

「ねえきっ君」

「ん？どうしました？」

「今日って結構かかったって思ったでしょ」

「そりゃ実際そうですし、額見て驚いたが……」

「あれってさ、1、2回くらいで直ぐに返せるどころか1回ダンジョン潜れば数回やっても平気な事多いんだ」

「えぇ……」

儲かる仕事なのは知っているがそこまでなのか
そう言われると驚きだが、まあそうなんだろうな……怖い世界だ

「冒険者ってだから儲かるんだよね、勿論そのその前の学園生でもダンジョンに潜れば儲かるんだよ」

「数ヶ月分の生活費クラスまで出そうっすね……」

当然そのくらい出たらビビるんだが
さっ流石に出ないよなははは……
なんか出そうな気がして震えてきた、いや宝箱でもそんなヤバイの見た事ないぞ?だからないはず……

「どうだろうねー」

嘘だって言ってよ!嘘じゃないの!?怖いよ!!

「だったらアカネ先輩への借金？じゃないっすけどすぐに返せそうっすね」

「……いやすぐじゃなくていいけど」

「って言っても今後の生活費とかもあるっすし」

そうなんだよな、俺の生活費がないし依頼だの探索だのしなけりゃいけない
そうしなけりゃいつまでもアカネ先輩に頼りきりだし

「別にいいよ？面倒見る約束だし」

「でも武器とかもあるわけでいつまでも頼りきりじゃ」

「いや、別に依頼とかも為になるし止めはしないよ？でも別に優先しなくていいって事
本業は勉強だし」

「まあそうですが」

ただまあ……ずっとはまずいよなあ、少なくとも俺はそう思うし
アカネ先輩の好意を全部受け取るのはどうしようもない人間になる

「無茶しない程度に、ってことで」

「……でよね」

「ん？」

「なんでもない」

アカネ先輩はまた手を出して来る、俺もそれで繋ぎ直す
夜も少し深くなってきた、アカネ先輩の方が腕は上だろうけどやっぱり女の子を一人で送るっつーのも不安になる

「帰りましょうか、送りますよ」

「もうそろそろ帰った方がいいかな、それじゃあきっ君お願い」

広場から手を繋いだまま出て行く、はたから見れば俺たちをどう見るんだろうな
恋人に見えるって言われても実際に思われちゃ困るんだがな
いや困りはしないが……アカネ先輩に申し訳なくなる

「きっ君今日どうだった?」

「楽しかったですよ、実際行った事ないところだらけだったし」

「そっか」

そう言うと笑ってくれた、本気で喜んでくれてるのかねえ
それなら俺も嬉しいしそう思うことにしよう

「また来ましょうね」

「どうかなー」

「ちょっ先輩が次のデートの話してたんでしょ」

悩ましそうなふりをしているような気しかしないけど、それでももう行かないとなったら悲しいからそうじゃなきゃいいが

「だって次はきっ君が行く場所選ぶんでしょ?」

「……そういやそうだな」

俺が場所選ぶんなら同じ場所とは限らないかと言うか全部が同じ場所だと流石に怒られる

「だからー、期待してるよきっ君」

「ハハハーマカセテクダダイ」

すっげープレッシャーが俺を襲う
いやー見つけとけってのも相当きついと思う
ただまあやりますけど

「それじゃあ、また明日ね」

気づけばエレベーターも下りていて、もう寮の近くまで来ていた
一瞬離さず手を強く握りかけたが諦めるように手を離す
名残惜しい気がしなくもないがまた明日があるし

「では気をつけて」

俺も手を振って送る、と言うかもっと前で別れておくべきだったのに
外は知らない人だらけだが中には知り合いだっている

無論俺は部屋に戻るまで気付かなかったが
何もなってないことを祈ろう
部屋に戻った俺は後悔するかのように悩むのだが……
ただまあ悩むことはそれだけでもなく、むしろもう一つのことで頭を抱えていた

「……」

「……でよね」

「死なないでよね」

つい聞こえないふりをしてしまったあの言葉
アカネ先輩に本当に何があったんだろうか
今の俺にはまだ分からないけど、それでも

「死ねねえなあ……」

そんなことは元から承知だが、一切その思いは上がった
この世界での生き残り方を考えながら

――――――――――――――――――――――――――――――――

第7話

――――――――――――――――――――――――――――――

「さーて、今日はそうだな……盗賊らしくないとは思うが」

長谷川先生の盗賊コースの授業も慣れて来た
便利なことからいらん情報とかまで学ぶ
ただ、あくまでいつも盗賊コースらしいものを受けているはずだがどう言うことだろう……

「お前たち、戦士ってどう思う?」

「どう思うと言われましても……前線で戦うとか?」

実際そうだろう、流石に種類は多少差があるだろうが

結局俺たちとかより前線で戦うイメージがある
つーより魔術師や神官が前でて戦うのも明らかにおかしいしな

「まあ合っている、ただ考えていることと違うことはそいつらがやられりゃお前達は死ぬと言うことだが、生命線ってやつだ」

確かにそうだ、タンクだろうが他の職業だろうが戦士のメンツが死んじまったら俺達も命取りだ
だからこそ俺達も俺達に出来る立ち回り方があるのだろうが

「トラップ察知とか勿論俺達も命を賭けることはあるが、無論戦士頼りばっかじゃ俺達戦闘中何もできないになるしな」

俺とかは戦士コースでも学んでるし学び切れば足手まといとかにはならないだろうが、純盗賊コースとか受けてる奴らは確かにそうかもしれない
それをどうするかって言うと分からんが

「武器破壊って分かるか？」

「そりゃ流石に」

武器破壊って言えばそのままだしな、武器破壊出来りゃ敵の攻撃等は弱まるだろうし戦闘において便利だと思うが

「だが、それは戦士の仕事……そう思ってるだろ？」

「……それ以外に出来る奴らって？」

武器破壊は戦士の仕事かどうかって話だが、そもそもその距離で戦ってるのが戦士の話だしってことだ

「まさか、それを盗賊がやるって？」

「岡島、正解だ」

長谷部先生はニッとする外れてて欲しかったが外れてないのかあ……
武器破壊って手段があるだろうがそこまでの距離にはならないだろうし

「危なくないですか？死んだりすることも普通にありえるんじゃ？」

「別に勝てる相手にやれとか舐めてかかるようにって言ってるわけじゃねえよ、それに手段がありゃないよりいいだろ？」

「まあ、そうですね」

少なくともどうしようもない時にどうにかある手段があるならマシだろう、それが出来るかどうかは置いておいて

「だから俺は教えておく、盗賊っつー役職でも生きれるなら生きれる方がいいしな」

確かにそう言われるとそうだし、盗賊コースらしくないって言うのも分かるか

「まっ方法は簡単だ、コイツを使う」

そう言って長谷川先生は謎の小瓶を取り出す
結構謎の色をしてるんだが……

「なっ何ですかそれ?」

「コイツは金属を腐食させる学園秘密の液体だ」

えぇ……なんですかそれ……
ってか、普通に危ないものじゃ?

「使って大丈夫なんすか?」

「かかりゃ火傷くらいはするがさほど問題ねえ、だが歯とかに当たりゃ溶けるから注意しろよ」

マジでなんなんだこの液体？
正直怖くて使いづらいんだが……
つかなんでも溶かしそうなんだが

「金属だけにしなかったんすね……」

「そりゃあ人間相手ならいいが、モンスター相手に牙とか爪とか溶かせなきゃマズいだろ？」

あーそう言われると確かにか、モンスター相手に意味はがないならこの薬も台無しになる
ただまあ思う所もあるわけで

「牙や爪溶かすなら骨……溶かさねえか？」

「剥き出しならな……ただ普通はならねえだろ」

まあそりゃそうだが、いざという時の用でそう言うこと知らねえと不味そうだしなあ……先生自分からそこら辺言う気ないんじゃね？レベルだったし

「言った通り結構なヤベーもんだから少量でも十分即効性がある、くれぐれも身につけてる物に注意しながら使うように」

あー確かに鎧とか腐食するとまずいか、それだけでも命取りになるし

一時的にしのぎはしたが鎧が消えて戻る前にドーンとかはシャレにならねえ

「つーわけで今回は2人組になれ組手とは違うが各自やってもらう」

「戦士コースの課題かな？」

「だから盗賊コースっぽくねえって言っただろ」

一部の生徒が疑問や文句を言うが確かに戦士コースのようだわ

各自武器を壊しあえとかも物騒だけどよ

「え？自分の武器壊すの……？」

「いや……流石に訓練用の刃がない武器貸すからな……」

流石に自力で武器とか入手したやつにゃそれじゃ厳しいしな
俺だってこのアカネ先輩から貰ったククリを壊す可能性があるって言われたら流石に帰りたくなる

「しかし……誰と組むかねえ……」

正直闇雲に液体を掛け合うようなものじゃ無さそうだし、適当に組んでもいいんだがひとまず周りを見て……意外と強そうなやつ紛れてるが

1．戦士コースで見かけた女の子
2．いかにも普通っぽい男……だよな？

3．あっ冨岡さんいんじゃねえか

1d3　結果1　何故男はこうもダイスに負けるのか

確かあの子は戦士コースで見たな、なんで盗賊コースにいんのか分からんが……腕試しには丁度もってこいか？

そうと決まればすぐに声をかけに行く、折角見つけた相手だ、逃げられたくねえしな

「岡島」

偶然こちらに気づいたのか冨岡さんが呼んでいる

勿論俺はいたことに気付けば組んでいただろう、ただ残念なことに今回は気付かなかった

そのまま気付かず他の方へと向かったのを確認してシュンとしていた

「よし、ちょいと挑戦いいかい？」

「私ですか？」

驚いたように少女は反応する、自分が声かけられるとは思っていなかったらしい

確かにその理由も分かるが

盗賊コースの人間と明らかに違うその刀を見れば盗賊コース専門の人間は誰でも躊躇うだろう

「ああ、この前戦士コースで見かけたんでな腕試しとは少し違うが」

「この前……ああ確か鹿目先輩に挑んでた人ですか」

「……忘れてくれ」

そっかー、俺がこの子のことを覚えてるようにこの子も俺のことそうやって覚えてるかー

しかも無様にボコボコにされてただけじゃん……心情的に辛い

「いえ、でも鹿目先輩にあれだけ挑めるなら流石かと普段見ないので戦士コースじゃない人でしょうし」

「ああ、普段は盗賊コースだな」

自分自身戦いでワクワクする人間だとは思っていなかったが、この前のまどか先輩に触発されたか強い相手にどう勝とうと考えるかはよく考えるようになっている
そうして目の前の少女も今の俺にゃ強敵だろうと

「あまり無理しないでくださいね、流石に手加減して戦うとかする気はないので」

「その方が助かるな、俺だって手加減されて戦われたじゃ燃焼しきれねえし」

「おいそこ、武器破壊だからな???」

長谷部先生から注意が来る、そういやそうだった
うっかりガチで斬り合う気だったまずいまずい

「薬を使ってだったな、難儀だがアンタに勝たせてもらうぜ」

「姫柊雪菜です、条件があるとは言え私もそう負けると思いませんけどね」

「上等、岡島キル夫だ」

各自配られた武器を手にする、相手は勿論刀、俺はククリみたいなのは無かったしナイフを数本借りて行った
そのまま外のグラウンドへと向かう
流石に室内で出来る授業じゃないしな

――――――――――――――――――――――――――――――――

「さて……壊せとは言われたが……」

刀を構える相手の姿を見る、隙はないし更に言うならこれで瓶から当てろって難易度

高くね？
同じく1年なだけマシだけどそれでも強敵だ
油断なんざ出来ねえな

「正直、武器の大きさ的に不利だと思うんですが……」

「そりゃでかい武器慣れてねえんだから仕方ねえだろ」

正直刀もでかい武器だと思わんが、と言うかナイフにって何度高いよな
と言うか長谷川先生に他からもその文句が来たらしい

「ああ仕方ねえな……んじゃ鎧も貸してやるよ!!」

鬱陶しそうに長谷川先生は騒ぐ、安全性は上がるが……そう色々な種類溶かされると
長谷川先生も辛いだろうなあ……

「不利は消えましたね」

「あーうんそうだな」

こうなると普段から戦闘慣れしてる方が有利になるなあ

まあ実際ナイフ狙いで火傷とかも俺ありそうだしな、そのままだと

「元からこう言った戦いの方がお好みだったのでは」

「まあ男としちゃな……冒険者としては楽して勝ちてーが」

「冒険者としても考えると確かにいい意見ですね」

「現金なやつは嫌いか？」

「いえ、好ましいかと」

改めて対面する、鎧も普段慣れてないタイプで少しぎこちないがさほど問題ない

相手も普段セーラー服だし鎧は慣れてないだろうしな

「んじゃ行くぜ」

開始速攻で畳み掛ける、と言うか先生取られて刀振り降ろされるのが不味い、ナイフじゃ耐えづらいしな

普段使ってるククリなら振り下ろせるんだが、ナイフなせいでいつも以上に距離が必要なのが困る

安易に突っ込んだが押し飛ばされた、力負けすんのかよ……

流石に圧倒的な押し負けじゃないから体勢崩す程ではなかったが

「その程度ですか?」

「生憎、戦士コースに有利取れるほど戦士じゃないんでね」

実際のところ冷や汗が出る、不利だまでは言わないがそれでも懐に入ることができな

い

武器の質的にナイフで鍔迫り合いもだいぶ厳しいし

闇雲がいつもの手段だけどそうしてどうするのか

考えろ、考えろ

「考えるのはいいですが」

「!?」

考えてたのは一瞬のはずだがその隙を突かれた

今度は相手の方が来るが……

「……っと」

慌ててナイフで反らす、このままでもぶっ壊れそうだなおい

と言うか相手も趣旨忘れちゃいねえか？

これなら狙えるか？

「……」

いやダメだなこれ、集中してやがる……油断がないから隙をつけねえ
武器破壊よりもまずは相手を疲れさせるしかないか？
ただそれはキツいか
相手の方がスタミナある可能性高いし、俺が尽きたらその時点で負けだ

「おっと今度はやらせないぜ」

敵のタイミングに合わせて今度こそと突っ込む
また隙を狙っていたのか驚いた相手の隙を逃さない
さっきよりも懐に入れた、ならここで決めるしかない

「一撃で決めるっきゃねえ!!」

ナイフを思い切り振り下ろす、刃はないから刺さりはしないが刀の横腹を叩くには十

分だ
折れるほどの一撃になるかは分からないが当てる価値はある

「させっません!!」

姫柊は俺の右手を掴んで引っ張る
リーチが短い欠点だなこりゃ、これじゃあさっき同様バランス崩すだけとどうしようもなくて残念だ……

「なわけねえけどな」

「!?」

引っ張られた右手を軸に裏拳のように左手を突き出す
勿論例の薬は握っている
このまま瓶ごと叩きつけて決めてやる
ては多少火傷するかもしれねえが仕方ねえ

「肉を切らせて骨を断つとはちょっと違うがこれで終わりだな」

「……ここで負けられません!!」

勝ちは決まるまで確信するなと散々言われているがついこの時は確信していた
相手の右手は俺の手を引き、左手は刀を握るその両腕が塞がっていると言う条件で達成できないのはむしろまずい
そう思っていたからこそ、俺の方も足が飛んで来るのは予想外だったし純白が見えたのも予想外だ

「がっ……」

ガード出来たわけではなく、運悪く鳩尾に思い切り入った……痛え……
と言うか女子がそんなのダメだろ……恥じらい持たないと……

「やべえな……」

結構ふらつく、まだ戦えはするが正直さっきまでとはいかねえ
当然だが姫柊を相手に出来る状況じゃねえ
負けたか……いや待て……この授業の意味って……

――――――――――――――――――――――――――――――

「……」

遠くで見ている長谷川先生は溜息をつく
一瞬で終わるところもあったものの割と予想以上に戦えた奴らがいたのは予想外だが
それでも不満そうだ

「授業の意味、理解してるのかねえ」

まあ全員が理解できるとは思っちゃいなかったし出来たら正直自分の意義がない気

がする
ただ1人くらいと思っていたが今のところ誰1人もいない
「これじゃあ、何人が生き残れるか不安になるな」
何が大事で、どうするべきなのか
それに気付くやつがいるかと
…
モンスターに襲われて、死にそうな状況
流石にそうではねえが今の状況は似ている
勝ち目がないような絶望的な状況の中でどうやって勝つか
「……」
いや、何かがおかしい……

なんで勝つことに拘っているんだっけ俺？
それは授業で言われたからであって……
でも長谷川先生は初めになんて言った？
そうか……確か……

『だから俺は教えておく、盗賊っつー役職でも生きれるなら生きれる方がいいしな』

ああ、そうか勝つためじゃねえ……
生き残るため、そして生き残すためじゃねえか
なら俺がするべきことは分かった、優先順位もな……

「流石に鳩尾はすみませんが、これは勝負です決めさせてもらいます」

姫柊の一撃が来る……
一瞬だけでも時間が稼げればいい
それくらいなら流石に出来るか、地形に感謝だ
俺は足元を強く蹴って砂煙を起こす

本当に一瞬だけだろう、だが一瞬でもあればいい

「っ……!!」

流石に一瞬は稼げたが本当に一瞬だけだった
もうちょっと稼げりゃよかったが、こればっかりは仕方ない運に賭けるしかない

「はあっ!!」

姫柊の一撃が俺を捉えて振り下ろして来る
既に力こそほとんどないのを振り絞って手持ちのナイフで打ち合う
まだ一撃どうにかなると願いつつ
無残にもそのナイフは砕ける

「……あっ」

「……なんとかですか」

ギリギリで多少の疲弊をしながら、破壊されたナイフを見て姫柊は勝利を確信する
ただ1番気にしなくてはならないことは
長谷川先生に明確に言わずにはぐらかされた勝利条件を聞いておくことだっただろう

「悪いな、勝ちは俺の方だ」

先ほどの痛みに耐えつつ、先程持ってきたナイフをもう一本取り出して思い切り刀へと向けて叩きつける
先程まで全く折れそうになかった刀が一瞬のうちに折れた

「……え？」

「確かにこりゃ戦士コースと違うか……だが俺の勝ちだぜ姫柊……」

カッコよく決めたかったが限界がきて膝をつく

見た通りなら勝敗は立っている姫柊の勝ちだがそれは戦士コースならである

「……どういうことですか？私が先に武器破壊を成したはずじゃ？」

「俺はそんな勝利条件を言った覚えがないんだがな……」

戦闘終了後、長谷川先生はこちらの方に来る

「……確かに言われてません」

自分の早とちりに気付くとすぐに冷静になる

こういうケースは逆ギレしたりしだす人いるからそこはすげーと思う

「岡島、俺の望む行動が出来たのはおめーだけだ、求めていたものがなんだかわかるか？」

「はい、気付くのは遅れましたが」

姫柊さんもしっかりと聞き始めた
俺授業とか逃げ出したくなるのに本当の真面目な人だな

「そもそも今回の授業は俺たちが生き残る方法を模索する戦いだったから」

これが盗賊の役目か分からないがただやる意味はある、相手の武器を破壊すること
それが出来りゃ生き残る確率は少しでも上がるから

「相手の攻撃力を落とす必要がある」

「それは……私が先にやれたかと思ったのですが」

「んじゃ姫柊、なんで岡島のナイフは壊れたと思う？」

「それは……耐えきれなかったから……あっ」

「そこで気付くなら十分合格点か」

長谷川先生は満足そうに頷く、いやまあ気づけって相当厳しいと思うわ

「ああ、俺は自分の武器を腐食させた……それをぶつければ濡れたナイフで相手にも当たるから」

そもそも戦士コースの人間に考えつくの無理だろ
だってあっち武器大切にする人間だぜ？
いや俺もアカネ先輩のククリは大切にしたいが

「武器と命どっちが大切かってわけだわな」

「はい……」

生き残る確率を上げるためにはそりゃ武器すら犠牲にする覚悟か
確かに相手の牙や剣などを巻き沿いに出来るなら少しでも生き残れるかもしれない

「防具は冒険者の命綱だ、武器も重要ではあるが防具の方がいいし生き延びるためには諦める必要もある」

「そうっすね……」

「なあ、なんで盗賊ってナイフとか使うか分かるか？」

盗賊がナイフを使う理由か、テンプレートだが

「軽いからですか？」

「ばっか、そんなら軽い剣で使いやすいのなんざいくらでもあるだろうよ」

「まあ確かに……」

細剣と呼ばれる武器もある、それ使えばデメリットのかかる重さじゃねえか

それどころかリーチとか考えるとそっちの方がいい
生憎相性もあるし俺は使えなかったが……

「盗賊にとっちゃ武器は消耗品だからだ（諸説云々）」

「消耗品……」

通常では考えつかない言い方を言われて驚く、流石にそこまで安いものと思ってないし

「毎回壊せとは言ってねえ、必要なら手放す覚悟をして量を揃えるんだよ、今回のみたいなケースとか含めてな」

確かに俺は刀だと簡単に折れる可能性がとか考えて数本ナイフを持っていった
薬をかけた理由も予備があったからだし

「別に岡島みたいな戦士も兼ねるタイプにゃ必要ねえかもだが、少なくとも盗賊は数は

用意しておいたほうがいい」

「なんなら毒や麻痺とか塗って消耗品として投げナイフも出来るからな」

「あー」

言われて納得する、確かにそういう使い方もあるな
武器を投げたら勿体無いと考えていたが

「俺たちは命懸けなんだ。武器よりも命のが大切なんだよ」

「そうですね、そこは盲点でした」

「気付いて欲しかったが気付いたの岡島だけだったのが悲しいがね」

辺りを見渡すと全グループ終わってたようだ、その上で俺だけだと嘆いている

「そもそも相手の武器めがけてとか無理すぎるだろうよ……」

「まあ……」

あと少しで行けた気はしたが実際にあれは無理だっただろうよ
実戦でも絶対のしないし

戦闘終了後も皆が集まり話を聞く
予想以上の授業だったが、これが盗賊としての動き方なんだろうと

「それじゃあ、こんなもんか岡島と姫柊以外は次回までにノート作って来るように」

課題がなかったのは助かった気がする
別に何かあったわけじゃないが

「立てますか？」

未だに膝をついていた俺に姫柊は手を差し出して来る
多少は楽になったが、一応それに甘えて手を伸ばす

「私の今日は冒険者としてダメダメでしたね」

「ん？」

「生き残るための行為、勝ちことしか考えてなかったので」

少しネガティブが混じりながら彼女は答える
今回最後に油断したことも含めてだいぶ落ち込んでいるようだ
ただ何か問題あったようには全然思えなかったが

「なんでだ？やってたことそこまで悪く思えねーが」

「だって授業の趣旨勘違いしていて」

「そりゃ盗賊なら最適であって戦士なら違うだろ？いや一応予備の武器であああした行動できれば手は広がるが」

「戦士なら違う……」

俺の言ったことを真面目に聞いている

アレ？もしかしてこの子俺が思ってた以上にいい子？

「戦士は守んのが仕事だろ？長谷川先生言ってたけどよ」

「はい、確かにタンクでも戦士でも」

「武器大事だし、何よりそうやって相打ち狙いよりも戦士は勝つために戦ってる方がかっこいいと思うぜ？」

実際俺もそういうのもあるから多少は戦士コース行ってるわけだし

俺も刀持ってる姫柊とかかっけーって見てたし

「そうですか……」

「あっすまん、女子にゃかっこいいより可愛い言うべきだったが武器持ってる姿凛々しさだけじゃなくて可愛さもあったし」

「ばっ何言ってるんですかあなたは」

本当に何言ってるんだ俺えええええええ
落ち着こう、落ち着いたうん落ち着いた
俺がこういう時って落ち着いてないケースばかりだけど落ち着いたんだ

「ハハハーアイサツミタイナモノデスヨー」

ダメだこりゃ、もう部屋に帰ろうこの前のこともあって落ち着けてねえや俺
狛枝に助けてもらおう（錯乱）そうしよう

「あっあの岡島さん」

「キル夫でいいぞ」

「ではキル夫さん」

流石にあれだけ戦っていつまでも余所余所しいのは悲しいしな
別に呼ばれても問題ねえし下の名前でってことで
それよりも急に真顔？いや見方によっては照れてるようにも見えてきた……
まあそれは俺の願望な気がしているがどっちにせよ何かありそうか

「どうした？」

「明日付き合って欲しいのですが」

息を呑む、そして明日という言葉に気付いてそういう意味ではないと悟る
ガックシしたような気もしたが今はそうではないだろう

「何にだ？」

要件も聞かずに受けかけたが、流石に聞かないとマズイだろう
流石に壺買わせたりして来るようには思えんが念のためにな

「まあ簡単なことです」

何かを確認するような行動をとり、再びこちらを見る
もうこうなりゃ信じりゃいいだろ、分かったっての

「依頼一緒に受けませんか？」

第8話

――――――――――――――――――――――――――――――

「すまん待たせた」

「別にそこまで待ってはいません」

盗賊コースの翌日、俺は姫柊と依頼を受けることになって朝食堂へと向かう
当然遅くなりすぎたわけではないが、理由はあった

「アハ、ごめんねボクのせいで遅れたようで」

狛枝が朝起きた時に気付いてまあ一緒に来ることになった
魔法使いも気になってたし有難いっちゃ有難いが

「それは構いませんが……」

「あー2人きりとかが良かったならすまねえな」

「なっ……そんなつもりは!!」

「報酬の分け前減るもんな」

「……」

あれ?そういうことじゃないか、というかそんなつもりはない言ってるじゃん……申し訳ねえわ

「ボク邪魔じゃないかな?」

「え?なんでだ?」

「……まぁいいや」

狛枝が何かを諦めた、言ってくれりゃいいのによ
まあ深く詮索はしねえが

「ただそうですね、3人になったならいっそ大人数向け受けてみましょうか」

「3人で?」

「いえ、他に既に受けている人達もいるでしょう」

受付の安部さんに色々と話しながら受ける
聞いたところによると依頼も多いらしい

「オススメとかってあるんですか?」

「んー、一概にこれが良いとは言えないけど……」

まあそれがいいって依頼があるならもう無くなってもおかしくないしな
と言うか競争率上がりそうだろそれ

「これはどう？」

そう言われて出された依頼書は護衛任務と書かれている

「護衛ですか？」

「そう、少しばかり危険な場所も通ることになるけど」

危険な場所か……いずれは行かなくてはと思っていたしまあいいだろう
ただ出来れば何も知らずには困るが

「どう言うところですか？」

「病み村って知ってる？」

「いえ、全然……」

名前からしてヤバそうなんだが
なんかそう言うアイドルとか出てきそうだな
囲まれたらなんつーか俺もめっちゃやむ

「毒が多めって聞くけど、まあ先輩も参加するだろうし聞いて見たほうがいいと思う」

「そうですか、それじゃあ2人ともこれでいいか？」

「うん、構わないよ」

「分かりました」

少々不安は残るがそれは初依頼ってこともあるし仕方ない

何より先輩が参加しているらしいしな、流石にこれ受ける方がよさそうだ

「依頼は今日からで片道１０時間か……体力勝負なところもあるな」

「体力には自信ないなあ……」

狛枝が不安そうにしている、うん魔法使い厳しいよな
つか俺も最近トレーニングしてなきゃ厳しそうだし

「ところで岡島クンこそ大丈夫なのかい？」

「何がだ？」

「いや……キミ逢いたいって言ってた愛しの富樫先輩にまだ会ってないんだろう？」

「愛しの……恋人いたんですか!?」

「やめてくれ、会ってはないが愛しではない」

あのゴツい体と出来てるって尻がヒュンとするのでやめてほしいです
いや、どんな人かすら分かってないけど

「と言うか姫柊、戦士コースだから富樫先輩知ってるよな」

「……まあ」

「知っていてあの反応は俺悲しみますよ！」

「……他者を理解しようとしまして」

「理解じゃなくて狛枝の愉快だそれ!!」

案の定狛枝は笑っているしやだもう

「まあ岡島クンもしかしたら依頼中出会えるかもしれないけどね」

「あぁ？なんでだ？」

「もしかしたら幸運が訪れるかもしれないよって話さ」

意味が分からんが、取り敢えず気にしないでおくとしよう

一先ずはそれより依頼の準備しなきゃマズイしな

「それじゃあ急いで毒対応の準備だけして向かうぞ！」

そうして俺達は遅れてはならんと急いで準備して依頼場所に向かった

不安は残るが、これも経験として頑張りますよアカネ先輩

わざわざそのために先輩がいる依頼を受けたし

――――――――――――――――――――――――――――――

「おうまた来たのか、今回は護衛だっつーのに人数多いな」

到着するや否やいきなり多いと言われた
慌てて確認するが確かに多い、あの人が依頼者だろうがそれ以外にも4人いる
いや……俺ら含めれば7人か、多いな

「募集人数が書かれてないし集まるんだろうな、人数は多いほうがいいって依頼主だし」

如何にも手慣れてそうな少年?が割り込んでくる
多分この人も先輩なのだろうなって思うけど

「ああ、自己紹介するべきだったか……まずは俺からするか3年のオルガ・イツカだ」

「自分は岡島キル夫です……て3年!?」

はじめに話しかけて来た人が自己紹介をする、と言うか先輩いるって聞いたが3年もいるのか俺の仕事あるんだろうか

「しかし、さっ3年生もいるんですね」

「ああ、まあでも俺は戦闘できねえけどなだから神官だし」

「神官!?」

明らかな武闘派に見えるんだが、神官なんだな
まあ殴って回復できる神官もいるって聞くしそう言うものか
と言うかまどか先輩といい純粋なヒーラーに見える人がいないどう言うことだ?

「俺も戦闘には混ざりたいんだがな」

「ダメだよオルガは」

そう否定する少年がオルガ先輩の後ろから現れる
オルガ先輩に比べればだいぶ若いし、どう言った関係なんだ?

「ミカ、お前の言いたいことも分かるけどな?あっコイツは同じく3年の三日月・オーガスだ戦士コースな!」

「よろしく……」

少し気だるそうに挨拶をする、しかし3年の戦士かまどか先輩が神官だったし、純粋な戦士の人は初めてか

「オルガは後ろでいつも通りしてくれればいいよ、その方がやりやすいし」

「それでもなあ……」

「何か違うんですか?」

「うん、オルガはどっちかと言うと指揮官」

指揮官……冒険者は手数が正義とも言えるから正直不要だとも思えるが……と言うかいると辛い可能性まであるし

「オルガが裏から指揮してくれるとやりやすいし、傷つけば回復してくれるから神官になった」

その後も聞くに指揮がだいぶ凄いらしいので期待しておく、神官が後ろにいるだけでも安心感すごいし

「ああ、あまり神官としては期待しないでくれ」

「なんで!?」

思わずツッコミが出た、いや出るでしょ

神官なのに神官として期待できないなんて

「そこまで得意じゃねーんだよ……割と脳髄の大量摂取で誤魔化したところもあるしよ

……」

「まあオルガ量が量だから、自分に自信なくてもそれほどには回復すると思うよ」

「分かりました……」

不安が残るがそれでも3年目の人間だ
期待はできるだろうと割り切っておく

「っと、じゃあそろそろ俺もいいかー？」

あっさっき割り込んで来た人だ
割り込んできたのに結局2人との会話待つんだなとしみじみ思った

「俺は2年の勇者コースのニケって言うんだ。よろしくな」

「はい、よろしくお願いしま……え？」

勇者コース!?なんだそれ始めて聞いたぞ
そんなコースまであるのか……知らなかった

「いや、ニケは盗賊コースのはずだぜ?」

「え……?」

盗賊コースの勇者って色々ってか一番最悪なんじゃ?
と言うか俺もう意味分からん、助けて

「いや、俺のやってるのは勇者行為だから盗賊じゃない」

「いや、ド盗賊だろ」

色々やらかしてるんですね、分かりました
しかしそれでも先輩だし極意とか学べそうだな

「まあ、盗賊スキルは高いけど俺は勇者だからなよろしく岡島」

「はい、よろしくお願いしますニケ先輩」

色々ヤバイ人だが話せるだけマシに感じる時点で俺は相当ヤバそうだ
ただ……慣れていくんだろうなあじきに……

「勇者スキルも教えて欲しかったら俺の元に来いよなー」

「ははは……都合がよければですかね」

よく考えたが勇者スキルって怖い
ただ話的には盗賊スキルに近い何かを手に入れられる気はするんだが……
まあわからないし保留だな

「後は……まあ多分先輩だろうけど」

残る1人、女性か……と言うか女性率低いな
俺ら来なきゃこの人だけだったじゃん
学園内結構女子多かったけどそうじゃないのかな

「えっと、今回の依頼一緒に受けることになった岡島キル夫ですよろしく」

「よろしく」

「……」

「……」

あれ？もしかして会話終わった？
いやいやいや……どうしよう？

「あっあの……」

「何か？」

「いえ……」

やべえ、口下手じゃないのにどうすっかなこれ
先輩方を見て学びたいから少しは交流したいんだが……

「……ん？」

よく見りゃ彼女珍しい武器してんな
学園ではほとんど見ない銃器か、しかも短銃なんてレベルじゃないゴツい奴
……え？あれ使えるの？

「と言うかスナイパーライフル……？」

「それがどうかしたの？」

「維持費とか一撃の割に金が割に合わないって」

そう聞いたことはある、まあ弾も一撃で威力必要なんだろうし普通の銃よりもかかるんだろうな

と言うか銃自体かかりそうか……

「だったら何？文句言いたいわけ？」

「いや、少なくとも俺はカッケーと思うしアリだと思うけど」

「はあ……？」

彼女は何を言い出しているのか分からないという感じで戸惑う表情を見せる

まあ俺も言い方が悪かったのはあるが、ライフル系って一撃が外すと怖いし高そうだってイメージは聞いてるし実際俺もそんな感覚がある

ただ見た目カッケーし一撃のロマンは男なら分かるしな

「一撃のロマン砲ってカッコよくね？」

「さっきまでの話はなんなのよ？」

「いや、俺じゃ１００％使いこなせねーからスゲーな憧れちゃうなあって」

「なんか凄いイラつく」

おだててるわけじゃないが、確かにそうなるのは分かる
と言うか急に上げたり下げたりされると多分困るし……何故か今やってるけど

「……一撃は火力はある分外すとリスクにしかならない、特に後方射撃型だから前衛に迷惑かけるけどそう言うところ分かってるの？」

「え？うん」

むしろ何を疑うんだ？外すとか外さないとか
外す奴なんてここじゃ生き残れないだろうし
何しろスナイパーライフル使う人が外すと思えんし

「……あなた、コースは？」

「盗賊コースっす！」

「ああ、やっぱり……」

何がやっぱりなんだ？そんな俺盗賊コースみたいな顔してる？
そんなニケ先輩程盗賊コースみたいな顔してないけど……もしかして俺の顔って泥棒系？

「自分が前張らないからそう簡単に言えるんでしょ」

「え？俺も盾とかはやる気だしなんなら戦士コース関連今回ので多少学べたらって思っ

てるけど」

「……」

言葉無くしちゃった、また俺バッドコミュニケーションだった？
最近やらかしまくってる気がしてきた

「……と言うか貴女も銃ってことはもしかして戦士コースですか？」

「戦士コース２年、シノン」

あれー？おかしいなー？女子がみんな戦士コースだぞー
と言うか魔術師が１年の狛枝だけってやばくね!?
魔法じゃどうにもならんかもしれない……
加えて神官も１人か……少しそう言う点では不安かもしれない

「……急に黙り込んで文句あったの？」

「いえ、戦士コース多いなと」

「そりゃ護衛任務は戦士向きでしょ」

「……」

そうじゃん、どっちかと言うと盗賊コースが護衛っておかしいよなあ
姫柊さーーーんそこんとこ言ってくれればよかったんじゃないっすかーーー？

「最初は寄生か何かって思ったけど」

「俺名乗っただけで!?」

「いや、念のため聞いたけど武器見て盗賊コースだと思ったし」

剣ならまだしもそういやナイフだわ俺

少しはククリなだけマシかもしれんが、それでも戦士の武器じゃないわ奥様

「ごめんなさい」

「いえ……別に寄生じゃないって分かったから」

と言うかニケ先輩も盗賊コースだったような

……あれー？

「盗賊コースもう1人いた気が……」

「ニケはいつも通り楽できるからだと思う」

「……」

ニケ先輩ーーーーーー!?

ちょっとニケ先輩ーーーーーーーーー!?

「ただまあ口は上手いから報酬交渉とかはいつもやってるけど」

「そっそうなんですか」

「でも戦闘では役に立たない」

「……」

護衛任務に盗賊が来ることの嫌悪は凄いわかりました
正直すみませんシノン先輩

「他の先輩方には何も言われなかったんですが……」

「それはオルガ先輩だからでしょ、あの人他人をそうそう嫌わないし仲良くしたがってるもの」

なんとなく言ったことが分かる気がする
あの人にはそう言ったカリスマがある気がした
オーラとかは見えないし分からないけど

「頑張りますので許してくださいシノン先輩……」

寄生と思われないようにしっかりやること果たさなきゃじゃないと俺干される

「シノンでいい」

「いや、でも先輩では」

「先輩後輩とかかたっ苦しいの嫌いなのそれよりみ一緒に依頼を受ける仲間だし、ただそう言ったけど出来れば交流自体も好きじゃないけど」

もしかして最初寄生目的に見えた以外にも話すの嫌だったんじゃ……

「えっと、無理やり話してしまったようですまん」

「別にいい」

その言葉を最後に銃を担ぎ出す
慌てて周りを確認するともうそろそろ出発のようだ、俺も準備するものはないが心構えだけ切り替えなくては

「それじゃあ、依頼始まるぜ鉄華団として恥はかけねえ」

「鉄華団？」

「俺達の事だ！」

俺達？入った記憶ないんだけど

「オルガはいつもこうだから、そしてまあオルガの指揮に従うだろうからまあ我慢して」

「はっはあ……」

鉄華団がよく分からんが一番の先輩だし従うことにする
何故か狛枝はネーミングセンスに目を輝かせてるが気に入ったのか？

「凄いワクワクするね、これから何が起こるんだろうって」

「何も起きず平穏を望むがな……」

幸運不運言ってるし正直何も起きないで欲しい
と言うかさっき言ってた幸運も結局意味が無かったし

「それじゃあ総勢７名、護衛に入るからよろしくな依頼主さん」

「いや、すまねーが８人だ」

その言葉に俺も振り向く
ってちょっと待て、あの姿って

「富樫先輩？」

「ん？俺のこと知っているのか？」

まどか先輩に言われて富樫先輩を探したけど結局あの後見つからなかった
もしかして妄想の産物だったんじゃ？とまで考えていたんだがまさか依頼で会うと思わなかった

「富樫か、久しぶりだな」

「オルガ先輩ですか、押忍」

そう言ってグループの中に混じって行く

やっぱり妄想の産物じゃなくてそれなりに顔が知れているらしい

「でもオルガ、このｐｔ戦士が半分なんだけど」

「魔術師いるだけマシだろ」

ちょっと！そこの狛枝１年ですよ!?

期待したいけど３年が１年の魔術師期待ってマズくね？まあ俺も応援するしかないか

「ところでアンタ」

「はっはい、１年の岡島キル夫です！」

「知らねーが、まあ何処かで知ったんだろ」

「お願いがありまして」

居ても立っても居られず俺は急にぶっこむ

「まあ……依頼始めてからだな、このままじゃ依頼主に怒られる」

「ソウデスネ」

富樫先輩の急なエントリーで依頼主待たされたしここで俺が止めたし、少し機嫌悪そうだ
正直すまないとしか言いようがない

「……それじゃあ改めて8人で出発するぜ」

オルガ先輩の号令に続き各自歩み出す
これから初の依頼で緊張している
富樫先輩がいるから尚のことかもしれない
ただ1つ思うことがある

狛枝が幸運だから逢えるかも知れないって言った

「狛枝……アイツなにもんだよ」

狛枝の言う幸運という言葉に少々の不安が俺に残った

――――――――――――――――――

道中コミュ　１ｄ６：２　三日月・オーガス

村にはまだ着かないものの敵が襲って来るのを斬り払いながら進む

勿論ここらの敵は先輩達もいるし苦労がない

と言うか先輩達の戦い方凄すぎて参考にならないんだが……

ただ色々教わらなきゃいけないだろうし

「お疲れ様です、三日月先輩」

「んっお疲れ」

特に三日月先輩は3年生の戦士コースだ
強さは間違いなくこの中では一番だろう
勿論それは見て分かる、恐ろしいほどのスピードと力で敵を屠っている

「俺……装甲抜ける気しないんですが」

「慣れと経験でしょ」

俺は武器があくまでククリで剣とかには劣ってるのもあるかもしれないが、敵の装甲が割れないケースもしばしばあった
ただ暫く練習したし大きさもよくこの武器が馴染みやすいため今更変える気もないが

「ただ、そっちに硬いのは行ってないと思うけど」

「ええ、おかげさまで」

三日月先輩は硬かったり強敵は担当している
シノンは流石に銃弾じゃ装甲抜けないとかあるし
富樫先輩もそうかなあと思ったらあの人は何故かぶっ壊してるけど……あの人もやべえ
俺は俺で戦いやすい相手が回ってきて初の依頼でも結構立ち回れている

「それは、オルガが指揮してるから」

「凄いですね本当に……」

護衛依頼が始まってからオルガ先輩は一切武器を持つことなく後ろに下がって指揮や回復に徹している
特に敵の配分や察知も何故かニケ先輩より優れていて、全員が戦いやすい場面作りをしてくれている

「確かにオルガ先輩に何かあると戦線が崩れそうだ……」

本来なら、そうならないようにとか各自で動けるようにするべきなのだが
あまりにも的確で自分の護衛も忘れず回すし
何があっても鉄壁状態なので安心して指揮通りに動けるのもある

「大丈夫、オルガは殺させないから」

「三日月先輩がいるならそうでしょうね」

うっかりすら起こりえないが、万が一起こってもこの先輩いるし本当に大丈夫なんだろうな
しかしなんというか

「ここまで信頼でき合うのも相当凄いんですけどね……」

「まあ、オルガの言うこと聞けばいいだけだし」

いや、実際そのまま聞いていれるのが凄いんですって
特に命懸けの仕事ならなおさら

「いや、俺でも出来るかって不安でしてね先輩の指示だから従わないとまずい的な考えであって」

「ふーん……」

興味なさそうと思いきやこちらの顔を覗き込んでくる
一体どうしたんだ……？

「とてもそうは思えないけど」

「え……？」

「アンタにも信用できそうな奴がいそうって話」

信用できる人か……
真っ先にアカネ先輩が浮かんだがあの人信用していいのか……？
いやまあ……うん、誤魔化したい気持ちはあるが

「信用してますね」

アカネ先輩は俺にとって信用足り得る存在であることは間違いない
と言うより、裏切られてもそれはそれで構わないから信じているものはあるが

「冒険者って自分の命が優先みたいな考えしてるのかもしれないけどさ、そうじゃないんだよ」

「はい」

確かに俺も自分の命が最優先なワケではないしな
他の冒険者も色々な事情はあるけど、自己責任と言う言葉が付き纏う以上結局自分優

先なのかなとは

「……まあ冒険者になるのはまだ3年あるから焦らなくていいだろうけど」

「まあ……絶対パンクしますんで……」

順位とかそう言うもの考えたら絶対俺はパンクするしやめておこう

「タメになったならいいけど、敵集まって来たよ」

「え?」

一瞬反応に遅れたもののすぐに構えて戦闘の準備をする、休憩は終わりだ

大したことない敵ですぐに切り飛ばしたが

「あと3年……」

入ったばっかの俺はまだ3年猶予があるとはいえたったそれだけだ
それまでに色々考えないとな……
村へと進む馬車の中で少しだけ考えて、今は考えるのをやめた

続

第8話②

―――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ：オート　富樫源次

「ケンカ殺法を教えて欲しい？」

「はい、出来ればですが」

今回の依頼でまさか一緒になるとは思ってなかったがなったなら色々と彼に聞いておきたい

「正直……何故か分からんが……」

「まどか先輩に、俺のスタイルは富樫先輩のケンカ殺法があってると言われたんで」

「まどか先輩にのぅ……」

帽子を被りなおしうーむと考える
やはり自分独自の技術を教えるとなると躊躇うものなのだろう

「……まどか先輩神官コースじゃなかったか？」

「そうですが」

「確かに優秀だが、鵜呑みにし過ぎんようにな？」

確かに餅は餅屋と言う言葉はあるがそれでも見てもらって彼女は彼女なりに考えて出してくれたんだろう
そこにふざけなどは感じなかったし信じたかった

「ただ、自分に合ってるかもしれないと言われた以上は試してみたいですし」

「それもそうか」

嫌がられるかと思っていたが、どうもそうではないらしい
それならありがたいが一体……

「一つだけ言っておくが、ケンカ殺法は文字通り喧嘩の延長線みたいなものだぞ？モンスターとの戦いに向いてるとは思えん」

「でも富樫先輩はそれでも成果出してますよね？」

「まあ……それはそうじゃが……」

しかもククリみたいな武器ではなく、ドスを使っているらしいし凄まじい
通常であればそんなの敵に何も出来ずに終わりと考えるが、先程までの戦闘を見ていてもそうは思えない
と言うか装甲なんざ気にしないレベルだったしな

「弟子にしろとまでは図々しく言いませんので、多少教えていただければ」

「いや、それはならん」

「そうですか……」

ダメか、仕方ないのは仕方ない

さっきまではいけそうに思ったが、やっぱ決めつけは良くないな

「待て待て、そう言う意味ではない」

「ん？」

「半端では終わらせん、教えるなら教えきる」

そう言うことだったか、ならよかっ……

「だが、認められないと思ったら諦めてもらう」

「……どう判断するんです？」

「今回の依頼で判断させてもらうかのぅ」

実際一番それが分かりやすいか、俺も自分の実力をどれだけ見せられるかにかかっている

ただ……無理は禁物だが……

「生憎俺は弟子など取ったことないからのぅ……最初の弟子がダメダメでしたとか言ったら立ち直れんのでな」

「……はぁ」

意外と繊細なんですね

なんて言うかギャップ萌えは……全くしないけど

「まあダメと言っても勝手に見よう見まねは止めんから、また戦士コース来るのだろうしその時来りゃいい」

「分かりました」

「それじゃ……そろそろまた敵が湧いて来たか、三日月先輩に怒られんようにしないとな」

そう言って富樫先輩はドスを構える、そうして突っ込んで行って敵にぶっ刺した

「予想以上に多いな」

囲まれている敵を払うが、敵の中心地まで突っ込んで行った富樫先輩が気がかりだが……

「見さらせ、これが富樫源次のケンカ殺法真骨頂じゃ」

叫びながら敵を次々に倒して行ってる……
ドスで出来るんだなあんなこと……
すげーな本当に、あれが目標か……

「流石に暫くはかかるだろうが本当に目標だな……」

本当にあそこまで出来るのか不安に思いつつも決して低くはない目標として決めて
少し見よう見まねで敵と戦った
無論、刺殺できないため結構変わったが……

――

「もうすぐ病み村に着くぜ、各々気をつけろよ」

オルガ先輩の言葉を聞き慌てて耐毒用のアイテムを準備する

何処で必要かまでは分からないが、流石に急にやられたらまずいしな

「ん？お前達確か１年だよな？」

「そうですが、それが何か……？」

「いや、よく耐毒用の準備してたってな！俺達の頃はしてなかったし」

「えぇ……」

流石にそれは不味くないか？命は一つしかないわけだし

「いや、そん時は先輩達が余計に持ってきてくれたから助かってよ」

「よかったですね……」

普通ならぶん殴られて説教されるレベルな気はしたが……依頼に支障が出るし

「まあ初の病み村で準備不足が祟ったわけだが……ってことで俺達も余計にアイテム揃えたわけだが……」

「俺達は全員持ってますね……」

「そうか……」

良いところを見せたかったんだろうけどガックリするのはなんか違くありません!?
いやまあ逆ギレされるよりはマシでしょうけど

「オルガ、もうすぐ」

「ああ、本当だな」

村と呼ばれた方を見る、既にもう村としての機能をなしていない
廃村どころか、死んだ土地に見える

「村を覆うように瘴気が溢れている、村の近くでは生物が死ぬため出て来にくいが……村内にはこの瘴気に適したヤバい奴らが出てくる」

「それじゃあ、気を付けないといけないね……」

狛枝もいつもの様なお気楽とは違う真面目な顔をしている

そんな顔できたのかって思ったが、こっから先は危険だろうしな

「なあキル夫でも一番危険なのは俺達だぜ？」

「え？どう言うことですかニケ先輩？」

「そのまんまの意味だよ、盗賊は罠察知や奇襲に備えたり挙げ句の果てには斥候とか忙しいんだ」

「うへぇ……」

やはり忙しいのか……ただ仕方ねえか……
盗賊コース楽じゃないじゃないですかシノン先輩……まあ分かってたけど
今後もお前盗賊コースじゃん!!なことだらけだろうし初回に先輩がいるだけマシに思おう

「ってことで潜ってくぞキル夫」

「わっ分かりました」

ニケ先輩に言われるまま俺達は病み村の中に潜っていく
普通の生活ではないような違和感がそこに広がっていた

「毒沼……」

一面毒沼だらけの村を見て気分が悪くなってくる
幸い毒にはならないが、流石にこれは気が滅入る

「慣れろよ、斥候は見たくないものばかり見ることになる」

「病み村避けて通れないんすかね……」

ただでさえ毒がやばいし、何より敵がさっきから異様な奴らを見る
流石に盗賊２で戦うのは辛いものもあるし避けたが
だが戦士の人間がいても護衛しながらは厳しいんじゃないかと思う

「いや、無理だぜ依頼主だって通りたくねえなら通らねえよ」

「ですよねえ……」

流石に恐怖はあるが、ここを進むしかない
それなら一層斥候としての役目を果たさないとまずいか

「……なんだ？」

誰か倒れてんのかこれ?こんなところで倒れてるとか大丈夫なのかマジで

「おーい、アンタ大丈夫か?」

倒れている人を揺するが反応はない
こりゃ残念ながら仏さんなんだろうな
冒険者は死ぬって言うのを改めて実感する

「どうしたキル夫?」

「あっニケ先輩……死体が」

「おー、よく見つけた」

ニケ先輩が寄って来る
確かにそうだ、埋葬してあげれるならいいが

知らない人であることは間違いないが……

「おっと色々といいもん持ってるじゃん」

「ニケ先輩……？」

ニケ先輩が遺体を漁り始めた

手慣れた雰囲気でめぼしい物を探している様だが……

「ちょっちょっと何してるんですか……!!」

「あーキル夫なー……」

顔を見ても悪いことをしているって様には見えない

「慣れろ、これが冒険者だ」

「……」

そりゃそうなんだろうな……
冒険者は依頼金だけじゃなくて死んだ冒険者の？ぎとりをして金も稼ぐ
アカネ先輩も最初俺を剥ぎ取りしようと思ってたしな

「しかし……ただ剥ぎ取りしていいんですか？」

こう言う時ってせめて山分けになるんじゃ？
俺達だけで盗るのはマズイのでは？

「あーそれは盗賊の特権だ、流石に全部盗ってっちゃマズイから1品だけな」

「本当にいいんですか……？」

「俺達は最前線で命張ってんだ、これくらい許されるべきだぜ特に盗賊って単独で命賭けるケース多いしな」

「それはそうですが……」

罪悪感は元の稼業な以上ないし、罰当たりなんざ知らねえって話ではあると言うかニケ先輩も流石に剥ぎ取りの時は盗賊なんだ……いやどう見てもあの人泥棒が服着てる様な人だけど

ただ勝手にとって先輩が怖くないか？って感じの小心者なんだよ俺は

「まっ持っていけ、俺も貰うもん決めたし」

「許されるんですかね？本当に」

「ダメに決まってんだろ」

「ちょっと!!!」

ほらダメじゃん！なにさせようとしてんすかせんぱいいいいいいいいい

「普段はな、今回は大丈夫なケースだ」

「意味分かりませんが……」

「簡単に言うと今回はオルガ先輩達に斥候を言い渡されたからその分の報酬金なんだよ」

「なるほど……」

正直納得していいのか分からないが、ダメなら一度怒られようとする考えで拝借させていただくことにした

お宝みたいには目に見えているものでワクワクには欠けたが、それでも宝物のような物を手に入れることが嬉しかった

「いただいていきます……」

俺は遺体からナイフを貰った
無論、今使っているククリに比べて劣るものだ
しかし金目の物よりもナイフの方がどうにかなる気がしたからだ

「決まったか？なら帰るぞ」

「え？でも探索は……？」

「お前が悩んでるうちに抜ける道まで見終わってるよ」

流石は先輩、怪しい人ではあるが優秀ではあるんだな……

「折原先輩とかいればマッピングもっと楽だったんだけどな」

「やっぱ先輩はもっと優秀と」

「ああ、３年の先輩達はすげーぜ？２年にも凄いのいるけどよ」

「そうなんですか」

「まっ練習あるのみってね、んじゃ行くか」

そうしてニケ先輩に続く様に帰っていった

今なんともなかったし、このまま無事に抜けれりゃいいが……不安が残るな

――――――――――――――――――――――――――――――

「ひとまずは大丈夫そうだった、急いで抜けようぜ」

「おう助かるぜニケ」

オルガ先輩達に報告して病み村に入る準備をする、今度は戦闘も護衛もするし気を引き締めなきゃならねえ

姫柊も病み村は強さが変わるって言われてから緊張しているが集中してるみたいだ

「あまり気張りすぎんのはよくないぜ」

「分かってはいますが……」

それでも緊張するのは分かる

俺も今日はまだしも学園内で緊張しっぱなしだったケース多かったし

「先輩達がいるんだから、落ち着いてやってきゃ楽な仕事だろ」

「そうですね、ありがとうございます」

「気にすんなって言うこと言っただけだしよ」

「それだけではありません」

ん？他になんかあったか？

「一緒に依頼を受けてくれたことですね、1人じゃ不安だったので」

「あーそれか、俺も受けたかったし問題ねえ」

「それでもですよ、知り合いがいる安心感もまた違ったので」

「んじゃ、互いにこっからの貢献で返すってことで」

「そうですね」

互いに意気込みあい集中して村に入る
先ほど以上に注意を張り巡らせながら
張り巡らせ……

「オルガ先輩、あれなんでしょうか？」

「あーニケの技だ」

そう言われてニケ先輩の方を見る
先程から空高く上がっている
カッコいいポーズと言ったまま空中で硬直している

「あれはカッコいいポーズって言ってな、魔物を引き寄せるんだ」

「はあ……」

正直理解が追いついていない
そりゃそんな話聞いてなかったしな

「魔物はアレに見惚れるからその間にアンブッシュ出来るんだ」

「アレに……？」

そう言いながらニケの方を見上げる
ポーズをとって浮かんでいる

「カッコいいな……」

「おいキル夫しっかりしろ！」

「はっすみません……」

しっかりと俺も見惚れてしまっていた、危ない危ない

「盗賊だし前線から下がればいいけど……戦士は見惚れてないでね」

「申し訳ない、三日月先輩達は見惚れてなかったのに」

確かに戦士達が見惚れたらそれだけ隙が出来て仲間に危険が及ぶ
いや盗賊である俺もダメなんだけどな……気をつけねえと

「あの……盗賊コースってことはアレキル夫さんも覚えるんですか？」

「ちょっと姫柊が何を言ってるか分からない」

アレを俺が覚える？カッコいいポーズを？
そりゃ確かにカッコいいけど……

「別に盗賊コースの科目じゃねえって言ってたぜ」

「ですよねえ……」

良かった、俺にゃ自信無いし何より恥ずかしいわあれ
と言うかなんで姫柊残念そうな顔してるん？？？俺辱めたいの？

「まあ覚えたきゃニケにでも聞きゃいいだろ」

「いやーちょっと……」

戦闘と会話を重ねつつ、ついに遺体の前に着いたが……
勝手に持ってったの本当に大丈夫なのか？

「まあ遺体はこれだけでしたねー」

まあニケ先輩の言う様にこれだけで良かったは良かったが
遺体だらけだと流石に気分悪くなるし

「おう、仏さんにゃ悪いがアイテム今さら使えねえだろうし役に立たせて貰うぜ」

一礼だけして装備やアイテムを外して行く
ロクな装備は持っていないらしいがそれでも1人1月分になるらしい

「これで1月分になるのか……」

働くってなんだろうなって思う
そうしてナイフの値段……高かったらどうしようと罪悪感も湧く

「おっしんじゃ、出口に向かって行くぜ」

「あのオルガ先輩……」

「ん？キル夫どうしたよ？」

緊張して声が大きく出ない
まあやらかしたことだしな……ニケ先輩は大丈夫言っていたが……なら一応聞いておくべきだ

「あー、ニケとシノンもういっちょ先見て来てくれねえか？」

「人使い荒いなーもう」

文句を言いつつニケは奥へと進んで行く
シノンも無言で従っている

「あの、んじゃ俺も」

「あーキル夫こっから先は流石に新人は危ねえから任せておけ」

ニケ先輩にそう告げられ待っていることにした

「それに、俺に用があんだろ?」

オルガ先輩は荷車に座る
依頼主も結構疲れが溜まっていた様で一気に駆け抜けたそうにしていたが、休むことを受け入れてくれた

「まっ座れ」

「はい」

オルガ先輩に言われて隣に座るが……色々な意味で圧を感じる

「んで？用件はなんだ？」

「あの……これなんですが」

ナイフを見せる、見れば見るほど病み村にあった様に思えない程高価なものに見えて来た

「あー？……まあ結構いい感じなんじゃねえの？俺はナイフ使わねえが」

オルガ先輩は褒めてくれる、違うそうじゃない

「いや、あらかじめニケ先輩達と漁って貰ったものなんです……」

「あー……」

オルガ先輩は理解した様な顔をし
そうしてすぐ怖い顔をする

「で？盗ったってワケか」

「すみませんんんん」

俺は速攻で謝ったためっちゃ謝った
そりゃもうやらかしたんだし凄い謝った

「あー……」

これから俺どうなるんだろうか
不安しかないが……まあ仕方ねえな……

「別に構いやしねーよ俺は」

「え……？」

さっきまでの反応と一変した態度に俺は驚いた
さっきまでぶん殴られそうだったのに

「俺達はお前らに斥候を頼んだしその報酬みたいなもんだ、ニケも言ってたろ？」

「はい……言ってました」

「ただそれが通用しねえ相手もいる、俺がキレたのはそう言うやつらもいるから必ずこれが正しいわけじゃないからだ」

そりゃそうだろうな、俺だって今回不安だったし実際持ってかれて困るやついるだろうよ

「ニケは俺がそう言う態度なの知ってるからやったんだろうけど……ちゃんと言っておけよな」

「本当に……胸が裂けて死にそうになったんですから……」

「悪かったなキル夫」

「いえ……色々と勉強になってるので」

実際にタメになる話を始めこう言ったことも覚えていかなきゃならないし助かっている

特に先輩とかとはいざこざ起こしたくないし

「まあお前は面白いやつだしもっと面倒見てやりてえが、少なくとも病み村出てからな？」

「それはまあ……ここでのんびりしてるわけにもいかないですし」

「喋ってるのによくそんなこと言えるな……」

大胆なのか、ネタなのかと言葉を繋げてオルガ先輩は言う、確かに話してる場合じゃなかったかもな

ただまあこっから先の斥候はまだ危なすぎるとニケ先輩に言われた以上は待つしかないし

出口までは少し離れている、依頼主も休憩が終わりそろそろ向かいたいところだったが

「……悪いけどそうはいかないみたい」

シノン先輩が深刻そうに告げる

誰ですかー？フラグ建てたの怒らないから出て来なさーい

「……平和がよかったなー」

悲しみからつい溢れる
ただ仕方ないだろおおお

「何があった？」

「奴がいた」

「マジか……避けたかったんだがな」

「奴って……？」

正直名前なんて聞きたくないが、そうも言ってられないだろう

「人喰いミルドレッド、この病み村に住む亡霊みたいなもんだ」

「人喰い……」

その単語を聞いただけでゾクッとした、正直身の危険しか感じてない
死にたくないしどうすればいいのかってレベルだが

「沼地の中だろうな？」

「一応スコープでギリギリ見える距離だったし間に合うと思う」

「了解、ミカ急いで抜けんぞ」

オルガ先輩の指示のもと病み村を急いで抜けることを決めた
普通に距離があるし間に合う
フラグじゃないぞ……フラグなわけないだろ
……!?

「最後まで油断すんな、何があるか分かったもんじゃねえ!!」

そうだ、ここで転ぶわけにはいかないと石につまづかない様に気をつけて……

ん……？狛枝の様子がおかしい

「おい、狛枝どうした？」

「いや……おかしいんだ」

「何が？」

「人喰いミルドレッドが出たのはボクの不運が原因だと思ってる」

「よく分からんが」

狛枝の不運が原因ですって言い出す奴はいないと思う
そして何が言いたいのか分からない

「幸運が最初に訪れたって言ったよね」

「ああ言ったな」

「それで不運が」

「訪れたならおかしくないだろ」

バランス理論の男かお前は？そうじゃないと思うがバランス取れて満足だろ

「出会いすらしないのに本当に不運なのかなって」

「おい……やめろよ」

すごく怖くなって来たんだが
でも最後の姫柊もここに来るし大丈夫だろ

「おい、姫柊なんか狛枝がうるさいから念のため気をつけておけ」

「元より気をつけていますが……」

カチリと音がする
1d2　狛枝凪斗　姫柊雪菜　結果…2

「は？」

ニケ先輩、探ったんじゃ？
罠？なんで嫌な予感が
慌てて姫柊の方に手を伸ばした
落とし穴とかだとマズイと
姫柊も踏んだ直後慌てた様に俺が出した手を掴む
しかし罠はもっとタチが悪かった

「おい、気をつけろそいつは突風だ」

オルガ先輩が言うも遅い、俺達は吹き飛ばされた

不幸にも狛枝が言った様に毒の沼地の方へ

「おいニケ」

「全部探った、見落としはない……つまり新しく出来たばかりの罠だ」

「クソ……そんな不幸あるのかよ」

「ボクのせいだ……ボクが不幸になればよかったのに……！」

「ふざけたこと言ってないで行くぞ、ニケとシノンは依頼主を送り届けろ。もう村もだいぶ抜けたし大丈夫だろ」

「２人にそう告げ、残りのメンバーは毒の沼地の方へ向かう」

だが飛ばされた場所へは遠く、生きることを祈りながら向かうしかない

「勝手に死ぬんじゃねえぞ……」

大切な仲間を死なせない様に駆けながら

一方のキル夫達は……

「人喰いミルドレッド……これがか」

「私のせいで」

「そんなこと言ってる場合じゃねえ逃げるぞ」

今は絶対に俺達じゃ勝てない、それを悟っていただから逃げるしかない
合流出来れば少なくともどうにかなる
精々取れる行動は逃げるか時間を稼ぐか、行動を封じるくらいだろう

「死ねるかっての……」

絶望を前に、それでの生きようと頭を振り絞りこの化け物へと挑む

ＢＯＳＳ：人喰いミルドレッド

クリア条件：オルガ・イツカ達と合流する

―――――――――――――――――――――

続

第8話③

――――――――――――――――――――――――――――――

「さて……どうする……」

敵を見る……人間に見えなくもないが明らかに異質な奴だ
何より武器がやべえ……戦士コースでもあそこまでゴツい武器持ってる人見たことねえや……

「姫柊、大丈夫か？」

「……すみません、足が」

「そうか……」

事態はかなり絶望的だ、吹っ飛ばされて足が無事とも思わなかったのもあるが……
結果的にだが富樫先輩にまだ教わってなくてよかったと思う
多少毛が生えた程度では勝てるわけばいが、時間稼ぎに挑む可能性あったし
トーシロだからこそ逃げることに頭を全部回せる

「わりーが背負える程余裕はねえ……走りゃしねえが多少無理してでも歩いてもらうぜ」

「戦うのは無理ですが走るくらい……っ」

「やめとけって」

無理に走ろうとするのを制する、敵もこちらににじり寄って来てるし急ぎたいのは分かるが……それで逃げられなくなるのが一番マズイ
何より毒の中は足場が悪く、下手に足を取られる……そのため非常に走りづらい

「来んじゃねーあっちいけしっしっ」

勿論聞いてくれるはずもなくこちらへと向かってくる
そうして一撃が振り下ろされた

「おまっ……まじか」

弾くことも考えたが、近くに姫柊がいたために避けた……が……
避けなきゃこれ武器ごと俺死んでた気がするわ
武器の差もあるかもだが腕力が化け物だ

「やになるなあもう」

抗毒剤を飲んで少し離れる
沼地の中のせいで飲んでないと体力の減りが激しいのもやってられない、安地でいたいのに

「治療道具もまあ必要だったがね……」

今更後悔しても遅いが、今度からは気をつけよう
それよりも今は目の前だし

「距離を取れば取るほどオルガ先輩達とは離れる」

勿論それはマズい、ゆっくり下がって徐々に距離をと言ってもそれまで耐毒剤が間に合いそうにない
決断することが必要な場面はある

「ただまあアレなんだが」

目の前のを見て直進したがる奴はいないだろうなあ
殺気立ってるのもある、先輩急いでくれー

「一斉にかかればまだどうにかなるかもしれません……なのに本当にこんな時に何も出来ないなんて」

「自分を責めるなっての」

軽く石ころを投げて敵を牽制してみるが避けすらせず軽く盾で弾かれる
ダメージにはならないのを理解できるがもっと隙見せてくれりゃいいものを
一向に諦めすらしないし本当に面倒くせえ

「っと……んで攻めてくるんだもんな……嫌になるわ」

敵がすかさず攻撃してくるが、大振りだからまだ避けれる
避けれるが……防げないので全力で避ける必要があるのが体力を奪う

「毒が持つ持たないどころか体力が持つかどうかかもなこりゃ」

足場もそこまで良くないし毒の中から抜け出したいが距離がありすぎる

「アイテムはっと……」

振り下ろすタイミングを見計らいバッグを漁る
多少は使えそうなアイテムがあるが……

「閃光玉……被ってるし効かねえよな」

明らかなずた袋、目の場所があるし完全に効かないわけでは無いだろうけど、効いてるか分からないのが怖い
これで効いたふりされたら俺ら全滅するわけだし

「ただ実質選択肢はねえんだけどよ」

使わなければ進展はない、このままだとそうとしか思えない

「敵が突っ込んでくる、今だ！」

運が悪いと思ってばかりだったが運良く効いた

ただ面倒なことに武器を振り回してやがる

「仕方ねえ後ろだ」

俺の言葉に反応して後ろの方にある瓦礫群の中に隠れる
マジで一時的な時間稼ぎにしかならないかもだが休めるだけマシだ

「すみません、面倒なことに」

「仕方ねえっつーの今はそうじゃねえだろ」

閃光玉ですら時間を稼ぐのは不可能だった
それすらも使い切った以上は厳しいか？

「進むも地獄、前も地獄か……」

目眩ましが終わったのだろう、アイツが動き始めた

俺らを探し始めてそこらの障害物壊し始めやがった

「遠くに行っといたから時間稼ぎにはなるかもだが……」

「最悪は囮でしょうか……」

「そりゃ悪手でしかないだろ」

犠牲は選択肢にない、当然だし知り合った姫柊を犠牲にするのも嫌だしな

「あの……キル夫さん」

「なんだ？」

「回復系の魔法って使えませんか？」

「……」

回復魔法な……無理だわ無理に決まってるだろうよ
だって聖気すら神様許してくれないもん

「俺は神官適性ねえんだ……神に見捨てられた身でよ……」

「……なんかすみません」

「……いや、いいんだ」

回復魔法が使えりゃ姫柊も戦えたかもしれねーが流石に出来ないもんは出来ないポーションはあるがダメージ回復なら出来るが捻挫の治療は無理だろうなあ……他にあるもんは……

「さっき貰ったナイフか……」

「なんか特別な物ですか？」

「多分、普通のナイフだな」

武器はそこまで見てないが流石にこれは違うと思う……何もない気がする
手詰まりか……？

「……」

俺の顔を見たのか姫柊が口を閉ざす
わざとではないが流石に申し訳ない

「おい姫柊、何してる」

「私がやって来ますよ」

姫柊は刀を構える、万全でも無理だろうに今のままじゃ無理だろう

「やめとけっての」

「どうしようもないじゃないですか……」

諦めかけるのは分かるが諦めるわけにもいかねえし
自分の責任だって追い詰めてるのもまずい

「……おい姫柊、アンタ何歳だ？」

「はい？」

「何歳だ？」

「１５ですが……」

「……よし！」

正直自分もよしって何故言ったがわからないが

「俺のが先輩だから言う事聞け」

「は？」

我ながら酷い言い分だった

でもこれしか言いようがなかった

「何させる気ですか？」

そう言って姫柊はスッと離れる、おいちょっと待ってくれ

「じーっ」

「何故こうなるんだ……」

「第一先輩って言ったって同じじゃないですか」

「いや年齢俺のが上だし……」

Q．歳下と同じ学年で恥ずかしくないんですか？

A．うん

「……そうやって騙されませんよ」

「いや……つーか今までもしかして猫被ってた？」

無論、んなこと言ってる場面ではないが俺にだって名誉はあるんだ……

「っつつ……」

「ほらあまり興奮しすぎるなっての」

「すみません……」

敵もだいぶ近くで瓦礫を荒らしている
もうそろそろ余裕はない

「分かりましたよ、信じますよ先輩」

「……ああ」

どうしよう、何も浮かんでないんだけど
命託しますみたいな顔された
どうすりゃいいんだ

「……」

持ち物を再確認する
薬やナイフ、基本セットとか後はククリナイフ

「……完全に博打だが」

一つ浮かんだものがある
無論ハイリスクだが……賭けてみるか
お互いが生き残る為に

「悪いな、命賭けてもらうぜお前も俺も」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「よお、正面から会いたくなかったぜ」

ミルドレッドの正面に立つ、帰っちゃダメか？
姫柊は戦える状態じゃないが無理してもらってる
時間さえ稼げればいい、だがそのために無理をしてもらってしのびない

「（ただあのままじゃ間違いなく姫柊死ににに行ったしな……）」

仕方ないけど問題だし後で謝るか
敵も振り上げて来る、まずあれが痛みで避けれなきゃマズいんだが

「危ない」

痛みはありそうだが難なく避けてくれた
安堵してる場合じゃない、拾ったナイフを持って切りかかる

「当たりやがれ」

掠りすらすりゃいいが避けるのかよ……
アイツ包丁持ってるし素早く見えないんだけどな

「姫柊大丈夫か？」

「大丈夫です」

無茶はすんなと言いたいが、正直その無茶が必要な以上仕方ねえ
せめて元気なうちに決めておきたい

「っと」

油断するとこちらに攻撃が飛んで来る
避けるしか選択肢が取れないのが辛いが……
あれ当たると腕が吹っ飛ぶですめばいい方だと思う

「辛いなやっぱり」

流石にどうもこうも出来ない、今更退けるわけでもない……っつーか最初からではあるが一振り二振りしてもう姫柊が限界だしな
そう悩む一瞬の隙をついて姫柊の方に……先程よりも大きく腕を上げている……ありゃまずい

「危ねぇ思い切り下がれ！」

「いえっ!?前です前!!」

気遣い過ぎたのが原因か奴が方向を変えてるのを気付くのが遅れた

野郎……んなことまで出来るのかよ……

「腕一本くらいくれてやらあ」

先程までと違ってもう避ける余裕はねえしんならはなっから捨てて決めに行く

腕一本なんざ言ったがよくて腕一本だ……死ぬ可能性もあんのかねえ

アカネ先輩に黙って死ぬなんざしたくねえけど

「うらあああああああ」

ただただ叫ぶ、死にたくないも何も分からない、何も考えずに叫んでナイフを突き刺

そうとする
ただ……力虚しく一瞬でナイフは砕けた
ただ、予想外だったのはそのナイフは使い続けられたようで考えていた以上に脆かった
「届かなかったか」
自分が考えていた以上に武器が早く壊れて包丁はギリギリ俺の手前を切る
当たると確信していた相手も外したようで床を思い切り打つ
「隙が出来た姫柊！」
「はいっ……後1回！」
俺も姫柊も残る気力を持って切りかかる
床にぶっ刺さっていたのにすぐに抜き包丁でガードに入る

「間に合うのかよ……」

出来りゃあ一太刀浴びせたかったのにそうはいかなかった
ただ……目的は果たせた……

「!?」

包丁が破壊されミルドレッドは焦っている
そりゃ驚くだろうな、まさか自分の武器が破壊なんざされるとは思ってねえだろうしよ

「これで包丁は無くなった、やべえ一撃はこねえ」

一安堵つけるわけではないが、少しはマシになったリーチは短くなったしな
このまま逃げれりゃいいが
油断せずに足を狙ってククリを振るうが

「ガッ……」

それよりも早く思い切りぶん殴られる、そりゃあの包丁持ってるし力やばいな
足に当てたはずの武器もダメージが入ったように思えない
武器だけじゃなくてここまで装甲があったのが誤算だった……舐めたわけじゃないが、なんだよこの化け物尋常じゃねえ
苦しい一撃を受けて体が自然にうずくまるがそのままにさせてはくれない

「キル夫さん!?」

思い切り首根っこを掴まれた
一瞬で首の骨折られそうだ、しかしククリで腕刺しても効かないらしい、頑丈だな

「……」

奴が袋の中で笑った気がした、そのまま少しずつ力が強まる

こいつ……ゆっくり殺す気か？

「ゼェ……ゼェ……」

気道が狭くなる敵に舐められるのにどうしようも出来ない自分の弱さが憎い

「今、どうにかします……」

そう言っても彼女も既に刀を振るえない、立てないまま這いずってこちらに来てくれている
後輩にここまでさせるなんざ恥なんだがな……どうすりゃいい

「こひゅ……」

ダメか……？さっきから悪運でしぶとく死なずにいるが、２人とも満身創痍だ
助ける言ったのに姫柊もこのままじゃまずい
せめて爆弾等持ってりゃよかったが

「……」

呼吸すら出来ない、視界も限界だ
ただ頭に浮かぶのは走馬灯、そこにはアカネ先輩が浮かぶと思ったが

「(なんで狛枝……?)」

唐突に狛枝の姿が頭に浮かぶなんだこりゃ?
ただアイツは幸運不運うるせえけど……
アイツが不運だって言うから幸運起こらんもんかねえ……
ああもうダメだ意識が、俺の命が止ま……

「止まるんじゃねえぞ」

なんか聞こえた、こりゃ天使か?悪魔か?

「鉄華団は誰も止まらねえんだ、ミカァ！」

オルガの叫び声と共にミルドレッドが吹っ飛ぶ

「ゼエゼエ……」

やっと呼吸を出来て体が少しだけ回復する
そうして、今のメンバーを確認する

「オルガ先輩、三日月先輩……狛枝？」

「よくやったじゃねえか、休め流石は俺の団員だ！」

団員だった記憶はないけど、助かったのは事実だ
だが俺だけじゃねえ姫柊も……
そちらの方も見ると富樫先輩が助けている
よかった……

「おう、今から回復すんぜ！ミカに富樫任せた！」

そう言いつつ武器のないミルドレッドを圧倒する

「オルガ、こいつ武器ないよ？」

「マジか!?まさかお前たちが？」

そこだけは誇らしげに笑う、回復もしてポーションは飲んだが流石に万全じゃない

「逃げること考えてたが武器がなけりゃ行けるな、よし行くぜ！」

「オルガは下がってて」

「……」

そう言われてスッと下がる
そのまま富樫先輩と三日月先輩の２人と狛枝の魔術で倒した
つか狛枝……強くね？

ＭＩＳＳＩＯＮ：オルガ達と合流する　クリア

――――――――――――――――――――――――――――

「すみません、俺たちのせいでこんな羽目に」

「なあに、構わねえよ後輩と一緒に戦えたんだしよ」

迷惑をかけたつもりがむしろオルガ先輩達に喜ばれた
それならいいんだが……

「依頼料は要りませんので」

「いや、ちゃんと貰えよ」

ここまでやらかして貰うのは申し訳ないって思うんだが

「お前達のおかげで依頼がスムーズにいったんだぜ？」

「でも護衛が……」

「アイツら2人いりゃ余裕だしな、何より嬢ちゃんが罠踏まなきゃ俺らが踏んでた可能性あるしな」

「そうだよ、オルガが言ってるんだし気にしなくていいよ」

後ろの姫柊も同じように思っていたようだが流石にここまで言われて嫌だとは言えん

「安心しろ、結構な額になるだろうから」

「いや、そもそも依頼料はそこまで高くなかったはずでは？」

「ああ、それはな」

病み村を抜けた先にニケ先輩がいた

「おうし、無事倒したか？」

「ああ、倒したが……やっぱりか」

「ああ！依頼受けてきたぜ！」

笑顔でニケ先輩がそう言う、どう言うことだ？

「人喰いミルドレッド討伐依頼だ、悪霊だから定期的に湧くんだがそのたびに依頼が出る」

「はあ……」

「ニケなら追加で受けてくると思った通りだ」

ニケ先輩本当に金に目がないな
つかすげえな本当に

「だから依頼料は増える、人数多いからやべえ額じゃねえけど」

「いえ、有り難いです」

俺だけじゃなくて依頼受けた姫柊も何もないじゃ悲しいしなよかったよかった
そのまま学園へと戻ったがその先の敵はそれほど強くなかった、まああれ並はそうそういないだろうしな

「それじゃあ、本当は打ち上げといきてえが後輩達がガチで疲れてるからまた今度な」

実際すぐにぶっ倒れたくて山々だから助かった、この後打ち上げ行ける気はしない
みんな以来に慣れていたのかあっさりと解散する
んじゃ俺も帰るか

「先輩」

「ん？」

後ろを振り向く、姫柊か

「先輩達は帰ったぞ？」

「いや、今はキル夫先輩のことです」

「そうか、んでどうした？」

「いえ、助けていただいてありがとうございました」

そう言ってお礼をされる、ただなあ……

「俺じゃねえだろ、先輩方だろ」

「でも先輩がいなければ死んでいたので」

「そのあと来たから大丈夫だろ」

「そうではなくて……」

そうではない理由は分からんが、どう言うことだ？

「貴方が言ってくれなければ多分死んでいたって思います」

「そりゃ大袈裟だろ」

結果的に間に合ったんだから多分間に合ってたと思うがつか間に合ってんだろ

「では今日は失礼します、また今度」

「んじゃな姫柊」

「……」

「ん？」

「雪菜でいいですよ、私の方が歳下らしいですから」

「なんだその理由」

よく分からんが結局は納得した

どうまんだろうな実際

「モテモテだね」

「アホなこと言ってるないで帰るぞ狛枝」

そのままヘトヘトで帰る

色々とこいつにも言いたいことはあるがそれは明日だ

とりあえず今日の俺はお疲れ様

――――――――――――――――――――――――――――

第９話

「魔術師コース……難しいなおい……」

依頼を終えてから数日、今日は魔術師コースを受けていた
富樫先輩にはあの後、雪菜を守りきったのも見て無事に弟子入りが決まった
だから戦士と盗賊コースばかりとも考えたが、神官と違ってこっちは分からないし試すことにした

「出来りゃあそれでいいし、出来なくても最低限出来りゃ役に立つ」

例えば弱くとも火を起こせれば斥候など行くときに便利になるしアタッカーとしての魔術師じゃなくても役に立つ

「だいぶいい感じですね」

魔術師コースであるボンボルド先生は皆を見て回る
俺はまだ初めての魔術師コースだし上手く出来ていない

「大丈夫ですか？」

「言ったこと理解は出来るんですが……」

嘘である、理解出来てない
教わるの苦手だしかなり学校的に言ってくるから苦手なタイプである
身体で覚えるタイプの俺には苦手だ

「ふむ……ではやってみますか」

「何を？」

「最初の講義の時にやったｌｖｓｌです、他の皆さんの今の実力も見たいところですし」

「え？」

出来るか分からんのにｌｖｓｌをやることになりかけている
しかも周りはやる気満々だからやめたとも言えない

「誰と当たるかだな……」

周りに知り合いが狛枝くらいしかいない
明らかにやばそうなのもいるし……魔法使いっぽい見た目している人もいるのか
勝てなそうな相手とは当たりたくない気持ちはあるが勉強にはなる……どうするべきか

1．狛枝
2．宝生永夢ゥ！
3．爆裂魔法

1d3　結果1

「やあ、ボクと組んでくれるとはね」

「正直狛枝も強いの分かるし安全そうだしな」

特にそこの眼帯の少女からは嫌な予感がする
なんというか……大怪我しそうな

「ボクなんてゴミクズがそこまで強いわけじゃないけど……キミを教えられるなら光栄かな」

「そりゃ……よかったのか？」

狛枝と準備する、ただどうやって使うんだ？

「自身の負の感情を使うような感じかな?」

「ネガティブみたいな感じか……えー」

狛枝が強い理由が分かった、こいつ自己評価低すぎるし負の感情を溜め込んでそうだ
俺はどうだろうな
とりあえず晩御飯が微妙だったみたいな安い負の感情を貯めてみるがポンってような安い魔力しか出てこない

「うーん……悪いけどそれじゃあ厳しいかな」

「だよなあ」

勝負にすらならないようでどうしようもない
こりゃ才能ないし最低限覚えて諦めるか

「恨んでいることはありませんか?」

「ん？」

ボンボルド先生に唐突に言われる
恨んでいることだと？無くはないが

「それでいいのか……？」

勿論恨んだことはある、この前の人喰いミルドレッド……あいつは始末したけど許せねえ
アイツのせいで……俺達は

「キル夫クン……大分魔力が高まってきたね」

狛枝の声が聞こえるが今はそれどころではない
練りに練って凄い一撃が放てそうだ

「さっきよりいいですね」

「ボンボルド先生、これならいけそうです」

「でも違うでしょう？」

違うでしょうと言われて乱れた
途中で消えてしまったが……どういうことだ？

「何が違うんですか？」

「貴方はもっと出せるはずです」

「でもこれ以上恨むことなんて……」

「ありませんか？コンプレックスとか？〝それによって恨んだ者〟とか」

「!?」

何故だ?俺はその話をした覚えがないんだが
なんで知って……

「誰しもそうやってコンプレックスから恨むものがあります、貴方は本当にないんですか?」

「どうして俺だけ……」

1d100　86　あっやば

「……」

「ちょっとキル夫クン落ち着いて!」

先程とは比較にならないくらいの魔法の塊が出来ている

ただ、同時に何も考えられない
ここまで憎んだことは無いはずだ、ただ今はひたすらに憎い

神が憎い

「狛枝さん、君は下がってください危険ですので」

「分かりました」

狛枝はボンボルド先生の言葉通りに下がる
顔は不安そうにしている

「いやあ、素晴らしいですね岡島君」

正気を失った俺の前に先生が立つ
そのまま、あっさりと魔法をぶつけて俺の魔術をかき消した

「はあ……はあ……なんかフラフラする」

「あれだけの魔力をぶちまけましたからね、体力も限界でしょう」

魔力が抜けたせいか一気に正気に戻る
なんで正直あそこまで恨んでたのか自分でも分からない
ただあれだけあると分かっただけマシか

「わざわざご迷惑をすみません」

「いえいえ、こちらもこれだけの力を持つ人間が知れただけいいですよ」

「ならよかったが……」

次からは調節が必要だ、魔術を撃って倒れちまうなら使いようないしな
いざという時はありだが、それだけしか使えないのは流石にな

「また今度からも通ってください、貴方のそのままじゃ危ないので」

「分かりました」

自分としても来るつもりだったし丁度いい、ボルボンド先生にも覚えられたなら都合がいいだろう

「他の皆さんも勝負がついたようですね、ではこれでお終いにしましょう」

「いいんですか？」

本来であれば各自の成長を見たいと言っていたのに俺にかかりきりなせいで他を見てなかったはずだ

「大丈夫ですよ、各自が覚えておけばいいので」

「そうなんですか？」

「ええ、この先チームを組む際に仲間のことを知っておいたほうがいいでしょう？私が知らなければいけないってわけでもないですし」

そういうもんなのか？まあ先生がいいならいいけど
とりあえずは俺の課題も見つかったし今度の講義で少しでもモノにしよう

「ではありがとうございました」

「凄かったねキル夫クン」

講義が終わると共に狛枝が声をかけて来る
こいつにも今日助けられたしな

「凄かったのか俺？」

「うん、魔術師コースでも上の方だよ、ボクよりも上かもね」

「そりゃ言い過ぎだろ」

あの時見た狛枝の魔法を見る限り流石に勝ってない
ただ強いと言われたのはよかった

「ただ気を付けてね」

「ああ」

狛枝が急に真面目な顔になる
確かに自制が出来ないのは危険だしな

「そうじゃないんだよ」

「ん？」

狛枝の言いたいことが理解出来ずに戸惑う
そうじゃないってどう言う事だ？

「キミの魔力は禍々しかったから」

「魔術ってそもそもそこらへんも禍々しいもんじゃないのか？」

負の感情ぶちかましてるしそうだと思うが
実際に狛枝の禍々しかったし

「キミのは他と比べても比較にならない程厄かった……だから気をつけて欲しい」

「そう言われるなら気をつけるが……」

正直そんなこと言われてもパッと来ない、ただこいつはこんな嘘を言うやつじゃないし気をつけるか

「まあ、帰るか……」

今日は午後は疲れてるし流石に受けない
何すっかなと考えながら部屋に帰る

……

皆が帰った後に1人ボンボルドは教室に残る
午後の準備をしている

「いやあ、まさか盗賊コースの彼がここまでいいものを持って居るものと思いませんでした」

先程のことを思い出す
禍々しい魔力のことを

「いやあ彼、意外と神を憎んだりしてるんでしょうかね?」

神の加護がある人間の魔法はある程度浄化される
しかし彼の魔法は純度の高い闇だった

「いやあ……欲しいですねえ」

ボソッと教室コースの中に悪意が通り過ぎた

――――――――――――――――――――――――――――――

「やっほーきっ君」

「アカネ先輩どうしました？」

「いやそろそろ教えとかなきゃって事があってね」

「何かあったんですか？」

唐突過ぎるから他愛ないことな気がするけど

「もうすぐ中間試験だから」

「わー急に重要なことぶっぱされたぞー」

「いや、実際はもう少し余裕あるけど」

「なんなんですか一体……」

先輩が何を言い出したいのか分からない
早いけど教えたかったってことか？

「いや、中間はＰＴ組むから早めに言わないとぼっちってことはないように」

「そうなんですね、何人ですか？」

「6人……きっ君には厳しいねー」

「酷くないっすか!?」

友達いるもん……いるもん……

「とりあえず狛枝やカズマに声かけて見るか」

「やめた方がいいよ」

「え?」

「いや狛枝君はいいと思うけどカズマ君は。PTに2人盗賊はまずいよ」

「……」

言いたいことは分かる、ただ組みたい
まあカズマに一応は話して見るか

「誰と組むかちゃんと考えるように、命懸けなんだから」

「そうですね、ただ信じられる仲間たちと組みたいので」

ふーんって顔をしながらアカネ先輩は帰っていく重要なことだ考えないとな

――――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ　1年　1d9：3　冨岡義勇

「ん？」

冨岡さんに出会うが珍しく1人でいるようだ
と言うか1人で大丈夫なのか？

「おーい、冨岡さん」

「……」

無言でこちらへと振り向く
どうやら気付いてもらったらしい

「今日は1人なんですね」

「そうだな」

「2人いなくて大丈夫なんですか！」

「???」

この人と会話を続けられるのだろうか

ちょいと不安になってきた
流石に天気とか調子を聞いてもしょうがないだろうし……そうだ

「冨岡さんＰＴもう組みました？」

「???」

ああ多分かってねーわ、俺も知らなかったしな
ってかＰＴどうなってるんだろうか？
あの２人は組むだろうけどそれ以外っているのか
……いつも戦士コースで見るとこの人強いんだよな
それに三葉さんと約束もしたしな、仲良くして欲しいって
現状ＰＴを組むなら狛枝、カズマと３人で完璧だと思うが

「今度の中間でＰＴ組む必要あるんですがよかったら組みませんか？と」

「そうか……」

「どうですか？と」

「……」

これ拒否られてるの？
なあ拒否られてるよな？
と言うか拒否と思わないのが図々しくないか？

「……」

『根は優しいから』

三葉さんに言われたことを再び思い出す
こう考えるなら嫌われてないだろうが

「ダメならダメって言ってくれていいんだぜ？」

「……別に」

「なら組ませてもらうぜ、ありがとな」

強引だと思うがこのままじゃ収集つかないし組ませてもらうことにした
こっちが利用する形になる気はするんだが……まあいいって信じよう

「まだ何かあるか？」

「いや、出来りゃもう少し話したいが」

「……忙しい」

「おっとそりゃ悪かったな」

忙しかったのかこりゃ悪いことしたな

ただ忙しくとも話聞いてくれたしいい奴なんだろうなやっぱり
もっと知らねえといけねえかもな……苦労するだろうが
ただささっき以上にこの男と友達でありたいと思った

「……ありがとう」

そう後ろから聞こえた気がした

――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ2．3年　1d10：1　新条アカネ

「ん？ＰＴ探しに行ったんじゃないの？」

「見つかりましたので」

「早くない？」

確かに俺も驚いた、冨岡さんがＯＫ出してくれなきゃまだ彷徨っていただろうが
そういう意味ではマジですぐに見つかったし運が良かったんだろうな

「じゃあどうする?どっか行く?」

「それもいいですが、ちょっと部屋に来てくれません?」

「なーに?お誘い?きっ君が?」

「多分勘違いしてると思いますが、そう言う事ではありません」

「そっかー、いいよー」

そう言いながらついて来てくれる
狛枝はいないらしい

「後で狛枝にも言っておかねえとな」

「まだ完成してないじゃん」

「……まあ」

そこは言わないでくれると助かる
まあ今は気にしても仕方ないか

「で、これです」

荷物を漁って中身を取り出す

「ん？これって確か」

「ボコって人形らしいっすよ秋山さんとこの店の」

「あーあの人形かぁ、売り切れのこと多いけど」

「あらかじめ頼んでおいたので」

「へー」

もらった人形をくるくる回しながら色々と見ているようだ

「ところでさー、きっ君は私にこの人形似合ってると思う?」

「女の子に人気って言われてたんで」

似合うかと言うと似合ってると思うけど
ボコ抱いてるアカネ先輩可愛いし

「ふーん、つまりはきっ君はそう言う流行りに踊らされたと」

「いえ……そう言うわけでは」

踊らされたかもしれない
アカネ先輩の趣味聞いてなかったし

「と言うかこれどうしたの？」

「依頼の報酬で買ったんですよ」

「受けたんだ、へー」

むしろそっちの方が興味ありそうなのか？

「すみません、これじゃダメでしたねちゃんと……」

「きっ君、きっ君」

「どうしました?」

「こう言うの大好きだから、よく分かってるね」

「え?」

アカネ先輩のお眼鏡にかなったのかなら良かった
心配で仕方なかったが取り越し苦労だったな
良かった良かった

「あーきっ君、デートは中止でやること出来たから」

「え……はい分かりました」

唐突に何が出来たんだろうか?まあ忙しいなら悪かったわけだが

「それじゃあアカネ先輩、今日はこれで」

「じゃあねー」

そう言ってあっさりと帰って行く
何があったのだろうか

「まさか……」

ぬいぐるみあまり好きじゃないけど俺の初報酬だし合わせてくれたのか？
それだったら次回買うもの考えないといけないな
連続でやらかさないようにはしないと
俺は勝手に考え勝手に納得した

…

「はあ、急に貰うと思わなかったな」

きっ君に貰ったぬいぐるみを見る
新品のはずなのにボロボロだ

「確かボコボコだからボコなんだっけ？」

正直だからなんなのだと言いたくなるのをグッと堪える
ぬいぐるみは嫌いではないけど別に好きじゃない

「ただまあきっ君から貰ったものだしね」

まさか貰うと思って無かったし凄く嬉しい
お返しされるなんざ思っても無かったから

「急に一丁前になっちゃって」

今回デートに行かなかった理由は簡単だ
顔が赤くなっちゃうから、自然とにやけちゃうだろうから

利用するはずの人間に心惹かれちゃいそうだから

「……寝よう」

このままでは埒が明かないと日も暮れぬ前にベッドに入る、もういっそ寝てしまおうとした

無意識に貰ったぬいぐるみを抱きながら

――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ：オート　佐藤カズマ

「おっとキル夫じゃねえか」

「カズマか、ちょうどよかった」

あのあと狛枝から喜んでと言われたから後はカズマを誘うだけだった

「ん？なんかあったのか？」

「いやカズマ、中間あるからＰＴ組まねえか？って奴だな」

「あー……悪いが無理」

「え？」

無理ってマジか？拒否られると思わなかったから予想外だった

「どうしてなの？私に落ち度でも？」

「おい、女々しいのはやめろ」

「はーい」

怒られたのでやめる

「単純な話だが盗賊がな……」

「俺戦士として戦ってもいいが」

それならそれでＰＴとして動きようあるしな

「いや、既に盗賊コースで組んでる奴いるから3人になるんだ」

「は？」

なんで盗賊コースで組んでるんだカズマ
いや俺が言うのがおかしいか
……それでもおかしくね？

「あー、他のＰＴ入れそうにない奴がいてな」

「なんか似たようなことしてんな」

いや俺の場合は頼りにしてるけど
組めなそうだからＰＴ組んであげるってすげーよおい

「どんな奴なん？」

「ウチは感情ないって言いながら感情ありありな子」

「ダメなん？」

「多分ダメっぽい」

よく分からんが多分ご愁傷様案件だなカズマ
どうにかしてやりたくもあるが俺たち既に５人決まってるしな

「後は」

「まだいんのかよ」

カズマさん保護者にでもなったん？張り切ってんなあ

「そいつは爆裂魔法って強い魔術を使える」

「そりゃいいじゃんってか魔法!?」

「そこは自称だし気にしなくていい」

「そっか……」

やべえじゃんって思ったけど自称だったわ

それじゃあただの痛い子……でも強いの使えるならありか？

「だが一発撃つとその日は動けなくなる」

「は？」

おいちょっと待て何を言っているんだ

「じゃあ他の技を」

「覚えてねえんだよ」

「えぇ……」

俺の魔術みたいなもんか？それだけだと効率悪すぎるが

「ちなみにー、コースの方は？」

「魔術師コースだ」

「おおうもう」

俺はまだ盗賊コースだし戦士も出来るからマシだけど魔術師コースでそれって致命的じゃね？

「マジでそのＰＴでいいん？」

「放っておけねえしな……」

「じゃあ止めないけど……頑張れよ？」

カズマのＰＴが悲惨になる気しかしないと思いながらお祈りだけはしておくせめて残りの３人がマシでありますようにと

「俺恵まれてんだな……」

と言うよりもカズマが自殺しに行っただけな気がするが
祈ってみたものの絶対外れ引きたくないだろうから問題児集まるだろうなと
それはもうカズマの幸運に期待しておくとしよう

「さて……だ」

結局残り１人が埋まらなかったため探すことになるのであった

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

第10話

―――――――――――――――――――――――――――――――

「どうしたんじゃ?キル夫」

「いえ、なんでもないです」

翌日の戦士コースの授業の時富樫先輩に見てもらっているのにも関わらず心うわの空だった

「まあ話してみんか、そのままやっても怪我するからな」

心配されたので話すことにした

仲のいいダチが心配なのと残り1人が浮かばないと言うことだ

「……姫柊の嬢ちゃんはダメなのか?」

「先輩と組むのはもう少し強くなってからにしたいですって言われたんで」

「先輩……？」

「まあ歳上なんで」

「よくわからんがまあいい」

同じく1年のはずなのに先輩って呼ばれてたらそりゃ戸惑うか

俺もあの時何言ってるんだだったし

「ならクエストを受ければいいだろう」

「クエスト、依頼と違うんですか？」

「少しな、依頼は依頼主によって受ける外部からのものだがクエストは学園が出すもの

だ」

「何か違いがあるんですか？」

「依頼は学園じゃなくてギルドが出すものだし出したと言うことは緊急性や危険性が高いものが多い。前の依頼も危険地帯に行ったし危険も多かっただろう？」

「そうですね、ミルドレッドは強かったですが」

「クエストにも危険なのはあるが楽なものが多いそれでこそ1時間程度で終わるものもある。それに学園が請け負ってるし学生しか受けん」

「そりゃいいですね」

「仲間探すならそれくらい手頃なクエストのがいいってわけよ」

「ちなみに報酬は？」

「安い」

「えぇ……」

「割と剥ぎ取りが資金源だったりするしのぅ」

分かるが少し悲しくなる
これが宿命なんだなと諦めてはいるが

「分かりました、終わり次第受けてきます」

「死なんとは思うが気をつけろよ」

そうして授業後クエストを受けるために食堂へと向かった

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「クエストくださーい」

安部さんに伝えて簡単な狼の討伐依頼を受ける
他にどんな奴がいるのか、楽しみだが
１ｄ１００：１６　２人
１ｄ１００：９３

「誰も受けてないのか……」

「ごめんね、こればっかりは」

安部さんが悪いわけじゃないし文句はないけど……

「１人で行くかー？」

諦めて１人で行こうと考えていた

流石に受ける言った以上やっぱやめるも不味いし

「何迷ってるの？」

「う？え？」

後ろを振り向く、偶然っちゃ偶然だがすげーな

「きっ君クエスト受けるの？」

「アカネ先輩、そのつもりですが」

「じゃあ私もそれ受けてみるかな、枠空いてる？」

「むしろ彼しか受けてないので余裕ありますよー」

「へーいいじゃん、後１人欲しいかなー」

「それだけでいいんですか？」

「待ってる時間惜しいからね、誰かいない？」

アカネ先輩に言われて周りを探る
みたことはある人はいるけど知らない人だらけ……
と言うかこれＰＴメンバー探せないんじゃ？

「ん？」

食堂に見知った姿があった、なんか食べてる麻婆豆腐？

「立華さん？」

呼びかけてみるが反応がない
少しだけ待ってみると完食したらこっちへ向いてくれた

「何？」

「麻婆豆腐？」

「そうだけど」

違うそうじゃない、俺は何を言ってるんだ？

「……何か用？キル夫」

「え？俺のこと覚えてるのか？」

無言でこっちをじっとみるこれは肯定なのだろう

「なら丁度いいけどクエスト一緒に受けない？」

「唐突ね」

「ごめんなさい」

何故か下手に出る、そう言う性根なのだろうか？

「いいけど」

「ありがとうございます、ありがとうございます」

流石に下手に出すぎて相手が戸惑っていますごめんなさい

「アカネ先輩、見つかりました」

「早いね、きっ君だしもっと時間かかると思ったけど」

「知り合いがいました」

「え？知り合い自体いたんだ」

「あぁん酷ぅぃ……」

少々泣きそうになりながらも立華さんを紹介する
アカネ先輩は色々と質問してるが正直分からない

「で、立華さんは自分のスタイルとか分かる？」

「分からない、神官ってくらい」

「分かれば１番だったけどまあいいや、悪いわけじゃないし」

そのまま近くの森へと討伐しに行くことになった
前回と比べて少人数で心配だけど、なんとかなるだろ

クエスト：狼を討伐せよ

――――――――――――――――――――――――――

情けない他ありゃしねえ
自分が無力だなんて思ってもみなかった

「ちくしょう……」

最初は楽そうだし役に立ってみるかって考えてたんだ
なのに……なんだよこのザマは……

「ハンドソニック」

「まあこの程度なら余裕かなー」

やることがない

「凄いね奏ちゃん、神官だって言ってたのにオールラウンダーじゃん」

「そう……」

アカネ先輩が強いのは予想付いていたが、立華さんがここまで強いのは予想外だった

「ハーモニクスで斥候が出来てハンドソニックやディストーションで攻防が完備……神官通り回復も使えるか」

俺の上位互換だなあ、マジで必要なくない？

アカネ先輩も強いしよー

ＰＴに誘う目的だったけどこれはダメだな、完全に寄生だ

「ひとまず俺もやりますか」

流石に手遅れだと思うけどそれでも戦う、結構な数を蹴散らした

「おー、やるじゃんきっ君」

「2人に比べれば劣りますけどね」

「問題ない、やることはやれてるわ」

2人に褒められて少しテンションが上がる
ただ全員が好調すぎると進み過ぎる
報酬のため狩りまくっていたが、気付けば巣のような場所にいた

「あちゃー」

「アカネ先輩!?」

「いやあ、まあ行けるからいいけど……怪我は覚悟してねー」

それで済むなら正直構わないが
まあせめて男として２人とも護れればか

「ごめんなさい」

「ん？どうした立華さん」

「私がいたからこんな危険なことになって」

「いやいやいや」

何を言いだすんだこの子は、どんだけ良い子なんだよ!?
立華さん悪くないし俺がもっと出来りゃこの場面も安全に切り抜けてるだろうに

「別に悪くねえよ、むしろもっと頼ってくれってんだ」

「……でも」

「いいんだよ、ワガママだって聞いてやるのが仲間だし迷惑かけていいんだよ」

「……」

数は多いがそこまで強くない
特にアカネ先輩が狼対策の匂い罠とか持って来てくれてるおかげで助かっている

「戦士いないけど案外なんとかなるんだなおい」

イキがって精一杯力を振り絞る
一歩間違えれば命に関わる状況なはずなのの疲れのせいで眩みかける
女の子達が戦ってるのに1人だけへばれるかと根性で動く

「流石にこの匹数になれば大丈夫かな」

巣を荒らしながらも残った残党狩りに入る

アカネ先輩曰く巣も最近増えて来てるので１つくらいはぶち壊しておいた方が良いって言ってたので残す必要もない

「やってることが悪人っぽいがね」

ただ狼を残しておくと被害も広がるためやむを得ない

「善性の冒険者だって害獣駆除はするもんだよ」

「まあそうっすね」

最後の一匹を切り捨てる

かなりの量を斬ったはずが相変わらずククリはまだまだいけるかのように輝く

「それじゃお疲れ様、素材も持って帰ろっか」

「そっすね、立華もそれでいいか？」

「待って」

「ん？」

「何か聞こえる」

何も聞こえなかった、気のせいならいいんだが
実際に何かあるなら盗賊失格かもしれん

「2人とも静かにして」

何かを察したのかアカネ先輩は謎の瓶を飲み干す
そして耳を澄ませる

「（聴覚を上げるみたいな感じだろうか？）」

ただそうするとアカネ先輩でも聞こえてなかったのか……一体何が？

「来る、避けて」

その言葉の後近くへと何かが走って来る音が聞こえた
スピードが尋常ではなく言われてすぐ飛んだためかわせた
勿論気づいてからじゃ……手遅れだっただろう

「アオォォォォォォーーーーン」

けたたましい遠吠えが聞こえる
怯みそうになるが、それよりも見える異形な姿に目を凝らす

「……ウェアウルフ？」

「そうだね……流石に厳しいかも、さっきは運が良くて無傷だったけど」

二足で立つ狼の姿を見る
体つきも数回り大きく、拳が頭くらいある気がする
「これは後で学園に文句言わないとね」
「どうするんすか？」
「逃げるよ、きついし」
ただ逃げられるのは絶望的だろう
方法はあると思うが
「一応方法を聞いておいていいですか？」
「これ」
そうやって匂い袋を渡される

「ウェアウルフは一時的に五感をあげるモード？みたいなのがあるからその時にぶつける、そしたら動けなくなるから」

「難しいっすね」

ただやらなきゃ死ぬだろう、かなり絶望的だがここで死にましたなんてやりたくないし

絶対に逃げてみせると決めた

ＢＯＳＳ：ウェアウルフ

クリア条件：ウェアウルフの討伐、或いはウェアウルフからの逃走

―――――――――――――――――――――――――――

「おいおい、やべえなこれ」

確かにクリは剣ほど十分な武器ではない
ただナイフとかにも比べて優れているはずだ
ただ……それでいても歯が立たないとは思わなかった

「マジかよ……」

何をすればいい？2人とも戦っているのに出来ることがない
と言うかアカネ先輩でも苦戦してる時点で俺が剣使ってても意味がなかっただろう

「ハンドソニックは通ってるらしいけど……彼女に頼り切るのもまずいね」

戦士のカッコいい必殺技みたいなのがあれば倒せるかもしれない
ただ、今回戦士がいないで来たのも慢心だが、戦士に頼り切るのも慢心だろう

「結局は立華さんに頼りきりな時点でどうしようもないんですがね」

せめて出来ることは……罠か

落とし穴とか作って嵌めれりゃいいけど
落とし穴の種はある生憎役に立てない俺は今回はサポートに回るべきだ

「こっちを全く気にしてねえしな」

獣って雑魚を優先して狙うのかと思いきや２人が狙われている、どうせこんなことしか出来ないならやってやる
急いで落とし穴の種を埋めて落とし穴を作る

「友人を落とすためとか聞いたけど、んなおふざけじゃなくてこう言ったことでも使えるよな？」

若干不安になりつつも、方法がそれしかないためなんとかなってくれよと願う

「２人とも、仕掛けましたんで」

その言葉を聞いて少しずつ下がっていく

何かある気配を出すな、こっちを一切見てなかったし言葉はまず理解できないだろうが
こう言うタイプは雰囲気で察することがあり得るし

「ってい」

誘導するかのようにアカネ先輩がナイフを投げる
俺も投石をし敵の方向を誘導する

「……」

息を飲んで目の前で突っ込んで来たのを見て散開する
決まってくれと願いながら

「ｇｒｒｒｒ」

しかし相手の方が一歩上だった

本能か落とし穴というもの自体の存在を知っていたのか
わざと誘われたかのように横に避け罠を回避する
逃げる余裕すらも残してくれないのかよ

「ダメだよきっ君、罠は使い方だよ」

「え？」

アカネ先輩に怒られるとともにバチンと大きな音がなった
雷系のようなものがウェアウルフの足元を走る、その痛みにくらみそのまま足が動き落とし穴へと嵌っていった

「どういうことです？」

「罠だよ、きっ君の落とし穴避けられること読んでたからあらかじめその時に通りそうなところに仕掛けたんだよ」

「すご……」

まだそこまで見えないトラップの仕掛け方とか学んでないし学ばなくては
戦士コースや魔術師コースでもやることは多いけど基礎たる盗賊コースもちゃんと
やらなきゃなと思った

「よし今のうちに急いで逃げるよ」

俺たちには決定打がないことを気付いてるアカネ先輩が即撤退を言い出す
奥の手はあるらしいけど、正直倒しきれないし逃げる方がマシらしい
ただ逃げれるとは思ってないけど
だって、さっき五感上げてくる言ってたし

「ｇｕｒａａａａａａａ!!!!!!」

穴の中から叫び声が聞こえたかと思うと物凄い跳躍とともに奴が飛び出して来た
本能なのか、潰せば勝てると思ったのか

そのまま立華さんの方へと向かって来る

「立華さん!?」

その時の俺は何と思ったんだろうか
死にたくないっていつも言ってるのに
彼女がいなきゃみんな死ぬから?
それとも自分本位以外の何か?
分からないが気付けば庇っていた

「キル夫……?」

ミルドレッドの時は完全に避けたと言うのにそれと似たような一撃を受ける
出血が尋常じゃねえ……学園に来る前を思い出すな

「っこの!!」

焦るようにアカネ先輩が匂い袋を放り投げたが冷静さを失ってるせいかアテが外れる

「なんで……」

止めなきゃならないのに、急いで逃げなきゃいけないのに
すぐさまこちらへと向かって来る、慌てて回避するがアカネ先輩にも傷が増え始める

「あはは……きついかなこれ」

きっ君が重体、私もきついかなでちゃんは1人じゃ逃げないだろうしなあ……
まさかスライム対策もして来たから森で全滅なんて思わなかったしこれはこれは……
本当に神様ってやつは……

「今の状態でいいんでしょ?」

「かなでちゃん……？」

私が諦めた中、何を考えているかわからない表情の少女がつぶやく

「まだやるの……？」

「ええ、どうにかなら出来るから」

「ははっ……それなら早めにやって欲しかったな」

どうやら諦めてないことだけは分かった

強いねこの子

「耳を塞いで」

「ん……どうせ諦めてたしいいよ」

彼女の言う通り耳を塞ぐ、何をするか分からないけど

「セット、ハーモニクス」

またあの子が沢山増えた、と言うかここまで増やせたんだ
ただその人数で包囲しても厳しいかな

「ハウリング」

沢山の分身たちと森中に騒音を流す
アカネ先輩は音対策のアイテムを持っていたため助かった、ただ塞いでただけならまずかった
ただし、耳を塞がずそれどころか五感が増加されてる獣への効果は目に分かる

「ギイイイイイ」

気絶こそしないものの多大なダメージを負っていた

破裂したかのように血を流してる部分もある

「すご……」

一気に状況が一転したような状況を見て驚く
オールラウンダーにしたって種が多過ぎでしょこれ

「逃げます……」

自分にも決定打がないなら今のうちと再度逃走を図る
本来であれば危険を感じこれ以上は安全に逃げだせただろう

さっきの騒音で気絶したものが目を覚まさなければ

「……」

目を覚ました彼は

「殺す……仲間に危害よくも出したな？」

昨日程の魔力を簡単に練り上げる
また狛枝に言われたように調整できていない禍々しいものを

「……死んで詫びろ」

強力な魔力にぶち当たりウェアウルフは体が蝕まれていく
そしてやがて砂のように少しずつ崩れ、消え去った

「……何今の？」

驚きながらも魔力を使い果たし倒れたキル夫の方へ向かう
出血が尋常じゃないし急いで連れ戻らねばマズイ

「かなでちゃん、お願い」

「分かった」

ウェアウルフ亡き後は残った残党もビビりながら逃げ出して円滑に進めた
多少の回復魔法で現状を繋ぎながら保健室へと無事到着した

大怪我だが、保健室に着くまで耐えたので命は間に合っただろう

クリア条件：達成　報酬：5ヶ月分（ウェアウルフ込み）

――――――――――――――――――――――――――――――

「んあっ？」

多少の痛みはあるが見知らぬ病室で目が覚めた方が気になった
まあ保健室だろうけど、無事だったんだな

「なら良かったが……全員いるよな？」

不安になりつつも少しだけ体重を感じる下半身の方を見る

「……」

立華さんが足を枕に寝てやがる
まあ疲れたんだろうけど……
眠ってる彼女にありがとうと伝える
すると運が悪く目を覚まさせてしまう、申し訳ない

「起きたの？」

「ああ、おかげさまでな」

改めて彼女に感謝を伝えた、間違いなく居なきゃ死んでたし

「ならいいけど」

ホッと落ち着いたように振る舞う、彼女が悪いとは全くもって思わないんだが

「今日は下手こいてばかりだったけど次はしっかりとやろうぜ」

「分かったわ」

立華さんがいい子すぎて安堵する
わがままな子が多いわけじゃないけど

「で？要件はこれだけか？すまんがもう少しだけ寝たいし」

「後一つだけ」

「ああ、なんでもどうぞ」

流石に最優先事項は立華さんだし問題はない
無茶振りもなきゃいいが

「私と貴方が結婚することになったみたい」

「は？」

空気が急に変わるどころかぶち壊された
何故か相手は乗り気っぽく見えるし

じゃない、まあ１００歩譲ってそれはいいだろう
問題は

「え？どう言うことですか？」

俺が全く理解できてない事です

―――――――――――――――――――――――――――――――

第11話

「ちょっと言ってることが分からないです」

いや、本気で分からん、どう言うことっすか？
結婚って話も聞いてなければまだ立華さんと会ったのも2回目のはずですが
「？」

「いや、不思議そうな顔されても困るんですが……」

「アカネ先輩が」

ちょっと待ってくださいアカネ先輩、貴方ですか？貴方何したんですか？

「傷物にしたら責任を取らないとって……」

「あんの馬鹿あああああああ!!」

面白半分でやりやがったな!?
この子は絶対に真に受けちゃうと言うのに
ってか分かってたよなああ

「ごめんなさい」

「いや、立華さんを責めたわけじゃねえんだ……」

アカネ先輩何やってんすか!?
本当にあの人は……

「あー起きたの？」

頃合いを見計らってたのかこのタイミングで何食わぬ顔で入ってきた……おい

「アカネ先輩」

「心配したんだからね」

「吹き込んじゃダメでしょ……」

犯人を嗜めるが効果が薄いようだ
と言うか本当に何がしたいんだ……

「でもこの子いい子だし」

「いい子だからＯＫってわけじゃないでしょうよ!?」

ちょっと理解が追いつかない、悪戯にしてもやりすぎだろうよ

流石にここまではらしくない

「え？何かおかしい？」

「……互いの考えがズレて無ければ」

「えっと……かなでちゃんきっ君の仲間にならないかなって、確か集まりきってないはずだし」

「……」

ほーら来た、ズレてますよ!!ズレてますって!!
ってか何があったのさ、お兄さんにちょっと話してみ？

「なんか立華さんと結婚することになりかけているんですが」

訴える用に相手を見つめながら言われたことを述べる

俺の予想が合ってる気しかしないけどいっそ外れて居てほしいとさえ思う

「……は？」

しかし予想通りと言うか……アカネ先輩は困惑してる、これ面倒なやーつー

帰りたい、すっごく帰りたい

「きっ君何したの？」

「え？俺のせい前提？」

酷くない？被害者とは言わないが俺も分からんのだが

「アカネ先輩に言われたって聞きましたけど」

「んー？」

アカネ先輩が考え込むように首を傾げる
まあこれで勘違いということは分かったが

「きっ君を傷物にしたから責任を取って仲間になってあげてって、どうせこの子ＰＴ組まない気がするし丁度いいかなって」

「アカネ先輩が悪いことが判明しました」

「なんで？」

「傷物って言葉を使ったからです、覚悟の準備をしておいてください」

貴女を訴えますと、しかし何処にも訴える所なんてないし無駄な事は分かりきってはいるが
アカネ先輩が原因で立華さんの早とちりだと言うことは分かった、立華さんもこれ被害者だな

「ごめんって」

「あの……」

「すまねえ立華さんなんか巻き込んじまったようで」

「そうじゃなくて……」

何か言いたげだが……

「ＰＴの話だけど」

「どうした？」

「いいの？」

「構わねえってよりむしろ嬉しいが」

「そうなの……」

なんやかんや仲間に加わった、ありがたい限りだってかこちらから土下座してでも嬉しいが

ただ、立華さんが仲間に入るって事は俺が役に立てるようにならないと……（使命感

「きっ君ＰＴこれで何人？」

「ちょうど６人決まりました」

「……私で大丈夫なの？」

「勿論」

少しだけ笑った気がする……が分からない

ただ笑ってたらいいなと考える

「それじゃあきっ君もういいって東先生が言ってるからご自由にだってさ」

「アカネ先輩ありがとうございました」

「それじゃ、ＰＴと合流してきたら？」

アカネ先輩に言われるままに立華さんを連れて出て行く

まずはＰＴ完成した事を冨岡さん達探さねえとな……あれ？立華さんと冨岡さん会話できる？

少し不安だが……信じよう

――――――――――――――――――――

「流石キル夫クンだ！もう集めるなんて!!」

出会って早々狛枝に褒められる、なんか最近こうやって狛枝に褒められることが嬉し

い

「キル夫感謝する……勇くんに言われて安堵したが……正直仲間探し心配でな……」

三葉さんからも柊さんからも感謝される
やっぱうん……2人はそう思ってたよな……知ってた
ただみんな強いし冨岡さんもいい人ではあるんだけどな……

「これで6人ですか、良かった良かった」

改めて安堵する、5人PTとかでも出来ないことはないが下手に減らした事が原因で死にたくないしな

「戦士と神官が2魔術師と盗賊が1かな?バランスがいいね」

狛枝が言うにはバランスがいいらしい
神官が2人いりゃ事故も確かに減るか

「私は戦うタイプだしな、立華も戦えるのか？」

「ええ、多少は」

「俺より強い」

「わぁ……」

俺の強さを認識してるか知らないけど一同は驚く
俺も結構戦えるタイプだと思ってくれているのかねえ

「いや……キル夫、普段戦士コース見てるけど結構だぞ……それ以上なのか？」

「ああ、神官と盗賊と俺以上の戦士の実力見た」

「キル夫クン……盗賊も出来るって」

「おっ俺もやることやるから!!」

悲しいけど俺だってやることやってやるんだって見せてやっから!
見せてやっから……

「そうじゃないんだよ、盗賊ばかりだと困るけど兼業出来るならそれに越したことはないから」

「なるほど……」

納得しておく、気遣ってくれたなら知らんもう考えないもん
陰湿ないじめは先生よくないと思うので

「それじゃあ、今日から試しに潜ってみるか?」

「あっみっちゃんいいですねそれ」

「……ダメ」

２人の意見の合致をよそにまさかの立華さんから却下が出る……何故だ？

「なんかあったか？」

「キル夫が病み上がり、と言うよりも重傷から治ったばかり」

「おい……」

わー女性陣の目が厳しくなったぞー、さっき病室で逃げたかったのにまたかー

「あまりそう言うことやってると怒るからな？」

「申し訳ねえ三葉さん」

「んんんんん……それに気付けないなんてなんてボクはダメなんだ!!」

「いや、見た目は全快してるから気付けないだろ……私でも無理だぞ」

「ははは……本職様がそう言うならしょうがないかな？」

狛枝が諦めたように振る舞う、そして俺は怒られる

「せめて明日から」

「了解した、私達も準備しておくわ」

そう言いつつ今日は別れた

明日からいつもと違うスケジュールになりそうだがやっぱりＰＴってのは楽しみだな

「……連携が不安だが」

各自がコミュニケーションとれるのだろうか？
戦闘の時は大丈夫そうだが気を抜くとやばそうだよな
チームが不仲で解散とかは俺が悲しいし

「……と言うかさりげなく冨岡さんさっき喋ってなくね？」

不安になってきた

――――――――――――――――――――――――――――――――

特殊コミュ：カズマの仲間

「ん？カズマじゃねえか」

「おっキル夫か、どうだＰＴは？」

「決まったよ、そっちは」

「決まったが……」

ああいやなんですね分かります、前の雰囲気からそう感じてたし

「よく事故物件みたいなので組んでくれたな」

「増えた……」

「あー……」

増えちゃったかーそっかー

やっぱ俺恵まれてた方じゃね？

「どんだけヤバいんだ？」

「感情がないのとやべーのとやべーのとよく分からんのと胃痛枠」

「更によくわからんのが増えたか」

カズマと胃痛枠が死にそうだな
大丈夫なのか？

「ちなみにどういった感じだ？」

「まず無感情なのは言った通り盗賊コース」

「わかった気はする」

確か盗賊コースでそう騒いでる子いたし
叫んでる時点で無感情ってなんだろうな？

「続いて魔術師２人、やべーのと胃痛枠」

「揃っちゃったかー」

「めぐみんとゆんゆんって言って友達らしいぞ」

「ガチレベルの胃痛枠じゃん」

やべーのと友達ってすげーなおい

……俺ってやべー枠なんだろうか？

「男は戦士コースの爆豪って奴」

「やべーのか？」

「罵声を浴びせられるしすぐキレる」

「罵声ボイス売り出させたらどうだ？」

俺は何を言っているんだろうか?ボイスが売れるわけねえだろうよ……
ただ……目に見えた爆弾のような気もする

「あと1人は……」

「俺だ」

そう言って会話に混ざってくる
見た感じは黒い司祭服のような物を着た典型的な神官っぽいが

「中嶋正義だ、アンタの事は見た事ないが」

喋ると同時に神官に見えないような尖った歯が見える
いや見えないとかは言ったら失礼だが

「岡島キル夫だ、俺は盗賊コースだし神官コース行ったことないから分からないな」

「盗賊コースか……」

少しだけ難色を示す、何がったんだろうか？

「問題児多いからな……」

「おいカズマ」

今言うって事は俺も問題児って言ってねえか？
そしたら泣くぞ？

「いや、別にいい良識の範囲内で盗賊名乗るならむしろ優しいもんだ」

少し言いたいことが分からんが、良識の範囲内……なのか俺？ヒャッハーとかはしてない気がするけど

「……それじゃあ失礼するぜ、２人の邪魔したな」

そう言って中嶋は去っていった
カズマがやべーには入れてなかったがかなり独特な雰囲気だった

「行っちまったな」

「まあこっちを配慮してくれたんだろ」

「そうだな」

少し盗賊を敵視するような感じがあったが真面目くんなんだろうか？
そんな常識人がこの学園に通うと思わねえが
何かしらあるのは間違いないだろう

「カズマ……頑張れよ」

「ああ……」

思い出させないでくれと言いたげな顔をしてカズマは去って行った
悪いことをしたかもしれない
そりゃそうか問題児だらけだし

「中嶋正義ねえ……」

爆豪とかめぐみんとか聞いたやつよりはマシなんだろうけど
会話もちゃんとできたし

……ただなんか凄い嫌な雰囲気な人間だった

―――――――――――――――――――――――――――――――

特殊コミュ：俺の盗賊技能

流石に別れた後じゃ盗賊コースはもうやってないし自己鍛錬しかないかと考えた
見つかったらぶん殴られそうだが流石に今の状況じゃなあ
盗賊としても何もできなきゃ明日からもきついし

「アカネ先輩は……」

正直アカネ先輩から教わるのは都合がいいがそれはそれで問題がある
彼女の役に立つために通った学園で焼き増しにしかならないからな……
ニケ先輩とかに会えればいいんだが……
あの人なら教えてくれそうだし

１ｄ２：２

「ん？お饅頭？」

「誰が饅頭だ!?」

唐突に饅頭扱いされる
昔された事はあったがこの学園内では初めてだな

「あー怒っちゃったなら申し訳ないっすねー、でもそう見えちゃったんで」

謝ってはいるが全然悪びれていない少女がいる
いや本気でキレたわけじゃないけどさ……

「いや……人間だからな……人間……人間だよな俺？」

「なんか事情があったんすね……」

「ないわ!?生まれつきだわ」

見た目でここまで掘り下げられるとは思わなかった
俺ってそんな饅頭なのだろうか？

「まあ人間っぽくない人間は多いっすからねえ……」

この物怖じしない態度凄いなって思うが
俺は分かってる！二度は騙されない!!

「3年の方ですよね？」

「え？そう見えるっすか？」

「物怖じしないので」

この言い方は分かる……3年だ!!
ナマ言ったら殺される!!

「調子乗ってる1年とかは考えないんすか？」

「見た事ないんで」

盗賊コースっぽいような雰囲気を感じる
と言うか言っちゃあれだが……どちらかと言うと裏の人間のような雰囲気を感じる

「まあ合ってるっすけどねえ、3年の走り鳶っす」

「何故また試す真似を……」

「ナマ言った1、2年をいびるのが趣味なんで」

うわあって言いかけたが言った瞬間狙われる油断しちゃいけない……

「でもちゃんと見極められるところはプラスかな」

「プラスだとなんかあるんですか?」

先輩に気に入られるとかだったらどうなんだろう?

プラスにも見えるしマイナスにも見える

「ん？教えて欲しいんでしょ？」

「え？」

聞かれてた？いや今いるし聞いてたのか
それで接触してきたのか

「気付かないのはしょうがないよ、だって盗賊の３年っすよ？」

「そうですね」

教われること相当多いだろうな
問題は教えてくれるかなんだが……

「恐れ多いですがお願いしてもよろしいでしょうか？」

「おっけおっけ、楽しみっすねえ」

「イビラナイデー」

懇願だけして弟子入りする
と言うかそもそも俺は盗賊コースなのに盗賊より先に戦士コースで弟子入りしたのはなんでだろうか？
確かに富樫先輩は師匠とし完全に相性の良い人だったが

「いやー、しかし運良いっすねー」

「え？そりゃそうっすけど」

先輩が見つかった件では運がいいだろうな俺

「そうじゃなくて臨也君に見つかる前でー」

「ヤバイ人なんですか？」

今日ヤバイ人の事聞きまくってる、助けてくれ
俺はもう聞きたくないんだ!!

「いやあ……ウチよりヤバイっすね」

「いやぁ……」

自分で自分の事ヤバイって言ってんじゃん……もうやだ

「まあでもそれは出会ったらってことで」

「やだなあ……」

ニケ先輩も言ってた気がする折原臨也先輩か

怖くなってきた

「あっそうそう、臨也君確かキル夫君のこと狙ってるから」

「何故何ｗｈｙ!?」

名乗ってない事思い出したり、先輩が何故俺の名前知ってるのかとかは置いておいて
それよりもヤバイ情報が

「いや、この前の病み村での件でオルガ先輩が話してて気に入ったみたい」

「変なのは狛枝だけで十分……」

「まあウチの弟子なんでそれとなく言っておくっすねー」

助かったようなこの先輩の玩具にされそうな気がするようなハラハラしたまま分かれた

―――――――――――――――――――――――――――――――

「学園に来てそれとなく経つが……」

中間試験だって目に見えた近さになって来たんだしだいぶ経った
それに合わせて目に見えて成長している
それは喜ばしい事だ

「ただの冒険者になってたらどうなってたか」

それは分からない、今以上に運が良くてなれたかもだが……無理だろうな御加護様がないんだ
ワクワクもあるが不安も多い、今のＰＴだってどうなるかだが
ただ一緒に強くなれるならそれでいい

「早いとこアカネ先輩に認められるようにしねえと」

あの人がどうやったら認めてくれるか分からない
もう認めてるは無いだろうけど、この前やらかしたし

「俺に何を求めてるんだろうな……」

コースだってなんやかんや同じ盗賊コースになっちまったし
悪いとは思ったがやりたい事だったから仕方ない
俺の命を持った先輩は俺の命をどうしたいんだろうか

悩んでもそりゃ分からん
ただ、そう言うのも少しだけ考えようかなとは思った
それも多分俺の使命だから

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

第12話

「懐かしいな」

俺達は事前に中間テストを行う場所を聞いたが
入学試験の時に使った下水道のさらに深層なようだ
正直、ここまで深いとは思っていなかったし……予想外ではあった

「いっそ病み村なら楽だったから残念だな……」

前に攻略したことを聞いたのか三葉さんが落胆する
いや……それはズルじゃあ？

「こういう絶望を乗り越えてこそ希望は輝くんだ！」

どうやら輝くらしい、俺は輝かねえけど
と言うかここ挑戦したことないし絶望するほどなのか分からねえのもある

「行こう」

正論だが……正論なのだが冨岡さぁん……
何も悪くないけどなんか来るものがある
よりにもよってと言いたくなったが我慢する

「ああ……そうするか」

正直な話もう1つ疑問に思ったことはある
下水道の中って本当に人数入り切れるのか?と
確かに広いし問題はなさそうだが……
不安になりつつも入っていく

「と言うかマジでこれカズマ達大丈夫なのか？」

更なる問題が発生した事に気付く
確かに空間は広いが下水道という閉所だ
魔法が使い辛いだろう……生き埋めなんて勘弁だ

「ああ、ボクは問題ないよ！破壊するような派手なものボクなんかが使えるわけないから……」

「ああ、安心した」

「んんんんんん……!!」

なんか喜んでるけど放置する
あまり構っていると気力が尽きる

「ちょっと見てくるわ」

「いや、まだ始まったばかりで様子見はいいだろう時間がかかり過ぎるのもまずいしな」

手慣れているのか三葉さんが制止して来る
確かに不味い気もするがそこまでか？

「今回の試験ゴール順もありますからねえ、無謀は不味いですが石橋叩きすぎるのもよくないかと」

「ああ、分かった」

そうして全員で進んでいくがもうちょっと立華さんと冨岡さんは最低限以外でも話して下さい悲しくなります

――――――――――――――――――――――――――――――――

「うっし、ネズミ程度は余裕だが」

確かに普通の動物とかに比べて成長したモンスター、それも下水道にいるような巨大なネズミが多いが流石にこの程度なら１０匹くらいとかなら俺個人でもなんとかなる程度だ

「ごめんね！何も出来なくてさ」

「いや、この程度で魔法ぶっ放させても困るし構わない」

「立華さんみたいになんか出来るわけじゃないからすごい申し訳なくなるよ」

同様に立華さんも能力の都合上現状は温存気味だが他の誰も文句言ってないしむしろ有難いんだがな……

狛枝同様不安がってるがいざという時の奥の手のようなもんだし……

「と言うか強いとは思っていたが……」

冨岡さん達の３人組の強さに驚いた
確かにまだ敵はそこまで強くはないが呆気なく倒すのも驚きだ

「ん？どうした？」

「いや三葉さん神官っすよね？」

「そうだが見惚れたか？」

見惚れたわけじゃないが戦士コースである２人はともかくここまで戦えるのかと
戦士がサブ職の自分も驚くばかりだ

「問題ない」

「問題ないじゃないですよ義勇さん、それじゃ伝わりませんって」

「うん」

伝わらん、何が問題ないのか

「安心しろ」

「……」

「えっと……みっちゃんは幼少の頃から鍛錬積んでるんで強さには問題ないという事です」

「馬鹿な……俺が勇検２級の俺が……」

「ないぞ」

怒られた、でもそんな検定あってもいいと思うのそして俺は１級とって面接を有利にするの……

「それは中々ファンタスティクな事になりそうだね」

「お前は満点か０点のどっちかだろうけどな」

「照れちゃうな」

「褒めてはねえ」

勉強しようはねえから文句は言えるもんじゃねえけど
と言うか会話が成立して何級だろう

「俺は嫌われている……」

「いや、嫌われてはないだろ」

「むしろ何というか遊ばれていると言ったような……」

嫌ってるつもりはないが２人に慰められてるのを見てやりすぎたかもしれん
そして何より立華さんが会話に混ざれていない

「……」

「すみません、なんか話のテンポ吹っ飛ばして」

「構わないわ、楽しいもの」

「え？楽しいの？」

急に素になるがそりゃ驚くわ、このノリ立華さんの位置で楽しいのか……？

「貴方のお陰よ」

「そりゃどうも」

釈然とは流石にしない、俺のお陰なんざ思ってないから……ただまあいいや

「そうだよ、キル夫クンのお陰だよ！」

「狛枝まで言うか」

まあいいけど……唐突なこのノリはなん……

「……」

「どうしたのキル夫クン？」

「狛枝……それは？」

そうして狛枝が持ってる物を指差す

「ん？これかい？だからキル夫クンのお陰だってば！」

「お前さあああほんとさあああああ！落ち着かせろよ!!」

狛枝がどっかから宝箱持って来やがった
いや嬉しいけどいつのまに何やってんだこいつ!?

「おお、流石だな狛枝」

しかも褒めてるし、悪いの俺!?
そっかー……ツッコミ放棄していいかな?

「それじゃどうぞ」

そう言って狛枝が渡してくれる
……久々の宝箱じゃねえか滾ってきた、やっぱこれが俺だ
少しだけ息を飲み込む、ミスったら嫌だしな

「行くぜ……」

何が入っているかは分からない、だがこの時が俺の一番の楽しみなんだ

１ｄ１００：５＜６０　成功

結局罠も全部解除して開けるのにも時間が要らなかった

状態異常なら問題ないしとは言っても当たってると時間のロスなのでと考えているうちに開いたのが驚いた

「はや……」

女子ｓは驚いているし……と言うか珍しく立華さんも驚いている……気がする

「んでこれはっと……」

中身を確認するが……

１ｄ１０：７

「なんだこりゃ?」

見てみると萎びたパンのような物が何個か袋に入っている、何というかハズレなのだろうと言ったものだ

「んんんんん……これはボクの不幸が発揮しちゃったかな……」

狛枝は残念そうにしている、まあ見つけたから罠じゃないならなんでも損ではないが

「キル夫……」

「いや、俺が悪いわけじゃないそんな目で見ないでくれ」

いや立華さんどんな目か分かんないけど!!

悪い目じゃないかもだけど

「キル夫さん面白い物だしましたねー」

「ん？なんだか知ってるのかこれ？」

「食材玉だな、便利だぞ」

「んなもんあるのか？」

「王都でもたまに見る……使わないけどな」

結局使わねえのかよ……それじゃあダメじゃね？

「勘違いするな」

「勘違いします」

その言い方だけじゃ勘違いしますよ冨岡さん

まだ検定低いのでもっと教えてください……

「冒険者向きなものだからな」

「ん？」

「水をかけると膨らむ、それの１／４くらいで１日分の食料くらいになる」

「マジで？」

こんなちっこいのに？

「勿論王都では冒険者は欲しがるだろうが……貴族とかはそんなもの食べないしな」

「そうなのか」

貴族とかよく分かんねーしな

「結構の数あるけど」

「暫くの探索における食糧に荷物を割かなくて良くなるんだね！」

「そう言われるとそうか」

この大きさで4日分だもんな……長期冒険に向くか

「だが保存はどうするんだ？」

「元からカンパンみたいなものだしだいぶ持つな、まあ1年間とかは言わないからある程度で使ったほうがいいが」

「分かりました」

「それじゃあ進もうか」

狛枝が急ごうって感じで前を向く
ただ……一度宝箱開けて休憩には近くあったが

「いや、一度休憩しようぜ?」

「まだ私達は余裕ですが?」

戦士の人たちも余裕だとは言うがまあ気掛かりなものがある

「狛枝……今回幸運だったよな?」

「そうだね、少なくともこのアイテムあたりだと思うよ」

「なら休憩だやっぱり、不運が来るんだろ?」

「……だろうね」

「不運……？」

立華さんも不安そうにしている、でも前回の件のせいで警戒したいんだ

「分かった、リーダーはお前だしな」

他のメンツも納得してくれた
何もなけりゃいいが……嫌な予感は止まらないんだ……

――――――――――――――――――――――――

道中コミュ1d5：1　狛枝凪斗

「キミにしては結構慎重なんだね」

「結構そんな感じだけど変か？」

「何というか蛮族とかヒャッハーするのかと」

「おい……」

俺やっぱそんな感じなのか？
そんな蛮族なのか俺？

「いや、ごめんね？キミを不快にさせる気は無かったんだ……」

「分かったよ……」

いつも悪気は無いのに色々やらかしてるのは分かってる
分かってるから悲しい

「しかしこのメンバーもかなり独特だね」

「そうなのか？」

「だって神官2もいるのにボク以外全員武器持って突っ込んで行ってるし」

「まあ……そうか」

よく考えたがバランスよく組んだはずが全員で突っ込んでる気がする

「今回はボクでいいんだけど盗賊は状況見て判断もしなきゃダメだよ、リーダーでもあるんだし」

「武器振ってるとつい……」

周りが見えていないとは言わないが、前線出てるし全部が見えるわけではないそういうのは魔術師がやるもんじゃ？とは思ったが

「いや、ボクじゃないよ詠唱に集中とかもあるしね」

「そう言われるとそうだが」

「キミは戦士コースも受講してるし強いのも分かってるよ、ただ戦況も見極めるようにマルチタスクで動いて欲しい」

「立華さんのが得意そうだな……」

「盗賊であり希望であるキミにはもっと頑張って貰わないとね！」

「精進します……」

重要なことであることはわかった
ただ……まだ1年だし色々難しいなあ
勉強しますとだけ言ってその場を離れた、逃げたわけじゃない

道中コミュ２　１ｄ４：３　三宮三葉

「どうしたキル夫?」

「いや、やけに冨岡さんと距離取ってるんだなって」

「今はシノアが話したがってたしアイテムの整理したかったから邪魔だと思ってな」

「んじゃ手伝うぜ」

荷物の整理を手伝う、勿論余計な物は見なかったり触らないように気をつけているが……

いや、もしかしてヤバいことしてる?

「ああ助かる」

「そこまで気にしてないのか……よかった」

「なんのことだ？」

「いや、俺無神経だったしなと」

「弟が手伝うことに何の問題があるんだ？」

「？？？」

「？？？？？？？？？」

ちょっと強制しないって言ってませんでしたけ？

あれ？おかしくない？

「弟じゃないです」

「反抗期か？」

「ちょっと保護者呼んできますね」

冨岡さんと柊さんを呼ぼうそうしよう

「ん？勇くん呼んでどうするんだ？」

「いや止めてもらおうかと」

「弟に妹だぞ？」

「……」

少しは常識的だと思ったけどやっぱダメだったよ

どうしても俺は弟になるらしい

どうしようもなく止められないのか？

「弟じゃないです」

「弟だ！」

「……」

キリがない、これ諦めたほうがいいのでは？

「分かった分かった……弟でいい」

「？（＊´？、＊）？」

観念しちゃいけない気がしたけど観念した

だってもうキリがないもん、折れた方が早いもん

「困ったらお姉ちゃんをいつでも頼っていいからな！」

「ハイソウシマス」

すっごい大変な気がするけどもう仕方ない
きっと損ではないはず……

「ふふふふ……」

なんか嫌な予感がしてきた
しょうがない、今はこれくらいにしておこう
そう思いつつ離れる……だから逃げたわけじゃないからな!!

「それじゃあ三葉さん後で」

「お姉ちゃんは？」

「……」

「お姉ちゃんは？」

「三葉姉さん……」

「まあよし」

すぐに後悔することになると思ったが予想よりも早かった

これ俺振り回されたりするんじゃ？

そうして全力で逃げた……逃げてない!!

「……」

「……私だけの弟」

――――――――――――――――――――――――――――――

「ふう……どうにか逃げ切ったが……」

休んでいたはずなのに何故か疲れが溜まった気がする、どうしてだろうね？
ただもうすぐ行かないと……

「ん？足音？」

前方から足音がする誰かこっちに来てる？入口側だぞ？

「逃げているな」

冨岡さんが察したのか刀を構えて前を見る
俺もククリを構えて警戒する

「ちくしょ……なんだってんだ!!」

「カズマじゃねえか!!」

カズマが前から逃げてきてる、何やってんだよ!?

「キル夫か!?申し訳ねえ!!」

カズマが何かをトレインしていることは分かったが何を連れてき……

「なんだありゃ」

冒険者か?それにしてはだいぶブチ切れてるが
と言うか3人しかいねえ気がするが

「これが不運なのかな……?」

「多分不運だが休憩してなきゃもっと酷い目になってたきがする」

「そっかあ……」

少しだけ諦めたような気がするが、これ戦うべきか？

「ちょっといいですか？」

「今は忙しい、後にしてくれ」

そう言いつつカズマを追おうとしてるのを止める

「邪魔をするのかね？」

「少し話し合いたいのですが……」

「……」

おっさんは諦めたようにそこに座り込む、良かった話が通じるようだ

「俺はラレンティウス、まあここで捕まってた呪術師だ」

「捕まってたんですか……」

詳しい話は後でいい、つかおっさんが捕まった契機なんてどうでもいい

「それでどうして」

「助けてくれると思ったが殺しに来たんでな」

「カズマ？」

「新種の敵と見て爆裂魔法撃ちやがった……」

「ええ……」

おっさん全く悪くない気がした
つかその問題児居なくない？

「それを撃って天井が崩れて中嶋とめぐみんと分かれちまった」

「もう1人は？」

「爆豪はこいつに挑んで負けた多分あっちで伸びてる」

「……」

なんかもう滅茶苦茶だな

「んで俺はキレていいか？」

「犯人には後で土下座させますんで……」

「仕方ないなあ」

この人身動き取れずに殺されかけたのに許すんだ、すげーな

「ところで君達なんでここに？」

「学園の中間試験なんですよ」

じゃなきゃ依頼とかで来るかもだけどあまり来たくはない

「そうか、なら邪魔しないように帰るか」

「ご無事にお願いします」

そう言いつつ後でまた会おうとだけ言って分かれた、で残った３人だが

「どうすんだカズマ？」

「見つかるまで組ませてください……」

「しょうがないなあ」

みんなに話して納得してもらった
と言うか例の問題児達いないなら安全そうだし

「見つかるまでな？」

「ありがとよキル夫！」

そうして一時的なチームを組むことになった

「んでその2人が」

「ゆんゆんです……めぐみん大丈夫かな？」

「日影や、よろしゅうな」

「岡島キル夫だ、よろしくな」

何故だろうか、自分のチームもチームのせいで普通に会話できることが安心できる
これはダメなんだろうか？いいよな？

「んで、爆豪は回収していくとして残りは２人だな」

「ああ……早く見つけられるといいが……」

早く見つけられるといいな……嫌な胸騒ぎがする……取り返しのつかないような

俺達は急いで先に進むことにした

…

「どうするんですかこれ！」

めぐみんは困り果てている、持って来たアイテムのお陰で1発撃って倒れることはなかったが先に進むしかなかった

「よりによって神官なのが辛いですね……戦士がいないとやられるケースもありますし……」

目の前の男は何を考えているか分からないのも不気味です
正直魔法で吹っ飛ばしたい気持ちもあるのを我慢します

「行きますよ、準備はいいですか？」

「……」

何も答えない、今は協力する時だと思うんですが何を考えているんですしょうね

「ちょっと中嶋さん」

杖で軽く小突く、聞いているのかと言った感じで

「昔ガリヴァルディと言う裁判官が居た」

「いきなりなんです？」

裁判官がどうしたと言うのですか？大丈夫ですかこの人

「二十人を殺した罪で最後は自分が絞首刑」

「はあそれは……」

裁判官が人殺しとかそう言う話はどうでもいいです

早く出ません？

「犯罪者に温情をかけるクソ博愛主義者はいつの時代もいて、彼らのせいで社会のゴミが死刑にならないのが許せなかった、そういう正義〝官〟……だから自分でカタをつけた……正義なのだぜ?」

「何を言いたいんですか!!怒りますよ!」

癇癪を起こしかけるめぐみんの前で中嶋は笑うように呟く

「さあアンタの罪はどうかな?」

「罪……ですか?」

両手を大きく上げる、そして本を取り出す
今から裁きを行うと

「殺人罪及び器物損害罪、以上の罪により……台を蹴れ〝判決執行のルールブック〟」

続

第12話②

下水道の中は奥へ行くほど入り組んで居た
迷うかと思いつつカズマが居たことで助かった
と言うかカズマが居なかったら不味かった
何故なら……

「アイツは？」

「帰ったぞ」

「ケッ」

多分伸びてたこの子拾えなかったから

余計なお世話だと言われたが俺たち来ても伸びてたし
気付いた時には死んでいましたは十分あったと思う

「あぁ？なんだよその顔は」

「いや……まあマシかなと」

「は？」

問題児に会い過ぎたせいでキレっぽいくらいならむしろどうにかなるとでも考えてるのが不味いかもしれない
ただ……うん、諸々見ると全部俺がやるから任せとけみたいなヒーロー願望的な物が見えるんだよな

「キル夫、メンバー交換するか？」

「いや、それはしない」

自分のＰＴに失礼だし流石に妥協を良しと考えるわけでもねーわ

「んでカズマここなんだろ？」

「ああ、ここだ」

カズマに連れられたところに来ると見事に天井が落ちている

正直普通にビビる

「マジで何をどうしたらここで爆裂魔法なんざ撃てるんだ？」

「俺に聞かないでくれ……」

もうこれＰＴが全滅しなかったどころか生存者が居てすげえってレベルだと思うんだ

「あはははは……」

あの狛枝ですらドン引きするレベルってなんなんだよ!?
正直会いたいとも思わないが……会わないといけねえな

「どこへ行きゃいいと思う?」

「最下層はここ以上に入り組んでいるらしいです……」

「ゆんゆんさん、それはどれくらい?」

「この階の倍だとか」

「本当にクリアさせる気あるの学園???」

絶対クリアさせる気ないだろ
いや、させる気あっても何人死ぬと思ってんだ?

「先輩に聞いたけど結構な死人多いらしいで？」

「うわぁ……」

中間試験で殺して来る学校とかありゅ？
やだーおうちかえりたーい

「上行くか……」

「そうだな、気をつけるんだぞ」

姉に心配される
……あれ？やっぱ自称姉よりも爆豪の方がマシじゃない？

「何か不埒なこと考えてないか？」

「気のせいです姉さん」

「エッチなのはダメだぞ！」

「違いますって」

「……やっぱ何か失礼なこと考えてたな！」

誰か助けて

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ここか？」

床が落ちている道を見つける、どうやらここがさっきの現場の上らしい

「んでどうすんだ？」

階段らしきものが運が悪いのかこちら側にない
つまりはここから降りるしかない……

「分かれるか、しゃあねえ……」

流石にここから全員降りるのは帰って来ることも含めて不味いし一部には待機してもらった方がいい

「俺は行くぜ」

まず先端を切ったのは爆豪だった、と言うか暴れたいらしい
……あれ?こいつの能力も爆裂魔法ほどじゃねえが不味くね?

「わっ私も行きます!めぐみんが心配なので!」

ゆんゆんさんは行くと思ったしそうだろう

んで当然カズマも行くと言ったし……と言うかカズマ班は流石に全員行くだろうな

「じゃあウチは待っとるで」

「は？仲間じゃないのか……？」

まさか本当に感情が無いって言ってるし仲間のことなんざどうでもいいのか？

「キル夫はんも行くんやろ？」

「そりゃな」

「だったら行かへん、盗賊が上の階に０は不味いから」

「あー……」

気にしてなかった、正直助けることばかり考えてて上のこと考えてなかった

「んじゃ4人と……あと1人欲しいな神官どっちか……つっても立華さんかな」

「分かったわ」

冨岡さんと3人離れたくないだろうしこのメンバーで決定……

「いや私が行くぞ」

「え？」

「立華、私でいいか？」

「……構わないわ」

そう言って最後の1人は三葉さん……え？なんで？

「冨岡さんと一緒の方がいいんじゃ？」

「いや……勇くんは大丈夫だし弟の方が心配だ」

「……」

なんだろう、なんというか……なんというか……

「なあキル夫、さっきからなんだが姉いたのか？」

「……答え辛い」

否定も肯定も出来ねえわ、つかしたら不味いし
ただ顔的にカズマは察してくれたみたいだが……

「……人の事言えないじゃねえか」

「……」

悔しいが言い返せなかった

――――――――――――――――――――――――――――――

先程の壁の向こうはすぐかと思いきや少し入り組んでいるようだ
階段が無いのにこれは辛いものがある
帰ってこれるのか……と不安を持ちながら

「ただ……この先にいるんだもんな」

確信ではないがまずいるだろうと思っている
と言うか他へ辿り着く道が無いし……

「流石にめぐみんがいないと思いたく無いですけどね……」

「キル夫が言ってるんだし間違いあるわけないだろ！」

「無駄に期待高過ぎぃ!?」

姉さん……俺にそんな期待しないで……いやいるって思ってるけど

「馬鹿やってないで行くぞ……」

カズマや爆豪が早くしろって感じで見てるもんなあ……

とりあえずは進める道を進む、分かれ道があったが早く見つけるために分かれた方がいいとゆんゆんは言ったが流石に戦士が足りないので一緒に行く

「狛枝いないしなんとかなんだろ……」

不運はないといいが……こっちの道であってくれ……

とにかく進む、目標の２人を探して

無事であってくれと願いながら……

「おいめぐみん何処だ!?」

「ケッ迷惑かけてんじゃねえよ」

全員で必死に探す、所々の穴倉も探すが見当たらない
爆豪も文句を言いつつも探してくれるが全く見当たらない

「本当にこっちであってるよのかよ」

「信じるしかないな……」

「水に落ちたりしてたら見つけにくいが……」

「姉さん……無事で祈りましょう」

「ああ、すまないそうだな」

ネガティブな考えは今はしない、それだけで暗くなるから
明るくいかなきゃ場所が場所なせいで滅入ってしまう

「ここに隠れてたり……」

「おいテメエ!!」

背後を敵に取られかけて爆豪にキレられる、これは全面的に俺が悪い

「そこまでふざけてんなら勝手にすんぞ?」

「悪い、気をつける」

空気も悪くなり始めている……
ゆんゆんさんも全く見つからず苛立ちが見えてきたし……
せめて手がかりが……なんて思いつつ探す、探し続ける

「なんだありゃ？」

帽子がある、なんでこんな所にあるんだ？
如何にも魔術師っぽい帽子だが……まさかな？

「おいカズマ、ゆんゆんさんこの帽子見覚えあるか？」

「は!?」

「めっめぐみんのです！」

ここら辺にいるのか……ただ帽子が落ちてるってことは倒れたりしてるかもしれねえ

「くそっ……！どこだ!?」

カズマ達が付近を探し始めたため俺は先を探す
最悪を考慮して、何かに追われていたらここに逃げるだろう細い道の最奥を……

「……」

嘘だろとは言い出さなかった、冒険者と言う職業はそう言うものだから
例えまだ生徒であっても死と隣り合わせだろう
しかも……中間試験は死人が多いらしいしな

「ただ……間に合わなかったか……」

そこには既に事切れていためぐみんの姿があった

――――――――――――――――――

「死因は絞殺か」

明らかに首回りに異様な跡が残っている
窒息したその顔には無念さが浮かんでいるようにも見えた

「すまない……めぐみん」

2人は怒りたい気持ちや泣きたい気持ちやらを必死に堪えている
PT思いの2人だからこそ尚更辛いだろう

「何がいるんだこの下水道に……」

めぐみんは確かに小さいがそれでも人間だ
今までのモンスター達じゃ不可能だろう

「……中嶋正義だ」

「は？」

「アイツがやったんだろう」

アイツが？そんな力あるようには思えねえけど

「出来んのか？」

「奴の装備は判決執行のルールブック……聞いた話だと死罪に当たるような罪を犯した人間を殺すらしい」

「……」

滅茶苦茶だ……なんだそのデタラメな能力は……

「冒険者と言う職業は汚れどころかだいぶダークな仕事もある……死罪相当に当たるやつも少なくねえ」

「なんだそりゃ……対人に置いては無敵ってか？」

俺達は不当な裁判でボロ負けして終わりとかになんのか？
それは不味いか……

「どっちみちこちらにはいねえらしい」

「逆側か？」

辺りを散策するも見当たらないため急いで戻り逆方向へと進んで行った
一度戻るべきかも考えたが今の俺たちには何故かそれが浮かばなかった
今するべき事は中嶋正義を探すと、そう思い込んでしまっていた

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「一本道だな……」

一本道が続くと明らかに何かを仕掛けてそうに見える……正直不安だが今のところ

は何もない
そのまま息を潜めて進んで行く
こっから先は喋らない方がいいと話あったから

「（結局は足音は聞こえるだろうが……）」

ただ足音だけなら誰だか分からないだけマシかと思いながら進んで行く
そして奥の行き止まりには中嶋が居た

「……お前らか、まさか合流出来るとはな」

中嶋はボロボロのようだが……

「……ん？」

何かおかしいな？なんでこんなボロボロなんだ？
こいつの持ってるものを考えると苦戦するのか？

「中嶋……てめえ……」

「どうした?佐藤?」

中嶋が理解してない顔してるんだが……
おい、嫌な予感がするんだが……

「めぐみんはどうした?」

「途中で分かれた」

「死んだんだぞ!?」

「そうか、死んだか」

意外とあっさりしてる、こいつが分からなくなってきた

「お前がやったんだろ!!」

「おいカズマ!?」

カズマが激昂する、流石に止めないと不味いか……？

「……」

中嶋は何も答えない、なんでだよなんで何も言わないんだよ

「……そうかよ」

「カズマ！落ち着け！」

「落ち着いてるさ……」

絶対落ち着いてないだろ、これもうやばいって

「仲間を殺したかどうかこいつに聞くのが早いよな!!!スティール!」

叫び声と共にカズマの手元に本が一冊ある
禍々しくも神々しくも見える本だ

「……」

「こいつに聞きゃわかるだろ、やってないならな」

「そいつは……」

間違いなく判決執行のルールブックだろう……罪を裁くための……

「無罪だといいな中嶋」

「……」

ついつい何も言い出せなかった、恐怖なのか失望とかしたのかよくわからないが……
声が出ない……

「殺人罪の罪により……台を蹴れ……判決執行のルールブック」

カズマが呟くと共に中嶋の前に縄が垂れ下がる
本人以外も使えるのかと思ったりもするが……使えるみたいだ

「さあ、無罪を主張してみろよ」

縄が中嶋の首を締める

「ぐっ……がっ……」

本人に解く気はあるのかは分からないが、少なくとも本能のせいで自分の意思とは関

係なく縄に手をかける解こうとするが全く緩まない

「ははっ……やっぱじゃねえか」

カズマが嘲笑うように相手を見下す、これが罰なのだと言わんばかりに

カズマ……本当にどうしちまったんだよ……お前こんな激情して人を殺す人間じゃなかっただろ

「……」

何かがおかしい、やっぱり何かがおかしいんだよ

めぐみんの遺体と何かが違う……

「かはっ……」

口元から血が垂れていく、声も出せない程締め付ける

これは本当に死罪なのだろうけど……これでいいのか？

「めぐみんへの殺害への罪を贖え！裁け！判決執行のルールブック！」

「……は？」

その言葉を放つと共に、縛り上げたまま昇りかけた中嶋の身体が落ちる

「はっ……ぐっ……」

「……なんでだよ」

絶望したような顔をする、認めたくないと言いたいとばかりに騒ぎ出す

……これは中嶋が殺したわけじゃないと言うことだよな

「違ったんだろ」

「だったらなんで否定しねえんだよ!!」

ついに爆発した、いや爆発してたのは元からか……？
確かになんで否定しないのかは

「元は殺す気だったからだ……」

「その言い分だと殺さなかったのか？」

「死罪に当たるほどアイツは罪を犯してなかっただけだ、正直驚いたがな」

「殺そうとはしたんだな？」

「元より先に暴れたのはあいつだ……正直あの態度既に人殺してるようにしか思えんだろ……」

「そんな……めぐみんはそんなことしません！」

ゆんゆんさんが否定するが……ごめんさっきの話的にめぐみんって奴はやってそうだと思うわ
そして話し方的にコイツがさっきの引っかかった理由は……
恐らくはかつて死罪にあたる人間達を殺してきたからか
それが悪いかと言うと……悪い事でもあるが、責め立てられるような犯罪をしたとも言い辛い……

「ただ気になることがある」

「なんだ?」

「めぐみんは誰に殺されたんだよ?」

そう言われるとそうだ、殺された理由が分からない
明らかな絞殺なのに獣が締め殺せるように思えない

「亡者だ」

「亡者……？」

存在は知っているが……そこまでやばい亡者がいるのか？

「この下水道には死んだ冒険者を始め、様々な恨みや怨念が募っている」

「……」

存在感が強いのは見えるが全てが見えるわけではない……

ただそこまでいるのか

「そこまでの亡者がいると？」

「……コックのような奴がいた」

「コック……」

「明らかに異質な大きさだ、絞め殺したならそいつだろうな」

「……」

大きさは分からない、ただ首のアザから腕で喉を握り潰されたと言うのが納得出来る

「気をつけろ、亡者は感情を爆発させる」

「姉さん？」

「恐らくだがカズマが爆発した理由はそう言うことだろうな……気づかなかったが亡者が今結構な量見える……」

「マジか……」

「嫌な感じがすんじゃねえか……」

「爆豪……？」

「そうか、気付かなかったと言うことはアイツと会わなかったのか」

「亡者コックか？会ってないぞ？」

「……罠か」

中嶋が呟くと同時で近くの壁が粉砕される
そして中から明らかな化け物が出てきた
ミルドレッドに似たような見た目であり同様の恐怖を感じた

「アイツが罠を張るような知識があると思わなかったんだがな」

「コイツが……」

明らかな異形、ダンジョンにはなんでこんな奴らばっかりいるんだよ
戦士も足りない、亡者なら神官とかが必要かもだし……

「アイツらを呼ばなきゃ不味いかもな……」

明らかに戦力不足だ、ただ……道を塞がれている
わざわざ罠を張ったと言わんばかりに来た道を塞がれている
いっそ強行突破も考えて戦おうと考えるが……

「コイツは怨霊みたいなものだ……武器は通じないだろう」

「……マジかよ」

ミルドレッド以上にやばい化け物と言うことか……勝てるのか本当に？
ただコイツがめぐみんの仇だ、俺は会ったことはねえけど、ただそれでもダチの大切な仲間だったんだ

「判決執行のルールブックはどうだ？」

「通用しない……文字通りの化け物だ」

逃げ場がない一本道であの化け物と相対する
これ以上誰も死なせたくねえ
ククリを握りしめ敵へと向かう、ダメージになりゃしなくてもやることやってやらあ
！

ＢＯＳＳ：亡者コック
クリア条件：亡者コックの討伐

――――――――――――――――――――――――――――――

続

第１２話③

―――――――――――――――――――――――――

「戦い辛いな……」

武器を殴ることができるが肉体には通らない……物凄く戦い辛い
ついつい攻めがちになって本来であれば身体に当たるはずの攻撃が通り過ぎる
幸いだったのは爆豪が戦士よりも爆発で戦うため攻撃が通ることか

「下水道で落とし穴は掘れねえしな……」

罠を張るにも狭くて使い辛いし落とし穴は厳しい
カズマにスティールは使えるかと聞いたが暫くは打てないらしいし

「姉さんが一番の主力とは……」

正直予想なんてしてなかったが爆豪もなんとか出来るが神官が明らかに戦いをマシにしている
聖気ってよく分からんが……敵を下がらせている以上強いのは分かる

「カズマ……」

「そんな目で見るな!!」

神官はもう1人いるが……先程のルールブックのせいで中嶋はまだ行動出来ない
カズマを恨んでも仕方がないがただ少し文句は言いたくなる

「こんな時に使える物は……」

戦士としては間違いなく何も出来ない……
なら盗賊としてはどうだ……
武器破壊……は無理だな狡猾なのか辺りを見渡しながらやっている

破壊だと調子乗ってやるとスカって奴に入り込んでしまって痛い目に遭いそうだ

「……と言うか予備武器がねえ」

正確には用意しはしてあるが簡易ナイフみたいな物しかねえ
この前こそ拾ったナイフがあったが今回も前回同様の武器の大きさじゃ無理でしかない
他は……

「試して見てえが道が狭過ぎるな……」

走り先輩に教わった技がある……ただ……ここで使うのは狭い

「ぶっ壊して許されねえかな……？」

ただまあ壁壊せないんですけど……
盗賊が壁壊すとか無理……

一応周りを見るが……

爆豪……無理、絶対戦いから目を逸らさない
壁壊せって言っても絶対してくれない

姉さん……抜けたら死ぬ、神官いないと死ぬ

カズマに中嶋は無理なの分かるし……

「ゆんゆんさん……」

「はいっ!?なんでしょう?」

「周りって破壊出来ます?」

「えっそのっ……?」

そりゃ無理だよな、と言うか唐突に何言ってんだって感じだろうし

「出来ますけど……」

「出来るのか……お願いしていいか？」

「でも……」

「正直姉さんや爆豪も時間が経てばいっぱいいっぱいで詰む、誰かが呼びに行くにしても逃げるにしても場所を作らなきゃいけない」

「分かりました」

決意してくれてよかった……ただ本当にこの子が壁を壊せるのか？

「我が名はゆんゆん！紅魔族の魔法の使い手にして爆裂魔法を操りしもの」

「あっ（察し）」

「私の力見るがいい、エクスプロージョン！」

彼女が叫ぶと共に壁にもの凄い音と共に衝突し破壊する

……え？これ至近距離でコイツら撃たれたの？特にあのおっさん怒ってよくね？

「しかし広くなったおかげで幾らか動きやすくなった」

汚水が入り込んできたがこの程度なら問題のある量には至らない

これなら出来るか……

「俺の魔力次第だがな……」

そうして紙を取り出す、魔法陣のような物が描かれている

「……どうせ通用するか不安だし一発にかけるか」

全力で魔力を込める、流石にぶっ倒れる程はやらないが
魔法陣が輝いたように光る……これで良かったはず

「なんだキル夫、召喚でも使えたのか？」

「カズマもそう思うよな？でも違うんだ」

「違うのかよ!?てっきり何か召喚するから広げたのかと」

流石に召喚使えたらあらかじめ言っておくわ!!
でも使えるようになりてえな……無理ですかそうですか

「コイツは先輩に教えてもらった罠だ」

「罠……？」

「ああ、俺たちが踏むとやべえから広げたわけだ」

「なるほど……」

そう言いつつ地面に紙を置く、これを敵に踏んで貰う……

走り先輩……大丈夫っすよね？

―――――――――――――――――――――――――――――

「キル夫君って確か魔術やばかったんすよね？」

「言い方酷いですが練習中です……」

いきなりひどうぃ……いや魔術がやばいのは俺も思うけど

「でも一応は使えるっすよね？」

「それはまあ……」

「だったらこの紙に魔力染み込ませて見て欲しいっす」

「この紙ですか……」

言われたように少しだけ魔力を込めてみる
吸われたようにすぐに消え少しだけ光った気がした

「それでどうするんです？」

「こうするっす」

そう言うと俺にぺたっと貼り付けてきた
直後爆発した……

「いてえええええええええ!?」

「あれ？予想以上に魔力入れてたっすね」

「入れてたっすねじゃ無いですよ!?」

これ魔力もっと入れてたら腕が吹っ飛んだんじゃ？

「まあ分かったかもっすけどこれは魔力を増幅させるスペルカードって特別な紙っす」

「痛い程分かりました」

と言うか痛いです、物凄く

「それだけじゃまあ使いよう無いんで……先人たちはこれに魔法陣を書き込んだっす」

「まあ書いてありましたが……」

「すると魔法陣に触れた瞬間溜めた魔力を何倍にもして放出する罠が造れるようになったんすよ」

「ただ武器破壊より難易度高そうですが……」

当たらなければ意味がない、難易度が高いと思う

「ノンノン、罠として踏ませれば同じく足元からドカンっす」

「こわ……」

罠のレベルってそこまで行くのかよ

「まあ普段は誤爆が怖いし、盗賊コース魔術適正低い子多いから滅多に無いっすけどね」

「まあ……多方適正は多くないみたいですからね」

「だからキル夫君の秘策っすよ！」

――――――――――――――――――――――――――――――

「すまない、爆豪……まだ行けるか？」

「あん？余裕に決まってんだろ！」

そうは言いつつも爆豪の汗も酷いことになっている……もう余裕もなさそうだ

「キル夫のためにも突破したいんだがな……」

「ほんとアイツのこと好きだなおい……」

「家族だしな」

なんかおかしくね？と思いつつそれ以上突っ込むのはやめた

それ以上に今は前の化け物だ

「クソが……さっさとくたばれってんだ」

嘲笑ってるような顔がムカつく
見えねえとか関係ねえぶっ飛ばす

「おい、いったん下がってくれ」

後ろで何かぼやめいているが聞こえねえ
全力でぶっ潰すだけだ

「……おい！爆豪!!」

聞こえてるはずなのに反応してくれない
どうすりゃいいんだ？
呼び掛けてもどうにもならねえ……

罠が完成したがこれじゃアイツがこねえ

「……爆豪」

「姉さん……？」

「あ？」

「呼ばれてるぞ、早く退く」

「んなこと聞いてられっかよ」

「爆豪？」

「勝手に下がれや」

「爆豪」

「うっせー早く戻れって言ってんだろうが」

姉さんが説得してるらしいが……

「爆豪？」

「……」

「爆豪？」

「……っち」

しぶしぶと戻っていったが……確かに俺もあの顔怖かった、逆らえる奴いねえだろ

「で？どうするってんだよ」

「アイツが追ってくんだろ」

言った通り追ってきた、踏んでくれるよう細工は施したが……
化け物は狡猾だが……流石にこれは知らないだろうしな

「……」

ゆっくりと追い詰めたそう言いたげに距離を詰めてくる
そして踏んだ

「なんだこりゃ……」

まるで闇の塊のような物が敵を包み込む
俺の魔術の増幅と言われたが……あんな感じなのか

「やったｋ」

「やめろ!?罠が消え次第突っ込んで抑えるぞ……」

倒したかまでは分からない、ただ間違いなく消耗はしている

「おう、混乱してねえか?出来ねえぞ?」

「武器だ武器、武器さえ止めりゃアイツの脅威は減る」

「分かった」

止むと同時に闇雲に包丁を振って床に刺さる
よし今か……

「全員行くぞ」

全員で包丁を抑え力比べに入る
勿論化け物の力はやばいが全員相手には勝てるわけがない……

「おいカズマ、今だ呼んでこい！」

「おう分かった」

カズマはそう言いつつ走って行く

これで当初の問題はクリア……あとは時間稼ぎだ

「アイツ自身も気をつけなきゃならんがな……」

武器を持ったまま逃げる、姉さんと一緒にならなんとか持てる時点で相当重いわ……

「各自、気を付けろ！」

こっちを追ってくるだろうし心配は少ないと思ったが案外こない……？

ちょっと待て、もしかして不味いか？

「姉さん武器を捨てて」

「いいのか?アイツが来るぞ?」

「狙いはこっちじゃない!」

「……!?」

ゆんゆんの方へ向かっている
爆裂魔法後で結構魔力消費してるしやべえ

「姉さ……姉さん!?」

武器を置いたと思ったが姉さんはそのまま倒れている
やはり戦いに相当無理があったのか介抱している暇もないのが辛い

「ふざけんなごらあああ」

急いで無鉄砲に突っ込むが間に合わない
めぐみん同様首を掴まれる

「ゆんゆんさん……気を付けろ！」

「すみま……はっ」

疲弊した間を掴まれ驚く
離せと殴ろうにも攻撃が通らない

「クソが……一方的に嬲れるってどう言うことだよ……」

マジで通用しねえのが辛すぎる
ゆんゆんさん耐えてくれ……!!

「クソが……助けられねえわけねえだろ!!」

ここで2人も、それどころか目の前で人が死ぬなんざごめんだ
どうにかなれよ

「ごめんなさっ……めぐみん」

ゆんゆんさ……誰か助け……

「……」

光が敵を包んで爆破する
立華さん？ただ後ろから……？

「……やっと多少は動けるか」

「中嶋!?」

割と限界そうな体を動かしながら魔術を打ったようだ
しかし……なんで？

「正直助けてくれると思わなかったが」

「……2度はごめんだ」

「……え？」

「2度も俺様のせいで死ぬのはごめんだ」

それ以上は言わず立ち上がる、ここからは俺がと
ただ相手も脅威と認識し対象を変える

「中嶋ぁ!!」

「まあ……こちらだろうな」

何かを覚悟したように呟く
この化け物に致命打はないのか……？

「早く行け……」

「何を言って」

「合流すりゃ勝てるのだろう？なら俺様は時間を稼ぐだけだ」

遂に掴まれるが目は諦めていない
時間を稼いでやろうと

「はっ残念だったな俺もそんなら稼ぐわ」

そう言い返してやると不服そうにする
もう時間もないのだと

現状打開できるやつはいない、だが俺が魔法を打てば…
枯れはしてるが命を削りゃ出来るはずだ

「中嶋が耐えれるかの不安はあるが……」

それでも撃ってやる、先程のような甘えなんざ許されねえ
……目が霞んで来た、やっぱり命を削っているんだろうな
何かが見えてきた……羽？空を舞ってやがる
天使……？なんでんなものが俺に見えるんだ？

「遅くなった」

「カズ……マ？」

「立華さんがこちらに向かってくれていたお陰で間に合ったって所かねえ」

「さっき爆発の音があったから……」

ああ……ゆんゆんさんの爆裂魔法か、確かにあったな忘れてた
立華さんが敵の眩みをしてくれたのか中嶋も無事敵から離れている
回復をしてもらいなんとか動ける

「ただ……こっからだな」

悩んでいると立華さんが前へ行く……大丈夫なのか

「輪廻から外れてしまったのね」

「……何を？」

ただ憐むように相手を見る、憐むだけの感情を相手へ向ける

「ガードスキル、エンジェルズウィング」

先程から生えていた翼が大きく開き相手を包む慈悲深いような翼が開いて全てを包み込む

「何が起こったんだァ?」

自分に起きたことを理解出来ないかのように敵は困惑する……生きている?

「あん?おれの体が戻ったのかこりゃいいや」

一瞬だけ喜びこちらへと向く

「治されて感謝してえ所だが残念だがテメエらはミンチにしてやるよ」

何処に持っていたか先程の包丁よりはマシだが刃物を取り出す……あれだけ喰らってまだ動けるのかよ

「畜生……」

立華さんは何をしたかったんだ？
なんでアイツを蘇らせて……？
そもそもなんでそんなこと出来るんだ？

「輪廻から外れたのは可哀想だと思ったから」

「助かったゼェ、このおれが蘇れると思わなかったからよ」

「殺人鬼バリー・ザ・チョッパーか」

「おれのことを知ってる奴が居たか、嬉しいねぇ」

喜ぶように武器を振る、そろそろやるかと準備出来たように

「立華かなで」

「何？」

「輪廻から外れたのが可哀想でそれ以外はないんだな？」

「ええ」

「なんなんだ？」

何を話しているのかが分からない、可哀想だとどうなるんだ？

「バリー・ザ・チョッパー」

「あん？」

「Ｍａｓｓｅｎｍｏｒｄ　……大量殺人の罪によって……裁け判決執行のルールブック」

その言葉とともに奴の前に縄がぶら下がる
無論それは逃げることが出来ない

「おい……テメエふざけんな!!」

叫ぶが事態は変わらない、死刑を執行する縄が彼の首を締める無論殺人鬼である彼の罪は間違いなく死刑に値するだろう
目の前で罪が裁かれる、彼の能力の恐ろしさと共にその行動を見てただただ何も言い出せなかった

「めぐみん……仇は取ったよ」

彼女の友人も耐えながら死んだ彼女に告げる
もうこれで終わりなのだと

…

「……そっか死んじゃったんだ……いいクラスメイトだったんだけどね」

めぐにんの死に、狛枝は少し悲しそうにしている
本気で悲しんでいるのは分かるが……これが冒険者なんだ

「何を持っていきゃいいか」

悼む気持ちはあったが中間試験を終わらせなきゃならねえ

「さっきの化け物の落とし物があるぞ」

「でかした姉さん！」

これで助かった、問題は何位かだが
それよりはクリアして良かったと言うことだけを考えるか
色々と会話を続けたかったが今は帰ることだけを考える、正直地下組は満身創痍だ

「学園に帰るか……」

一先ずは完璧とは程遠いがそれでも俺達は生き残れたと喜びながら……帰って行った

クリア条件：達成
総合報酬：２ヶ月分（２グループで山分け）

―――――――――――――――――――――――――――――――

ＰＴ達と分かれ帰路に着く、いつも通りといえばそうだが疲れた

「ただ……１位とはな」

俺達が１位でカズマ達が２位だったらしい……他のメンツ見なかったけど何やってたんだ???

考えても仕方ないので諦める、ただ無事だといいなとは思うが

「ご機嫌そうだな」

「中嶋か、ありがとうな」

「ククッまさか感謝されるとはな」

少し嬉しそうにしている、そしてやっぱ牙のような歯が目立つな

「キル夫」

「なんだ?」

「2つ聞きたいことがある」

「構わねえが」

質問が来るのは正直予想外だ、何を聞かれるんだろうな？

「まず１つ、立華かなで……アイツはなんだ？」

「なんだって言われても立華さんとしか言いようがねえが」

翼だってスキルだろうし特段おかしくない気がしたが

「アイツは悪人ではない、ただ異質な存在だろう覚えておけ」

「ＰＴをあまり悪く言うとキレるぞ？」

「悪いな」

素直に謝ってくれた正直驚きだ

「でもう１つは？」

「キル夫お前は善か？」

「善か？」

俺が善か……正直前まで海賊ヒャッホーしてたし悪人な気はする

……ただ学園きてからは悪事してねえし

「……分からねえ」

「そうか」

それだけ聞くと彼は移動しようとする

「これで良かったのか？」

「少なくともお前が悪人には見えないからな」

そうなのかそりゃ良かった

「悪人が憎いか？」

「ああ、そいつらを野放しにする無能な連中もな」

「そうか」

それは仕方ないのだろう、中嶋にとってのそれが正義なのだろうだから……

「救いようのない悪人に陥れば俺が裁く」

「分かった」

裁かれるべき悪人になりゃそりゃ俺もまずいと思うしむしろ有り難いかもしれない

「ただ……そうでもなきゃこれからも仲良くしたいがな」

「中嶋……」

キュンとした、俺夢女子じゃないはずなのに……こんなときめくなんて……ツンデレってズルい

「じゃあな」

「ああ」

そうしてわかれる、もう限界も近いし仕方ない

「俺が善か悪か」

考えたことがないし冒険者って何処までが悪とか分からん

ただ、盗賊コースではあるがそれでも善人でありたいかもな

アカネ先輩に悪人でーすなんて言いたくねえし

「たまにゃ褒めてほしいな……」

良い子にしますからと子供のようなことを言いつつ睡魔に負けて熟睡した

―――――――――――――――――――――――――――――――――

第13話

拝啓父上様、いかがお過ごしでいましょうか
私キル夫は元気に死にかけております
普段は身体が死にそうですが……今は心が死にそうです
……女性の笑顔って怖いですね

「キル夫君?どうしたっすか?」

「どうしたんだろうねー?」

3年生(サカラエナイソンザイ)に挟まれた俺は諦める
アカネ先輩も逆えなそうにしてたし……仕方ないね!
助けられないごめんって合図はくれたけど……

まさかまどか先輩と走り先輩２人の先輩に恵まれてるなあ……助けて

「いやー、普段お世話になってる先輩方にここで逢うとは思わなかったんで」

「褒めても何も出ないよー」

「そうそう」

元はまどか先輩と防具を見に行くと言う話になって来たはずなんだが……走り先輩まで

いや防具見る分には盗賊コースですし有難いんですけどね……？

けど……命が幾らあっても足りない気がする

下手な事を言うと死ぬ……！

「なんか今日結構静かっすねー、お買い物とか好きじゃないんすか？」

「そうでは無いですが、ちょっと防具考えるのは難しくて……」

「あー、分かるよー戦士なら硬くしとけーって感じはあるけどね」

「ダメっすよまどかちゃん、盗賊が重装しすぎても効率悪くなるだけっすからー」

「まあ……動き辛くでマズイは良く無いですしね」

早く防具屋着いてくれ頼む!!

正直しんどい！嫌いじゃなくてもしんどいって！平気でパワハラするようなタイプだもんこの２人!!

「ただ今日は靴だけにしようかな、資金もそこまで無いっすよね？」

「まあ……」

学園では冒険者の遺体とか見つけて換金がメインと聞くが流石に下水道じゃほぼいねえしな

俺達は見つけられなかった
また依頼とか受けてダンジョン潜って稼がないと……

「あ、鳰ちゃん鳰ちゃん」

「なんすかまどかちゃん？」

「面白そうな店あるよー」

あれは……行列できてるなあ……パン屋だっけ？
結構見た感じ人気らしいけど……
それを面白そうって……いやあ、凄く嫌な予感がするっすね

「ねえキル夫君」

「……はい」

ダメっぽいっすねーこれは、一緒に入るだけでも色々と辛いのに、並ぶかー並んじゃうかー

「ってわけでーゴー！」

恥ずかしいだけなら良いんだけどなぁ、恥ずかしさもあるけど……待ってる時間どんな無茶振りさせられるんだろうと

あー……アカネ先輩助けて……あるいは男友達辺り助けて

これがフラグなんて知らないしフラグであって欲しくなかった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「いやー、ここのパン最高っすねー」

恐らくは5個目であろうメロンパンを先輩は頬張る……多くね？

まどか先輩も3個くらい食ってるけど……まあいいか

「メロンパン好きなんすか？」

「そっすねー、そこそこ」

「そこそこなんすね……」

いや別にいいが、気にしてもしょうがないし
ただあれだけ食うと好きだと思うわ流石に

「あれー？キル夫君好きな子の好み知っときたいって感じー？」

「え？マジっすか？」

「ヒューヒュー」

「……」

助けて……アカネ先輩以上のこういうのは耐えられないから
2人に遊ばれながら自分も少し食べていく
……確かに美味い

「あれー？面白い2人組でいるじゃん」

おっと誰か来た？男の声だが……助かった？

「っとそれにキル夫君かあ、よろしくね」

優しそうな男性だ、こりゃ助かった
3年っぽいし今の状況を助けてください

「あ臨也君だーこんにちわー」

「……え？」

臨也……？この人走り先輩がヤバイって言ってた人？
如何にもいい人に見えるけど

「ってわけで俺が折原臨也ですってね、その調子だとキル夫君は俺のこと知ってたり？」

「一応は……」

悪い噂だけちょこっと聞いたくらいですけどねーーーー

「ところでなんで来たんすか？甘い物好きじゃなかった気がするっすけど」

「ん？混んでたからだけど？」

「え？混んでるから？」

「だって色んな人が見れるからね」

「？」

「あーキル夫君、彼人間観察が趣味なんすよ」

「ええ……？」

うん、走り先輩が言ってるようにやばそうな人なのが分かった

「それじゃあボクのことも分かるんですかねえ？」

「いえ……すみません……」

「おっ俺を知らないだと……」

金髪のような赤髪のような……知らないけどなんか悪いことした気分だ、ただ……3年は知らないです

「彼はⅣだよ」

「数字……？」

「まあボクの事はⅣと呼んでください」

さっき俺って言ってなかったか？

いやでも私とも言ってたし……感情荒ぶると一人称変わるタイプか？

「分かりました、Ⅳ先輩」

「いやあ……おもし……いい後輩そうで良かったですよ」

今面白そうって言いかけなかった？

平穏望んだのに爆弾増えてない？

「所でキル夫君さあ」

「なんでしょう折原先輩？」

「鳰ちゃんの弟子になったらしいけど、俺のとこ来ない？」

「こら、勝手にウチの弟子を勧誘しちゃダメっすよ!?」

と言うか師匠が目の前にいる前で勧誘するのか……色々とすげえな

「すみません……走り先輩の弟子なので」

「まあしょうがないけどさあ……先に会いたかったなあ」

なんか妙に好かれてるがどう言う事なんだ？

そして走り先輩に感謝しておいた方がいいかもしれない

「なんで俺なんすか……いい後輩は多い気がしますけど？」

「えー？いいじゃん」

「何が!?」

俺が、それでもそんなのどうでもいいじゃんって事？
色々と分からない

「臨也君って誰でもいいんじゃ無いんすか？」

「流石に誰でもでは無いけどね……んーどうだろう」

誰でもいいわけじゃ無いって言葉に自分でも疑問を持ち始めたようだ、え？誰でもいいの？

「臨也は人が好きですからねえ」

「……どう言う事」

「つまり人ｌｏｖｅ！ってこと」

「わざわざ臨也が混んでるのに来たのってパンが食べたいからじゃなくて混んでるからですからねぇ」

「えぇ……」

「だって色んな人が見れるんだ、いいだろう？」

「好きなんですか？」

「人ラブ！俺は人間が大好きだ！愛してる！」

「すみませんお客様……お静かに……」

「ああ、ごめんごめん」

そうやって大人しく座る……ってかナチュラルに隣に座ってきたし

「ってわけで俺の弟子もいつでも待ってるから」

「ははは……」

走り先輩ありがとう、俺は救われた

好きってわけじゃ無いけどあまり酷いこと言うのやめます、後折原先輩今まで舐めてました

「……と言う事はⅣ先輩も何が？」

「酷く無いですかねえ……ボクは何も何も」

「……普通にしてれば悪くは無いかな？」

普通にしてれば良いんですねはい
ならいいや

「……」

走り先輩不機嫌そうになってきた？
え？なんで？

「んじゃそろそろ靴買いに行こっす」

「じゃあ俺達もついて行こうかな」

「今日は女子会っすから！」

「え？」

え？

ちょっと待って

「えぇ……鳰ちゃんそれって……」

「とにかく！行くっすよ！」

２人の先輩が置いてけぼりにされながらまどか先輩と走り先輩について行くさりげなく走り先輩お会計はあの人に！って言ってたおかげで代金はかからなかったけど……

流石に折原先輩が可哀想な気もした

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「なんで急に変わったのでしょうか？」

態度を変えて急に靴屋へと急いだ走り先輩に訊ねる
お陰で早く着きはしたが……

「流石に悪影響っすから……」

「分からなくも無いですが……」

間違いなく悪影響受けそうだとは思ったが、それでも予想外ではあった
ただこれ以上は触れられたくなさそうなので聞かないことにする

「鳰ちゃんどう言うのがいいの？」

「うーん、機動性っすかね？」

「素早く動けたほうが良いもんね」

だから軽い物、軽い物と心配になりそうな程弱そうな靴をまどか先輩が色々と持って

くる

「流石に不味いんじゃ？」

「でも動きやすそうだよ？」

「だからって防御力下げるのは盗賊のよくある死因っすよ」

まあ実際そう言うのはありそうだ
だからと言って重装もあれなんだが

「んー悩むっすねー」

走り先輩は熟考中だし俺も見てみよう
簡素な靴から戦士とか向けの鉄板入りもある

「これは……ミスリルか」

俺にゃあ重いが使う人は使いそうだ
色合いもカッコよさそうだな

「そういやお二人はどんなのを？」

「ん？ウチっすか？」

二人の靴を見るが、ただの靴にしか見えないってのもあるまあそりゃ特別な靴なんだろうけど

「ウチはこれ、忍足っすね」

「おっおしたり？」

なんか人の苗字っぽい名前の靴だ
まあ効果は少しは予想がつく

「まあ分かってるだろうけど、足音を完全に消す靴っすね」

「そんなのまであるんだ……」

便利そうだがその点不便もありそうだな

「ウチは暗殺とか一矢一殺?まあ矢じゃ無いっすけどそう言った一撃で仕留めるのがメインなんで機能性より足音だけ重視ってね」

「なるほど……」

走り先輩見た感じ盗賊系には見えないなあって思ってはいたが……
時折感じる冷たさ、暗殺者だったか
特に忌避とかはないしむしろ凄そうって意味ではいいんだが

「まどか先輩の方はレギンスに普通の靴に見えますが」

「そうだねー、チェーンレギンスはまあ多少は防具の機能あるけど」

「ただまあ神官だしそんな戦闘狂みたいな事はないんすね」

驚きは少しあったが普通そうなのか

安心したような心配なような

「あっ安心して良いよ」

「そうっすね、安心しといて」

「この靴仕込み靴だから」

そう言うと靴の先端からナイフが出てきた

……え？

「普通の靴より重くないですか？」

「鉄板入れてるよりも重いかな」

「……神官ですよね？」

「でもピンチの時にこうやって脚からグサっとね？」

あーうんやっぱこの子戦闘狂です、手遅れです

「ウチも足音しなきゃそれ一択なんすけどねー」

「だよねー」

女子って怖いなあって

そう思わされた

「んで、参考になったっすか？」

「うんまあ……動きやすいのがいいかなって」

そう言いつつ再び靴を見て回る

先輩型も探しに行ったようだ

「……なんだこりゃ？」

明らかに機械的な靴があって気になる

何というか機械ではないけど融合したような

「そちらに目をつけるとはお目が高い！」

「ん？」

突然店員に話しかけられた

さっきまで回ってるだけだったので少し驚く

「良いもんなのか？」

「そちらはマベリックランナーと言ってローラー靴の一種なんですよ」

「ローラー靴……」

確か早くなる靴だったな、足元にタイヤみたいなのが付いてて

「ええ、ですがただのローラー靴ではありません」

「まあこんな感じではないしな」

実物見た事ないがタイヤ付いてないしこれ

違うんだろうなとは思う

「リニアモーターが付いていまして機動力をあげるんです」

「へえそりゃ凄そうだ」

モーターが付いてるなら労力も減りそうだ

「そして何より」

「何より？」

「足元からガスが噴射されて空を飛ぶことも出来ます！」

「よし買った！」

なにそれカッケーじゃん、空を飛んで颯爽と駆ける盗賊、期待の新人ですねこれは

「ありがとうございます」

「なんか勝手に決めてない？」

その言葉と共に２人が戻ってきた

「だってこれが一番いいっすよ！スピード出るし」

「あー……それかあ」

凄い嫌そうな顔をする

なんでよ!?どこがダメなのよこの子はうちの子よ!!

「マベリックランナーはちょっとダメっすね」

「なんでー？」

「単純な問題として……煩いっす」

え？煩いのそんなに？
試しに履いてみたら確かに煩かった

「確かに煩いですが問題が？」

「斥候等の仕事全部できなくなるっす」

「……」

お前!!そんな悲しいこと言うなよ!!
俺とお前は兄弟になれるはずだったのに……残念だ
非常に名残惜しいが諦めることにした、ただしいずれ使ってみたい

「2人は何か選んだんです？」

「そりゃ勿論！」

まどか先輩がまず取り出した
靴というよりはズボン？足元にまで広がっている

「パピオムガンバって言うんだ」

「なんかゴツいようなゴツくはないような……」

「虫を使った素材で出来ててね、走った時のスタミナを抑えてくれるんだ」

「へえそりゃ強い」

「戦闘においてスタミナ大事だし、斥候とかでも高い方がいいしね」

なるほど、確かにそう言われると道理だ

「盗賊って動き回ってるイメージあるからこれはどうかなってことで私は勧めておく

ね」

「ありがとうございます、走り先輩の方は？」

「ウチはこれっすねー」

なんだこれ？長靴？シューズではあるが長くて使いづらそうだなの第一印象だった

「大丈夫です？走るの遅くなったりしません？」

「そこは問題ないっすよ、普通のシューズなんで」

「普通なんですか？」

到底普通には見えないが……

「普通では流石にないっすけどこれはＥＯＤシューズって言うっす」

「ＥＯＤ？」

初めて聞く単語だ、難しいの選ぶなーもう

「Ｅｘｐｌｏｓｉｖｅ　Ｏｒｄｎａｎｃｅ　Ｄｉｓｐｏｓａｌ　……簡単に言うと爆発物処理とかそう言った耐性持ちっすよ」

「爆発物の処理？」

「簡単に言うと罠の軽減っすね」

シンプルに強いなそれ、特に盗賊って先行するから罠がつきものだし

「被害減らせるんでキル夫君にはいいかなーって」

「転移までは防げるとは思わないがそれでも軽減できるなら魅力的だ」

「でしょー、だから選んできたっすけど」

「悩むな……どっちも魅力的だ」

自分のマベリックランナーも良いんじゃないかって提案しようとしたが絶対怒られるのでやめておく

と言うか機嫌損ねたらまずいし……

まあ直感に頼るか、どっちかいいかとかはない

1：俺は生きて帰ってくる！　パピオムガンバ

2：俺、爆発物処理班になります　ＥＯＤシューズ

１ｄ２：２　ＥＯＤシューズ

「こっちにすっかな」

「……意外っすねキル夫君逆選ぶと思ったっすけど」

「そうですかい？」

「向こうの方が防具としては優秀だし前線で戦うこともあるっすから」

「あーまあそうですかね」

確かに走り続けられるのも強いし防御力は純粋な火力にも直結する
何せ防御力が上がれば回復前に殴れる回数が増えるから

「ただまあこっちっすかね」

「理由聞いていいっすか？」

走り先輩が尋ねてくるが……自分で選んだんですよね？

「まず1つ、純粋な被害の軽減ですね自分だけならまだしも味方が近くにいると被害そっちにも及ぶんで……」

この前の罠を思い出す、一度調べても新たな罠が生まれる可能性がある……そう言ったのを防ぎたいし

「それにまあこれは私情なんですが……」

「ん？」

「自分だけスタミナが持ったおかげで逃げられたとかやりたくないんで」

「……」

「……」

2人とも無言になる

やっぱこういう理由はダメか？

「冒険者として最悪っすね」

「だよね……最悪危険生物がいたら逃げて報告しなきゃいけないのに……」

やっぱそうだよな、冒険者として生きる気なのに馬鹿すぎる

「でもまあ……嫌いじゃないっすねそう言うの」

「保身ばかりの人間はねえ……」

「いいんですか？」

「ん？冒険者としては良くないけどそんなのどうでも良いっすし、敵以上に強くなればいいでしょ？」

「盗賊ですけどね……」

「出来るよ、富樫君と鳰ちゃんの弟子だもん！」

「頑張ります……」

そうだな、焦って今強くなれってわけじゃないし覚えながら強くなりゃいいだけだ……

これからもちゃんと教わって強くなろうそうしよう

「よしこれください！」

「1年分になりまーす」

「……」

手持ち：8ヶ月分

――――――――――――――――――――――――――――――

「依頼も受けたり中間で少しだけ稼いだと思ったんですがね」

ＥＯＤシューズを手に持ちながら言い訳のように呟く

「別にいっすよ、弟子が強くなるなら師匠も鼻高々っすから」

走り先輩に半分払ってもらうことに……返さなくていいって言われたが辛い……

カッコつけてこれだし

「と言うか中間試験それだけのことやって儲け少ないね……」

「下水道でしたし……他のグループと一緒だったんで……」

やっぱ少なかったのねあれ……運がないなあ

狛枝の仕業か!?

「まあ恥かくようなことはやめて下さいってね」

「気を付けます……」

これを付けて慢心してたらそれこそ怒られるだろう……気を付けないと

「しかし1位って凄いねキル夫君のチーム」

「仲間が凄かったのもありますね」

特に立華さん……本当に神官で収まってないじゃん……

「改めて実力知りたくなったっすねー、今度組んで依頼とか受けてみよって」

「時間があればいつでも」

アカネ先輩の時もそうだ、同じコースの先輩方と一緒に戦うのは覚える事が増える
自分の成長になりやすいなって

「えーじゃあ私も友達連れて行って皆で行く？」

「まどかちゃん誰連れてくるんすかー？」

「後輩にはなっちゃうけどシノンちゃんとかもりそばちゃんとか連れてこようかなって」

シノン先輩は覚えている、ただもりそば先輩は知らない……ん？と言うか……

「あの……」

「どうしたのキル夫君？」

「男は俺だけなのでしょうか……？」

「そうだけど？」

「……」

拝啓父上様……助けてください

いや本当にマジで

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

第１４話

「相変わらず武器の使い方は乱暴には見えるが、なんというかサマになってるのぅ」

俺の戦い方を見て富樫先輩が答える

「サマになってるって……蛮族っぽいって事ですか？」

「まあそうじゃな、しかしそれはそれでアリだが」

「そうですか、ありがとうございます」

「しかし普段からボチボチ見ておるが急に見て欲しいとはどう言った了見じゃ？」

「あー……」

富樫先輩に頼み込んで今の自分の実力を見てもらっている理由は明白だが

「実はまどか先輩達と依頼を受けようって話になって……」

「ふむ、それで？」

「他のメンバー誘ってるみたいなんですが全員女子で……」

「つまりはいい所見せたいと？」

「いえ……役に立たないと俺の立場悪くなりそうだなと」

「……世知辛いのぅ」

憐むような目で見てくる、そりゃ俺も辛いけどさあ!!

「一緒に来てくれません?」

「残念だが明日は阿部達と用事があってのぅ」

阿部先輩、確か戦士コースの先輩だあった時尻がゾッとしたけどどうしてだろう

「そうですか……」

「まあそのメンバーで行くのは仕方ないだろうから諦めるとして今日どうするんじゃ?」

「今日ですか?」

「このままワシとやるでもいいが偶には他の奴とやったらどうじゃ?」

「例えばそこの姫柊の嬢ちゃんとか」

「姫柊か」

向こうのほうをチラッと見るとこっちを見てる

と言うか富樫先輩なにかと姫柊と関わらせようとしてこない？いいけど

「まあ他にも先輩後輩色々いるしな、自由にすればいいと思うが」

よく見りゃ爆豪もいるな……アイツとも一度戦ってみたいが……

「……」

姫柊がずっとこっちを見ています、他の方見ると残念そうな顔をします

「……分かりました」

俺は諦めて姫柊の方へ行く
すると嬉しそうな顔してるしまあいいだろう

「んじゃやるか姫柊」

「……」

すると残念そうな顔をする
一体なんなんだ？

「どうしたんだよ姫柊」

「雪菜ですよ先輩」

「……」

確かに前回言われたが意図的に呼んで無かったと言うのに

え？呼ばなきゃダメなん？女子を下の名前で呼ぶの意外と難易度高いんだぞ？

「雪菜、やんぞ」

「はいっ先輩！」

なんだこれ？なんだこれ？
富樫先輩、なんすかこれ？
……まあいいや、戦おっと

――――――――――――――――――――――――

当然だが雪菜は相当強い
あの時点で強いし戦闘においては勝ち目無かっただろうし
それが今は盗賊兼でやってる俺と戦士専念の彼女だ、相当差が出る

「少なくとも正面切っちゃ敵わねえ」

敵の攻撃をなんとかいなしながら考える
正直それだけでも辛い力の差がある
罠すら張らせてくれねえか……

「そんなものですか？」

「うっせー」

相手のペースに乗せられるとまずい
ただ……どうすりゃいいんだ

「（相手が攻めあぐねてますね）」

正直先輩なら突っ込んでくるだろうと考えていて意外と思っている
なにせ富樫先輩のケンカ殺法はよく見ているが突っ込んでくるし

「それが先輩の戦い方なんでしょうけど……」

ただの戦士みたいな動きじゃない方戦い辛い、隠し球が多い筈だし
どうやら魔術も嗜んでるみたいだしどうしたものか

お互い一手をどう決めるかそれが決めきれない

「やりますね」

「そりゃ先輩だしな……ただ雪菜も予想以上の出来じゃねえか」

自信がなくもわざと大口を叩く、こっちが不利なことを悟らせてはならない
隙を見せれば一瞬で食い破られる、相手はそれ程までに強い

「ええ、先輩に勝つためですから」

一方の雪菜の方は本音をぶつける、勝てるかどうかは分からないが勝ちたいと言う気

持ちはあるから

「……」

「……」

お互い進めず見合う、何をしてくるか分からない、先に油断を見せられないから
見合う中、手だけを動かして落とし穴の種を埋める

勿論相手が動けばすぐに対応できるように
そしてバレないように
……流石に魔罠を使うほど外道ではないというか……使ったらオールマイト先生に
ぶっ飛ばされる
落とし穴の種もまあ穴ぼこにしちまうしグレーな気がするけど……

「……はっ」

動いて詰めてこいとナイフを投げて牽制する
しかし望み虚しく刀で撃ち落とされるだけで終わる

「(流石に甘ちゃんじゃねえよなあ……)」

「クスッ、どうしました先輩？ケンカって投げてやるものですか？」

「はっ乗るかよそんなあからさまな罠に」

富樫先輩に悪いことしてる気がするが正面から乗れるワケがねえ
と言うか富樫先輩に仕組まれた戦いだしこれでいいだろ！
さて……しかしどうするか

「先輩、退いてばかりじゃなくて早くナイフで突っ込んで来たらどうです？」

「乗るかっての……」

このまま闇雲に突っ込んでも勝ち目なんざねえ……ナイフを見切られておしまいだ

「……ん？」

「どうしました先輩？」

ああそうか……その手はあるか富樫先輩から教わってたな
そして相手には隙があるか

「いや……割と力押しじゃなきゃ勝てなそうだなって無論小細工張ってだが」

「正々堂々来てくださいよ」

「どっちみち疑うだろうが」

「むしろその方が疑います」

「そらみろ」

落とし穴なんざ仕掛けても本能で回避されるだろうが、なんでこんな勘が鋭いんですかねえ……

ってことで仕掛ける

「んじゃこれはどうってな！」

突進するとともに左手に持つナイフを投げる

回避は出来るだろうが割と無茶な体勢になるしこっちの突進を止められないだろう

「残念ですが……」

投げた物を躱しつつそのまま距離を取ってくる

突っ込むには程遠いが……

「丁寧にブッ込むだけが戦いじゃねえんだよ！」

右手で持っていた先程までメイン武器として使っていたナイフをすかさず投げる
無理して距離を取ったから回避することは不可能だろう
んで悪いが普通の戦闘じゃ勝ち目ないし一応支給品にあったし遠慮無く痺れ薬を使わせてもらう
……当たれば勝ちだ

「……本当に凄いですねセンパイは」

本当に盗賊なのに戦士並みに戦えて、それでいて他の技能も使えて凄いですね
ただ戦士として負けられません

「……後ろか」

「すみません、こちらも必殺技を使わせてもらいました武器を失った今私の勝ちですね」

俊足を超えるレベルで俺の後ろへと回ったか

まさか躱しながらそこまでのスピードで動けるとはねえ……本当に本当に予想……

「狙い通りだ……」

「え？」

やっぱり出来た一瞬の隙、そこを利用して相手を掴む
考えてた通りケンカ殺法は武器を持って成立すると思っていたらしい

「悪いな、一緒に落ちてもらうぜ」

確か富樫先輩はバスタースルーって言ってたっけ？背負い投げにしか見えねえが……それでも通用する
そのまま逃げられないようの掴んだまま自分もろとも落とし穴に落ちる

「先輩……？」

「力技だがな……だが穴の中で上を取った以上行動出来ねえから俺の勝ちだな」

かなり強引であるが穴の中でポジションを取った時点で抜け出せねえ、つまりは勝ちだ

「……」

「正々堂々じゃ勝てねえしな……悪いな俺らしい戦い方でよ」

「……いえ……そうではなくて」

「あん？」

何かあんのか？まだ負けを認められないと言うわけでは無さそうだが……

「あの……先輩降りて下さい」

「……!!」

やべっ確かにそうだわ、流石に押し倒してるとか寝ぼけたこと言い出す奴はいねえだろうけどこの体勢やべえわ……

「降ります……」

勝ったけど色々と気まずい……もう落とし穴で相手と共に落ちる作戦はやめた方がいいかもしれない……

そのまま登ろうとして一度崩れて再び乗って怒られた、俺が悪いわけじゃない

…

「負けは負けですが……納得し辛いですね」

「最後は色々すまん」

「落とすだけで良かったでしょうよ」

「そしたらさっきのでまた落ちる前に抜け出したろ？」

「あー……確かに」

だからさっきのはセーフ！無罪！……でも謝ります

「さっきのはとっておきか？」

「そうですね、黒雷……身体強化みたいな物です」

「うまく隠してやがった……」

「前からできましたけど……」

あー確かに依頼の時は足痛めてたもんな

「先輩の方のそれは？」

「あーケンカ殺法だ」

「ケンカ殺法って確かに素手は全くないわけではありませんがドスとか富樫先輩はそう言ったのメインのように見えましたが……」

「富樫先輩の師匠の方は素手メインだったんだとさ元はジェフ流ケンカ殺法と言ったらしい」

「魔改造されてません？」

「富樫先輩ドス好きだから……」

なんかその方が漢らしいと言って勝手に独自の突き進んでるらしいが……まあ分からん

「時間もここまでなのが残念ですね、次は勝ちますよ」

「悪いが正々堂々じゃなく俺が勝つよ」

「放っておくと手品増えそうですもんね先輩は」

「増やす、生きるためにも」

化け物相手じゃ投げれねえかもしれねえがケンカ殺法はこれだけじゃ終わらねえ
明日までにもっと独自の手数を増やそう……

―――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ　１ｄ１３：１２　新規（男）

「キル夫君、今日は戦士コース行ってたの？」

「ん？渚か。ああそうだぜ」

潮田渚、俺と同じく盗賊コースの人間で偶に授業で組んだりもする
男のはずだが何故か女装が綺麗っては聞くが……まあそこはどうでもいいか

「凄いよねキル夫君は」

「何、渚だってすげえだろうよ」

暗殺系の技能を覚えているらしいが……俺だって正直目の前にいたはずなのに見失うレベルだ
暗殺者の適正強過ぎね？って

「いや……先生から習ったことをそのまま大切にしてるだけだよ」

先生か、この学園に来る前に習っていたことらしいが……まだ若いのにどんな人生な

んだよ

「そうか、この学園にも一応そう言うの得意な先輩もいるけどな」

「教わりたい気もするけど……先生の教えてくれたこと大事にしたい気持ちもあるし悩むね……」

走り先輩から教わるのはアリかもしれねえが確かに渚のとは違うかもしれねえ

走り先輩は見つからずにだし、渚は存在感を消すだし……

「ただ、そのことは無駄にならないと思うけどさ」

「まあ無駄なんざ滅多にないもんな」

無駄が全くないとは言わねえ、だって確かに存在はしてるし

「一度会ってみようかな」

「生半可な覚悟では会わないほうがいいと思うぞ」

勧めたわけではない……いるって言っただけだ

少なくとも折原先輩よりかはマシだがそれでも関わらない方がいいと思う

「……魔境なんだね本当にここ」

「正直冒険者の方がマシじゃね？って思うことは少しあるわ」

若干渚に不安を残してしまったが、それでも会いに行くって行ったら止めたしない

……ただ走り先輩好きそうだし会いに行かない方がいいと思うがなあ

渚の場合絶対弄られるし……なんなら着せ替え人形にさせられんだろ

その後渚はどうなったのかはまた今度

――――――――――――――――――――――――――――――――

２．３年コミュ　１ｄ１４：８　ゴクウブラック

「おっキル夫じゃねえか！」

「ゴクウ先輩こんにちわ！」

２年の先輩だったはず、戦ったことはないけど聖気を纏って戦う方法ってまどか先輩が言ってたな

「今日も面白え戦い方してたな、落とし穴に自分ごと落ちるって」

「あははは……まあ本職にゃ勝てないんで」

「オラが聖気教えてやっか？使えりゃいい具合に戦えんだろ？」

「すみません……聖気使えないんで」

使えない物を勉強しても仕方ない
練習不足とかそんなのではなく、加護のない俺が聖気自体使えたらおかしいんだが

「本当残念だな、オメー面白えしオラも面倒みたかったが」

「まあ、そこはごめんなさい」

正直人間としては嫌いじゃないが俺が全くできない聖気をポンポン使うこの先輩は苦手だ
羨ましかったり……嫉妬もあるんだろうな

「まあ気にすんなって、なんなら阿部みたいに脳髄で育つ方法だってあんぞ？」

「やめときます」

「まっ無理強いするもんじゃねえしな」

ゴクウ先輩自体も脳髄は好きじゃないらしい
ただ……やむを得ないなら文句は言い出さない人だし
本当に善人か自由人か判断つき辛い人だ

「そういや明日モリソバ達と出掛けんだってな」

「まあそうですね」

なんでゴクウ先輩が知ってるか知らねえが……事実だ

「オラも行っていいか？」

「急にどうしたんです……？止めはしませんが」

止める権利はないしまあゴクウ先輩でもいるだけで気まずさは無くなるし……ありがたいが

「いや、まあそう言う気分だってやつだ」

「つれない事言うねえ」

「阿部!?」

阿部先輩が来たようだ、しかし何故?

「明日富樫や俺達でやるんだろ?」

「そうだけど、ダメか?」

「ダメだね」

予定あったんすかゴクウ先輩

それはダメでしょ

「いや……なんでむさい男達の集まり優先するのかなって」

「悪くはないと思うがね」

阿部さんがそう言って頷いている、なんなの？

「と言うわけで悪いがゴクウは連れて行くぜ？」

「アッハイドウゾー」

そうしてゴクウ先輩は連れて行かれた
結局どうせいと？って話だがスルーでいいや
そして俺の胃のためにも男１人誘うことを決意した

――――――――――――――――――――――――――――

特殊コミュ：逃がさんお前だけは……!!

1d4：3　カ狛中爆

「あと1人を誘う、単純なことだ」

最悪雪菜とか女子でもいいからせめて1年、願わくば男子を探して俺は部屋を出る
初めは狛枝も考えたがいい加減頼り過ぎなことに気づいたし今回は止めた
お陰で難易度が上がったわけだが

「……」

誰かいないかと周囲を探す、勿論知らない人ばかりの姿が見える
その中で偶然知り合いを見つける

「……キル夫か、なんの用だ?」

「中嶋くーんみーつけた！」

「何の用だ……？」

不穏さを感じ取ったのか怪訝そうな声で尋ねる

「明日一緒に依頼受けない？」

「……」

悩んでいると言うか凄い嫌そうな顔をしている
でも中嶋なら断らないって信じてるから

「……断っていいか？なんか嫌な予感がする？」

「明日一緒に依頼受けない？」

「……」

同じ言葉を繰り返す、だって断るわけないじゃん気のせいでしょ

「嫌な予感がするんだが」

「明日一緒に依頼受けない？」

用事があるような人間じゃないし絶対大丈夫でしょ（畜生

それに何かあったらこの前の件で無理やりついて来てもらうし

「……何をするんだ？」

「オッケーありがとう」

「何をするんだと聞いたが」

「まあ先輩達と一緒に依頼を受けるからどうだって感じだが……」

「先輩は誰だ？」

そこ聞いちゃう？そこ聞いちゃいます？
走り先輩とか話しちゃうと不味いかもだし安直な……それに知ってそうな人がいいか

「まどか先輩とか」

「……帰っていいか？」

「明日一緒に依頼受けない？」

逃げさん……お前だけは……!!
はいにするまで選択肢を繰り返してやる

「……分かった、だから粘着するのやめてくれ」

「やっぱ持つべき物は友だな！」

「裁かれたいのか？」

少々苛立ち気味な中嶋が返答する
これ以上はまずいかもしれない

「じゃあとりあえず明日な！」

「……何故こんなことになった」

中嶋は後悔しつつも諦めて明日の準備をすると戻るひとまずは難所を乗り越えた
明日はとりあえず中嶋に胃痛を押し付けよう！

そう思うくらいには精神が追い詰められていた

明日は中島のおかげで助かりそうだと思いながら……寝坊は命が怖いので早く寝ることにした

せめていいところで少しでも見せれますように
じゃねえと俺明日から生きていけない気がするから
となんやかんや小心ハートで明日を迎えるのだった

―――――――――――――――――――――――――――――

第15話

「ってことで点呼ー、1！」

「2っす」

「3」

と言った流れでみんな集まっている
最後の6を言った中嶋は不機嫌そうだが

「どうしたの正義君、調子悪いの？」

「いえ、なんでも」

凄い怯えたような顔が見える……
やはり同じコースの先輩ってヤバいんだな……

「そんな怖がられても困るよ」

「そうだな……」

まだどよんとしているがそれでもさっきよりはマシそうだ
と言うかこれ以上沈んでられないって感じだ

「キル夫、盾にするつもりだからな」

「えー、あたしたちそんな関係じゃないじゃん」

「殴るぞ」

「ダメだよ殴っちゃ」

「はい……」

やっぱり、気色悪いが乙女っぽく（）振舞えばこのメンバーならその方が助かりそうかなって

「あっキル夫君キル夫君」

「どうしました走り先輩？」

「次気持ち悪いのやったら攻撃するんで」

「……」

世の中そうは甘くないらしい、悲しいね

まあ仕方ないか……しっかりとやって行こう

「今日来たところ初めてなんですが……」

いわゆる海底洞窟と呼ばれている場所らしい
こんなところあったんだと言ったところだ

「まあ、学園や冒険者じゃないとこんなところ来ないしね」

「どう言ったのが出るんですか？」

「蠍とか毒持ったやつとかいわば危険生物って感じのが多いから気をつけた方がいいかも」

そりゃまずいな……一瞬で命を取られるとたまったもんじゃない

「後恐竜」

「え？」

聞いたことあるけど恐竜って絶滅したんじゃないのか？
と言うか洞窟だよな？

「見たって言ったことある人いるんだ、確証はないけど」

「嘘っぽいですね……」

「ただ……恐竜じゃなくとも竜は出るかも」

「マジっすか……」

なんでわざわざこんな所に……危険すぎやしないか？

「明らかに危険過ぎません？」

「その分真珠とか取れたりするかもだからお金になるんすよ」

「命あってのもの種じゃ……？」

死んだらダメだろう、流石に
先輩方多いから大丈夫かもとは思うがそれでも危険はない方がいい

「どっかの誰かさんが全額払えないような金欠っすから」

「ごめんなさい」

ＤＯＧＥＺＡ、それしかないと即座にする
そうか、俺のせいだったのか……

「私は構わないとは言え後輩達はやはり危険では？」

もりそば先輩が少しだけ不安そうにしている

いいぞ止めてくれ！

「大丈夫でしょ、コイツ強いし」

その一方でシノン先輩がＧＯサインを出す

なんでー!?俺の方見て強いって何!?

「病み村の時凄かったって聞いたし行けるでしょ」

「「へー」」

「ひえっ」

２人の３年先輩にロックオンされる、だめだー逃げられねえ

「ってわけで行こっか」

「おーっ」

２人を先頭にどんどん進む
中嶋は自分も巻き込まれた怒りとそれでも今のを見た哀れみと混じったような目で見てきた
絶対許早苗

――――――――――――――――――――――――――――――

「本当に危険な生物とかだな……」

ムカデが襲ってきてそれを駆除する……と言うかデカくね？
噛みつかれたりとかも勘弁だな

「ってかまどか先輩達本当によくこんな所選びましたね」

「ん？何が？」

「いや、虫とか多いですし」

「そうだねえ、虫とかダメな人いたら場所変えたかもだけど、このメンバーだし」

全員虫とか蛇とか大丈夫なのか、ならいいけど

……いやこの先輩達なら絶対嫌な人居ても無理やり連れてきそうだな

何故だかそんな気がした

「しかし凄いもんだ」

「中嶋、誰がだ？」

言えないかもだが一応聞いておく、立場悪くなったらごめん

「シノン先輩だな、正直戦えるとは……」

「怒られんぞ……」

元から戦えたのは知ってるし、それにあの装備で戦えないって思うのはヤバいんじゃ？

ほらっ怒ったようにこっち見てるよ

「そうではない」

「じゃあどう言うことですかー？早く言わないと撃たれるぞ」

「それだな。ここは洞窟内なのだが」

「……確かに」

洞窟内は密封された空間だし射撃も危ない

下手に壁に当たると反射するだろうし仲間に危険が及ぶ

……小さい虫にも当ててんな

「それくらい出来るでしょ」

「普通はできないと思いますが」

「と言うか出来るの知ってるから連れてきたっすよ」

すげーな……本当に色々と
俺も投擲とかするし精度上げなきゃだもだが……キッツイなあ

「シノンは2年の戦士でも戦いたくない奴が多いぞ」

「そうなんですか?もりそば先輩?」

「ああ、近接は得意では無いが多少は出来るし気付けば距離を取られ射撃を受ける」

「あー……確かに俺とか勝ち目ないな」

畳み掛けれるほど火力があるわけでもないし、だからと言って追いつくのにも不安だいや……そもそも2年に勝てるとは思わんが

「だがそうだな……岡島の場合は走り先輩が師匠なら急所突きのような物を覚えてもいいかもしれないな」

「まあ……俺は戦士としてもなんとかしたくはあるんでそれ以外も練習しますけどね……」

急所突きは理想だが正直急所が分からん相手に闇雲に狙うほど余裕はない
力押しの術を流石に捨てきれない

「ふーん」

「なんでしょう走り先輩？」

「いやー、なーんか後輩が生意気な気がするっすねー」

「キノセイデス」

別に否定したわけじゃないから許してよ!!
ねえ助けて!!
生意気じゃないですー従順です!!

「まあとにかく後で死ぬほど練習させれるんで」

「やめて下さい」

自分で墓穴掘ったけどこれはよくない……
よし逃げよう!

「あっ敵だ」

すぐに敵を見つけて駆けていく
これで違和感……バリバリだけど仕方ない

「……ん？」

敵が宝箱を落とす、落とすのは初めて見たなそういや

「おっ宝箱っすか」

幸先いいと感じながら早速開けようとする
……俺でいいんだろうか？

「どうしたっすか？」

「いや……先輩いるけど俺でいいのかなって」

「あー、なるほどなるほどーどうぞどうぞ」

しかし普通に譲ってくれた
驚きもしないが少し恨めしそうに見てくるとも思ったが……まあ慣れているのかな？

「海底洞窟の宝箱か」

「もりそば先輩、どんな感じです？」

「本当に貴金属が多く感じるぞ」

「そりゃよかった」

それじゃあ今回は確実に開けてきたい……ん？

「鍵かかってなくね？」

「かかってないこと多いっすね、確かに」

なるほど、開けたかったがまあそれはそれでいいや
なら中身はーっと

「ガッ……」

なんだこれ痺れる、嘘だろ？俺こう言うの普段なら対応出来るんだが……

「立てるんすか……!?」

「ああ……きついけど」

と言うかこれ知ってたのか走り先輩……酷くねえか？

「鍵は掛からず痺れ罠が多いんすよね、それも立てない程」

「ああ、だからこんなキツいのか……」

正直体の辛さをここまで感じたのはいつぶりだろうか……子供の頃レベルな気がした

……耐性に頼り過ぎてたか？

「まあキル夫君に開けさせたのはこれもあるんすけど……」

走り先輩がそう言うと敵がわんさか出てくる

つか多いなこれ……マジでなんなんだ？

「こうやって開けた瞬間痺れさせて襲ってくるような罠が多いんすよね」

「俺に開けさせたのって……」

「この中で行動不能になるのは誰がマシかなって……」

「……ぐすん」

「あーもう泣かないで欲しいっす」

敵も量が恐ろしかったが味方が先輩ばかりだし余裕で駆除出来た……
俺って……

「ごにょごにょ」

「ごにょごにょ」

何話してるんだ？俺を笑ってたり？
なんかありそうだなー……してたら泣こ

「流石キル夫君！」

「何もしてない!?」

いきなりどうしたって言うんだ……？

「いや、実際ここの罠は私達神官でさえ厳しいんだよ……それこそ動けないレベルだし辛いの」

「……そうですか」

確かに相当辛いものはあったこの耐性は実際よく分からんが考えてみると恐ろしいんだなこれ

って思ったがこれ麻痺耐性付けてくりゃ良かったんじゃね？

先輩達もそれ知ってるよな

「それに、動けないのに立ち上がって活躍しようとする気概流石っすよ」

「……ありがとうございます」

多分打ち合わせしてたんだろうなこれ
ただ……そうだな……嬉しいのは俺が単純なんだろうな

「ところで先輩」

「どうしたの？」

「なんでわざわざこんな面倒な戦闘したんですか？」

これ知ってたなら最悪宝箱持ち帰ればよかったんじゃ？って思うけど

「あーそれは、あると思ったからっすね」

「何が？」

「冒険者の遺体っす」

言葉に詰まる、やはり宿命だとしても慣れない
慣れない方がいいのかもしれないけど

「結構な人数やっぱ死んでるっすよね」

「しょうがない、だって知らない人間にとってカモだもの」

「救えねえな、色々と」

中嶋が哀れそうな目で遺体を見る
葬いとかはしないらしいが

「まあそれはそれこれはこれってことで……」

「それじゃ休憩しながら剥ぎ取りしようか」

食事の準備とかを始め他のメンバーは剥ぎ取りをする

確かに狩り尽くしたしここが安全だが……遺体やら残骸やら……よくここで休憩出来るな……

話してみたら冒険者はそんなことより安全が第一だからむしろ慣れておけらしい……道理過ぎる……

―――――――――――――――――――――――――――――

コミュ　１ｄ５：３　シノン

「あれからどうなの？」

休憩中唐突にシノン先輩に話しかけられた
あれからは病み村のことだろうけど

「先輩達に教わりながら成長して行ってますよ」

「そう……」

流石に先輩にそちらこそどうですかって言うのもな……
何より銃分かんねえし……複雑そうな武器だと思ってはいる

「……」

「どうしましたシノン先輩？」

「これ」

そう言ってライフルを渡してくる、え？なんで？

「ありが……重っ……」

持てない重さではないが、普段これ使いまわしてるのかと思うと驚く重さだ
と言うかあれだ……前はライフルを鈍器とかに使えんじゃねえのか？って思ったが

……無理だわ

「用件はそうじゃないけど」

「何をさせたいんです？」

「引き金って引ける？」

「ええ引けますけど……」

別に引くだけなら軽いしいける
反動とかが凄いのかな？そう言うことは

「それで相手は死ぬ」

「え……？」

そう言われると確かにそうだが……そうなのだが
……そうか人とかでも死ぬ可能性はあるんだよな

「剣とかは人を斬るとか目の前で感じることになるけど……銃は別」

「そう……ですね」

「これに似たものがあるの分かる？」

「いえ……弓とかですか？」

「違うよ、弓は銃よりも引くものが重い」

……確かにそうかもしれない、銃に比べると色々と生じそうだ

「では一体……？」

「罠」

「!?」

罠、罠だと……

「キル夫は、ダンジョンとかで掛からなかった罠ってどう思う」

「仕方ないなって思いますけど……」

「もしも殺傷力のある罠で誰かが踏んだらどうする?」

「そりゃ……気を付けますけど」

流石にそんな危険な罠を対人では使わない
昨日だって雪菜に魔罠は避けたし

「ダンジョンでは？」

「そりゃ……敵に効かなきゃ意味ないですから……」

「残してって誰かが踏んだら死ぬよ」

「そうですね……」

確かにそうだ……そう言うところも気をつけなきゃいけない

「罠は仕掛ければ誰か死ぬかもしれない……ただ引き金を引くみたいに仕掛けるのは簡単」

「……」

今までの行動を考えても反論が出来ねえ……

「使わねえ方がいいと？」

「逆……」

逆……一体何が言いたいんださっきから？

「それなら私だって銃使うなになるし」

「そんなことは考えてませんでしたが確かに……」

罠使うなーなら銃も使うなーになる？

「敵によって罠を変えるだろうけど、それで敵を仕留めたいなら遠慮無く心を鬼にした方がいいと思う」

「……」

「盗賊なんでしょ？時には甘さも捨てなきゃダメ、誰かを殺すんだって感じのね」

「……」

確かに今までは罠は必要だから仕掛けてたで闇雲に使えばいいやと考えてた
ただそうだ……使い方や時には甘さを捨てなきゃダメだろうな……そこがまだ冒険者として弱かったか……

「ありがとうございましたシノン先輩」

「まっだからって思い詰めすぎないように」

「はい！」

罠の改良とかって出来るかな、甘さを捨てるのも必要だが使うに至って使いやすいとかそう言ったのも考えてみたくなった

…

「やっほシノンちゃん」

「どうしましたまどか先輩」

「いや面白いなーって」

「……何がです？」

「自分の大切な銃渡しますよーってくらい信頼してるのに」

「ストップ」

「何か話題作らなきゃってとりあえず先輩面しておけばいいだろって突然振る舞ってキル夫君に説教やら今後すべき事を伝える」

「止めてください」

「いやあ面白いなあって」

「……」

シノンは先輩だがやはりその上の先輩には歯が立たないのであった

――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ　１ｄ４：３　もりそば

「どうした？」

「いやあ色々と難しいなって」

罠への配慮も必要だし俺の場合は魔法も注意が必要だろう

そう考えるとやれることはなんなんだって

「まあ、１年は悩んでなんぼだろう」

「そう言われりゃそうですが……」

まだまだ悩む余裕は十分にある

「あの……もりそば先輩」

「どうした？」

「剣一本ってきついですか？」

「……」

もちろん剣を使う気はあまり無いが……それでも必要に駆られるなら

「無理だろうな、私も聖気を使ってなお厳しいし」

「……そうですか」

勿論聖気の使えない俺には尚更厳しいだろうよ
そもそも聖気無しでも勝てると思わんが

「結局、出来る手数を増やす、或いは一手の幅を広げるだろうな」

一本を専念は相当厳しいらしい、俺にゃ無理だわ、盗賊だし

「それぞれ長所と短所がある、どちらがふさわしいかだがな」

「多分……派生になりそうですけどね」

「……」

「キル夫」

「なんです？」

少し真面目そうな顔でもりそばは答える

「もっと仲間をアテにしろ」

「……え？」

「大方シノンに何か言われたようだが、もっと仲間を信じてやれ」

「信じているはずですが……」

「恐らくだがお前の派生は、強いからじゃなくて何かが怖いから……全部自分で解決すれば安全だからとか言った寝ぼけた答えだろう」

「……」

図星を刺され言葉に戸惑う

最悪ナイフが強くなれば俺自身が盾にでもなれるし

「仲間はお前を信じて組んでるんだ、だから自分ができることをやっていけ」

「……はい」

気をつけるのはいいが躊躇いはやめろと……

確かに中途半端が一番弱いか

「まあそうだな1年だしやりたいこと全部やるでも咎めないだろうし、色々と考えてから1つに絞り込むのもありだ」

「……」

「もうちょっと軽く生きてみろ」

また再び注意みたいなものを受けてそれを噛み締める

自分にとっちゃまだ難しいから

そうなれるようにみんなの言葉を大切にして行きたい

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「結構な稼ぎになりそうっすねー」

冒険者や先程の宝箱の中身を数える

具体的な値段は分からないが先輩達が結構な稼ぎとるならそうなんだろう

……まあイエスマンになっておけばいいか

「じゃあ帰るっすか？」

「まあ、そうですね」

今日は明らかなボス系とかみたいなのと当たってないがそれでいいだろう
楽だったとは言わないけど、たまにゃ落ち着けるダンジョンもあるんだなって

「それじゃあ帰るぞ」

もりそば先輩が先導して帰ろうとする

「あれ？」

今いたはずのもりそば先輩がいないんだが……
何処かにワープした？

「もりそば先輩ー？」

「下」

「え?」

シノン先輩に言われて下を見るもりそば先輩が倒れている

「どうしたんすか!?」

しかし返事はない……流石に死んではないと安堵するが気絶している

「何が?」

「蠍……いや多分これはティタノボアだね」

「……」

「警戒は必要っすけど辛気臭くならなくていいっすよ、そこまで強い相手じゃないんで」

「ならいいが……何処だ？」

「本来ならこう言うのって盗賊が探知するんすけど……なんか出来ないんすよね……」

「え？どうして？」

と言うか走り先輩が探知できないんじゃ俺で出来るわけねえじゃん……

どうしろってんだ

「何というか、学習したのかあちこちから気配を感じるんすよねー」

「なんかここに居ないって散らしてるような？」

「そんな感じなんすよー」

たくさん気配がある……確かにそれは絞りにくいなどうすりゃいいんだろうな

「……ん？」

散らしてるだけならまだマシだが……

全部本物ってあんのか？

「あの……走り先輩」

「なんすか？」

割と深刻そうな顔をしているが……それでも耳を傾けてくれる

「集団に囲まれている、とかってないっすか？」

「……」

驚いた表情をする、盲点だったのかどうかは分からないけど

「いや……この量っすよ？生半可な量じゃないけどありえるっすかね……」

ティタノボアがこんなに出るなんてありえない……ありえないが……

「あー……不運なんすかねえ」

「鳰ちゃん大丈夫？」

「ちょーっと不味いかもしれないっすね」

「……」

深刻な雰囲気になりながら現状を飲み込む

これはどうなんだろうな

「キル夫君」

「なんですか走り先輩」

「今回はマジでキル夫君も主力だと思うんで頑張って欲しいっす……足音は聞こえないんで」

「マジか」

息を飲む、これは流石に不味いなと
ただ……負けられねえなやっぱり
全部叩き切ってみせる
啖呵を切って今見える蛇に襲い掛かった
ＢＯＳＳ：ティタノボアの群れ
クリア条件：群れの殲滅或いは海底洞窟からの脱出
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
続

第15話②

――――――――――――――――――――――――――――――

「辟易するぜ……」

わざとこちらを挑発するためか、あちこちから蛇が覗き見している
馬鹿にしているのかと思いたくなるが、量が量のせいでどうしようもない

「勿論逃げるのは無しだ」

「そりゃそうっすよ」

もりそば先輩がダウンしている、逃げたら助からないのは当然だ……
それだけじゃなくここから逃げるのはただじゃ済まないだろう
やはり逃げるのは愚策だ……ただ……

「どうすんだこれ……」

詰んでるわけじゃねえが多い……
先輩達が言うにゃ無理して狩るより守り優先と……一撃で気絶ってなんだよ……

「畜生が！」

一匹また狩る、その穴からまた一匹出てくる
次々に増えるそいつらを忌々しそうに見る
トリモチトラップで穴を塞ぐが、また他の場所のトリモチが破れて出てくる

「魔術師がいればどうにかなったか？」

「いや……多分それだと生き埋めっす……」

「おいおい……」

「まどかは魔術使えるけど……調節できないんで……」

マジかよまどか先輩魔術使えそうだとは思ったが極大なのだけ、みたいな?なのかよ
この量は流石に予想外なのだろうけど、だとするとどうするんだって話だ
どうにもなりませんでしたじゃすまねえし

「まあ対絶装備は付けたんでやるだけやるっすよ」

「まあそうっすね……」

先輩達から対絶装備を受け取り戦う
しかし限度もあるもので眩みはする

「中嶋、大丈夫か?」

「正直限界だな……」

気つけ薬を飲みながら無理して動く、それだけではなく肉体の疲労やダメージも重なってきているようだ

「……これを渡しておくぞ」

そう言って気つけ薬をこっちにも回される

「おい、俺は大丈夫な体質な方だ中嶋の方が良くないか？」

「馬鹿か、持つ奴を持たせるために渡してるんだ」

「正直キル夫君が肝心だしねえ……」

トリモチ切れると不味い……これが共通認識であり回復が優先してこっちへ飛んでくる

正直戦闘でそこまで役に立ってない気がするのが辛い

ただやることやらねえとな……
シノン先輩に負けちゃ不味いだろ

「ってか本当にただもんじゃねえな……」

一匹一匹撃ち落とす、ねえ銃だよね!?
さっきから凄いと思ってたけど恐ろしい集中力もある

急いで狩るのが使命なんだろうが……やはり戸惑いが出る
罠も魔術も……
要なんざ言われてるのに仕掛けるのが怖くなる

「何してるんすか?」

「いや……」

流石に言い出せやしねえな……迷惑以外でもねえし

つかそんなことしてる場合じゃねえ
ただ……まどか先輩の魔術だってやべえし……俺のはマシだとしてもどうなんだ?

「それで結局生き埋めになったら」

どうしようもない、救いようがない
何とかしなきゃならねえのにここまで追い詰められて怖がるのかよ俺……一匹一匹じゃ間に合わねえよ……

「キル夫君」

「なんですか走り先輩?」

「魔力の調整はまだ厳しいんすか?」

「……」

先輩はさっきまで言い出さなかったのは使えないことも考慮してだろう
今言いだすってことはいい加減余裕がないと
ただ……暴発が怖い

「なんだキル夫、まどか先輩よりも威力に自信があるのか？」

「中嶋……」

「おうやってくれや……正直こっちも限界だ……」

中嶋も限界が近くふらついている……
マジで……巻き込んだら軽く死にそうだ

「……」

人を殺す、それにはもう躊躇いはない
ただし仲間を殺す……それは別だろう

中嶋としては罪人であれば仲間とて殺して来たから躊躇いないのかもしれないが……

「キル夫」

「どうしましたシノン先輩」

正直集中してて話しかけてくるなんざ思ってなかったが……敵を撃ちながら話しかけてくる
どんな集中力だよ……

「怖いの？」

怖いのって……怖いのってなあ……
怖いさ、仲間に誤爆なんざごめんだ
なのになんで……

「元はと言えば……いや」

ここで責めてなんになる
事実であるのに間違いないのに、それを無鉄砲でやってた俺が問題だろうが!!

「ごめん」

「いえ、事実ですし」

慎重さを欠いてなんになるってことがある
盗賊の癖に臆病を捨てて命知らずは仲間を殺す

「そうじゃない、伝え忘れてた」

「……何を?」

「確かにキル夫のはスイッチを押すように人を殺すかもしれない魔術だって罠だって」

「だから気を付けろって……」

「ただ、仲間をもっと信じて……信じたからこそ使うって決めるような能力を持って欲しい」

「……」

信じろとか、命を奪うとか色々めちゃくちゃだな……
相変わらず先輩はみんな俺達に無茶振りしすぎじゃ……

「信じろか」

確かにここにいるのは俺より強い人たちばかりかんじゃ大丈夫だろ、中嶋？頑張れよ
そしてこのままじゃ詰む、それは分かりきってる
躊躇いすらも許されねえ状況だな本来は……

「時間かけ過ぎた」

「キル夫君大丈夫そうなんすか？」

「いや、分かんねえっす」

「えぇ……」

走り先輩が微妙そうな顔をしているが仕方ないだって分かんないんだもん！
前よりはマシだが……正直ぶっつけ本番に近い
ただ……深く考えずもっと軽く行こうぜ、みんな無事なはずだから

魔力を込めて部屋に向けて放つ
あれ？これ危ないか？まあ大丈夫か……
無事一方向に向けて飛び道を作った、なんだようまく出来んじゃん最初からこうすりゃ良かったじゃんかよ

「……」

意識がない少女が先程自分の言ったことを後悔している気がした

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「よし！一応は出口だ！」

現場の方を見ると魔法をぶちかました道が一本空いている
蛇達も集中的に狙われるのを嫌ったかそこには集まらない
つまり脱出しようと思えば出来るようになったのか

「いやー……流石キル夫君っすね……色々と酷いけど」

褒めてくれるが微妙そうな顔をしている
走り先輩もかなりギリギリそうなのもあるし突然ヒャッハーした俺にも問題がある気がする

「各自外に出る、撤退の準備っすよ」

結局何をするにしても迅速な判断は必要ではあるが……ただこれは……

「え？でももりそば先輩は？中嶋もやべえし……」

「まどかちゃん、もりそば先輩持っていって」

「はーい」

そう言うと軽々しく持ち上げる、すげえなおい……

まあこれで中嶋にも走ってもらって……

「おい……」

中嶋が唸っている、どうかしたのか？

「アイツら流石に追ってくんだろ」

「臆病ですから無理だと思うっすけど」

蛇は意外と臆病なんだっけか、ただ……この量かどうなんだろうな

「まあ、ウチが殿勤めるんで！急ぐっすよ」

蛇も落ち着きを戻し始めている
急いだ方がいいかもしれない

「中嶋、信じて行くぞ」

流石にこれ以上残っても仕方ないだろう
正直気絶しない俺の方が殿いいと思うんだが
一斉に来たら体力的な意味でやべぇ……

「……」

中嶋も無言のまま俺の後を来る、そうして走り先輩も脱出したようで無事に抜け出した

後はまどか先輩達と合流……

「は……？」

「ちょっとこれは流石になあ……」

道が塞がってるのはどう言うことだ？

この道は使えたはずだが

「アイツらっすか……」

遠くにワニの群れが見える、つかワニいたのかワニ……

これじゃあ戻るしかねえか……？

「あぁそうかい……」

アイツら追ってきてんのか流石に壁を背負ってはキツ過ぎるんだが……

「まどか」

「仕方ないね」

まどか先輩が何かを決心したようだが……

まあ決心しないとまずいだろ

「キル夫君」

「はい」

「みんなもだけど一応君には念のためにってね」

俺に念のためってなんだ？一体

「今から魔力を全力でぶっ放すから天井崩壊すると思う」

「……は？」

いやいや、どうなってんですかまどか先輩
いやそれしかないのか……

「仲間を信じろってこう言うことだよ、私はみんな脱出できると思ってるしこれしかないから」

仲間を信じるか、まどか先輩なら確かに余裕そうだが……
まあ問題ねえだろ

「撃ったら全力で前進して、逃げ遅れたら……諦めて」

「ダンジョンはまた復活するからいいっすけど……しかしここまでとは」

ダンジョンの難易度が上がってるのか?と考えているが正直俺は分からねえと言うか今は全力で脱出するだけだ!

「行くよ」

覚悟を決めた瞬間一気に魔力が集まる……

神官だろうと本当にすげえなオイ

「今っ」

巨大な魔力をぶつけた瞬間一斉に走りだす

ってかまどか先輩解き放った後なのになんでもりそば先輩抱えられるん?

「中嶋は大丈夫だよな？」

「出るまでならな……」

回復を済ませたようだが……だいぶ辛そうに急ぐ
そうして全力で走って行く
ワニと戦わねばと考えていたがさっきのまどか先輩の魔法でぶっ飛んでいる
後ろから追う蛇を……スルーするわけにはいかないと走り先輩が処理してやがる
……
と言うか俺がやらなきゃ他出来ねえしな

「走り先輩、俺も」

「さっきも言った通り走るっす」

「……」

もどかしい、自分がここで役に立てないのが
ただ足引っ張れねえなあ……
所詮気絶しにくいっていってもしにくいだけだし戦闘に役に立たねえか……
魔術は確かに役に立ったが……俺の魔術ってなんなんだろうな？

「正直、闇とかだとかそんなんだとは思うけど違うようなんだよな……」

狛枝が闇も兼ねてるって言ってたし本質が違うらしい……分からなきゃダメなんかねえ？

「キル夫、足元」

「危ねえ!?」

シノン先輩に言われて足元の瓦礫に気をつける転んだらしょうもねえ……
転んだら……!?

「走り先輩!!」

「どうしたっすかキル夫……!?」

敵を薙ぐ為に後ろ向きに走っていた
当然気づくのは遅れる

「先輩!!先輩!!」

走り先輩が蛇に襲われる
対策があったのかすぐに去ったが……ダメだ動かない……気絶しちまったのか?

「急げば!!」

急いで走り先輩の方へ駆け出す、瓦礫が降ってきてるし戻ってはならねえが……間に合うかもしれねえなら……

「キル夫君!?何やってるの」

まどか先輩が慌てたようだが知らねえ間に合え!!
必死に手を伸ばす、しかし走り先輩の方は伸ばせない、ただ間に合うかどうかだ!!

「……後一歩」

必死に手を伸ばして、間に合わない
ふざけんな届くはずだ、間に合わねえなんてねえよ

「……ごめん」

「ごめんじゃねえよ!」

どうにかなんだろ!?どうにかなってくれよ
何か起きてくれよ

目の前に天井が落下する、真下にいればひとたまりも無いだろう
蛇も……人も

「……何が起こった？」

間に合わなかったはずだ、手は届かなかったんだから
奇跡とかではない奇跡で人は動かない

「俺が何かしたのか？」

届かなかったはずの手は走り先輩を握っている
良かったと言う安堵や驚愕がやはりあるが
慌てて担いで走りだす、幸いさっきの落下で揺れが少しは収まったのか間に合う程度には走れている

「手が伸びた？身体強化？分からねえ……」

これが俺の固有魔術って奴か……？

とにかく今は脱出だけを考えて出て行った

無事に間に合ったか……先輩が生きててよかった……

「おいキル夫!?」

意識は失わなかったが脱出と同時にまた倒れた……いつもこう言う気がすんな……

また魔力が枯渇したか……何故だ？

クエストクリア：報酬一年分

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「……」

「……あの」

「……」

「……いつまでこうしてれば」

現在まどか先輩と走り先輩によって正座させられている
いい加減辛くなってきたんだが2人とも喋らないし

「……」

「……戻ったのはすみませんでした、ただ助けたかったんで」

「運が良かっただけだよ、本当は2人とも死んでいる」

「……」

軽率なのは事実であり言い返せない
恐らくは俺が使った謎の魔術で助けたんだろうが……分からん！

「２度とするなとは言わないけど、自己犠牲はやめて」

「助けられるなら助けたいけど……」

「私も自分でやったことで死んじゃうと耐えられないから」

周りを信じてるから魔術を使う
それを俺の身勝手でか……確かに辛いものはあるな

「冒険者っすから、死なんて身近なんすけどね」

「それでも……」

「まあ助かったのは事実っすから文句はあまり言いたくないけど流石に人が良過ぎって……」

「無事で良かったって思わせてくださいな」

結局は次回はって話するとキリないけど今回は全員無事だったで終わりたい

「……まどか」

「分かったよぉ……」

まどか先輩も諦めたように肩を落とす

今回はだろうからあまりやり過ぎてもダメそうだが

「それよりもそれよりも聞きたいことが」

「どうしたの？」

話題を変えようそうしよう

「俺の固有魔術なんですが少し分かったかもしれないっす」

「闇じゃないって言うなら普通に爆破系とかに見えたけど」

「それはそれで攻撃とかなんだろうけど他にもあるっぽいんで」

純粋な攻撃魔術はある、調節できないけど
それとは別に何かが間違いなくあった
多分めぐみんの爆裂魔法……とは違うが個人的なものなのだろう

「なんだかは分かってるっすか？」

「いえ……ちょっと不思議だなってくらいで」

手が伸びたのかもしれないし何かが起こったのかもしれない
ただ手が届かなかった走り先輩の手が届いたのだ

「流石に分からないかな」

「デスヨネー、まあボンドルド先生に聞いてみます」

「うーんキル夫君……」

走り先輩が何やら言いたそうだが
なんだ一体?

「ボンドルド先生には黙っておくっすよ」

「なんで!?」

「あの先生人攫いとかの噂が絶えないっすから……」

「人攫い?」

そんなことしてるのか……して……そうだな

「あまり特殊だと思うなら伏せたほうがいいと思うっすよ、ウチも大事な後輩失いたくないっすから」

「だったらどうしましょうかねえ」

このままじゃ分からないばかりだ
知らないほうがいいのかもしれないがな

「はやてちゃんに声かけておくね」

「誰でしょうか？」

「３年の魔術師の子だよⅣ君よりは安心できるかな」

「Ⅳ先輩……」

あの先輩は確かに何かありそうだったけど……そこまでなのか

「明日すぐとは行かないだろうけど少しでも分かるといいね」

「そうですね、分かりゃ手数増えて役に立てるんで」

はやて先輩は誰だか分からねえがそれでも2人が勧めるならいい人だろ

俺ももっと自分のことが知れればいいけど

「それじゃあこれで、また一緒に2人と探索したいですしはやて先輩とも知りあってもっと役に立って見せますから」

「キル夫君」

よし、いい感じに纏まって良かった

「そもそも話題変えて逃げようとしたから後正座1時間ね」

「ソンナー」

甘くなかった、悲しいね

――――――――――――――――――――――――――――――

「手は伸びない」

自室で腕を伸ばそうとするが勿論伸びなかった
必死に魔力を込めようとかしてみるが意味がない
そもそも身体が伸びる魔術じゃなきゃ意味がないんだが……
狛枝も見覚えがないらしいし難しい

「はやて先輩が分かりゃ一番なんだが……」

それまでには時間があるし少し自分なりに考えようとするが難しい

「まあ寝るか」

考えたって分からねえし、だったら疲れまくったし今日は休む
しかし……誰も死ななくて良かったな本当に……
疲れや安堵が混じって布団に入ればすぐに眠った……

「あん？」

気付けば見知らぬ場所にいる
明らかに寮とは全然違う……ただ外に出た記憶はない

「そもそも見たことねえなここ」

学園外でも見たことのない綺麗な扉が目の前にある

「まさか夢じゃねえのか？」

頬をつねるが勿論痛くない

「ん？」

痛くない、じゃあこれは夢なのか……しかしなんでそれなら知らない場所に？

「待ってても何もねえか」

観念して扉を開ける、中は明かにバーぼような場所だった

「ようこそ、ｂａｒデラスへ」

バーテンダーのような人物が声をかけてくれる

中年にも初老にも見える不思議な人物だ

「ここは……ｂａｒデラスて言ったな今?……何処にあるんだ?」

「何処にか、夢だな」

「やはり夢だったのか」

現状を理解できず話を続けようとする
ただそれ以上のことをバーテンダーは答えない

「……ダンマリか?」

「ここはバーだ」

頼めってことか?ただ夢の金って分からんぞ?
ただそれだとキリがなく頼むことにした……お酒は飲めないのでジュースだが
ただそれで良かったらしくこちらに好意的に振る舞う

「不躾だが、まずは……あんたは誰だ？」

誰だと聞くのは自分でも謎に思えるがそう聞かねばならない……そう思える程の謎の雰囲気を持った相手だった

「そうだな……俺はベルモンド・バンデラス、誰かと言うとアンタの友達の友達ってところだな」

俺の友達の友達？よく分からねえことを言い出すただ……悪人には見えねえな実際そうなのかもしれねえ

「とりあえず色々と聞きたい」

何故ここにいるのか、何をすればいいのかとか疑問に思うことが色々とあるそれを聞いていかなけりゃならねえ

「時間は十分にある、ゆっくり聞くとしよう」

カウンターに肘を組みこちらの話を聞く体制をとった

「これからのことは全部夢だ、ただ……忘れるなよ？大事なことだ」

――

第16話

「兄さん、信じていいんだな？」

カウンター越しにいる男に向かって声をかける

大事な事と言えど嘘を吐かれるわけには行かないし

「ああ、問題無い」

「なら聞いていくか」

「全部答えるとは限らないがな」

ボトルに触りながら答える

流石にこっちも全部答えてくれるとは思っちゃいねえ

「まずここは夢の中でいいんだよな？」

「合っている」

「夢ってこんな明確だったりするのもおかしいし、そもそもこんな夢俺が望んだと思わねえが」

夢は都合がいいとは言わないがある程度決まるものだと思う
少なくともバーに来たいなんざ思うわけがない気がする

「まあそこは俺から会いに来たそう思ってくれていい」

「了解した、だからこっちに合わせてくれてるのか」

「……なんのことだ？」

「いやその海賊の格好俺に合わせてくれたんだろ？」

バーのマスターという言葉には似つかわしくない海賊帽に眼帯、俺に寄せてきてくれたのかと

つかめっちゃかっこいいじゃん、羨ましい

「いや……そうかアンタも海賊だったな」

「元といや元だが……今後海賊になれるかというと微妙だしよ」

と言うか最悪海軍になった親父に捕まるやつ……後生計立てられるなら別に冒険者でいいし

「それは残念だな」

「いやでも、こう言ったバンディットスタイル好きっすよ俺」

「おっとすまないね、嬉しいんだが話脱線しちまったな」

そういやそうだな、嬉しくなって脱線しちまった

「アンタは何者だってのは答えられるか？」

「そうだな……ｂａｒデラスのマスターであるくらいならな」

「なんで俺の夢にいるのかとか気になるんだが……まあ答えてくれないのはわかった」

下手すりゃ何も答えてくれないんじゃねえの？

不安になってきた

「友のことは」

「すまないな」

でしょうねえ、誰だよこの兄さんの友達ってよ!!

「じゃあ……大事な話ってなんだ?」

「まあそうだな、まずはここに来れた理由でも話すとするか」

「呼んだから来れたじゃ無いのか?」

「いいや違う、それはアンタの魔術にある」

「魔術……手が伸びたあれか?」

手が伸びるとここに来れるのか?よく分からん
つかなんで兄さんがそのこと知ってんだか……

「手が伸びたとは違うんだが……」

「違ったか」

ショボーンとする、いや残念では無いけど

「違和感はあったか？」

「いや、何が起きた？って感じはあったがそれくらいだ」

「まあ……初めだしそうだろうな」

「何かあるのか？」

「そうだな……これだけは言っておこう」

なんだなんだ？正直怖いんだが

「その魔術は人ならざるものの存在だ、使い続けると人間を辞めることになるかもしれない」

「マジか……」

と言うかなんで俺そんなん使えんの？

こわ……めっちゃこわ……

「それを使えることになったから、ここに来れたんだろう」

「なるほど……ちなみに俺の魔術ってどんなのなんです？」

「言ってやりたいんだが、アイツに怒られちまう」

「マジかあ……」

自分の魔術を知れないって辛くない？

ねえ兄さんおせーておせーて

「難しいものではないさ、仲間と一緒に解明するといい」

「それは……そっすね」

元より先輩方と探る気だったしそこは問題ない
ただ探るのはいいのか……

「流石に探った所で文句を言うやつじゃないしな、俺が手助けするのは怒られるが」

「はぁ……」

まあ一応は危険と言うことを教わったわけか、まあ実際人ならざるものに言われるならマジなんだろうな

「まあ俺はお節介焼きしか出来ないが、冒険者は続けるんだろう？」

「勿論、そりゃやめるわけにゃいかねえ」

「それはそうか、だが……アンタの魔法にはリスクが伴うそれでもいいのか？」

「リスクか……」

魔術には条件とかあるんだろうが……それは知ることが出来ないし危険には違いない

人間を止める可能性を……

１ｄ１００：７９

「ベルモンドの兄さん」

「おう、どうした？」

「覚悟なんざとっくに決まってるんですよ、俺は人だろうが化け物だろうがどうでもいい」

「……ほう」

感心したように俺の方を見るがそんなことは決まり切っている

「そりゃ流石に避けれるなら避けたいが、なるから躊躇うなんざ真似はしねえ」

「……アンタのことをアイツが気に入った理由も分かるかもしれねえな」

「そりゃどうも」

正直誰だか分からんがまあいい

気に入られて損は……あるなあ……あの学園

「それじゃ気を付けろってくらいか」

「そうだな……後伝えるとしたら……まあ助言程度はしておこう」

「ありがたい」

「繋いでいけ」

「何を？」

俺ら走ってたっけ？いやマラソンでは無いの流石に分かるけどさ
ただ何を繋げって漠然とし過ぎてない？

「あらゆるものをだ、縁を絆を心を命を……そして夢を」

「まあ……繋いだ方がいいものだらけですね」

「必ず意味がある、これだけは断言する」

「それじゃ一層気を付けますか」

「一度振り返るのも大事かも知れないな、アンタの繋がりがどれほどかってのもよ」

「友達が沢山いるわけじゃないしな……今の縁だけじゃ足りないかも知れん」

少し悲しくなってグラスの飲み物を飲み干す

酒ではないがヤケ酒に似た気分だ……

いや友達いるけどね……大事にするけどね

「もう一杯！」

「……そうだな、それで仕舞いにしよう」

「金払ってるわけじゃないけど唐突だな終わり」

「もうそろそろ目覚める時間だしな」

「マジか、寝た記憶ないわ」

起きて二日酔いしてたらどうするんだ、いや飲んでないけど

「それじゃあまたな、と言いたい所だが」

「うん？」

これで最後ってわけではなさそうだがどうしたのだろう？

「折角だしこれも縁ってことでな、使うといい」

「これは……！」

そう言いつつ仕舞ってあったマントを渡される

すげえ……カッコいい

「まあ今の服から羽織れるし効果は良いものではあるが……」

「それさえ聞けるだけ嬉しいわ！感謝しても仕切れないかもしれない」

欠点が多少ある？知らん

「見た目がダサくならないように注意しろよ、マントを羽織ることを考えてな」

「あーまあそうっすね」

意識してなかったけど服装気をつけねば

効果は分からんが、なんか着てると財宝が沢山手に入る気がする、ダイヤモンドとかエメラルドとか

「それじゃあまたのお越しを」

そう言ってドアが閉まる、それから目を覚ますのは時間の問題だった

「夢と言うものは大抵残らない、ただ覚えておいてくれるといいがな」

グラスを磨きながらどこかで男は呟いた

「都合よく覚えているなどのサービスはしない、ただ思い出してくれよな」

アイツなら出来るだろと男は笑った

「しかし盗賊か……俺としては〝魔法使い〟になってくれた方が面白かったんだがな……これもまた肴とでも考えるか」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「うおおおおすげえええええ」

「わっ!?どうしたのさキル夫クン!?」

いきなり大声で叫んでしまい狛枝は驚く
悪いことをしてしまったがこれはじっとしてらんない

「すげえぞ狛枝……!!」

「一体どうしたのさ」

「カッコいいマントがある」

「記憶にないものなのかい?」

こんなマント買った覚えはない、ただこれ俺が気にいるタイプなのよく分かってんじゃねえか
なんかあったっけ?

「あるようなないような」

「しっかりしてね……」

不安そうに狛枝が見てくる、すまん
ただ記憶……なんか夢であったような……
なんかカツケー兄さんと話してて……話してたっけ？

「えっと……確か……誰やねん？」

「誰って……え？」

狛枝が付いて行けずに置いていかれている
ただ俺だって……頭に浮かぶ男性の姿……ホント誰やねん、思い出せん

「まあ……また会うだろ流石に」

そんな気がしたしそうじゃなかったらなんか凄く申し訳なくなるので……

「ホント大丈夫……今日は休んだら？」

「……そうするか」

何というか何かをしなきゃ行けない気がするんだがどっちみち予定は入ってなかったしそうするか

「しかしそうなるとどうするか……」

自分が不真面目な性格していると思っていたがまあ講義とか毎回のように受けてたし真面目だったんだなって……

どっちみち今日も重要なものがありわけじゃないし問題はないが

「先輩や友人もいないしな……」

流石に受けてる奴らにサボろうぜはおかしいしな……
１人で出歩くか

そういえばアカネ先輩に誘われた時のスポットも探さなきゃなんねえし偶には街に繰り出しますかっと
なんやかんやみんなで行った海底洞窟の報酬がデカいのも良かった金銭に気にせずに済むし
そうして街に繰り出していった

――――――――――――――――――――――――――――――――

「んじゃこれとこれください」

「了解したであります！」

「……」

アレ？俺新しい所開拓するんじゃなかったっけ？なんで秋山さんの所で買い物してるんだ？

「おや？どうかしましたか？」

「いえ別に……」

おい、どうするんだよ俺
これじゃあ進展なしで終わるぞ

「何かありそうですが……気にするべきではないでしょうね」

「まあその方が助かる」

いきなり客の愚痴なんざ聞かせるわけにゃいかんしな
ただまあどうなんだろうか……

「そう言えば新条殿はいないんですね今日は」

「毎回一緒に授業受けてるわけじゃないしな」

と言うか先輩と後輩な時点で同じ授業受けないし……

「しかしうちに来た時ってプレゼントを買ったあの時以外は毎回一緒に来てましたし」

「そうだっけ？」

よく考えてみるとそうか、そうだったのかー

そう考えると恥ずかしいな

「それで来たとなると何かまたプレゼントとかお考えで？」

「いや、そうじゃねーんだ」

「ただ単純に買いにきたってことですか」

「まあ……後はここらちょっと知っとかないとなって」

結局言ってしまったが別にいっか、損はない……損はないはず

「おや？岡島殿はここら辺のこと知らないのですか？」

「学園からほとんど出れないしな、依頼等以外では」

「まあ……他の冒険者や学園生もほぼ学園で見ませんねえ」

秋山さんは納得したような顔をする、まあ来ねえよな……大概の奴は買い物とかも購買部で買えるし……

「まあ……アレ系の店行ってるような人はいますが」

「あぁ……」

察したが特に言わない、そう言う奴もいんだろって

「うーん」

「どうしたんすか？」

ってかこのタイミングで悩まれるのが一番困る

違うとは思うけど気まずいんです

「案内しましょうか？学園外を知らないのも不味いですし」

「そりゃ助かるが仕事は……？」

「今日はあまり人入らないでしょうし昼までやればいいでしょう」

「それでいいのか……？」

雇われてるようじゃないみたいだしやらないでいいって言うなら別に構わねえだろうけど……

「はい、偶には私も出掛けたいですし」

普段から色んな場所行ってる気がするが……まあ俺が言い出すことじゃねえか

「んじゃ後昼まで……4時間か」

今は9時か……つか早いうちから来ちまったなおい……店開いてたからいいんだろうけど

「んじゃ色んな商品見てますか」

一通りは見たことあるが全部しっかりとは見たことないしな……掘り出し物みたいなのもあるかもしれないし

「それならバイトしますか？」

「バイト？」

「４時間だけではありますが、気に入ったなら今後もありですけど」

ただ商品を見るよりはそっちの方がマシかもしれないな

そう言うことなら俺は嬉しいが

「んじゃ今回はお試しってことで」

「分かりました！では色々説明しますので荷下ろしや品出し等をお願いします」

「接客はしなくていいのか？」

「岡島殿」

「？」

「自分の顔を理解してください」

泣いた、すっごく泣いた

――――――――――――――――――――――――――――――――

「薬草とかは分かるがこの魔法の聖水とかわけわからんな……」

普段から見ているがＭＰの回復ってなんだ？

傷薬やポーションみたいに目に見えた回復するわけじゃないし

「結局魔術師とかは目に見えて分かるらしいですけどね」

「俺の場合は手元になかったり1発打って終わりだしな」

「めぐみん殿もそんな感じでしたね1発打ってバタンキューと」

「……」

一緒にして欲しくはないが……そうだな……そう言う奴だって聞いていた

「そういえば最近見ませんね」

「……」

死んだって言うべきなのかもしれねえが流石に言い出せねえわ……ダメかもしれない

「いえ……その顔を見れば分かりました……」

「……すまねえ」

「……いえ、お客様が帰らぬ人になることってよくあるので」

やっぱそうだなんだな……俺も何度も死にかけてる以上意外とは言えねえが

「ほらお客様が来ましたよ早く切り替えましょう！」

そう言われるとドアが開く音がする、マジで客が来たのか

こっちも切り替えねえといけねえかな

つかアレか、それ以前に俺下がっておくか顔怖いって言われてもだし……悲しいな

「おや、キル夫君じゃないですか」

「Ⅳ先輩……」

正直反応に困る、ゲッて言うほどかと言うとそこまで悪い人じゃない気がするしまあ仕事先で会うと多少は気まずいが

「おやおや、どうかしましたか？」

「いえ、いらっしゃいませ」

「ふむ……なるほど」

理解したようにポンと手を叩く、先輩が無茶振りして来ませんように

「ボクが何かしそうに思えますか？」

「え？」

まさか心を読まれた？魔術師ってやばい？

「顔に出ていましたよ、まあ特段何かする気はありませんが」

「良かった……」

本人の目の前で安堵していいのか分からんが助かったのでよかった……
その後がどうなるか分からんけど

「所でキル夫君、仕事はいつまでですか?」

「昼までの予定ですが……」

「ではその後少し用事があるのですが」

「いや、ちょっと午後も予定あるんで」

秋山さんの方をチラッと見てその旨を伝える
先輩とは言え先の用事を潰すのも……

「先輩からの呼び出しがあるなら私の方は気にせずに」

「いや、構いませんよむしろその方が都合がいいですし」

都合がいい？よく分からんが少し怖いな

何もなけりゃ良いが

「まあそれが終わって……まあ夜になるでしょうがボクの部屋に来てくれませんか？」

「なして？」

「少し行きたい場所がありまして」

「なるほど？」

夜に行くってなんなんだ？良いんだけどさ

いやいいのか？分からん

「まあその件は後で、今は普通に買い物させていただきますよ」

「そういえばそうですね……」

忘れてかけていたがお客様だった、準備しないと……

「いらっしゃいませー」

「それはさっき言いました」

そういやそうだった、慌て過ぎてんな……

なんやかんやちゃんと接客をした

アイテム知識が上昇した

「そこまで来なくて良かったですね」

「店としてはいいのかそれで……？」

客が少なくていいのか……？

「今日は岡島殿がアイテム覚えれればでしたし」

「そう考えると有難いか確かに……店にはすまんが」

謝っていいのか分からんがひとまず謝っていく

「それじゃあ色んな場所案内すればいいんですよね？」

「ああ、そうしてくれると助かる」

店とかは知ってるけど食事できる所とかは正直知らん遊べる場所も知らん
そう考えると真面目なのかもしれんが俺自身が真面目に見えない
つか少し適当ではあるが秋山さんの方がマシだろう

「それじゃあ行きますか」

「ああ、そうだな」

何というか落ち着いた人ではあるしな
店員やってるから自然と落ち着いたのかもしれないが

「ヒャッホオオウ！」

「!?」

え？今何があったんだ？ちょっとわかんない

「岡島殿行きますよおおお！ついて来てください！」

「はっはあ……秋山さん」

「声が小さい、後今から私は秋山軍曹であります！」

「え？」

「……」

「はっ！秋山軍曹お供させていただきます！」

「行きますよ――!!!」

何というか……人って凄いなあって

と言うかちょっと不安になって来たんだがマジで大丈夫かこれ？

続

第１６話②

「……」

ちょっと待って欲しい

「……」

いや分かるんだよ？そっちの都合ってのは

「……」

「これとかどうでありますか？」

「あの……軍曹殿」

「どうしました?」

「俺銃使えないっす」

「えー?」

開幕から武器屋、しかもガンショップに来ると思わんかった
秋山さんは喜んでるけどよく分からん

「好きなんすか?」

「勿論!」

まあそうなんだろうけどさ

「どう言うのが好きなんだ？」

「銃とかそう言った火器であります」

「派手なのが好きなのか？」

「少し違いますが……乗り物などに付けてみたら凄くなりそうだなって」

「え？そんなヤベエ物乗りてえの？」

移動手段って馬車とかだっけ？それに銃持った人なら分かるが搭載するのか？

「いやあ、操縦出来るようなものに搭載出来ればいいのですが……」

「そんな凄い乗り物が出来りゃ安泰だな」

少なくとも乗り物に乗って戦えんなら安全になるわな

「いつか作ってみるのが夢であります！」

……正直出来るとは思わんが出来たらいいんじゃねえのとは応援しておく

「しかし銃ねえ」

シノン先輩とかなら喜ぶか？

いやあの人徹底してるしオキニの店もう見つけているか

「確かにこれ撃ちゃ吹き飛ぶのはすげえが……」

「でしょう！でしょう！オススメであります！」

「だが使わんしなあ」

「ええ……」

「いや狙い撃つの無理だわ」

シノン先輩みたいなライフルではないが……この拳銃でも無理だなあ

「ならば練習すれば！」

「俺戦士じゃないし銃だけの練習は流石に……」

そこまで言うと秋山さんも諦めた

まあ食い下がられても困るんだが……

「ぐぬぬぬ……ただ見るだけでも！」

「まあ……見はするが……」

と言うか銃見てると全然違うな

俺の武器がほぼ全場所使えるのもあるかもしれねえが……銃にゃ装飾多いな

「綺麗ですよね」

「まあな」

お宝は好きだし綺麗な武器とか見りゃ嬉しいが……ただ自分が使う武器をゴテゴテにはしたくねえな

「しかしこれが銃か……」

シノン先輩とかは完全に性能重視なような銃に見えるしやっぱり違うと言うか……あの日言われたように引き金を引けば人が死ぬっつーもんが派手なのはちっとな……味方に持ってたら正直……信用出来ん

「まあ俺にゃ縁がねえだろう」

「それは仕方ありませんね」

名残惜しそうだが流石に出ることにした
と言うか秋山さん1人じゃここで一日中いれそうだわ
またそのうち来るのでそんな悲しそうな顔しないでください

――――――――――――――――――――――――

「食事ですがどう言ったものがいいんですか?」

「希望はねえが出来るだけもっと早い方が良かったな……」

1時にバイト終わってそれからガンショップで1時間半……最初に飯食うべきだったかねえ

「じゃあ……決めました!」

そう言って連れてこられたのは少し古びた店だ
隠れ家的な店なのかねえこれは
ただ入ってみると違った

「いらっしゃい、おお秋山さんとこの今日は2人かい?」

「はい、失礼しまーす」

大らかそうなおばちゃんにカウンターが沢山あって客が結構入ってる
人気の店か?

「岡島殿!ここは安さで有名な店なんですよ」

「聞いた感じかなり来てるようだが」

「ええ、だって美味しいですし」

「そりゃ期待だな」

とりあえず物凄く腹が減ってるし安いのは助かる
いや金は一応あるが……無駄にしたいわけでもないし

「大丈夫なんですね」

「何が？」

「いや安い飯なんざ食えるかなんて言う人多いですし」

「いや俺そもそも食えりゃなんでもいいタイプだし」

海賊なんてそんなもんそんなもん

「それはそれでどうかと思いますが……」

「えー」

いいじゃん、食えりゃ十分だろ
旨いものそりゃありゃ尚更いいけど

「ですが残念ですね岡島殿、ここの料理は美味しいので！」

「まじで旨いんだろうなとは思ってる」

だからすごく楽しみで、仕方がなかった

「じゃあオムライスを」

「意外なもの頼みますね……私はカレーライスで」

オムライス俺が頼むの意外か？いや意外だわ
だが偶には食べたくなる、仕方ない

そう思いつつ周りを見る

「……多くね？」

その量は明らかに多く一人前軽く超えてるんだが

「そうですねえ、他の店と比べると多いかもしれません」

「行けるの？」

「流石にあそこまで大盛りで頼んではないので……」

それなら食べきれるが疑問が残る

「安いってもしかして量が多いからか？

食べれない量出されて普通の値段！ってやられても困るが

「いえ、値段も安いですよ？」

「……やってけんの？」

「秘策があるらしいので」

そうなのか……あの量で安くてどうにかなる秘策か……すげえ

「ウチは冒険者が狩ってきた肉とか薬草とか使ってるからね」

そう言いつつ出来た料理が席に届く

あれ程ではないがやっぱ量が多いな

「モンスターの肉ってことか？」

「それもあるが全部そんなわけじゃないよ」

「なるほど……」

食べながら話を聞くが旨い
これで安いなら恐ろしいものだ

「前からこの店に来てた冒険者に振る舞ってたけど当時は赤字だったんだ、でも世話になったってここに来てた子たちがね安値で食材を卸してくれるの」

「それならどうにかなるのか……？」

と言うか冒険者も安く売っていいんだろうか？

「食材の部分以外も売れるしここら辺は使って欲しいってね」

「なるほど」

肉とかも売れる場所はあるが確実に使ってくれるって考えると金ばかりじゃなくて嬉しさとかもあるかもしれない

「ただなんでそれを俺に?」

「アンタ冒険者でしょ、だから言っておくのさ」

「逞しい人だ……」

商売人としてこう言う人が生き残ってくんだろうなと思い知らされた

「いいだろう?その分うまいんだから」

「文句はねえ」

実際旨いし、これを安物なんか食えるかってひっくり返した奴がいたらぶん殴る

「まあまだ学園生なんだがな」

「別に学生だろうと卸しに来てもいいよ、むしろ冒険者たちよりも高く買い取ってあげるからさ」

「いいのかそれで……」

「あの子達と違ってまだ未熟な人間だしね、どんどん成長して貰わないと」

「ありがてえ」

「（そもそも他で卸せばもっと高く売れるはずですがお世話になってますし言わないようにしましょう）」

秋山優花里は黙っていた
なんだかんだお世話になりまくっているからである
と言うか食材増えたらうれしいし

結局は現金な少女であった

「そういえば岡島殿」

「ん？なんだ？」

「学園の食堂はどうなんですか？」

「あー学園かー」

学園の飯か、ここことは比較にならんが……

「普通にうめーぞ、ただここが段違いってか……流石に大盛りじゃないしな」

「まあ学園は流石にそこまではしなそうですもんねえ」

「学園が利他になるようなことはしねえだろうな」

「いや流石にそれは言い過ぎじゃあ……」

だが事実だしなあ……

自炊とかすりゃいいのかもしれんが……正直出来る気がしねえ

「……秋山さんは料理出来るのか？」

「正直人に食べさせるほどは厳しいです」

そういや軍曹って呼んでなか……あっ怒られてねえわ

「そうか」

「食べたいんですか？」

「え？」

なんで急にそう言う話になったんだ？
いやそうか俺が悪いわこれ、ごめんな秋山さん

「いや、大丈夫だありがとう」

「お兄さんツンデレは流行らないよ」

「ちゃうわ!?」

おばちゃんまで味方しないでくれ!?
ちょっとちょっとおおおお
いや人の料理とかも楽しみだけどな？

「練習しておきます……」

「え……あ……うん……」

ちょっと良く分からないことになってきた
まあいいか……悪いことではないだろう……多分

「つーわけでお代わり」

「岡島殿!?」

いやいいじゃん……沢山食べたって……
と言うか全員にすげえ目で見られた……大盛りとはいえお代わりするのは異質なのな……
そのままお代わりしたものも食べ尽くした
唖然とされたが普通じゃね？

―――――――――――――――――――――――――――――――

その後は普通に案内してもらった

初めて来た時に広いなと思ったがこう案内されると本気で広いなって思う

「行きたい場所とかありますか？」

「この街って何が有名なんだろうか？」

「難しいですねー」

そう言う関係の場所があればって思ったがやはり難しいのか

「強いて言うなら学園と冒険者？」

「あー……」

学園を案内されても困る

と言うか教えてもらってどうなるってんだ……外評は気になるが今じゃないだろ

「じゃあ、あそこ紹介しましょうか！」

「ん？面白い場所があんのか？」

「岡島殿にはどうか分かりませんが」

そうして手を引っ張られる、着いたのは……

「植物園？」

薬草園みたいな所か？なんか植物が沢山咲いてるであろうことは分かるが……

「ええそうです、岡島殿も楽しめたら良いんですけどね」

一先ずどう言うところか入ってみる

と言うかこんな広い敷地この街にあったのか

「色々な植物があんな……」

あっあの木ダンジョンで見たことあるな、効果とか覚えとこ
見つけた時のためになるってわけか

「岡島殿、楽しんでますか？」

「ああ楽しいよ」

「それは良かったです」

「色々と勉強になるしな」

「？」

秋山さんがキョトンとしてる
え？俺おかしなこと言ったか？

「いや岡島殿、確かに戦術とか効果を知ることとかも大事ですが……」

「ですが……？」

「流石に今日は初めて来たんだし純粋に楽しみましょう！」

「そんなもんか？」

純粋に楽しむか……確かにそう言われると最近は学園のことばかり優先して考えてたが……

「それに……」

「まだなんかあるのか？」

「……今のうちに心くらいは休めておいた方がいいですよこの後あるんでしょう？」

「……」

そうだったわ、Ⅳ先輩とどっか行くんじゃん
しかもほぼ折原先輩来るでしょ？あの２人だし
……考えるのはやめて純粋に楽しむとしよう

「……綺麗だな」

「でしょう！だからオススメなのです！」

宝とかいつも目が行ってたりそう言うものに惹かれたりするんだが、花とか樹も改めて見ると綺麗だなと

「まあでも綺麗な花にゃ刺があるんだろ？」

「それは薔薇とかですね、あるものもありますが見るだけなら問題無いでしょう？」

「そうだな」

触っちゃいけないって書いてあるし触るのはいけないな

「ふむ……」

「どうしました、岡島殿？」

「こう言うのが女子って好きなのか？」

「知りません」

「おい……」

知らないっておーい、どうしてだよ秋山さーん!?

「人によりますし……」

それはそうだな……まあでも好きな人は多いんかねえ
可愛いものが好きとか勝手な決めつけは良くねえが

「秋山さんは？」

「嫌いではないですが……」

「やっぱ特に好きとかではないと」

「いや……どちらかと言うとガンショップとかの方が好きですね」

「あー……」

そういやこの子そうじゃん、花とかと程遠い子じゃん……まあダメとは言わないけど

「まあそもそも女子だから、男子だからとかは違ったな……」

「そう言うことです」

よーくわかった、人は見かけによらんとかもよくあるし決めつけねえようにしないと

「んじゃどんな花が好きとかあるのか？」

「タンポポですね」

「あるのか？」

「無いんですよ……ここには」

「そりゃ残念だ」

タンポポって聞いたことはあるがそういや見たことねえ気がする

花畑にゃあったかもしれねえが……自信がねえ
黄色い花だって親父には聞いた
綿毛を飛ばして旅してそこに根付く、まあ俺達海賊に似た部分もあるって

「いつか見に行きてえな」

「花畑とかに意外と咲いてますよ?」

「んじゃ今度見に行くか」

「デートのお誘いですか?」

「いや悪い……そんなつもりじゃ無かったんだ」

「分かってますよ」

本当に分かってるのか不安だが……まあいいかマイナスに働くことはないだろう

「こうやって、何気ない話するだけでも楽しいんですよ」

「そうだな」

確かに楽しい、緊迫した場所でも落ち着くために他人と話したりするが落ち着いて色々と好きなもんとか語り合うの、冒険者として滅多にないだろうから本当に新鮮味もある

「こんな日が続けばいいんだがな」

まあこの後絶対何かあるからこそだよね！

「どうしてもなら」

「ん？」

「どうしても困るならウチで雇ってもいいですし」

「それも面白えかもな」

間違いなく平和だろうし楽しいことも沢山待ってるだろう
そんな生活も夢見てもいいのかもしれねえな

「ただ悪いがそりゃ無理だ」

「まあここでも色々と勉強しようとしてましたし冒険者が好きそうですもんね」

「それもそうだが」

「まだ何かあるんです？」

「俺はお宝探しが好きだから、それをし続けるんだ」

店員になっちゃお宝探しができねえ
それじゃあ俺が求めるものとは変わっちまう

「トレジャーハンターにでもなるんですか？」

「トレジャーハンター？」

多分その名の通りなんだろうけど初めて聞く名前だなそんな職業があるのか？

「滅多にいない職業ですがね、お宝探しを生業としています」

「少ないのは？」

「お宝探す人と優先して組みたい人が少ないからです」

「……」

すっげえ分かるわ、お宝探し頑張りますんでーって言ったって組みたいかと言うと悩む

「岡島殿なら大丈夫そうですけどね」

「なんでだ？」

「だって他人とのコミュニケーション得意ですし岡島殿のことを知ってそうな人多そうですもん」

「それはそうだがいいのか……？」

「別にお宝探ししかしないってわけじゃないでのですよね？」

「ああ、前衛とかで戦うつもりだが」

魔法も出来たら使うようにする、回復はすまん出来ない

「それを冒険者だと信用出来ないんですよ」

「……」

「岡島殿はその点他の人とよく交流してそうですし分かってもらえるってことです」

「なるほど……」

やはり交流って欠かせねえのか、いや大事なのは分かるけどよ

「トレジャーハンターか」

個人的にはすっごくなりてえ、盗賊学んでレンジャーとかになんのかなって考えてたけど

「まあ考えてみるよ」

「……すみませんね、結果的には良かったですがついまたそう言う話に」

「構わねえよ、こう言った話も楽しいしよ」

話しながら進んでいく、ふと目につく植物があった

なんだあれ？だが1つ言えるのは

「なんだのカッケーの」

「え？サボテンがカッコいいですか？」

サボテンって言うのかあれ、凄くね？

「トゲトゲで凄くね？」

「まあ確かに凄いですがカッコいいかって言うと……」

「えー、ダメなのか？」

「いや否定はしませんが……」

「自分で身を守る植物ってあるんだなって」

「ああ言った感じの装備憧れるんです？」

「防具ああ言う感じにしようかなって」

「そこまでですか……」

　毎回使うわけじゃねえが、敵が獣とか直接殴ってくる奴ばかりの時とかいいんじゃねえのって

「ただ岡島殿って確か……」

「うん？」

「マント付けてますよね？」

「ああ、どうやって手に入れたか覚えてねえがめっちゃカッコいいやつ」

「……服や鎧にトゲつけたら穴空きますよ」

「……!?」

うわあああああああ、ダメじゃん！使えないじゃん!!
マントに穴開くなんて嫌だよ俺

「そもそも岡島殿って鎧とかどうしてるんです？」

「今か？今はレザーアーマーみたいな動きやすさ重視だが？」

防御力は確かに低いかもしれないが……機動力落とすのもなあ……

「なるほど……」

「まあそっからマント羽織ったり、ああ冒険用の靴は新調したぜ」

「1ヶ所ずつなんですね……」

「確かに今は金あるし新しい装備試してみてもいいかもな」

「そうしてください……特に前衛張るなら服や頭重要なんです……」

「じゃあトゲ付きのを……」

「やめましょう！」

怒られた、悲しいダメかなあトゲ装備
ただまあ自分の装備見直さないといけないかもしれねえ

「ほら岡島殿行きますよ！」

「あっ了解っと」

サボテンのところにいつまでも居させたくないのか先へと進む、本当に色んな植物あるなここ
そう言って全部回った頃には日が沈み始めていた
そろそろ終わりか、いつも思うがなんか寂しくなるな

――――――――――――――――――――――――――――――――

「と言うわけでほぼ植物園でしたがどうでした？岡島殿！」

「ああ、かなり楽しめた。ありがとな」

「いえいえ、お役に立てたなら」

実際いろんな場所を知れてよかった
自分達が今住む街ってこんな広いんだなと
今度から来る時楽しみかもしれん

「そう言えば岡島殿」

「どうした?」

「プレゼントがあります」

あれ?このケースアカネ先輩と同じじゃね?なんで?

「ってことでどうぞ」

「なんだこれ？」

「メッキです、サビ止めですよ本日のバイト代であります！」

「ほう」

サビ止めは有り難いかもしれない
手入れはしているがアカネ先輩から貰ったククリダメにしたくないし

「ありがとうな、ちゃんと使わせて貰うぜ」

「勿論、そのために送ったのに使われないと困りますし」

「そりゃそうか」

大事に取っておくとか流石に分からんな

「では今日はこの辺にしておきましょうか」

「随分切り上げるの早いな」

植物園出てからすぐだったが
用事でもあるのだろうか？

「いや岡島殿準備等あるでしょうし」

「そうだな……何もしないのは流石にか」

そうなると帰るか、怒られてもあれだし

「まあ送るくらいはするが」

「ありがとうございます」

そう言って送っていく、色々と覚えた場所を言いながら
傍目に聞かれたら恥ずかしいがあまりこっち気にしてる人いないし

「今日のことは色々と参考にさせて貰うわ」

「特に装備気をつけるように」

「ああ」

「トゲトゲさせないように」

「……」

分かったってば、それ以上言われると辛くなる

「それに場所も色々と覚えたしな」

今後利用する施設もあるだろう、鍛冶屋とかも確かあったはずだし

「ああでも１つだけ忠告が」

「なんだ？」

「他の女性といった場所案内されると不機嫌になると思うので植物園はやめることオススメします」

「……」

え？なんで？ダメなん？今度アカネ先輩と行く気だったんだが

「不機嫌になるの？」

「新条殿は間違い無いでしょう」

「キヲツケマス」

忠告を受けて良かった
俺この前秋山さんに教えてもらったいい場所がーとか言い始める気だったし感謝する
……あれ？結局自分で一から探さないとダメじゃね？

「顔が凄い苦しんでますが頑張ってください」

「……はい」

「本当は他にもダメなところあるんですが……まあ岡島殿言っても分からなそうですし止めておきますか」

「まだあるのか？」

「どっちかと言うと私が不機嫌になるですが……まあ色々と察しているので……」

「……？」

言われたことがちょっと分からなかった
そのまま店へと辿り着く
帰る道中少し悲しくなったものの楽しかった今日を思い出して元気になる

「それじゃまたいずれ」

「はい、送っていただきありがとうございました」

「いや、こっちが世話になったんだ当然のことだ」

そう言って手を振る、なんか見られてる気がして気恥ずかしくなるが

「バイトしたい場合は伝えてくれれば顔パスしますので」

「有り難いが朝言われたことのせいで顔って言葉が喜べねえ」

まあバイトはなんやかんやすることにはなる気がする、金ないこと多いし
とりあえずそう言うことを考えながら帰路に着く、さて……こっからか……

…

「いやあ今日は久々に楽しめました、ガンショップが好きじゃなかったのは残念ですが……」

ガンショップもっといたかったなあと残念そうに思う
まあ自分の趣味を押し付けすぎるのもあれなのだが

「岡島殿トレジャーハンターになるなら銃素材とか持って帰って来てくれませんかねえ」

淡い願望を持ちながら、ついでになんか凄い物があったらいいなって

「まあ次行く時色々と聞いてみましょう」

次行く時……次のことなんで考えてるのか？

「そもそも殿方と2人で一緒に行くのって初めてでしたね」

これが俗に言うデート的な何か？

いやきっと相手はそんなこと考えて……絶対ないな

「なんか急に恥ずかしくなってきました」

誰もいない店で少女はちょっと良くわかんなくなって商品整理をし始めた

午前中散々やったと言うのに

「と言うかこの岡島殿が整理して……」

わけが分からなくなり始めて少女は考えるのをやめた
そのまま寝てしまい帰ってきた父親に怒られた

――――――――――――――――――――――――――――――

「来ました先輩」

「ああ、来てくれましたか」

月が登り始めた頃、Ⅳ先輩の元へ着く
嫌な予感がするが仕方ない

「それで折原先輩とどんな無茶振りさせるんです？」

「いや、今日は彼は居ませんよ」

「珍しい、なら２人ですか？」

「ええ、少し試したいことがありまして」

嫌な予感がするが……何をさせる気だ？

「貴方の魔術は少し特別って聞いたので」

「それで……？」

「調べてみませんか？と」

「出来るんですか？」

正直まどか先輩達に頼んでは居たから今急に言われてもだが……

「資料はあるので」

「図書館は一応見ましたが……」

ただ目ぼしい本がなかった気がする

「いえ、違う場所ですよ、今から行くんです」

「何処に……」

そう言うとⅣ先輩はニヤッと笑う、本当に嫌な予感がするなあ……

「ボンボルド先生の研究室ですよ」

――

第17話

「入って大丈夫なんですか……？」

ボンボルド先生の研究室を前にして尋ねる

と言うか今尋ねないと絶対手遅れだし

「許可は貰った覚えはありません」

「……帰っていいですか？」

と言うか絶対に行きたくないんだが……むしろ行きたい人いるの？

「ですが必要なことなので我慢してください」

「はい……」

恐怖心しかないものの諦めるしかないので従う

ただ……俺が何をしたって言うんだ!!

「これならいっそ折原先輩が居た方がありがたかった気が……」

「おや、意外と好印象ですか？」

「いえ……居るのと命を賭けるのの天秤なら前者の方がマシなだけで……」

実際は居て欲しくない……いやもしかしたらこれやっぱ居ない方がいいんじゃ？

「第一印象って大切ですねえ」

「第一印象以外もです大事がね……」

「おや、そうですか？」

「現に俺……今明らかに好感度下がってますんで……」

本人を前だが……この先輩なら大丈夫だろう……

と言うかこれだけ無茶振りされたから嫌味くらい言わせて……

「おやおや……ボクも嫌われたものですねえ」

「まあ真面目が故にと捉えておきます……」

なんやかんやとは言え俺のこと考えてくれた行動……な気がするし

いや……どうなんだろう？折原先輩と一緒だしそう言う人かもしれない

「とにかく進みましょうか」

「……分かりました」

本格的にボンボルド先生の研究室へと足を踏み入れる
なんか異臭がする気がする……正直出たい

「いきなり来ましたよキル夫君」

「うん？ゾンビかあれ!?」

「ですねえ……」

大量のゾンビが襲ってくる
何匹居るんだあれ……

「と言うかなんでゾンビが？」

「なんでしょうねえ？」

絶対知ってそうなんですが……
ただここで追求する意味はないし……すると危険そうだな

「ではキル夫君そちらを頼みました」

「でも俺聖気とかサッパリですよ？」

「神官コース行けば最低限覚えさせられるはずですが……」

「行ってないですし……」

才能がないんだ行くわけない
と言うか行ったところで脳髄決めようと会得できない筈だし

「仕方ありませんねえ……聖水は？」

「行く場所聞いてませんでしたし……」

ゾンビ出るよーとか言ってくれりゃ用意したけどさ……流石に無理じゃない

「……殴り倒すの頑張ってください」

「……はい」

ククリを汚すわけにはいかんので殴るが……いかんせん倒れない
と言うかククリを使ったところで敵を切断は出来ないだろうし多分変わらん
しかし聖気で大打撃を与えられるとなると聖気ってこういう時重要だな……姉さんとか中嶋とかあの時凄かったもんな

「畜生……ゾンビから守らなきゃならねえなあ!!」

Ⅳ先輩が態度が変わったようになってる
あれが本気なんだろうか?

「ギミック・パペット―ナイト・ジョーカー―。暴れやがれ」

カードを取り出すと中から道化師の様なものが出てきた……

あれがⅣ先輩の魔術……召喚魔術ってやつか？

「勿論ダメージは入ります、ダメージの入らないペナルティなどとは違います」

「何を言ってるんすか……？」

ちょっと困惑したがそれでもナイトジョーカーと名乗る道化師が暴れる

鎌を持ち一瞬で敵を切り裂く

「すげえ……」

一匹撲殺しながらも暴れる道化師を見る

俺以上の召喚できるってホントすげえな……

自身は無くさないが……ここまで強くなれるんだろうか？

「終わったか」

「はやっ!?」

向こうの敵はⅣ先輩が聖気で始末してすぐ終わったらしい……

一先ず拍手しておく

「いやいや、つい熱くなってしまいましたねえ」

「いえ……助かりましたし」

素の様な物がでてた気がするが別に気にしてないし

「と言うかほとんど変わってないですし」

「そう言われると逆に悲しいですが」

「そう言えばⅣ先輩、あれは召喚術なんですか？」

「厳密に言うと少し違いますね」

外したのか、あきらかに召喚してたし召喚術だと思ったが

「召喚よりは創造でしょうか、自立して動くわけではなくボクが魔術で指示している……それこそパペットなんですよ」

「確かにギミックパペット言ってました」

似たようなものではあるが違うか確かに

手間とかは増える分生き物じゃないし死なないとか勝手な行動はしないとかはあるが

「基本魔術は勿論あるとはいえ、ボクの固有魔術はギミックパペット、つまりあれです」

「確かに分かりやすいですね」

「流出領域は……まあこれは今はいいでしょうそのうち授業でやるでしょうし」

「???」

よく分からんが流出領域……大事そうだな
覚えてはおこう

「このように、明確に分かるからこそ長所や弱点が分かります」

「ですね……」

魔術師も自分を知らなければ痛い目に遭いそうだしな
特に俺の場合とか暴発しそうだし

「ええ、魔術師にとって敵に自分の魔術を知られるのは不味いことです」

「対応とかされたら不味いですもんね……」

「ですが自分自身でも自分の魔術を知らねばロクなことになりません」

「……はい」

「ですので早く見つけましょうか……」

そう言ってゾンビの山を避けて進む

と言うか1人でこんだけやってたのかⅣ先輩……

自分も固有魔術が分かりゃこれくらい暴れられんのかねえ

どっちみち……分かればいいが……わかんない気がするんだがな……

とりあえず不安に思いながらも付いて行った

―――――――――――――――――――――――――――――

1d100：27

「いやあ……中々着きませんねえ」

「と言うかなんなんですあれ？」

さっきからあちらこちらに触手がウヨウヨしてるんだが……本当に何実験してんの？

「触手です」

「分かります」

聞きたいのはそう言うことじゃないんだ!!

と言うかこの会話も普通に考えておかしいよなあ！

「ボンボルド先生の飼ってる触手ですね」

「ツッコミどころしかないんですが……」

触手って飼うもんだっけ？
つか徘徊するものだっけ？やば……

「一先ずは別の部屋行きましょうか」

「ですね……」

正直夜も更けてきて早くしたいのは山々なんだが、流石にアレに突っ切る気はねえ……

大人しく他の部屋に避難するか……

「ん？」

「どうしましたか？」

「いや、なんか通れないところがあったんで」

結界みたいな物が貼られているような
まあそっちには用ないし放置でいいが

「ああ、そちらはダメです」

「ダメなんですか？」

「最良で死にます」

「分かりました……」

最悪だと何が起きるんだ……

いやまあやめとくけど
そう思いつつ入った部屋には……なんだこりゃ

「おやおや、幸運なのか」

「実験室か？」

死骸が並べられている、それでもって何か機械がかぶせられているが
正直気分の良い物ではない、損害具合からダンジョンとかで死んだ遺体を回収したのだろう

「遺体で実験してるだけマシかもしれねえが……」

「仕方ありませんよ、これも教師の仕事なのです」

と言うかポーション置いてあるんだが使いたくねえなあこのポーション
明らかに怪しさ満点じゃね？

「ボクは貰っていきますがキル夫君はどうしますか？」

「やめておきます、見つかったら不味いんで」

これも最高で死ぬケースなんじゃねえの？

勝手に押し入って盗むなんてよ

「まあいいでしょう、では独占しますか」

そう言ってあったポーション全部持って行ったが……いいのかよ

回収しないので外を見張ることにした、バレたら巻き添いくらいそうとまで考えたからである

「居なくならねえな」

それと同時に触手を見張るがまだ近くを彷徨いている

正直見つからないだけマシと思うレベルだ

「どっちみちすぐには居なくならないでしょう」

「どうします？」

帰りましょう言いかけたがさりげなく出口方面に行くのも触手のせいで厳しい、むしろこれ詰んでないか？

「そうですねえ……時間を稼ぐために少しお話ししましょうか」

「何かあります？」

「そうですねえ」

Ⅳ先輩は少しだけ考えるそぶりをした後

「キル夫君」

「はい」

「貴方は自分の魔術がどんなものだと思っています？」

結構中々難しい質問が飛んできた……

――――――――――――――――――――――――――――

「俺の魔術……」

正直身体強化っつーか手が伸びたとかそう言う物だと思ってんだが……違うのかねえ

「思ってる物でいいです」

「身体強化とか改造とかそんな感じだと思うんすけど……」

「それはどうして？」

「実際に伸びたような感じがあったからですが……」

「成る程そんなことが」

「……知らなかったんですか？」

「ええ、魔術が少し特殊だと聞きましたが」

確かに特殊だろうけどそれはⅣ先輩も特殊なのでは？

と言うか話しちゃ不味いって言ってたな……本質は俺も分からない以上問題ないが言い過ぎたか……？

「ですが……ただの身体強化でしょうかね本当に？」

「違うと思います？」

「見てないから何とも言えませんが……今すぐには出来ないでしょう？」

「はい……」

「そうですねえ……」

Ⅳ先輩が考えている、考察できるものなのだろうか？

「ボンボルド先生の研究資料を読んでみたいですが……推測はそうですねえ……」

Ⅳ先輩は俺の方を見ながら

「身体能力よりは変態でしょうか？」

「誰が変態じゃ!?」

「そう言う意味ではありませんよ……言い方がわざとなのは事実ですが」

「……」

おい、なんてことをしやがる!?

「まあ、変異に近いですかねそう言うのもあり得ます」

「変異ですか？」

「ええ、例えば……いや例えに出すのはキル夫君に悪いですが腕がそれこそ外にいる触手になったとか」

「本当に泣きたくなるな」

「でもそう言うのもあり得ませんか？」

「どうだろうな……」

何か引っかかるがなんだっけ？
何かを言われた気がする……

『その魔術は人ならざるもののだ、使い続けると人間を辞めることになるかもしれない』

何だこれ？いつ聞いたんだ？
人間を辞める可能性がある……

「どうしましたキル夫君？」

「いえ……色々考えてただけです」

流石にこれを言い出すのは不味いか……

信用できる相手かもしれねえが……人ならざるとか言い出すのはな

「そうですか、何か浮かべばいいんですけどねぇ」

「強ちそれも間違いじゃない気がしてきましたけどね……」

「そうですか？」

人ならざるものになる……それこそ体の一部が化け物になって最終敵に化け物になるとかあんじゃねえのか？って

「とにかく調べてみないことには……」

「そろそろ頃合いですかねぇ？」

Ⅳ先輩は外を見て奴がいなくなったのを確認する

早く行きましょうと急かされて急いで資料室へと駆けて行った

今後ろにいた気がするんだが……こっから出れるかなあ……

――

「うわぁ……」

図書室ほどではないが膨大な量があるな……

無論もう深夜もいい頃のはず……キリがねえよ

「それっぽいものだけ探しましょうか、これは流石にボクも予想外です」

「分かりました……」

と言うか全部が魔術関連じゃないしそこからも絞らないと

「……」

「どうしましたキル夫君？」

「神……？」

神についての研究？何をしているんだあの先生は？
正直そんな研究してるようには思えなかったが……

「んー、今は関係ないですし放っておきましょう」

気になりはしますがとだけ言ってⅣ先輩は別の場所を探し始める
俺も探さなきゃならねえが……何処だ？

「えっと……変異でいいのかねえ？」

ただ多いからなあ……時間出来るだけ短くして帰りたいが……

「これじゃない？」

「あああありが……」

ちょっと待て、今女性の声がしたんだが
気のせい……？それとも幽霊？

「どうしたの？こっちの筈だけど」

棚の間から少女が出てきた
ちょっと待ってくれ……状況が追いつかない

「急いでるんですよね？」

「ああ……」

誰なんだこの子？なんでこの研究室にいるんだ？
ひとまず探すが……

言われた通り変異とかそう言った感じの資料が集まっている……
なんで中の事まで知ってるんだ？

「あった？」

「だな……これで良さそうだ」

「急がないと彼が来ると思うので手短に要件は済ませた方がいいと思う」

彼と言うのは恐らくボンボルド先生か……或いはそれに近しい警備みたいな奴かどっちみち……関係者なんだなこの子まだ若そうだが

「嬢ちゃんはどうしてここに？」

「私ですか？」

不思議そうな反応をする、え？そんなおかしいか？

おかしくないよな？多分

「まあ彼の協力者みたいなものでしょうか？」

「協力者……？」

正直こんな子が遺体を弄るようなことしないと思うんだが……
そことは関わらない資料作ったりするとか助手みたいなお手伝いさんとかか？

「手止まってますが？」

「ああ、すまねえ」

読んでいく、触手とか多いな……
やっぱ触手の研究してんのか？放し飼いしてたし

「これは？」

ふとした資料が気になったどうやら触手を埋め込まれた少女らしいが……
俺とは違うけど……俺もこんな感じで一時的に何かが宿ったりしてんのか？

「その資料が気になるんですか？」

「いや……そう言うわけじゃないが」

なんで微妙そうな顔をするんだ……
いやだって教えてくれたの君じゃん

それ以外も流し読みするが多分こう言ったのじゃない、変異魔術も読みはしたがなんかズレている
記憶にあり自分は変異だとしても見た目は変わってなかったから、俺の手だったから

「キル夫君ありましたか？」

「いえ……多少はタメになりましたがピンと来ないですね」

「そうですか……」

Ⅳ先輩も残念そうにしている
まああるとも決まってないしな……

「本当は先程触手に塞がれてなければ後1時間は取れたでしょうが……退きますか……」

「分かりました」

見つからないのを少し残念と思いながらもこっから抜け出せる安堵の方が良かった気がする
あっこの子のことどうしよう?

「ねえ君」

「なんでしょうキル夫さん」

なんで名前……あっⅣ先輩が言ったからか

「と言うかキル夫君、誰ですか?なんでこの研究室に?」

「いや……そういや名前聞いてなかったな」

なんでいるんだ?としか考えてなかった……

そうだよこの子誰なんだ?

「私ですか?」

「ああ、名前聞いてもいいか?」

「藤堂晴香です」

「……!?」

その名前には覚えがあったと言うか今見たばかりだ

寄生実験：被験者　藤堂晴香

――――――――――――――――――――――――――――――――

続

第１７話②

「どうしたの？」

「いや……」

言葉に詰まる、恐怖とかはないがどう接していいのかが分からなくなったいや普通に接すりゃいいんだけど……

「急に顔色が悪くなりましたね……急いで戻りますか」

「そうですね……」

落ち着け……平穏を取り戻せんだろ……

いつもの俺らしくねえ

「……あー」

慌てる俺を見て彼女は何かを察する
いや……多分これは気付いたのか？

「そう言えば資料読んでましたしね」

「悪い……」

「いえ……化け物ですから」

自分自身を化け物と言う……いや言わせてしまった

「ボンボルド先生の実験によって触手が体内に埋め込まれています」

「なんでだ……？」

恐る恐る聞いてみる
聞いてはならないことかもしれないけど

「……親に売られたんですよ」

「……」

親って言うものは子供にとって立派な物じゃねえのかよ!?なんだよそれ

「キル夫君、怒らないように」

「どうしてですか？」

「冒険者になりたいって人間の一部はそう言う溢れた人間もいるってことです、そしてこの世界では残念ながら少なくないことだからです……」

「……!!」

何か言い出そうとするが何も言い出せない
恵まれていて好き勝手やってた自分には言い出せないだけかもだが

「それでもボンボルドさんに拾われただけまだ私はマシかもしれませんが」

「マシ……なのか？本当に？

生きてはいるが……生きてるだけのような

「いいんですよ」

「……」

なんて答えるべきだろうか？

「そうだな、アンタは会話とか出来るし恵まれてる方なのかな？」

「化け物であることには変わりないですけどね」

「……それは」

なんで俺はこうも地雷を踏むのだろうか？

お馬鹿なのかな？

「いや、事実を否定するのはいけません……どうにかしたいってのは分かりますが」

「Ⅳ先輩……」

「逆にそれは失礼です」

「……化け物は言い過ぎかと思いますし被害者としか思えないんですが」

「まあ……捉え方はそれぞれですが……ですが被害者だろうと危険なのですよ？」

余計な危険ごとは避ける、それは冒険者にとって常識だろう

自分から突っ込むのは馬鹿だ

「それに……」

「……」

「さっきのゾンビや触手だって同じ被害者ですよ、何が違うんです？」

「!?」

いや……普通に考えるとそうかじゃないとここにいるのおかしいし

アレも被害者……元は人間だった？

「……気にしないでいいよ、私の事は……じゃ行くね」

これ以上は居辛そうに去ろうとする
ここで別れるとまあもう会う事はないだろう
……同じって言うがゾンビ達と違って悪いことされた記憶がねえんだがな

「おいおい、これもなんかの縁だろ?」

「キル夫君?」

「Ⅳ先輩、少なくともこの子がいた方が良いっすよ、この後何あるか分からんのだから知ってるこの子がいた方がいいでしょ」

「それはそうですが……」

「キル夫さん、何を言っているか分かってるんですか?」

「当然だろ、居た方が安全そうだからもうちっと付き合ってくれってな」

「自分自身でもいつ何が起きるか分からないんですよ?」

「何もなきゃ心強い味方だろ?」

「なんでそんな信用してるんですか!!」

彼女は激昂する、いや……言いたい事は分かるがまさか相手から怒られるとは……せめてⅣ先輩かとただなあ……

「いや……信用出来そうだし」

「どんな理由ですか……」

「どんな理由かあ……」

どんな理由かって言われると困るんだが……
冒険者は結局安全重視って言ってるが問題児だらけだしなあ……
それよりかマシでは？とさえ思う

「んー……さっき資料の場所を教えてくれたって事でダメか？」

「それが理由になるんですか？」

「だって……自分の資料があんの分かってんのに教えたんだぜ？なんかしたいなら隠すだろうよ」

「なるほど……」

Ⅳ先輩も納得してくれた、なんつーかゴリ押した気がせんでもねえが

「と言うか私が行かないって行ったらどうするんですか？」

「ええっと困る……またあの触手に襲われそうだしな」

「分かったよ……」

少し面倒そうに頷いてくれる、ひとまず良かった

「と言うかキル夫君、彼女を何処まで連れてく気ですか？」

「一応出るまでと」

「何も礼なしに？」

「……」

渡せる物あったっけ？

ないなあ……どうしよう……

「いえ、いいです特には」

「いやそう言っても」

「その代わり帰る途中学園のこと教えてくれませんか？」

「学園か……俺は構わねえが……」

「ボクはちょっと話せない事が多いので」

Ⅳ先輩はまあ……学園の３年生だと分かるわ
だって絶対人には言えない事してるだろうし

「まあじゃあ俺のってことで」

そう言いつつ資料室を出た

その直後触手に襲われかけたが藤堂さんが触手を退けてくれた……

「やっぱ居てもらって良かったわ」

完全に人任せであった

――――――――――――――――――――――――――――――――

「学園って意外に……大変そうなんですね……」

「いや……大変なのは大変だが特別な気もする」

自分の経歴を語るがやっぱ俺人並み以上に苦労してる気がするんだが……気のせい？

「安心してくださいキル夫君」

「Ⅳ先輩……!!」

「面白いくらいにピンチに巻き込まれてますね、不幸でしょうか?」

「んんんっ」

「と言うかですねぇ……浜辺で打ち捨てられてたのを拾われるって中々ですよ」

「まあ……そこはそうですね」

明らかに他にはいないレベルだわ……
いたら不幸を背負って生きてると思う

「でもそれが理由で学園に通うって面白いですね」

「まあ……間違いなく感謝してますよ」

「いいなあ……」

「ん？」

藤堂さんが意外な反応をする、羨ましがっているのか？

いやずっとここにいるなら確かにそうか

「だって楽しそうだよね冒険者って、学生って」

「まあ、楽しい事は楽しいわな。大変な事多すぎるけど……それでもだ」

「いいなとは思うけど……まあ今後ここに来るの危険だから話を聞かせてとも言えないしねえ……」

「だろうな……」

まあ通わせてやるなんざ言うことも出来ないし、ボンボルド先生に言うことも……

入ったことバレるしな

「まあ一応言うだけ言って見りゃいいんじゃねえか？」

流石に俺がどうこうするは言えないし妥協案だけは出しておく

「まあ……無理かな流石に……言っては見るけど」

申し訳ねえのは分かってるが俺も無理かなっては思ってる、だってあの先生だぜ？
優しそうには最初の頃は思ってたけど……うん

「ボクとしても厳しいと思いますね」

「まあそうでしょうね……」

３年間ボンボルド先生のとこで生徒やって来たⅣ先輩が言うなら……うん無理だろうな

ただまあ……祈ってはおく

「そもそも学園側もあまり問題は起こしたくないでしょうし」

「起こすって決まってないですって……」

「……実際に起きてしまったら手遅れなんですよ」

「そう言うことだよ」

そう言って藤堂さんは笑うが、やはりどう見ても寂しそうにしか見えなかった

「ほら、だいぶ戻ってきましたよ」

「なんで帰りもこんなゾンビ多いんですかねぇ……」

最初は実験体と言われた瞬間攻撃を躊躇ったが、Ⅳ先輩に今を生きてる方が大事だろ

と怒られて戦う
ごめんなさいと言いたくなるが……それだと心が潰れると藤堂さんに言われた
……確かに俺じゃ全員は背負いきれねえな

「ようやく出口か」

「ええ、今日は楽しかったです」

藤堂さんがそう呟いて見送る準備をする

「まあ待ちましょう、そう簡単には行かないようです」

「……？」

前を見ると人影が……人影？
入り口の前に誰かいる

「いやぁ……なんで気付いてるんですか……痕跡は消したはずなんですが」

「ココの怪物たちの視覚情報は私に渡っているのです」

「なんだって……」

Ⅳ先輩も驚いている、いやそれは俺も予想外だが知っていて欲しかった

「……どうにか地下には行ってないので見逃して貰えませんかねえ？」

「残念ですが……そうは行きませんねえ」

「……それじゃあ全力で俺達は逃げますがねぇ！」

Ⅳ先輩は煙玉をぶん投げる、それに乗じて逃げるぞと声をかける

「ギミックパペット悪いがあちこちに散らばってください」

そうして気配が散らばる
これなら安心して逃げ切れるのか？
この状況だと一度藤堂さんも外に出て話せる状況を作った方が……

「……え？」

「……」

人形達も散らばっていき混乱状態へと陥った
到底抜け出すのは簡単でⅣは外へと出ていた

「まあ……後で反省文でしょうねぇ、流石に外で拉致とかリスク負う行動する先生じゃないので身柄の無事は確保されましたが……」

流石に視覚情報を共有出来ることを知らなかったため彼には本当に申し訳ないことをした

と言うか本気で臨也連れて行くべきだったかもしれない……アイツなら阻害出来るし

「申し訳ありませんねえ、結局解明の手助けになったかすら不明ですし……ちゃんとお詫びや埋め合わせはしますので」

そう言って彼の方を見る……

「おや？」

本来であれば彼がいるであろう位置を見るが彼がいない……何故だ？

「まさかまだ中に!?」

あれだけの妨害をして抜け出せない事はないだろう、1年でも盗賊コースだし……

「何が……？」

慌てて入ろうと試みるが先程まで以上の合成獣が入り口付近から飛び出してきて慌てて身を引く

そうしてまだ彼がいるんだと理解する

「俺じゃ……厳しいな……」

警戒しつつ中に入れないのをもどかしく見ていた

当然中では彼が取り残されていた

――

「藤堂さん……？」

キル夫は藤堂晴香に掴まれており脱出に失敗した……いきなり何故？

「本来であればⅣ君にもお仕置きするべきでしたが……」

淡々と話しながらこっちの方を見る、いや怖いんでこっち見ないで

「今の興味は貴方なので特別に彼は逃しました」

「実験体なら操れんのかよ……」

腕を破り突き出した触手が俺を絡む
その腕から血が流れ出しており正直見たくない

「ええ、残念ですが抜け出せないでしょうね」

「くそっ……マジじゃねえか……」

足掻けば足掻くほど余計に絡まっていく
なんだよこれ……こんなところで詰むのかよ?

「……」

「おい、しっかりしろ藤堂春香」

意識のない彼女に語りかける

「俺はまだ死ねねえんだ、開放してくれ」

死にたくないと訴えかける

届く自信は勿論ねえが何もしないで死ぬなんざ勘弁だしな……

「……」

あらやっぱ通じねえ……ここで終わったとか本気で嫌なんだがなぁ……

「う……」

「おい、藤堂!!聞こえんのか!!」

「おや……」

先生が驚いた顔をしているが……もしかしてうまく行ったのか?

「少し弱めてあげようとは思いましたが……まさか自分で抗いますか」

「キル夫さん……?」

口から血がこぼれてる……

俺のためにそこまで無茶したのかよ

「悪い……」

謝りながら緩んだ触手から逃れる……

難なく脱出できた……このままなら脱出出来るが……許されるか?

「どうしました？」

「開けてくれないですかね？」

「ああ、構いませんよ」

そう言うとボンボルド先生は道を開けてくれる

「……は？」

何がどうなってんだ？何で急に開けてくれたんだ？

意地でも戦う気だったが……

「貴方を逃すのは惜しいですが……それ以上に興味が沸くことがありましたので」

「!?」

この場合だと予想が付く
……案の定藤堂の方を見ているか

「良かったねキル夫さん、無事に脱出出来るよ」

「……」

「どうしてそんな悲しそうな顔をしているの?」

「だってボンボルド先生に目をつけられるってそう言うことだろ?」

道中の化け物達を思い出す……あれになっちまうのか?正直そんなことさせたくねえんだが……

「大丈夫、いつもの事ですから」

「……それは本当に大丈夫なのか？」

正直不安しか無いんだが……
なんも後遺症とか無いのかよ？

「……はい」

「ボンボルドせんせー、本当に何も無いんですかー？」

「そうですねえ……解剖はしますがまだまだ怪物になられても困るので戻しますが……」

「問題は？」

「記憶が無くなるくらいですかね……いつも通りですが」

「……」

「おい」

それを言えよ！黙って全て済ませるつもりだったのかよ!!
せっかく話し合ったのにそりゃあんまりだろ

「数日の記憶だけですので」

「それなら良いってわけじゃねえだろうが……!!」

アンタはやっぱ被害者じゃねえか!!
しかも寄生だけじゃなくて人生を奪われてんじゃねえか

「どうにかして……」

「すみませんが部外者はここでお仕舞いです」

そう言って大型の怪物にアンブッシュを受ける
吹っ飛びながら壁のように詰めてくる
入り口から外へとぶっ飛ばされ、そこを封鎖される

「っち……なんだよこれ……!!」

これじゃ……進めねえじゃねえか……
意識も失いかけながらそれでも足掻こうとする
どうすりゃ間に合うか……
それこそ俺の魔術ならどうにかなんのかねえ……
こう言う時に使えなきゃだろ……!!
そう思いつつ気を失ったはずだが……

「なんとか動ける……っつーかなんで中にいるんだ俺は?」

色々と理解ができない……ただ発動したのか俺の魔術が?
とにかく好機かもしれねえ……!!

そう思いつつ中へと突っ込んでいく

…

「あれは……」

一方のⅣは偶然にも目撃した
キル夫が外へとぶっ飛ばされてきたのを
そうして急いで介抱へと向かおうとしたが
喚いた瞬間彼の姿は消えた

「……これは根本的に彼の魔術を勘違いしていたかもしれませんねえ」

予想以上にヤバそうな魔術を目の当たりにし唖然とした
その後中に入ったのだと確信して再び突入を試みたが失敗した

――――――――――――――――――――――――――――――

「待てよ！」

２人に追いつき叫ぶ
良かった間に合ったんだ

「……入れないように封鎖させたはずですが？」

「どうにかなっちまったってわけだ」

「そうですか」

予想外の事に少し嬉しそうにしている
んなことはどうでもいいがマジでどうにかならねえか？

「なんで……来たんですか？」

「そりゃ来るだろうよ」

流石に放っちゃおけんし
と言うか見捨てる奴なんざいるか?

「そんなこと頼んでいない!!」

「そりゃアンタ頼むタイプの人間じゃ無いだろ」

絶対頼むなんざ思ってねえからこっちがやるしかねえわけで

「だったらなんで!!」

「学園に通いたいって言ったじゃねえか」

「……言ったからなんなの?」

「その記憶を消されるなんざ納得できねえんだよ、俺の学園生活を聞いた数少ないダチでもあるしよ」

正直自分語りとかよく考えたらすげー恥ずかしいことしてたんだな俺

もうしない、だって……思い出しただけで赤面するわ

「勝手なことばかり……」

「でも通いたいの事実じゃねえか……」

ここで激情するってことは正解だって言ってるようなもんだが

「……」

少しだけ彼女が泣いているように思えた

「通いたいよ!!でもどうしようもないんだよ!!」

泣きながら叫ぶ、どうしようもないじゃんと怒りを露わにする

「結局言わなかったんだろうが!!言ってみるって言って」

「どうしようもないじゃん……」

「だ、そうですけどボンボルド先生……」

ダメなのは分かってるからどうやって俺が彼女をこっから連れて行くかだが……

「藤堂さん」

「はい……」

「学園に通いたいのですか？」

「……はい」

小さく頷く、声も聞こえていないレベルだ

「そうですか、分かりました」

「え？」

藤堂よりも先に反応しちまった

でもえ？マジで？なんで？

「どうしてですか？」

「いえ……貴方が学園通いたいと言ったのも初めてですし、感情を爆発をさせたのも初めてなので……消すには勿体無いと判断したまでです」

「……結局そのうち消されそうで怖いんだが」

まあ今ここでごねても仕方ねえし流そう

「なので折角ですし学園で学んで貰いましょうか」

「いいんですか!?」

「ええ、偶にはこう言うのもいいでしょう」

さっきとは一変して優しいオーラに溢れている……いや、優しくはねえな

「岡島君」

「なんでしょうか?」

「彼女を任せます、1年に編入させますので」

「何を任せるんすか？」

俺何させられるんだ？怖いんだけど

「いえ、もしも彼女が暴走した場合貴方に止めてもらいますので」

「暴走するんすか……？」

しないって思ってたんだがなあ……

すっごく不安になってきた……いや我慢我慢

「時折ですけどね」

「わーマジか」

「だから言ったのに」

言わんこっちゃないって顔してるけど知らんねん……そんなホイホイ起きないでくれよ……？

「それでは……本当は材料が欲しかったのですが今回は諦めますか」

「助かった……まあ反省文とかはありそうだが……」

「元凶にやらせるので大丈夫ですよ」

Ⅳ先輩南無……

「えっとじゃあ……私って学園に通っていいの!?」

「さっきそう言ったろ!?」

どうやら信じてないらしい……まあ普段に生活から考えるとそうか……

「有難う」

目一杯の感謝を笑顔でされた

本当に嬉しいのは分かるしそうやって喜ばれた俺も嬉しいわな

「よかったな藤ど……」

そう言って気絶する

「キル夫さん!?」

慌てて藤堂が駆け寄って来たらしく俺を背負いながら研究所を後にしたらしい

あのまま放置すると、ボンボルド先生が何をするか分からないし、このままじゃまずいと外まで運び出した

途中ボンボルド先生が欲しそうな顔をしているのを無視してⅣの元に送られて無事部屋へと連れ戻された

目が覚めて夢だったのかと不安に思うばかりだったが、その日転入生の話を聞いて安堵するばかりだった

学園へようこそってな是非とも楽しんでくれよ

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

第18話

「成る程なぁ、アンタがキル夫か」

「初めまして」

八神はやて、まどか先輩たちが言ってた3年の魔術師の人らしい

Ⅳ先輩とはまた違った正当な魔術師のように見える

「そかそか、面白そうな子やね」

「でしょー」

まどか先輩が誇らしそうにしている

いや、世話にはなってるけど流石に俺の保護者では無いでしょうに

「そんでこの子が自分の魔術のことを知りたい、だったっけ？」

「そうですが……分かるんですかねえ？」

「さぁ？確信はできひん」

「まぁ、見ないで１００％分かるって言われても困るっすけど」

名探偵どころか恐怖でしかないし
と言うか調べるって言ったってどうするんだ？

「じゃあ出してみ？」

そう言って八神先輩がせがむが……
うん知ってた、どうするんだこれ？

「えっと出せません……」

「一応聞いてはいたけど、アレから出せるようになったとかはやっぱ無かったんやなー」

「すみません……」

「いや、謝られても仕方あらへんしなあ問題ないで」

出せと言われても無理だし許してくださいな

「他になんかあったりせぇへん？」

「そういえば」

この前の出来事を思い出す、アレも間違いなくそうなんだよな……

だが……何かはわからない

「なんか気付いたら別の場所にいたんです」

「それはいつ？」

「この前、Ⅳ先輩とボンボルド先生の研究室に行った時です」

「「は？」」

わぁみんな怖そうな顔してる、いや迂闊だったかもしれん……この後の選択肢を間違えちゃダメそうだ

「これはしっかりと叱らないと……」

「あの……すみませ……」

「いやまぁ絶対Ⅳ君が悪いって分かってるから」

「あっはい」

Ⅳ先輩の可哀想な未来が予想ついた

「本当はキル夫君のことも言いたいけど断れなかっただろうしねぇ」

と言うか行くこと分からなかったんです、許してください

「って言うことは移動したってことっすけどやっぱり？」

「断定できないけどテレポートやろうなぁって見ないとなーんも分からへんけど」

「テレポート？」

「そこまで使える人はおらへんからレアやけど……簡単に言うと移動系の魔術やな」

「凄そうっすね」

「実際凄いよー、テレポートさえあれば移動から逃走まで楽だし」

「そりゃ便利だ」

「魔術師コースだったら良かったかもってレベル」

「盗賊っすね俺は」

それは変わる事ないし、後悔もない

「それは残念やな、でも魔術の推測は多分当たってると思うんやが」

そうだな、そう言われると違和感がねぇ

つまり俺の固有魔術ってのは……

「いや、違うと思うっす」

「走り先輩？」

走り先輩が口を出してきたが……違うってなんで？

「テレポートって体の一部だけ移動するってないっすから」

「そんなことあったんか？」

「ええ、ウチが助けられた時まるで手が伸びたように思えたっすから」

「そうか」

体の一部だけテレポートってのは無いんだな、じゃあ違うか

俺もその一件があったかあら変異だって思って調べたんだしな

「そっか、じゃあ現状じゃ絞りこめへんな」

「いや、考えて頂いただけでもありがたいっすし」

「こっちでも調べとくわ、なんかあったら連絡してなー」

「分かりました」

結局断定出来ずじまいだったが少しでも前進出来たと思ってる

しかし……俺のって予想以上に難しい魔術なのな

――――――――――――――――――――――

コミュ1d13:12　潮田渚

「お疲れ様」

「ああ……」

盗賊コースが終わってぐったりしていた所を渚に話しかけられた

「だいぶお疲れだね……」

「ああ……色々イベントが立て込んでてな……」

「騒がしいのは嫌いじゃないけど……そこまでになるなら勘弁かな」

「巻き添いにしてやるー（棒）」

「やめてー（棒）」

なんてくだらないことしてる場合じゃなかったな

「で？最近はどうだ？」

「キル夫君は僕のお母さんにでもなったのかな……」

「いやそう言うわけではねえな」

「まあ、盗賊らしくやってるよ」

「盗賊らしくって実際なんだろうなって俺としても思ってるわ」

「ははは……」

盗賊らしいって下手すりゃ犯罪だよな……？
大丈夫だよな？うん大丈夫！

「まぁでも盗賊技術ならキル夫君よりは上だよ」

「あっズルい」

「そう言ったって万能タイプに盗賊まで負けてたら話にならないじゃないか……」

「そりゃそうか……」

「ただ盗賊技術で負けてるって悔しいな……今度来ないと」

「今度課外授業もあるしね」

そう言えばそうだった……
課外授業なんてあったんだな、忘れてた
また人が死ななきゃいいんだがな……

「先輩達とも組むとは言え、キル夫君はメンバー決めたの？」

「いや……まだだが」

「早く決めた方がいいよ」

「いや……存在すら忘れてたんだ……渚組むか？」

「いや……やめておくよ先輩もランダムだし盗賊３とかになったら笑い事じゃないから」

「そりゃそうだわ」

メンバー探さねえとなって

「前回のメンバーで行くことになると思うけど」

「俺もそうかねえ……」

３人って聞いたし冨岡さん達と俺たちになっかな？

「それじゃあ共に生き残らないとね」

「折角なら上位狙いって言おうぜ」

「１位相手に啖呵切る自信はないなあ」

「まっ気楽にやってこうぜ」

そうは言ってもメンバーを決めねえとな
色々と話してみることにした

―――――――――――――――――――――――――――――

２．３年コミュ　１ｄ１７：８　ニケ

「よっ」

「ニケ先輩、久々っすね」

依頼後たまに会う事はあったが実際暫く会ってなかったしな

「結局勇者技習いに来てねえじゃねえか」

「いや、俺使ってる余裕ないです」

戦闘中空に飛んでる暇なんぞねえ
後顔が怖いのにカッコいいポーズってちょっとわけわからん

「仕方ねえな、人選ぶしな」

「勇者な時点で人選びそうだが」

誰でもなれたら勇者じゃねえしさ
いや……勇者なのか？わっかんねー

「いいぜ、勇者技の凄さは課外授業で見せてやっから」

「え？ニケ先輩と一緒に組むんですか？」

組み合わせってもう決まっていたのか？
と言うかそれなら渚と組まなくて良かったになるが

「いや分からん」

「えぇ……」

分かんないのかーい!?
じゃあどう言うことやねん

「いや、ＰＴ相手にやろうかなと……ある意味テロっすね」

「そんなこと言うなよー」

ニケ先輩の場合関係ないところでやりそうで怖いんだが……
まあＰＴの人にはご愁傷様と

「今度勇者技教えてやるから」

「覚えていて損はないと思うのでその時は……」

使うとは思わねえが損はないことは分かる
一応約束だけは交わす、ってか勇者技って何練習するんだろう？
少しだけ疑問に思ったまま見送った

―――――――――――――――――――――――――――――――

特殊コミュ：学園へようこそ

「藤堂、学園はどうだ？」

現在学園の説明をしながら一緒に歩いている
ボンボルド先生に学園を案内してくれって言われたが……まあ言われなくてもしてた気はする

「楽しいです、通った事なかったので新鮮だらけです」

「そりゃよかった」

俺も体張った甲斐があったなと思う
体張りすぎた気がするけど

「と言うか戦士なんだな」

「流石に魔術師出来るわけじゃ無いので……」

まあボンボルド先生の元にいても魔術師に適正あるってわけじゃねえだろうし……
そもそもあの先生的に出来上がるのは戦士か

「色々な方に教わってますので」

「優しい先輩多いしな」

実際世話になってる先輩が多い
藤堂も教えられてて良かった

「そう言えば先輩達から聞いたんですが」

「ん？俺の噂か？」

「いや課外授業についてですね」

「……」

ああああああああ、忘れてたあああああ
藤堂他のメンバーと組めないじゃん……ってより俺が見てないと不味いな
そうなると誰かと別にならなきゃならねえが

「どうしたの、キル夫クン？」

「うわあああああああ!?」

「おっと、驚いた」

「俺のセリフだ!!」

狛枝あああああ、急に声かけてくるんじゃねえ!!驚いたじゃねえか!!
と言うかいつの間にいたんだよお前!?

「あっはっはごめんごめん」

「全く……なんのようだ？」

「いやキル夫クンがボクに用ありそうな気がして」

こっっっっっっっっわ、なんで分かるし
こいつヤバさ極まってきて無いか？

「あるっちゃある」

「どうしたの？」

「いや……課外授業なんだが……組めそうに無いと」

「そっか、仕方ないね」

あっさりとしょうがないってなるが……いいのか？

「いいのか、俺居なくて？」

「……キミにとってボクはどんな扱いなのさ？」

「すまない」

いや……でもそう思うじゃん？
失礼かもしれないけどさ

「じゃあ立華さんと組もうかな」

「ん？」

俺も立華さんと組むつもりだったがどう言う事だ？

「いや彼女も結構キミに頼り切りだから別のパーティー組まないとねって」

「そうかもしれねえが……」

正直こっちも頼りきりではあるが本当に強いから……ついつい居て当然と考えてたわ

「ってわけでキル夫クンは別のメンバー探すように」

「へいへい」

よし、渚と組むか……ダメだよなぁ……
ＰＴニケ先輩だと完全に火力不足だし

「私のせいですみません……」

「いや、頼れって言っただろう？問題ねえよ」

色々と知り合い頼ってもいいし初顔と組むのも面白え、逆にワクワクしてきたわ

「っつーわけで案内もするがメンバー探しすっから」

「分かりました！」

そう言って探し始めた……
ただまあ何処に誰がいるかわっかんねえ
ただまあアイツならあそこに居そうか……
そう言ってとある場所に向かった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「中嶋組もうぜ♪」

「いい加減にしろ……」

最近ことあることに中嶋に絡んでる気がする
相手がうんざりしてる気がするが……いいじゃんなんか放っておけないし

「また無茶振りをする気か貴様は?」

「いや、課外授業のメンバーやろうぜって」

「元のメンバーはどうした?嫌われたか?」

「そんなことじゃ無いって知ってるくせに」

「気色悪い言い方をするな」

「いいじゃん」

「よくない」

怒られた……なんでだ？
酷い……酷いよ……

「んでパーティーは？」

「悪いが相手がいる」

「そこをなんとか」

「悪いが無理なものは無理だ」

そんにゃあ……しょうがないのか……諦めるのかあ

「そんなんで勝った気にならないでね!!」

「と言うか岡島」

「どうした?」

「後ろの子がテンションついて来れてないぞ」

「あっすまん」

明らかに後ろで藤堂さんが戸惑ってるわ……色々とすまない

「いえ……仲良いんですね?」

「……悪くはない」

「あら珍しくデレた」

「殴るぞ?」

殴られんのは勘弁とそのまま去る準備をする

と言うかこれ以上邪魔するとぶん殴られる

「結局何がしたかったんですか？」

「男にはやらねばならぬ時があるのさ」

「……はぁ」

呆れられたわ……悲しくなって来た
他のメンバー探しに行こ……
誰かいるといいが……

…

「ん？キル夫か？」

「姉さん……？」

食堂案内しているときに会うのは予想外だった
と言うか冨岡さんまたいないし
いつも一緒とは思わんけど

「どうした食事か？出すぞ？」

「いやいいですと言うか案内してただけなんで」

「そっか、残念だ」

なんで残念なんだ？なんか色々と分かんねー

「えっとキル夫さんってお姉さんいたんです？」

「違うけどそうみたいな？」

「はぁ……」

もう色々と嫌や……なんでこうなるん？
面倒なことにならなきゃいいけど

「三宮三葉だ、確か転入生だったな」

「藤堂晴香です」

軽く挨拶を済ます、よし普通に終わりそうだ

「しかし苗字違うんですね？」

「いや同じだぞ？」

「？？」

「三宮キル夫だ！」

「???」

ちょっと何言ってるか分からないです

「キル夫さん苗字三宮だったんですか？」

「違うぞ」

「でも……」

「俺の親父は岡島緑郎だ、三宮じゃねえ」

「……」

姉さんを怪しい目で見てる

うん、自業自得だし仕方ねえわ

「と言うか他に何かあるか？」

「気まずくなったからって話変えないでください」

「いや……いいだろう？」

まあいいですけど……

と言うかそろそろ別の場所行くか

「課外授業のメンバー探していまして」

「なんでお姉ちゃんに言わなかった！いいぞ！」

ちょっと藤堂うううううう!?

なんで言っちゃうのおおお!?

いや確かに心強いけど冨岡さんの方どうすんだ!?

「冨岡さんどうするんですか?」

「勇くんは流石にシノアもいるし大丈夫かなって」

「大丈夫ならいいんですが……」

正直不安がある
ただ……断ると絶対駄々こねるし
変なメンバー入れるよりは安心できるのもあるしこれで決定ｋ　……

「先輩、メンバー探してるんですか?」

「……」

胃が痛い……と言うか振り向きたくないなあ

この後起こることが予想付きすぎるわ
それでも振り向かなきゃならねえんだけどさ

「雪菜、どうした？」

「ん？先輩？」

「先輩……？」

俺は逃げても許されるでしょう
と言うか許してください

「ええ、センパイ課外授業一緒にやりませんか？」

「あー……助かるっちゃ助かるが……」

姉さんどうすりゃいいのこれ？

「ちょっと！私のだぞ！」

「姉さんのではない」

勝手に所有宣言しないで欲しいんですが

「その通り先輩は貴方のものではありません」

「そうだそうだ、雪菜のものでもねえけどな」

「……」

嫌な予感がして先に釘刺した、刺しておいて良かったと思う

と言うかなんで黙ったの!?俺念のためであってマジで言うと思わなかったよ!?

「あの、じゃあ私が抜ければ」

「悪いが面倒みるって言っちまったからな」

「そうですか……」

「と言うかキル夫！お姉ちゃんに内緒でその子との関係はなんなんだ!!」

「本当に何がしてえんだよ!?」

「むっ……反抗期か？」

誰か助けて

「友達ってか面倒みてくれって預かったんだ」

「どういう事ですか……」

困惑するが追及はされなかった
実際されると困ったしな
しかしこれどうすんだ？どっちも無碍にしたくねえが

「みっちゃんこんなところで何してるんですか？」

「……シノアか？」

シノアさんが乱入して来た、多分事態を収めてくれると思うわ

「キル夫さん、これどういう状況です？明らかに浮き立っているんですか……」

「分からん……」

正直分からん、どうしてこうなった？

「ああそうだシノア、悪いが課外授業はキル夫に頼まれて移ることになった」

「は？」

そう言ってシノアさんは俺の方を見る
勿論俺が誘ったわけじゃないのでブンブンしておく

「またキル夫さんを困らせているんですね」

「困らせてるわけじゃない！キル夫が必要としてるから！」

「はいはい、義勇さん困ってるので帰りましょうねー」

「まて……勇くんも他人との組み合わせをチャレンジするべきだ！」

「それは出来る人間ならです、義勇さんはそれですら厳しいのでダメです」

「そんなぁ……」

……考えてみたが無理だわ、アレは治せるレベルじゃねえ

「それじゃあ行きますよー」

「キル夫おおおおお、助けてえええええ」

とりあえず手を振っておく、これは仕方のない事だ

「えっと……」

「雪菜、ＰＴ頼んでいいか？」

「……はい！」

なんとかＰＴ決まったが……なんだこれ？

いやいいけどさ、いいけど姉さんが不憫に見えて来た

「まだ数日ありますし色々と最終調整しますね」

「そうだな……先輩が誰かによるが覚えておいて損はねえ」

正直色々とやりたいが……戦士２人だし盗賊の授業ちゃんと受けておくか

「……課外授業平穏におわりゃいいがねえ」

そうなるとは思わねえが……ただ少しでもマシになるように願うだけだった

――――――――――――――――――――――――――――――――

第19話

「えー……課外授業の1日前にわざわざ盗賊コースに来るなんざ正直舐めてんのか？って言いたくなるが……仕事だしやりまーす」

いきなり酷い言われようである、ただ……結構来てるもん……

「つっても何教えるかねぇ……」

おい教師……しっかりしてくれよ

何というか他の教師陣に比べてやる気が感じられねぇ……

「あー……アレがいいか」

そう言って長谷川先生はポーションを取り出すが……

え？何する気だ？毒盛るん？

「厳密にゃ盗賊の仕事じゃねえけど……どっちみち必要だろうから」

「必要なんですか？」

「殆どの奴らにゃ必要ねえと思うがな」

どういう奴等に必要なんだ？

「課外授業でおめえ達が誰と組んでるか知らねえけど、場合によっちゃ神官がいねえかもしれねえしな」

「そうならないように上級生を入れるんのでは？」

「だからお前達が互いに組む奴知らねえって言ってんだろうが……だから上級生も神官

いるとは限らないわけだ」

「……」

狛枝のＰＴは立華さんがいるから問題ねえが俺らの場合は確かに神官がいないケースもあるのか

「で、聖気が使えりゃ神官みたいなもんだし……使えねえ奴だらけだろ」

「……」

俺は使えないし盗賊コースのほとんどは聖気の練習してないはずだし使えなかったはず

「魔力が使えりゃ一番だが、使えねえ奴にも一応アイテムを使えや出来る、だから覚えとけ」

そう言うことは回復技か……まさか俺が使う日が来るとはって感じだが……

「ポーションシャワーっつーんだが……ちなみに効率は悪い」

「悪いのかよ!?」

「煩いぞ」

「すみません」

つい突っ込んでしまった
だけど普通は突っ込む……はず……！

「ポーションの消費が激しいし、回復量もどうも落ちちまうからな……本来であれば自前で改造ポーションとか作る奴が使う技だ」

そのまま使うには効率が悪いっつーことか

ただまあ……回復役いねえと不味いしな

「特に盗賊っつーのは戦う奴もいるが、他のメンツが戦士だったりしたら回復に回った方がいいってケースだってあんだろ？」

少なくとも今回のメンバーなら俺回復役の方がいいだろうしなぁ……

「盗賊で魔術出来んなら魔罠っつーのもありだが……使えねえ奴もいるしそれはまた今度な」

走り先輩から習ってはいたが……そういやまだだったな

実際便利だと言うことをいつも感じている

「そうだな……魔術使ってるやつにゃ分かるかもだが魔術にゃ散布ってのがある、そいつを魔力ではなくポーションを分離させる」

「???」

何を言っているんだ？
ワケ分からん？

「……あー、そこの困惑してる奴のために言ってやっとばらまく感じに魔力を使えと」

「……やってみっか」

正直ちょいと分からんが習うより慣れろタイプだしやるだけやってみりゃいいだろと言うわけでポーションを持ちながら魔力をばら撒くように使ってみるが……

１ｄ１００：３２

出来はしたが……
なんと言うか効果が薄く思える
回復はするが気休め程度だ

「まあ……出来ねえ奴はもっと出来ねえしな」

「マシな方ではないっすよねぇ？」

「正直そんだけ魔術使えるやつがこの程度なのは予想外ってくらいだ」

「やっぱりいいいいい」

下手すりゃ他メンツに笑われんじゃねえのこれ？
回復役いないのに代わりにもなりませーんって
……練習しようにも明日からだし間に合わん

「だから普段から来いっての」

「来てますってば……」

渚に盗賊技能は劣ってると言われたがそれでも優先的には来てるのだ……

ただ……もっと習ったことも練習しないと不味いかもな天才じゃないし

「対象が１人なら普通にポーション飲んだほうがいいから履き違えるなよ」

「全部これに頼るつもり自体元から無かったっすけど……」

「お前の場合練習も兼ねてポーション多めに持ってってもいいかもな」

「うっす……」

見てろよ……いつかマスターしてやっから……

「おい、その顔は今に見てろよって顔だが」

「それがなんですか？」

「回復役他にいるなら不要だからな」

「あっ……」

そういやそうじゃん、１人でやってやるーじゃなかったわ

色々と……飲まれかけてる気がするわ

「……お前さんは優秀な生徒だと思ってたが急に不安になって来たぜ」

「うるへー」

そう言いつつ練習するも全く実らなかった

……間に合わないのまずくね？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「どうすっか……」

そもそも神官と組んでおけばとは言わないが……んなの２人に失礼だし何より今貰ったチャンスが自分がダメだったのだから

「まぁ……どうにかなるといいがな……」

「凹んでるの珍しいね？」

「うん？」

声を掛けられる、ボーッとしてたので誰だか分からなかったが……

「……アカネ先輩？」

「やっほ」

アカネ先輩が回り込んでくる……

あまりこの人に今の姿見せたくなかったんだがな

「なんかすみませんね、暗くて」

「別にいいけど……大丈夫？」

心配される、と言うか色々気にかけさせ過ぎてしまってる気がするが……

「何というか才能がなかったんですよ」

「なんの？」

「……ポーションシャワー」

「……ぷっ」

「なんで笑うんです!?」

「いや……きっ君が面白い物で悩んでて、だって盗賊向きってより本当にオマケじゃん」

「ただ使うかもって……」

「私も使えないよ」

「え？」

「使う気なかったし、一応は練習したけどダメだったよ」

「……マジっすか？」

正直アカネ先輩が出来ねえとか意外すぎんだが……

「じゃあアカネ先輩の時の課外授業ってどうだったんです？」

「神官がいれば問題ないじゃん」

「そういやそうっすね」

「いなかったっけど」

「!?」

いなかったのか……？だったら何が？

「別にそれだけじゃないってことウチは戦士多かったし強行突破に近かったけどね」

「そんなもんすか……」

「第一ポーションあるしね」

「そりゃそうっすね」

ポーションあるしよっぽど無ければだが

「そりゃ使えるなら使える方と組んだ方が手が増えるし便利だからいいよ？」

「そっすよねえ……」

「ただ使えないなら使えないなりに動き方あるじゃん、きっ君は他の動きだって出来るしさあ」

「俺の出来ること……」

「きっ君結構優秀なんだよ？あまり卑下し過ぎると嫌味になるよ」

「ごめんなさい」

「怒っては無いけどさ」

それは分かってるが……一応と

「とにかく、期待してるから」

「ん？アカネ先輩チームなんすか？」

「いや私達だってまだ知らされてないよ」

ニケ先輩も言ってたが……前日でも一切の情報無しなのか……

正直チームワークとか大丈夫なんだろうか？

「ただ……盗賊同士が組むと厳しいんですかね？」

「だからーきっ君は他のだってやってるし組んでも問題ないでしょ」

「アカネ先輩……」

「それに、きっ君と組んだら面白そうじゃん」

「俺もアカネ先輩と組めたら面白そうとは思うっすね」

実際そう考えるとさっきまで暗かった思いが明るくなってきた気がする

「まぁよっぽど無いと組めないと思うけどねぇ」

「バッサリ!?」

「相当厳しいと思うよ、と言うかきっ君誰と組んだの？」

「雪菜と藤堂さんだが」

「藤堂さん……？」

「新人の子だけど」

「知り合いなんだ、相変わらず手が早いと言うか」

「誤解だ!?」

冤罪を受けている気がする！

俺そんなことやってるように見えますか!?

「まあちょっと知り合ったんですよ……」

「危険だったって聞いたけど」

「まあ確かにボンボルド先生もやばかった……」

まどか先輩達が話したか？

いやでも話したならすぐにでもアカネ先輩が来そうだが……

「……」

わぁ、笑顔これはやらかしたなあ

「……」

「あの……」

「付いてきて」

「はい……」

そう言って俺はついて行くことになった

俺が悪いが……何処へと連れて行かれるんだ?

少し……どころじゃ無いが恐怖を感じながら恐る恐るついて行った

「ここは……」

女子寮だよな……なんでここの俺が連れて来られたんだ？

とある一室に案内されて入って行く

「入って大丈夫なんですか？」

「どうだろうね？」

いや……アウトだと思うんだが……

ばれないように気を付けろと？

「とりあえず座っていいよ」

そう言ってアカネ先輩はベッドに座る

え？こっちのベッドに腰かけろと？不味くね？

「あの……」

「誰も使ってないからいいよ」

そう言われて部屋をチラッと見る

……ボコのぬいぐるみ、っつーことはアカネ先輩の部屋か

「まあさ、きっ君とりあえずさっきのこと話してよ」

「はい……」

そうして俺はことの経緯を全て話した

流石に逆らえないので……

「ふーん」

「怒ってます？」

「怒んなくてもいいけどさー、先輩方が怒らなかったみたいだし私が言おうかなって」

「はい……」

何を言われるんだろうか……

いや……依頼でも無い上に明らかに危険な場所なのに何も話さなかったのは不味いな

……俺も聞かされてなかったけど

「あまり話したくなかったけど……いっか」

「……」

「きっ君にそっくりだったんだ」

「見た目が!?」

「いや流石に見た目そっくりとか可哀想すぎるでしょ」

「泣いた」

やっぱ怖いって言いたいんだろう!泣くぞ!!

「察してるか分からないけど、そのベッドの子だよ」

「って同室の子ですか……勝手に座っちゃダメだったん……」

動こうとベッドに手を付くと何かに触れる
出してみるとロザリオだった

「フェルトって名前のきっ君そっくりで、お宝に一直線な子だったんだ」

「だったか……」

「そう」

死んだのか……まあ死ぬ人間は多いが
よりにもよってルームメイトか……

「んでその子は……」

「その話は待って……今は事実だけにして」

「……はい」

話したく無い……か……
知りたい気持ちはあるが、明日から課外授業なのに集中力が奪われたら不味いか

「勝手に死なないで」

「そりゃ気を付けますが……」

「私のものだからさ」

心臓を握り潰すかのように胸筋を掴まれる

「分かっています……」

全てを捧げるって決めてたしそれはどうでもいい
ただ……いつも以上にアカネ先輩が弱っているように思える

「本当に分かってるの？」

分かっているはずだ……
アカネ先輩言うことが絶対だってことが

「ああ、大丈夫です」

「……置いてかないでよ」

「……」

「フェルトは騒がしかったし迷惑だって思うことも多かったけど……大切な友達だったんだよ」

「……だから死ぬわけには行かないと」

「そう、私は脳髄使ってでも強く生きる気」

「俺も強くならねえとな……」

「本当は私が強ければいいんだけどね……けど盗賊だから」

「いや……俺にとっては十分強いと思いますけどね」

だからこそ組みたいって話したわけだし

「ごめんね、いきなり連れ出してこんな感じでさ」

「いや全く問題ないですって」

むしろずっと正座させられて説教とばかし考えてたし

と言うか今からでも説教されるべきじゃね俺？

「本当は学園も辞めてって言い出したいけどね」

「流石にそれは困りますが……」

死んで欲しくないって言うならマジでそれが一番だろうが……すまない……

「きっ君もお宝大好きだもんね」

「こればっかりはどうしても……」

今の俺に逆らえる権利はない気がするが……仕方ないんだ!!

「だからこそ助けた価値ありってね」

「どう言う理屈です……？」

「死んだように生きてる人間よりも面白いってね」

「そりゃそうでしょうね」

俺自身も楽しみやワクワク大事だと思ってるし
そのフェルトって先輩に負けないくらいにトレジャーハンターになりてえって
……最近俺自身トレジャーハンターなのか不安だが

「と言うわけで呼んじゃってごめんね」

「そりゃ全然文句はないですが」

ただ……そろそろ帰らねえとカーミラ先生に見つかりそうな気がする……

「じゃあ俺はこれで」

「え？」

「まだ何か用が？」

「うん」

一体何があるんだ？明日のこととか？

「いやさ、自分でも情緒不安定だと思うよ?」

「はい」

一体どうしたのだろう?

「きっ君が悪いってわけじゃ無いのもわかるよ?」

「はい」

嫌な予感がしてきた

「正座」

「はい」

ベッドから降りて床に正座する

これは逃れることができねえわ……

「それでは説教を始めよっか」

「はい」

そっからだいぶ長い時間説教され
カーミラ先生に見つかって説教時間が増えた
……仕方ねえが……辛い

―――――――――――――――――――――――――――――――

部屋に戻ってぐでーっとする
明日から課外授業なのに本当に大丈夫なのだろうか？
ただ……それ以上に大事な事聞いたが

「死んで欲しくねえのはこっちだって同じだし死ぬ気なんざねえ」

お互い学生を辞めることが出来ない以上強くなるしかねえわ
覚悟なんざ決まってる

「うん？」

どっかで言った気がしたが思い出せない
結局諦めた

…

守るための力なんていくらでもある
流出領域ってものも習ったから

「私の流出領域は怪獣を出すだったけど……」

使うたびに人であることを忘れかける気がする……

まるで自分達が怪獣になったように思えるようで目が覚める時に恐怖することだってあった
ただ、間違いなく強いことが実感でき必要なことだって分かってる

「ただ使い方を慣れないときっ君までダメになりそうだけど……」

巻き込まれたらどうしようもないしね……
ただそれするなら何度も何度も使わなきゃダメだけど……まいっか

「俺は化け物になったとしても助けになりたいから」
「私は化け物になったとしても彼を守りたいから」

――

第２０話

――――――――――――――――――――――――――――――

「え～～、今回の課外授業の内容をお伝えします!!」

腐れ谷につくなり長谷川先生が説明し始めた
この場所初めてでもあるし最初みたいに聞いてなきゃ痛い目あいそうだ

「課外授業の内容は簡単！この移動キーを起動して送られた場所から１週間以内に帰って来るだけ！」

授業内容だけなら簡単だな……簡単じゃないんだろうけど

「ポートキーを使えば、即座に帰ってこれますがその場合は単位を落とします、中間期末の点数によっては補習もあっからな」

「補習はまあなりたくはねえが最悪のケースは避けなきゃな」

その後食糧の話だのを受ける

正直学園が用意してくれるとは思ってなかった

「では中間試験上位１０位までのメンバーがいる班は最大５人、１年３人で２３年が１人ずつな」

その話は既に聞いてた、だからこそ予め組むメンバー決めておいたし

人数少ないから嫌だって言われたらグダるしな……流石にそりゃまずい

「それじゃあメンバー作って～」

その言葉と共に雪菜と藤堂と合流する

……向こうで姉さんが手を伸ばしてるように見えるが気にしちゃダメだ

「キル夫ー」

なんか聞こえた気がしたがすぐにシノアさんに連れて行かれた

「で……先輩達と合流するわけだが……」

1d5：2
1d5：5

「久しぶりだなキル夫」

「オルガ先輩!?」

「よっキル夫、柊も久々だな」

「そうですね、今日はお願いします」

「かつて一緒に依頼受けたメンツと組めんのはありがたいな、色々と知ってるしよ」

「あの時のままだと思ってちゃ困りますよ」

「ははっそりゃそうだな」

笑いながらこっちを見る

「そっちの嬢ちゃんは初めてだな、３年のオルガ・イツカってんだ」

「よろしくお願いします、藤堂晴香です」

オルガ先輩がいるなら神官いるし本当に回復いらなかったな……

無駄に引きずらなくて良かった

「そう言えば三日月先輩は？」

「流石に3年同士組まねえよ」

「オルガ先輩戦っちゃならないのでは？」

「いや……戦う予定だが」

三日月先輩もああ言ってたし出来れば前線立たないようにさせたいが……
俺達3人で前衛張れば大丈夫か、後ろは安心だし

「ただ2年の先輩によっては変わるが……」

「ここですわね」

「初めまして、よろしくお願いします」

初めて見る先輩だ、箒を持ってるし魔術師？
……あれ？なんで箒を持ってれば魔術師なんだ？

そんなイメージが何故か分からんがあるな

「あー、久々だな」

「オルガ先輩、久しぶりですわ～」

なんか少しオルガ先輩が苦手そうにしている
確かに少し自由さみたいなものを感じる

「岡島キル夫です」

他2人も挨拶を済ませる

「2年のウィッチですの。よろしくお願いしますわね」

ウィッチ?それは職業名なのでは?
ただそう言う名前の人物もいるだろうし……多分

「それじゃ行くか」

「ああ、一応聞いておくがお前達の役割って何だ？」

「戦士が２人の前衛兼盗賊の俺です」

「ちょうど良さげだな」

「良かったっすわね、オルガ先輩が前で戦う必要なさそうで」

「アンタも前衛張れねえだろうが」

「魔術師なのでお許しをー」

どっちみち組み合わせがうまく噛み合ったらしい……良かったな

「それでだ、今から行くが先に一言言っておく」

「どうしました？」

「俺は誰も死なせる気がねえ、移動キーは預かっているが単位が貰えねえのは不味いが……躊躇いなく使うぞ」

「ちょっとそれ私の方にも響きますのー!?」

「それで死んだら馬鹿だろうが」

「それはそうですが……」

よっぽりと言うか予想以上に堅実な人だ
その方が俺としちゃありがてえが

「そもそもだ、お前達が問題なけりゃ押す気なんざねえよ」

「そう言われりゃそうだ」

結局は俺達次第だしやるしかねえってわけだ

「1年の皆がちょっと怪我したくらいで慌てて戻るとかしたら怒りますからね」

「流石にそこまで甘やかしはしねえよ」

流石に過保護では無いだろう……多分

入ってみなきゃ分からん以上どうしようもないしここでグズってもどうしようもないため俺達は突入し始めた

――

「よーし！いい調子じゃねえか」

オルガ先輩が褒めてくれるが確かに動きは悪く無い
前衛の2人もやっぱ強いが驚いたのはウィッチ先輩だ

「これくらいなんてことありませんわ！」

彼女の放つメテオが正確に敵を葬る
誤射とか気にしてたが範囲魔術と違って明らかに単体に当たるから安心して戦える
……戦ってる相手に直撃するのはヒエってなるが

「おうキル夫少し様子見と罠探知頼むぜ」

「分かりました」

俺……久々に盗賊っぽいことやってる……!!
最近なんだかんだ別のことばかりしてた気がするし……

「うっしゃ！」

嬉々として辺りを探る
罠もチェックするが問題はなさそうだ

「危険な仕事なのだけどなんか喜んでません？」

「ああいうのが好きな奴もいるんだよ」

「……色々とヤバい人間ですわね」

「別にいいだろうよ……」

どっかで貶されてる気がする……気のせいだといいな

「私もお陰で戦いやすいですが」

「それは否定しませんけど……」

ここのメンツは藤堂以外は罠の危険を理解している
だからこそオルガ先輩も頼るわけだが

「人を殺す罠なんざ少なくねえ、そんなんで止まっちまうなんざ笑えねえよ」

「はぁ……確かにそうではありますが」

オルガ先輩は本当に止まるとか言った言葉を使うことが多い
実際死んだら止まるけど……

「この先問題ないみたいだ」

「おう、サンキューなっと、んじゃ行くか」

無事を確認するとすぐに進む
慎重ではあるが無駄に休憩など長時間とったりしない

戦闘中とかでも感じたが、軍師としての役割はこなすものの甘やかしたりはしないように感じられた
ただ……すぐ帰るとか言ってた辺り甘い気がするんだが

「了解」

先頭は俺が行って後方に戦士2人がつく
敵を発見するとすぐにメテオが飛んでいく
多少多ければ後ろの2人がすぐ前に来る

「先輩大丈夫ですか!?」

「ああ、姫柊俺は大丈夫だが」

「……」

分かったけどオルガ先輩を虐めるのはやめて差し上げろ

ほら俺何かしたか?ってなっちゃったじゃん!?

「オルガ先輩は大丈夫ですって、流石ってところっすかね」

「まあ、みんなのお陰だがな」

みんなのお陰か……

最近マジで依頼とか受けるたびに上位互換みたいな人がいてお荷物してるように思っていたが……

今回は役割持ってやれてるからなあ……嬉しいわ

「キル夫さん、何やらはしゃいでますが」

「いいじゃねえか」

「楽しそうなのはいいことですしね」

「藤堂がどうだ？」

「楽しんでいいのか分からないんですが……」

まぁ……敵を切って楽しいって言うのは確かにどうかか
楽しい人は楽しいんだろうけど

「でも……楽しいです、こんなこともあるんだなって」

「そりゃよかった」

折角の課外授業をやりたくないって言われたらどうしようかと思ってたしな

「先輩の知り合いって何というかいつもみんな強いですね……」

藤堂の方を見ながらそう呟く
実験室にずっといたわりに戦闘経験もだいぶありそうな動き方なんだが……

やっぱりボンボルド先生が戦わせてたんかねえ……

「俺より強い人が多すぎる気がする……」

「勿論ですが先輩も強いですけどね」

「このメンツだと霞みそうだがな」

オルガ先輩が戦闘するかどうかって話だったが
する必要ないくらいには戦えてるし

「おっとあれは」

１ｄ６：５

「罠か、すぐに解除してきますんで」

「おう、任せたぜ」

オルガ先輩からＧＯが出て解除しにいく
これくらい簡単な罠なんだが……
と言うか目に見えるっておい……

１ｄ１００：３４

「まっだよなあ……」

あからさますぎるもんな、そりゃブラフだわ
本命はこっちか……って地雷かよ

「キル夫ー、大丈夫かー?」

「大丈夫そうっすけどちょっと待ってくださーい」

「分かったが焦るんじゃねえぞ」

無論焦る気はねえ、その結果他にも罠がありましたーじゃ笑えねえし
と言っても無さそうだな……解除も終わったしＯＫだ

「よっし完了です」

罠が外し終わって呼びにいく
そのまま進んでいった
そして少し広い場所に出た

「よーし、ここらで今日の探索は終了だ」

「まだ行けますが？」

流石に早いのでは？とオルガ先輩に尋ねる

「甘いな、こっから全員が一緒に休むわけにゃいかないんだ」

「そう言うこと、だから余裕あるうちに休みますの」

「そう言われるとそうっすね、いつもダンジョンで休むこと無かったですし……」

「お前にとっちゃまだまだ余裕かもしれんがＰＴ全員が体力満タンってわけじゃねえんだ、我慢してくれな」

「いえ、むしろ感心したので」

「そんじゃスペース作るぞ、１年は飯の準備しとけキル夫は見張っておけ」

先輩達の指示のもとサクサク準備が完了した

……本当に経験の差が大違いだ

――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ１ｄ４：３　オルガ・イツカ

「どうだキル夫、課外授業は？」

「現状、普段と変わらないっすね」

「まあ先輩が居たところで依頼じゃよくあるだしな」

勿論いつもと違って１年が中心となっている以上違うわけではあるが

「オルガ先輩的にはどうですか？」

「どうってなんだ？」

「いえ、毎年課外授業やってるわけですし」

「あーそう言うことか」

「まあ差し支えなければですけど……」

話したくなきゃ無理に聞くのは違うだろうし
ただ話したくないってのは不安ではあるが

「間違いなく今までの中で最高クラスにいいぜ」

「本当ですか？」

「ああ……まあ俺が役に立たなかったっつーのはあるが」

「そうは見えませんが」

オルガ先輩神官だし戦うと考えるのは違うだろうしそう考えるとおかしいところなんて見当たらないが

「キル夫には言ったよな？俺が神官になるしかなくて脳髄使って無理やりと」

「今は自然に出せてるように思えますが……」

「ああ、出せてる」

「なら何が？」

「2年の頃もまだまだ、1年の頃なんざ酷かったんだ」

「オルガ先輩……」

「俺が回復出来てりゃ死なずに済んだ奴もいるかもしれねえ、指揮官だってまだまだ未熟だった」

「……」

「その点このメンツはすげえよ、安定感があるしな」

「実際そうなんでしょうね、俺も心強い味方達って思ってますし」

「だろ？3年になった俺の目には狂いはねえんだ」

「フラグっぽいことを……！」

「男なら1つくらい立てとけって」

「嫌ですよ!?」

無駄にフラグ立てる馬鹿になりたくねえ!?

「だから安心しておけよ、俺がこのＰＴは最高だって保証する」

「誰も欠けないように」

「だな、今が最高ならこそ気を付けなきゃなんねぇ……誰かが欠けると途端の崩れる」

「……分かっては居ますが」

「なぁに、俺が安心してお前らに前を任せられるんだから全体はちゃんと見通しててやっからよ」

「頼りにしています」

「おお頼れ頼れ」

　そのまま本来であれば先オルガ先輩が休むはずだったが譲ってくれた

　本当に大きな背中だなと思った

――――――――――――――――――――――――――

コミュ　ｌｄ３：ｌ　姫柊雪菜

「先輩、おはようございます」

「ん？寝過ぎたな……本当にすまん」

「いえ、それは構わないのですが珍しいなと」

「珍しい？」

「先輩って時間にシビアだと思っていたので」

……？シビア？俺が？

「いや、結構ルーズだぞ？」

「それこそ意外なんですが……」

「雪菜にとっての俺ってどうなってるんだ……」

「周りに気をやれる人ですね、だからこそ自分に厳しいのかなって」

「周りに気をやれる……」

正直誰だそれ？って言いたくなるんだが……

俺そんな真面目君じゃないよ

「結構自分本位だぞ？」

「それでも交友関係が広いってことは色々と見えてる証拠ですよ」

「まるで俺だけが広いみたいな言い方を、これくらい普通だろ？」

「いえ……そもそも一学科の人ばかりですし多方面自体の人が少ないですよ」

「そりゃまあそうだろうけど……」

「そもそも同じ学科だってそこまで多くは無いかと……」

そんなもんなのかねえ？
ただ俺出会った人達とは仲良くしてえしな

「と言うかその言い草だと、雪菜に友達が少ないって言ってるように思えちまうんだが」

「……」

「……」

「……」

「……悪い」

言い出したのは悪いがそう言うことになる話を始めるのもよくないと思うの

「どうせ少ないです」

「悪かった!!」

謝ったら逆効果とか言われる気がするがそんなの知らん！謝るんだ!!

「ただ」

「ただ……？」

「先輩の連れて来てくれた晴香さん、彼女とは友達になれるかもしれませんけどね」

「そりゃよかった」

藤堂の方も正直不安だったがこの2人が仲良くなんならよかったな
特に藤堂とか今までの環境的に友達多くなりゃいいけどよ

「本来であれば、転入生ってことで違和感はあるのですが……この学園そんな制度あったように思えませんし」

「……」

そう言う感の良いことはしなくて良いの!!
俺困っちゃうから!!

「でも本当にいい子だなって」

「だな」

俺もそう思うわ、少なくともボンボルド先生に染まってないよこの子

「そこまで断定するとは何処で出会ったか聞きたいレベルなんですが」

「……」

「先輩が困ってそうなんで今回はやめておきましょう」

「……ふぅ」

「露骨なアクションしないでください、気になるじゃないですか」

「ごめんなさい」

わざとやれば何もないかなって思われるかと

「では私も休みます」

「ごめんな、引き止めてよ」

「いえ、楽しい時間ですので寝るよりもこっちの方がいいかなと思うくらいでした」

「ただ休んどかねえとな」

「そういうことです」

そう言って下がっていく、さて話しながらも見張ってはいたが1人になったからこそより一層気を抜けねえな

「さて、先輩達が起きるまでちゃんと仕事しますよ」

無駄に気を張り過ぎてしまったせいで少し気疲れして叱られたやり過ぎはよくない、覚えた

――――――――――――――――――――――――――――――

続

第２０話②

「順調だな、この調子なら1位取れるんじゃねえのか？」

進みながらオルガ先輩がそう告げる

「そんな早いんですか？」

「と言うか戦闘してないってレベルだしな」

確かにここらの敵は瞬殺レベルだ

前衛があっさり切り捨てるだけと思いきや、やはりウィッチ先輩が強い

「魔力切れとか大丈夫なんですか？」

「単体用ならばそこまで魔力消費しませんので」

「それでも結構撃ってますが……」

「おーっほっほ、この程度でどうにかなると思いまして？」

「すご……」

調節の仕方とか正直聞きたいレベルなんだが……

俺1発でダウンしちまうし……手頃に撃てるならそれに越したことはない

「では行きましょうか」

飛び出して来たモンスターの頭にメテオが降って一瞬で終わる

天井あるのにどっから出てるんだって気もするが出てるからしょうがない

「去年ここまで楽とは思いませんでしたけどね」

「そんだけ成長したんだろ」

「そうですわね」

実際強いし相当成長したんだと思う
俺達は入ってからどれくらい成長したのかねえ

「どうしたキル夫？」

「いや、自分の成長って分かり辛いなって」

「そうか？何々が出来るようになったとか明確な成長だと思うけどよ」

「そうですが初期と比べ辛いなあって」

「んなものは希望でいいんだよ」

「希望？」

「自分がどうなっているとかお前自身が希望するもんでいいだろうよ」

「そんなん無茶苦茶じゃないですか？」

「いいんだよ、それくらい出来る人間だって思ってるからな」

「自信満々ですね……」

少し唖然とする、ここまで自信満々なのかと

「そうやって生きて来たからな」

「そうやって？」

「ああ、実力がないからこそ自信で生きてきたんだ」

俺のとっちゃ実力がなかった人間に思えねえが……
それも努力したからってことなんだろう

「でもキル夫の場合は元からスペック高いから難しいかもしんねえな」

「そうなんですか？」

「ああ、贅沢ものの悩みってやつだ」

贅沢もの……そんな才能に恵まれてんのかねえ……
環境には恵まれてるが、アカネ先輩のおかげで

「恵まれてるって考えなきゃダメですかねえ？」

「そこまでっちゃ言わねえが、妬まれねえようにな」

「うっす」

色々と考えること多いな……
ただ無駄に険悪な雰囲気とかしたくねえし従うっきゃねえな
心改まったかどうか知らねえが気をつけようとは思う

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

他の冒険者グループ
１d１０：８

「そういや他の班に会いませんね」

「そりゃ言ったろうが早いってよ」

「その影響もあるんですね」

ただこう言うケースって他の班と会うと思って……

「ー―!!」

「ーーーーー!?」

「……なんか聞こえますね」

「しかもヤバそうな声だなおい……」

聞いたことあるような内容な声が……あれ？こっち向かってきてね？

「……どうします？」

雪菜が尋ねる、何も言わずに救出に行ったりしなくてよかった

そうなると合わすことも出来ねえし

「聞こえちゃったからには助けるしかねえだろ」

「分かりました」

オルガ先輩の指示のもと救出に向かう

あー見知った顔が一応いるな

って言うか……

「折原先輩いるんで帰りたいんですが……」

「十中八九アイツが何かした気がするがダメだ、行くぞ」

と言うか誰だよ……折原先輩と爆豪組ませた奴……最悪じゃねえか

「大丈夫かい？」

「そう思うなら戦えっつーの!!」

「最初全部任せろって言ったの君だろう?」

「……!!」

言い返せないような顔してる
と言うかマジで帰りたいんですがダメ?

「ちょっとかっちゃんダメだって!?」

「うっせーぞデク!!ちゃんと口動かすより体動かせや!」

「ちょっとあの触手いい感じに焼けないかしら?」

「無茶言うんじゃねえ!!」

「……」

俺は後ろへ向いて歩み出そうと……

「ダメですよ先輩」

「はい」

怒られた、解せぬ

だってあれ助けろって正直無理じゃない？

「ウィッチ、メテオで行けるか？」

「多すぎっしょ、流石に無理ですわ」

確かに多い、触手の群れだ

メテオじゃ間に合わないだろう

「じゃあ広範囲魔法はどうだ？」

「厳しいですわね、正直狭すぎます」

確かにメテオだったからって安心してた……

じゃあやっぱ無理だと思いまーす！

いや流石にマジで見捨てる気はねえけど

「……行けるかも」

「は？」

藤堂さんいきなりどうしたんですか？

いやいや流石にアレは無理でしょ？

無理だよね……！

「行けんのか？戦士だろ？」

「はい、慣れていますので」

慣れているって……慣れてるわ……
でも行けるのか？正直止めたいんだが

「行くよ！」

「あっおいっ!?」

止める間も無く突っ込んでいった
と言うか実験体だったせいだろうか基礎スペックが常人より高い

「どいてください」

「あぁ？」

「かっちゃん危ない!?」

閉所だからやむを得ないがぶつかりかけたのを緑髪の少年が押してかわす
当然爆豪は怒り狂う……以前に触手が迫ってきて危険だわ

「おいデクっテメエ!?」

「へぇ、やる気なんだ」

折原先輩は逃げながら藤堂の姿を見てる
と言うか……絶対勝てるけど逃げてる気がするわ

「……!!」

藤堂はナイフを構えて触手に振り下ろす

そんなんじゃどうしようもねえだろ逃げ……

「……マジかよ」

止めようとした瞬間一体が真二つに分割され崩れ落ちる
すかさず切り込んでいき次々と切り落ちる
いやいや……どう言うことだよ……

「これで最後！」

５体はいたであろう触手たちを一瞬で……

「いやいやいやいや」

「強いとは思っていたが流石にこれはどうなんだ？」

「いいじゃねえか」

「いいですが……」

恐らくは対触手に強いんだろうけど……
本当になんて言えばいいのかわからん

「大丈夫？」

「はい、ありがとうございます」

「……」

爆豪は感謝の言葉が無いのは分かっていたが嫌味ひとつでも言うと思ったが

「かっちゃん、お礼しないと」

「うるせえ」

隣の子を怒鳴りつける

「あれ？いつもなら文句でも言いそうなんだけど？」

「……けっ」

折原先輩の言葉に嫌々そうな顔をする

「無事そうならよかったよ」

「本当にありがとうございました」

とりあえず俺達も合流する

敵はいないだろうが何あるか分からないし

「おい、臨也……後輩に無茶振りしてどうする？」

「だって彼が1人でやるって言ったんだぜ？」

「出来ないの分かってるくせに遊んでんじゃねえよ」

「いやいや、俺は出来るかもって思ったよ？」

悪びれる様子もなく出来なくて残念とか言っている
怒りのメーターがヤバそうなんだが……

「それでも仲間みんなで戦った方がいいんじゃ無いですかねえ……？」

「キル夫君はそう思うかい？」

「ええそりゃまあ……」

「俺のこと散々言ってるって聞いたけど」

「……キノセイデス」

今その話を出されても困る
と言うか……本当にそう言うところが……

「今回は見逃すよ、それにしても君凄いね」

「ありがとうございます」

流石に俺も凄いと思ったわ
戦闘力どんだけ隠し持っているんだ？

「お前達の班も悪くは無いんじゃねえのか？」

「どちらかと言うと面白いかな？」

折原先輩が面白いって言うって相当じゃ……
いつも言ってそうな気もするけど

「面白いってなんですか？」

「いやいや面白いだろうクリフト　」

クリフト　と呼ばれた男性は格好でわかるが明らかに神官なんだろうな
そう考えるとこのグループもバランスは良さそうだが

「何が面白いんですか！」

「いや、だってさっき何したよ」

「それはその……ザキを」

「ザキ？」

「神官が使える魔術で殺害魔術だ」

「は？」

なにそれ？そんな恐ろしい魔術あるの？

「安心しろよ、俺も使えるから知っているが人間にゃ効果ねえ」

「それは良かった……」

「と言うかほとんどの生物に効かねえ、精々格下の獣くらいだ」

「そりゃ……かなり限定的ですが」

それでも結構強いと思うが……

「そうだよね、獣くらいだよね」

「……」

「なんで触手にうつかなあ……」

「効けばいいかと……」

「そのせいで初動遅れたんだけど」

そりゃ問題だわ……ただそれくらいならいいんだが……

「で、かっちゃんが敵に突っ込んで痛い目遭ってこうなったわけ」

「かっちゃん言うんじゃねえ!!」

確かに折原先輩には言われたく無い気がする

「それに負けたわけじゃねえよ」

「はいはい、じゃあそれでいいけどさ」

「でもかっちゃんはかっちゃんなりに頑張ったかと」

「出久君は優しいねえ」

出久と呼ばれた少年が爆豪を庇っているが……正直顔を見るに逆効果な気もする

「あっ緑谷出久です、みんなからはデクって呼ばれてます」

ここですかさず自己紹介するあたりいい子なんだろうと

ついでにこっちのメンツも自己紹介を済ませておく

「後はマルシルちゃんで５人のＰＴってわけ」

5人……あー爆豪の順位2位だったもんな

「まあ……でもキル夫君達がいるなら大丈夫かな?」

「え?」

「だって皆で戦った方がいいんだろう?」

「それは言いましたが……」

「まあ途中までだよ」

「オルガ先輩はどうです?」

「ついでに盗賊技能学べばいいんじゃねえか?」

そんな簡単に無茶振りを……
と言うか今回学んでる暇なさそうだけど

「なんにせよ利点も欠点もあるから決めていいぞ」

「利点と欠点は？」

そりゃあるだろうけど何がだか分からないため聞いておく

「利点は戦力、多い方が強いのは当たり前だ」

「欠点は？」

「臨也」

すっごい納得した
そりゃ欠点が越すレベルもありえる

「酷くない？」

「なら態度改めろや」

オルガ先輩が折原先輩を叱る
でも反省する素振りを感じない

「まあどっちもどっちだし決めちまっていいぜ」

何故俺が決めるか分からねえが……俺なら
1．協力する
2．協力しない
1d2：1　協力する

「それじゃあ途中まで」

「オッケ、じゃあ行こうか」

正直不安も残るんだが……それでもどうにかなって欲しいと祈って共に進むことにした

――――――――――――――――――――――――――――――

「あっあのっ……」

「あーどうした緑谷さん」

「デクで構いません」

「そうか、んじゃデク何か用か？」

正直こいつが話しかけてくるとは思わなかったがなんか俺の顔怖がってそうに見えるし

「戦士コースの人じゃないですよね？」

「ああ、盗賊コースだ」

「盗賊コース……」

「何か文句あっか？」

喧嘩売る気じゃないが流石に盗賊コースって言って微妙な顔されるとそんな態度になる

「いや……文句じゃなくて盗賊コースなのに強くないですか？」

「そんなにか？」

正直そんな返答が来るとは思わなかった……驚いたな

「……戦士コースのはずなのに僕よりも強い気がしますし」

「戦士コースだったか」

　正直神官とかに見てたが……なるほどなあ

「はい……皆を守りたいと思ったので」

「悪くはねーんじゃねえの？」

　正直立派な覚悟だと思う、爆豪に振り回されて学園に来たって思ったし

「まだまだ……強くならなきゃいけないんだけど……」

「別に難しいことじゃねえよ、やることやってりゃそのうち強くなれるのが学園だ」

「そんな単純じゃないですよ……」

そりゃそうだが……なにもやんなきゃどうしようもねえしな

「んじゃ今度一緒に特訓すっか」

「いいんですか？」

「そりゃ一緒にやった方が俺の方も見えてくるしな」

「ありがとう」

「お気にすんなってデク……そういやなんでデク？」

確かこいつっていずくだよな？デクってなんでだ？

「それは名前から」

「ああ名前そう書くのか、悪いな」

「いやいや」

「それだけじゃねえけどな」

「かっちゃん……」

爆豪ー他にあんのか？分からん……

「デクの坊の意味だよなあ」

「……そうか」

こりゃ悪いこと言っちまったか？

「いやいいんだよ」

「なんでだ？悪口だろ？」

「それが僕らしいし……何より目標だから」

「目標？」

「うん、強くなって皆を護れるヒーローになるんだって」

「そうか強いんだな」

「それに……なんだかんだ気に入っちゃったから……」

「そうか、んじゃデクって呼ぶが……」

「構わないよ、強くなっても僕はデクだから」

「強くならなきゃ認められねえがな」

「かっちゃん心配してくれるの？」

「……」

殴られてる……照れ隠しな気がするが

「痛いってばかっちゃん」

「うるせえ」

爆豪が少し怒ったようにして去っていく

ただ……ガチ切れはしてねえだろうな

「なんだかんだ面倒くさそうな関係だな」

「でもかっちゃんのこと嫌いじゃないから」

「だろうな」

知ってるってくらい爆豪のこと気にしてるしそうなんだろうな

「いいと思うがね、友情ってのはいくらあっても足りねえくらいだしな」

「そうは言っても僕にはいるんだろうか……」

「ん？爆豪は？」

「かっちゃんから友達と思われてると思えない……」

「……」

多分……友達と思われてると思うがねえ……いやどうだろ？うん……きっと大丈夫だ

「なんにせよ俺とはダチだしいいだろ？」

「え？」

「泣くぞ？」

「いや……そうじゃなくていいの？」

「あ？いいに決まってんだろ？」

「そっか……」

安堵したような顔をするが……そんなに不安だったかそれなら悪いことをしたまあどっちみちもうダチなんでセーフってことで

「俺も混ぜてくれない？」

「ちょっと怖いんで……」

折原先輩が混じりに来ただけどさー、怖くね？

「酷くない？」

「初対面が色々と……」

「あれ絶対鳰ちゃんの罠も混じってるって」

罠って……ただ罠の気もする
それはそれとして警戒するけど

「でもさー、そうも言ってられないんじゃない？」

「一緒に行動するからっすか？」

「いや、確かにそれもあるけどさ」

それじゃなにがあると言うんだ？

嫌な予感がするんだが

「一緒の間に教わりたいんだろう？盗賊技能」

「出来ること増えたらいいですしね」

実際オルガ先輩に言われた通り成長はしていると思う

だがまだまだ伸び盛りだ、貪欲に覚えていきたい

「いいねいいね、そのギラついた目」

そこまでいいのかは分からないが……
それでも成長するために必要だしむしろ喜ばれるなら好都合か

「俺達他に比べてかなり早いから時間は余る程あるしね」

「早く着いた方が良さそうですが」

「成長できるなら別だろ?」

「それもそうですね」

着いてから教わるでもいいかもしれないが、戦場だからこそ覚えるとかもありそうだし
そう考えると今が都合いいのかもしれない

「それじゃ着いておいでよ、今から始めるよ」

――――――――――――――――――――――――――――――

続

第２０話③

―――――――――――――――――――――――――

「ここら辺でいいかな？」

折原先輩と少し先の道へと来た
デクは邪魔になりそうだからと来なかったが別に邪魔にはならねえのに

「何をするんでしょうか？」

「んーそうだね」

折原先輩が目の前の敵を指差す
安定っつーか触手か

「彼女のやったこと覚えてる？」

「彼女って……もしかして藤堂ですか？」

「そうそう、触手を一瞬で葬ったじゃない？」

「すげーって思いましたけど」

「本来なら盗賊っぽいことなんだけどね」

「暗殺に近い感じですか」

「そうだね、急所突き……いや確か最近はアサシンアタックって言ったっけな？」

「アサシンアタック……」

もう完全に名前が盗賊向きどころか暗殺者になってるんですが

「1年では渚君が得意だったかな」

「アイツ……まあそっち方面で優秀だったはずっすもんね」

「そうだね、俺も越されるかもとは思ってるよ」

「ははは、まさかー」

実際そうだったら流石に怖いぞ渚

「でアサシンアタックはキャラごとの急所を覚えておけば一瞬でサクッと終わる」

「難しくないですか？」

「勿論、俺も全部は無理かな」

正直覚えられないし触手の急所って何処?ってなる

「無理そうなんですか」

「ああ違う違う、アレはそんな感じだよってだけで教えるのは違うから」

「そうなんですか?」

ならなんで説明を?いやタメになったけど

「どっちかと言うと武器破壊とアサシンアタックの中間辺りかな」

「中間?」

「そう爆撃打って言うんだけど本来はなんかボスみたいな奴が装備破壊のために使ってきたんだけどさ」

「聞くだけで恐ろしいんですが……」

装備当たり前のように壊さないでください

「それを元とした生物の部位破壊をする技」

「部位破壊……」

「そう、モンスターの手とか使えなくなったら叩きやすいだろう?」

「そうですね」

機能停止にさせられるならそれほど都合の良い事はない

なんせ一方的になるのだし

「勿論こっちもアサシンアタック程じゃないけど多少は覚える必要はある」

「むずそうだ……」

「それ程じゃないけどね、それにこれと武器破壊を合わせて覚えておくと凄く恐ろしくなる」

「確かに……」

武器を壊されまいと動くと自分自身が壊される……恐ろしいな

「勿論殆どの奴は使えないけどね」

「難しいからですか？」

「いや、前衛張れないから」

「あぁ……」

そりゃそうだ、一瞬の隙を狙う武器破壊とレベル違うもん、明らかにこれは突っ込めって事だし

「前衛が出来て手数を多く持ちたい奴に相応しいけど、滅多にいないからね」

「……確かに俺には適任そうっすね」

ただまあ疑問が残るんだが……

「普通にかわされません？」

「と言うかどうやるか分かってないでしょ？」

「はい、武器破壊の要領でやるかと思いましたが」

「違う違う、これは盗賊ならではでもあるけど」

そう言って折原先輩は何かを取り出す

「じゃーん、爆弾」

「え？」

爆弾と呼ぶには明らかに小型なものを出した

と言うか唐突に爆弾って言われてもビビる

「小さくないですか？」

「小さいよ、必要最低限だし」

「と言うか爆撃打って……打って……」

「あくまで俺達が力技で破壊するなんざ出来ないしね、名前だけだよ名前だけ」

ええ……確かに爆撃ではあるんだろうけど……

「キル夫君片手武器だろ？」

「はい、盾持つことも考えてましたし」

「それじゃあ盾は出したい時に出せるタイプにした方がいいよ」

「そうなんですか？」

装備のことまでサクサク決まってってる気がする

「そう、右手で武器を振りながら左手は指弾で結合部を狙うんだよ」

「……はい？」

難易度高過ぎませんかねえ？

と言うか指弾って!?

「このボムを指弾でボンッとね、武器に気を取られたら一瞬で吹っ飛ぶ」

「色々と……酷いですね」

片手でしか出来ない上に難易度高くない？
少なくとも右左で違うことする難易度が……

「でも出来る様にならないとねぇ」

「……っすね」

そうだよなあ、出来るようにならなきゃいけねえ
しんどいと言うよりかは不安が大きい

「と言うわけで都合の良い的はそこのあるから」

「結局は触手っすか……」

「そうそう」

と言うかそれ以外いねえもんな
いいややってやろうじゃねえの

1d100：83

「……驚いたね」

「触手って何度も再生するから同じ場所狙えばいいってやりやすいっすね」

「普通にそれで心折れるかと思ったけどね……」

「そうですか？」

「だって何度やっても元通りなのにさ」

「練習のしがいがあるなとは」

「まあ……そうかい」

普通の人間ならば徐々に精度が落ちてゆくし、それで自信を失う物だが……
キル夫は脆い場所を見つけると何度も正確に同じ場所へと飛ばした

「銃は苦手って聞いてたんだけど……」

「どっちかと言うと使ったこと無いですが……どの道銃は無理だと思うっすよ」

流石に指弾と違いが過ぎるだろって、使いこなせる自信もなければ銃に掛けれる金もない

「まあ……どの道戦いながら出来そうかい？」

「出来ると思いますが」

流石に手は二本しかないからそれ以上の同時行動は出来ないが、ここまでなら普通に出来そうだ
流石に普段から出来るとは思わないし、戦闘中隙が出来た瞬間に意表を突いてになりそうだが

「俺から言える事は……初でこれは末恐ろしいんだけどね……」

「それなら小細工が増えたってことで万々歳っすね！」

褒められた事を素直に喜ぶ
まさか自分もそう言われるほど出来るとは思わなかったし

「それじゃあそろそろ戻ろうか、進むだろうし」

「はい、ありがとうございました」

「ああ……それと」

「はい？」

まだ何かあるのだろうか？
少し疑問に持ちながら返答する

「俺も爆撃打って違和感あると思うし自由に名付けたら？」

少しずっこけそうになった

「……しかしⅣ　……アイツは魔術よりって言ったのに全然違うじゃ無いか」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「どうしたキル夫？だいぶ嬉しそうな顔してるじゃねえか？」

「分かります？」

「……そこまでニコニコされちゃな」

そんなにやけてたか、これは予想外だ
だが嬉しいし仕方ないな

「昨日言ってた通り成長したので」

「成長って……ああ臨也か」

すぐに察される、ただまあ分かるものなのだろう

「んでどうだったんだ？」

「出来ですか？」

「いや、どちらかと言うとアイツの感想だな」

折原先輩の感想……まあ１つしかないな

「あんなに真面目に出来たんですねって」

「……気持ちは分かる」

少しの間を開けた後賛同してくれる
と言うかやっぱりそうなんだよなあ……

「ただ……悪いがそろそろ解散すんぞ」

「え？」

「ここで朝教えてもらう時間があったことが分かる様にもうゴール間近だ」

「……早くないですか？」

「だから言ったろ？圧倒的スピードだって」

1位取れそうってガチだったんだな

「ゴールまで一緒は確か……」

「やめておいた方がいいな」

「了解です」

「と言うかクリフトがさっき指示してたしもう向こうのグループは準備出来てんぞ」

「……早くないですか？」

「そりゃ向こう側もそれくらい分かってるしな」

それはそうだろうが……何というか唐突過ぎて……

「会いに行ったらどうだ？」

「え？」

「何というかまだ話したりねえんだろ？」

折原先輩とこれ以上話すことなんざあるんだろうか？

「いや……さっきまで散々話しましたし」

「そっちじゃねえよ、昨日楽しく話し合ってたじゃねえか」

ああ、デクのことか！確かにもう少し話したい気持ちもある

「んじゃ行ってきます！」

「おう行ってこい！」

そのまま向こうの班に話に行く

「まだ出発しないんですの？」

「いいじゃねえか、焦ったって良いことはねえしよ」

「最初急いでましたのに……」

「いや……正直ここまで早くなるなんざ思わなかった」

「それは同意ですの」

　1年の強さに上級生達は驚く
　自分達が1年時ここまで出来てた自信がない

「ですがこのままだと1位を逃す可能性がありますわよ?」

「いいじゃねえか」

「よくはないと思いますの……」

「主役は俺達じゃねえ1年達だ、だからな」

「分かりましたの」

「アイツらが先に進むのをいつまで見てやれるかね」

そう言いつつオルガ・イツカは笑った

――――――――――――――――――――――――――――――――

「デク、もう行くんだってな」

「わざわざ見送りに来てくれたの？」

「まあな……ダメだったか？」

「いや……どっちみちもう終わりって聞いたからすぐ会うと思ったけど」

「そりゃそうだが……」

「でも嬉しいことには違いないかな」

「そりゃよかった」

「ほらほらかっちゃんも言う事ないの？」

「おいこらデク!!」

不機嫌そうに爆豪も引っ張られてきた

なんか悪いことした気分になるが……

「んで何がしてえんだよ？」

「いや、頑張れよって？」

「馬鹿にしてんのか？」

いやしてないが……確かにしてるように見える気もしてきた正直すまん

「折原先輩が最後は辛いから頑張って生き残ってねって言ってたけど……」

「はい？」

なにそれ聞いてないんですけど？

「どうせ脅しだろうよ、或いは俺らを馬鹿にした結果強いと思わせてるとかだろうよ」

「でもかっちゃんは油断すると痛い目に合いそうだけど……」

「うるせえ」

「えぇ……」

警告すらもスルーされたようでデクが唖然としてる

「油断なんざしねえ、やるからには全部全力で叩き潰す」

「それもそれで違う気がするが……手を抜くよりかはマシそうだな」

「手抜くわけねえだろうが」

「でもかっちゃん油断してポックリ死んじゃったりとかは」

「ねえだろうな」

「あん？」

「え？」

俺が反論したがそんなおかしいことなんだろうか？

「なんで断定できるんだ？」

「いや……だって爆豪はちゃんと訓練してるし」

「そりゃ誰だってしてるだろうよ」

「んで、あん時から本気でやってるのが分かったしよ」

「あの時……？」

「中間試験後仲間を助けられなかったからじゃねえか？」

「そんなことあったんだ……」

「聞いてねえのか？」

「うん、かっちゃん話してくれないし……」

よく考えれば話すタイプの人間じゃねえな
知らないってケースもあるなそりゃ

「ちげーよ」

「違うの？」

「あん時感じたのは後悔じゃねえ、敵のウザったるさと苛立ちだ。だから本気でやってるだけだ」

それだけ言うと爆豪は行ってしまった……が

「真面目にやってることにゃ代わりねえし……力不足って後悔してるのも確かじゃねえか」

「あはは……」

「どっちみち根は優しいんだよな」

「そうだね、かっちゃんは」

と話しているとクリフト先輩が呼びにきた……おっといけねえ

「悪いな呼び止めてよ」

「ううん、有難うねキル夫くん」

と言うわけで俺も帰らんと……オルガ先輩待たせちまってる

……そもそもこんな時間とってもらって良かったんだろうか？

「んじゃまた後日学園でな！」

「うん」

急いで戻る、遅れたりしたらどやされるんじゃねえのか？

不安になりつつも戻ったときに文句は言われなかった……よかった

「んじゃ行くぞ」

「はい！」

急いで戻ってきたが疲れ知らずに進んでいく
ゴールに近いが……今回覚えたアレ活躍できるのかねえ……？

―――――――――――――――――――――――――――――――

「よー、早いじゃねえか」

誰だあれ？知らない人が前方にいるんだが
同じく生徒って感じには見えねえ

「まさかこのペースで来れると思わなかったが、無理して来たんじゃねえか？」

「いや、生憎休憩は十分取れました」

「ほうほう、今回の1年はやるねえ」

「俺も驚かされましたよ」

なんか親しげにしてるがどう言うことだ？

「それじゃあ最終試験を始めるぜ」

「なっ合格じゃ？」

「そりゃお前はいつも遅かったからな、今回は早い分やらせてもらうぜ」

「聞いてねえ……気を付けろお前ら!?」

「いや気を付けろって言われても……」

「危ねえぞ!?」

「いや……そもそもオルガ先輩と違って前のこと知らないから警戒心マックスでしたし」

「……そうだな」

「そもそも冒険者がいきなり油断するのはどうかと思うわけよ」

「……うっせー!!」

敵の言葉にムキになりかけてるオルガ先輩を宥める
ここで挑発に乗られるとまずいしな

「んじゃ、アンタに勝てばクリアで良いのか?」

「いや、そんな鬼畜難易度にしねえよ」

鬼畜って……5対1のはずなんだが……強いんだろうな

「じゃあ誰だ？」

「こいつらよ」

そう言って触手達が姿を現す
何というかこの洞窟では名物なのか？
名物かって言うと名物ですねはい

「先程までのとは違そうですわね」

本当だ、さっきまでの奴らよりデカいし強そう
……案外不味そうだが

「まあ死ぬ前には回収してやるから頑張れよな」

「ちょっ!?」

そう言って一瞬のうちに消える……マジか
どうすっかって言うと……まあやるしかないが

「多いなあ……藤堂何匹行ける?」

「分からないですね……」

だよなあ……一番早くきたらこの仕打ちは予想外だ、デク達と合流してえ……
他の道言ったから合流できないのは知っているが少しだけ切望する

「どっちみち勝つしかねえよ……やるぞ」

「そうですわね、ここまで来てバタンキューなど笑えませんし蹴散らしてあげましょう

！」

雪菜達も戦闘準備は万端だ

こっから先が今回の最終勝負……ここまで来て赤点なんざ笑えねえからな

「んじゃ行くぜ」

さっき覚えたことを生かせる場所があるか隙を窺いながらバトルへと突っ込んだ

ＢＯＳＳ：触手の群れ

クリア条件：群れの全滅或いはゴールへと辿り着く

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

続

第２０話④

「……歴代のトップって毎回これやってんのか？」

「分からねえ……トップなんざ程遠かったしな」

一匹ずつ減らそうとするが数が多い
つーか藤堂居なきゃ詰みだった気もするなおい……

「ごめん、この量はすぐにとは行かない」

「むしろ行ったら怖いわ」

「キル夫もだいぶ行けてるじゃねえか」

「いや……これ結局時間稼ぎにしかなってない……」

と言うかもう爆薬尽きかけてるし……

いやまあ折原先輩から殆んど貰ってないしな……

「これ以上はやめておくしかねえや」

使い切るわけにはいかない、何かあったときのために

だからといって状況が悪化するだけなのだが

それでもいざという時にゼロじゃどうしようもねえ……

「この先に行けりゃそれだけでいいんだが……」

オルガ先輩はそう言うが目の前には圧倒的群れ……突破出来るのか？

「厳しく無いですが？」

「だがこの先にあるんだぜ?」

「どないせいと……」

「最悪戦いながら耐えて後の班と合流しかないな」

「来ればいいっすけどね……」

と言うか折原先輩達の班は来るか

「あっ言っておくが臨也達は来ねーぞ」

「なんで!?」

普通くるはずだろう!?なんで別れてこねえんだよ!?

「アイツらは数日遅れてくる、流石に期限には間に合うがな」

「どうして……」

こう言う時にそう言うのってまじでよくねえと思うのほら……友情と努力が大事なんじゃん？

「ペナルティみたいなもんだよ」

「ペナルティ？」

「アイツらのこと結果的に助けただろ？」

「まあそうですね……」

正直、あの班自体でもなんとかなったと思うが……

「臨也ならどうにかなっただろうけど……あくまでメインは1年だしな」

「そうですね……」

「だからそのペナルティも込めて反省会やってると思うぜ」

「……助けて欲しかったなあ」

そう言ってもしょうがないのだが……
ただ彼らが助けに来ないのは分かった

「他参加者は……まあ分からねえよな」

来ると思わねえで考えて戦わなきゃならねえ……
尚更残弾温存が必要じゃねえか

「メンバーの体力も無限じゃねえのに……」

3体くらいはぶっ潰した記憶がある
藤堂も雪菜もかなり倒したが……それでも全然消えねえ

「ちょっと本当にこれが試験ですの？」

「らしいがやっぱおかしいよな？」

「明らかに殺しに来てますの」

ウチのメンツそういや全体型いないもんな
ウィッチ先輩は出来るかもだが……この場所は狭すぎて、使おうものなら全員巻き込まれる

「おい、そういや氷って出来ねえか？」

「無理ですの、そう言った属性じゃ無いので……塊をぶつけるのとは違うでしょう？」

「ああ、違う……残念だ」

「オルガ先輩、氷だと何かあるんです？」

「ああ、最悪狭くすりゃ一方的なの出来るってなそうでなくとも凍らせりゃ終わるしよ」

違うと言うのは氷をぶつけるんじゃなくて敵を凍らせる気だからか
だが出来ないということはそうはいかないか……

「ただ……終わりはあるはずだ……」

そう願って戦闘を続けた

――――――――――――――――――――――――――――――

「どのくらい経った？」

「分からねえ」

「救援の見込みは？」

「全くねえ」

前方を見渡せばまだまだキリがない
俺はまだなんとかいけるが……

「……」

ウィッチ先輩がかなり限界だ
魔術師ゆえに魔力も垂れ流しの状態だし

「だいぶ不味いな……」

その状況を一番危惧しているのはオルガ先輩だ
確かに魔術師が居ないと敵の撃破スピードは落ちるが……

「その際は俺が担ぎますんで下がりましょう」

「……いや……ウィッチが落ちると詰みだ」

「そこまでっすか？」

「ああ、何処で知能を手に入れたか知らねえがアイツらからさりげなく魔力を感じる」

「隠し球ってことですか？」

正直勘弁してくれ、もう無理だ
そこまでされちゃマジでどうなるんだよ

「いや……魔力を感じている時点でアイツらは放っている」

「？」

「つまりは誰かがそれをかき消してるってことだ」

「……」

ウィッチ先輩普通に戦ってるよな？

え？どう言うことだ？

「どんえ～んですの、特殊な魔術ですわ」

「……多重魔術か」

２種類の魔術を同時に使える人物がいるとボンボルド先生が言っていたが……彼女のことだったのか

……だったら不味いな

「速攻でケリをつけなきゃならねえが……」

　正直どうしろっつーんだ

「……速攻ですか」

「どうした藤堂？」

「いえ……決めなきゃ不味いんですよね？」

「ああ、詰みだって聞いた」

　実際魔術が飛んできたら勝ちようがねえ

　本当に詰むんだろうな

「方法はあります」

「あんのか!?」

「ただ……危険ですが……」

危険……か……ただどの道このままでも詰みか

「オルガ先輩」

「ああ、何かあったら俺がどうにかしてやる、やってくれ！」

オルガ先輩からも許可が出た……しかし一体何を……

「実験のこと覚えてますよね」

「ああ……」

確か寄生実験だったはず……まさか

「自分の内側に眠るものを起こします……正直皆には逃げていて欲しいレベルですが」

「流石に置いて逃げれねえわ」

マジで危険ならそれこそ止めなきゃならんだろうしな

「おい……キル夫何が起きる?」

「ボンボルド先生がしでかした事です」

「なっそりゃ止めねえと……!!」

「いや」

「何言ってんだキル夫!!」

「彼女が決めたんです……信じましょう」

藤堂がやるって言った以上俺達に出来る事は信じることだけだ
何もなけりゃいいってな

「……分かった」

そう言いつつ援護に回る態勢に入るから本当にいい先輩なんだなあって

「うっぐっ……」

辛そうにしている……大丈夫なのかと不安があるが……信じよう

「あああああああああ」

叫び声と同時に背中が破れ触手が出てくる

寄生と言っていたがもうアレは完全に同化しているレベルだ
……あんなもの入れさせたのかよ

「だあああああ」

触手が背中から飛び出た瞬間敵に襲い掛かる
スピードが常人を超えたどころか背中のそれも攻撃し始めて……文字通り１人で蹂躙してやがる
そもそも藤堂が言うように背中の暴走が危険過ぎて入れる状況じゃねえ

「本当に大丈夫なんだよな？」

「……」

「明らかに苦しそうな悲鳴をあげている、正直ポートキーで脱出も考えている」

「……」

「おい、キル夫黙っていられちゃ困るんだよ」

オルガ先輩の言う通りだ

確かに明らかな強さを持っている……だが……それと同時に藤堂の背中からの流血が止まらない

オルガ先輩が回復を飛ばしているが背中が開くたびにまた流れる

「信じたい気持ちもわかるしそうしたいならそうすりゃいい、だがそれならそう言え」

「分かってます……」

「アイツはあのままじゃ死ぬかもしれねえ、勿論どうなのか分からねえけどよ」

俺だって分からない……分からないから怖いのだ

本当に命を削ってやってるんじゃないかって

「だからどうしたいのか言えよ」

どうしたいか、試験が大事か藤堂が大事か
藤堂を信じるか、嫌われてでも助けるか

「……オルガ先輩、ごめんなさい」

「……そうか、そっちの選択するかよ」

少しだけ悲しそうな顔をする
そしてそれならアイツを信じると……

「授業不合格になりますが撤退しましょう」

「!?」

しかし今言ってた意味が予想と違う反応で驚く

「いいのか？嬢ちゃんの想いを踏みにじってどうなるか知らねえぞ？」

「その嬢ちゃんが今どうにかなるかの方が怖いですから」

「……だな」

そう言ってキーの準備を始める

「おい集まれ！撤退すんぞ！」

「え……えぇ!?」

ウィッチ先輩は驚いているがスルーする、撤退を決めたら迅速にだ

「それじゃ藤堂がこっちに寄った瞬間に使うぞ合わせろ!!」

その掛け声とともに寄る、近づいて来た
今回は失格で他のメンバーは納得しねえ奴はいるかもしれねえがこれは仕方ねえ

脱出しました
クエスト失……

―――――――――――――――――――――――――――――――

「いてぇ……」

体が丈夫なせいか痛みだけで済んだのかね
気絶こそしなかったものの絶望的な現状を見る
なんでこんな最悪なんかねえ……

「キル夫大丈夫か？」

「なんとか……」

オルガ先輩はなんとか動けそうだが……他の2人が動けない

「……ポートキーがオシャカになるとは予想外だったがな」

「仕方ありませんよ、今は状況をどうするかです」

目の前を見る

「藤堂……」

先程こちらに来た時にポータルを使うはずが藤堂が最終的に暴走し全員で落下した命こそ別状はないが雪菜もウィッチ先輩も目を覚ましそうにない

「しかしこうなるなら言ってくれりゃよかったのによ」

「多分知らなかったんだと思いますがね」

「そうなのか？」

「はい、藤堂は実験室で暮らしてたので」

「本当にあの教師は人をなんだと思ってるんだ!!」

「正直学園な以上もっとダークな事あるんでしょうけどね」

俺は実際そう思ってるしぶん殴りたい気持ちもある
ただそうしたところでこの学園は変わらないだろう……だから怒るのは今じゃない

「とにかく今は彼女をどうにかしましょう」

「どうすりゃいいかわかるか？」

「恐らくはですが……背中のアレどうにかすりゃ止まるかと」

「一応資料には実験体の暴走時には背中のを1度取り除けば治ると」

前見た資料にはそうあったが……

成長して変わったとかなら分からねえしこの暴走がそれに該当するかも不安ではある

「本当か?」

「何もしないでも詰むだけですし」

「そうだな……」

それでどうにもならなかったらどうしよう……

いや弱気でも仕方ねえな

「しかしどうするんだ?俺達2人は切断武器ないはずだが」

「これです」

爆弾を取り出す……これしかねえ

「ああ、確か触手達に使ってたな」

「はい、後2発しかないですが」

「不安だが……やるしかねえな」

潰した瞬間再生とかされたらどうしようもないが……こればっかりは祈るしかない
絶対助けないといけねえしな

「うらあああああ」

撃ち込む隙を探そうとまずは突っ込む

ただ……本当に恐ろしいほど身体能力が上昇しているなおい……

「キル夫大丈夫か?」

オルガ先輩が継続系の回復をかけてくれたのか瞬時に治療された
元からステゴロがダメらしく今は他の2人が目覚めない以上1対1で戦っている状況だがこれはありがたい
ただ問題は当たらない

「どんっだけ素早いんだよ」

全能力が上昇するとか言う言葉をよく聞くが正しくアレだ、手のつけようがない
闇雲に撃てるほど弾があるわけじゃないし何より顔にでも当てりゃ大問題だ
正面から勝てるわけないと下がり落とし穴の種を放り投げる
うまく踏んでくれるが踏んだと同時に宙を舞う……
これじゃあ罠全般どうしようもないか?

「ちっ……正直藤堂も治療してやりたいんだが……」

未だに背中から血を流し続けている
ただ……今は回復をすることは出来ない
そう考えると時間に余裕もねえのか……

「いい子だから少し待ってくれねえかねえ……」

止まってくれと願いながら武器を当てようとするが当然そんなことはない

「辛いなぁ……畜生!!」

正面からはどうにもならねえっつーのに背中のアレが横も防ぐ
どうせいっちゅうねん……

「勝ち目ねぇなあ……」

戦うのを速攻で諦め全力で避けに入る
なのに触手すぐ来るの酷くね？

「これで背中にぶつけんのか……」

かなり難易度が高いなあ……
折原先輩に言われてこれを撃つって
さっきは余裕だと思ったんだけどな……そもそも触手ほぼ動かねえし

「動く奴も練習しないとならねえことは分かった……」

さて、少し距離をとって……

「!?」

藤堂がふらつく
一瞬駆け寄りそうになったが触手が妨害する

「不味いな……」

「死なねえか不安だな……耐えてくれよ」

オルガ先輩が回復を打とうとするのを耐える
正直もうやめてえのは同じだが……
これで終われればいいんだが

「うぅ……」

床に落ちる血の量が増えていく、背中が嫌なくらいに開くんだろう……

「……」

藤堂は膝をつき、ついには倒れる既に体が限界なんだろう
こいつで終わらせる……

「痛いの我慢してくれよ……」

すぐに治療できるようにだけ告げて、近づいて背中に向けて飛ばす寄生元に当たれと……

「……ガッ」

もう動けないだろうが……ふざけんなよ……

骨が軋むような痛みがあったが……

「1人動きするなんざありかよ……」

「大丈夫かキル夫!?」

すぐに治療される、普段通り動けるところから骨は無事だったか

「爆弾が……」

少しだけ吹き飛んだがまだ勝手に動いている以上足りねえんだろうな……

「後1発……」

うまく当てなきゃならねえ……
こいつを……

「……嘘だろ」

手元から消えている辺りを探す
アレか……今殴られた拍子に……

「急いで拾わねえと……!!」

「おい、よそ見してんじゃねえ!!」

「オルガ先輩!?」

俺を庇って思い切り吹き飛ばされる
慌ててそっちを追おうとするが触手が襲って来て慌てて回避する

「こっちは後にしろ!!最悪テメエだけでも逃げること考えておけ!!」

「……クソっ!!」

逃げる気はねえがそもそも現状をどうするか
藤堂も手遅れになっちまう……

「おいこっちだ!!」

オルガ先輩が大声で叫ぶ、触手が音に反応してそっちに飛んで行く

「オルガ先輩……」

「早く逃げろや!!んでこいつら助けるために誰か探してこいよ!!」

そうだ早く拾わねえと
早く拾わ……間に合うか!?

「仕方ねえか……」

オルガ先輩が諦めたような声を出す
尖った触手が目前まで迫っている
間に合えよ……間に合えよ!!

「キル夫、後は任せたぜ」

仲間の暴走を止められないなんざ団長失格だな……
せめてキル夫だけでも逃がせたからよかったな

アイツが止まることのないように……俺も止まらないようにしなきゃなんねえな……

「止まらせねえよ!!」

病み村でオルガ先輩が言ってた言葉を放つ
止めさせるわけにゃ行かねえんだ……
だからどうにかなってくれよ!!
奇跡でも起こってくれよ!!!

そう願って体が消えた
そして藤堂の目の前にいた

「……」

何か言葉を放つ前に、手に持った爆弾を根本に飛ばした

「回復が間に合ったっすね……」

「キル夫が大量にポーション持ち歩いたお陰で助かった……出血多量で死ぬところだったぜ？」

藤堂は顔色は悪いが呼吸はしている
急いでゴールへ行って治療をと言ったが今動かすのが不味いと言われ安静にさせている

「血が足りねえが死ぬわけじゃねえ、むしろ今動かす方がやべえ」

「……そうなんです？」

「後少ししたらまたポーションを使う、そうしてからだ」

「分かりました」

「そもそもあの2人もまだ起きてねえしな……」

「……」

焦りすぎて忘れていた、そうじゃねえか……

「それにお前だって休憩が必要だろ?」

「確かにそうですが……」

さっきのはまた俺の魔術なんだろうな……
そのせいかどっと疲れが起きている
しかし……起これとは言ったが本当に奇跡だよな……
落とした爆弾を拾って藤堂の後ろにいたんだから……

「まあ、休憩もあるんだが……」

「どうしました？」

「キル夫、お前に話がある」

いつも以上に真剣な目で俺の方を見てきた

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

第21話

「周りは気絶してるし問題ねえ。今はサシの話し合いだ」

「そうみたいですね……」

深刻な表情に気圧されかける

恐らくはさっきの事だろうけど……なんで早く使わなかったとかか？

「察してると思うが一応、さっきのはなんだ？」

「俺の……魔術みたいです」

「専用の魔術……そんなもんもあるのか」

「はい、ウィッチ先輩も使える筈ですし」

「確かにそうだな」

一先ずは納得してくれたのか……？

「じゃあ……あんなやばいのがお前のなのか……」

「なんだか分かってないですけど……」

結局俺自身自分の魔術を理解できていないままだ

「分かってないのか？」

「なんか思ってたのと違うって感じで……オルガ先輩予想付くんです？

「思った感じなら加速だが……」

「それじゃあちょっと違和感が出たんです」

今までで起きて来たことを話す
なんか違うんだと力説するために
しかし話したところオルガ先輩の顔が青ざめる

「……俺としての予想がついた」

「マジですか!?」

正直どれもニアミスって感じだったんだが……本当に分かったなら驚く

「そうだな……この話は誰にも……いや本気で信頼できる奴以外とはすんな」

「……ヤバいんです?」

「少なくとも学園にバレちゃならねえもんだな」

ちょっとちょっと待ってくださいな
俺になにが起きてるんです？

「時間への介入、聞いた話だと時を止めることは出来ないらしいが……それでも恐ろしい奴だ」

「時間への介入？」

正直何を言っているのか分からない？
どう言う事だ……？

「つまりは簡単に言うと……過去や未来の自分になる……？なんか違うな」

説明する方も難しいらしい

俺も分からんから文句は言えないが

「まあ……走ってる最中に数秒前とかは少し後ろにいるだろ？」

「そりゃそうですね」

「その時の自分になれるって感じか？海底洞窟やボンボルドの実験室とかはその過去の自分の場所に自分だけ巻き戻ったとか」

「それで手が伸びたり……」

「念じれば腕とかだけでも出来るんだろうな」

「こわ……」

「んで今回のケースが決定打だな」

「決定打……？確かにおかしかったですが……」

「あん時爆弾拾って尚且つ藤堂の後ろにいただろ？」

「そうっすね、巻き戻った行動でそんなの無かったです」

　少なくとも藤堂の真後ろに行くことなんざ無かった

「アレは拾って回り込んだ未来だな、さっきの過去とは違って未来の自分の介入って感じか」

「なんかもうチートみたいですね」

　正直そんな魔術が存在するのだろうか？

「チートか、まあ魔法ならそうなんだろうな」

「魔法？魔術では無くて？」

と言うか魔法ってなんだ？

「ああ、お前のそれは魔術じゃねえ……時間への介入なんざ魔法の域だ……しかも流出領域ですらねえし」

「流出領域？」

「今度それは教える」

前にも確か言ってた気がするがよく分からん……ただ教えてもらえるならいいか

「本当に俺のってそんなんなんですか？

「さあな」

「えぇ……」

ちょっとオルガ先輩!!

「言ったろうがあくまで俺の推測だって」

「ただ核心ついてそうでしたが」

「そりゃ俺なりに真面目に考えた結果が……お蔭様で合っていた場合バレちゃまずい推測になったがよ」

実際あってそうに思えてきたから困る
これまで少しズレを感じていたのに今回はすんなりだもん

「テレポートじゃないんですよね……？」

「絶対違う」

「断言ですか……」

正直断言されるとは思わなかった

「鉄華団にいるんだよテレポート使える奴がな」

「マジですか……」

貴重だって聞いたんですが……

「そいつが言うにはテレポートは集中力と冷静さが必要と、ちゃんと行く先をしっかりと頭で浮かべなきゃならねえらしい」

「なるほど」

「ただキル夫の場合は使えるのは緊急時で唐突にだ……当然場所のこと浮かべてるよう

に思えねえ」

「ですね、無我夢中って感じです」

「それにテレポートは超スピードで飛ぶんだ、一瞬で消えるのは違う」

「なるほど……」

手が伸びた？って違和感のせいで違うと思っていたがそれなら完全に違うな

「だから俺はこう推測したわけだ」

「多分……合ってる気がします」

なんで俺はそんな規格外の物を使えるか分からないが

どっちみちバレたりしたら不味いと

「学園な以上誰が信用出来るか分からねえ。全員に伏せてもいいくらいだ」

「ただまどか先輩達と考えるって話してましたが……」

「アイツなら、分かったけど話せませんで大丈夫だ」

「失礼すぎません？」

俺のことを考えて手伝ってくれたのにそんな言い方って

「アイツは察してくれる奴だ、何よりそれ魔術師の奴らと一緒に探る気だったんだろ？」

「はい……八神先輩の協力を得るつもりでした」

「……やめておけ、魔術師コースの奴らを信用するなとは言いたくねえが……ボンボルドが信用出来ねえ」

藤堂にあんなことする教師が生徒に何かしてる可能性があるってことか……

「分かりました……」

狛枝には伝えておくかって考えていたが……

「どっちみちこれ以上はなんとも言えねえな……今はこのくらいにしておくか」

そう言いながら3人を起こす準備をする

俺も起こさねえとってぐわんぐわんしないくらいにゆする

「1位は厳しいかもしれねえがこうなった以上突破すっからな！」

「はい!!」

「と言うか……ポートキーが壊れたせいで強行軍しかないんだがな……」

「……」

意気込んだのが悲しくなった

結局俺達は　１ｄ１０：２　位だった

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「本当に迷惑をかけました」

「いや……雪菜達は何も悪くねぇよ……」

気絶した事に謝られ、今回も2位だった事に謝られる……

ただこんなの悪いのは最後に戦わさせて逃げたアイツだろ

「っつーわけで俺達は誰も悪くねぇ!藤堂もむしろ感謝したいくらいだかんな」

「……」

相当堪えているのか一度謝ってから何も喋らない
無事動けるようになったが、そのまま動かなかったため担いできたが……心身共にヤバそうだ
少しだけ落ち着いてから話すか……

「よっキル夫大丈夫か？」

「カズマか……」

後ろからカズマが声を掛けてくる
聞いた話だとカズマ達が1位だったらしい
……何故か触手達と戦ってないらしいが
俺達の時もいなかったし多分藤堂が全滅させたんだろうな

「つかお前達よくこんなスピードだったな……」

「やれば出来んだよ俺達も」

だって日影さんとゆんゆんさんだろ？
正直先輩がいい感じでも厳しいと思うんだ

「先輩に恵まれたからな」

「俺達もすげえ先輩達だったがそんなにか？」

「まず2年の吉良先輩」

「聞いた事はある気がするが……」

確か吉良吉影先輩だっけ、歳上過ぎて2年に見えない先輩
そして確か……

「確かだが……魔術師じゃなかったか？」

「ああ、凄かったぜ！何やったのか分からなかったが全部倒してよ」

なんだか詳しくは分からなかったがこれは流出領域だよとか言ってたらしいがって……

確かにオルガ先輩も言ってたしそのワードは気になるものでもある

「いや……」

ただ俺が言いたいのはそうじゃねえんだ

「何が言いたいんだよ？」

「魔術師２の盗賊２だろ……？」

戦士か神官欠けてること気付いたし下手すりゃどっちもいねえ

「それがどうした？」

「3年の先輩は……？」

「ああそれは……」

「呼んだか？」

そう言って少女がこちらへと来るが……

「ちっこくない？」

「誰がちっこいだ!!」

怒らせてしまったが……確かに強そうな見た目している

……この人が強かったんだろうな

「おい、武器を取れ先輩からの授業だ」

「いや、悪かったので……」

「うるさーい!!」

そう言って突っ込んでくる

……ああ、馬鹿にした罰だな……痛い目覚悟するか

「……ん?」

なんか数回武器を振っただけだが……相手の方が倒れてるんだが……

「ぐぬぬぬ……」

「大丈夫ですか?」

「負けたわけじゃないぞ!!」

「はあ……」

3年……だよな？マジで3年なの？
と言うかこれで2年間生き残れたのか……？

「大丈夫ですか？」

「まっマサムネは無事だ!!続けるぞ!!」

「いやマサムネ先輩、キル夫には勝ち目ないんで諦めてくださいって」

「なにをーーーー!!カズマ無理だって言うのか!?」

「だってそいつ近接なら吉良先輩以上ですよ？」

「……」

少し震えている、何か悪いことしてしまっただろうか……

「きょっ今日はこのくらいにしておいてやる!!」

「あっ」

行ってしまった……大丈夫だろうｋ　……こけてるし

「まあ、このメンツで行ったわけだ……」

「ごめん、１位どころかなんで生き残れたん？」

「あの先輩ガチで生命力がやばくて攻撃全て受けてピンピンしてた」

「うわぁ……」

絶対に先輩の使い方間違ってる

まあその結果1位な以上文句は言えないのか……？

「結局1位ならいいんだよ」

「ソウデスネ」

なんか納得行かねえが負けた以上は仕方ねえ……あの出口にいた男をぶっ飛ばすくらいだ!!

「カズマさーん」

「あっゆんゆんが呼んでいるな、悪いなキル夫」

「いいよ行ってこいよ俺もやることあるし」

そう言って分かれた後色々と考えさせられた
……強いだけじゃなくて……勝つためには色々と必要だなあ
多方面で強くならねえとな

―――――――――――――――――――――――――――――

「藤堂、調子はどうだ？」

「キル夫さんが私を止めてくれたお陰でなんとか大丈夫です」

「……俺達も藤堂のお陰でなんとか大丈夫なんだからな？」

「それ以上の迷惑を掛けましたけどね……」

だあああああ、言い分は分かるが本気でキリがねえな!!
悪くねえって言ったって本人には厳しいか

「ただそれでも藤堂のこと今後も必要だし頼むけどな」

「私……実験室に戻ろうかと考えてるんですが……」

そこまで気負ってるか……あんな所がいい場所になんざ思えねえのに
少なくとも地獄のように思えたが……

「やめとけ、今戻ってもロクな未来がねえ……と言うか今後戻らねえ方が良いんじゃねえのレベルだが……」

「ただ、怖いんです……」

「だろうな、だがんなの誰だって一緒なんだわ」

「普通の人は暴走なんてしまｓ」

「する」

言い切らせる前に突っ込む

そんな自分自身を操れる程の出来た奴は冒険者なんざやらねえよ

「え？」

「極限状態になった人間なんざなにをしでかすかわからねえ、それこそあの暴走が可愛いくらいなケースだってある」

「そんな……」

「まだまだ知らねえことだらけなんだよ藤堂は」

いい子なのか分かるが本当に冒険者を知らねえなって

「それにこれだもん……」

自分を指差す、恐らくは触手のことを言いたいんだろうが……

「んなの関係ねえよ」

「なんで……」

「爆破しちゃったろうよ」

「いえ……一部が消えただけで全く無くなったわけじゃありません」

そうなのか、それは覚えておいた方がいいな

なんにせよなにも変わらねえけどな

「そもそも勘違いしてるだろうが藤堂は化け物じゃなくて人間だぞ」

「そんなこと!!」

「化け物ってのは世の中に恐ろしい程いるが……尚更そいつらのせいで藤堂は人間なんだよ」

むしろいい子だし癇癪持ちの人間よりずっといいわ

「ネガティブになんのも分かるが私なんか、ってよりいまより強くなってやるの方がいいしな」

「そうですか？」

「……そもそも十分に強いけどな」

「そうですかね……」

「ああ」

「分かりました……確かにその通り頑張ってみます」

「そりゃよかった」

「助けていただいた命なのも事実だし」

「……そうだな」

勿論藤堂が実験室に戻るのは彼女のことを考えても反対だがもう1つあった
俺のあの時の記憶が残っていた場合不味いのだ……
ボンボルドに見られる事があってはならねえ
つまり二重にも三重にも帰させたくねえ!!

「それじゃあ私はこれで」

「ん？どうするんだ？」

「仲間に謝罪とそして感謝を伝えてきます」

「そうか行ってこい！」

偉そうな口調で藤堂を見送る

みんな責めることも無いだろうし上手く行きゃいいがな

「いや、藤堂の性格だ上手く行かないわけねえか」

そう確信を持っていた

――――――――――――――――――――――――――――――

まだ終了までの日程に半分も経ってない

と言うかまだ俺達しか授業クリアしてないし

「鍛錬するのもいいんだが……」

普通のグループはまだ帰ってこれるはずがないのにそれでも心配になる……
アカネ先輩が帰ってくるのがまだかなと

「俺が心配する立場じゃねえのはそりゃそうだが……」

むしろ心配してたって言ったら生意気だって言われそうだが
と言うか絶対言うんだろうな……

「ただ心配なんだよ」

俺達は正直組み合わせがベストだった気がするし今回のダンジョンと相性も良かった
ただそれでもあの野郎のせいで死にかけたがな
……だからこそアカネ先輩が心配だ

「それするくらいなら強くなっとけって言われそうだが……」

ただ今は鍛錬が身に入らないだろう
それに強行軍してきたし許してってことで

「勝手に戻ったら怒られるだろうしな……」

長谷川先生がクリアしたんだからダンジョンに入るなって言ってたし仕方がねえが……
そのせいですっげえもどかしい
さっきまではすぐ出たいだったのに今じゃもう入りたいになってる

「クソっ……バレないように戻るか？」

「いい加減騒がしい」

「あっすみません……」

近くにいた人に怒られる慌てて謝ったが
……スーツに明らかに歳上っぽい格好

「吉良先輩ですか？」

「ああそうだ、岡島キル夫」

「知ってるんですか？」

「ああ、後輩がしつこくて覚えてしまったよ」

「ごめんなさい……なのか？」

「別にいい、実力があったのは事実みたいだからな」

実力を認めてくれているのか……

「ただ煩い、恋人だか待ち人だが知らないがいい加減にしてくれ」

「すみません」

確かに気にし過ぎた所があったか
いまだに心配だけどさ

「課外授業も終わって静かに過ごしたいんだ、分かったね？」

「はい……」

まあ悪いの俺だしな今回は
と言うかど正論なせいで反論する気も出ない

「そう言えば吉良先輩」

「どうした？」

「流出領域ってどんな感じですか？」

折角吉良先輩にあったのなら聞いてみる
嫌がられるかもしれないが

「……どう言うことだ？」

「いや、カズマがそう言えば吉良先輩凄えって」

「彼は本当にすぐ話す……」

少し嫌そうな顔をしながら文句を言う
悪いことしたかもしれない

「確かまだなんでしたっけ？」

「ああ、そうだ」

オルガ先輩も言ってたそれ

気になってはいるんだが……今の俺に覚えられるのか？

「本来はまだまだ先のはずだが……いいだろう教えよう」

え？正直オルガ先輩から教わるものだと思ったが……？と言うかいいのか？

「静かにしたかったのでは？いいんですか？」

「君は技術のためなら何処までも貪欲だと聞いていた……スルーした方が騒がしくなりそうだ」

「……？」

ちょっとカズマさん俺そんな感じなの？

俺そんな感じ……だったわ色々無茶苦茶に覚えようとしてるわ

「それにこの方が気も紛れる。君も静かになるだろうよ」

「そうですか？」

まあ全力で打ち込めば確かにそうなるかな？

「今の君が覚えられるか分からないがやってみたまえ」

「……はい！」

こうして俺の特訓は急遽始まった

アカネ先輩、俺は少しでも強くなるから元気に帰ってきてくださいね

――――――――――――――――――――――――――――――――

第２２話

「まず領域と言うものは分かるな？」

「はい、縄張りっすね」

海賊やってる時によく知ったわ

「……まあいいだろう合ってはいるし、つまりその縄張りを広げるのが流出領域だ」

「広げる……よく分からないですけど」

「簡単に説明するとだな、ここからは自分の場所だから自分のルールが適用するよって場所を魔力を使って増やす」

「魔力なんですか？」

「放出だからな、聖気は体内の自分のルールを捻じ曲げる変異領域になる」

「すみませんが聖気使えません」

「両方使える人間は少ないし仕方あるまいよ」

使える奴はやっぱすげえのか……

「変異領域はどちらかと言うと固有魔術に近いな自分だけが使えて自分が影響を及ぼすのだから」

勿論根本は異なるがと続ける

確かにそう考えると違うみたいだな

「それで君にとって自分のルールはどう言うものだと思うかね？」

「俺のルールですか？」

「ああ、そうだ」

俺のルール……と言えば海賊としてのルールになるんだろうか？
そうなるとそっち方面の流出領域になるのか？

「魔力をいつもと違うような感じで、自分の世界を生み出すように流出させて見たまえ」

「分かりました……」

そうして全力で魔力を練って込める
自分の領域を生み出すために
……心の中で一番思ったことは

1．海　2．略奪　3．お宝
1d3：3

「これは？」

見た目はなにも変わっていない、まさか失敗したのか俺？
少しだけいつもよりも楽に感じる……少しだけ強くなった？

「なにも起きていな……？いやそういうことか」

吉良先輩は何かを理解したようだ

「何かあったんです？」

「と言うことはわたしの方だけか」

「いえ……多少は変化ありましたが微細です」

こちらはそうであると伝える
一方の方でそっちに何が起きたのか詳しく尋ねてみる

「体が重くなった……普段の力を出しきれないようだ」

つまりは脱力？と言った感じか？

「そして目に見えるｋｅｅｐ　ｏｕｔ　……この領域は完全に締め出すのか」

「え？」

流出した場合は自分に有利な縄張りを作るのでは？
締め出しちゃうならダメなんじゃ……

「……ただ出るのにも範囲が広がれば苦労する上、弾き出されるわけではないな……そう考えると厄介か」

「強いのか弱いのか分からないっすね……」

「そうだな……使い方にもよると思うが、とても強いとは言えないな……」

「そうですよねぇ……」

立入禁止ってそもそもどう言うことだよ……

強い弱い以前にこの能力が理解出来ない

「あっ吉良先輩」

「どうした？」

「落としましたよ」

今回のダンジョンで入手したのか金貨が落ちている

立入禁止内ではあるが流石に放っておくことは出来ねえから伝える

「ああ、ありがとう」

感謝と共に金貨を拾うが……

「っつ……」

「吉良先輩!?」

突然吉良先輩が血を吐く……おい、何があったんだよ!?

「……そう言うことなのか?」

「吉良先輩、とりあえず傷を……」

「いや、構わない」

だいぶ辛そうなのに平気で立ち上がる
タフってレベルを越してる気が……

「それより……そうか君の能力はそう言うことか……」

「分かったんですか!?」

と言うかｋｅｅｐ　ｏｕｔと出た以上妨害系とかだと思ったが……

「敢えて聞いておくか……君が冒険に一番抱いていることはなんだ?」

「それは死にたくないと……」

「流石にそれはほとんどの奴が一緒だ、そうじゃない……挑戦か?名誉か?戦闘か?」

そう言うことか……なぜ冒険するのかと言った所だろうそれならば簡単だが

「お宝です、まだ見ぬお宝を求めて」

「やはり……か」

やはりってことは推測ついている……

お宝関係？どう言うことだ一体？

「君の流出領域だが」

「縄張りを作ったってことですよね？」

「ああ、そうだが」

つまりは俺がルール？だがどう言うルールだ？

「ダンジョンとかでお宝があるだろう？そしてこのロープはアレを見つけたのは俺だ!!

とのようだ」

「つまりは俺の物に手を出すな?と」

「ああ、そう言うことだろうね、だから中に入れば苦痛が伝わるし中から宝を奪おうものならダメージが入る」

「だから吉良先輩にダメージが……」

吉良先輩の金貨だったのにここに落とした瞬間俺が発掘するお宝になると言ったわけか……

「恐ろしい……のだろうか?」

正直実感が湧かない

だってお宝関わんなきゃただの少し辛いだけなんじゃ?

「……盗賊としてはいいだろう」

「そうなんですか？」

「それにその領域今は分からないが……効果の範囲が何処までか分からない以上恐ろしいだろうね」

「範囲？」

射程範囲は程々だろうが分からないってほどでは……

「例えば相手の所有物でさえ自分の物と考えれば手に取るだけでダメージが入るかもしれない」

「……」

なんだそりゃ、そんなの酷過ぎやしないか？

「それにだ、ダンジョンでその能力を使った場合どうなるだろうな……モンスターに効くなら安心して宝探しができるどころか……安全地帯が出来るわけだ」

「あっ……」

そう考えると恐ろしいのか？
いや味方が入れないのが難点か……

「味方が使えないのが厳しいですね」

「そこは今後の課題だろうね」

そうだな、出来るようになればだいぶ楽になる
勿論入っては来れるけどペナルティ負った相手なら多少は有利になるし
味方への軽いバフにもなる

「じゃあ次の目標は……」

「それだけじゃないね」

「何をすれば？」

「盗賊の基本、シーフだよ」

シーフ……正直探し出すのが好きで他人から奪い取るのは好きじゃないんだが

「嫌そうな顔をしているね、だが盗賊にとってシーフは必要なのだよ」

「どうしてもですか？」

「必要な素材の効率を上げる、武器などを盗めば敵の戦力を削ぐ……それに君なら尚更だ」

「この領域ですか……」

「ああ、相手の必要な物を盗めば取り返しに来る……そこを利用すればいい」

「えげつねえ……」

そうか、お宝だけじゃ無くて盗んじまえば俺のものになるのか
そうなると……取り返してもタタじゃ済まないと

「君は盗賊としてはその2つを重点にした方がいいかもしれないね」

「分かりました！」

「折角なら領域に名前でも付けたらいいかもな、早く強くなってみろと」

「吉良先輩は領域に名前を付けてるんです？」

「悪いが秘密にさせていただこう」

そう言えばカズマも気付かなかった言ってたな。探るのはやめておこう、嫌な予感するし

「それじゃあ発掘禁止区域って所ですかね？」

「やけにそのままだが……」

「変に凝るとややこしくなるので」

「君がいいならいいと思うが……」

「本当にありがとうございました！」

「いや、構わないよ……これで静かに過ごせそうだ」

「静かにって……」

「何か文句でもあるのか？」

「いえ……多分これから色々な生徒帰ってくると思うので騒がしくなるかと……」

「……残念だ」

少し悲しそうな顔をして帰っていった
なんかすごく申し訳ないことした気がする

…

「彼達は流出領域の事は知っていたがわたしの能力については知らなかったか」

同じくダンジョンを攻略していた彼も気付いていないようで何よりだ

「この吉良吉影のことを知ってしまっちゃあ始末しなければならなかったからね」

そうならずに済んで良かったか、彼は顔が広そうで面倒だったしな

「態々手伝ったんだ、これから先彼を利用させてもらうとしよう」

１人の男がほくそ笑んだ

―――――――――――――――――――――――――――――――――

特訓後２組が帰ってきていたらしい

片方の組みはよく知らない人達だったがもう１組は冨岡さん達だった

「キル夫おおおおお!!」

「ちょっと姉さ……!?」

いきなり飛びかかられて横転する
正直予想外だった

「本当に出来た弟だ、私達よりも早いと思わなかったぞ！」

「苦しいですってば……」

まあ今回のダンジョンで不安に思うことも多かったしそう言うのもわかるが……
俺だってまだ姉さん達が帰ってきたのは嬉しいがアカネ先輩や狛枝とか帰ってきてないから不安が続いてるし

「と言うか姉さん達も早いと思いますよかなり」

「そうだろうそうだろう！」

すっごい嬉しそうな顔をしているのを見て安堵する

「誰だったんです先輩？」

「そうだ、どっちもキル夫の知り合いだったらしいぞ！」

「ある意味すげぇな……」

確かに知り合いは多いがそうなるとは思わなかった

誰だ誰だ？

「俺」

「……」

いきなりドアップでニケ先輩が出て来て戸惑う

確かに盗賊として優秀な先輩だわ

「そして俺」

「三日月先輩ですか、そりゃ安泰だわ……」

この2人の組み合わせ予想以上に良さそうだな……それに3人組……魔術師なんざいらねえくらい強いわ確かに

「オルガの方が早かったのは意外だけどね」

「こいつらが優秀だったからな」

そう言って肩を組んでくる

オルガ先輩が笑顔で俺の事を褒め称える

「本当は俺達が1位だったんだぜ？」

「オルガセンパーイ負け惜しみはダメですよー」

「おいニケうっせぇぞ!!」

　確かに負け惜しみに聞こえたがニケ先輩は叱られる

「ったく……アイツが邪魔なんざして来なけりゃ1位だったはずなんだぜ?」

「大丈夫だったのオルガ?」

「ああ、少し危なかったが……」

　そう言って俺の方を一瞬だけ見た気がする

「俺もあくまでも3年だからな!そん程度じゃやられねえよ!」

「オルガの戦闘は不安なんだけど……」

「うるせぇやい!!」

あくまで俺のことは言い出さないように配慮したように見える
三日月先輩はオルガ先輩にとって一番信頼してるように見えるのに

「キル夫だって優秀だぞ！」

「姉さんなんで今張り合わせるの!?」

流石に上級生程優秀じゃないからね!?

「はっはっは、確かにそうだな……ってかさっきも言ってなかったか？」

言ってました

「言ってましたか？」

「おい姉さん」

「キル夫を褒める言葉は何回あっても良いだろう」

この人は何処へと向かっているのだろうか

「と言うか疲れてるんだけど」

「すまねえミカ、ニケ達も休んでおけ」

「と言ってもこっから何もないから問題ないけどな」

「そりゃそうだが……正直あの先公達唐突に何するか分からねえからな……」

「そりゃそうだな」

そう言いつつ先輩方は戻っていった

姉さんは何故か残ってるけど……

「まだなんかあったか？」

「なんか冷たくないか？」

「気のせい気のせい」

「そうか……」

「しかし冨岡さん達の事放っておいていいのか？」

「流石に勇くんも大丈夫だろう……」

でも心配なんですがね……

「と言うか組む前に邪魔されたんだし今くらいいいだろ！」

なんで俺に拘るのか知らねえけど……
まあ確かに酷い事してる気がしてきた

「で、どうしたいんです？」

「甘やかして」

「……」

シノアさん所に送ればいいかな？
まあ……頑張ったのも事実か……

「何すりゃいい？」

「いいのか？」

「自分で言ったんだろうよ、ったくよ」

一先ず膝枕してお疲れさんって伝える
実際疲れているんだろうけど

「硬い……」

「下げんぞ?」

甘やかして言われて甘やかしたら文句言われるとか知ったこっちゃねえ
と言うか許せないよなあ!!

「いや……弟ってやっぱこうなんだなって」

「むしろ特別な考えとかあったのか?」

「さあ、どうだろうな」

「おい……」

「だって分からないからな」

そう言われるとどう反応していいんだか分からない
この異様な姉欲は末っ子特有のなんだろうけど

「はー……」

仕方ねえ姉さんだなと思う辺りは俺も毒されて来てるんだろうな

「お前がいるって考えると死ねないって思うな」

「俺が居なくてもそう思ってくださいな……」

「それは……そうだが……」

「家族がいるのは安心出来るからな」
「本当の家族も居るでしょうに……」
「だが遠いからな」
「そういや俺も遠いな……」
「遠いのか？」
「ああ、帰れねえから学園通ってるし」
元は冒険者する気だったが
「どうして？」
「遠くて金がないんです」

「今もか？」

「……」

あれ？もしかして俺帰省出来るんじゃね？
と言うか金あるから郵便だって出来るな……

「……どっどうした？」

「帰省出来るじゃん……長期休みにします」

「そっそうか……それは良かった……」

流石に急すぎて姉さんも驚く
ただ……うん、正直どうしようもないと思ってたし

「ただ……お前の為になったなら良かったよ」

家族か……父さんと会うの正直怖いんだけどな
根っからの悪党って感じだったし……
まあそこが憧れたわけでもあるが……

「どうした？微妙そうな顔をして」

「ああいや……正直会うの怖いなあって」

「……家出か」

「似たようなもんす」

さっきまでのワードを辿ると……まあそりゃ分かるよな
正直……勝手に船奪って漂流してヒモやってます？……殺されるわ

ただ……合わないことにはどうしようもないか
許されるにせよ違うにせよ……しんどいが

「仲悪いのか？キツそうなら同行するが？」

「立場がより悪くなる気がするんでやめて下さい」

「そうか……」

１人でなんとかせにゃならん問題だしな
一先ず……課外授業終わったら手紙出すか
海軍だから届かないなら諦めるが……届かないで欲しいなあ

「まあそうだな……邪魔になりそうだな、少し１人で考えてみるといい」

「本当に姉っぽいことを……」

「お前がどうであろうと私は姉だからな！」

本当に姉だった気がしてきた……あれ？違うっけ？

「とにかく！仲良く過ごせ、家族は大切だ」

そう言って去っていく、本当に姉さんは表現するのは難しい人だ……

「海軍所属岡島緑郎」

叱って欲しかったり、許して欲しかったりと色々な感情が揺らぐ
怖いとも思うし逢いたいという思いもある

「なんつーか……分かっちまったらもどかしいな」

さりげなく俺自身必死に探してなかったもんな……
ただ……覚悟を早いところ決めねえとな

「皆、元気にしてるかねえ」

当然としか思えないがそれでも物憂げに皆を思った
そこに自分の帰る場所が存在しているかを考えながら

―――――――――――――――――――――――――――――――

第23話

コミュ　1d15：15

そう言えばもう1組の班ってどうなんだ？
姉さん達の班ともう1組帰ってきていたはず
知り合いはいるのか……？

そう言ってもう1組の班を見に行ったが……居た
本当に知り合い程度だが……

「お久しぶりです」

「えっと君は……確か会ったことはあるのは覚えてるが……」

「あの時は名乗って無かったんで……」

「そう言えばそうだっけか、覚えてなかったな」

「岡島キル夫です、井之頭先輩」

「そうか、覚えておくよ」

あの時は食事中を邪魔するなってアカネ先輩と一緒の時に言われたから名乗らなかったな

失礼だった気がするけど……今怒られない以上多分正解だったんだろう

「しかし予想外だったな」

「何がです？」

「流石に帰って来ているメンツ少ないなってね」

「そうなんです?」

「流石にウチの班よりも遅いメンツが多いのは不安があるさ」

「俺たちの時はゴール前に邪魔されましたが」

「そんなことがあったのかい?それでも早いなら優秀だと思うけど」

「無かったんです?」

「と言うか自分達のところが去年は1位だったけど少なくとも去年はそんなこと自体なかったね」

「はい?」

何で邪魔されたん俺達？
イジメ？イジメなの？

「と言うかそれじゃあ井之頭先輩強いじゃないですか」

「そこまで強いわけじゃないさ、ただ仲間にはよく恵まれてるね」

「凄いですねそれは」

「今回はそれほどでも無かったがね」

ｌｄ５：３

「なんや？ウチらに文句あるんか？」

１人の少女が突っかかってくる
普通に考えて井之頭先輩のグループなんだろうな

「花開院君か」

「ウチらとてちゃんとやったし、それに先輩だって何してたんやって」

「なんかあったんですか……」

「まあ簡単に言うとやり過ぎたんだ彼は……」

「彼って？」

「3年さ、あくまで1年メインだと言ったはずなんだが」

「……それで？」

「ああ、ものの見事に全部やってくれたよ」

「わぁ……」

正直それはダメだろうよ……

全部やっちゃ……オルガ先輩だって自重してたのに

「と言うわけで1年達もやりはしたんだが……」

「何が言いたいん？」

「いや……正直教師に評価を言い辛い」

「あー……」

それもそうだよな……1年メインは実力試すのはそうだがそうするってことは伝えるか

「でも先輩も何もしてなかったじゃないですか」

「いや……俺までやったらオーバーキルだし」

「納得できひん……」

「だから恵まれてなかったんだよ」

先輩が強くてラッキーと思ったがそうと言うわけでもねぇのか……
案外そういうのも考えてＰＴ組まれたんだろうな……

「先輩によって活躍出来ませんでしたってなるの嫌や……」

「……まあ、悪くはならないようには言っておくさ」

「頼みます……」

「えっと……」

俺邪魔なんじゃないだろうかなと
と言うかなんでいるんだっけ？

「ありがとな、アンタのお陰で助かったわ」

「え？俺何もしてない？」

「アンタが言ってくれなきゃ先輩は何も言わずに評価悪くなったかもしれんしな」

「考え過ぎだと思うが……」

「いや、実際そうなってたと思う」

「いや……彼女達も被害者じゃ……？」

「決めるのは3年のアイツだし俺も口出す気なかったから」

「……ええ」

「自分で全部やる癖に他人にゃサボってるとか言い始めるんだよ」

「……ウチら運悪かったんかな？」

「悪くはねえよ……死ぬ奴は死ぬんだし……」

今回の課外授業でも死人は出るんだろうな……

と言うか学園本気で死人出し過ぎなんじゃねえのか？

「それもそか、どっちみち助かったで」

「……良かった、でいいのかねえ？」

正直分からん、ただこの子達もまともに出来るんじゃねえの？

弱そうな雰囲気はねえし

「花開院ゆらや、よろしく」

「岡島キル夫だ」

正直問題児である3年も見てみたくはあるが怖く感じるのでやめておく……死にたくないいし、挨拶だけ済ませてってこ帰ることにした

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

コミュ　１ｄ１４：１４　マサムネ

「おい！キル夫！マサムネと勝負しろ！」

「……」

昨日戦ったはずだよな？そしてカズマがやめとけって言ったよね？

「どうしたんです？マサムネ先輩」

「前の決着がついてないからな！」

……そう言えば負けてないって騒いでたっけ？

どうすりゃいいんだこれ？

「やるぞー！」

「……はぁ」

何も考えずに突っ込んでくる、当然だが容易くあしらう

「ぐっ……!!」

「あー……」

リーチ短いのが致命的な気もする
動き方が単調なのも厳しい気がする
よく生きれたな本当に……いや嬉しいことなんだろうけど

「なんで入らないんだ!!」

「……」

手を抜くとつけ上がりそうだし止めておこう
と言うか勝っていいのか？

「その程度か！」

「……」

前も勝ったしいいか
軽くいなすことにした

「むぎゅー」

「大丈夫ですか先輩？」

「何故勝てないのだ……」

軽くしたとはいえ……もう立ち上がれるのか
正直そっちの方が驚く

「何故マサムネが勝てないのだー!!」

「どうしてでしょうね？」

先輩の理由なら分かると思うが……

ただ既に言われてるであろうことしか浮かばないしはぐらかす

「分かった！お前が強いからだ！」

「いや、俺盗賊コースですし……」

「え？」

「ん？」

「戦士コースじゃ……？」

「盗賊コースです」

と言うか聞いてなかったのか？

カズマは別に言わねえか……必要ないだろうし

「……」

「……」

「……その……カズマには勝ったぞ？」

「そうですか」

流石に純粋な盗賊の1人であるカズマに戦士として負けちゃダメだと思う

「……盗賊？」

「はい、俺も盗賊です」

「……」

「……」

「そうか、盗賊もやってる戦士……」

「まあ戦士もやってはいますが……」

「だよな！そうだろう！」

「ただ……戦士の奴らには普通に勝てねえのでそこ止まりっす」

正直な話もう雪菜に勝てねえだろうな
課外授業で数日間一緒に戦ってそうだと悟ったわ……成長ヤベエ
俺は俺で盗む覚えなきゃなんねえし

「……器用貧乏ってやつか？」

「やめてください、自覚あるんで……」

ただ……器用貧乏はそれなりにいいことあるもん……

「と言うかそんな半端な奴に負けたのか……」

「……」

返事していいの？もう俺ちょっとオコだからグチグチ言っちゃうよ？

「……マサムネはいずれ最強になるから見ていろよ！すぐに地面に這いつくばらせてやる！」

そう言って去っていったが……もう3年だし本当に遅くね……？

しかも逆に俺が成長期なんだが……

「ただ……1位かあ……」

あの体力と復帰力とか恐ろしいもんな、冒険者やってもまず死なねえ気がする

「……恵まれたＰＴ？」

恐らくカズマの班は3年がアレだしタンクで1，２年共に活躍出来たいい例なんだと は思う

ただ……恵まれたＰＴかって言うと……複雑だな

「まあ……どっちみちカズマ達生き残ったからいいか……」

深くは考えないことにした

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「きゃー中嶋君かっこいー」

「やめろ」

本の角で殴られためっちゃ痛いんだけど
俺なんかした？

「酷くない？」

「授業が終わっていきなり迫ってくる奴に比べりゃマシだと思うがな」

「そんな奴いるのか？中嶋が可哀想じゃん！」

「……」

もう一度殴られた!?

「しかし……お前達はだいぶ早かったようだな」

「2位だしな」

アレから結構な人数がクリアして来た
デク達も来たし、気付けば狛枝達もいた
立華さん普段通り無表情かと思いきやピースして来たんだけどどう言うことだろう
ただ、みんな帰って来て安心してるわ

「予想以上に優等生様ってわけか」

「色々とあったけどな……」

正直進むことだけばっかりだったしな
狛枝は宝箱見つけたって言ってた
急いだ分そう言ったのはナシだもんな……
開けたかった……

「だいぶ浮かない顔してるな」

「そりゃお宝が開けられなかったし……」

「それだけじゃねえだろ」

……ん？

それだけじゃねえ……のか？

「誰か死んだか？いや……その面は不安そうな面か……帰って来てないようだな」

「……まあ合ってるが」

なんでアカネ先輩帰ってこないんだ？

正直メンバーに恵まれてなくても俺でも2位だった以上もっと早くてもおかしくないと思うんだが

「大概そう言うケースは死んでるが」

「あの人が死ぬわけねえだろ!!」

ついムキになる、ただ死ぬ姿を想像なんて出き……したく無かった

「まあ……お前の知り合いがそう簡単に死ぬとも思えねえがな、覚悟はしておけ。冒険者はそう言うものだ」

「……」

覚悟できねえよ、中嶋は割り切れって言いたいんだろうが……生きていける自信がねえ

おかしいよなあ……父親に会うって話してたのによ

「……」

「……言い過ぎたか？」

「いや、そう言う考えもしなきゃならねえってのは分かった」

「……」

「ただ、俺は信じるがね」

「……好きにすりゃいいだろ」

呆れたように中嶋は溜息をつく
いや意固地でもいいじゃねえかよ

「そんなに大事に想うのは恋人か？」

「んなっ!?」

何を言い出すんだこいつは？
そんなわけねえだろうよ!!

「どうした？」

「アカネ先輩とそんなわけじゃねえって」

「ほう」

急ににやけ出したぞこいつ……どう言うことだよ……

「なんだよ」

「いや、まさか待ちわびているのが先輩だとはな。てっきり友人だと思ったが」

「それがどうした？」

「いや、後輩が先輩を心配するなんてだいぶご執心だなと」

いや……そんなんじゃねえし？

心配するのは最初おかしいと思った……それでも心配なんだよ

「悪いか？」

「いいや、ただ言った通りと思ったわけだ」

「……まあそうかもな」

恋心って言われて否定はしたが大切な人にゃ間違いねえしな

よくよく言ったら中嶋にキレる意味なかったか？

「見に行ったらどうだ？」

「行こうとして先生に怒られた」

「そうか……」

予想外だったのか戸惑った姿が見られる
マジでどうすりゃいいんだろうな

「出口は1つだけじゃねえし案外バレずにいけるかもしれないがな」

「1つだけじゃねえの!?」

「当然だろう……でなければ道が詰まるだろうよ」

確かにそう言われるとそうか、慌ててあの出口に戻ったが入り口複数あったのに出口1つだけっておかしいわ

「お願いだ、教えてくれ！」

「……その先輩はお前以下なのか？」

「そんなわけねえだろうが!!」

「……正直先輩からしたら、失礼な事だと思うぞ。助けにきたと言うのは」

「分かってるよんなことは!!」

だけど、それでも……

「行ってこい」

「恩に着る!」

そう言って教えられた場所に駆けて行った

アカネ先輩がどうなるとは思わねえし無事としか思えねえのに全力で

…

「多いな畜生……」

折原先輩から爆弾貰ってくりゃ良かったと思いながら化け物達が通り過ぎるのを待つ
正直正面から勝てる程の量じゃねえのがまだいるってどんだけだよ……

「しかしどっちに行きゃいいんだろうな」

適当に進んでいく……と言うかこっちに導かれている気がする
それが運命ならまだしも化け物達に導かれているのが気に入らねえ

「ただ……こっちしか行けねえんだよな」

マジで誘い込まれて罠でしたとかあるんじゃねえのか……
ただ……信じるしかねえか自分を
そのまま進んでいくが……行き止まりだ

「畜生……ダメかよ」

仕方ねえと戻ろうとするが、目の前には化け物達が

「あっ……」

迂闊すぎたってより罠だったに思えるが……どっちみちどうしようもねえ
ただ諦めるなんざと隙を伺い飛びかかるも量には勝てずそのまま押されて崖から落ちた

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「痛え……」

意識は朦朧としている、いくら状態異常に耐性があっても肉体が喰らうダメージを我慢することは出来ない

「なんか思い出すな……」

今浮かんでるのは？俺どうなったんだっけ？
思い出そうとするが痛い、動きそうにもない
確かこの時は諦めちゃうんだって言われたんだっけ？

「なら諦められねえよな……」

あの時とは違って明確に今は生きる気なんだからよ
動かないはずの体を引っ叩く、そうして現へと戻る

「……っきっ君!!」

「アカネ先輩？」

痛い身体を無理やり起こす
アカネ先輩の方を見るが、傷が酷い……何があったんだ？

「何やってるの、こんな所まで落ちて来て」

「いやすみません、本当に」

「とりあえず仲間達のところ急がないと」

「いや……俺たちもうゴールしたんで」

「……は？」

凄い怖い目で睨まれている、助けて

「なんでダンジョン内にいるの？」

「アカネ先輩が心配で」

「で？このザマ？」

「返す言葉も御座いません」

本当に俺が恥晒しただけじゃねえか

「本当にしょうがないなあきっ君は」

「アカネ先輩……その怪我は？」

「ちょっと私も落ちちゃってね、そのあときっ君が落ちてくると思わなかったけど」

「大丈夫なんですか？仲間は？」

「……」

「アカネ先輩……？」

「全員死んだよ」

「!?」

予想外だった、アカネ先輩達に限ってそんな事ないと思ったが

「何があったんですか?」

「……言いたくない」

言い辛そうにしている……ただやばいモンスターがいたりは放置できねえし

「アカネ先輩……」

「恥晒しだよ」

何が?本当に何があったんだ?

「3年がイキって1年脅迫した結果、互いに全滅」

「……」

言いたくないのも分かる、と言うかまさか井之頭先輩たちのところがマシな方なのはビビった

「その結果、1人じゃ厳しいし頑張ったけどここに落ちた」

「キーは？」

「馬鹿が壊した」

「……救いようがねえ」

ただとにかくアカネ先輩が生きていて良かった……か

「登んの大変そうですが……帰りましょうか……」

「……そうだね」

「アカネ先輩？」

なんだか様子がおかしいが、どうしたんだろうか？

「きっ君ごめん」

「どうしました？」

「きっ君の事さっき散々言ったけど……さっきまで死ぬ気だった」

「は……？」

ちょっとその冗談は笑えないですよ

「何があったんですかマジで？」

「1人だけ取り残されて、落ちてこんな地底の底に1人きり、慣れてたはずなんだけどね」

「一体何が？」

「きっ君に出会ってから、寂しいと言う気持ちが強くなったし……大丈夫だったはずの孤独のせいで死にかけた」

「……」

これは俺のせいなのか？

どっちみち中嶋に頼んでここまで来たのは正解なんだが

「つまりあの日、俺を助けなかった方が良かったと？」

「……逆」

逆……？どう言う事だ？

「あの日助けたから今生きようと思ったし、多分きっ君居なかったら私はもう死んでるかも」

「なっ……何を言い出すんです？」

「どうしてだろうね、そんな気しかしなかったんだ」

そう言われても困るが……どっちみちこのままは良くない

「帰りましょう、そして休みましょうか」

「……うん」

そう言って通路を見つけ出して無事そのまま脱出した

多少の戦闘はあったがアカネ先輩やっぱ持ち物やべえ……

出た時、他の人達の歓声に紛れてありがとうを言われた気がした

――

「それじゃあ新条の帰りをもって課外授業は終了だ……帰らなかった奴多いな」

確かに数組分とはいえ多いな、脱出出来たはずなのに……どうしてだろう？

「まあいい、こっからが本番だ」

「何をやるんですか!?」

聞いてないぞそんなの、どうしろってんだ」

「いや、家に帰るまでが課外授業ですってな」

ズッコケかけた

「大分余裕そうだな」

「中嶋？」

そっちから声をかけてくるなんざ珍しいな何かあったか？

「恋人は無事だったか」

「お前っ……お前っ……!!」

「きっ君？恋人ってどう言うことかな？」

「違うんです」

いきなりなんだこいつは……〆る

とびかく弁明しつつ、殴りたい気持ちを抑えて今回のことを感謝する

死なせたくない人だからな

「とにかく、帰るみたいだぜ」

「だな」

先程までの喧嘩はあっけなく終了しそれぞれ準備をする

ただ後で殴るがな

全くアカネ先輩は違うって言ったんだがな

ただ本当に生きてて良かった

「きっ君どうしたの？」

「いやなんでもないですよ」

少しでもミスがあれば直ぐに失いかけたものだが

誤魔化しながら当たり前のようにこの人が隣にいることを嬉しく思った

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

第２４話

「よう調子はどうだ？」

「あっキル夫君」

課外授業が終わって今はデクの修行を手伝っている
約束だったし何より誰かと訓練するのはいいよなって

「ほらよ、少し休めっての」

「ありがとう」

飲み物を渡し休憩タイムに入る

さっきからぶっ通しでやってたしな

「難しい」

「ワン・フォー・オールだっけ？」

「うん、ウチに代々伝わる技なんだけど……」

「オールマイト先生には話したのか？」

「いや、何故だか話し出せなくて……」

何故だろう？本当は関わらなきゃいけない気がしたが……まあいいか
どっちみち俺が言い出すことじゃねえしな

「どんな技なんだ？」

実際俺は見たことねえから分かんねえんだけど

「岩も砕くような一撃だよ」

「すげえなそれ……」

正直デクがパワー系なんざ予想外だな

ただ、そうなるなら見てみたくはある

「どうやったらとか分かってたりすんのか？」

「友達を沢山作れば自ずと分かるって言われてたけど」

「……友達は？」

「少ないかな……」

大丈夫なんだろうか本当に？
そして自ずと見える言われたのに浮かんでないみたいだしなあ

「友達作りに行くか？」

「それはまた今度かな……」

まあ構わねえが……デク友達作り大丈夫かな？
ただ気にし過ぎもうざってぇか

「んじゃとりあえず、練習あるのみだが……本当にこれで大丈夫なのか？

「うん、父さんがこうだったって言ってたから」

「それなら大丈夫そうだが……」

「そういや、父さんってどんな人なんだ？」

「僕の父さんは……」

自分の父のことを話すとなったデクは凄い嬉しそうにしている
本当に憧れなんだな

「強い人だよ」

「強い人か」

「うん、敵を倒して味方を守る、憧れのような人だ」

「いつもそんな感じなのか？」

「うん、自分に絶対の自信を持ってて決して折れない」

「もしかしてそう言うのじゃねえか？」

「そういうのって？」

「決して折れねえ、自分が強いって思い続けるってな」

「いや……僕はそんなじゃないし」

「だからだろ、自分が強いって思わなきゃ強くなれねえよ」

俺は思ったことがあるか？まあどうでもいいや

「だいぶ難しそうだね……」

「だがやってみようぜ、心を変える気持ちでさ」

「心を入れ替える……」

デクはそうやって拳を振るうが何も変化がない

「まだだ、もっと心から！」

「うっうん……」

まだまだ迷いがあるのが目に見えて分かる
そもそも自分に自信がねえタイプだし難しいんだろうな
だから後押しする

「俺は出来るって信じてっからな!!」

心の底からそう思う、デクがここで止まるわけなんざねえってよ

「!?」

驚いたような表情をし、そのまま振るった拳が

物凄い音を立てて岩が崩れる

「え……？」

「流石じゃねえか!!」

「なんで……？」

「なんでってお前の力だろうよ!!」

理由は俺にも分からん、多分強い心を持てとかでいいのかね？

とにかく壊れたからよしだが

「やったよキル夫君!!」

「おう！次はどうだ？」

そのまま向かって行き岩を砕くが、膝をつく

「どうした!?」

「疲れちゃった……」

プレッシャーから解き放たれたせいで疲れがぐらっときたのか？
それとも体力使う技なのかもしれんが……
一先ずデクを介抱する、椅子へと座らせる

「こんな力……僕にもあったんだね……」

「おう、自信もっと持っとけ！」

「ただ……これでかっちゃんに少しは認められるかな？」

「おうおう、バシバシ認めさせてやれ！」

「そこまでは無理かな……」

うん、無理な気がしてきた、爆豪だし
アイツが認めたら天変地異が起きるわ

「とりあえず、今日はありがとうね」

「構わねえよ、ダチが強くなるんだしよ！」

「うん」

そう言ってデクは駆けて行ったが、もしかしてあれ爆豪に教えに行ってんのか？
怒鳴られなきゃいいがね……まあ分からんけど

「とりあえず言えることは……」

今日の俺の成果は０　……まあそりゃ盗むの練習ってなんだよって話だしな

――――――――――――――――――――――――――――――

イベント：父さんへの手紙

「さてどうすっか……」

自室でうんうんと唸っている

正直何を書けばいいか分からん、と言うか難易度高すぎねえか？

「拝啓父親様」

没、俺そんなんじゃないし

「父さん、漂流しましたが俺は元気です」

なんか違う、没

「難しいな……」

「どうしたの？キル夫クン？」

「ああ、狛枝か……」

「本当に頭抱えるレベルで悩んでるけど……大丈夫？」

「これなんだが……」

「キル夫クン、手紙なんか書くんだ」

「バカにしてんのか？」

「いや、感心してるかな」

「お前は」

「ボクは……書く相手居ないからさ」

「すまねえ……」

「いいよ、ただキル夫クンの親について聞きたいな」

狛枝の家族構成も知らなかったが俺も話したことなかったな
手紙このままだと進まねえし少し話すか

「俺の親父は、元海賊で今は海軍なんだけどさ」

「中々な経歴だね……」

「実際俺もそう思う」

海賊の末路にしちゃ恵まれてる方なんだよな……俺は分かろうとしなかったが

「んで、親と喧嘩して出てきたわけだ」

「わぁ……」

「正直舐めてたよ……あの頃は……」

「浜辺でよく生きてたと思うよ……」

「うん？」

「どうしたの？」

ん？ちょっと待ってくれ？

「狛枝にそのこと話してなくね？」

「まあ、気にしなくていいよ」

「そうか……」

なんか深入りすると怖い気がしてきたのでやめておこう

「それでアカネ先輩に拾われて今ここにいる」

「キル夫クンにとって父親ってどんな人なの？」

「……そうだな」

意外とそれが難しいんだよな

説明するとなると

「リスクジャンキー？」

「えぇ……？」

「何ていうか人生にスリルを求めてるって感じだった気がする」

「息子に言われるって相当じゃない？」

「相当なんだよ……」

正直生まれが海賊なのも相当だしな……
今のご時世本当によく海軍に入れたと思うよ

「で？キル夫クンは父親のこと嫌いなの？」

「いや……嫌いならそもそも手紙書かねえよ」

「行方不明なら嫌いでも書くんじゃっては思ったけど」

「嫌いじゃねえよ、人間としては最低だろうが父としては好きだよ」

「そうなんだ」

「と言うか俺も人間的に最悪だしな」

一緒に海賊やっていた以上立派な人間じゃねえし
俺は略奪側とかには入らなかったが、奪った宝箱嬉々として開けてる時点で何とも言えんわ
冒険者の足しになった以上反省はしないが

「だったら、学園のことメインで書いたらいいんじゃない？

「学園のこと？そりゃ書くつもりだがよ」

「流石に長文にしすぎたらアレだけど、今までやってきた事書くといいと思うよ」

「ん、分かった」

一先ず止まっていた筆を立てて今までのことを書き始める

本当に色々やって来たな……

「ボクはお邪魔かな？」

「いや別に構わねえけ……いねえ」

狛枝……去るの早いなおいまあいいけどよ

「まずは入学試験で……」

アカネ先輩に気絶させられた記憶しかねえ……どう言う事だ？

「それで学園に入って……狛枝ぁ!!」

最初の数日間はアイツに気負わされた気がする

「まあいい……次だ次」

そんで盗賊コースを始めて色んな奴らと会って……
アカネ先輩ともデートしたっけ……次行くときのルート考えねえと

「依頼も色々したわけだ……」

正直あの時は死にかけた、雪菜も生きてて本当によかったわ
覚えた技能も活かせるようになって来てるのを感じた

「その後か……魔術師コースを通い始めたのが」

今となっちゃ予想外のもんだ……

オルガ先輩に言われたアレは本当に禍々しいことになるんだろうなって今では思う
後々のアカネ先輩達と一緒に行った時も役に立った

「その後は気付けば中間か」

気付けば姉さんに弟扱いが固定されたな
そして……知り合ったことはなかったとは言え初めてダチの友人の死人が出た

「冒険者って仕事な以上例え養成校であっても仕方がねえんだがな」

ただこの学園がやり過ぎな気がするのは気のせいか？

「して、中間で1位を取れて……調子乗ってたのかもな」

その後のまどか先輩達とのダンジョンで痛い目にあった
師匠を、大事な人の1人を失いかけた

「ここで覚醒とか俺実は主人公だったんじゃないのか？」

明らかに悪役が使いそうな技ではあるが
とにかく、走り先輩を救出できた

「疑問に思いながらも、とにかく安心だけしてたな」

んで秋山さんとこでバイトを始めた
今でもたまに行っているが本当にアイテム知識は盗賊だし重要だしな

「こっからだよな……」

Ⅳ先輩と一緒にボンボルド先生の研究室に
もう絶対に行かねえ、そう決めてる

「ただ……藤堂を見つけられただけ良かったが」

正直俺達が行かなきゃ永遠にあの中だったろうしな
流石に研究室にしかいない人間を探すのは他に無理だし

「結局そこでも使えたんだよな……」

ピンチの時に使えるかって言うとどうか分からんが……正直まだあまり使い方がわかっていない

「そして、課外授業」

オルガ先輩達と組んで頑張った、ペースよく進んだな
他はだいぶ稼いだようだがまあそれは残念で諦めよう

「その後流出領域を教わって」

本当に色々と覚えたな、自分でも覚えはいいと思う
後で整理してみっか……

「んでこんな生活だったわけだが……」

全部書いたら怒られる気がする、つか親としてブチ切れそう……
まあ経歴を書いて良さそうなことだけ書くことにした

「まだ数ヶ月か」

本当に濃い数ヶ月だったな
海賊だった頃もだいぶ濃かったが、今は比じゃねえ
正直生きてるってこう言うことを言うんだなってレベルだ

「覚えなきゃいけねえことだらけだが……」

親が連れ戻すって言って来たらどうすっか
まあ帰る気はねえんだけどさ

「と言うか返さなきゃならねえ恩も多いしな」

どれだけもらったんだってレベル……ヒモにも見える……やべぇ

「一先ず出してから考えるか」

手紙を書き終えて出してくる、早いほうがいいしな

届くかは不安なんだけどよ……

「とりあえずは……アカネ先輩見に行くか……」

この前の課外授業で色々あったし心配だ

先輩を心配するなって言ってたけど……会いに行くくらいならいいだろ

一先ず向かうことにした

――――――――――――――――――――――――――――――

冒険の記録

岡島キル夫　男
養成校１年生

装備：
武器：ククリナイフ　隠しナイフ
盾：無し
頭：盗賊のターバン
服：レザーアーマー
足：ＥＯＤブーツ
装具：夢魔のマント
耐性：状態異常（弱）

武術傾向：ケンカ殺法
魔術傾向：時属性（制限あり）、属性、その他通常魔術（未熟）

流出領域：発掘禁止区域

特技
・鍵開け
・トラップ生成
・武器破壊
・魔罠
・ポーションヒール（劣化）
・部位破壊

養成校1年生、お宝発掘が好きで盗賊コースを専攻する
そのためか流出もお宝に関わるものとなった
友達を大事にすることを信念にしており見捨てることを嫌う
時に介入出来る理由とは……？

第２５話

「岡島殿、お願いがあるのですが」

話はバイト中の唐突な秋山さんからのお願いから始まった

「何でしょうか？」

無茶振りじゃなきゃ受ける

なんだかんだ、バイト含めて世話になりっぱなしだし

「取ってきて欲しいものがあるのですが」

「構わねえが、俺が行ったほうがいいのか？」

「ええ、ちょっと実力のある冒険者の方がいいので」

「実力はそこまでねえけど」

「いえ……ちょっと本場の冒険者に頼むと高いので」

「つまりはバイトだからと」

これはつまりアレなんでしょうか？

ブラックバイトとか言うやつ、バイトだからタダだよね？とか言うやつ

「勿論報酬はちゃんと出しますし、皆さんで来て頂けると有り難いのですが」

「そんなら冒険者の方がいいんじゃ？」

「いやぁ、実力はありますし岡島殿やその友人に払う方がいいのでは？って」

「あらまあ、嬉しいこと」

「何より……盗賊探すのは難しいのもあるんです」

「盗賊……？」

「はい、今回のエネミーは盗まないといけないので」

「盗み……？」

ちょっと待ってくれそれ俺出来ない気がする

「そもそもどう言うやつなんですか？」

「火垂です」

「蛍か……了解した」

時期も確かにこの時期か、確かに合ってるが……盗む……本当に盗むのか？

「ではお願いします！」

そう言ってバイトの時間も終わって急いで駆け出す……メンバー探さねえと

「盗賊の皆集めねえとな……俺が盗めない以上はな……」

不安に思いつつもひとまずは決意した、約束しちゃったし

ついでに盗む覚えられるといいな

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「カズマー頼みがある」

「いいぞー」

「即答!?」

内容も言わずにＯＫが出て驚いた、何で？

「ああ、まあ暇だしな」

「内容聞いてないのに!?」

「お前なら無茶なことはせんだろ」

いや……だいぶしてる気がする

主な被害者は中嶋だが……中嶋ならいいかなって

「それにだ」

「まだなんかあるのか？」

「貸しだ借りだ言うのは嫌いだがお前には借りあるしな」

「中間試験のか、ダチだし気にしてねえが」

「正直言うと俺も気にしてねえ」

マジかよ!?いやいいんだけどさ

「だからダチの頼みってことで聞くだけだしな」

「カズマ、助かる」

「いいんだよ、んで何やるんだ？」

「蛍狩り」

「……」

カズマの顔が少し怪訝そうになる

え？マジで？なんなん？

「火垂？嘘だよな？」

「そんなやばいもんなん？蛍って」

「まあやるがよ……」

少し嫌そうな顔したものの協力してくれるらしい

と言うかマジでなんなの？そのような顔される物を狩って来いと？

「っていうか俺は盗む出来るがキル夫、大丈夫なのか？」

「今回覚えるわ」

「おいおい……まあいいか」

「んで、適正人数ってどんくらいだと思う?」

「キル夫が戦闘も出来るし盗賊4人かな」

「んじゃ1年で行くか」

「……アカネ先輩誘わないでいいのか?」

「なんで?」

え?確かに頼りになるが……アカネ先輩いた方がいい?

カズマと久々にやるしよーっ1年でやるかー状態だったが

「いや……いいの？拗ねないのか？」

「どういうことだよ……」

ちょっとよく分からん、カズマさん説明お願いします

「と言うか構いすぎって怒られたばかりだし」

「予想以上にお熱じゃねえか」

「茶化すな」

カズマを叱ってメンバーを探し始める

と言ってもほぼ決まってるような気もするけど

探すか、今晩か明日の晩には行きたいしよ

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「で僕のところに来たんだ」

「ダメだったか渚?」

「いや……いいけど盗むならカズマ以下だよ?」

「いや、盗む使えるだけでもありがてえわ」

正直全員が全員予定が空いてるってわけじゃねえし、今日の晩いきなりで行けるメンツの中で盗賊いるだけでもありがてえ

「そう言えばキル夫君と一緒に冒険するの初めてだっけ」

「そういやそうだな、頼りにさせてもらうぜ」

「キル夫君いるだけで前衛は安心……かは不安だけど」

「なあカズマ本当に盗賊４でいいのか？」

「と言うかそれ以外がやばい」

「何でだ？」

「場所的に大技使えねえのよ火垂から盗むどころかアイツら全滅する」

魔術師は向かねえわけか……

「んで神官は嫌われてるってか聖気が苦手なんだあいつら、一斉に姿を消しちまう」

「つまり戦士か盗賊……」

「んで、お前がいる以上で盗賊４だ」

「分かった」

そう言うことなら聞くことにしよう

なんやかんやカズマが一番分かってる気がするし

「と言うか渚、勝手にＰＴに組んじまったが大丈夫なのか？」

「今日でしょ？大丈夫かな？」

「大丈夫かなって？」

「偶に友人に拐われるから」

「ええ……」

どんな生活してんだよ渚

「オマケに可愛い服着せてくるし」

「あぁ渚女装似合いそうだもんな」

「カズマ君やめて……」

渚の女装、そんなものもあるのか……

確かに良さそうな感じがある

「キル夫君から嫌な視線を感じるんだけど……」

「やっぱキル夫もそう思うよな！」

「……ノーコメント」

「キル夫君!?キル夫君!!」

裏切られたような悲しい目をする
ただ……うん、そう言った顔も完全に女子じゃね……っと危ねえ!?俺まで染まりかけた

「見捨てないで……」

「……っく!」

やめろ!!やめるんだ渚!!そんな目で見るんじゃない!!

「おい、アホやってねえで行くぞ」

「アホって何だよ!?」

「え?じゃあキル夫ガチだったのか?」

「いや……違うしい?」

「まあいいけどよ……後1人だろ？目星ついてるのか？」

「付いてる、と言うかアイツがいいかなとは」

暇かは分からない、ただし盗賊としては彼女が良いかなって思った

「誰？」

「正直、前衛張れるの俺だけではいいとは思うが」

「多少戦えるやつか？」

「いや、ちょっと特殊な奴だ」

そう言って盗賊コースの教室へと向かった

――――――――――――――――――――――――――――――

「沙都子、ちょっといいか？」

「いや？キル夫さんどうしました？」

同級生に声を掛ける、こいつが一番適任かなと

「いや、今日暇か？と」

「デートのお誘いですの？」

なんでそうなるんだ？よく分からん

いや……俺の言い方が悪かったか

「いや流石に違うが」

「まあ、そうでしょうね」

分かってたならやめい!!
なんで妙に悲しい気分にならなきゃならねえんだ……

「で、今日ですわね構いませんことよ」

「唐突だがいいのか?」

「ええ、ちょうど試したいものがありましたの」

そうこれだ、これがあるから彼女を誘った
トラップ特化、正直敵に回したくないレベルだ

「それで、何予定ですの?」

「蛍だ」

「火垂……正気ですの？」

何で皆そんな反応するんだ!?
おい、大丈夫なのかよ

「キル夫がいるし大丈夫だろ」

「確かに……大丈夫そうですわね」

「ん？」

「どうしました？」

いや、確か記憶が正しければ……

「沙都子がなんで俺の実力知ってるんだって？」

「組んだことないのか？」

「そもそも私は盗賊コース以外受けませんので」

「そうえば北条さんの実力も盗賊でしか知らないね」

「渚もそうじゃね？」

「まあそうだけどさ、依頼もほとんど受けてないみたいだし試験でチームになった人くらいしか知らないんじゃ？」

「私の実力が不安って事ですの？」

「いや……逆だ、なんで俺の実力分かるのかなと」

「お前、盗賊コースでも暴れてるし分かるだろ」

「そんなに暴れてるかねえ……」

雪菜とかとバトったり色々やってるのは確かだが……そんなかあ？

「ねぇねぇから聞きましたので」

「え？姉いんのか？」

「居ますわよ」

居たのか、正直予想外だ

確かにコースが同じなだけで話して無かったが

「誰だ……？」

「憂姉様ですが、そんな似てませんか？」

「……」

いや誰？マジで誰？初めて聞いたんだけど
誰かの名前聞き忘れたかな？

「ねぇねぇ褒めてましたわよ、盗賊なのにバリバリ戦えてるって」

「……」

いや、ごめんなさい分かりません
沙都子にゃ悪いんだが……全く持って分かりません！

「課外授業の件褒めてましたわ、確かに２位は優秀だったの分かりますわ」

「……!!ウィッチ先輩か!!」

なるほど！確かに似てる！
憂って名前に心当たりないのもそりゃそうだわ

「誰ですのそれ？」

「多分……沙都子の姉さん……」

「……あー」

理解されたようだ、と言うかやっぱ心当たりあるのな

「ねぇねぇ、そう言う傾向ありますわね」

「ダロウナー」

なんかそう言う傾向あるとは思ったが……これ以上言うのはやめておくか

「と言うわけでねぇねぇのお礼もありましたしお手伝いさせていただきますの」

「助かる」

こうしてメンバーは決まった、正直もっと増やしてよくね？って思うんだが……いいか

「しかし盗むか……」

「私も使えますがどうかしまして？」

「俺が出来ねえ」

「練習しながらですわね」

発掘禁止区域も成長出来りゃいいが……今回は関係なさそうだなとりあえずまずは盗むを頑張りますか

―――――――――――――――――――――――――――――――

「ここでいいのか？」

洞窟？蛍なら池とかそう言った方向に居ると思ったが

「この奥に居る、つーかキル夫聞いてなかったのかよ」

「ああ、蛍とだけ聞いたしよ」

綺麗な水辺に生息するって父さんから聞いてたが、地底湖でもあるのか？

「気を付けろよ、足場が悪いしな」

「このくらいなら問題ありませんの」

そう言って軽々と越えていく
しかしおかしいな

「敵がいねえ……」

洞窟に入ってからモンスターに一度もあっていない、こんなことがあり得るのか？

「ここのダンジョン火垂がいるからモンスターは生息しねえんだ」

「んじゃ戦闘役の俺すら必要なかったんじゃ？」

と言うか虫網とか忘れた……盗むするらしいし多分大丈夫なのだろうけど

「いや、必要だ」

「ならいいが……」

役立たずでしたーは完全してもらいたいからな
特に今回俺が誘ったのに役に立ちませんでしたはまずいだろ
ただ……真面目に敵がいねえ

「なんだキル夫？」

「このダンジョンお宝とかあんの？」

「あるんじゃねえのか？」

「なら試してみっか……」

「何をしますの？」

「いやちょっと離れててくれ」

「うん？暗いですのでお気を付けて」

そう言って全員が離れて行く多分、まだ巻き込むだろうからな

「さて、行くか」

領域を作り出す
ｋｅｅｐ　ｏｕｔ、相変わらずこれが展開されるんだが……分かりやすいが

「なんだアレ？」

カズマ達が遠くで戸惑ってるように見える、確かに分からねえわな

「ただ……これでどうにかなるかね……」

なんか光ってるし……掘ってみりゃいいか？
ひとまず掘ってみると宝箱が……

「マジか……宝箱出てくるのか？」

取ってみると体が軽くなる……と言うか強化された感覚がある
中も開けて見るか……
１ｄ５：３

「なんだこの鉱石？」

謎の鉱石っぽいのが入っている、なんだろうな

「どうしたキル夫？」

「おいカズマ、入ってくんな!?」

「え……？」

唐突にカズマはふらつく、慌てて領域を閉じる

「なんだ今のは?」

「流出領域って言うらしい」

「聞いたことはあるけど……なんで使えるんだよ?」

「教わったんだ」

「マジかよ」

そりゃ驚くわな、そしてこの鉱物誰か分かるだろうか?

「そうだ、これ分かるか?」

「いや分かんねえな」

沙都子や渚も分からないっぽいな、なんだろう？

「4頭分すっか」

「いいの？キル夫君が集めた気がするけど？」

「ああ、分けようぜ」

どうせ一人じゃ使い切れねえだろうし問題ないな
先輩達が知ってりゃいいけど

「とにかく行こうぜ、火垂が消えちまうかもしれねえ」

「そういやそもそもそのために夜に来たんだもんな、すまねえ」

「大丈夫だよこのくらい、行こうか」

皆と一緒に奥地へと進んでいく
そして広い場所に出た

――

「なんか声聞こえねえか？」

「そりゃまあそうだろうよ」

「と言うか水辺……？」

「案の定勘違いしてるよな」

勘違い？なんのことだ？

「皆途中で察しましたが黙ってましたの」

「なんで？」

「直接見た方が面白いのでと思いまして」

どう言うことでしょうか？
蛍が何かおかしいのでしょうか？

「目の前でしてるのは……合戦？」

マジで何が起きてるんだ？
鎧武者？マジでどう言うこと？

「源氏いいいいいい、今日こそお前らの末路じゃあああ」

「平家を討ち取れえええええ！」

「……？」

なんだアレ？

「何戸惑ってんだ？」

「蛍は？」

「虫じゃねえぞ？」

「え？」

虫じゃ無い……どう言うことなんだ？

「ゲンジとヘイケその二体の亡霊がアレ……火垂だ」

「……亡霊かあ」

「アイツらの炎を盗む……それが今回の目的だ」

「色々と無茶振り過ぎねえか!?」

確かに少し燃えてるけど盗めるもんなのか？

「盗める、と言うか数必要なんだろうからやってこうぜ」

「沙都子は？」

「罠張ってるぞ。相当張ったっぽいけど」

「早いなおい」

むしろその方が助かるが

「んじゃキル夫頑張れよ！」

「……どう言うことだ？」

「いや、アイツら攻めてきたら戦ってくれってな」

「多くね？」

「強くは無いし、霊体だからダメージ低いしな」

「盗む練習は……」

「やりながらやんだよ」

「キツくね？」

「頑張ってねキル夫君」

これは……酷い仕打ちを見た……沙都子がいただけマシだろう……
辛いけど頑張るか……

「ゲンジイイイイイイイ」

「うるせえええええええええ！」

「ヘイケエエエエエエ!!」

「こっちくんじゃねえええええええ」

逃げながら騒ぐ、目的までしんどいなあ

ＢＯＳＳ：火垂
クリア条件：将魂の確保

―――――――――――――――――――――――――――――――

続

第25話②

「なあカズマ」

「今盗んでる最中だから静かにな」

「……」

隙を見て盗むチャンスなんて訪れねえよ!!
なんかアイツら全員こっちきてるよ!?ゲンジとヘイケ仲良いよ!?
攻撃力は確かに高くはねえんだが数が数で痛いんだけど!?

「キル夫さん、危ないですわ」

「おっと助かる」

つい押されかけて沙都子のトラップの方へ行きかける
その後すぐに火垂達がトラップを踏み倒れる
……いやあ、助かるわマジで

「……」

アイツらどれだけ盗めたんだ？
もう終わりで大丈夫か？

「様子はどうだ……えっと渚」

カズマは話せなそうだし渚に聞く
ただ……あまり良い顔してねえな……

「０だね……」

「0!?」

「カズマ君の方もそうだろうね……盗むが正直不安だ」

「え？」

カズマ……嘘だろ……？

いや頑張ってるの見てるんだが……それでも0なの？

「ただでさえ盗みにくい相手だしレアアイテムだからね」

「んなアホな……」

それを量集めてこいだったか……辛いな

後そこの源平こっちじゃなくて互いに争えや!!

「討ちとれえええええええええ!!」

「敵だあああああああ」

「だからうっせえええええええ!!」

敵を蹴っ飛ばす……霊体なのに何故か物理食らうんだよな……

ただ……多くて嫌になるわ

「回復してえ……神官……」

「神官連れて来れないのは我慢してくださいまし」

「……ポーション使うほどではねえが……プロテクト欲しい」

「と言うかキル夫さんも盗むを……」

「隙あるかあああああ!?」

また敵を押し返す、来んな来んな!!
盗み方は分かるが……盗めた試しがねえ

それでも周りがギャンギャン煩いのでなんとか盗むを試みる

１ｄ１００：２６

「……無理!!」

「本当にやりましたの？」

「やったんだよおおお、でも無理だあああああ」

謎の奇声を上げながらラリアットをする
刀持ってるやつにバカじゃねえのっては思うがこれでも何故か勝てる、敵の方が圧倒

的に多いのに
　マジで戦闘は確かに俺だけで十分だが
「このままじゃキリがねえか？」
　いや敵が居なくなるよ目的失敗だし出続けるのはいいんだが……いいんだが多いな
　一切合切減る気しねえし……
「これ逃げれんのか？」
「それは余裕だけど」
「マジで……？」
　渚が優秀だからか？この群れから逃げれると思えねえんだけど
「いや、逃げるのは楽……そうだね……一度体勢を整えようか」

「カズマ一度引くよ」

「マジか？まあ……確かにこのままじゃ不調か」

それだけ言うとそれぞれが互いに距離を取る

何する気だ？

「ヘイケだあああああ!!近くまで来てる!!」

「ゲンジが来やがったあああああ!!」

……は？

いやいやいやなんだそれ？

「ゲンジイイイイイ!?そこかあああ!!」

「憎きヘイケエエエエエエエ!!」

……いいんだ

「行くぞ」

「……おう」

正直……なんだこれ？いやマジで

―――――――――――――――――――――――――――――――

「第一回、火垂どうしようか会議ー！」

「……マジでどうするんだ？」

と言うか元気だなカズマ

俺にゃそんな元気もうねえよ……

「キル夫、きついか？」

「針にチクチクされるような感じだ」

「なら大丈夫か」

「大丈夫ではねえが……」

「今はそれよりも問題がな……」

そうだよな……マジでどうすっか？

盗む……成功しないよなあ

「やっぱ先輩必要だったんじゃ？」

「いやそのな……」

カズマが気まずそうだがなんだ……？
マジでその通りだとか言ったらキレるぞ？

「カズマ君なんだよね……」

「何がだ渚？」

「学園で一番盗むが上手いの……」

「……は？」

いやいやいや、カズマお前1年だよな!?
どう言うことだよ……

「俺のスキルが関係あるんだが……」

「と言うかカズマが失敗しまくるってことは……？」

「他じゃまず無理……やっぱシーフ職ってガチなんだなと」

「うおおおおい!?」

納得してんじゃねえええ!!

と言うかカズマでも無理じゃあどうするんだよ……

「悪いが挑戦し続けるしかねえ……」

「マジか……」

耐えれはするが……1個じゃないはずなんだよなあ目的……どうすっか

「盗む確率上がるスキルとかねえの？」

「ねえ」

「ありそうなもんだが……」

ねえのかそんなスキル

「学園じゃ教えねえし、そう言うスキル持ち学園に入れねえからだろ」

「マジで？」

なんでそんな優秀な人物入れねえんだ？普通に役に立たね？

「学園としても犯罪者出したくないんでしょ」

「あー……」

確かに盗む特化のやつとか入れ辛いんだろうな……この学園が責任取ってくれると思えねえし……

ただ……それはそれで疑問がある

「カズマは？」

「学園入るまでは幸運がウリだったしな俺」

「そううやそうか」

ただ今は違くねえか？

「追い出されねえの？」

「金払ってる善良な生徒追い出したら問題だろ」

「……善良？」

少なくとも悪いことはしてねえがカズマが善良かって言われると悩む

「とにかく、スティールは目当ての物盗める確率が低いしこのまま盗むを続けるしかねえ……」

「そう言えば」

「何かあるか沙都子!?」

「いえその……」

「言いにくいことなのか?言ってくれりゃ嬉しいんだが……」

まあ無理強いは出来ねえが……出来りゃ教えて欲しいもんだ

「キル夫さんのさっきの技はどうなんですの?」

「さっきの？」

「ほらさっきの黄色いテープの」

「あー……」

「そうじゃねえか、そういやお前が持ってんじゃねえか!!」

「いや……な？盗むに影響するか分かんねえ」

「それでもやってみる価値あるだろ？」

「かなり不味い……」

「調子の不良か？それくらいだったら耐えるが……」

「いや……ちょっとちげえな」

と言うかそれは不味いっての

「前先輩と一緒に教わった時……そのエリアで落ちてる物拾っただけで大ダメージ受けた」

「マジかよ……」

「盗むも同様だろうな……俺のエリア内での物を盗むんだから」

「仲間にも喰らうのか……」

「まだ覚えたてで調整ができねえ」

「じゃあダメなのか」

「すまねえな……」

どうしようもねえのか……やっぱ俺が突かれながら耐久を……

「あのさ、僕ならどうにか出来るかも」

「渚？」

「その技どうにか出来るかも」

「何!?」

渚、お前どうしちゃったんだよ

「僕は暗殺特化の通り見えなくすることが出来るんだ」

「言っていいのかよそれ……？」

「うんいいよ、それでミスディレクションって呼んでるんだけど」

「なんだか私だけ置いてかれていません？」

技術が劣っているんじゃないかと沙都子は不安そうだが……このトラップ恐ろしいからな？

「どうやら味方のバフを受けないみたいなんだよね……ミスディレクション中は……」

「それは何というか……」

残念なのか？敵のデバフ受けないって意味ではいいのか？

「試してもらっていいかい？」

「失敗すりゃ辛いぞ？」

「いいよ、こういう時は役に立たないとね」

……役に普通に立ってると思うが
とにかくやるか

「おい、二人とも離れてろ」

その言葉に2人は距離を取る
そして発動させる

「渚、気を付けろよ」

「大丈夫」

発掘禁止区域、その言葉と共にまた俺の探索エリアが完成する
中に渚の姿は見えねえ、流石だな

「マジで中にいんのかねえ……」

流石に全く見えねえから不安なんだが……傷ついて動けないとかだったら嫌だし

「……おっと」

すぐにその心配は消えた、ククリが消えた盗まれ……

「おい待て渚!?そいつはやめてくれ!!

そいつは本気で大切な物だから!!いや場所的に一番盗みやすいのは分かるけどよ

エリア外からごめんと渚が顔を出す、え?どうやったんだ?

「盗ってから外に出たよ、中のままだと痛い目に合うかもだったし」

「なるほど、確かにそれで正解だと思うぜ」

多分痛い目見てたと思う、そうならなくてよかったわ

「とにかく、渚のミスディレクションは通用すると」

「だったらこれで行くしかねえか」

「んじゃ、俺と渚で盗めるか試すしかねえな」

「私は引き続きトラップを使いますの」

「ああ、沙都子助かるわ」

「俺は何すりゃいいんだ……？」

カズマ……

「……」

「おい、キル夫まさか……!?」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「キル夫おおおおおお!?」

「頑張れカズマ！」

カズマを囮にして領域を作る
カズマは入れないかつ敵を入れるように誘導する……更には敵との攻撃を避けなければいけない
あれ？俺よりきついんじゃ？

「早くやれやキル夫おおおおお!!」

盗む準備を開始する、渚も俺も成功してくれ……

「キル夫君、成功したよ！」

「マジか!?」

そんな簡単な物なのｋ　……

「渚!?」

「……あぐ」

成功したのは嬉しいが解くんじゃねえ……下手すりゃ死ぬぞ……

「ともかく……俺も盗むしかねえ!!」

ただ……全然決まらねえ……渚は成功しているのに何故？

「キル夫、ちげぇ……盗み方は話しただろ!!」

「そうは言っても……」

「うるせえ!!何回でもやれ!!」

カズマに怒られるまま何回も繰り返す

そうして２０回程やった時、やっと目当ての物を盗み出せた

「やった……!!」

「馬鹿野郎!!今回は一個で終わりじゃねえだろ!!」

そういやそうだった……でもいいじゃん……褒めてくれてもよ

「まあやって行きますよっと!!」

結論から言えば発掘禁止区域はアイテムの発掘率が上がってたのは分かったが……
敵も持ち物所持が増加するのか盗める確率が上がっていた
見えない間に渚が相当盗んだらしく目標には十分足りるだろうと引くことにした

「こんなもんで大丈夫だろ」

「そりゃそうだがよ……」

「どうしたカズマ?」

「最初から使えや!!行く前に見せびらかしやがって!!」

「すまねえな、まさか使えるとは……」

「改めて考えると凄い能力だね……」

「戦闘で使えるかと言うと難しいですけどね」

「うっ……」

そんな言い方しなくたっていいじゃん……

確かに戦闘中現状は味方へのデバフはまずいんだけど

「まあそこはおいおい特訓だな」

「いいのかカズマ？」

「俺達盗賊な以上お宝取れる確率が上がるに越したことはねえんだよ」

「そう言われると助かる」

「んじゃ帰ろうぜ、明日に響きそうだしよ」

「了解、んで報酬だが」

「んー、いいや今度飯でも奢ってくれよ」

「いやいや……そう言うわけには」

「僕達も……色々と知れたしねと言うかこの宝箱の中身だけで元取れそうだし」

「……なんだか分からんのに？」

「ええ、ある程度の鉱石は知識がありますので……貴重なのは分かりますわ」

「それならいいんだが……」

正直俺だけ報酬貰うのはどうなんだろうか？

俺だって一緒なわけだし

「だから飯奢れ、以上」

「楽しみにしてるね」

学園まで戻ってきてその言葉を残して分かれる……まあ夜も夜だが流石に渡してだけ渡しに行くか

――――――――――――――――――――――――――――――――

「秋山さんいるかい？」

「うぇ!?岡島殿!?」

店の中から驚いたような声が聞こえる

そうして少しドタバタしているようだ

「しょっ少々お待ち下さい」

「時間悪かったか?」

「いえ……問題ありません」

少し経った後秋山さんが中から出てくる
汗が出てることから本当にドタバタさせたようだが……

「本当に大丈夫だったのか?」

「はい……寝るつもりでしたが急に訪ねてくると思わなかったので」

「そりゃ悪いことをした……」

「いえ、問題ありませんそれで火垂のことですよね?」

「ああ、そうだが」

「場所とかは地図渡します、出来るだけ早ければ有難いですが無理はしないように」

「え？」

「どうしました？」

「終わったけど？」

「はい？」

あれ？すぐにやって来いって事じゃなかったのか？
終わらせてきちゃったけど……

「場所すら教えた記憶なかったんですが……」

「仲間に聞いた」

「はあ……」

驚いている秋山さんに目的の品を渡す

「確かに……と言うかこんなにたくさん」

「多かったか？」

「いえ……助かります」

ならよかった多過ぎですとか言われたらどうしようかと

「では報酬を……確か４人でしたよね？」

「いや……一人分でいい」

「どうしました？」

「他の奴らがいらんらしくて」

「えぇ……そう言うの良くないんですけど……」

そんな事俺に言われても困る

「なら岡島殿にですか……ならこうしましょう」

秋山さんは店に戻り何かを取ってくる

「これです」

ポケット？ポシェット？よく分からんものを渡されたが

「なんだこりゃ？店の商品ではねえような」

「はい、前から取っておいたものです岡島殿に渡そうかなと」

「俺に？」

「はい、これはポシェットシールドと言います」

初めて聞く名前だな、盾なんだろうか？

「普段はバッグの要領で使えますが、ここを引くとシールドになります！」

「便利だが……どうするかこれ？」

「腕に巻くのがよろしいかと」

「ああ、確かにそれが良さそうだ」

普段はバッグとして使えて危険な時に盾になる、便利だなこれ

「使っても中のものは消えないようなので安心してくださいだそうです」

「助かる、シールドは盗賊に不向きで付けなかったがこれなら軽いし使えそうだ」

「それならよかったです」

「あいつらにもお礼しねえとな」

高い物奢らなきゃならなそうだが

「とにかく、使わせてもらいますね！」

「こんな物だけでいいのか不安ですが」

「金よりありがたいんで」

「それなら……良かったです」

「また何かあったら呼んでくださいな」

「はい、岡島殿頼りにさせていただきますね！」

夜も遅いのでいい加減居座っても悪いだけだ、急いで帰る
と言うかカズマが言ってたが明日に響く……盗賊コース必修科目あんのに……

「と言うかそうだよ、なんで明日盗賊コース必修科目あんのにみんな来てくれたんだ？」

そっちのが大事だろうと仕方なさそうに呟く
助かったのは事実なんだがな

「明日くらい余裕だってんかな皆優秀だし……とにかく、感謝だけはしねえとな」

少年は少しだけズレていた
彼らが来てくれた理由を
自分が育ててきた絆が理由を言うことを
ただ知らなくとも、それは確かにあるのだ

第26話

―――――――――――――――――――――――――――――

「んじゃ盗賊コースの授業始めんぞ」

いつも通り長谷川先生の授業が始まる
必修のはずだったが何をやるんだ？

「えー……なんか先輩達にまだ覚えてねえのかって言われる奴が多発してるようなんで……本日はトラップについてやりたいと思います」

「それって……既に教わってる奴らもいるんじゃ……」

俺も走り先輩に色々教わってるし
沙都子に至っては随一クラスなんだが……

「えーまあそうなんだよねえ、覚えちゃってる人もいるよねえ、でも必修ってことでやれ」

「えぇ……」

俺もまだ思えようあるけどよお……
それでもなんつーか別のことしてえ気がする

「ちゃんとやるように」

「へいへい」

しかし誰と組んだもんか
俺は教えられる程罠に強くないし

「キル夫さんよろしいかしら？」

「え？」

予想外の人物から声をかけられる

「あら？どうしまして？」

「沙都子はむしろ教える側だと思ったんだが……」

「いえ……折角の罠の授業で自分が勉強にならないはあんまりですしやれることやりたいですもの」

「そう言われるとそうか……」

「でもいいのか……？」

正直トラップに関しては上手い方じゃねえし他にもいい奴いるんじゃ？

「いえ、キル夫さんの方がいいので」

「なして？」

「正直前衛張れる人間盗賊コース多くないので、前衛側からの意見欲しいんですの」

「あー……」

そう言う考え方があるか、確かにそりゃそうだ

「それで、始める前に何かこうした方がいいってあります？」

「あー前衛としてはだな……」

一番思うことそりゃこれしかねえ

「踏みたくねえ」

「本末転倒じゃなありません?」

「罠のヤバさ分かるしな……踏まなくなる方法を考えてえ」

「分かりました、それを目標に今回はやりましょう」

「助かる」

実際は無理だろうと思うけどそれでも少しはマシになりゃいいなと
或いは沙都子なら可能なんじゃねえの?って思いながら
一先ずは構築から考えることにしてみた

――――――――――――――――――――――――――――――――

「そもそもどう言ったものを作ればいいか予想つくのか?」

「正直難しいですわ」

　難しいのか……いやそりゃそうだけど

「踏みにくいとかならありますが……」

「それは敵もだろ？」

「えぇ……」

　流石にそいつじゃ意味がねえ、味方が被害に遭わないようにする必要であって、そもそも踏まないじゃ罠の意味がねえ

「やっぱ無謀か？」

「いえ、諦める気はありませんの」

かえって彼女の足を引っ張ってないか不安になるが……

「いいのかよ本当に……」

「ええ、この件については常々どうにかしたいとも思ってましたし」

そうは言ってもなあ……出来るかは別問題だ

まず方法を考えるしかねえか

「動くってのはどうだ？」

「動く罠ですか？」

「ああ、そうすりゃ踏む可能性減るだろ」

それに誘導できりゃ相手に踏ませる事も出来るだろうしそれでいいだろうかと

「問題があります」

「どうした？」

そりゃすんなり決まると思ってなかったがなんかあるのか？

「罠として使わない方が都合いいです」

「あー……」

そう言われるとそうだな、罠として使う理由がねえ、そして動き回って目立つし罠の意味がマジでねえか……

「と言うか動き出す爆弾な時点で物凄いものになりますわ」

「確かにそうか」

金の件は気にして無いとはいえ色々と無駄がありすぎる

「んじゃ……敵陣にぶん投げて作動する奴とか」

「それ誰か踏みますの？」

「うぐ……」

少なくとも俺は踏まねえな……
なんなら撃ち落とされる気がする

「なっ!!なら!!あらかじめ罠を仕掛けておくとか!!」

「それは普段する事であって今回の事は関係ないですわよ」

「そうだな……」

それは今回やる事じゃねえわ
罠だって踏まなきゃ起動しないからずっと持つしよ

「さて……」

全く浮かばねえ、そもそも一方的なんざ無理なのかねえ……
戦いにおいて一方的と言うのは戦力差が必要だしな
……そう言う時は罠使わねえもんな、難しいか？

「んじゃ……なあ……」

「おうおうどうした？」

「長谷川先生？」

云々唸っていると先生が声をかけてくる

いつものせいで頼りになるのか不安なんだが

「長谷川先生ですか……」

「なんでみんなして不満ありげなの？おじさん泣くよ？」

どうでもいい

まあそう言ったら泣き出すだろうな……面倒くせえ……

「罠について考えてるんすよ」

「え？北条なら余裕じゃねえか？」

「だから応用みたいなもんす」

「応用ねえ」

少し驚いた顔をしている
え？そんなおかしいか？

「一応今日は教えるの初のはずなんだがね」

「別に構いませんでしょう？」

「まあな、ただそんな悩むレベルのことやってんのか？」

「ええ、少し難しいもので」

「どれ、教えてみろ」

ひとまず長谷川先生に話してみる確かに先生ならどうにかなると思うが

「難しいな……」

「マジ？」

長谷川先生が予想外の反応をする

え？マジで？

「ああマジだ」

「長谷川先生でも出来ねえなんて難易度高すぎやせん？」

「いや、出来るっちゃ出来るが……」

「ああ可能なんですね」

「割に合わねえ」

「やっぱです？」

「迷彩とかすりゃそりゃ一方的に使えるが割に合わねえ」

「迷彩か……」

確かに迷彩で場所さえ分かりゃ一方的だ
ただそんなダメなのか？

「なんでって顔してんな？」

「迷彩良さそうですが」

「どこに仕掛けるか分かんねえのにあらかじめ明細施したり、仕掛けたりすんのか？」

「え？」

「え？じゃねえだろ？まさかダンジョンでのんびりやりますとか言い出すわけじゃねえだろうな？」

「流石にそりゃな……」

ダンジョンでやるなんざ馬鹿げてる
時間無駄にかけてどうすんだ？ってなる

「じゃあダンジョン前にやる？どんな条件か分かんねえのに？」

「……そこで使わなきゃですし、必要ないのにかけるのは危険ですね」

「そう言うこった、挙げ句の果てに罠を無駄にしちゃ割に合わねえだろ？」

確かにその通りだ……場所ごとに作った罠なんざ持ち歩く事も出来ねえしやっぱり先に作るわけにゃいかねえ

「他にも方法あるだろうが、浮かぶのは難しいと思うぜ？」

「……」

ここまで正論を言われるとどうしようもねえしかも困ることに事実だし……

「結局何にするか知らねえが頑張れよっと」

そう言って長谷川先生は他の生徒を見に行く

「キル夫さん」

「ああ、やめるか……」

まだまだ罠ペーペーだしな……徐々にやり方覚えながら目指すしかなさそうだ

「続けますわよ」

「……は？」

沙都子何を？

いやいやいやいや!?

「まさかキル夫さんやめるとでも？」

「むしろ続けるのか？」

「無理と言われて諦める程利口ではありませんの」

「分かったが……」

まあ……出来ようが出来ないがやることが重要か

「ではまた構想を練りましょう」

もうそろそろ終了時間なんだが……大丈夫なのだろうか……？

案の定時間は終わった

ただ元から罠は出来るし俺達は普通に点を貰った

―――――――――――――――――――――――――

「んじゃ終わりだ、各自続けるのはいいが教室は爆破すんなよ？」

長谷川先生は早々に帰ってくる……本気であの人やる気ねぇな……

「んじゃ沙都子」

「キル夫さん、私は続けますがどうします？」

マジかよ……元から無理だと思ってたし諦める気だったんだが

まぁ……時間はあるか

「手伝うぜ」

「あら？意外ですわね」

「いいだろ別に」

帰ると思ってたのかね？
まあ帰る気だったしそうか

「ただやること明確じゃなきゃどうしようもねえと思うぞ？」

「それは分かってますが……」

俺達が手詰まってるのは確かだし……
いや手詰まってるどころか何も浮かんでねえけど

「だからってこれでは……」

沙都子は何やら焦ってるようだが何が……

「おいーっす！」

「!?」

唐突に後ろから声をかけられてビビるいきなりなんなんだ!?

慌てて後ろを向くが……

「ウィッチ先輩……？」

「あらこの前ぶりですわね」

「どうしてここに？」

「少し妹に会いに」

そうして沙都子の方を向く

沙都子が気まずそうな顔をしてるんだが……

「ねぇねぇ……」

「沙都子、どうですか？」

「いえ……少し……」

一体何が……？

聞いていいんだろうか？いやまずそうか？

「ああごめんなさい、唐突で置いてかれてますわね」

「まあ……」

流石にいきなり理解するのは無理だしな……
一体何がって話だし

「いえ、今日沙都子が」

「沙都子が……？」

何かやらかした？

「今日絶対に授業で成果見せてやるって張り切っていましたので」

「あー……」

だから諦めなかったのか
……ここで終わりにしちゃ成果なしだし……と言うかよっぽど姉さんのこと大好きなのな沙都子

「うっうるさいですわね!!」

「いや……別に構いやしねえが……」

「それで、この後どうするんですの？」

「ひとまず罠作り再開するが……」

「罠ですの？」

「何か？」

「いえ、沙都子が罠で苦労するなんて珍しいと思ったので」

「そりゃそうですねえ……」

沙都子の罠は自慢出来るレベルだし苦労するなんざ普通の人は思わねえな

「味方が踏まない罠作りを考えているんです」

「……踏まない罠？」

ウィッチ先輩が少し困惑している
味方を避けるってやっぱり難易度高いんだろうか？

「沙都子がそんなもので苦労してるんですの？」

「そんなものって……」

「ねぇねぇ……難しいんですわよ？」

「そうなんです？」

罠作ったことないからって……いくらなんでも酷くないっすかあ!?良い罠が簡単にできりゃ苦労しないって!!

「そうですわねえ……」

ウィッチ先輩が考え出す
いや浮かぶすらしねえんだよな

「認識とかは出来ないんですの？」

「罠に……？」

罠に認識……え？どう言うこと？

「仲間だから踏んでも許してーみたいな……？」

「……？」

「ちょっと面白いですわねそれ」

「ちょっと沙都子さん?」

何を言い出すんでしょう?ワタクシ困りますわ

「キル夫さん、それを目指しましょう」

「ウィッチ先輩……なんてことを……」

なんてことをしてくれたんだあああああ!?
と言うかどうしろってんだ!!

「頑張れば出来るでしょう?」

「無茶言わないでくださいな」

味方を認識ってどう言うことだよ!!

「試しに外でやってみましょうか！」

「罠の構築も出来てないのに!?」

すっごい嫌な予感がするんだが……残念ながら俺も巻き込まれた

――――――――――――――――――――――――――――――――

「では罠が完成しましたが」

「普通の罠じゃん!?」

なんの見栄えもないただの罠なんすけど……え？どうする気？

「ではこれで試しますが……」

「ただの罠だろ!?」

しかもそれ火薬入れてたじゃん!?
なんで試しなのにそんなことするの!?

「では行きますわよ」

「沙都子!?」

なんの躊躇いもなく沙都子が踏む、ウィッチ先輩も止めましょうよ……

「あれ?」

「え?」

罠が作動しない、流石に気をつけていた……
いや沙都子の顔を見るにそんなことはないんだが……

「沙都子どうした？」

「いえ……私がミスするなんて……」

「ミスしたのか？」

「したつもりは無いんですけどね……」

「色々わけが分からん……」

「ちょっとキル夫さん踏んでくれません？」

「え？嫌なんだけど……」

沙都子の言い分では何かをミスったらしいが嫌だよ踏みたくねえよ……

「なら妹のために先輩命令を」

「……」

断ることは出来るが……まあいいか手伝う言っちまったし
と言うことで爆発しないでくれと踏むが……

「ぎゃあああああ!!」

罠が爆発する……痛え……助けて……
ＥＯＤあるからって無事じゃねえんだぞ……

「なんでさっきは罠が発動しませんでしたの？」

「分かりませんわ、もう一度試しましょうか」

「分かりましたの！」

沙都子はもう一度罠を張る、そうして自分で踏む

「発動しませんわ」

「そのようですわね、ただまだ分かりませんけど」

「……かふ」

先程の痛みにまだ体が震えている
なんで火薬入れてんだよ……

「キル夫さーん、また踏んでくれません？」

「……」

やなこった……このまま倒れててやる
と言うか絶対今回も火薬入れてんだろ

「ねぇねぇ、キル夫さんが戦闘不能です」

「分かりましたわ」

ああウィッチ先輩が代わりに踏むのかよかっ……
あれ？引き摺られてね？

「ほいっと」

「なん……」

気付けば俺は罠の方へと投げられていて

どっかあああああああん

「おぅふ……」

また華麗に吹き飛んだ
いやマジで……なんなん？

「これ？どうなってるんでしょうね？

「設置者だけが被害受けないのでしょうか？

何やら話しているようだが俺にはもう聞こえねえ……と言うか……なんで2発目も俺？

「それは無いですわね、いつもの罠でそんなこと無かったのですし」

「では何が……？」

と言うか……こんな簡単に出来るなら授業中悩んだ意味って……？

「それではもうちょっと試してみましょうか！」

沙都子達がまた再開し始めるが……これもしかして俺がまた巻き込まれる……逃げなきゃ……

「逃がしませんわ」

「ひぇっ……」

そのまま地獄へと巻き込まれた……俺が迂闊だったのかこれ？

そのまま地獄を味わった

――――――――――――――――――――――――

「キル夫!?何無茶してるんだ!?」

「姉さん……俺のせいじゃないです」

その後姉さんに発見されて治療された……マジで死にかけたんじゃねえの？

「災難だったな……」

「まあ……無駄では無かったんで」

結論から言うと成功したし理論が分かった
俺達がこの前持って帰ってきた鉱石、これを持ってると罠が発動しないらしい
俺は置いてきたから爆発した

「頑張ったんだな……流石は私の弟だ！」

「ははは……」

罠に対する情熱はすげえが……暫く関わりたくねえなあ……

「キル夫にも出来そうか？」

「ん？」

「いや、一緒にやったんだからキル夫も手に入れなきゃ悲しいだろ？」

「あー……」

確かにゲットはしたのか……？
と言うか出来るが正しいか

「出来るようにはなった」

「凄いな！今度私も見てみたいな」

姉さんに褒められると嬉しくなるな
ただ……鉱石どうすっかな……

「条件があるんですけどね……」

「ん？なんだ？言ってみろ！」

「鉱石……加工出来ません？」

「鉱石？」

「はい、ちょいと関係してましてね」

使えるのが分かったら加工して何かで持っておきたい、装備品とかにして冒険中仲間に配るとか
そうすりゃいいし

「ああ、知ってはいるが」

「教えてもらってもいいですか？」

「ああ、構わないが……」

少しだけ姉さんは考えるようにした後

「明日暇か？」

「まあ必修は今日でしたし空いてはいますが」

「なら一緒に行くぞ！」

「そりゃ構いませんが」

急にどうした？正直教えてくれるだけと思ったが

「弟分の補給が足りないのだ」

「なんじゃそりゃ……」

確かに暫く行動はしてないが……

それでも……と言うか本物の弟じゃ無いのにどう言うこと!?

「では楽しみに待ってるからな!!」

そう言って去っていく、まださっきの傷が完治してないんだが……

「まあいいか……」

とにかく、明日もまた波乱な日常になるんだろうなと思った

無論大歓迎だが……程々なら

第27話

「結構遠くまで来てるんですね」

「当たり前だろ？信用出来る相手の方がいいしな」

「そう言われるとそうですね」

特に自分の装備関連だと重要だもんな

「腕は確かだしな」

姉さんが誇るくらいならそりゃすげえ人間なんだろうな

ただ疑問に思うことがある……

「あのシノアさん？」

「どうしました？」

「何故？」

「何故とは？」

いや……言わなくても分かるじゃん？

「なんでいるんです？」

「……居ちゃダメなんですか？」

「いや……ダメではないっすけど……」

正直予想外だと思うこともあるし……何よりさあ……

「冨岡さん大丈夫なのか？」

「今日は鍛錬だけと言っていたしな、勇くんは大丈夫だと思うぞ」

「さいですか……」

「ああ……私達別に普段から四六時中いるわけではありませんからね？」

「え？」

「そう思われてます？」

「少なくともシノアさんは」

「いや、休日みっちゃんと2人だったり友達と買い物行ったりもしますからね……？」

「マジで!?冨岡さん大丈夫なのか!?」

酷い言いようであるが……アレから変わったように思えねえし……

「鍛錬の日は誰とも交流する気ないので問題ありません」

「……」

それ問題あるんじゃ？いや、余計な事を考えるのはやめておくか……

言葉にするのをやめた

「ここだ」

なんだかんだそうしているうちに着いたんだが……

なんだこの店……武器屋？なのか……？

確かにそれなら加工してくれそうだが……ただ俺作って欲しいのって武器じゃねえ

が……

「……この店ですか？」

「ああ、この店だがシノアどうした？」

シノアさんが怪訝そうな顔してるんですけど……
本当に大丈夫なんですか姉さん……？

「少なくとも目的果たせるんですか……？」

「キル夫が言う限りここだろうと」

ちょっと待ってください
マジでここなんなんです？

「少なくとも鍛治してくれるような店ではないですが……」

「ああ、あの店主がそんなことするわけないだろうな！」

「ちょっとちょっと!?」

マジで俺何しに連れてこられたの!?
姉さんをそんな風に育てた覚えはありませんよ!?

「ああ心配しなくていいぞ」

「なして……？」

既に心配しか無いんですが……と言うか心配しない方が無理でしょ

「恐らくだが……キル夫にとって今一番必要そうなものがそこで手に入るだろうからな！」

ええ……シノアさんは戸惑ってるのに？
と言うか今の言葉聞いて更に戸惑ってますが……

「……根拠は？」

「姉としての勘だ！」

「……」

諦めて従うことにした……鉱石無駄になったらカズマに分けてもらおう
不安なまま店に入る
なんだよこの名前……『直流』？なんだこりゃ？

―――――――――――――――――――――――――――――――――

「むっ君達か」

「こんにちわ」

姉さんを先頭にゾロゾロと入っていく

ただ……店主の姿に驚く

「獣人!?」

「それが何か？」

「いえ、ここらでは珍しいなって」

「そうでも無いぞ？」

「マジで？」

俺獣人滅多に見ないんだけど……確かに０では無いが

「店主みたいに分かりやすい獣人は少ないしな、分かるのが耳とかだけのやつとかもよく居る」

「……そりゃ分からん」

特に学園生は普段頭装備してるし耳なんざ見えねえよ……

尻尾とかもだろうけど見えねえよ……

「と言うかキル夫」

「うん？姉さんどうした？」

「色々と失礼だからな店主に……」

「……すみません」

よく考えたらいきなり獣人って言い出すのマジで失礼だわ

しかも用あるの俺なのに……

「まあいい……」

不機嫌にさせちまった……色々と皆さんすみません

「店主の腕は確かだしな」

「そうだ、期待していいぞ君達!!」

あっ姉さんの言葉で元気になってる
良かった不機嫌じゃなくなってよかった

「エジソンだ、少年」

「岡島キル夫です、本日はお願いしたいものが」

「なるほど、ついでに買って行ってもいいのだぞ」

「それは……考えておきます」

と言うかやっぱりなんだけどさ……
店の内装とかも見てもこの人鍛治出来なくね？

「それでは用件を聞こうか」

「キル夫、持ってきたんだろう？」

「ああ……持ってきたけど……」

正直渡したくないが……無駄にされたくねえし……
ただ……カズマから貰えばいいか

「これです……」

「これは?ウチは鍛冶屋ではないんだぞ?」

俺もそう思うしそう言ったはずだ
だけど姉さんがここがいいって言ったし

「そうですよねー、みっちゃんいくらなんでもエジソンさんの所じゃないと思ったんですが」

「いや、私はここかなと」

「私に何をしろと?」

「キル夫がこれを使って何か作れないかと」

「鍛冶屋では無いんだが……」

改めて言われるが普通に考えりゃそうだわ
戸惑うに決まってんじゃん

「……ひとつだけ聞いておこう」

「なんですか？」

「別に武器や防具でなくてもいいんだな？」

「はい、むしろ武器や防具とかより皆で使えるものの方がありがたいんで」

「なるほど……なら私向きだな」

「出来るんですか？」

「分からない、構想は付いている」

「ちょ……」

いやいやいや……ねだるとは言ったがこの素材無駄にされたら困るんすけど!?

「大丈夫だ、努力でカバーする」

「帰っていいっすか？」

「待ちたまえ!!俄然興味が湧いてきた!!」

「湧いてきただけじゃ困るんだあああああ!!」

台無しにされてたまるか!!

「キル夫さん、その人腕は確かなので」

驚いたことにここでエジソンのアシストを掛ける側にシノアさんが回るとは思わん

かった
むしろこっち側だと思ってたのに

「でも……」

「みっちゃんも案内したようにここの店主直流に煩いですが興味が湧いたものへの探究心が凄いので……何度も挑戦して道が必ず開くかと」

「それ……素材足りないんですが」

「当然机上論になるから製作にかかるまでは時間がかかる」

「そりゃそうか……ただ分かった。姉さんも信じてるんだし信じて見ます」

「完成は明日になりそうだ」

「……は？」

いやいやいやいや
おかしいだろ!?本当に信用していいのか!?

「何を作るつもりですか……」

「それを明かしたらつまらないだろう?」

「いやもうそういう問題じゃ……」

しかし話してくれないので諦める
マシなものになってくれるといいんだがな……

「それで、他の商品を見て行ったらどうだ?」

「……明日の完成品見て決めます」

「ええい、現金なやつだな……分かった見て驚きたまえよ!!」

ひとまず店を後にする、と言うか店主がすぐに裏へといってしまったし

明日……出来るの……マジで?

――――――――――――――――――――――

「へぇ、きっ君直流に行ったんだ」

「はい、ちょっと不安っすけど」

日付が変わり出来てる気がしないが……それでも明日来いと言われていた以上店へと向かう

姉さんと暇していたアカネ先輩と狛枝の4人……なんか昨日より増えてるし

シノアさんは冨岡さんの介護……介護……?

まあとりあえず今日はいない

「なるほど、キル夫クンもこれでパワーアップというわけか」

「いや……正直自信ねえけど……」

まだ出来てない!!なら許せる
ただ……失敗した!!って言われたらどうすりゃいいだろうか

「こんにちわ、失礼するぜ」

「おお君か！待っていたぞ！」

え？待っていたって……まさか本当に？
いやいや……まさかな……

「完成したぞ、恐らくは君に必要なものだ」

マジかー……本当に侮ってたわ
この人……優秀なんだな……

「ありがとうございます」

って思ったが……なんだこれ？
なんかすげえって感じの見た目しているが

「ふふふ、驚くがいい！……っと思ったが」

「ん？」

なんで急に不安そうな顔すんの？ちょっと待て

「キル夫君……君は魔力に自信があるかね？」

「まあ……魔術は使えますし」

「よかった……ゴミにならずに済んだな！」

ちょっと待ってってば、ゴミになりかけたって何!?

「その装置は魔力に反応する」

「はあ……」

一体どう言うやつなんだ?

そう言って謎の物体を渡される

「なんだこりゃ?マジで」

箱?初めて見る品だなこりゃ

「それは私は無線と呼ぶことにした」

「無線……？」

「ああ、これを所持しているもの同士何処にいるか分かる」

「なんだそりゃ……」

サーチ系の魔術とかあるけど……アイテムでそんなこと出来んの？怖いな

「ただ範囲は狭い……精々ダンジョン内くらいだろう、その程度の範囲だ」

「いや恐ろしいなそれ……それだけでも十分だ」

「ただ……個人の魔力に反応するため魔術が使えぬものには反応せん」

「いや……確かにそれは欠点だが……」

それでも破格過ぎるだろう……正直舐めてたわ

「もう一つ、魔力切れの奴にも通用しない」

「あー……そりゃ辛い……」

助けられなくなっちまう……間に合わないってケースが本気で辛い
いや分かるだけでも前進なんだがな……罠も避けれるし

「ただ機能がもう一つあるぞ」

「マジで!?」

これ以上あるとか怖いんだけど……
いや便利だからいいのか

「ただこれは魔術師しか無理だろうがな、魔力が非常に高ければ魔力を消費して言葉を

発せられる」

「つまり？」

「魔術師がこれを通して言葉を発せられる」

「え？遠くても？」

「ああ、無線同士が探知できる距離なら発信できる」

「じゃあボクとかなら出来るかな！」

「魔力が高ければ別に魔術師でなくとも出来るがな」

「俺は……どうだろうねえ」

「試してみるといいだろう」

そう言って店主に渡される
予想以上にゴツいなこれ

「んじゃ皆持ってくれ」

そう言って渡すそうして無線を覗いてみるが……

「このマーカーが……」

「ああ、現在位置だ」

マーカーが２つ付いている
……ん？

「姉さん？」

「……神官に魔力があるわけないだろう？」

「……」

神官は誰かと離れないように気をつけたほうがいいな

まあ……神官がその時いるかは分からんが

「んであーあー聞こえますかと」

「おっこれは私も聞こえるぞ！」

「うん？」

「これは……キル夫クンも使えるみたいだね……」

「なるほど……」

こりゃ一層俺が斥候ですね分かります
まあ盗賊ですけどね

「と言うかきっ君盗賊で遠方から言葉届けられるの……やばいよ？」

「やっぱり？」

「多分……知られたら今後引っ張りだこになる気が」

「と言うかキル夫」

「どうしました？」

「盗まれるなよそれ……」

「そっすね……」

この鉱石結局何だったか分かってないし盗まれるのは不味い

「と言うかエジソンさん」

「なんだね？」

「この鉱石なんだか分かりました？」

「いや、さっぱり」

「……それで作ったんですか？」

「ああ、出来ると思ったからな！」

「……余った鉱石は？」

「……」

いや……流石に４等分したとは言え使い切る量じゃなかった筈だが……
と言うか結構余ってる気がするんだが……

「エジソンさん？」

「……」

おい……ちょっと待て

「余った素材は……？」

「……代金代わりにいただく」

「……分かりました」

無くなったのか他にも作りたいものあったか分からんが……仕方ないか

このアイテム……マジで幾らになるか分からんし

「感謝する、料金はいらん」

「……そりゃ良かった」

「それで、商品は見ていくかね？」

「んー、マジで凄い人ってわかったし見て行きたいが……」

「けどどうした？」

「今は皆と一緒に来てるんで後日来ます」

「やましいことはダメだぞ!?」

「ねぇよ!?」

ゆっくり見る時は1人で見たいんだよ……

「分かった、では直流をまたのご利用をな」

「絶対する」

そう断言して店を出て行った

――――――――――――――――――――――――――――――――

「しかしすげえなこれ……」

作ってもらった物を改めて見る

場所がわかって言葉が送れて罠も回避できる……神アイテムじゃん……これありゃ冒険も楽になるわ

「4つしかないのが悲しいけどね冒険6人とかあるし」

「何故だろうな……10個作っても余りができると思ったが」

「とりあえずそれはきっ君が持って、ダンジョンとか行く時に渡せばいいと思うよ」

「そうっすね、そうさせてもらいます」

「しかしキル夫クンがどんどん遠くに行ってしまう……ボクなんかゴミクズじゃ地べたにいるレベルじゃないかな」

「いや……狛枝も凄いと思うがな」

最近色々と噂を聞くが魔術師でもトップクラスだって聞いたが……
まあ負の感情強いもんな……

「私は使えないがな……」

「いや魔術師とかと離れないようにすれば……」

「いやだ！お前がいい!!」

「んなこと言われましても……」

「モテモテだねきっ君」

「弟離れが出来てない姉なだけかと……」

「じゃあボクもキル夫クンから離れられないから……」

「おいやめろ」

顔を赤らめるな……怖いわ!!

「きっ君大変そうだね……」

「助けてアカネ先輩……」

「え?やだけど?」

「そっかー」

そう言われたら諦めるしかないので悲しい
すっごく悲しい

「そうだ、狛枝もいっそ姉さんの妹に」

「いや……止めておこうかな?」

「なんで!?こう言うの狛枝ｏｋそうじゃん!?」

「多分……不運が飛んでいくし」

「……」

姉さんの妹になったら俺にも飛んできそう凄い困る

「なんだなりたいのか？」

「やめましょう姉さん!?」

「なんでだ!?折角弟が出来るチャンスだぞ!!」

「俺がその分頑張りますから!!」

「!?約束だぞ!!」

「いやだあああああああ」

やむを得ないけど嫌だ!!その分頑張るってなんだよおおお

「本当に楽しそうだね」

「たすけｔ」

「やだ」

「……」

なんでこんな世間は冷たいんだろう……

「そう言えば話変わるけどさ」

「今変えてもらえるのすっごい有難いから突っ込むの止めるわ」

唐突になんだとか言いたいけど助かるわ実際
もうこの空気嫌だもん

「キル夫クンのそれとか試したいなって」

「まあ、ダンジョンとは言われたが漠然だもんな」

確かに寮内とかで試したくはある
大体の距離分かりゃ有り難いし

「だから、ダンジョン潜らないかい？」

え？そっち？

――

第28話

――――――――――――――――――――――――――――――

「こちらキル夫、先頭は問題なし」

「流石だよキル夫クン!!」

よし連絡したからこっちの方へ来るだろう
いや……流石にこれ便利過ぎね？

「しかしアカネ先輩に頼られる側になるとは思ってもなかった」

アカネ先輩はほぼ純盗賊なこともあって通話出来るのが俺と狛枝ってのもあるけど
それでもアカネ先輩に頼られんのは嬉しい

「待たせたな」

「いや大丈夫っす」

３人とも本当にすぐ来たしな……改めて恐ろしいわこれ

「じゃあ先行こうか」

「了解っす」

万が一聞こえなくなると不味いと思い小さいダンジョンを選んだが……本当に問題なさそうだ

「しかしキル夫クン本当によくこんな物見つけたね」

「俺にだって分からん……」

あの流出にはレアドロップも関わっていんのか?.んなら恐ろしいんだが……
とにかくは後で試すか……

「このダンジョンはよっぽど無ければ死ぬことないから魔力使い切るなよ?.狛枝」

「うん、気をつけるね!」

俺達が結構頼ってもいるが狛枝の魔術一撃が火力あるせいで結構消費が激しそうだが……大丈夫だよな……?

「話しているのもいいが敵だぞ」

目の前に敵がいる、単体だし苦労することはないだろう
さて倒すとしますか

「姉さん助かる、さて行くか」

「任せてよ」

「今魔力考えろって言ったよな!?」

「ははっごめんごめん」

謝ってはいるがこいつマジでやろうとしたな……見張ってなきゃダメか……？

「と言うかキル夫、盗賊のお前が前見てなくてどうする」

「ごめんなさい」

確かにそうだな……集中しないと

「様子見てきます！」

そう言って先行する

なんかあったらまずいもんな……浮かれすぎてたかもしれん気を入れないと

「……」

「新条先輩どうしました？」

「いやあ……きっ君調子乗ってるなあって……」

「え？乗らないように気をつけてたと思いましたが？」

「いやあ……普通の一本道だし先行いらないよ？」

「あっ」

分かれ道などがあるわけではない……だから先立って進む必要がない

何より1人な分危険が増す

「ちゃんとそう言うことも気をつけなきゃダメだよ」

「はい気を付けます……」

「きっ君だしやらかしはないと思うし……何より機械使いたいだろうから黙認したけど……」

「本当にキル夫クンには欠かせない人だね」

「いつまでも子供でいられても困るんだけどね……」

冒険者なのだから新しいアイテムを手に入れてはしゃぎ過ぎないようにと願うばかりだった

――――――――――――――――――――――――――――――

アカネ先輩に怒られた……いや怒られたわけじゃねえけど……注意だけどさ

少しだけ不貞腐れながら進んでいく

「（一応仕事はしてるわけだしよ……）」

危険とかは分かるよ？だけどだからこそ未然に防ぐってのもあるじゃん
罠とかも……あっ罠はアイテムで大丈夫か
だが……何かあるじゃん!!だからいいじゃん!!

「どうしたのきっ君？」

「別に……」

別にーなんでもないですー
気にされるほどでもないですー

「キル夫クン、大丈夫？」

「何がだ?」

「いや……大丈夫ならいいんだけど……」

なんなんだよ一体……何が言いたいんだよ

「……」

「何かありました?姉さん?」

「いや……」

一体どうしたんだよ……

「……」

全員の無言の空気が続く

一体マジでなんでこんな雰囲気に……

「んー」

「アカネ先輩、立ち止まってどうしました？」

「休憩しようか」

「早過ぎません？」

皆、疲れてないし元々泊まり込みで攻略に来たわけじゃないなのに休憩……？

「分かりました」

２人とも納得してんのか……まあいいけどよ

場所を確保して岩に座る

ただ……座る必要ない気がするが疲れてないし

「きっ君」

「なんでしょうアカネ先輩？」

「使いやすいのは分かってるけどどう？」

「感想としてはかなりいいっすね」

「まあ私も分かるのが有難いけどね」

「ただそれで文句言われましたが……」

「流石にはしゃぎ過ぎ……ダンジョンだからね」

「分かってますけどさあ……」

ただ偵察しに行って成果取りに行くのはいいじゃん……危険なの分かるけどもっと信頼して欲しい

「まあそのうち分かるから」

「はあ……」

なんと言うか納得できないが飲み込む

実際正しいのは相手だろうし

「俺も分かりゃ良いですけどね」

「きっ君はすぐに分かりそうだけどね」

「そっすか……」

相変わらずなんか分からんが……ただ気持ちの沈み様はさっきよりはマシか

「そろそろ行こうか」

「分かりました」

そうして俺達は行動を再開する

調子に乗ってなんざ……いねえと思ったんだがな……

――――――――――――――――――――――――――――――――

「分かれ道か……」

正直このタイミングで出て欲しくなかったんだが

だが仕方ねえ……行くか

「分かれ道だね、さてどう行こうか」

「まあ2つかな……全員で同じ方向行くか、きっ君と三葉ちゃんで組んでいくか」

「構わないがなんでそのペアなんだ？」

「無線が使えるペアと盗賊を分けてだね」

「なるほどな……了解した」

「私としては分かれない方がいいけど」

「まっいいでしょ」

「そうだそうだー」

俺達側は賛成する、狛枝は傍観する

「分かったよ……ただ気を付けてね」

「いつも失態だけは気を付けてますんで……」

「……」

アカネ先輩が無言のまま先へ進んでいく

俺としてはそっちの方が心配なんだけど……

「行きますか」

「ああ、そうだな……」

とにかく2人で進んでいく

後ろに姉さんもいるしなんなら姉さんも安全に戦えるし安心して進んでいく

「飛ばし過ぎじゃないか?」

「いや、さっき休みましたしね」

「だからって焦り過ぎじゃないか？」

「そうかね？」

正直敵強くないから早く行きたいんだが……そんなダメか？

「狛枝達も順調みたいだしな」

「また連絡したのか……？」

「いや……行き止まりだと困るしな……？」

結局両方見にいくと言うわけだし、どっちかがダメなら合流するわけだし大丈夫だろ？

「本来なら４人で同じ方向行く予定だったんだからな……」

「だから効率良くなったってわけっすよねって」

「……便利になったのはいいが頼りすぎるなよ？あくまでそれは多少の便利程度だ」

「だからって勿体無い症候群が……」

「まあ１つだけ言うならだな」

……色々と気を付けてるのにダメ出しされてる気がする

「自分の役目を忘れるな」

「自分の役目……」

「お前に限ってやらかすと思ってないがな、頭に入れておけ」

「分かりました」

自分の役目……まあ分かれた以上姉さんを守んなきゃな
姉さんも前衛張れるが俺が盾をするべきだ
問題はなさそうだが……それでもな

――――――――――――――――――――――――――――――

「うし、問題無い」

「キル夫……だからペースが早過ぎだ」

「すみません」

「悪いな……少し休むぞ」

「分かりました」

体力がやっぱり上がってんのかもな、１人突っ走ってしまって悪い

「少し先見てきますね」

「すまないな、合わせられなくて」

「いや……冒険においても合わせなきゃならねえのに……ちょっと急ぎ過ぎてた」

「問題無い、その分頑張ってるのは分かるしな……姉として誇らしいぞ」

「ありがとうございます」

そうして前を見に行く、敵はいるがさほど問題ねえ……ただ少しだけならと勢い余って戦う

姉さんに手間かけさせんのもなと思うが無駄に時間かけてしまってすまないと思う

「急いで帰るか、姉さんの方に敵行ってたら不味いし」

これじゃあ偵察の意味無かったのでマジ今後気をつけなきゃならねえ……

駆けて帰る

「……姉さん？」

おかしいな姉さんがいねえ……敵の気配もないし

周囲を探すが見当たらない……

「流石にどっか行くとも思わねえし……」

何があったんだ？いやいや……おかしいよな？

少しだけ周囲を……

「あっこう言う時こそ無線じゃねえか……」

慌てて無線を見る、２つの反応はあるが……

「……あ」

姉さんには使えない……さっき言われたはずなのに……

何やってんだ……

「狛枝!!聞こえるか!?」

「どっどうしたのキル夫クン!!?」

「姉さんがいねえ」

「は?」

「そっちには居ないよな!?」

「居るわけないでしょ」

「分かった、急いで探す」

「そっちに向かうよ」

「助かる!」

急いで電話を切って探し出す……何処だ?

「くそっ……」

慌てて周囲を見渡す……何もない

なんで消えるん……

「危ねえ……」

よく見りゃ崖があった……暗くて見逃していたが……

「おいまさか……」

下に落ちた……いやいや姉さんに限ってそんなこと……

「俺でも見えなかった……」

崖があるなんざ気付いてなかった
本当はそういう察知が本来の盗賊の役目のはずなのに

罠にかからない、だから油断した
通話を少なくともこっちから送れる、だから先に行った

「ああくそ……だから頼り切るな……だよな」

過信してた……手遅れになっちゃ遅いのに……
本当に何もねえはずなのによ……皆で行きゃこんなミスも無かった

「……アカネ先輩達を待つのは正しいが」

……ただ姉さんが下でどうなってるか分からない……下にいると決まったわけではないがまず居るだろうし

「……」

手遅れなんざ嫌だ……俺がどうにか出来るか分からないが……何より下で何もないなら本来は待った方が救出確率は上がるだろう

「……くそっ」

1．アカネ先輩達を待つ

２．１人で突っ込む
１ｄ２：２　１人で突っ込む

本当であれば絶対やってはならないことだ、と言うか後で確実にぶっ飛ばされる
自分の責任なら確実にできるようにとか騒がれるだろう
ただ……現状下がどうなってるのか分からない

「勿論……そのまま高さで死亡……勿論あり得る」

その高さから降りれば俺も死ぬ
……当然ここから飛び降りるなんざ未知だ

「本当にすみませんねアカネ先輩」

きっ君ならすぐ分かるって言われたけど……実際何も分からん馬鹿だったみたいでんでまた馬鹿をやらかすってことで

「姉さん……無事でいてくれよな」

見える高さでない以上怪我が無いのは分からない
だが……ただ無事であることを願って飛び降りた

――――――――――――――――――――――――――――――

「……不味いかもな」

身体がむちうちで痛い……俺がこれって姉さんは大丈夫なのか？
……フラフラながらも探していく

「見当たらねえ……」

ならもしかして落ちてないのか？
……それなら良かった……俺が原因だし姉さんが無事なら

「運良くアイテムも無事か」

正直壊れちゃならねえ物を下に持って来んのは間違いだろうと思ったが……ただこれがねえと狛枝達が今度は困る
だから……壊れなくて良かった

「さて……どっから登るか……」

そうなるなら登り方だが……分からない……断崖絶壁じゃねえか……
ダンジョンの帰還アイテムとかは確かポートキーとかだが……持ってねえしなあ……

「……ひとまず先へ行くか」

どっち方面が来た道とか分からねえ……と言うか意外に下広いんだな

「行き止まりか……」

裏側も行き止まりなら詰みか……？
だが仕方ねえ……行くしかねえか
逆側を進んでいく……先程の落ちた地点を超えて先に行く……

「……マジか」

予想外だった……ただなんかが寝ている……
なんだアレ……正直今の状況で戦えるわけねえな

「（迂回のルートもねえ……）」

正直先へ進むにはこっそりと進むしかねえが……
忍び歩きなんざ出来ねえ……

「（運良く通り過ぎるのを願うだけか）」

このまま居たところで奴が起きて見つかるだけだ……なら進むしか無いわけで……

「……」

頼むと願うしか無いが……こう言う時に時間が飛んで通り過ぎてくれりゃいいのに……そんな都合はよく無い

１ｄ１００：３２

「……」

通り過ぎる……モンスターの動きに変動はない……歩いている音もなんとか聞こえていないか

マベリックランナーとか買ってたらアウトだったなこれ……

「（このまま行ってくれ……）」

１ｄ１００：７６

「キル夫クン!?何処なの!?」

「……!?」

無線から声が漏れる……狛枝達に降りたこと伝えてなかったただ……このタイミングかよ……

「……」

当然目を覚ます、狛枝……お前の不運伝染してるんだが……

当然モンスターの咆哮が聞こえる

「……ごめん」

その言葉だけ聞き取れた

元の原因が俺だし狛枝達だって姉さんを探すのを全力で手伝ってくれている
降りたなんざ報告できねえし……狛枝は悪くねえなこれ

「ただ……ピンチか……」

戦う……しかねえか……いや閃光玉がある
遠くに逃げれると思わねえが……

「そのまま逃げてくれたっていいんだぜっ」

閃光玉を放り投げる、敵が眩んでいる間に逃げ出す……

「遠くに……出口がありゃそれで……」

しかしすぐに動き出そうとする……ダメだ見えてねえはずなのに闇雲に迫ってきてやがる……

「……嘘だろ」

見えてないはずの敵に……追いつかれ……その爪を……

「……」

無事か？なんで無事なんだ俺？

「……」

何か感触がある？岩じゃないようだが……

横を見るが……

「……」

姉さん？え？なんで？下にいなかったはずじゃ？

どうやら岩の窪みにいたらしく引っ張られた

そのお陰で俺は助かったが……

「……」

喋るなとモーションされている……喋るわけにはいかないか

現状どうするかだが……

当然筆談も見えない

「……」

「……」

無言で見つめ合う、アイコンタクトは……流石に出来ねえ……

外の奴が居なくなるのを待つしかねえ……

「……」

音がしねえか？ただまあ暫く待つ……

「!?」

外で騒音が……と言うか衝突している!?
不味い不味い……どうするかこれ

「姉さん……外に出れます？」

ぶつかる音が大きいため話すことはなんとか出来るが……それどころじゃねえ

「……何があった？」

「恐らくここ崩落してきます……」

運良く空いていただけだが……正直ここに岩が降ってきたら逃げ場がない……
出るのも不味いが……ここにいりゃいずれ死ぬ

「大丈夫だ……戦うことになりそうか？」

「すみません……」

「いや謝るな、お前が悪いわけじゃない」

さっき見つからなければアイツも暴れ出す事はなかっただろう、そうすれば隠れていられたはずなのに

「今回の件も、俺が探索も怠ったのも……盗賊のはずなのに」

「気にするな……とは言わないが、次からは気を付けておけ」

「……ですね」

「じゃあ出るぞ、勝算は分からないがな」

「姉さん……怪我とかは大丈夫ですか？」

「治療出来る範囲で収まった」

「良かった」

互いに決意して外に飛び出すその直後岩で埋まった……危なかった

「……グルルルル」

「ああ……なんでここのダンジョンに場違いだろこいつ」

今までの比じゃないモンスターが目の前にいる
今回は本来であれば戦わなくていい奴だ……

「治療した、さて……勝つか負けるかよりも持たせるぞ」

「……」

勝てる自信があるわけじゃない、ただ持たせなきゃいけない命懸けで守らなきゃならねえ

俺のせいだから
俺のせいだから

……俺がやらかしたことだから

ＢＯＳＳ：きゅうきょくキマイラ

―――――――――――――――――――――――――

続

第２８話②

「キル夫、一度下がれ」

「問題ないっすよ」

「血が……止まってないだろう……」

「ただ……下がれる余裕なんざないですよ」

敵の攻撃を防ぎながら答える

俺ですら手に余るのに……下がって防ぎようがあるわけない

何より……俺の責任だ

「真っ当な武器持った方がいい気がしてきた……」

ククリも悪くないがあくまで前衛が張れるに留まるだけでありメイン火力には乏しい

現状魔術のがダメージを与えている気がする

「……ただ……切れそうか？」

その分消費が激しい……節約するわけにもいかない以上完全に魔力切れを覚悟するしかねえ

「キル夫、流石に死ぬぞ？」

「……俺が退いたら姉さんが死ぬだけっす」

既に意地も混ざっているだろうが退かずにむしろ飛びかかる

「多分こいつは……」

噛みつかれたらダメな気がする
引っ掻きも相当な被害とは言え死ぬ程じゃないはずだが……何故だろうかそんな予感がした

「うおっと……」

噛みつかれかけて急いで裏に下がる
やべえ……本当にまずい
罠を張る余裕もなければ逃げれる場所もない……

「キル夫」

「……どうしました?」

「背中に何かある」

「背中に……？」

残念ながら背中を見ることは出来ないが何か……いや何があるんだ？

「それがどうしたんすか？」

「いや、なんとかならないかなって……」

「それでなるなら苦労ないんすけど」

「でもなんか背中にあるにはおかしかったんだ!!」

おかしいか……マジで背中が弱点とかあんのか？
ただ……賭けてみるか正面からじゃどうしようもねえし

「姉さん裏回れるか？」

「狭いな……」

「なら無理にでもするしかねえか……」

当然俺も裏に回ることなんざ出来ねえし……それを目標にしてやるしかねえのか……

「んじゃ……姉さんは本格的にその方針で」

「待て、それじゃあキル夫今以上に危険じゃないか」

「どっちみちこのままってわけにもいかないっすし」

「回復……出来ないが死ぬなよ？」

「流石に確約は出来ませんがね」

と言うか悪いが死ぬかもと思ってるし
んなところで死んでられはしねえが
ただ……隙ぐらいは作ってやらねえとな
少しだけ震える手でククリを握り直した

――――――――――――――――――――――――

……何度目の特攻だっけ？
魔力は当に尽きて闇雲に特攻するしかねえ
しかもなんだろうな……噛みつかれちゃならねえと謎の概念に追われていて

「すまない!!」

「謝んなくていいっすよ……次行きます」

一瞬だけよろっとした

「キル夫!?」

「まだ行けます……」

「だがもうお前……無理だろう」

限界が近い

なんとか抑えて行こうとしたが……もう代償なんざ気にしてられねえ……

「姉さん……」

「どうしたキル夫?」

「次で決めますんで、少し無茶してください」

「……死んだら怒るぞ?」

「そうならなきゃいいですがね」

最後の突撃、これで終わらせる
口を開けてきた……噛み付く気か……

「ちょうどいい」

この機会しかない、それに気にせず突っ込む

「おらよ!!」

隠し持った爆弾で爆破する、ゼロ距離により自分もろとも
当然腕一本くらいは覚悟する

「キシャアアアア」

しかし運がいいのか悪いのか衝撃に驚き吹き飛ばされる
手こそ失いはしなかったものの体を強く打ち動けない……
後は……姉さんに任せるしか

口内で爆破されたモンスターは暴れ回る、牙は砕かれ暴れ回り当然後ろを向く
今の隙に……全てを終わらせると

「キル夫、決めるからな！」

姉さんが背中めがけて飛びかかる
決まってくれと願いながら、動けずとも願う
しかし……

「……カハッ」

「姉さ……」

届かなかった……そのまま吹き飛ばされる
ここまでやっても……ダメなのかよ

「すまないキル夫……」

俺が動けりゃ……今すぐにでも前に立ちたい……このまま動けないなんざ嫌だ
作戦は失敗して死あるのみだろうけど……そんなのに姉さんを巻き込めねえ
俺のせいなんだ
俺のせいだ、邪魔をするな
俺のせいだから……他を巻き込むな

「……こう言う時なんだろう？」

いつも通り動いてくれよ……俺の魔法なんだろう？だから……守るために動けよどうなったっていいからよ
奇跡が起こってくれよ……

「姉さんっ!!!」

「うっわあああああああ!?」

「!?」

え?ちょっと待て……え?
なんで……なんでだ?

「痛たた……」

「……狛……枝?」

「あっキル夫クン、やっと見つけた」

上から狛枝が降ってきた……え?しかもアイツの上に
なんか唐突過ぎて痛みがぶっ飛んだ気がする……動けないが……ってそれどころ

じゃねえ

「狛枝、真下にやべえのがいる今すぐ逃げろ」

「うん？あっ本当だ」

お気楽状態でいる場合じゃねえだろ……気を付けろよ

「狛枝早く……」

「でも動かないみたいだけど？」

「……は？」

動かせる目だけをそちらに回す確かに動かねえ……

狛枝何したんだ……詳しく聞かせてもらわねえと

きゅうきょくキマイラはもううごかない

――――――――――――――――――――――――――――――――

とりあえず姉さんに治療してもらって動けるようになったがこっぴどく怒られた
仕方ないとはいえ最後の自爆が不味かったらしい

「それはすみませんでした、ただ今はそれより……」

「ああ、そうだな……」

「うん？２人とも何があったの？」

「こっちの話だ!!なんで降ってきた狛枝!?」

「え？ああそのことか」

なんで疑問そうなんだ……狛枝……

「まずこっちの状況も話そうか」

「分かったが」

「キミからの連絡が来てからすぐにこっちに向かったんだけどさ」

「ああ、それはすまんかった」

実際やらかしたしな俺……

「それでこっちに来たらキミの反応も消えるしさ」

「反応？」

「ああ、無線からキミの位置が消えたんだよ」

「……」

魔力切れが原因か……

敵がヤバすぎて節約とか残しておくとか気にしていられなかったな……

「それで闇雲に探してたんだけど……」

「ああ……色々とすまねえ」

「そのまま運が悪く落ちちゃって……」

「不運だなおい……」

「ただ……ここに落ちてきたから幸運なのかもしれないけどね」

「助かった本当に」

「今確認してみたら後ろにｏｆｆってあった」

「ｏｆｆ？」

「よく分からないが動けなくなるらしいぞ」

「そりゃ……また……」

「これも幸運なのかな！」

「……じゃねーの？」

俺は考えるのをやめた

「それで……アカネ先輩は？」

「多分そろそろ来ると思うけど……」

「怒ってた……？」

「……さあ？」

「……どうすりゃいい？」

「聞いてみれば？」

「!?」

その言葉に寒気がして後ろを見る

「アカネ先輩……？」

「……」

アカネ先輩が合流していた、そりゃ嬉しいし今にでも喜んで飛んで来たいレベルだが

「……」

合わせる顔がねえ

「無言だと困るんだけど」

「あっその……」

「何？」

「すみませんでした」

「……」

しかし相手は何も答えてくれない
怒るだに何かしてくれると思ったんだが

「あの、アカネ先輩？」

「何？」

「怒らないんですか？」

「……」

相変わらず何も答えてくれない……なんで？

「じゃあ帰ろうか」

「そうだね」

「なんで何も言わないんすか……？」

「その方がきっ君には効くからかな」

「……」

「どうせ叱られると思ってたんでしょ、そんな甘くないよ」

「じゃあ俺はどうすれば……？」

「もう分かってるでしょ、だから言わない」

「……」

確かにそうだ、流石に今回のようなことは繰り返さない……絶対にやらかすとしてもこんな惨めなミスはしない

「しかし……なんでこんなものがここにいたんだろうね？」

「それは……分からねえ」

「気を付けないとね、またいつ動くか分からないし」

「勘弁してくれ」

「案外分からないよ、ボクの不幸でまた勝手に動き出したり……」

ガシャン

「あん？」

その音と共に奴がまた声を上げて飛びかかってきた

「あっ」

「狛枝っ!?」

一瞬のうちに距離を詰めてきて
狛枝を喰いちぎった

「狛枝……嘘だろ……」

かのように思えた

「……？」

今目の前で喰い殺された筈の狛枝が目の前にいる……何が起きた!?

「どうしたのキル夫クン!?」

「いっいや……」

そうだ、あいつはどうなっている？
慌てて方向を見るとまた動き始めている
未来予知……いや……そんなものはないだろう絶対と言ってない筈だ
とにかく……どうにかしないとまた狛枝が……届け

「キル夫クン!?」

思うと共にいつのまにか奴の後ろに回っていた……やっと発動したのか
ピンチの時にしか発動しないとはいえ前よりも発動が容易くなってきている気がする……まずいのか？

「とりあえずだ」

やらせるわけにはいかねえ……急いでｏｆｆの文字を押し行動停止させる
一体何が……

「……」

「……こいつ」

さっきから気になりはしたがこのモンスターの上にこのヒヨコが乗っていやがった
さっきはスルーしたが……移動してやがる……

「悪いが……あばよ」

流石に放置はできないそのまま叩き潰した
これでどうにかなってくれればいいが……

「きっキル夫クン？」

「どうした狛枝？」

「……何があったの？」

「何かって？」

「いやキル夫クン唐突に消えてそっちに行ったし」

「……あー」

そう言えば……言ってなかったな

……アカネ先輩の目が怖いんだけど

「きっ君、聞いてないんだけど」

「……まあなんか使えるようになりました」

「……」

なんかこっちの件で怒られそうなんだが

確かに伝え忘れてたのはあるけどさあ

「……」

「ごめんなさい」

「代償は？」

「え？」

「代償は何かって聞いてるの」

「代償ってなんですか？」

「それだけの魔術、代償無しに唱えられるわけがないよ」

「そうなんすか……？」

「いや、そうとも限らないけど」

「なんで……」

「きっ君が何もないならいいんだよ」

ああ……あくまでアカネ先輩は俺のためにか……本当に優しい先輩だな

「なんもないっす」

「本当に？」

「自分じゃ分かるところでは何もないっす」

「そう」

……誰かに何かを言われた気がする
ただそれが思い出せない
ならばそれほど問題ないって事だろうかな

「とにかく帰りますか」

「きっ君かなりボロボロだしね」

「それは……言い返せないっすね」

「じゃあちゃんとやる事やらないとダメだよ」

「気を付けます……」

「２人ともいい雰囲気なのはいいんだけどさ」

「いい雰囲気じゃないやい!!」

「まあご想像にお任せするけど、そうじゃなくて」

「おちょくるんじゃなくて何する気だよ狛枝……」

「このモンスターみたいなのどうするの？見た感じモンスターかすら怪しいんだけど」

「どうすんだって……置いてくしかなくねえか？」

と言うか重いしどうこうすることできねえだろ
急に動き出したらまずいし

「まずくない？」

「まずいか？」

「だって背中の押せば起動できるんでしょ？

「あー……」

　確かにそうか、そうなるとまずいな
　また地底が地獄になる……

「だからってどう持って帰るかだが」

「学園に伝えてみるか？」

　姉さんがそう提案する、確かにそれは悪くないが……

「却下」

「アカネ先輩、どうしてですか？」

「１００％悪用される」

「そこまでヤバいんすか？」

「うん、絶対に学園に言わない方がいい」

「じゃあどうするんです？結局持ち帰ったら同じっすし」

「そうだね……」

アカネ先輩は悩んでいるようだが……

やはり難しいか？

「ちょっと提案があるんだけど」

「どうした狛枝？」

狛枝がこう言うケースで提案してくるのは珍しい気がする

「あのモンスターのヤバイ箇所だけ剥ぎ取るのはどうかな？」

「どう言う事だ？」

「牙や爪だけ持っていっちゃえば脅威は減るでしょ？」

「それで素材だけならバレもしないと」

「そう言う事だね」

「ありだな……」

爆弾使えば剥ぎ取りもできるだろうし、ならばして行くか

そうしてアカネ先輩の指示のもときゅうきょくキマイラの爪と牙を手に入れた

そうして帰る、疑問を1つだけ残しながら

―――――――――――――――――――――――――――――――

結局あの後も怒られる事なく部屋に戻ったが疑問は残っている

「狛枝ちょっといいか？」

「うん？どうしたの？」

「聞きたいことがあるんだが」

「うん、いいよなんでも聞いて？」

そう言われる気がしたが一応尋ねてはおく

割と聞いちゃならねえ質問な気もするが

「狛枝、さっきお前何した？」

「さっきって？」

「モンスターと戦ってる時何かしただろ？」

じゃねえと説明がつかねえ

「どう言うこと？」

「あの化け物は間違いなくこっちへと突っ込んできていた、そしてお前が死んだのを見たんだ」

「……へぇ」

「ただ何も起こらずまるで巻き戻ったように、アカネ先輩や姉さんもそのこと自体知らずだ」

「なるほど、ボクは知ってると思ってるのかな？」

「さあな、ただ俺がやったことじゃねえ」

「そうなの？キル夫クンテレポート出来たみたいだしそれくらい出来そうだけど」

「俺がそれ出来んならそもそも狛枝が危険になんざならねえ」

だから狛枝がやったとしか思えねえ
……それともあれはただの幻覚だったのか？

「ボクみたいなゴミクズに何を期待しているのさ」

「いや……俺はお前が優秀だと思ってっけど」

「そんなことないよ、ただキミがそこまで何を探してるか知らないけど……そう思うのならこっちでも色々と調べてみるよ」

「そう言ったもの調べられる場所に記憶はないんだが……」

「まあボクなりにってことでね」

「そうか、ありがとう」

「いやいやキミに頼られるなんて光栄だからさ」

ひと段落したら眠くなってきた……今日は色々と死にかけたこともあったしな……
とりあえず今は進展しないし寝てから考えるか
考えたって浮かばないとかは知らん

「……」

「キル夫クン？」

狛枝は声を掛けるが反応しない

「寝ちゃったか……おやすみ」

狛枝も驚くスピードで寝てしまった

「巻き戻す能力か……まさに超高校……いや超能力みたいなものだね、キル夫クンの能力も聞いた話だとだいぶ恐ろしいけど」

「……」

「キミは素晴らしい人間だよ、だからこそ絶望なんかに負けたりしないだろうね」

少しだけ声を荒げて呟く

「まあボクなんてゴミクズが何か手を下すまでもなく絶望へと進んでいるだろうけど」

学園自体が絶望の塊みたいなものだ
その中で生きているボク達も絶望なのかもしれない

「いつ歯車は狂い出すか分からない……まだ時間はかなりありそうだけど」

キル夫クンの能力をボクはバラしたりはしないが
バレたら間違いなく欲しがる人間がいることは分かる

「ボクの能力もキミのために喜んで使うとしよう」

だってボクは踏み台なのだから

「その時絶望に負けたりしないよね？なんたってキミは希望なのだから」

――――――――――――――――――――――――――――――――

第29話

それはいつもと変わらない平穏な日の筈だった
俺も昨日の件で疲れており授業はなかったし休んでいた

「何もせずにぼーっとしてんのもあれだが……」

中庭のベンチでぼーっとしているわけでして
ただ……昨日と違って平和だなあ

「隣いいかね？」

「ああどうぞ」

おっと誰か来たか、席を空けないｔ　……
そっと隣を見て驚愕する

「……校長？」

「おや？どうしたかねキル夫君」

「いえ……」

唐突に隣に座られるとビビるんだが……
と言うか何が目的だ？

「学園生活はどうかね？」

「悪くはないです」

「それは良かった」

……どうすりゃいいんだこれ？
正直帰りてえんだが

「……」

「君から聞きたいことはないのかね？」

「いや……無いですね」

「1年だと言うのになんでも聞いていいのだぞ？」

「いえ……正直聞きたいことが纏まらないので」

「そうか、では何かあったら話すといい、校長室はいる時は気軽にな」

なんでこんな食い下がってくるんだ？

俺に何か狙ってんのか？

「期待されてるなら光栄ですが」

「長谷川先生から君のことよく聞くのでね」

「……」

いや……いやいやいや

「俺より優秀な人結構いるはずなんですが、特に盗賊だと」

「オールマイト先生からもよく話を聞く、戦士コースのメンツに負けない人間だと」

「いやいや、本業相手に勝てるわけ無いですって」

昨日それを思い知らされたばかりだし

前衛こそ張るもののあくまで自分は戦士みたいなことを出来ないって自覚せにゃならん

「ボンボルド先生も、君には特別さを感じると言ってたよ」

なんか全員で俺を殺しに来てる気がする……

今すっごく逃げたい

「ははは……でも神官コースなんざてんでダメですよ?」

「その全くダメな理由が分からないが……カーミラ君も残念がっていたよ」

「いやぁ……魔術師のメンツは神官適性が全く無いとかあるじゃ無いですか」

「それは……そうか……そうだったねすまない」

セーーーーフ、いや伝えちゃダメかは知らないが加護がないやらとか伏せておきたい

し……すごい嫌な予感するから

「ボンボルド先生が君が魔術師コースに来ないものか悔やんでいたよ」

「俺は盗賊ですので……」

それは今後も変わりようが無い
変えるつもりもないし

「それでも期待をかけさせてもらうよ」

「……なして？」

「盗賊である事も含めた上で３つのコースでそのコースの平均を上回るのはやはり才能があるとしか言えないのだよ」

「ただの器用貧乏ですよ……？」

「まっとうにコースを受けてる人たちが泣くからやめなさい」

「……はあ」

「それじゃあこちらからいいかね」

「構いませんが……」

何を質問する気だ……2年3年ならまだしも1年の俺に聞きたいことなんざあんのか？

「最近どうだね？」

「それはさっきも聞いたはずでは？」

「ああいや……そう言うことでは無いのだよ」

「？」

何が……言いたいんだ？

「ボンボルド先生が君の魔術は特殊と聞いてたんでね、何か面白いものを覚えていないかと」

「!?」

おい……待てよ……
おいこれは待てよ……
まさか誰か話したか？いや……それはないか

「俺盗賊コースなんですけど」

「しかし私が聞きなるのはそっちではないのだよ」

「……何もないわけではないですが」

「ほう、どう言うことが出来る様になったかね？」

「魔罠とか盗賊に役立つ使い方ですよ」

「珍しい物を覚えているね、だがそれだけなのかな？」

「現状手探り手探りですからね……」

校長が怪訝そうな顔をするが……正直言い出すわけにゃいかねえオルガ先輩もアカネ先輩もみんな警戒してるし

……なんで学生続けてるんだろう？

「仕方ないか」

仕方ないってなんだよ……
今から逃げ出してもいいんじゃないかな？

「質問を変えよう」

「……」

助かった……いや助かりきってないのか？分かんないや

『君の秘密を教えたまえ』

「っ!!」

なんだこれ……一体何が？こりゃまずい

「俺は……」

「……」

ダメだ……何故か抗えねえ……

「校長」

「カーミラ君か」

なんだ……？苦痛が無くなった？
なんとかなったようだが……一体何が？

「今忙しかったでしょうか？」

「いや、構わないよ」

そう言いながら校長はこちらを見て

「すまないねキル夫君、唐突だがこれで失礼させてもらうよ」

「いえ、頑張ってくださいな」

「ありがとう」

そう言って校長は去っていく……助かった

「……帰るか」

休むはずだったのに疲れてしまったなんて日だ
大人しく部屋で休むことにしよう……

…

「校長本当によろしかったんですか？」

「ああ、さっきのかね？」

「はい、何か聞いているようだったので」

「いや、問題ないよ」

「それならいいですが」

「彼はかなり優秀なようだが、何やら時折やらかしてるらしいし優秀過ぎるわけじゃないらしいしな」

「やらかし？」

「何やら同じ盗賊の生徒と謎の罠を作って時間無駄にしたりとか」

「無駄なのですか？」

「少なくとも長谷川先生が不可能と言った物をずっとやってる辺りはな……」

「そうなんですね……」

「それに彼も1年だ……まだ何か持ってると思うまい」

「問題なさそうで良かったです」

「彼も気になるしいずれまた触れてみようと思うがね」

校長は不敵に笑った

――――――――――――――――――――――――――――――――

「なんだったんだよアレ……」

部屋に逃げ帰ってきて安堵する……追っては来てない

と言うか追ってくるわけ無いだろうけど

「つか……どうすっかな……」

今日はもう外に出たく無い……
だってなんか嫌なこと起きそうだし

「キル夫クンちょっといいかな？」

「……なん？」

「……えっとなんでそんなテンション低いのか分からないけど」

「……用件は？」

「えっと……キル夫クン宛に届いてるものがあるんだけど……」

「え？やだ怖いんだけど」

「手紙みたいだけど……」

「脅迫状とかじゃないよな……？」

「多分違うと思う」

脅迫状なんざ流石に来るとは思わねえけど
なんか今日自分が不幸過ぎる気がするしすっごく怖い

「宛先は岡島緑郎だってさ」

「……」

そう来たか……どうしよう
分からん脅迫文よりも恐ろしいものが来た

「ここ置いておくよ、読めってボクが強制出来るものじゃないし御自由に」

「お前なら読んでおくべきだよ!!とか言い出すと思ったがな」

「それを決めるのはボクじゃないからね」

そう言って狛枝は去っていく

あっおい……置いてくのかよ

「……」

どうする

「……」

どうすりゃいいんだ……

正直帰ってくるとも思わなかったし
いや……そりゃ帰ってくるな
読まなきゃならねえよなあ……

「そのために書いたんだしな……」

だから読まねばならないものだ
そう言って手紙を手に取り……
置いた

「きっつ……」

読むのが怖過ぎる……なんて書いてあるか
怒られるだけならいいんだが
ふざけんなとかそう言った類ならまだいい

「そちらへ向かいます、とか……連れ戻しに行くとかだったらどうすりゃいいんだ……

？」

いや……それこそ読んで知ってなきゃダメなんだけどな
知りませんでしたじゃすまされねえし唐突に帰ることになってもまずい

「ただ……」

手が動かねえ……
読まなきゃいけないものを読むことが出来ねえなんて……

「狛枝……いつもならお前読めって言うだろうが……」

なのになんで言ってくれないんだよおおお
まあ理由を言ってくれたんだけどな……

「……」

父さん、俺が悪かったです……だから許して……
あー読みたくねえ……

「……少しだけ」

震える手でチラッと見てみる
すぐにバタンと閉じる

「……読めねえ」

当然一瞬で閉じたため読めなかった……
また開くしかねえ……いつまでクヨクヨしてんだって話になる

「……」

手紙を開ける
中には一言だけ

『夏休み、一度帰ってこい』

とだけあった

「……」

……地獄が延長しただけなんだが
え？せめてもうちょっと言ってくれない？
読まなきゃ良かったかもしれん……いや読まなきゃ帰省しろってこと知らなかったが

「外出るか……」

正直今日は出る気なかったんだが……
ただ今はそれ以上にこの手紙の近くにいたくない
怒ってるかどうかは分からんが……怖い

とりあえず校長に会わないようにルートを考えながら、外へ出て行った

――――――――――――――――――――――――

「はぁ……」

中庭の木に腰掛ける、流石にベンチに座る気はない

どう言う意図なんだろうなあれ……ちょっとやっぱり怖いわ

「キル夫？」

「ん？」

「どうしたの？」

「立華さん……」

正直ここにいるのは驚いたが……
と言うか戦士コースのスペースだが何をしてるんだろ

「そこに座って、何かあったの？」

「ここがどうか？」

「そこ私がいつも座っているから」

「あー……」

そう言えば初めて出会った時もここで座ってたんだっけ

「それで、キル夫どうかしたの」

「あー……それはだな」

親が怖いです……なんて言い方はおかしいよな……どうすればいいんだこれ？

「？」

「親との付き合い方が分からなくてな……」

「仲が悪いの？」

「いや……そうでは無いんだが」

「聞いちゃダメだった？」

「いや……ダメじゃあ無いんだが」

どうするか……ええい、話していいか

観念して話すことに決めたが……黒歴史だな

「まあ家出して学園に通った口なんだ俺は」

「冒険者になったはまだしも学生になるのは珍しいわね」

「やっぱ冒険者は多いのか？」

「ええ、多いわ」

まあ俺も元は冒険者になるつもりでいたしな
アカネ先輩のおかげで助かったが

「誰かに助けてもらったの？」

「ああ、アカネ先輩にな」

「そうそれは良かったわね」

「それで父に手紙を送って帰ってきたんだけど……」

送ったけどさあ……

「夏休み戻ってこいと」

「そう……」

「それだけしか書いてなかったんです」

「そうなの」

「で……どうしようかと」

……これ真面目に聞いてくれてるんだよな？

立華さんいつもこんな感じなんだけど

「どうしようとは？」

「いや正直怖いし……そのまま連れ戻されたりとかしたらどうしようかと」

「そう……」

そう言えば自語りし始めただけで相談乗ってくれるって言ったわけじゃねえじゃん
何やってんだよ俺……

「私としては……」

「立華さんとしては？」

「会った方がいいと思うわ」

「まあ俺もそうする気ではありましたがどうして……？」

「親はいつでも子が心配だもの」

「そのせいで俺連れ帰されるか不安なんですが」

「それは無いと思うわ」

「……どうして？」

「それだったらもっと書いたりするわ、それに直接来そうだとも思うし」

「そうなんですか……？」

結構な自信でつい丁寧になってしまう

「それに、貴方のこと信頼してるから一言なのよ」

「それは流石に言い過ぎじゃあ……」

「いえ、信頼してるけど心配してるそれが親よ」

「そんならだいぶ恵まれてんな俺」

「ええ、そうだと思うわ」

確信があるわけじゃ無いが……それでも信じてみたいって思った

「今日は助かった」

「貴方のためになったなら良かったわ」

「少なくとも気が楽になった」

「そう」

とりあえずもう日も暮れて来ちまったし
と言うか日が経つの早い……立華さんと話しすぎたか？

「それじゃあな」

「ええ、また明日」

「ああ、明日」

会うのか……？いや分からねえが……
どっちみちいいか会うかもしれない
そうして出かける時よりも軽い気持ちで部屋に帰る
そしたら狛枝が見えちゃったと謝ってくるが……同じ意見だった

冒険者やってる割に皆親に恵まれ過ぎてね!?
周りの反応を見るにそうとしか思えなかった

第３０話

「なるほど、こう言うわけだったか」

盗賊コースを受講中、立華さんも今回はいるらしい
正直神官コースのみだと思っていたので驚きだ

「と言うか盗賊コースで学ぶことあるのか……？」

そんな感じで向こうを見るとＶってしてきた……まあいいかあるんだろう多分

「しかし飽きねえなお前ら」

「いやこれ必修ですよね？」

「まあそうだが」

「ならしょうがないじゃ無いっすか……」

「まあな……」

別に俺は受けるの苦じゃねえしいいけど
他の人たちからすりゃオコなんじゃねえの……？

「それじゃあ今日は何教えっかねえ……」

「おい……」

「嘘だ、今回は知識面だからな、ギルドとかそう言ったの」

「大切っちゃ大切だが……」

「どうしたー？そこ座学は苦手か？」

「そりゃ勿論」

後立華さんが来たのに座学って悲しくなんな……少なくともギルド聴きに来たわけじゃ無いだろうし

「それはいいこと聞いたな、テスト難しくしてやる」

「え？あんのか……？」

「期末実技だけだと思ってんのか……」

「マジかよ……」

元より聞く気とは言えちゃんと聴かねばならんらしい……頑張るか

立華さんもやる気な顔してる……いや多分だけど
神官コースだからここはテストに出ないと思うが……

「……で、ーーあるからにして」

「……」

知ってるがむずいわ……冒険者になったらこう言ったのアカネ先輩に任せちゃダメっすかねえ?
正直俺にゃ荷が重いっす

「ちくしょう……」

カズマの方をチラッと見るが……ああくそ普通に余裕そうな顔してやがる
必要なのは分かるけどさあ……
とりあえずノートにだけは書いていくが……正直復習できる自信がねえっす

「ーーは重要だから覚えておけ」

重要なのか了解
……ただ使うのか本当に
書きながらも疑問に思う
こう言う場面で疑うからこそ痛い目あうのだが気づいていない

ついつい重要と言われながら皆がどれだけ集中しているのかが気になりチラ見する

「……」

どいつもこいつも集中してやがる……
おかしいな……盗賊っていつも緩いイメージあったんだけど

「俺もやらねえと……」

じゃねえと徹底的に負ける

馬鹿とは言え学力最下位とかは笑えねえし……
……やってやらあ!!

そのまま死力を尽くし、修了後にバタンキューした

――――――――――――――――――――――――――――――

「キル夫、大丈夫?」

「大丈夫では……ねーです」

手だけで反応して返す
頭が上がらねえ

「そこまで難しかったかしら?」

「立華さんと違ってバカなんで」

「そうは思えないのだけど……」

「昨日言った通りなんで……小さい頃は全く学んで無いんすよ」

「ごめんなさい……」

「いや……謝らなくていいが」

別に俺が馬鹿だったってだけだ……

言ってて悲しいな……

「立華さん、今日はまあ折角の盗賊コースなのに勉強で残念だったな」

「どうして？」

「いや、スキルとか学びに来たんじゃ？」

「それもそうだけど、今日のことが無駄なわけでは無いもの」

「そりゃそうだが……」

「ギルドやその他の施設についても今後役に間違いなくたつもの」

「まあそうだな」

俺もテストだけじゃなくて無駄になると思わねえからちゃんと受けたし……授業中によそ見はしたが

「ただ……俺的にはスキルの方が嬉しいんだが……」

「即物的なのね」

「いや……どんどん覚えねえと死ぬ可能性高いし」

「それもそうね」

「ギルド覚えたって死んじゃ意味ないだろ……？」

と言うか……死亡率マジでなんとかしてくれって思う

減るどころか覚えても増えてるじゃねえか……

「だけどこう言ったものも必要よ」

「そりゃ分かるし特に俺達にゃ重要だが、立華さんとかは今回受けに来てこう言うのだったと言うわけだし……」

「それなら問題ないわ」

「ならいいが……」

「貴方に教えてもらうもの」

ん？別に構わねえが……

「そんなら3年の先輩達に教わった方がいいんじゃねえの？」

「貴方がいいわ」

おう、そう言われると流石に照れるな

「先輩達と仲がいいわけではないもの」

……あっそう言うことですか

そうだよな……うん……

「じゃあどっかダンジョン潜るか？」

「いえ、そう言う気分じゃないわ」

「じゃあどうするんだ……？」

「全ての授業終了したら訓練場開くでしょうし、借りましょう」

「……今日なのか？」

「貴方が言ったのでしょう？」

「そりゃそうだが……ダンジョンなら時間かかるって思ったしな」

「手を抜くつもりはないから問題ないわ」

「了解した」

結局友人のためになるなら嬉しいことだしな

……と言うか俺何伝えりゃいいんだろう？
まだ大したこと覚えてない気がする
とりあえず覚えたこと言うしかないよな……

――――――――――――――――――――――――――――――

「立華さんは魔術はどうなんだ？」

「使えないわ」

「じゃあ魔罠はダメ……そもそも使わないな」

立華さん罠張るよりやること多いし
と言うか罠張らせたら勿体なさすぎて俺がキレるわ

「盗むとかも違うし……」

「大丈夫？」

「うーんうーん」

気付けば立華さんそっちのけでうんうん唸っている

「斥候とかはどうなの？」

「斥候……？」

「ええ、盗賊の仕事であり私も一番することよ」

「そうなのか？」

「前もしたでしょう……？」

「そう言えばそうだった」

俺は盗賊なのに立華さんに任せてたじゃねえか……思い出したら悲しくなってきた

「斥候とかはどうやるの？」

「前もやってた通りでいいんじゃ……？」

「あの方法だと罠を踏むのよ」

「ああ、分身はやられてもいいからですっけ」

「ええ、でもその罠のせいで何かあったら嫌だし知っておきたいの」

「とは言っても……」

今の装備がなあ……

「どうしたの？」

「今の装備罠無効なんだよ……」

「だいぶぶっ飛んだ装備ね……」

「罠種によっては確実かは分からんからＥＯＤ使い続けてるが、このアイテム持ってて罠発動したことはないな……」

「これは……？」

「罠無効と遠方との連絡が取れるやつ」

「……え？」

「立華さんでも驚くんだなとは思ったがそう言ったものがあるんだ」

「じゃあ罠探知はしないの？」

「いやするが……」

「……その方法とか聞きたかったんだけど」

「……そうだよな!?ごめんな何やってんだって話だわ」

なんつーか自慢したみたいになっちまったいかんいかん

「まあ罠の探知は簡単だ、道の前で武器を振るそうすると罠がある場合罠が出てくる」

「……ローグライク？」

「ん？なんか言ったか？」

「いえ……」

「ただ一回一回調べてたらキリなんざねえしスキルを使う」

「やっぱり……専用のスキルあったのね」

「ああ、盗賊コースで初めの頃にやったが、『記憶力』って呼んでる」

「それは……スキルなの……？」

「俺も知識のことだと思ったんだが……仕掛けられた罠を記憶するってことでのスキルらしい」

「そう……」

俺も正直分からん……

なんでこの名前なんだろう……

「それでどう覚えるの？」

「……感覚？」

「……キル夫？」

「いやだって……盗賊コースの奴らは感覚だと思うしよ!!」

俺だってなんとなく使えたって感じだし

「全員がそれを出来る秀才揃いってのも驚きになるわ」

「耳を澄ませて、音を聞く」

「分かった……と言うかキル夫最初からそう言って欲しかったわ」

「いや今は無理だ」

「どうして？」

「誰かがいると使えない、だから先行したりしていたり盗賊同士では距離取ったりしてるんだ」

「何故使えなくなるか分からないけど……」

「音だな、集中するのに他の奴がいちゃ音が阻害されて聞き取れねえ……２年とかになりゃいても出来るらしいが……」

少なくともニケ先輩はやってみせた、俺も驚いたが……

「私でも出来そうかしら……」

「出来れば俺も嬉しいが……難しいかもしれないな」

「どうして？」

「あくまで自分の分身みたいなもの送るだろ？だから完全には音が取りきれないかもしれないってのが」

「まあ……可能性としては考えておくわ」

「だな、出来りゃ最高だし」

「こうなるなら確かに貴方の言う通りだったわ」

「何がだ？」

俺なんか言ったっけ？

「ダンジョンに潜った方が良さそうって話よ」

「ああ、それはそうかもしれないな……」

確かに言ったな、と言うか盗賊関連は勉強だけだと厳しいものがあるな

「今からできそうなこともっと教わることにしましょう」

「何があったかねえ……」

ひとまず使えそうな武器破壊を教えようとしたが……

「ごめんなさい」

「どうした？」

「この武器は壊すわけにはいかないの」

「まあ俺もそうだし使わない武器でやるべきだな」

「他の武器……」

「立華さんはその武器よく見るし当たり前のように使ってるのは分かるけど、予備武器もあった方がいいぜ」

「分かったわ、覚えておいたほうが良さそうだし」

その後も俺が覚えているスキルを教えようとするが……あまり為にならなかった気がする……

そもそもこの子盗賊向きじゃないしな……

「まあ……教えられるのはこんなもんか？」

「有難うキル夫」

「いや……マジですまん」

「成果は十分あったと思うのだけど」

「それでもなんというか許せねえくらいしか覚えてなくて」

「私はあくまで盗賊はおまけ程度でってことでしょう」

「それは……そうだが……神官のが良さそうだし」

「神官については出来ていると勝手に思っているわ」

「そりゃよかった、他の奴は？」

「他……？」

「ああそうだ姉さんとか……」

「ごめんなさい、あまり分かっていないわ」

「……」

そっかあ……どうするんだこれ、立華さんは優秀だし問題ないだろうが誰がどうとか全然分からねえ

「回復よりも攻撃寄りだが、それでも神官として仕事はこなせているだろう」

「ん？」

後ろの方から声がして振り返ってみる

「中嶋？」

「どうした？貴様が聞きたかったものだろう？」

「ああ、多分合ってるんだろうが……」

正直中嶋が声を掛けてくるのが意外だった
しかも唐突にだし

「今年は優秀な神官が多いだとよ」

「すげえなそれ」

「善人ばかりではないようだがな」

「そうなのか……」

正直そこまでは知らねえし……つか盗賊が言えたもんじゃねえし

「中嶋はどうなんだ？」

「さあな」

「他人だけ言ってお前自身のは言わないのかよ……」

「うるせえ」

やっぱり反抗期だ……

「まあただ中嶋が交流できてる時点で驚きなんだが……」

「……」

「いや、悪気があってよりガチでそう思ったから」

「より酷くなってんじゃねえか」

「悪かった」

ごめんって……悪気ないのが尚更酷いのは確かにそうだな
気を付けないと……

「少なくともそいつより浮いてる奴はいない」

「……」

立華さん……マジかあ……
いや……しかしなあ……冨岡さん並みにコミュ障が多いな……

「そうだ」

「なんだ急に近付いて」

小声で話そうと言った感じに詰め寄る
嫌な顔がされたがそれでも離れはしなかった……ありがてえ

「中嶋にお願いがある」

「断る」

「……何も言ってねえんだが」

「これで察せない方がおかしいだろう」

「確かにそうか……」

ただ……そう言うことは気付いたんだよな中嶋……

「なんで？」

「馴れ合う気なんざない」

「だから友達少ないんだぞ」

「貴様と関わるのもやめてやろうか？」

「いやいやいや、そんなこと言わずに」

そんな悲しいこと言わないでほしい

「私なんて遊びだったの？」

「判決を下す」

「ごめんなさいマジで」

流石にそれは洒落にならないので止める

まだ死にたくないです

「いいじゃん」

「俺様の事を勝手に決めるな」

「立華さんとは慣れなきゃちょっと彼女の行動を謎に思うこともあるけど」

「しかも何故そこで下げる」

「頼むよ」

「本当に貴様は頼む気があるのか……」

よし、段々気圧されてきている気がする
このままゴリ押せる気がする

「第一貴様はなんなんだ」

「どう言う事だ？」

「彼女にとってなんだと言う事だ」

「なんだって……友達だが？」

急にどうしたんだ中嶋？

「貴様は友人は名前で呼ぶと記憶しているがな」

「そうだっけ？女の子とかそんな記憶ないけど」

えっと雪菜とかシノアさんとか……

「そっそうだ藤堂は……」

「うるせえ」

酷くない？中嶋が言い出したんじゃん

「つまり正義って呼んでほしい事？」

「命が要らないか？俺のことは話してねえ」

なんなんだよ一体……

「お前にとって友人には格をつけるのか？」

「いや……そんなことしてないが……ただ相手から許可得てねえし」

「相手は名前を呼び捨てなのに？」

「……本当に何がしてえんだ」

「さあな」

「またそれか……」

「いいのか？いい加減待たせて」

「てこでも動かんぞ……」

「いや……立華はずっと待ち続けるぞ……そう言うタイプだし」

「……」

後ろをチラッと見る、確かにじっと待っている

「あの立華さん？」

「何？」

えっとどうしよう……
聞いていいんだろうか？

「いや……なんでもない」

「そう……」

何というか……今までは下の名で呼んでくださいみたいな人達ばかりだったせいでハードルが高い気がする

「えっとかなで？」

結局聞く間もなくぶっ込んだ
何やってんだ俺えええええ

「何……？」

「いやなんでもないんだが……」

「そう……」

なんとか大丈夫そうだ……それなら良かった……

「よしやってやったぞ中嶋……」

中嶋を睨みつけるように見るが

「……あれ？」

いない……いつの間に……

「どうしたのキル夫」

「いやかなで……中嶋が……」

「正義君がどうかしたの？」

「いや……そうだかなで、中嶋とはどんな関係なんだ？」

「えっと……友達だと思ってるけど……コース内でも色々助けてもらってるし」

……ん？

「友達なのか……？」

「よく相談に乗って貰ったりしてるわ」

「……ちなみに最近した相談は？」

「そうね……」

少し悩んだような仕草をした後

「キル夫が立華さんって他人行儀のように思えるけど、本当に彼と友達なのか不安って」

「……」

なるほどそういう事か

「どうしたの？」

「いや……なんでもねえ」

中嶋……面倒見良すぎねえか？

心の底からそう思った

――――――――――――――――――――――――――

第３１話

――――――――――――――――――――――――――――

「キル夫君！もう期末も近づいて来たと言うのに最近来なさすぎじゃないかい！」

久々の戦士コースに来ていきなりオールマイト先生に言われる

「とは言われても俺メインは盗賊っすし……」

だからこそ今盗賊を集中して受けてるんだが……

もっと常日頃から受けておけって話かもだけど期末近くじゃ無ければ普段は魔術や戦士も通ってるし……

「キル夫君は優秀だし他の技能がいいと思うよ！」

「そう言われてもなあ……」

「他の生徒に置いてかれちゃうよ」

「俺は流石にメインアタッカーじゃ無いんで……」

「そんな悲しい事言わないで、君なら出来るはずだ」

「いや……ククリで大太刀に勝てとか無理でしょ……」

軽いし叩き込むには都合が良く自分には間違いなくしっくり来る武器だが
まあガチ戦士に勝つのは無理だ……偶に勝てる相手はいるだろうが舐めてかかっちゃならねえし

「なら武器を変えれｂ」

「ＮＯ」

「勿体ないよキル夫君」

「だから俺は盗賊なんすって」

しつこい誘いもあしらっていく、と言うか先生いい加減俺も始めたい

「分かった……じゃあ先生とやろうか」

「手加減されない未来が見えているのでやめておきます」

「そんなー」

残念がるオールマイト先生を無視して相手を探す

まあほとんどの面子は既に組み合いを始めているんだが……

「……」

「……あー」

誰ともやってないのか……そっか……
いや……そういや戦った事ないけど

「……冨岡さん」

「……」

無言のままこちらを向いてくる
どうやら気付いてもらえたようだ

「やるか……？」

「……」

相手は答えない……え?どうすりゃいいのこれ?

「キル夫君、相手が決まらないなら」

「ああもう分かりましたって大丈夫ですから放っておいてください」

オールマイト先生がしつこく気を取られる
その隙を突いたかは知らないが冨岡さんが突っ込んでくる

「うおっ!?」

「油断するな」

「……」

そんな気はしてたけど戦闘でいいのな了解
と言うか今の一撃でダウンしかけたんだが……容赦なさ過ぎだろ

「おいおい……加減してくれよな」

「意味がない」

こりゃ痛くしなければ覚えませぬって奴か……？
それとも手加減できる余裕なんざねえってことか……難しいなおい

「さてと……どうっすかな」

挑んだはいいものの正直勝つビジョンが浮かばねえ……まあ勝てるとは思ってないけど
どうやって食いつくかだ

「流石に痛み気にせずはダメだしなあ……」

実戦じゃないから刃は落としてあるがだからってそれを利用するのはズルだし

「……」

「おわっと!?」

考える隙も与えてくれねえ……
詰めてくるの早過ぎるだろ

「ひとまず攻めるしかねえか」

様子見がてらに攻める
使ってる武器を振り下ろす
……ただ振った側にも関わらず力負けしている

「なんで振った側が押し返されるかねえ……」

悔しい気持ちもあるが切り替える……悔やんだって結果変わらんしな

「だから手数でやるしかねえんだが」

もう一度振り下ろし払われた瞬間に合わせて蹴飛ばす

「!?」

少し驚いたようだが冷静に躱された……

おいおい……嘘だろ

「本当に避けるのが得意だなおい……戦士じゃねえから厳しいかねえ」

あれも冨岡さんのスキル的な何かだと思うけど……厳しいな

「……行くぞ」

再び攻勢が変わる、大分厳しいんだが……

全然払い切れず手に痛みが残る

「っつぅ……」

本当に力負けしてんなあ……勘弁してくれよ
まあやってやるっきゃねえな……

「っとらあああ」

飛びかかる、ステップを踏んで背中を狙いながら

「……」

それに対応するように身を翻して武器を構えてくる
その途端足元がぐらつき気を取られる

「冨岡さん落ちてくれりゃ一番だったんだがな」

そのまま予備武器を投げつける
そのまま撃ち落とされるがその間に間合いを詰める

「（狙うは足っきゃねえな）」

武器を凪いで落として空いた足を狙う
蹴りを一発入れたものの顔に肘鉄を喰らう

「つぐ……」

「乱暴だな」

「そりゃ上品に戦うわけじゃ無いっすから」

上品なケンカなんざわけ分かんねえしな

「そうか」

顔がヒリヒリするが距離も取り直して振り出しに戻る
これを繰り返せないし不利には変わりないんだが

「さて次はどうすっか」

「次はない」

「は？」

「水の呼吸　漆ノ型　雫波紋突き」

「どういうk」

言葉を言うまでもなく剣で突かれそのまま吹っ飛ぶ
結構な距離飛んだ気がするが……スピード俺以上に早いじゃねえか……

「終わりだ……」

「……だな」

残念だがこれは負けだ刃付いてたら死んでるし……意外にアッサリ負けた以上やっぱ戦士にゃ届かねえか……

「大丈夫か？」

「ああ……痛みくらいは気にしてねえ……」

「そうか」

引っ張られて起き上がる
ひとまず痛み以外は何もなさそうだ

「しっかし申し訳ねえな本当に……」

「何がだ？」

「富樫先輩にケンカ殺法教わってるくせに盗賊がベースのせいでただの我流する雑魚になってる……」

「それはないと思うが……」

「そうか……？」

「少なくともお前は弱くないだろう」

「ならいいんだけどよ……」

「弱くはないと儂も思うがのぅ」

バトルが終わったからか向こうから声をかけてくる

「富樫先輩？」

「ひとまずはしゃんとせい、少し話し合うとしよう」

反省会なのかは分からないがそうして連れられてった

途中付いて来かけたオールマイト先生は練習見てもらいたがってたデクに引っ張られてった

――――――――――――――――――――――――――――――――

「反省点は正直どうなんだろうな」

「いや負けた以上はあると思うんですが……」

「いや、それは自力だろうよ……」

「……」

事実だし言い返せない、素が弱いのはそりゃそうなんだが……

「じゃが安心せい、盗賊コースの中ではピカイチクラスじゃ」

「そりゃ純盗賊よりも劣ってますからねえ」

「そこまで劣ってるとも思わんがな」

そう言われてもピンと来ない
元にカズマや渚よりも盗賊としては下な気がするし

「少なくともニケよりも優れていると思うぞ？」

「ニケ先輩……どうして……」

「アイツはお前以上に薄く広くってより……ほぼ勇者全振りだし」

「どういう事なんですかそれは……」

「盗賊じゃねー勇者だと盗賊のほぼ受けてないようだし……やってることは変わらん気しかしないがな」

「何がしたいんだろう……」

「キル夫、ダメとは言わんがお前には正直勇者スキル覚えている暇があるとは思えんからな」

「分かりました……」

気になってはいるが……正直手が足りないよな

ニケ先輩には悪いと思うんだが……

「で、正直だ」

「どうしました？」

「お前さんにはケンカ殺法も持て余し気味だと思うんだがどうじゃ？」

「どうって……」

やっぱこれ使うなって話なんじゃないのか？俺が弱いからと

「ひとつだけ言うとお前さんを侮っているわけではない」

「まあ富樫先輩がそうするとは思えないですしね」

「お前さんは前衛も積極的に張ろうとするし普通の武術や剣術等覚えた方がいいと思うんだがのぅ」

「普通の剣術ですか？」

「ああ、前も言った通りケンカ殺法は対人向きでありモンスター向きではないからのぅ」

「確かにそりゃそうですが……」

　モンスター蹴飛ばしたところで痛い目見るだけだ……だからこそ活かせてないから勿体ないといつも思うが

「だからこそと思ったがのぅ、完全前衛型のハイブリット盗賊とかにな」

「それも悪くはないかもですが……」

「何か問題あるのか？」

　富樫先輩と話し始めてから初めて冨岡さんが喋った気がする、正直少し驚いた

「それって前衛どんどん張るってことっすよね？」

「ああそうじゃが」

武器もさりげなく変えろってことっすよね？」

「まあ前衛はナイフよりも使いやすい武器あるしのぅ」

「正直変えたくないんですよね……」

「なんでじゃ？」

富樫先輩にツッコまれる

俺のこと本気で考えてくれてるな

「まず短剣ってかククリやめて普通の武器にすると行動力が落ちてしまいますし」

「その分はカバーできそうじゃが……」

「ククリでも１００とは言えませんがボチボチ戦えてますけどね」

むしろ武器が悪いってより悪いのは俺の方だろうし

「まあキル夫がいいんならいいんじゃが」

「それに……」

「どうした？」

「アカネ先輩からの貰い物なんでちょいと変えたくないんですよね」

「なるほどのぅ」

「我儘だってのはわかるんすけど」

「いや、いいんじゃないのか？」

「そうっすか？」

「結局自分のポリシーがある人間はそれを大事にするのも良いことだし」

先輩はただ他人に迷惑かけるならやめとけと続ける

「それにその武器を見ると、明らかに大事にしているし嬢ちゃんのことも大事なんじゃろ？」

「まあ恩もありますしね」

「ならば変な理由で拘ってるわけでもあるまい、むしろ真面目ならええじゃろうよ」

「強くなりたいのは本気ですしね」

「おうおう、ならその武器らしく出来ること増やすしかなさそうじゃな」

「何が出来るか……」

「そのためのケンカ殺法じゃろうて」

「いいんですか？」

「おう」

「ではなんか教えてもらえるんですか!?」

「キル夫、お主にひとつだけ言っておくことがある」

「なんですか？」

これは必殺技伝授の流れだ……遂にその瞬間を垣間見れるのか

富樫先輩意外と派手好きだし

「ケンカ殺法に必殺技なぞない」

盛大にずっこけた

――――――――――――――――――――――――――――――

「師匠は必殺技とか持ってたようじゃが儂はステゴロに特化したしのぅ……」

「どうしてですか？」

「師匠のように闘気が使えんかったから」

「それは……」

「その分素手じゃなくて武器を使い始めたのが儂じゃ」

「なるほど……」

「正直気なんざ言われても分からん、桃なら分かったかも知れんが」

「桃？」

「同郷の友人じゃ、学園にはおらん」

「なるほど」

「桃や師匠は気とか使えたらしいが儂は無理でのぅ……」

「俺も無理そうっすね……」

多分戦士コース一から学んでないと無理だしそんなに割く時間がない

「後はそこの奴みたいな物を覚えるとかな」

「俺か？」

唐突に振られて疑問そうに思う

いやもっと会話混ざってくれてもいいのよ……？

「ああ、お主さっき何かしたろう？」

「水の呼吸か？」

「そう言うのか……よく分からんが」

「無理だろう」

「そっかー」

と言うか冨岡さんから教わるのも無理だと思うし
ほらうん……説明がね？

「ならどうするかと言うと」

「魔術はどうじゃ？」

「……魔術ですか」

結局いつものに辿り着いてる気がする
魔術頼りきりだなあ……

「武器に纏わせる、あるいは拳に纏わせるとかのぅ」

「拳にですか？」

「ああ、魔拳と言う技があるらしい」

「魔拳ですか」

「まあお主の場合はあらゆるものに魔力込めればいいと思うがのぅ」

「魔力枯渇するんですが……」

「それもそうじゃし普段の身体能力上げるしかないじゃろう」

「そうですか……それが一番辛いんすけどね」

「結局喧嘩するには体が基本、そんなもんじゃろう、魔力は秘密技……まさしく必殺技じゃな」

「まあそうっすねえ……」

「モンスター相手に取っ組み合いとかしても困るがな……」

「俺もそれはしませ……いや偶にするな」

「するのか……まあ気をつけるんじゃぞ？」

「そりゃそうっすね」

燃えてたりトゲトゲの相手だったら不味いし……
そう言うのも気をつけてやらなきゃなんねえな

「富樫先輩、ありがとうございました」

「いやいや、弟子にこれくらいしか出来んのが不甲斐ないばかりじゃがな」

「いや、富樫先輩のおかげで本当に俺らしい戦いが出来てると思います」

「カッカッカ、それなら良かったのぅ」

「冨岡さんもサンキューな」

「……」

「どうした？」

「……義勇だ」

「おっと了解したぜ義勇」

「……」

何も言ってはくれないが顔は嬉しそうだ……良かった

「それじゃあ儂は帰るとする、ではな」

「では」

授業も終わり分かれる、義勇も帰っていった
さて……俺も帰るか……
誰かに肩を掴まれた

「……？」

「聞いたよキル夫君」

「……何をですかオールマイト先生」

聞かれたくない物を聞かれた気がしたんだが……どうしようかこれ

「いやキル夫君に体力が必要だと」

「ソウデスネ……」

そこしか気にしてなかった？
いや魔術とか興味なさそうだしそう言うことか……

「では走り込みを始めよう」

「え？」

何を言い出すんです？この人は？

「体力作りのためには走り込みが必要だからね！」

「……今から？」

「勿論」

「……俺戦闘したんですけど」

「そのあと休憩したしいいかなって」

「……」

確かにしたけどさあ……

だからって今から走り込みは酷くない？

「……ちなみに何周？」

「そうだねえキル夫君は戦士の皆に比べて遅れてるから」

嫌な予感がして来た

「１００周かな？」

「いやだああああああああああ」

訓練場に悲鳴が叫び上がった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

第３２話

「死にそう……」

１００周マジで走らせるなんざ思わなかった

しんどい……帰りたい……

「よっ元気そうじゃねえか」

「これのどこが元気そうに見えます……？」

返事をしながら後ろを振り返る

「いやあ男なら成長してナンボだろうよ」

「本当に自力なんですかそれは……阿部先輩」

「おう、スキルとかは脳髄頼ったりばかりだが筋肉とかは自前だぜ」

確かに……筋肉が脳髄キメるだけで成長するわけないか

「ただ……効率の良い方法とか知ってそうですね……」

「まあな、だがいいだろう？」

「文句を言ったところでですしね……」

ところで阿部先輩はなんのようなんだ……？

「俺なんかしましたっけ？」

「いや、そうじゃないさ」

「では何かようで？」

「ああ、やらないか？ってな」

「……」

身の危険を感じて後ずさる……これはやべぇ……

「おいおい……逃げなくたっていいだろうよ」

「いや……誰だって避けるでしょう」

これはマジなやつな気がする……怖い……

逃げても追いつかれる気がするが全力で……

ただ全力で逃走したが壁際に追い詰められる

「初めてじゃないだろうよ」

「いやいやいやいや……」

やべえ……マジで詰んだ?

「マクギリスには話をつけてある、なっいいだろ?」

「さっ3人っすか?」

「ダメか?」

「いや色々と……」

「もっと多い方がいいのか?欲張りだな」

「いえ……そうじゃなくて……」

これ以上増やすのか……マジでどうする気だよ？

「それで場所はどうする？」

「場所って……？」

「まさかここでおっぱじめることは出来ないだろ？」

「それはまあ……そっすね」

「と言うわけで何処にするかだ……」

「と言うか決定事項なんすか？」

「嫌なのか？」

え？むしろなんでいいみたいな雰囲気なの？怖いんだけど
いや待てよ……もしかしたら勘違いかもしれない……そうであってくれ

「ちなみに……何するんですか……？」

「おいおい気付いてなかったのかよ」

信じたくないから聞いてるんですが……
と言うかそうであると信じてるんですが

「楽しいことに決まってんだろ」

「……」

いやだあああああ助けてくれえええええ

「……何やってんの？」

「まどか先輩!?ヘルプヘルプ!!」

心底感謝しながら助けを求める

「えっとお邪魔だったかな……？」

「いや……まあこれからやるからいられても何も出来ないが」

「ヘルプヘルプ!!ヘルプ!!」

ただヘルプと叫び続ける

このままじゃ大変なことになるんです

「えっと阿部君無理やりはダメだと思うな」

「ですがこいつ経験者ですしいてくれた方がいいなって」

「えっそうなの？」

「なんで!?」

やっぱこれ予想してるの違うって
もしくは阿部先輩の俺への見方が違うって……前者がいいなあ

「で？何するの？」

「普通にダンジョン行くだけだが」

「最初からそう言ってくださいよおおお!!」

「面白いことだろ？」

勘弁して欲しい
凄い冷や汗が止まらなかった

「ああもしかしてそっちの方が……」

「勘弁っす!!」

マジでやめてくれ……本当に怖かった……

「と言うか今行くんですか?」

「ああ、期末が近いからな」

「そういえば……もう一月ないっすもんね」

そう考えるとダンジョン潜って自力の確認もしたいし丁度いいかもしれない

「誰と行くの？」

「俺とキル夫とマクギリスっす」

「私もいいかな？」

「……構いませんが」

「嫌そうだけど」

「男子会のつもりだったんで」

「それはキル夫君を困らせた罰ということで」

「はい……」

少しだけ阿部先輩はガックシしている

危なかった気がする……

「鳰ちゃんは呼ぶつもりだったけど今回はやめておこうかな」

「じゃあ、４人ですか？」

「そうだな、まどか先輩がいるならどうにかなりそうだな」

「そうっすね、まどか先輩強いの分かってますし」

「私は神官なんだから戦士２人が頑張ってよね？」

「まあ、俺とマクギリスか」

「マクギリス先輩と組んだこと無いんですが……」

阿部先輩とはなんだかんだ組んだことはあるが……正直初めてなんだが……

「まっ君かー……」

「どんな人なんです？あまり知らないんですが」

「バエル」

「映える……？」

何？イケメンなの？確かにイケメンだが……

「まあ行ってみようか」

「そうっすね」

「了解しました」

そう言いいつ阿部先輩は帰っていく
身の危険じゃなくて本当に良かったと思う

「キル夫君ちょっといいかな？」

「どうしましたまどか先輩？」

「魔術どうなった？」

「魔術はどうなんでしょうね……」

正直まどか先輩は信用してるんだが……
校長の件があって少し話すのが怖い

「そっか、はやてちゃんと一緒に色々と調べてみるから」

「ありがとうございます……」

騙していいものかと罪悪感があるが……それでも話すことは出来なかった

――――――――――――――――――――――――――――――

「さて、我々はダンジョンへとやって来た！」

いきなりテンション高いなあ……いや俺もワクワクしてるけどさ

「ギャラルホルンの心理はここにある!!皆のもの、私に続け!!!」

「勝手に進められても困るんだけど……」

「はっすみません、まどか先輩！」

何というか……先輩だらけなのも久々だな……海底洞窟以来か？

「とりあえず進みましょうか」

「だな」

皆で進んでいく……すげぇ安心出来る
ただ……俺することあんのかなこれ？

「キル夫君変わったね」

「何がですか？」

「前は先行して見に行きます!!ってばっかりだったのに鳰ちゃんいるのに」

「いやあ……はい、痛い目あったんで」

「そっか……まあ自主的に行くのは間違いだと思うしね……」

そういやオルガ先輩達と最初に行った時もオルガ先輩に偵察お願いしたい時ニケ先輩と一緒に頼まれたな……

「分かりました」

「まあ期末までに間に合って良かったってことで」

そういえば期末と言われると気になることがある

「先輩方少しよろしいでしょうか？」

「うん？どうしたのキル夫君？」

「期末テストって何やるんですか？」

「あー……」

あー……って何!?
え？マジで何する気なの!?怖いんだけど

「分かんない」

「そうですか……ダンジョンアタックですかね？」

「いや、違うと思うぜ？」

「中間とは違うんですね……何やるんだろうな？」

「正直予想がつかないところだな」

「去年は……」

「去年は俺達も含めてバトルロワイヤルやったぜ」

「色々と言いたいところはありますが……それでいいんだ……」

「一昨年は鬼ごっこだったよ」

「鬼ごっこ……？」

この学園に似合わない言葉が聞こえて来て戸惑う……鬼ごっこ？マジで？

「うん、２年前は鬼ごっこだったよ」

「何やったんです……？」

「だから鬼ごっこだって」

「いやそれは……分かったんですが……」

それでも鬼ごっこってなんなんだよ

「学年の中で優秀な生徒が校長先生に呼ばれて鬼をやるんだ」

「なるほど……」

もしかして校長あの時俺に声を掛けた理由ってそれもあったのか……？
で期待外れだったみたいな？いやカーミラ先生に呼ばれたみたいだし分かんねえけど

「それで他の生徒を追う、生徒は逃げるみたいな」

「シンプルで分かりやすいが……期末それでいいのかって不安になりますね」

「いいんじゃないの？殺しあうレベルでやれってわけじゃ無いだろうし」

「いや……結構死人出たよ」

「マジか……」

本物の鬼が参戦してるんじゃ無いだろうか？
いやまあ……流石にそれはあり得ないけど

「聞いた話だとようは逃げきりゃ言い訳だから命懸けでやりあった奴らが居たみたいだぜ？」

「そりゃまた……」

確かに点数は欲しいかもだがそこまでやっちゃダメだろうよ……
冒険者になって死なないための学園なんじゃ……

「そこまで点数厳しいんですか？」

「ああ、かなり響く」

「うわ……」

そんなのありかよ……当然だろうが学園が死人出させてどうするんだ……

「俺も聞いた時はちょっとヒいたがな……ただ……」

「どうしました？」

「去年のバトルロワイヤルのがヤバかった」

「もう名前の時点でヤバイですもんね……」

「ああ、文字通りの殺し合いだったよ」

「……本当に……本当になあ」

「私達も生き残るために戦いあったさ」

「マクギリス先輩はまだマシな気がしますが……」

「ああ、全てはバエルのおかげさ」

「あっはい」

「それでも……殺しあう必要なんてなかったですよね？」

「ああ……勿論敗者は死というわけではなかった」

「だが……戦闘不能になるのは難しいもんだったよ」

「……」

言いたいことは分かる……そりゃそうだ……互いに勝ちたいんだし死ぬのはあるだろうな……

納得出来ねえが……

「少なくとも今年は……生徒同士で争いたく無いんだが……」

「どうだろうねえ……私でも今年のも予想つかないからなあ」

「と言うか……一昨年は鬼ごっこで去年はバトロワって……変わり過ぎって気も……」

「去年から変えました、だったら最悪だな」

「まどか先輩達は先輩達に前にやったもの聞いてなかったんですか？」

「……聞くこと考えてなかったなあ」

「正直お前がそのこと聞いて来て驚いてる……」

「期末重要ですよね!?」

「ああ……重要だったが考えてなかったな……」

「私達もその努力を怠るべきでは無かったな」

「……」

いや……まあ俺から何か言うのは違うから言わないけどさ

「だって今年のならまだしも……去年のなんて気にするか普通？」

「いや……今年の分からないなら去年から推測するしか……」

「……そうだなお前が正しいよ」

「キル夫君他のメンバー大事だもんね」

「ん？大事じゃ無いですか？」

いや、まどか先輩とかも他のメンバー大事にしてるの分かるが

「大事だけどさ、それでも一番大事なのは自分だから」

「うん？それはそうじゃ無いですか？」

「キル夫君の普段見てるとそう思わないんだけど……」

「え？なにそれ？俺そんなヤバいやつだと思われてるの？」

「私は分からないが……まどか先輩に言われるなら相当だろうな」

「……そっかー」

「……実は聞いちゃったんだ」

「なにを？」

「この前のダンジョンアタックのこと」

「……誰から？」

「アカネちゃんから」

「……マジかー」

アカネ先輩マジですか……
いやそりゃ話すんだろうけどさ

「まあキル夫君が恥晒した件は今は置いておいて」

「結局じゃあ何を？」

「いや、三葉ちゃんのために崖に自分から飛び降りたって」

……いやアカネ先輩何処まで話してんの？

「多少語弊があるんですが……」

「でも彼女のために飛び込んだんでしょ？命も惜しまずに」

「……」

「好きなの？彼女のことだからこそとか？」

「いや……アレは完全に俺のせいなんでどうにかしないとと」

「それでも戸惑うよ、飛び込む人はいないよ」

「あの時はどうにかしなきゃって」

「だから自分の命よりも他人に賭けれるって言ってるんだよ」

言われてみるとそんな気がして来た
自分はもしかしてそんな人間なんじゃ？

「別にダメとは言わないけどね」

「ならなんで……」

「いい人ほど早死にするよ、そんな世界だから」

「……」

そうだよな……そうなっちまうよな

「死にたくは無いっすね……」

「誰だってそうだよ。死ぬかどうかであって、死にたくて死んでるわけじゃ無いって」

「分かってはいますが……」

「まあそう言う冒険者は仲間多いしね、いいと思うよ」

「まあ……そう言うのもありますね」

「とにかく、言ったは言ったけど今の君のなまでいいと思う」

「はぁ……分かりました」

まあ……今後もやること変わらないけど……

だって変わる必要ねえし……

「結局話が逸れまくりましたが、期末は何やるかわからないってことですね」

「そうだねえ……またどうせ死ぬ人たちが多いのは変わらないんだろうけど」

「……最悪じゃねえか」

「でもキル夫君が頑張れば生き残る人増えるかもね」

「その代わりに俺死にそうっすね……」

「なんだかんだ言ってお前は生き残りそうな気がするけどな」

「そうですか？」

「ああ、なんつーかわけわからんものに愛されてる気がする」

「なんですかそれは……」

「いや分かんねえんだ……ただマクギリスが言ってたのを聞いてからそう思ったわけだ」

「マクギリス先輩、俺に何か見えるんですか？」

「君にはアグニカを感じる」

「どういうことですか？」

「アグニカはバエルだ」

「？？？」

話が分からないので今は置いておこう、正直今は落ち着きたい

「ちなみに阿部先輩は意味わかります？」

「分かるわけないだろう」

「ならなんで察したんでしょうと言いたくなりますが」

「まあ気にするな……」

「いや……俺のことですし物凄く気になるんですけどね」

「まあキル夫君はなんだかんだ謎だらけだしね」

「それは気になって来たな、どうだい？知り合うために俺と一晩どうだい？」

「エンリョステオキマス」

勘弁してください

と言うかなんで俺の方そんな見てくるんすか？

「そっそろそろ行きましょうよ」

「なんだつれないね」

「一生つれないと思います」

「残念」

「流石にしつこいよ」

「すみませんまどか先輩……」

遂に阿部先輩まで怒られ始めた、と言うか事態がカオス化し始めた

「とにかく進みましょう」

「了解した……」

まどか先輩に睨まれながら阿部先輩も従う

マクギリス先輩は普通に従っている

とにかく進めたのはいいが……期末も気になるが今回の探索も集中しなきゃなと思った

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

続

第３２話②

道中コミュ：マクギリス・ファリド

「キル夫君、どうしたのかね？」

「いや……さっきは流したんですが」

それでも……やっぱり気になるわ

「アグニカってなんですか？」

「なんですか？と言われてもアグニカはアグニカだ」

「えぇ……」

本当になんなんだ……？
言葉に表せないものではないと思うんだが……

「何かあるんですか？」

「良いことをすればアグニカポイントが貯まる」

「えぇ……」

本当にアグニカってなんなんだ……？クーポン？

「溜まるとどうなるんですか？」

「１０００アグニカで１バエルだ」

「えぇ……」

「キル夫君さっきから同じことばかり繰り返しているが……」

「ちょっと理解に及ばないことだらけなんで……」

アグニカって本当になんなんだよ……

バエルってなんなんだよ……

「バエルに変わるとどうなるんです？」

「アグニカに満ち溢れるだろう」

「それ結局戻ってない!?」

つい突っ込んでしまったが……戻ってるよなあ明らかに……

「いずれ分かる時が来るだろう」

「まあ……徳を積めって事ですね」

「アグニカに満ち溢れることを願っているよ……」

ダメだ、話すたびに困惑する……話題を変えなければ

「そう言えばマクギリス先輩の乗っているそれって」

「ああ、バエルのことか？」

「バエルってそれのことなんですか……」

やっと一つ理解できた……と言うか難しすぎんだろ……

「え！と言うか１０００アグニカ貯めるとバエルが貰えるってことですか？」

明らかに何個もあるように思えないんだが

「どう言うことだ？」

「……あっもういいです」

違うのかよ

益々わからなくなって来たわ

「戦闘出来るんですか？」

「この状態で戦うなら阿部よりも強いしな」

「それはそうでしょうね……」

ガチガチに武装された乗り物なら流石に一般人じゃ勝てやしないだろうし……

「残念だが魔術師じゃないから魔力の枯渇が早いんだがね」

「魔術師コースでやったほうが良かったのでは？」

「いや……魔術師としてやるにしては異端だしな……」

「確かにそうかもしれませんね……」

「ただ、私はそれでいいんだよ」

「それで仲間から頼られるならそれに越したことは無いでしょうね」

「そう言うことだ」

「俺も頼りにしますね」

「ああ、後輩に頼られる立派な先輩となろう」

少しは分かり合えたようで良かったかな……？

―――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ：阿部高和

「よう、順調じゃないの」

「なら良かったですが」

「おう、俺達は悟空達と行くことが多いし盗賊が居ない時も多いからな」

「ああ……それは大変ですね」

「おう、罠踏みまくるし……このアイテムのおかげで罠踏まねえのもありがたいしな」

「自分も様子見程度で済むようになって楽になってます」

「ああ、そうだな罠チェック一々要らないから時間短縮にもなってる」

「その分空いた時間で他のことに回せるしな」

「そりゃいいですが……なんで寄ってくるんです？」

「いや空いた時間でお礼をとな」

「いえ……大丈夫です」

「遠慮すんなって」

迫り寄ってこないでくれ……すっごい怖い

だから怖いって……

「阿部先輩って、脳髄今までどれだけ摂取したんですか？」

なんとか話題をズラそうとする
と言うかこのままだとマジでヤバいし

「脳髄か？」

「ええ、先輩の中でもかなり多い方って聞いたんで」

「ああ、確かにそうだな」

まあ……全員が全員口を揃えて言うならそうなんだろうなと

「悪いが数えちゃいない、そうだな相当な量を摂ってるよ」

「最悪取ることを考えますが大量摂取は考えてないんすけど」

「強くなることを躊躇うわけにはいかないからな」

「やっぱ強くなるんですか？」

「そりゃそうだ、元から強かった奴ほど経験値が入る」

「仲間襲わないでくださいよ……？」

「勿論、俺が襲うのは犯罪者や仲間を襲うようなクズ達とかだ」

「まあ……確かにそれなら……」

問題ないのかな？いや問題ないと考えようそうしよう

「所謂プレイヤーキラーキラーって奴だ」

「何それカッケー」

「キル夫もやってみるか？」

「いややりませんけど」

「ちっ、折角襲うチャンスになると思ったんだけどな」

「阿部先輩!?」

「ははは嘘だっての」

「いや、ガチな気がしたんですが……」

「まあ、アンタが悪人になるなら遠慮無く経験値にしてやるよ」

「まあ……なるつもりは無いっすけどね」

「あったやつが居たら驚きだけどな」

「そうっすね」

ひとまず俺は平気らしい……良かった

「そういやキル夫、俺とどうだい？」

「……」

平気じゃなかったかもしれない

――

コミュ：鹿目まどか

「キル夫君お疲れ様ー」

「見てたなら助けて欲しかったんですけどね……」

「ウェヒヒヒ……ごめんごめん」

「もう……」

「でも仲良そうで良かったね」

「まあ先輩達といがみ合ったらやってられないっすしね」

「いいことだよー、喧嘩ばかりしてる子とかいるしねえ」

「まあ居ますねえ……」

爆豪辺りはモロそうな気がする

後は先輩と相性悪そうな人もいそうだなあ……

「正義君辺りももっと打ち解けてくれたらいんだけどねえ」

「あー……」

中嶋はまどか先輩の話するたびに面倒臭そうにしてるしなあ……ガチで相性悪いんだろう……

「どうすればいいか分かる？」

「ちょっとそこまでは分かんないっすね」

正直アイツのことそこまでは分からない

俺ももっと仲良くできりゃいいと思ってんがねえ……

「そう言うこと言うと嫌そうな顔するし」

「分かります」

　マジでそう言うの良く無いと思うよ中嶋君
　ぼかぁねえ……

「と言うかキル夫君そんなに正義君と仲いいの？」

「そりゃ、いいと思いますがねアイツツンデレでも対応してくれますし」

「あーやっぱツンデレなんだー」

「そりゃもうガッツリツンデレっすよ」

「えー、いいなー私も見たいー」

「ですよねー」

本人に聞かれたらぶん殴られる気がするがいないからセーフ

「キル夫君はー？」

「どういうことです？」

「キル夫君はツンデレしないの？」

「え？」

「ツンデレしないのかなーって」

「ちょっと何を言ってるか分からないんすが」

そもそも俺はツンデレと程遠いんですが……

中嶋みたいに振る舞うのは無理だって……

「出来る出来る」

「勘弁してください」

「ちぇー」

あっさり引き下がってくれたようで良かった……
まどか先輩のことだから妥協なんざしねえと思ったし

「まあ実際に今回のダンジョンで活躍しまくってる方無理強いできないんだよねえ……へそ曲げられても困るし」

「まあ曲げはしませんけど……」

「じゃあする？」

「勘弁してください……」

「だから無理でしょ」

「まあそうっすね……」

「今度無茶振りするから覚悟してね」

「!?」

ちょっと待ってちょっと待ってくれ
待ってくれえええ

「女装とかどうかな?」

「勘弁してください……」

「まあ考えておいてあげるよ……」

果たして俺は助かるのだろうか……？すっごい怖い……まあ生き残れるといいな色んな意味で……

――――――――――――――――――――――――――――――

「キル夫、何やってるんだ？」

「ああ、阿部先輩ちょっと待ってください」

違和感を感じてこの辺を探る
なんかありそうなんだが……

「ん？」

少しだけズレてる所がある……なんなんだ……？

試しに触ってみるとガコッと音がする

「おわっと!?」

ふとよろける……壁が無くなった

「キル夫君?」

「隠し部屋みたいっすね……」

「これはアグニカポイントになるだろう」

「ははは……そっすか」

どう反応していいのか分からない……

いや……いいことなのかもしれん多分

「で？行くでいいんだな？」

「いいと思うよ」

まどか先輩のＧＯサインが出て探索に出かける
何があるか……

「宝箱……」

目の前にあからさまな宝箱の群れがある
これ全部お宝なんだろうか……？
だとしたら凄いが……

「キル夫君お願い」

「了解っす」

次々と罠チェックをして行く……

「痛っ……」

「大丈夫？」

「はいこの程度なら」

俺でも痺れる時点で不味いか……？
ただこの程度で済んだんですが

「んで最後のこれだが……」

明らかに他と違う豪華な箱……

「凄いなこれは」

「凄い分怖いんですけどね」

「ん？どうしてだ？」

「豪華なのって寄せやすいんですよね」

「ん？何をだ？」

「人をです……だから罠っぽいんですよね……」

「だけど開けるしかないよね……」

「そうっすね……」

罠はないようだ……逆に怪しいんだが……

「開けるか……」

「大丈夫？私達で開けた方がいいんじゃ？」

「いや良いですよ……俺より他の皆のが戦えるんで……」

そう言いつつ開ける、と言っても何もなきゃ別に問題ねえし……

ミミックが現れた

「……だよなあ」

急いで回避して大事に至らなかった

ただ今俺死にかけなかった!?

「よし戦うか」

阿部先輩が武器を構えて戦い始めようとするが

「……」

あの……まどか先輩……

「ふぅ……」

疲れるはずもなく一瞬で終わったんだが……ミミックが一射で死んだんだが……

「流石ですね先輩……」

「無事そうで良かったね」

「そりゃ流石に一瞬で死んだなら……」

そのままお迎え宝箱を開けまくることになったがミミックはそれだけだった……本当に罠に嵌める気あったのかこれ？

「かなりの額になりそうだな」

「便利そうなものも山分けしながらどうにかなりそうだね」

「後ひとつか」

最後の宝箱を開ける……

「服？」

なんだこれ真っ黒でカッコいいな

「キル夫君それ……」

「なんすか？」

「バトラースーツじゃない……？」

「バトラースーツ？」

なんだそれ？バトラーって役職か？学園で聞いたこと無いけど戦えそうな役職だな

「まあ使用人的な」

「え？使用人こんなカッケーもん着るんすか？」

正直驚きなんだが……使用人ってなんか中年の方がお手伝いさんみたいなイメージあったし

「着てみる？」

「ただそれ防具としては……」

「少なくとも今のキル夫君のより強いし今のアーマーよりも軽いよ？」

「マジで!?」

そんな強いのか……予想外だ

「と言うか未だにプレートアーマーなんだなお前」

「そうですね」

「防具屋で探せば良かったのに」

「何というか……欲しい防具が見当たらなくて」

「どういうのだい？」

「……トゲトゲのやつ」

「おいおい、キル夫それじゃ世紀末だ」

「ダメですか……？」

「そんな無法者したいなら相手してやるが？」

「なんでそうなるんです!?」

なんで俺はさっきから追い詰められてるん？

と言うかトゲトゲダメなの……？

「と言うか……そう言うのも売ってるんじゃ？」

「売ってるんですが……」

それには致命的問題があるんだ……

そう……致命的問題が……

「マントに穴開くんです」

「……ああ」

察される……そりゃ分かるだろうけどさ

「マント外せばいいのに」

「やですよこれは浪漫なんです!!」

「じゃあトゲ諦めようよ……」

「今諦めようかなって思ったところです」

「試しに着てみたらいいんじゃないかな?」

「と言うかこの服俺のにしていいんですか？」

そう聞くと全員がいいと答えてくれた、優しい人たちだらけだな……

袖を通したが……凄い軽いなこれマジで耐久出来るのか？

逆に不安になってきた

「おう、試すか？」

「いや……先輩達の一撃重いので敵で試します」

「おう了解」

しかしマントもそうだがこのスーツいいな

本当に冒険者なのか不安になるけど

「キル夫君の格好ってさ」

「なんでしょう？」

「白い仮面を付けてみると」

「やめないか！」

まどか先輩の事を阿部先輩が遮った……なんなんだ？

「あの今何を……？」

「君は気にしなくていい」

マクギリス先輩にも止められた……分かった諦めるか

「それじゃあ帰ろうか」

「あれ?さっきの方行かないんですか?」

「正直お宝が入ったからいいと思うんだけど……」

「それならいいですが……」

正直ボス戦しないなんざ驚いたが……まあいつもダンジョン潜ってなんかやばいのと戦いすぎたせいだと思うけど

「たまにゃこんな日あってもいいよな」

そう言いながら外に出ようとすると入口に誰かいた

いや……誰かってよりもモンスターかあれ……

「やっぱ戦うことになるのか……フラグ建てちまったかな」

「さあ、かかってこい」

ＢＯＳＳ：

「グハッ!?」

「一瞬で死んだ!?」

「だって雑魚だし……」

「そうですか……」

いやそれにしても一撃でやれる相手じゃないだろ……明らかに知能持ってそうだったし

と言うか海底洞窟でのあの苦戦マジでなんだったんだよ……

「それじゃあ帰ろうか」

「うっす……」

ひとつだけ言えることは
まどか先輩がボスじゃねえかなあって……

報酬：８ヶ月分、バトラースーツ

―――――――――――――――――――――――――――――――――

第３３話

――――――――――――――――――――――――――――――

「皆さん、期末まで後1週間を過ぎましてもう明後日なのですが調子はどうですか？」

追い込みとばかりに魔術師コースへとやってきた

鬼ごっこやバトロワなら今は盗賊コースよりもこっちだと思ったしな

「さて魔術師コースとしては期末間近ですにでいつも通り対人での練習と言いたいですが……」

俺もそうだと思ったんだが……違うのか？

相手には悪いが出せる力全力で出したかったんだが

「今日はそうですねえ……」

ボンボルド先生は考える素振りをしている
絶対もう決まってるようにしか見えないんだが……

「今日は期末前ですし実力が分かりやすいように……先生と戦いましょうか」

「……は？」

色々と疑問に思いながらつっこむ、先生と戦う？

「はーい先生、１対１ですか？」

生徒の１人が尋ねる、確かに俺も気になりはした

「いいえ、全員で来て構いません」

「……」

流石に舐め過ぎてないか？1年何人いると思っているんだ
せめて数人だと思ったが

「へっ流石に俺らを舐めすぎなんじゃねえのー？」

勝てるとしてもアイツは間違いなく負けるだろう、それは分かった

「負けるなら負けでそれでいいのです、今の実力を見るにはこれが1番そう思ったのですから」

「確かにそれはそうなのか……？」

見るよりも戦う方が分かるが……人数が人数で戦って大丈夫なのか？
それを見る事って出来るのか……？

「では、やってみましょうか」

「少し話し合いとか時間欲しいんですが……」

「それもそうですか……では少しだけ」

正直連携なんざ取れる気がしないし少しだけ相談しながら……

「んなもんいらねえよ行くぜ！」

あー……馬鹿が突っ込んでったマジかー

それに釣られて数人ボンボルド先生の方へ進んでいく

「……おやおや」

ボンボルド先生の方向へ多数の魔弾が飛んでいくが軽くいなしている……多分考えなしだと全員でやってもダメだったかもしれん

「いけませんねえ、折角キル夫君が言ってくれたものを守らないなんて」

すぐにボンボルド先生の攻撃が始まる……なんだあの火球……待てヤバくねえか？

「うっわあああああああ!?」

さっきまでイキってた奴らが丸焦げに……マジかよ

死んではないけど……死んではないよな？

「死んではいませんよ？」

「……なんで？」

「いえ、聞きたそうにしてましたので」

「確かにそうですが……」

どうして分かったんだよ……怖いなおい

「では皆さんはどうしますか？」

「……作戦タイム」

「認めましょう」

こうして改めて貰った作戦タイムだが……どうしろと？

――――――――――――――――――――――――――――――

「さてどうしようかキル夫クン？」

「どうかなあ……」

狛枝が聞いてくるが実際どうしたらいいんだろうな？

「闇雲に囲んでもやられちゃいますよね……」

「ゆんゆんさん、爆裂魔法はどうなんだ？」

「あまり効くように思えませんしそれ以上に味方の被害の方が大きいかと……」

「まあ分からなくもないが……」

だからこそ決定打になるかを聞きたかった、俺たちでボンボルド先生のヤバいの抜けられなきゃアウトだし

「……難しいなやっぱり」

試験前もあってか知り合いの数も少ない

そもそも魔術師コースに来るのが少ないのが仇になった……周りの実力を知れてねえなんなら狛枝のことだって分かり切れてねえし

何度か顔を合わせてるマルシルさんは突っ込んで気絶した側だし……

「困っているのかね？」

「そりゃ流石に……困ってるよ」

えっと誰だっけな……

「私抜きで止められるのか？ボンボルド先生を」

「いや……皆で力を合わせにゃ無理だと思うが……」

そうは思ってるが一体なんなんだこいつ？

「黎斗クン、どうにかできるかい？」

ああ、確かそう言う名前だった気がすんな……狛枝もこう言うし魔術師として恐ろし

そうだ……

「ああ、私ならば出来るだろう」

「助かります……」

その後なんやかんや自画自賛が続く
気にしてる余裕がないから切らないと

「先生と本気で戦える機会など滅多にないからね」

「そんなに戦いたかったのか……？」

「最高のエンタメイトじゃないか！」

「あっそう……」

さっきそこで丸焦げになった奴らいるんだがそれでもエンタメイトなのな……

「それじゃあ次は」

「本当は待ちたいのですが流石にこれ以上待つと授業が終わってしまいます」

「え!?」

「行きますので各自準備を」

奇襲してこなかっただけ幸いだが……それでも話し合い纏まってねえ……あの人が結構自画自賛してたのもあって……どうにかなりゃいいんだが

「ひとまず散らばれ」

纏まってたらやられるのは分かっている、流石にそれは困るしな

案の定開いて後に炎が飛んできた

「危ねえ」

「流石に誰もかかりませんねえ」

「そりゃそうだろ」

さっきのまで見て気を付けてるのに嵌るわけなんざねえ……各々無駄に怪我したくないんだよ

「囲め囲め」

分散しないとどうしようもない
現状どうしたものかと言ったところだが囲んでおく

「おやおや、さっきまでと同じじゃないですか？」

「流石にそんなわけねえだろ!!」

ただ魔力だけで戦おうとしてもさっきのメンツみたいに痛い目に合うので考えて戦うしかねえな

闇雲に突っ込んでもそれはそれでダメなんだが……

「……」

信じていいんだろうか、壇はまあただの雑魚じゃないだろうけど……

「さてまずは檀君から」

そう言いつつ多数の魔弾が飛んでいく

やべえあれ大丈夫か!?

「……!?」

「壇ーーーーーー!?」

あっさりやられてないか!?大丈夫なのか!?
煙で今ちょっと見えないが……あっやられて……

「ツハッハッハッハ」

「復活した!?」

なんだこれ……壇が復活した!?
ひとまず無事で良かったが

「本当に面倒な相手ですね」

次々に壇が狙われているが……普通に耐えているのかよ
凄いのは凄いがこっからどうするか……

「壇どうにか出来るか？」

「まあ待ちたまえ」

壇がそう言って待つが流れ弾に当たって戦闘不能になるメンツが増える

本当に色々とありかよ……

「と言うか当てられない時点でテストもなんもないだろ……」

文句を垂れながらも回避していく……本当にみんな減ってっているが大丈夫か？

「壇何をすりゃいいんだよ!!」

「待たせたな、やはり私は天才だ！」

そう言って両手をあげて喜ぶ

本当になんなんだ……？

「やってくれましたね……」

「え？」

マジで何をやったんだ？何かやったように思えないんだが……

「ふはははは、突っ込むぞ」

「え？結局弾かれるんじゃ？」

「ハッキングは終了した」

「ハッキング……？」

「どの道大丈夫だと言うことだ」

何を言ってるが分からないが……

「君をそのままにしておくわけには行きませんね」

「自分の才能というものは本当に恐れ入るな」

「壇さん気をつけた方が？」

「安心したまえ天才に負けはない」

「バインド」

「ぐわー」

そのまま壇は捕らえられた、助けようとするが持ち上げられて無理だ

「君にこれ以上やらせるわけにはいかないので」

「先生……実力見たいって話なのにズルくないですか？」

「君は蘇生しまくりとは言え死にまくったんだから反省しなさい」

そのままフェードアウトする

確かに先生にとっちゃやられ過ぎたんだろうしなあ……

「さて、２回戦お願いします」

「ええ、皆さん頑張ってください」

張ってあったものは消えたが……しかし勝てる気がし……

ただ……試合を見るだけだし仕方ねえか

やってやる！

―――――――――――――――――――――――――――――――

「ゆんゆんさん、お願いします」

「はっはい！」

爆裂魔法ではない技でボンボルド先生を攻撃する
ただ簡単にぶつけ合って中和させる厳しいな……

「んじゃこれは……」

「ダメだよキル夫クン突っ込んじゃ!!」

「ッ!?」

狛枝の言葉とともに後ろへ下がる
その直後床から黒い物体が飛び出てくる

「危ねえ!?」

「かわされましたか」

「こえええ……」

「キル夫君は早いうちに捕獲しておきたいのですが……」

「俺もかよ!?」

「君の場合回避されそうなので」

「まあ全力で逃げるわ」

「なので捕獲します」

「やめてください」

少しはダメージ与えた気がするが……それでもこっちのメンバーが減るのが早い

「勝てなくてもいいが……この程度で終わっちまうのはなあ……」

「さあキル夫君、来るならどうぞ」

「急に態度変わったんだが何があったんだ？」

「いえいえ、この程度で終わらせたくないということですし貴方の全力を見た方がいいかなと」

「なるほど……確かにそりゃそうだが……」

ならどうするか……まあ出来ることするか

「ゆんゆんさん」

「はっはい!!」

「爆裂魔法を」

「ええ!?でもっ……」

「狛枝お前もだ、頼むぜ」

「分かったよ」

「ゆんゆんさん、全員で全力をぶつけます」

「……分かりました!!」

3人で魔力を全力で込めて放つ

最悪落第点にならなきゃいいが

「おやおやおや」

凄い喜んだ声をあげながら爆発する

さて……どうなるか

「ざまあみやがれ……」

俺はそのまま気絶した

「……」

ゆんゆんもそのままバタンキューした

「皆さん頑張りましたね」

「はは……そう言ってくれるなら光栄だね」

「狛枝君、貴方は大丈夫なのですか？」

「まあ、これでも魔術師コースだしね」

「ですが貴方も眠ってもらいます」

「もう終わりだしここで終了で良くないかな？」

「本来ならそうしたかったんですけどね」

「どうしたんですか？」

「キル夫君思った以上に成長していましてね……いい加減そろそろかなと」

「キル夫クンをどうする気？」

「彼は少し実験体となってもらいます」

「へぇ……」

「正直驚きましたよ、前に研究所で会ってから……この成長は素晴らしい」

「それはそうだね、彼の成長は希望を感じるよ」

「それはとても残念です……」

「いやいや、そういうわけにはいかないかな」

「止めたいのかも知れませんが……貴方に出来るとでも？」

「ボクみたいなゴミクズに何を期待しているんだい？」

「中々の才能があると思いますけどね」

「だから、ボクの幸運に賭けてみるとするよ」

――――――――――――――――――――――――――――――

「久しぶりだな」

「え？誰ですか？」

見知らぬダンディな人に話しかけられて少し驚く

「ここはｂａｒデラスだ覚えがないかい？」

「あっ……ああ……あああああ!!」

そうか、前に一回俺はここに来たことあるじゃねえか……

なんで忘れていたんだ？

「すみません!!」

「どうした?」

「忘れんなって言われていたのに今まで忘れていました……」

「そうか……まあ仕方がないんだけどな」

「そうなんですか?」

「ああ、ここは夢だ覚えていて欲しいが無理な人間だっている」

「そうか……そうだよな……」

少しだけガックリとする恐らく今回も俺は忘れるんだと思う

「しかし……なんで俺はまたここに？」

「そうだな、気絶するほど全力で魔術を撃って生命の危機レベルなんじゃねえか？」

「おいっ!?マジでそれやばくね!?」

「まあ安心しろ、ここに辿り着けたなら死にはしないし明日ピンピンしてるだろう」

「それならよかった……」

ほっと一息つく、まだ死なずには済んだようだとな

そうしてくれると飲み物を出してくれる

「あっすまねえ……注文を」

「いや、悪いが今日は勝手に決めさせてもらう今のお前に必要なものだ」

「これっすか？」

一見するとワインのように透き通っているが……色が赤ではなく紫だ

「ああ、飲むといい」

「しかし珍しい色をしていますが、これはなんなんですか？」

「ふむ……そいつは何色だ？」

「紫ですね」

「ほう、紫と言えば誰を思い浮かべる」

紫……紫か……浮かべるなら１人だけど……

「アカネ先輩です」

「あんたの恋人か？」

「ぶっ!?」

つい噴き出してしまう飲む前で本当に良かった

「おいおい」

「いきなり何を言い出すんすか!?」

「いや……その色が見えたってことは少なくともお前にとって1番大切な人ってわけだが」

「……マジで？」

確かに一番大切な人って言ったらそうだな……あの時からそれは変わらない

「まあ否定なんざしないし、むしろ俺はいいと思うぜ？」

「……何を？」

勝手に交際認めるとか言い出さないよな？
明らかにアカネ先輩の父親とかには見えないし

「前行った縁を大事にしてるのは予想付くだろうし誰かが特別な存在であってもいいってことだ」

「ああ、そういう……」

「人間っていうのは好感度を揃えたくなるような奴がいるみたいだが、そんなもんに拘らなくていいだろうよ」

「それはそうっすけど……」

「お前さんは、多くの縁を作ってきたらしい」

「それは……確かに友達多いですが」

「新たな縁もそうなんだが……その一つ一つの縁を大事にしたり」

「大切にしたり？」

「一番大切なものは本気で大切にしろ」

「……そりゃそうっすね」

笑いながら飲み干す、酒だったわけじゃないようでなんかすんなりと飲めた

「……」

ただその後すぐに眠くなる……なんだ急に？

「それは……飲み終わったから目覚めの時間だからだよ」

「ああそうか……目が覚めるのか……」

「おう、夢で言い出すのは変だけどよ」

そう言ってグラスを磨きながら笑う

「いい夢を」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「キル夫クン!!」

目を覚ますと狛枝……それにアカネ先輩か

２人共どうしたっていうんだ？

「良かった目を覚ました!!」

「なんだよ大袈裟だな」

「だってもう夜なんだよ？」

「うおっマジか……」

ずっと気絶してたのか俺……そりゃ心配になるわ

「狛枝あの後どうなった？」

「まずはキミの心配して欲しかったけど……」

確かに不安なのは分かるが俺もそれが気になるし……

「とりあえずオーケーだってさ」

「微妙っぽいがまあいいか……」

「今は自分自身を心配すること分かった?」

そう言って狛枝は去って行く

「おい狛枝何処に?」

「新条先輩から何かあるみたいだからお邪魔ものは退散させてもらうよ」

「狛枝!?」

追いかけようとすると掴まれる

「アカネ先輩……」

「きっ君、何度心配かけさせる気？」

「ごめんなさい……」

「明後日本気で死にたいの？」

「明後日……」

期末か……しかも何するか分からない
ちょっと怖いんだよな……

「本当に死なないで」

「アカネ先輩……」

この人に死なないでと言われると……本気で死んではならない……
それは絶対だからこの人のことは絶対だから……

『一番大切なものは本当に大事にしろ』

「……」

「どうしたのきっ君？」

「俺だって死にたくないです」

「そりゃまあそうでしょ、とにかく明日は休んで」

「それでアカネ先輩」

「何？」

誰が言ったか思い出せない……ただやっぱり今思い出した言葉は真実だから……

「明日、デートしません？」

――

第３４話

「あっアカネ先輩、おはようございます！」

「きっ君……何時間前に来てるの……？」

「いや今来たばかりですよ？」

「いやぁ……そうは思えないけど」

……確かに俺相当前から来たが
なんつーか待ってる間もしんどかったが出ないのもしんどかったので
心臓がやべえどうすりゃいいか

「きっ君から誘ってくるのも意外だったけど」

「そういう話だったですし」

「まあそうだねー」

前行った時次は俺からって言ってたしな……正直誘うなんざ考えてもなかったがただ思った通り失いたくないからなんだろうなと

「それで、エスコートは任せていいんだよね？」

「俺も色々調べたんで」

流石に注意されたから秋山さんと一緒に行った場所とかじゃねえし……大丈夫なはずだ

「それじゃあ行こうか」

「はい」

お互い準備が整ってデートが始まる

「と言うか本当にきっ君どれだけ前に来てたの……」

「……秘密で」

「相当前から来てそうだねえ……」

「まあいいじゃないですか……!!いきましょう」

「うん、了解」

とにかく出かけちまえばこっちのもんだ！

今日は楽しい１日にする……絶対に!!

――――――――――――――――――――――――――――――

「早速小物屋なんだ」

「ダメでした？」

「いや、正直服屋とかから行くのかなって思ってたし」

「服はこの前入ったんで……」

「いや……と言うかきっ君マントは付けてないけどなんでバトラースーツで来てるのさ!?」

「いや……他に持ってる服よりはマシかなって……」

「これじゃデートって言うよりも執事と散策するお嬢様のような……」

「俺は執事でもいいんじゃねえかなって……」

「いやダメでしょ」

「そっかー」

どうやらダメらしい

まあ……確かにダンジョンとかの装備で来るのもあれなのか……？

「変えてきます……」

確かに考えれば考えるほど俺もねーわって思ったし……

「アカネ先輩はうん、可愛いっすね」

一方のアカネ先輩の方を見るとかなりおめかししてて凄い可愛い……

まあ俺はいつも通りなんですがね……早く来るくらいなら身嗜みに気を付けるべきだったか？

「と言うかきっ君はお洒落そこまでしないの？

「あまりしませんね……」

「勿体ないとは言わないけど、お金の使い方は人それぞれだし」

「見た目……」

そういえば言われたことあったな

「アカネ先輩」

「ん？何？」

「マスクってどうなんすかね？」

「マスク……？」

「ええマスクっす」

「バトラースーツにマントにマスク……？」

「やっぱダメっすか……？」

「それ地場先生だから」

地場先生……？

先生と言ったって聞いたこと無いんだが……誰だ？

過去の先生か？でもあまりあの学園先生入れ替える感じしないし……

「去年の始めまで盗賊コースで先生やってた人だよ」

「長谷川先生じゃなかったんすか？」

「うん、最初数回だけだったけど」

「そっから長谷川先生に？」

「うん」

「……つまり俺の格好が地場先生に似てるってことか？」

「タキシード仮面って別名では呼ばれていたけど、その時の姿とはかなり似てるかな」

「タキシード仮面……」

その名前は確か……

聞いたばかりなはず……

「まどか先輩が言いかけてましたが……」

「ああ、話すの厳禁だからね」

「……は？」

いやいやいや……なんで!?どう言うことだよ!?

「タキシード仮面こと地場先生のことは話すことは厳禁なんだよ」

「どうして……？」

「地場先生は退職したって話だけど、その後誰も見てないし……先輩に変死したって言われたんだ」

「……その先輩は？」

「辞めたってさ」

「……聞いてよかったんすか？」

「別に言いふらすこと無いだろうし」

「まあ……そりゃしませんけど」

命が惜しいとかよりもバラしたらアカネ先輩もまずそうだし

「しかし学園マジでやばいな……」

「まあ今も言った通りきっ君は仮面はやめてね」

「バトラースーツもやめた方がいいですかね？」

「そこはまあいいんじゃない？」

「学園に目をつけられてるんじゃないですか？」

「元から皆目つけられてるしそこまで関係ないと思う」

「……うわあ」

まあ頭装備もそろそろ考えなきゃならねえなとは思った……仮面はまずいらしいがひとまず服も買ったしこれで文句はないだろ……うん、きっと大丈夫

「おまたせしました」

「こう言うこと含めてデートでしょ？問題ないよ」

「楽しんでくれてたならいいっすけど……」

「楽しいよ実際」

「良かった」

ひとまずこの後は小物買いに行くのも……戻るのもなあ……別の場所に行くか
大丈夫だ、ガバガバな気がするがプランは色々とあるんだ

――――――――――――――――――――――――――――――

「この施設ってなんなの……？」

「水族館って言うらしいっすよ、来たの初めてっすけど」

「初めてで誘ったんだ……つまらなかったとかあったら大変そうなのに」

「でも、一緒に驚きたいじゃないっすか」

「そう言われるとそうだね、全部知ってるーよりはそっちの方が楽しめるか」

水族館、聞いた話じゃ異世界の人間が作ったらしい
異世界って存在するんだなって思ったけど……まあそりゃヌカリアだけじゃねえか

「魚泳がせてるけど……どうなんだろうねこれ」

「少なくとも普段は見れないもんっすし、俺は気に入ってますよ」

「普段見れないかー、確かにそう考えるといいのかもね」

アカネ先輩はそう言うとさっきよりも集中して魚を見始めた
真面目な表情についつい視線を奪われる

「どしたのきっ君？」

「いや……」

慌てて目を逸らす、悪いことしてたわけでは無いんだが……何故か反射的に逸らしてしまった

「普段は食べてるような物だけど……改めて見ると綺麗だね」

「確かにそうっすね」

偶に釣ったりもしなきゃならねえがそれでも食糧としか見てなかったしなこんなに綺麗だと思わなかった

「ただ……ちょっと不味いかもしれませんね」

「ん？きっ君何が不味いの？」

「いや……食べられなくなっちまうかなって」

「……ぷはは」

「ちょっと笑うことなんざ無いじゃないですか!?」

「ごめんごめん、ついきっ君が可愛くて」

「可愛いってなんすか!?」

「だって魚が綺麗だから食べるの可哀想って」

「アカネ先輩は違うんすか!?」

ムキになってブーブー言う、アカネ先輩の笑顔なんざ知らん!!

「だってさきっ君、私達は冒険者なんだよ?」

「それがどうなんです?」

「モンスターは構わず狩るじゃん可愛くても」

「まあ……それはそうっすね……」

そう考えると躊躇うのは良くないか、どっちみち殺してることに変わりないんだし

「可愛いから食べられないとか言う女の子多いけどさ」

「アカネ先輩は気にしなそうですもんね」

「きっ君は怒られたいの？」

「いや……でも事実か……ぐふっ!?」

「お客様暴れないでください」

「ごめんなさーい」

まあ……俺が悪いんだけどさ……
だけど実際そうじゃんって……
ん？でも待てよ？

「もしかして食べれない系なんですか？」

「いや食べれるけどさ、むしろ食べてるじゃん」

「でも……そういや可愛い物好きなんでしたね、忘れててすみません」

「何か変なこと言ってない？」

「いやだってボコのぬいぐるみ……」

「やめよ？」

「はい……」

アカネ先輩が笑ってる……ただ目が笑ってない

「ちゃんと見よ?」

「そうしましょう……」

また魚を見るように戻る
しかし綺麗なんだがこういったものは財宝と言うよりは……

「どうしたのきっ君」

「閉じ込められてるなって」

「そりゃそうでしょ……じゃなきゃ見れないし」

「まあそうですけどね……」

盗賊や海賊だとかは……お宝を大切にしまうんだが
どっちかと言うとこいつらは

「（お宝よりは海賊みたいで）」

捕らえられた海賊……と言うよりかは父さん達みたいに海軍になったか？
安全を手に入れた代わりに自由を失い閉じ込められたって
こいつらもそうなのかな

「きっ君」

「ん？どうしましたアカネ先輩？」

「なんかあったの？」

「どうして……？」

「いや暗そうな顔してたから」

「そうです……？」

俺そんな顔してたんだ、そりゃ申し訳ない顔してたか……気を付けないとならねえな

「きっ君、付いてきて？」

「何処行くんですか？」

「よく分かんないけど行けば分かるでしょ」

――

「なんですこれ？」

「さあ？可愛いとは思うけど」

……なんだこれ？可愛いとは思うけど
ペンギンって言うのか？こんな鳥いるのか？

「鳥なのか？本当に鳥なのか……？」

「二足歩行で歩いている……」

モンスターとかで二足歩行で歩くのはいるけど……鳥が二足歩行で歩くのか

「皆揃ってヨチヨチしてて可愛いな」

「そうだね」

「飛べないのかな？」

「飛べないんだと思うよ、飛べたら外でやらないだろうし」

「そう言われるとそうっすね」

飛べない鳥か……こいつらも閉じ込められてるのか
鳥ってのは本当は飛べるはずなのにそれでも……

「ペンギンっていいね」

「いいですか？」

「だって鳥だけど綺麗に泳ぐし」

「他にも泳ぐ鳥は居たはずですが」

「どっちかと言うと水面上で浮かんでて潜る感じじゃないしね」

確かにそう言われるとそうだな、潜る鳥は本当にいないんだな

「鳥だけど潜ることで自分が生きようとしてるんだから」

「どう言うことです？」

「ペンギンは生きるために泳ぐことを覚えたんだってね」

「その代わり飛べなくなっちまったようですけど」

「別に良くない？」

「え？」

いい……のか？飛べなくなったら外に出れないし自由なんて無くなっちゃうから

「別に自分で飛ぶことをやめたんだから私達が気にすることじゃなくない？」

「それは……そうですけど……」

「それに、別に飛べなくたっていいでしょ」

「そうですか？飛べた方がいいとは思うんですが」

「きっ君は飛びたいの？」

「飛べたらいいなと思うことはよくありますね」

「なるほどねえ」

「アカネ先輩は？」

「飛べないのに無理して飛ぶ気はないかな」

「アカネ先輩らしいような違うような……？」

正直よくわからん、ただ飛びたいわけじゃないのかまあ誰もかれもだと思わないけど

「自分の選択肢を自分が出来る範囲でやればいいと思う」

「飛べないのを、無理して飛ぶなと？」

「と言うより……自由っていいけど、それにはそれでリスクはあるし」

「自由ってのはいいけどさ」

アカネ先輩が真面目な顔付きになっている……大事なことなんだろうな

「自由に生きるのは自分だけを守れるに留まるから」

「自分だけを守れる……」

「誰かを守るためには自由を捨てなきゃならない」

「……」

それはそうだ……父さんもだから軍に入ったわけだし……

そうなんだよな……父さんは……

「ん？じゃあなんで冒険者を？」

「これしか無かったからかな」

「マジで……？」

アカネ先輩は他にも色々出来たと思ったけど……

「もしかして孤児……？」

「違うけど……」

「ごめんなさい……!!」

「別にいいけど……」

「じゃあなんで……？」

「両親は家にいないことが多かったからね」

「なんで……」

「忙しかったから」

「そりゃ酷いな……」

「しょうがないよ、絶対に必要なことだったから」

「そうなんすか……」

それでも……あんまりだと思う

「両親の知り合いから戦い方教わって、結局冒険者になるしか無かったなって」

「それで良かったんですか？」

「うん、いいけど」

「そうなんすか？」

「確かにきっ君が言ってたように自由はないのかもしれないけど」

命懸けの職業だ、本当に自由なんざほど遠いだろうそれでもいいのか

「でも、だからこそ守れる人がいた」

「そりゃ良かった」

「きっ君だよ」

「……」

そっすね……俺は命を救われた身ですね
アカネ先輩が自由を捨てたお陰で……

「恩義はいいよ」

「なんで？」

「いつもいっつも返してくれてるし、むしろ私が貰いすぎてる程だよ」

「いや俺も貰い過ぎてるくらいだし」

「だから気にしないでいいって事」

「……分かりました」

本当に自由を奪っちまって良かったんだろうか？
いや俺が会う前に会ったことあるだろうしいいんだろうけど

「あっ」

ショーの最中にペンギンが一匹転けた
可哀想だが……見ている俺らじゃどうしようもない

「それにさきっ君」

「はい」

それを見ながらアカネ先輩は話しかけてくる
すると見ている最中他のペンギン達が倒れたペンギンを助けていた

「窮屈でも助けてくれる人は沢山いるからね」

「みたいっすね」

そう言った俺は笑っていた

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「なんだかんだ水族館だけで暗くなっちゃいましたね」

「きっ君が大きい魚見るたびにすげーって張り付いてたからかな」

「すみません……」

「ロマンなんでしょ？いいんじゃない？」

「あははは……」

ペンギンを見た後俺は違った目で魚を見始めたが……迫力のある魚だらけで本当にやばかった……

最初はどうだか……と思ってたがまた来ると思う

「ただ失敗したかな」

「どうしてです」

「楽しかったのは私も良かったんだけど……明日から期末試験だから」

「あー……」

確かにそうか、疲れ残らなきゃいいが

「去年はたくさんの人死んだし……」

バトロワだったか……確かに沢山死んだって話を聞いた

「死ななきゃいいんだけどね」

「……」

死にたくないと言う感情もあるが……それ以上に死なせたくない

アカネ先輩は自由はもう捨てたと言うが俺は……

「アカネ先輩」

「何？」

「逃げませんか？」

「どう言うこと？」

まだ自由だし、金はそんなあるわけじゃないがまだ道はある

「死ぬくらいなら逃げませんって？」

「私は残念だけどこれしか道がないから」

「そりゃ冒険者は間違いなく俺の道でもありますが……」

それでも……それでも俺は

「アカネ先輩に死んで欲しくないんで」

「……本当に君は」

恩を返す云々じゃねえ、大切なこの人を失いたくない
だからこそ逃げたいが

「残念だけど学生を辞める気はないよ」

「そうですか」

「きっ君が辞めたいなら止めないけどね」

「いや……死なせたくないんだから付き合いますよ」

「それじゃあ申し訳ないんだけど……」

それでも決めてるしなそれは変わりそうにない

「まあ……助かりそうにない時は見捨てていいから」

「いやいや抗いますって」

「冒険者としてそれはダメでしょ……」

「どんな不利な時でも絶対に諦めないことだってね」

「!?」

その言葉にアカネ先輩は驚く、一体どうしたんだ?

「本当に君は……」

「何かあったんです?」

「いや別にね」

今言ったセリフに何かあったのか？

俺にゃよく分からんがアカネ先輩が喜んでくれたならいいや

「明日一緒に行動しよっか」

「まあ、それがいいかもしれませんね……」

何をやるか分からないがアカネ先輩が一緒なら心強い

「それでそこまで言うなら」

「護ります!!」

アカネ先輩が言い切る前に言い放った、俺の意思が変わるわけがない

「そっか」

「んじゃ帰る前に少しだけ作戦会議しましょうか」

「いいよー」

そう言って少しだけ作戦を練って夜が更けていく

そして、期末試験が始まる

第３５話

「それじゃあ期末テストの時間だ、楽しみに待ってただろう？」

長谷川先生の開口から期末試験が始まる

……どうやらダンジョンらしいが

「ダンジョン探索ですか？」

「まあ待てって詳しい話は校長がするぜ」

そう言うと長谷川先生が一歩下がって校長先生が前へと出てくる

「生徒の諸君、こんにちわ知っての通り校長だ」

何やら長い校長先生の話が始まる……
退屈に思いつつ少し経ってやっと終わった

「それでは今回の目的を説明する」

状況的にはダンジョンアタックっぽいが

「かくれんぼだ」

「……は？」

「範囲内はこの盗賊王の迷宮内から期間中外に出てはならない」

いや……待てっての
確かに一昨年は鬼ごっこだったらしいが……
と言うがダンジョンが明らかにかくれんぼに向かない名前な気がするんだが……

「鬼役は誰がやるんですかー？」

「いい質問だ」

質問をされ喜ぶ校長を見て子供なんじゃ？と錯覚し始めた

「鬼役は教師達だ」

「いつもとは違うのか」

てっきり生徒ＶＳ生徒になると思っていたがそうでもないんだな

「じゃあ４人？」

「いや……私と臨時教員も入るので６人だ」

6人か……多そうだが……大丈夫かねえ？

「紹介しよう、臨時教員の野原ひろしだ」

「どうも、ご紹介に与りました野原ひろしと言いいますよろしくお願いします」

何というか……冴えない人なんだが大丈夫か……？

いや長谷川先生もそうだし油断は出来ねえんだけど

「この6名で鬼をやる」

「凄い怖いんだが……」

「捕まったら負けだ」

「ん？それじゃあ鬼ごっこなんじゃ？」

「教師に見つかったら逃げられると思うのかね？」

「いや……あー……」

そりゃ無理だわ……誰にも勝てる気しねえし
野原さんなら行けそうな気がするがこの学園が勝てるような人間雇うわけねえもん

「つまりは見つかっても教師達に捕まらなきゃ大丈夫だってことだよなあ？」

あっこの前のモブ君……ボンボルド先生に焼かれたけど大丈夫だったんだ

「ああ、問題ないが……だが君は」

「そんなら余裕っしょ、やってやりましょうぜって」

何処からその自信が来るのか分からないが……最悪弾除けとして使うことにしよう
……それくらいにゃなるだろ

「順番にダンジョンに入って行ってそこから1日後我々が突入する」

1日か……時間には余裕があるが……色々考えると不安だが……

「協力、生贄、犠牲なんでも問わないとにかく期間内逃げ切ってみたまえ」

協力はともかく後者はなんなんだよ……

と言うか協力していいのな

「こいつが終わりや夏休みだ、だから気張れよ」

そう言えばそうか、夏休みになるんだな

結局あれから早過ぎて帰るのが辛くなる心の準備が……

「それでは諸君健闘を祈る」

そうしてかくれんぼが始まるが……まずはアカネ先輩と合流しねえと

「ちょっといいか？」

「うん？」

不意に声をかけられる、野原さん……？

「なんの用でしょうか？俺も流石に準備したいんですが……」

「一日あるんだからいいだろうよ」

そう言って肩を叩かれる

「まあ時間は確かにありますが……」

「お前さんは今回の期末試験どう見てるよ？」

どう見てるって……
どう見ようともかくれんぼな気がするんだが

「まあ……ちゃんと隠れないとまずいなと」

「おいおい……」

なんか不満そうに言ってくる……
なんだよー文句あんのかよー

「それじゃ死ぬぞ？」

「は……？」

いやいや期末でなんで死にかけんの？
例年のに比べればマシなんじゃ？

「ガチで捕らえるってよりも捕らえられればどうでもいい、そう言った感じが取れるしな」

「やば……」

「だから気を引き締めるこった」

そう言って手をあげて振ってくれるのを見送る

さて……気を付けないといけないことは増えたが……まずはアカネ先輩と合流しよう

――――――――――――――――――――――――――――――――

「えっと点呼……1」

「2」

「3かな……？」

「4です」

「5っす！」

多くね……？アカネ先輩と合流する予定だったがいつのまにか増えまくってたデクに藤堂、更には走り先輩までいるし

「かくれんぼなのに纏まっていいんすか？」

「別にいいと思うっすよ」

「そうなんですか？」

「だって今回かくれんぼと銘打ってますが、皆素直に捕まると思わないっすし」

「それもそうか……」

「だから集まって戦った方がいいんすよねぇ……」

「ならいっそ皆集まった方がいいんですか……？」

「いやそれはダメっすよ」

「どうして……？」

「いやだってキル夫君先生達に勝てるっすか？」

「……無理っすけど」

「結局先生は別格なんすよねぇ、皆集まればそれだけ厳しいっすし」

「じゃあ集まらない方がいいんじゃ？」

「逃げるために戦うんすよ」

「もう完全に鬼ごっこじゃないっすか」

「私もそう見てるんでー」

「ならこの人数辺りがいいんですかね」

「んーと……人数辺りはいいんすけど……」

周りを見てなんとも言えない顔をしてるが……

なんか問題あったのか……？

「魔術師いないのが辛いっすね……」

「ごめんなさい……」

「いやデク達が悪いわけじゃねえって、むしろ頼ってくれて良かったわ」

デクと藤堂それにアカネ先輩達……確かに魔術師……神官もいねえ!?

「そっか神官もいねえのか……」

「いや……言っちゃ悪いんすけど今回神官はあまり」

「そうなんですか？」

「回復する余裕無く終わるんで……結局捕まったらアウトなんで」

「あぁ……」

「ただ当然ダンジョンな以上モンスターいるんで回復役がいないはいないで厳しいんす

けどね」

それもそうだな……普通にダンジョンで死んだら笑えねえわ

「そう考えるとそうっすね」

「ただまあ今回は」

「ん？」

「盗賊の価値が間違いなく上がってるっす」

「それはそうですねえ……」

ダンジョン攻略だけじゃなくて、隠れる場所を探す、教師陣が来たかを探るとか……仕事が多いな

「ただまあ……」

「どうしましたアカネ先輩？」

「この人数なら3人はいらないかも」

「アカネちゃんさり気なくウチ要らない言ってないっすか!?」

「いやそうじゃなくて、もうちょっと集めたいなって」

「ただ……厳しいと思いますよ？」

やっとデクが口を挟む……もっと喋っていいと思うんだけど

「どうしてだ？爆豪とか厳しいのか？」

「かっちゃんにむしろ置いてかれたし……」

「マジか……まあ普通にかくれんぼと考えるなら置いていく奴いるか」

ただ……アイツの場合隠れない気がするんだけどな……

「かっちゃんどうすればいいんだろう?」

「まあアイツも中間2位だったしいきなり挑むようなら多少痛い目合うしかないだろ……」

「そんな……」

「止められるか?」

「……」

「期末悪くてもアイツなら落第はねえよ、だから自分のことに集中しろ」

「うん……分かった」

デクも納得させた、一先ずはそれでいいが他のメンバーを探すのは厳しいか……？

「まあ見つかれば良しで考えればいいかなと」

「そっすね、実際盗賊これだけいても飽和っすし……その分隠れ場所探しておくっす」

「それもそうだな……藤堂も大丈夫か？」

「はい、大丈夫だと思います」

「んじゃ……少し探してみますか」

俺も移動しながら隠れられる場所を探した

コミュ1d5：5

1d6：2

「おやおや、皆さん集まっているんですか？」

「何の用っすか？」

走り先輩が警戒しているが……Ⅳ先輩だよな？

「いきなりそんな感じで来られると悲しくなるのですが」

「でもそんなことばかりしてるし」

「貴方にとってボクはなんだと……」

「最悪なペア……」

「今回臨也はいないので……」

「え？マジっすか？」

走り先輩が驚いてるが……普段は２人そんなにいるのか
この前Ⅳ先輩単体に誘われてたから意外に思っている

「まあ……なら……いいっすけど……」

「それでも嫌そうなんですねえ……」

「うん」

バッサリと言った……!!流石は走り先輩だ……

「と言うかウチに入ってこなくても1人で十分やっていけるでしょ？」

「酷くないですかねえ」

「いや、他の魔術師の生徒ならまだしも明らかに飛び抜けてるし」

「まあ実際そうではあるのですが……」

そう言いながらこっちを見てきた……なんだ？

「このルールな以上共闘が可能だなと思ったんですよねえ」

「それで？」

「まあキル夫君に借りがありますし期末は重要なんでそれを返そうかなとね」

「……キル夫君何かしたんすか？」

「さあ……？」

俺Ⅳ先輩を助けたりしたっけ……？

正直覚えがないんだが……

「まあ……この前の研究所の件でやらかしたのでその分の汚名を返上させてください……」

「キル夫君はどうしたいっすか？」

「どうしたいって……？」

「入れたいか必要ないかっすけど……？」

「そりゃ必要なんじゃ……？」

凄い強いし、頼りになるし

「ただ問題児っすよ？」

「そこまで？」

「臨也君と一緒にいる時はマジ近寄りたくないっすね」

「ああ……あの時も即去りましたしね」

「と言うか別々らしいっすけど何処行ったんすか？」

「ああ臨也は……恐らくですが……」

恐らくなんなんだろう

凄い嫌な予感がする

「教師側の仲間やってると思います」

「何してんのあの人!?」

いやいやいやおかしいだろ

なんで教師側にいるの!?頼まれたの?たださっき言ってなかったよな……

「臨也は単位等何故かしっかりと取ってますし期末０点でも十分なので多分捕まって即教師側になると思います」

「なんで……?」

「その方が楽しいとか言い出しそうですねえ」

「ええ……?」

「キル夫君、言いたい事分かるっすか？」

「いやボク悪くないじゃないですか!?」

「悪くないで済まない相手とつるんでる時点でちょっと擁護出来ないっすね……」

「まあ……これからも臨也とは友人を続けますが」

「俺にどうしろと……？」

「決めるしかないっすねー」

「……」

折原先輩が改めてやばいことを知った
そう言う意味ではマジで走り先輩に拾われて感謝してる
ただⅣ先輩そこまでじゃないし頼りになるからなあ

「俺としては仲間になって欲しいですが」

「良かった、いきなりいりませんとか言われても困りますので」

「そう言うなら止めないっすけど、ちゃんと面倒見て無いとダメっすよー」

「え？」

「そりゃそうでしょう、これ放置は出来ないんで」

「……ヤバいことしないでくださいね？」

「善処します」

Ⅳが仲間に加わった

すっごい後悔した

―――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ1d5：4　走り鳰

「キル夫君の言う通り魔術師が増えたっすね」

「予想外過ぎましたがね」

「まっいいんじゃないっすか？責任はキル夫君が取るらしいっすし」

「え？聞いてない……」

「まあこのメンツなら暫くは安泰だと思うっすけどね」

「暫くは……なんですか」

「正直せんせー達がどのくらい本気で挑んでくるかっすし」

「やっぱそれなんですね……」

「流石に全員で挑めば5人でもどうにかなると思うっすけど……各個だと容易くやられるっすからねぇ」

「どうにかなるんすか……？」

「ダンジョン内は狭いんで勝ち目ないっすね」

「あー……」

「隠れやすいだけじゃなくてやられないようにも兼ねてダンジョン、しかもただのダンジョンじゃなくてこの迷宮を選んだんじゃないっすか？」

「そこまでなんですか？」

「このダンジョン隠れ場所は確かに多いですけど、広くはないので人海戦術は使えないんすよねぇ……」

「だから勝ち目無いと……」

「そっすね、だけど単体じゃ逃げ切れないので多過ぎず少な過ぎずがいいんすよねー」

「そう言う意味ではⅣ先輩味方なの有り難いんでは？」

「まあ……そうなんすよねぇ……実力だけ見ると優秀なんで……ちょいと不安すけど」

「そんな不安なんですか？」

「過去にあの2人で何度もやらかしてるんで」

「あー……」

すっごい分かる気がする……本当に大丈夫なのかな？

「まあいざとなったらキル夫君に守ってもらおうかなって」

「それは当然っすけど……」

「え……？」

「どうしたんすか？」

仲間を守るってことそんなおかしいか？

いやおかしく無いし？あっ先輩だから後輩に守られるのはって思ってるのか

「先輩を頼り切れとかそう言ったのあるかもしれないっすけど、男が女を守る場所じゃ無いとかあるかもしれないっすけど」

「……」

「けど、ちゃんと守るんで安心してください」

「はぁ……マジにされるとは思わなかったっすね」

「え？冗談だったんですか？」

「んー、今はなんとも言えないっすね」

「まあ……そりゃそうっすね」

「でも感謝するのは間違いない」

「先輩!?ひっつかないでくださいよ」

「別にいいじゃないっすかー☒」

本当にコロコロと変わって不思議な人だ
ただ悪い人じゃないと思ってる

「あのキル夫君ちょっといいかな?」

「あっ」

なんか最悪なタイミングでデクが来てしまった……どうすんだこれ?

「あの……走り先輩……?」

「あっ分かったっす……」

既に手遅れかもしれないが……まあなんとかなるかも知れないし
そう思っていたのだが

「……ふふふー」

「あの先輩……なんで頬擦りしてくるんです？」

「なんでっすかねー？」

「ごっごめん……後でまた呼ぶね？」

「待てっ待てーーデクーーーーー!?」

しかしデクは行ってしまった……

どうすりゃいいんだこれ……？

「あの走り先輩？」

「なんすか？」

「どうするんすかこれ……？」

「どうしよっかー」

「デクに勘違いされるんで気を付けて欲しいんですけどね」

「別に勘違いされてもいいんじゃないっすか？」

「え？」

ちょっと待って？どう言うこと？
いやいやいや騙されちゃいけない
騙されない騙されない

「ちょっとキル夫君」

「はっはいなんっすか!?」

「まあそう言うのじゃないから安心していいっすよ」

「騙されかけたじゃないですか!?」

「意外と純情なんすね、これは予想外っす」

「イジメナイデー」

「はいはい、じゃあ呼ばれてるみたいなんで行った行った」

「そうっすね」

慌てて俺は外に出ていく、逃げたわけじゃないからな!!

一先ずは出て行った

「あー本当に面白いっすねキル夫君」

「ありかなしで言えばありっすけど……どうしようかなー」

１人の少女が何かを企んだ

続

第３５話②

「今日から先生達が入ってくるわけだが……」

日付が変わりかくれんぼの開始だ
ただ不安しかない

「モンスターが多いんだよなあ……」

そう……意外とモンスターが多い
そのせいで……戦闘音が鳴っちまう

「ウチが居て良かったっすねぇ」

「本当にそうですね……」

今回走り先輩がいてくれた事が大きい……
それもこれも暗殺が関係している

「モンスターに叫ばす暇もなく一瞬で……」

「いやデク、俺も驚いてるからな？」

「キル夫君ならできそうだと思ったけど……」

「いや無理だっての」

「えぇ!?」

「盗賊は暗殺以外もやっから仕方ねえだろ!!」

「ごめん……」

「いや……なんつーか俺もすまん」

「教えるっすか？」

「いや……俺そっち方面にはならないと思うんで……」

「まあそう言われるとキル夫君は暗殺とかよりも探知系っすしねえ」

「探知とお宝系っすかね」

「きっ君はそう言った系でいいと思うけどね」

「まあ覚えすぎは浅くなるっすからね」

「戦士とか齧ってるし盗賊で広く浅くはマジで何も出来なくなる……」

流石にお荷物になる未来は嫌だし

「ただキル夫君戦士でもかなり強いと思うけどね」

「デクのが強いと思うがね」

「まだ制御が出来ないんだよ……」

「それはまあ……練習あるのみだな」

「うん……」

デクを宥めて先に進む

と言うか……普通に強いと思うんだがなあ

「ところでキル夫君」

「なんですかい？」

Ⅳ先輩に呼ばれる、無茶振りとかはしてこないと思うんだが……

「それはなんですか？」

「ああこれですか？」

Ⅳ先輩は無線を指差す

数が足りてないのだからしょうがない、3年生には分けられなかった

「無線って言う特殊アイテムです」

「特殊ですか、在庫はないと？」

「4つだけなんで……」

「残念ですねえ、気になりましたのに」

そんな事言われてもないもんはない
ないから仕方ないのだ

「あまり後輩から欲しがらないように」

「貴方は貰ってるんじゃないですかズルくないです?」

アカネ先輩に言われても……
エジソンさんに言えば数増やせるかねえ……いや無理か全部使ってっぽいし
カズマとか沙都子辺りにオススメしてもいいんだが

「ズルいとかじゃないでしょ……」

「そうっすよね……」

正直戸惑ってる、そこまでゴネる物なのかと？

「Ⅳ先輩はこう言った物使うイメージないんですが……」

「いや……色々と調べてみたいんですよね」

「壊されそうなんですが……」

「まあ気を付けはしますが……」

「渡せませんよ」

「ですよねー」

そこまで言えば諦めてくれた

やっぱこれ貴重な物なんだなって

「まあウチも気になるっすけど、まあいいかなーって」

「遠くと連絡出来るなんて凄いじゃないですか、って考えると戦士よりも魔術師が持つものかと思ったんですけどね」

「持ってるだけで罠回避できますから……」

「え？それ凄くないですか？」

「ボクも恐ろしいと思ってます……」

「何処で拾ったんですかそんなオーパーツみたいな物……」

「宝箱から出て来た鉱石を加工しました」

「なんと言う鉱石が出てるんですかそれは……」

「いや……分からないっすけど……」

「でしょうねえ……」

「ひとまず大事にした方がいいって事で！」

「そりゃそうですが……」

「よし決めました」

唐突にⅣ先輩が何かを思いついたようにする

一体何を……？」

「どうしました？」

「宝箱探しましょう」

え？かくれんぼ中なのに……？

――――――――――――――――――――――――――――

「Ⅳ先輩、マジで言ってるんです？」

お宝を探しながら俺は尋ねる

能力を使おうか悩んでいるが先生達が近いと不味いんで躊躇われる

「ええ、どうせすぐには来れない位置なので」

聞くとⅣ先輩が何やら妨害工作しているらしい……マジか正直そんな事してる心当たりなかった

「騒音立ててもいいですよ」

「んじゃ……試していいですかね？」

「……？構いませんが」

Ⅳ先輩から許可を得て、少し離れる

「……発掘禁止区域」

俺専用の宝探しが始まる
ただこれは……マジか

1d6—1：4

「4つもあるんすけど……」

「え？どう言う事っすか？」

走り先輩も驚いている……まあそう言う能力だしなこれ
デクと藤堂に至っては声すら出してない……まあビビるよな

「きっ君の能力に合わせてこのダンジョンだからか」

「そうなんすか？」

「うん、盗賊王の名に恥じないように宝箱多いイメージ」

「だからか……」

「まあいいでしょう、すみませんが解錠お願いします」

「いやいや、持って来たのキル夫君っすしキル夫君がやるでしょ」

「それもそうですね」

「いいんですか?」

「そりゃキル夫君の功績っすし」

うおおおやったあああ、４つも開けられる!!
喜びの余りすぐ開ける
トラップ発動、キル夫に麻痺毒が襲いかかる!
しかし気にしない

「開きました!!」

「開きましたじゃ無いでしょ!!何やってんの!?」

「次!!」

トラップ発動、キル夫に猛毒針が襲いかかる!
しかし気にしない

「よし、開いた何入ってるかは後で……次！」

キル夫は宝箱を開け……

叩かれた

「痛っ!?なんですか!?」

「なんですかじゃ無いでしょおかしいでしょ!?」

「いやこの程度の毒なら効きませんし」

「これ以上の来たら不味いんだからちゃんと解除してよ」

「時間が……」

「倒れた方が時間の無駄、分かる?」

「……はーい」

宝箱を開ける前に罠チェックと解除をすることになった

「キル夫君、ガンガン行こうぜっすねえ」

「皆驚いてるけど」

「正直……無謀すぎだしね、私でも驚いたよ」

全員が全員咎めてくる、味方がいない

「とにかく……ちゃんとチェックする事」

「はい……」

久々のお宝で舞い上がっていた事もあるが流石にここまで怒られるとは思わなかった……反省しなきゃな

「……」

罠チェック罠チェック……そりゃまああるのは分かってるが……現にあったしその中身はと……

「……」

「どうしたのきっ君？」

「アカネ先輩、マジすみませんでした」

致死毒、危ねえ俺死にかけた

宝に目が眩んでマジで死にかけたよおい

「分かればいいけど」

「マジすみませんでした」

「……何があったのさ？」

「いや……結構ヤバげな罠だったんで……」

「そっか、回避できて良かったね」

流石に致死毒言い出したらぶん殴られるのでやめておく

解除して……もう一つ側も解除してと……

「……あー」

こっちも致死毒じゃねえか、この二つ回避できたの運が良すぎるだろうよ

「さて明け終わりましたし開けてみましょうか」

「そうですね」

雑に４人組に分かれてパカっと開けていく

４ｄ１０：７、４、３、７

「こっちには金貨でした、この量は素晴らしいですねぇ」

Ⅳ先輩が喜んだように金貨を掬う

確かにかなりの量を感じる

「こっちは食材玉っすねぇ」

「割とあると便利なやつ」

「今回は結果的に結構大人数になっちゃったんで有難いっすけどね」

確かにそうか、食糧不足のことは考えてなかったな
2個出たらしいが……まあ使えはするだろ

「残り一つは……なんだこりゃ？」

なんかの本らしいが……

「誰か読める人居ます……？」

「……」

居ないよなあ……そりゃそうだわ

「まあ持って帰ったほうがいいっすかねえ」

「読める人学園内にいそうですしねえ」

「いや、学園外っすね」

「え？」

学園外に頼むのか……？いやなんでだ？

「え？ってそんなに驚くことっすか？」

「いやいや学園内で頼むものとばかり思ってましたが……」

「だってぇ」

「ですよねぇ」

Ⅳ先輩と走り先輩が納得し合う……え？どう言うことなんだよ？

「なんでしょうか？」

「学園そんな信用出来ます？」

「……」

信用出来ないが……走り先輩からその台詞が出てくると思わなかった

――――――――――――――――――――――――――――――

学園のことについてなんだが……

色々と突っ込みたいが我慢する……いや出来ねえわ

「確かに信用出来ませんが」

「こんな如何にもなお宝が出てきて理解出来ないものを学園に渡す度胸なんてありませ

んよ」

「いやぁ……色々と言いたいことがあるっすね」

「キル夫君何をすか？」

「なんでこの学園続けてるんです……？」

「ん？何がっすか？」

「いや……学園やばいの分かってますよね？」

「そりゃあやばいっすけど……」

明らかにヤバすぎるし校長もボンボルド先生も何考えてるか分からねえ……

「どこもかしこも一緒っすよ？」

「そんなやばいの？」

「やばいでしょ……まだ学園通うだけ死亡率違うけど……」

「いや……」

あー……そう言うことかそれはうん……ヤバいだろうけど……なんか違うような

「ウチとかは冒険者として大成するためにやってるし、死ぬならそこまでってことで」

「と言うか学園に通う以上はそうでしょうけどねえ」

「まあそれはそうですが……」

学園通う理由はそう言われるとそうだ……死にたくないからだもんな

「じゃあこの話題はここでいいっすか？」

「いや……最後に……」

「まあ構わないっすけど」

「この学園何かヤバいもの隠してると思います」

「うん？藪から棒にどうしたんすか？」

「いや……この学園変死体ってどれくらいいるんです？」

「０っすよ」

「０!?」

いやいやいや、それはおかしいだろう

それじゃあアカネ先輩の話と合わないし

「……まあ戦死が多いんすけどね」

「そりゃそうですけど……俺が聞いた話は……」

「……何もないっす、だから気にしないでいいっす」

「……」

何かを言いたくなさそうにしている……

隠しているのは分かるんだが……ここは踏み込んでいいのか？

「鳰先輩」

「ん？どうしたっすか晴香ちゃん」

「本当のこと教えてもらっていいですか？」

切り出しのはまさかの藤堂からだった

「おや？急にどうしたんすか？」

「変死体や行方不明が０はあり得ませんし」

「なんでそう思うんすか？」

「あっ……」

Ⅳ先輩が何かを察したようだ

しかし一体何を……？

「私は数ヶ月前までボンボルド先生の研究室に住んでました」

「よく分からない経歴っすけどそれがどうしたんすか？」

「外に出てきて、実験室の資料と照らし合わせたところ一部戦死のはずの人が居ました」

「!?」

は？いや待て……どう言うことだ……？
んなことまでしてるのか……？

「さあ、そんな話聞いたこと無いっすけど」

「走り先輩……!?」

……頑に言おうとしない、そんなに信頼されてないんだろうか？

「貴方の気持ちは分からなくも無いんですがね……ボクが話しますよ」

「……トーマス、ふざけてる場合じゃ無いっすよ」

「その名で呼ばないでください、まあ禁止されてるんですよ言うこと」

「禁止されている？」

「まあ禁止されることでしょうね、失踪者とか変死体とか無くしたいですし」

「まあそうでしょうね……」

「ちなみに言った人も聞いた人も危険に及ぶ可能性があります」

「え？」

俺はまあいいんだ……どうせ学園の闇に突っ込む気だったし

ただ……

「……」

隣でデクが唖然としてる……そりゃそうだよな……巻き込んで悪いわ……

「うん……大丈夫……」

顔は青いが……我慢してくれ……

「まあボクはともかく走りさんには被害が行かないと思うので」

「どう言うつもり？」

「ボクなりのファンサービスですよ」

「貴方のファンサービスってだけで信用がガタ落ちするんすけど……」

「酷く無いですか？」

「自分の行動を省みてください」

「……」

ああ、省みてはいるんだな……

「どっちみちそうですね、話を戻しましょうか」

「そうですね」

重要なのはこっからだ……

「……」

「変死体、去年は凡そ５０人くらいです」

「多いのか少ないのか……」

「恐らくは学園の仕業であろう変死体が５０くらいですよ」

「多いな……」

「本当にやってくれてます」

「もう学園辞めたくなってきたんだが……」

しっかりとしてても殺されそうな気しかしない……どう言うことなんだよ……

「それで行方不明者は……分かりません」

「分かりませんって……」

「それほど多いのです」

「マジか……」

　割と絶望した気分になる……失踪者はボンボルド先生の元に送られるやつもいるんだろうな

「他の学園でもこんなにですか？」

「いや、流石に無いと思いますね」

「不味くないですか……？」

「まあ……そうですね」

「本当になんで学園に通い続けてるんですか……？」

　ここまであって辞めないのが正直分からないんですが……

普通なら逃げると思うんですけど

「まあ……辞められない理由があるんですよ」

「……は？辞められない理由？」

「ええ、ただ申し訳ありませんがこれは話せません……」

「なんで……？」

「まあ流石にこれ以上は本気で死にますので」

「死ぬの気にしなかったんじゃ？」

「大丈夫な範囲を分かっているんですよ」

「そっすか……」

危険だろうけど知らないとまずいと思う
まあ……ただ命まで賭けてもらう必要はないし死んで欲しくないしな……

「きっ君こっちこっち」

「ん？アカネ先輩どうしたんすか？」

アカネ先輩に呼ばれて付いて行った一体何だろう……？
他の人には聞こえないような閉所だが……

「きっ君知りたいんでしょ？」

「まあ……そうですね」

教わらないとどうしようもないし
デクと藤堂に配慮したんだろうけど……アカネ先輩が話すなら俺だって巻き込まれ

たい

「そっか、本当に危険に足突っ込んだねきっ君は」

「そりゃ、護る言いましたしね」

「全部知ってるわけじゃないけど、教えてあげるよこの学園の闇を」

――――――――――――――――――――――――――――――

続

第３５話③

「学園の闇……」

「流石に無いなんて思ってなかったでしょ?」

「はい……そりゃ流石にそれはあるかと」

学園を信用しきれてないしあの教師陣見てピュアだなんて思えない

「この学園は元からいいものだとは思えない」

「そこに誘ったんですよねアカネ先輩……」

「元は使い潰す気だったし」

「ですよねえ……」

まあそこは生きててよかったと考えよう
結果的に助けてもらってばかりいるんだし

「あれ？怒んないんだ？」

「怒るとでも？」

「……少しは」

「アカネ先輩に捧げる散々言っといてそれは無いでしょうよ」

「そっか……」

「それで、この学園はなんなんでしょうか？」

「きっ君はさ、校長どう思う？」

「どう思うって……？」

どう思うかと言う質問に戸惑う、なんと答えりゃいいの？カッコいいとか？

「……ん？」

「何か浮かんだ？」

「そう言えばちょっと思うことが……」

今まで違和感無くいたが、確かによく考えればおかしかった

「校長、若過ぎるような……？」

確かに若い校長も十分にあり得るが……
発言や能力とかが年齢に合ったものだとは思わない

「若作りとか……？」

「なんか合ってそうだけど、ちょっと言いたい事とは違うよ」

「じゃあ一体……」

「きっ君、吸血鬼って知ってる？」

「まあ……聞いたことはありますね」

人間とは違い、血を吸い血を取り込ませることによって眷属を作る種族
誇り高いやら残虐やら聞くが真相はわからない

「まさか……」

嘘だろ？吸血鬼が学園作ってるなんざ馬鹿げてる……

正直あり得ない

「そのまさかだよ」

「なんで……学園なんざ建ててるんすか？」

「その理由は分からないけど……」

まあ……分かった場合既にこの学園がないか対策されてるだろうし……そういう意味ではアカネ先輩が無事で良かった

「まあ予想だけど」

「予想は出来るんですね……」

「眷属作り」

「眷属作りですか……」

それが本当ならマジで面倒なことしてくれる……ふざけんなって言いたくなるな

ただまあ知れただけ良かった

「ただ知れてよかったっすね」

「どうして？」

「校長達に気を付ける必要性知れただけでも良かったと」

「いや……ダメなんだよきっ君」

「え……？」

「もうとっくに血が入ってるから」

「なっ……!?」

いつだ!?いつ入れた!?

夜は確かに寝てるとはいえ物音すりゃ気付くぞ……なのにおかしいだろ……

「入学後覚えてる?」

「ああ、専攻コース決めたりとか先生達と話したりとか」

「注射したでしょ?」

「ああ、脳髄とかの吸収率上げたりとかポーション受け付けたりするのに必要だって……」

注射……血液の中に打ち込む針……

「まさか……」

「そう、それだよ」

「嘘だろ……」

あの時俺の中に血を入れられた？
嘘だよな……眷属になっているのか俺……？

「何かおかしいことなかった？」

「おかしいことって……？」

「眷属は吸血鬼には逆らえないんだよそういうケースなかった……？」

「そういうケース……」

過去を思い出す、何かあったか……!!

『君の秘密を教えたまえ』

……そうかそう言う事だったのか

俺は眷属になったのか

「アカネ先輩……」

「どうだった……?」

「ありました、強制されかけたこと」

「きっ君はまだ1年なのに……そこまでしてくるんだ……」

確かにそうだ、俺はまだ1年だし下手に警戒とかさせたくないはず……いやその件なくても警戒してたが

「ちなみに何があったの？」

「秘密を話せと」

「……きっ君のか……色々な件バレちゃって本気でまずいね……と言うかきっ君本当に秘密が爆弾だらけなのに」

「ただ……話してないんで大丈夫です……」

「え？」

驚いた顔をする……

確かに逆らえないとは聞いたがそれほどなのか？

「きっ君耐性でもあるの……そこまで？」

「いえ……カーミラ先生が呼びに来たので運良く助かったわけですが」

「そっか……」

アカネ先輩が浮かない顔をしているが一体何が……

「まずいですか？」

「きっ君に聞くってことは何か察してるってことでしょ……まずいと思う」

「どうにかならないですかね……？」

「どうにかするんだよ」

「まあそうですけど……」

「私は吸血鬼達にきっ君を渡す気ないから」

「アカネ先輩……ありがとうございます」

「もう……ぃ」

「うん？」

なんか言ったのかアカネ先輩？聞き逃してしまったんだが

「なんでもないよ」

「えっはい分かりました」

「まあ大体話終わったから、これ以上は今のところないかな」

「まあ吸血鬼で手遅れだなんてやばいっすもんね……」

「分かってると思うけど他言無用だから」

「流石に言い出せませんよ」

「そりゃねえ」

落ち着いたので合流する
教師達は来ていないようで良かった

「きっキル夫君大丈夫なの……？」

「ああデク、大丈夫だ」

「力になって上げられなくてごめんね……」

「いや、むしろ知らない方が良かったし助かる」

「そうなんだ……」

「うん……まずいな」

「じゃあ気にしないでおくね……」

「それが賢いと思う」

とりあえずモンスターも教師も来ないらしい……そこは安心だが……

「一先ず今日は休みましょう」

「交代はどうします？」

「ん？今日くらいはウチが張っておくので休んでていいっすよ」

「いいんすか？」

「勿論、ただ明日少し休むんでその時は他みんなでお願いするっすねー」

「了解」

先に休ませてもらった

先生達の動きが分からないが……どうなるものか……

明日も頭フル稼働して考えるしかねえな

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

2日目、３日目、４日目と過ぎて行く

先生達の姿どころか気配すら感じない

本当に入って来ているのだろうか？

「変ですねえ……」

「やっぱりそうですか？」

「ええ、数日あればダンジョン回り切れるので」

確かにダンジョンは広くて1日じゃ到底回れない、ただ……数日あれば話は別だなのにこのエリアは先生が来たのを隠れるどころか回って来すらしない

「誘われてるとか囲まれてるとか追うっすか？」

「いや、それはないでしょう……メリットがないですからねえ」

「そう言われるとそうっすね」

そもそもテストだと言うのに全員で囲うのは流石になしだろ……

そんなことされちゃ溜まったもんじゃねえ

「モンスターは相変わらずいますし、音もなってるはずなんですけどね……」

藤堂が言う通り、音は立てている
流石にⅣ先輩が戦うと人形達の音で騒がしくなるため避けてはもらっているが……
暗殺だけじゃどうしようもねえし

「単純に見つけられなかったって無いんですか……？」

不安そうにデクは尋ねる、怯えなくてもいいと思うが

「無くはないですがやっぱり無さそうなんですよねえ……」

「意図が分からないと……」

「そうですねえ……それが恐怖なんですよ」

「把握されてる可能性が高いってことですか？」

「ただそれでなんで来ないのかって話なんすよね」

その理由が全く分からねえが……

まあ思いつくのは……

「純粋に俺達が固まっているからソロじゃ倒される可能性あるし合流狙っているとか？」

「その可能性ですか……」

無くはないと思うが……そうなったら勝ち目ないな……

「それならそうですねえ……」

Ⅳ先輩は何かを考えているようだが……

「この前のあの技使えますか？」

「あの技って？」

「お宝探しに使ったやつです」

「発掘禁止領域っすか……使えますけど……」

あの技はお宝探しに以外効果無いとは言わないが今使った所でって感じ効果だが……

「では使ってください」

「何故……？」

正直意図が分からないんだが……時間の無駄というか危険に晒すだけじゃ？

「バレていると考えます」

「かくれんぼなのに!?」

「そもそも1週間逃れる内容とは思えませんしこれ」

「確かに……初日こそ広いとは思いましたが……」

「なので……お宝出来るだけ持って帰るのがいいんじゃ無いですかねえ」

「あー……」

アリか無しで言えばアリだ、どうせ見つかってると考えてるならお宝稼いだ方がいい見つかってなきゃ逆効果もあるが……

「どうせ5日目まで残ってるっすし落第点にならないくらいは皆成績あるっすよね?」

「まあ……そうですね、僕達も流石に大丈夫です」

「なら大丈夫だと言う事です」

「分かりました」

お宝を入手できるなら好機といった所だんじゃやるっきゃないか……

「流出領域……」

さて……今回のお宝数はどのくらい……多けりゃいいんだが……

「まあ流石にそれはやらせられねえな」

「がっ!?」

唐突に何かを投げ込まれ痛みが走る

なんだこれ……

「悪いな、こっちのこと気付かれてんならそうは行かねえんだわ」

言葉と共に男が姿を表す

「なっ!?」

Ⅳ先輩が驚く、なんでだ……？

「なんで……」

「ごめんなさい、ちゃんと索敵は3年2人でしていたのですが……」

教師が近くにいたら気付く……はずだった

「おいおい、俺を長谷川と同じ程度って思われちゃ困るぜ」

野原ひろし臨時教師……いるはずのない人間がそこにいた

「何故……!?」

「残念だが一般人と間違えたか知らねえが、俺の隠密のが勝ったってわけだ」

「まさか彼女の索敵まで越してくるとは思いませんでしたよ……」

「そりゃあ年季が違うんだよ」

「そうですか……」

1人なのかどうかは分からない……

ただ逃げるに限る

「逃げるなよな」

「でもかくれんぼですよね？」

「それなら見つかった時点でアウトなわけだが」

「そこは逃げ切れればなんとか」

「つれない事言わないでくれよ」

「いや誰だって逃げるでしょ」

「俺がわざわざこっち側に来なせない様に人払いしてたのによ」

「え？なんのために？」

「逃さねえためだよ」

「ここで逃げるなとは大層ですが」

「まさか、教師１人が怖いのか？」

「残念ですが試験内容が優先ですので」

「いやあ、そうかなるほどなあ……」

Ⅳ先輩が言いくるめているがそりゃ逃げるだろって思う
俺達を止める秘策とかなきゃ逃げる事最優先にするっての

「なら仕方ねえなあ本当に、話してやるよ」

「いいえ結構です、ではさようなら」

Ⅳ先輩がパペットを飛ばして距離を取る、逃げ切れるかはともかく全員が捕まることはないだろう

「そのまま逃げてもいいんだが……死ぬことになるぜそこの嬢ちゃん」

「!?」

「キル夫君何をしているんですか!?」

「いや……流石にそれは」

「乗ってはなりません、罠ですから」

「それはそうだが……」

罠は張った、本来なら張るより逃げるべきなんだが……

胸騒ぎが収まらねえ……嫌な予感がする

「まあ、奇襲なんざしねえから安心しろ……」

「何が言いたいんだよ……時間稼ぎか？」

「そうじゃねえっての、まずは改めて自己紹介といこうか」

そういいスーツを正す、一瞬身構えたが本当に正しただけのようだ

「俺は野原ひろし、今は臨時教師をやっているが所謂裏の人間だ」

「まあ……真っ当な雰囲気を感じないから堅気では無いと思ったっすけど」

走り先輩がこっちまで戻って来ている

いざとなったら俺抱えて逃げそうなくらいには警戒しているようだ

「それで、ただ教師をやるとかそれ程暇なわけじゃないわけよ」

「暇じゃないなら受けなきゃいいんじゃ……」

「違うっすよキル夫君」

「何がです？」

「そう言うことは別の依頼を受けてきたってことっす」

「おう賢いね嬢ちゃん、そう言うこった」

「裏の仕事も兼ねて教師をやってるってわけか」

「丁度依頼もあったし一石二鳥と言うわけだ」

その依頼……さっきの発言から考えるとまさかとは思うが……

「暗殺依頼ってわけかよ……」

「おうそうだ、俺の獲物だったしこっちには誰もこなせなかったってのがある」

　クソが……っつーことは最初から付けられてたのかよ、急いで出てこなかった理由が分からねえが

「本当はさ、もっと前に特に夜とかに襲撃したかったんだがよ、そこの嬢ちゃんしか起きてねえし……ただ夜はこの付近に校長だの居て邪魔でな」

　教師数人だったのがある意味助かったのか……？

　と言うか……狙いはまさか……

「走り先輩、逃げてください……狙いは……」

「あっそっちじゃねえから安心しろよ」

「ん？てっきりウチかと思ったんすけどね結構敵作ってるっすし」

「生憎全く依頼来てないな」

「だったら……」

他のメンバーの方を見る

誰であっても欲しくないが……

「私ですか？」

「いや……嬢ちゃんはそもそも誰だ……学園の生徒だろうに情報が一切入ってないんだが……」

まあ藤堂は学園の秘匿だったし知らないってこともあるのか

……いや待て、待ってくれと言うことは

信じたくねえが……いや信じない

「……」

「おう、分かってるじゃねえか」

「アカネ先輩!?」

なんで……いやなんでだよ!?狙われる理由なんてないじゃねえか……誰が依頼なんてしやがった!?

「理由は分かってるよな?」

「……さあね?」

「強がるのは結構だが、依頼は依頼だ始末させてもらうぜ」

「させるわけ……ねえだろうが」

「おいおい……流石に舐められちゃ困るんだが」

クソが……確かに言われた通り逃げることなんだ出来ねえ……

最大で最悪の足止めだ

「きっ君……」

「理由はあるのかもしれませんがそんなん知らねえ」

護るって決めたんだから理由なんざいらねえ

過去に何があったのか、何かしたのか分からねえけどそれでも俺はやることをやる

「やはり、こう言う時のために僕も居た方がよかったでしょう?」

「Ⅳ先輩……」

「後輩を守るなんてキザなこと言う人間ではないので先日の金貨を依頼金として受け取ったことにしましょう」

「有難うございます」

「まっウチもじゃあそれで」

「走り先輩？いいんですか？」

「そもそもウチはキル夫君に前助けられてますしー」

そう言えばそうだったが……自分優先じゃないのか？
まどか先輩も言ってたが他人のためにこうも命を張れるのか？

「おいおい、他勢に無勢じゃ命の保証できないぜ？いいのか？」

「ヒーローは逃げたりなんてしないから」

「デク!?お前っ……」

「あまり役に立てないかもしれないけど、誰かのために戦うのがヒーローだから」

「私もヒーローなんてガラじゃないけど、こういう風に戦ってみたかったんだ」

本来はかくれんぼするためのメンバー、手を組み自分が残るために利用も考えるであろうために組んだはずなのに
誰1人としては逃げることなくここにいる

「アカネ先輩」

「……なんで逃げないかなあ……危険なの分かってるはずなのに」

「皆アカネ先輩が大事だからですよ」

「いや……どっちかと言うと大事にされてるのきっ君じゃない？」

それは言わないお約束だ、アカネ先輩だって護られていいじゃないか

「……有難う」

「それは、助かってからにしましょう」

「おうおう、誰1人として逃げないか、いいねえ」

「逃げた方が都合よかったんじゃないっすか？」

「いいや、時にはこうやって命を限界まで張るレベルじゃねえと鈍るからな」

「アンタが鈍ろうが違かろうがどうでもいい」

大切な人を殺させやしない
武器を抜いて準備する、罠も……今回はモンスター暗殺メインだったため余裕がある

「いいねいいね、これだよ」

６ｖｓ１だと言うのに涼しそうな顔をしてやがる
ボンボルド先生の時は苦戦したが今回はマジで命賭けてでも負けられない

「さあ来いよ、卵ども」

ＢＯＳＳ：野原ひろし
クリア条件：野原ひろしの撃破

――――――――――――――――――――――――――――――――

続

第３５話④

―――――――――――――――――――――――――

なんだかんだ言って冒険者はやっていたものの、モンスターと戦うことは多くも人と戦うのは初めてだ
相手が殺してこようとする以上殺してもいいはずだが……

「……」

躊躇われる、と言うよりも殺しちまいそうだと手が震える
海賊時代も結局仲間が人を斬る事はあったが俺がしていなかった
中間試験の時も結局殺人鬼の死から目を背けた
アカネ先輩が何よりだしそんなことしてる暇なんざねえのに

「おいおいどうした坊主」

「どうもしてませんよっと」

腕を狙う、武器さえ落とせれば一気にこっちのもんだ

「へぇ」

「なんだ?」

「いやいや分かりやすいなと」

「何がっ……ちっ……」

小型爆弾をかわされる、自信あったんだがな

「おいおい、手品はそれで終いか?」

「……」

落ち着け、相手のペースに飲まれたらその瞬間終わる
残念だが格上だし数人で戦ってもきつい

「まだまだありますが、加減してくれたっていいんすよ」

「おう、まだ軽口叩けるか、いいねえ」

「んなっ!?」

今何かを飛ばされた、手に痛みが走ったが

「悪いが、お前はもう終わりだよ」

痺れかこりゃ……だいぶ暗器に塗ってあるらしいな
体が震えて動けなくなる

「んじゃ他のメンツをやりますか今のうちに」

「キル夫君……！」

「んじゃそこのガキで」

「デクの方へと襲い掛かろうとするが」

ドカっとひろしは背後から殴られる
ダメージは入ったであろうも倒すまでにはまだまだだ

「……あ？なんで動けんだよ」

「さあなんでだろうな？」

常人であれば立つことすら無理だろう、ただ状態異常に対してだけは俺は無敵なんだ

よ

……いや無敵ってわけじゃねえか

「効かねえ体質ってわけかねえ？」

「さあどうだろうな？」

正直もう一度打ってきてくれりゃ楽なんだが……あのくらいなら問題ないしただ……流石にそこまで間抜けな相手じゃねえか

「っと油断もならねえな」

後ろから迫っていたⅣ先輩のパペットもかわす……音すらしてねえのになんでかわせるんだよ

「ふっと」

「嬢ちゃん達、武器の扱いは悪くねえが」

アカネ先輩達が投げたナイフをかわすまでもスーツが弾く……嘘だろ……

「残念だがスカウト系は俺のが上だ、勝てやしねえよ」

「……んー、キツいっすねえ」

このチームは盗賊を詰めれるだけ詰めたって感じだし火力不足もある
力すらもまさかの藤堂達をも上回っており厳しい

「すみません……」

「いや……俺達も何も出来てないしな」

「そもそもを考えれば隠れていればよかったのに出てしまった僕が悪いわけで」

「いやいや、問題ねえよ」

「何がですか？」

「そもそもだ、お前達の存在がとっくのとうに気付いていたしよ」

「まあ……でしたね」

もうバレていたんだろうしやっぱそうするのが正解だったか……使った瞬間出てきた以上どうしようもねえが
ってそうじゃねえよ……対人ってことで目を逸らしたくなってるがダメだただ……本当に殺しをする覚悟が必要か……

――――――――――――――――――――――――――――――

「（コイツは戦闘自体は強くねえが面倒だな）」

キル夫の戦意が低いことを察したひろしだが……それ以外の耐性含めてスキルが本当に面倒だと察している

「(状態異常が効かねえのはともかくトラップが何故か効かねえ……覚えてやがるのか？)」

「(コイツだけなら余裕だがそんなわけでもねえし)」

戦士の2人は大した事ないが人数差としてのウェイトが予想してたより多く厳しい

現状考えている事は目の前の少年をどう利用するかだ

「(出来りゃまだ奥の手は控えてえんだが……)」

最悪な事にターゲットがこちらの動向を警戒してやがる

1人2人くらいなら始末できるかもだが、ターゲットを対象にできない時点で厳しいな

アイツらの娘ってわけあるか

「本当にお前ら学生かよ……」

「そりゃ勿論……」

「キル夫君油断してる暇無いっすよ!?」

「すみません……」

褒めてもすぐ律される
到底こちらの思い通りに動かせない、場慣れしてやがる

「（調子に乗ってくれりゃいいんだが到底無理か……司令塔のあの少女が邪魔だな）」

金髪の少女を恨めしく睨むが、同時に凶器が飛んできて避ける……危ないな
しゃあねえか……今は狙うべき相手は

「本当は先に見せたくなかったんだがな、仕方ねえか」

「なんだ?」

「どうせブラフっすよ」

「これなんだと思うかだな」

明らかなスイッチを出す……おいおいそう言うの嫌なんだが

「こっちも本気なんでね、ダンジョンに罠を仕掛けるなんざ容易いんだよ」

おうおうこっちに気を取られてるな、んじゃ見せてやるしかねえだろ
躊躇いもなくボタンを押す
その直後揺れが始まる

「んなっ!?罠が発動するのか!?」

おいおい……そう言う類のもんがあるのかよ……ぶっ壊れすぎだろ
ただ罠が無効なのか……マジで面倒だなおい

「走り先輩こっちに!!」

「ちょっとキル夫君!?」

別れていては危険だと引き寄せる
驚かせちまうが仕方ねえ

「案の定期待通りに動いてくれたか」

「ほんっと嫌な教師っすね」

その言葉とともに吹き飛ばされる
え？走り先輩何を!?

「教師なんざ嫌われてなんぼだろ」

「やれやれ……不味いですね」

「まあな、ってことでお待ちかねの奥の手だ」

「なっ……」

さて、コイツらは何処まで耐えれるかね
あっけなく死んでくれた方が楽だが
今が一時的な教師だからか抗ってくれることも期待してたりしちまうな

「さて、俺の領域内でどれだけやれるか？」

流出領域、展開

――――――――――――――――――――――――――――――――

「……なんだよこれ」

領域外に出ている俺が唖然としている

俺１人が抜けたとはいえ藤堂ももう見られること躊躇わず全力を出している

「なのになんでああなってるんだ……」

「キル夫君、入ってきてはダメですよ」

「……っ」

Ⅳ先輩に制止されて突っ込むのをやめている

と言うかアカネ先輩の側にいて警戒している

「しかし……なんすかねこれ」

藤堂は気絶、デクのだいぶ苦しそう
それどころか2人の先輩もかなり辛そうだ

「ええ……こっちが全く領域展開できないとは思いませんでした」

「こう言う時に躊躇えば死ぬだけだぜ？」

「ええ、覚えておきましょう」

「平程度じゃ係長様には勝てやしねえんだよ」

「係長？」

「おっと、今はボスだったな……まあどっちみちお前達とは格が違うんだよ」

「……格」

そりゃ確かにただの学生と裏の組織のトップじゃ格違いだが……

「だからってこんなになるのかよ」

「文字通り格下や雑魚には何もさせねえよ」

「嘘だろ……」

流出は規格外のことが出来るのは知ってるが……こんな一方的になるのかよ

「それが、流出領域ってもんだ」

「……」

「お前さんのも警戒したが、どうやら戦闘向きじゃないわけかなら止めなくても良かったかもな」

「使いようって言っても戦闘用とこんな差が出るのかよ……」

「格下は格下である程弱くなる、当然の摂理だよな」

実にボスらしい能力で……すごい嫌な能力だ……

「キル夫君」

Ⅳ先輩の囁きが聞こえる……

そっちの方を見ると藤堂の無線を確保したようだ

「……」

相手に聞き取られないように無言で聞きに徹する

態度は警戒しているように

「急いで彼女を連れて逃げてください」

「……でも」

小声で反応する、流石にそれは出来ないと

「いえ……正確には他の教師に捕まってしまってください」

「……え？」

「アカネ先輩が他の教師に確保されれば安全なので、ボク達も流石に降参しますし」

「そこまでやばいんすか……？」

「大幅に身体能力が落ちています……下手すりゃこちらが殴ればこちらの骨が折れる程」

「……」

マジか……これだけいれば勝てると思ってたが無理なのか……連れて行くしかねえな

「アカネ先輩……」

手を引いて連れて行こうとする

近くに誰がいるか……オールマイト先生辺りが安牌か？

「うん」

「おいおい、それが通用すると思ってんのか!?」

その言葉に足を止める

足を止めちゃダメだが

「まあ分かってんだろう？人質に出来ることくらい」

「どっちみち死ぬし人質の価値ない気がしますがね」

「流石にターゲット始末出来たら他は放置するぜ」

「だから殺させろでしょう？屁理屈ですね」

「いや、逃げなきゃいいぜ？ここで全員で力合わせて戦ってくれりゃな」

「力合わせてっつったって……そっちの領域じゃねえか」

「無条件で死ねよりマシだろう？」

「クソが……」

本当にコイツが殺すかって言えば殺すんだろうな、面倒だ……

「それにだ」

「あん？」

「獲物は自力で狩って解体してこそだろ？」

「何言ってやがる？」

「アンタらも解体はしたことあるだろ？」

「……」

次こそは相手のペースに乗るわけにゃいかねえ……相手の出方を伺う

「下半分には肝と骨があるから上半部とは勝手が違う、真ん中辺りにいくほどに変化を見せてより一層かき立てられたり……ずらしたら隠れてたのが出てきて驚かされたり……」

「……何を言って」

コイツ何を言ってるんだ？
解体ってモンスターのことだろう？専門業者とかじゃあるまいし

「その内さすがにこちらももう限界と思ったからと、新たな楽しみを見せてくれたりもうずっと興奮が止まらないんだよ!!最高だろ!?」

「まさかテメエ!!」

殺すだけじゃなくて死体を荒らすつもりか……ふざけんじゃねえよ
俺達は海賊をやってたが他のメンツは略奪、殺しはしていたものの死体に罪はないと弔っていた

「いいぜその目、実にいい裏の目だ」

「やらせねえ……」

どうにかしようと突っ込もうとするが……今行っちゃ不味いか……アイツが領域を消しゃいいが……無理だろうな

「（どう突破したものか……）」

小細工程度じゃどうしようもない……止められちまう
本当に……格上だから辛いなおい
本当はアカネ先輩に逃げてって言いたいが……

「……」

逃げはしないよなあ……アカネ先輩
なんだかんだ優しいし……責任感じてるだろうし
縋れる藁でもあればいいんだが……

「……て」

「……ん？」

無線にノイズが走る、誰かが喋ろうとしている？

「……任せて」

確かにそう聞こえた

――――――――――――――――――――――――――――――

「勝ち目ないのにまだやるのかよ」

「不利でも負けたわけじゃねえしな」

「粋がるなよ後輩の前では良いところ見せたいんだろうけど」

「ならばもうちょっと粋がるとするかな」

Ⅳ先輩が普段と違う雰囲気がする……

一体何が……？

「けれど全然俺を倒すには程遠いんだよねえ」

「アレが普段の先輩だよ」

「マジで!?」

「うん、きっ君は見たことないだろうけど」

「見たこと無いですね……」

「ふぅん……」

Ⅳ先輩は圧倒的に不利だが……パペットも上手く扱い切れていない

「ただ時間稼いでくれるんでしょう?」

「ああ……隙を探すしかねえ……」

Ⅳ先輩の時間稼ぎを基に隙を探す
時間がない……すぐに探せるかどうか

１ｄ１００：５０＞２３　成功

「今か」

「おい、どうする気だ?」

「まだこっちのがマシだろうなので耐えてくださいね」

流出領域、発掘禁止区域
全て俺の世界に乗っとる

「は？なんで俺のテリトリーが荒らされてるんだ？」

「1つは俺が領域外で雑魚くならなかったこと、もうひとつはそこまで耐えたからかねえ」

「なるほど……お宝探しと思いきや重いなだいぶ……」

「逆にこっちは軽くなったっすけどねえ」

さっきまでよりはマシになった先輩2人が立ち上がる
それでもだいぶ辛いだろうに……

「残念だがフラフラだろ、これならまだ俺でも行ける」

「本当は俺達がなんとかしたかったんだがな」

「まっウチも後輩にいいとこ譲るっす」

「デク!!」

だが中途半端じゃどうしようもねえ……だから最高の一撃をぶつける

「なっ!?」

慌ててデクの方を見るがもう遅い
領域内で倒れていたデクを甘く見過ぎた
任せてって言った彼の本気を

「ワン・フォー・オール・フルカウル」

威力の篭った一撃をぶつける
その途端ひろしが吹き飛ぶ

「アレが８％　……？」

「有望じゃないかな？」

「むしろ怖いんだが」

しかしこれで安心ならいいんだが

「合格と言いたいところだが……最後まで油断するもんじゃねえぞ」

「キル夫君!?」

「っクソしぶといんだよ……」

アカネ先輩の方に爆発物が飛んでいく
かわすには多いか……

「……」

ああ分かってる、いつも通り人間を超えればいいんだろ……最近自分に違和感を感じてきたが……そんなんなんざどうでもいいしな

「……」

〝いつも通り〟アカネ先輩の方へと飛んで行き離れる体の痛みなんざ気にしねえ

「きっ君……？」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だけど……」

「なら良かったっす」

「……」

何やら不安そうな顔をしているが……
今はそっちより……

「まさかんなバグスキルまで持ってると思わなかったな」

砂煙の中で声が聞こえる

「もう動けなそうっすね」

「おう降参だ降参」

「じゃあお縄にかかって貰うっすね」

「悪いがそりゃ勘弁だ、逃げるとしよう」

「逃すわけねーだろうが」

ここで逃したらアカネ先輩が危険になる
もうそんなことさせるわけねえだろうが

「まっターゲットの近くにテレポート出来る人間なんざ勘弁だ、今回の依頼は取りやめだな割に合わねえ」

「その言葉信じられるとでも」

「信じるしかねえよ」

煙が晴れて行く
そこには……ひろしの姿は無かった

そして手紙だけが残されて

『なんせ逃げちまったからな信じていいぜ』

「なんっ……」

「まあ……信じていいと思うっすよ」

「なんで……？」

「裏の人間っすけど、嘘つくタイプじゃないんで」

「そうですかい……？」

「本気で割りに合わなそうに見てたし」

「じゃあまあ……俺の能力見せて怯えたが……結果的にアリか？」

「まあそうじゃないっすかねえ」

「なら良かった、デクも有難うな」

「うん……守れたようで良かったよ」

「おう大金星だぜ」

「えー……それで皆さん」

「どうしましたⅣ先輩」

「喜ぶのは分かりますが、今はまだかくれんぼ中です」

「まあそうですね」

「隠れるの再開しましょう」

「領域はどうします？」

「やめておきましょう、多分さっきに話的にこっちは見にきてると他教師は思っているだろうなので」

「分かりました」

結局かくれんぼは隠れ切れた
Ⅳ先輩の予想通りこっち側の担当していたらしく、誰も来ることはなかった
むしろ教師方はひろしが消えていたことに驚いたようだ

「隠れ切れた生徒はほぼなしと」

盗賊コース2年で単独で隠れていたメンバー2割程度が生き残ったほとんどでそれ以外は全滅に近いらしい

３年は行けると思ったが逆に折原先輩にリークされたようだ……鬼がいる

「とにかくアカネ先輩を守り切れて良かったです」

「うん、そうだね」

「ただ……どうしましょうかねえ」

「うん？何が？」

「いや、これから夏休みっすし……アカネ先輩が裏の人間達で不安なんすけど」

「あー……まあ私も帰省するしねえ」

「呼ばれてる以上残念っすけど」

「んーきっ君ウチ来る？」

「え!?」

「ちょっと気になる事もあるし」

「ただ俺も帰らないと……」

「別にすぐじゃなくてもいいでしょ、こっち行ってからそっちも行く感じで」

「……じゃあこっち側も付いて来て貰っていいっすか?」

「どうして?」

「いや……すぐ帰らないからなんか言われそうだし」

後は覚悟は出来たが……それでも怖いもんは怖いんで……流石に口には出さないけど

「こっちも付き合わせちゃうわけだしいいけど」

「了解っす」

夏休みはアカネ先輩と一緒に行動する事だらけになるがちょうどいいかもしれねえ
何もなきゃいいが……無理だろうな

「それじゃ支度して、明後日には学園出るから」

「マジで!?急ぎます!!」

急いで準備する、明日は休みだが明後日からイベント盛り沢山だ
あっ一応俺の方一緒に来るやつがいるかは聞いてみるかな
ワクワクしながら帰路についた

…

「きっ君」

1人の少女が不安そうにその後ろ姿を見る

「……父さん……いやあの人ならどうにか出来るかな？」

さっき助けてくれた時見てしまった
普通にしているはずだったのに
片目だけ白いガラス玉のような……人間の眼ではないそれを

「代償……なのかな？」

正直私には分かりようがない
能力を使う事も止めないとって思っている

「それで止めるような人間に思えないけどさ」

それでも彼がこのままでは人間でなくなってしまうかもしれない
そんな不安を抱えながら夏休みへと入った
絶対に治したい、治せないなら止めないとと誓って

第３６話

―――――――――――――――――――――――――――

「きっ君乗り遅れるよー！」

「待ってって、はえーってば」

アカネ先輩の故郷へは場所で行くことになったが結構距離があるらしい
そのため乗り遅れないように必死である

「まあセーフだったが」

「と言うか言えば待ってくれたけどね」

「……なんで急がせたんです？」

「だってきっ君だけのんびり来るの嫌じゃん」

「……はぁ」

なんだか納得出来んがまあいいだろう

とにかく帰ることになったが

「中嶋もこっちなんだ嬉しいな」

「なんなんだ貴様は」

「えー、つれない態度取らないでよー」

「本当にいつも何気味の悪いことをしてくる」

多くこそ無いが、こちらの地方にも帰省する生徒が多いみたいだ

知り合いは中嶋と……

「キル夫、期末はどうだったよ」

「無事残れました」

「本当か!?鉄華団としてキル夫だけが残ったのは俺達が恥だなおい」

「しょうがないでしょ、オルガ隠密とか向かないし」

「だってよミカ、俺達に隠れるなんざねえよ」

「その結果校長に挑んでアレでしょ?」

「うっ……」

オルガ先輩と三日月先輩、２人の先輩がこっちみたいだ

他はちょっと分からないな、交流してもいいんだが……帰省中だしあまり話しかけ辛い

「まあ着くまでも時間かかるしゆっくりしろよ」

「そっすね」

実際長いって聞いたしどうだか……

馬車が長いと腰に来そうだ

「向こうであったらよろしくな」

「近いんですか？」

「いやだって、新条のとこだろ？」

「有名なんですか？」

「そりゃなあ……」

まあ親関連で狙われてた言ってたし……そう言うことか

「俺達だって世話になったしな」

「結構意外ですね……」

「なんせ俺が鉄華団作るようになった理由なんざ」

「オルガ先輩」

「ああ悪かった……」

っとオルガ先輩止められてるし

まあ聞き出していいことかって言うと不安だしいいか

「とにかく新条は凄いってことで」

「はあ……」

纏めたかったんだろうけど……うまく纏められてないなオルガ先輩

まあいいか気にしたところでだし

「着いたら詳しく話すから」

「分かりました」

「おいおいキル夫いいのか？聞きたいとかしなくてよ」

「別に……後で話してくれるって言ってるんで」

「おっ……おうそうか」

「……？」

何か不思議そうにしてるが……なんかあったのか？

「キル夫は好奇心旺盛なイメージあるから意外そうってさ」

「おいミカ言うなよ!?」

「好奇心旺盛ですか？」

「だって宝箱とかあったら率先して開けていく君がこう言うことで物静かにしてるの珍しいって」

「そうですかねえ……？」

「さあ？」

「さあって……」

「少なくともオルガはそう思ったって話だし」

「そうなんですか？」

「ああ、そうだな」

そう思われていたのか

確かにそう考えるとおかしくない……のかな？

「まあアカネ先輩が後で言う言ってますし」

「コイツはそもそも新条先輩に頭が上がらんからな」

「ははっコイツぅ」

「うざい」

「泣くぞ」

「いや、今のはきっ君が悪いでしょ」

泣いた、すっごく泣いた
涙が出てないけど泣いた

──────────────────────────

コミュ　１ｄ６：３　オルガ・イツカ

「おうキル夫」

「どうしました？」

「いや、しっかり休んどけよって」

「そうですね」

今は夜間になり休憩も兼ねて皆馬車を降りている
どうしても場所に乗ってると揺られて疲れたり腰を痛めたりするしな……

「馬車は慣れといた方がいいからな」

「それはそうでしょうね」

馬車は冒険者にとって必須だし慣れないとダメだ
腰痛いのは勘弁してくれって話になるが

「逆に、馬車から降りた時どれだけ休めるかも重要になる」

「マジですか……？」

「冒険者が質の良い馬車乗るわけねえだろ？」

「まあ……そう言われると確かにそうっすね」

「ちなみに今回の馬車はどう思うよ？」

「今回の馬車ですか？」

見てみると一見普通の馬車に見えるが……

「えっと普通ですか？」

「普通ってなんだよ……今の答えじゃねえよ」

「そっそれじゃあ……」

アカネ先輩に任しちまったし正直判っちゃいない
ただ……俺達は冒険者と考えると……

「安い、ですか？」

「いいや、高いぜ？」

「マジですか!?」

正直高いと思わなかったが……そんなアカネ先輩に配慮されたのか？

「長距離だし高くなきゃ死ねるしな、ただ高くても地形のせいで痛いんだが……」

「これで安いと……？」

「考えてえか？」

「……やめておきます」

「賢明だ」

いや……マジでそういうの勘弁してくれよ……
乗るだけで気が滅入りそうだ
慣れなきゃいけないのかもだが

「それじゃあケチるなってことっすかね？」

「いや……ケチり過ぎも良くないとはいえ流石に安い場所にも乗れるようにしとけ」

「万全に戦えないのでは？」

「……場合によっちゃ潜入とかでもっと劣悪な場所もあるしな」

「……そう言われるとそうですね」

「だから外にいる間の休憩の取り方とか考えるだな」

「ただ休めってわけでもないんすよね？」

「当然だ、それは後悔することになると思うぜ？」

「後悔ですか？」

「ああ、適度に今動かさねえと体がやべえ事になる……馬車内じゃ動けねえしな」

「なんかオススメの方法とかあるんですか？」

「ああ……止まるんじゃねえ体操ってのがあってな」

「……凄い嫌な予感がするんですが」

「まあ一度やってみろってな」

やってみたが……何というか……撃たれそうだなって不安に襲われる事になった

――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ　1d5：5

「ん？マジか？」

格好こそ違えどそこには見知った顔がいた

……と言うか姉さんなんでこっち方面に？王都と全然方向が違うんだが

「姉さん……まさか追ってきたとかじゃないですよね」

「ん？」

こっちに気付いたように振り向いてくれる
……ってうん？

「すまない、貴公とは初対面のはずだが」

「はい……そうですね、知り合いに似てたので間違えました」

よく見ると姉さんじゃない……似てるようだが別人だ……失礼なことをしてしまったな

「いや……それは構わないが……うん？知り合い？姉さんって呼んだのに？」

よく考えたらその疑問に持つよな、最近自然になり過ぎてるわ

「それには深いわけがありまして……」

「そうか……気にしない事としよう」

色々と助かった気がする……先輩のことを姉さんって呼んでますとか初対面の人に言いたくないし

って思ったがそもそも先輩ですらねえ同級生……そっか俺同級生を姉さん呼びしてるんだった

「それで、貴公は何故こちら方面に?」

「ああ、友達のとこに遊びに行くんで」

先輩のところによりはマシかなとつい言ってしまったが

大して変わんなかったか?まあいいか

「そうか、わざわざ場所でくるとなると大変だな」

「別に大変ってわけではないですよ……ええっと」

「ああすまない、私は三宮モニカと言う」

「そうですか……三宮……」

俺の記憶が正しければ確か三宮って姉さんと同じ苗字じゃなかったか？

「うん？どうしたんだ？」

「いや……さっき間違えてしまった人と同じ苗字だった気がして」

「それは本当か？被るように思えないのだが……」

被るように思えない……

あれもしかして……まあいいか

「その人は三宮三葉と言うんですが」

「……妹だ」

「すっごい似てますね」

「だろう」

姉さんの姉さんが現れた
どうする?
・驚く
・逃げる
・戦う
・モニる

……どれもしねえよ!?
と言うか最後のなんなんだよ!?

「どうも、岡島キル夫と言います」

「妹からよく聞いている」

「なんと？」

「弟と」

「……そっすか」

いや……間違いじゃないけど姉に弟って説明するのはどうなんだ……？

「妹が迷惑をかけている……」

「いや……大丈夫っす」

何というか気まずいんすけど……

弟が増えたーみたいなノリは普通姉さんにしか出来ねえんだからな!!

「えっと……弟だと思って振る舞えばいいか?」

「いや辛くないですそれ?」

「辛いというよりも戸惑うな……」

「ですよねー」

モニカさんとしては初対面の弟ってもうわけわかんねえもんなんで本当に初対面に弟推奨してきたのあの人???

「……貴公は苦労人だが善人に見えるな」

「苦労人は……まあ……」

冒険者だししょうがないんだろうけど……
姉さんってよりも学園が学園のせいで気苦労している

「ただ善人かって言うと悩ましいんですが……」

「いや……私が男を知らないだけかも知れんが……三葉の友人はそのな……」

「ああ義勇さん……」

「分かるだろう？」

「分かります……」

ただ……いい人ではある……理解され辛いのはそりゃそうだが……

「と言うことでほぼお前に妹を任せることになると」

「えぇ……確かに一緒の時は守りゃしますけど」

「本当にいい奴じゃないか！」

「そっすかね……？」

「いや冒険者なら自分優先だろ？と言ったように思うんだが……」

「どうでしょうね？自分はみんな守る気でいますが」

「そうか、冒険者に向かないような気もするが……」

「そうですかね？」

「そうだ、学園を卒業してよければウチに来ないか？」

「？？？」

三宮家に婿入りしろってこと?
ちょっといきなり口説かれるのは分からないです

「何か勘違いしてないか?」

「先ずはお友達から……」

「何か勘違いしてないか!?」

なんか怒られた……解せぬ

「まあ勘違いなんでしょうね」

「私達は聖騎士団聖王直属部隊と言うものに所属していてだな……」

「???」

「まあ王の側近だ」

「気軽に誘うものじゃないのでは？」

「それはそうだが、妹から考えても信頼出来る立場だと思ってな」

「まあ実妹からの勧誘は確かかもしれませんが……」

「一応ではあるがな、そう言う選択肢もあるぞと」

「ただ……俺は冒険者になる予定なんで」

「無理にとは言わんよ、さっきも言った通りに選択肢と言うわけだ」

「有難うございます、選択肢が増えるだけでも十分っすし」

「うん、私としても喜んでくれるならいいことだ」

ところで……さっきから変な位置に視線を感じるのだが……

「あの……モニカさんどうしました？」

「いやな……冒険者の装備自体も珍しいから失礼だが見させてもらっていた……不快か？」

「いや、全然問題ないですけど」

「なら見せてもらうが……それはなんだ？」

「これは無線っすけど」

「無線とは？」

「簡単に言うとこれ持った物同士が連絡取れるみたいな？」

「……」

「どうしました？モニカさん」

「キル夫、諜報部へ伝えておく間違いなく合格だろう」

「え？」

「しょうがない、姉扱いしていいぞ！」

「え？」

そのまま大変な事になったのは言うまでもない

―――――――――――――――――――――――――――――――

「おい、どうした？」

「いや……さっきまで何というか……悪い人にではないんだが絡まれてな」

「なるほど普段の貴様みたいなものか」

「酷ない？」

「自分の行動を省みろ」

「……」

「逆に否定されないのも困るんだが……」

「ごめん……」

でも……今後自重するかと言えばしない気がする、中嶋君には雑に愛情もって絡みたいし

「……どういう状況？」

「あっアカネ先輩」

どういう状況なんだろうなこれ？
なんて説明すりゃいいのか分かんねえ……

「まあなんというか……友情というか？」

「俺様も我慢の限界があるが」

「えっ友達すら否定!?」

「これを友情ごっこと言うのを否定する話だが」

やっぱこの子ツンデレじゃん……惚れるわ

「まあ……なんでもいいや」

「あ……そっすか」

あんまり興味を持ってもらえなかった……悲しい

「そろそろ降りるよ」

「あっ着いたんですね」

もうちょっとかかるかなとか思ってた

オルガ先輩のお陰で馬車の中ではだいぶマシになってる

「おい、遅れるんじゃねえぞ？」

「あれ？オルガ先輩？」

なんでオルガ先輩が？アカネ先輩の身内ってわけじゃあなさそうだし

「どうしたキル夫？」

「ここなんですか？」

「ああ、ここだが」

「アカネ先輩のとこに何か御用って事で？」

「ああ久しぶりに顔出ししとかねえとなってよ」

「幼馴染か何かだったんです？あんまそう言う感じしませんでしたが」

「そうっちゃそうだがあまり新条とは関わりねえなどちらかと言うと俺もミカも親と関わりがある」

「へぇ……」

「まあ、オルガが面倒に言ってるけど、俺達にとって親が恩人なんだよ」

「なるほど……」

「それで顔出すってわけだ、新条とも顔馴染みではあるが幼馴染って程ではねえ……ここに来たのも学園に入るよりは前とは言え最近に近いしな」

「なるほど、教えてくれてもよかったでしょうに」

「まあいいだろうよ」

「おっと貴公もここに用があるのか？」

「え？モニカさん!?」

なんでモニカさんまで……

皆してどうしたんだ？

いや……アカネ先輩の実家がそう言うところなのか……？いやそう言うところってなんだろう？

「そうか、まさか行き先まで同じなのは驚いたが」

「……ウチに何かご用ですか？」

「ああ、確かここの娘さんだったな……ちょっと本部の方で用事があってな」

「ふーん」

「とっとにかく行きましょうよ」

「きっ君初対面にしてはなんか仲良さそうだね」

「ああ、諜報部へ来てくれるって話だしな」

「は?」

「違います!!違いますって!!」

俺断ったじゃん!!なんで無理にでも入れようとしてくるの!?無線そんなやばいの!?

「まあいっか」

「ふぅ……」

「その話は後でじーーーっくり聞かせてもらうとして」

「タスケテ」

「それ以上に会いたい人とかいるしね」

「親ですか？」

「うーん親よりも今のきっ君に必要な人かな？」

「？？？」

ちょっと何を言っているか分からないが……

まあ会う必要があるなら会うだけだ

「そう言えばここまで来たんだし実家のこと聞いていいっすか？」

「まあいいけど……」

そうして建物の中へと入っていく
そこは今はこう呼ばれている
カルデアと

第37話

「カルデア……」

見れば見るほど謎な場所だ
ただ……悪い感じはしないが……

「ひとまず立香さん探さねえとな」

「立香さん？」

「ああ、新条の親父さんだ」

「なるほど、確かに探さないといけませんね」

「あの人はいつも何処かうろついてるから」

「そうなんですか？」

それじゃあ何処を探したもんか……

「とりあえず適当な部屋入っていいから探すの手伝って」

「分かりました」

アカネ先輩から言われて探し始める

場所は広いが色々とまわりやよさそうか……

「ん？」

なんか声が聞こえる

こっちの部屋からだ

「失礼しま……」

「ダメだよマスター……」

「あん？」

なんか不穏な声が聞こえるんだが……何をしてるんだ？
まあなんかあったら嫌だし……見てみるか……
空き部屋らしき場所へと入る

「失礼します……」

「ああアストルフォちゃん、アストルフォちゃん」

「ダメだってばこんな場所で」

「……」

何やってんだあれ……
と言うか男の方手が伸びてね……
え……止めるべきなの……？

１ｄ２：２
１．なんか嫌な予感するし別の場所行くか
２．アカネ先輩達も探してるし止めるべきだろ

「流石に何やってんだあああ!?」

「うおっ!?」

驚いたように男の方が反応する、マジで何してたん……怖いんだけど

「助かったよ……」

「襲われてたん……？」

「何というかマスター時折理性蒸発するから」

「理性蒸発で済むのあれ……」

明らかに人間離れしてるんだけど……

まあ確かにこの子可愛いけど……人間辞めるってどうなん？

「待てーアストルフォちゃん」

「ちょっとマスター他の人いるってば!!」

しかしマスターと呼ばれた男は止まる気配がない……

外の人間だし荒事したくはないんだが……この子がいくら何でも可哀想すぎるし助

けるために少し攻撃しなきゃならねえか？

「なんかうるさいんだけど」

「アカネ先輩!?」

「……なんできっ君がここにいるの？」

「逃げてください!!」

まずい、それはまずいなんでこのタイミングに……絶対逃さないと取り返しのつかないことになる

「は？なんで急に」

「アストルフォちゃんさあさあ！」

「……」

「分かったでしょ！早く逃げて!!唖然としてないで」

「……正座」

「え？」

あの男性に対し怒気を交えながら睨んでそう言ったどういうことなんです……？

「あ……え？アカネ帰っていたのかい？」

「……」

「……あの、アカネ？」

「正座」

「……これはその」

「……」

「はい……」

結局気圧されたのか男性は正座を始める

……と言うかマジでどう言うことなの？

「……はあ、きっ君ごめんねなんだか」

「それはいいんですが……大丈夫なんです？」

「何が？」

「えっと……その人とか」

どう見ても正座してるとは言えそのままにしてたらアカン気がするんだが

そう思ってると溜息をつく……本当になんなんだ……いい加減誰か教えてくれ

「これが……お父さん」

「……は？」

ちょっと頭の中の理解が追いつかなかった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「あのーアカネ、いつまでこうしてれば」

「は？」

「ごめんなさい……」

立香さんは怒られている……いやあれ見れば誰だって怒るだろうけど

「きっ君ごめん……これが親で」

「いやまあ……気にしてないです」

多少は気にするが……まあいいや気にし過ぎても仕方ないし

「藤丸立香です、アカネの父親です」

「岡島キル夫です……って藤丸？」

「私の本名も藤丸アカネだしね」

「え？そうなんですか？」

偽名を使っていたのかアカネ先輩……
でもなんで？下の名前で呼ばせたかったのもこれが関係してるのか？

「理由はまあ……あとで分かると思う」

そうなのか……まあこれはこれで無理して聞いちゃいけないと思ってるけど

「それで……オルガ君達は分かるとして多くないかい？」

「連れて来ちゃ悪い？」

「ここ……一応秘密の場所なんだけど……」

「秘密の場所なんですか？」

「カルデアは外部にバラされるわけにはいかないからね……」

「なんかごめんなさい……」

「娘が連れて来たってことは信頼出来るんだろうけど」

「何してる場所かは聞かない方がいいですよね……？」

「いや……着いたならちゃんと説明しようかな」

「マトモですね、驚いてるんですが」

「惑わせたアストルフォちゃんが悪い」

「石抱く？」

「やめてください」

「魔性ってああいう子のこと言うのかな……」

「君は分かりそうだね、今度アストルフォちゃんのことで語り明かそうか」

「金時さん石お願いします」

「おう」

「ちょっと待ってアカネあ〝あ〟あ〝あ〟」

金時と呼ばれた男が石を持って来て立香さんの足へと乗せる……キツそう

「……死にそう」

「喋れるでしょ？続けて」

「アカネが反抗期だよお……」

「……いやこれは立香さんが悪いんじゃ」

「オルガ、言っちゃダメ」

「……いいや、続けるよ」

石を乗せられたまま立香さんは話始める

「カルデアは所謂異世界を相手にする集団なんだ」

「異世界……？」

唐突な言葉で驚いているんだが……なんだそりゃ

「ここと異なる世界が存在してるんだよね、考えなかった目に見える世界が全てじゃないって」

「考えてなかったですね」

「存在するって事だけでいいよ覚えるのは」

「はあ……」

嘘をつく意味はないし存在はしているんだろうなただ……なんで秘匿なんだ？

「秘密の理由が気になってそうだね」

「そうですね、秘密の必要性ってあるんですか？」

「異世界の存在がバレるわけにはいかないからね」

「そうなんですか？」

「この国の王はいいけど、他の王はまずいかな」

「そうなんです？」

「まあこの国の王はどちらかと言うともうバレたからってのがあるけど……」

「それは仕方ないですね」

「この国の王は無能に見えて賢明だからいいんだよ……問題は他所の王」

「不味いです？」

「異世界に侵略しに行かせるわけには行かないからね」

「それは確かに不味いかも」

「カルデアの目的は人理を修復する……まあ異世界を助ける事なんだ、侵略させることがあってはならない」

「……なるほど」

「だからこそ秘匿なんだ……」

「裏の人間にバレてるらしいけど？」

「は？」

立香さんの顔付きが変わる

そりゃ娘が狙われていい親がいない

「私が名前を変えている理由はこれ」

「親との関連性を消すためですか……」

「そういうこと。組織を作れば敵はどうしても出来ちゃうから」

「それは……」

「ただ……正直闇ギルドから狙われると思わなかったけどね」

「は？」

ちょっと顔が……

これは人間のしていい顔なのか？

「アカネ帰って来てすぐごめん、ちょっと王に話しないと」

あれ？乗ってた石が砕けてる……マジで!?

「あー……慌ただしくてごめん」

「いやアカネが悪いわけじゃないよ、と言うか裏の人間も相手してよく無事だったね」

「きっ君に助けられたから」

「君が……？」

「俺だけの力じゃ無いですけどね」

「そっか、娘のこと任せたよ」

「え？」

唐突に任せられて流石にビビる、そのまま立香さんは外へ出ていく

「あっナイチンゲールさんって何処にいる？」

「今はちょっと薬買いに出てたはず」

「なるほど、有難う」

「誰なんです？」

「今きっ君に合わせたい人かな」

「そうですか……」

ナイチンゲールさんってどんな人なんだろう？
ここまで来て合わせたい人だし強い人？俺限界までしごかれるってこと？

ちょっとだけ不安に思えて来た

――――――――――――――――――――――――――――――

「自由に回っていいけど皆に迷惑かけないようにね」

「アカネ先輩は一緒に回らないんですか？」

「え？いいけど1人で回りたいんじゃ無い？」

「……ちょっと不安で」

「……分かったけど」

なんか唖然としてる

え？そんな驚くことだっけ？

「何というかきっ君可愛いね」

「可愛いって何!?」

「そのまんまの意味だけど？で何処行こっか？」

「案内お願いします」

「オッケー」

そうやって案内されるが本当に謎の場所ばかりだっと……あれ？モニカさんがいる

「モニカさんと立香さん……？」

「あーいつものか……いつものって？」

「気持ちはわかるんだけどね……聞いてれば分かるよ」

「……」

聞いていいものなのかと不安になるが、耳をすます
往来での会話だし多分大丈夫なんだろう

「お願いします、そこをなんとか」

「やるやらないじゃなくて出来ないなんだ……」

「前ほど笑ってられる状況じゃ無いんです」

モニカさんがだいぶ焦ってるが……
何を求めているんだろう?

「決めるのは僕達じゃ無いんだ」

「だからって……」

「モニカさん来てくれるのは嬉しいんだけど無理だよ」

「アカネ、それにキル夫か」

「何があったんですか……」

「キル夫、貴殿からも……いやなんでもない」

「賢い選択だよ、きっ君を巻き込むなら容赦はしない」

「ああ、それは分かっている……いずれウチに来るとしてもだ」

「だから勧誘するのやめてくれない？」

「それはいいだろう？」

「と言うかだからなんの話ですかって」

「……カルデアへの協力要請だ」

「協力要請？」

「さっきキル夫君に言ったよね、カルデアは人理修復をしているって」

「はい、言ってましたね」

「それで予想付くようにカルデアにはかなりの戦力がある」

「マジですか？」

「さっき父さんが襲ってた子もきっ君の何倍も強いよ」

「マジで!?」

「その言い方はやめてくれない!?」

何倍もって……嘘だろう……？

「ただ、カルデアは国に戦力を貸すことが出来ない」

「なんでですか？」

「カルデアは異世界……詳しく言えば滅びかけた世界を救うことにのみ、この戦力を使用することが許されている……文字通り修復するために」

「色々と大変なんですね」

「神様にそう言われちゃったからね、仕方ないんだよ」

「神……」

「……」

アカネ先輩は察したようだが……その通りだ
なんであんた達が全てを決めるんだよ勝手に選民とかする癖によ
「神が関わってくる必要なんざ無いでしょうよ」
「いや……直接言われちゃったらね……」
「直接……？」
「僕とマシュ……アカネの母親は元は異世界の人間なんだ」
「え？」
異世界の人間……じゃあアカネ先輩も？
「それでこの世界には神様の伝手で渡ることになってその時言われたんだ、僕達の戦力

は過剰過ぎてこの世界にはまずいと」

「……なるほど」

「それこそ、この世界の危機ならば許してくれるだろうけど……今はとてもそうに思えない」

「吸血鬼によりかなり危機的な状況が始まっている」

「吸血鬼……」

本当に各地で影響を及ぼしているのかアイツらは

「だけどまだ貸すことは許されない……この世界がどうしてもまずい時は伝えるって言われたしね」

「伝える……」

伝えることが出来るのかよ……

文句の一つでも言いたいが、越権行為にしかならねえだろうな

「と言うか……アカネ先輩は冒険者になって大丈夫なんすか？」

カルデアの戦力かって言われると謎だが……彼女は彼女で異世界人だってことだろう？

「いや、大丈夫だ」

「それは戦力外とか酷い事言いませんよね？」

「違うよ、アカネはこの世界で生まれた子供だからだ」

「そう言う事ですか」

「だから私が率先してやってるんだけどね」

「率先って」

「学園、明かに尋常じゃないでしょ？」

「まあそうですね」

「偵察ってか、調べなきゃ行けないってのもかねて学園続けてるんだけど」

「僕としてはやめて欲しいんだけどね」

「アカネ先輩って意外と正義感ありますよね」

「いや、自分が生きる上で面倒事摘み取りたいだけだけど」

「そうは言っても普通はやらないかと」

「まあ逃げるも考えたけどきっ君がいるし逃げられないなと」

「ねえ君達どんな関係なの？」

「アカネ先輩……」

「なんだかんだ、きっ君を冒険者に誘ったのも私だし責任は取らないとね」

「俺も……やっぱ逃げるわけに行かないんだなと」

「ねえ君達どんな関係なのってば？」

「だから父さんは止めるだろうけどまだ学園続けるから」

「それはいいんだけど君達だからどんな関係なの？」

「きっ君、オッケーだってさ」

「あの……無視でいいんですか？」

「答えられる？」

「……ちょっと厳しいっすね」

「でしょ、だから言わないって事で」

「キル夫君、後でお話が」

「諦めろ」

立香さんにそう言って何故かモニカ先輩が連れて行く、助かったが本当になんでだ？

「うわあああんアカネえええええ」

「本当にいいんですか？」

「別にいいでしょ」

「まあアカネ先輩がいいって言うならいいですが……」

「と言うかそろそろかな」

「何がです？」

「待ってた人帰ってくる……」

その言葉を遮るように何人かが玄関から入ってくる

「アカネ、帰って来てたんですね」

「ただいま母さん」

母さんと呼ばれた人を見ると……確かにアカネ先輩に似ている
まごうことなき母親だろう

「学園生活は大丈夫だった?」

「うん、それなりに楽しかったし」

「それでその子は?」

「ああ、大事な子」

「アカネにもいい人が出来たんですね」

「ちょっと違うけど」

「隠さなくてもいいんですよ」

なんかすっごいニコニコしてる、喜んどくべき？違うかな多分

「そう言えば父さんがさっきアストルフォに迫ってたよ」

「……ちょっとお話しして来ます」

笑顔が一瞬で消えたんだが……こわ

なんで地雷を投下したんだろう？

「それで、ナイチンゲールさん」

アカネ先輩もう気にしてないし……

「はい、どうしました？」

「この子見て欲しいんだけど」

「分かりました」

え？どう言う状況？

「分かりました、では治療室へどうぞ」

「えっちょまっ」

「問答無用」

そう言って連れてかれた……なんなんだ……？

――――――――――――――――――――――――――――――

「……何処が悪いのですか？」

「いきなり何!?」

唐突に連れて来られて何処が悪いって何さ!?俺どうなっちゃうの

「ですがアカネ様が言っていたので」

「そもそも俺は健常なんで帰ってもいいですか?」

わけが分からん……俺病気とかないよな?

「ダメです」

「なんで!?」

「言われたので、一応検査させてもらいます」

「まあ……分かりましたが……」

アカネ先輩が何を思ったか分からないが、問題があるなら解決したいしな

「では検査を始めます」

「分かりまし……なにそれ？」

「麻酔ですが？」

「巨大過ぎる注射器に見えますが」

「安心してください、痛みはありません」

「助けてくれえええええ!!」

逃げ出そうとするが逃げられない……なんでだよ……なんでこんなことになるんだ

よ

そのまま俺は気を失った

…

「いたたた……」

「目が覚めました?」

「なんとか……と言うか生きてたんだな俺」

「ええ、命に別状があるわけないでしょう」

実際に死んだとしか思えんかったんだが

「そもそも医者が命を奪うなどあってはなりません」

「痛くしないと言った割には起きた時痛かったんだが……」

「それで検査結果ですが」

「話無視!?」

酷ない?さっきから俺の扱い雑過ぎない?

「それくらい我慢してください」

「いや……本当にさ……」

ダメだこの医者話聞かないタイプだ……マジで何をさせたいんだアカネ先輩

「どうしました?」

「もういいや……検査結果を聞かせてくれ」

それどころか悪びれる素振りすらないんだもん……正直言って気にするだけ負けって奴じゃんこれ……

「最初から真面目に聞けばいいのです」

「なんで俺が文句言われる側なの？」

本当に酷ない？

「それで検査結果ですが、単刀直入に言います」

「そうしてくれ」

カルデアで戦力は貸せないとは言われたが流石に鍛錬くらいには付き合ってくれるだろう……学園に戻る前に色々と覚えないと……

「岡島キル夫、貴方は冒険者を辞めなさい」

その答えは目的と相反し絶望的なものだった

続

第３７話②

―――――――――――――――――――――――――――――

「は？」

いきなりやめろってどう言うことだよ……

勝手に好き勝手されてんなこと言われてふざけんなとしか言いようないんだが

「冒険者を辞めろと言いました」

「それではいそうですか、とでも言うと？」

「そう言う話ではありません、やめろと言ってるのです」

「悪いものが見つかったのかもしれねえけどよ正直だからなんだって奴だ」

「貴方って人は……」

「そもそも何があったんだよ、話してくれねえわけじゃねえよな？」

「……貴方は何をしたのですか？」

「おい、何があったか聞いてんだが」

「人間を辞めかけています、ｌｖが高いわけじゃないのに」

「そうか」

「そうか、じゃないですよ問題ごとです！」

「いや、いいんだ」

「何がです?」

「化け物になっても」

「理解出来ません、貴方の体なのですよ?」

「恐らくは俺の技が原因だが……やめろったってそうは行かない」

「何故です?」

「そうしないと死ぬから」

「化け物になっても死にますよ」

「別にそんなんどうでもいい」

化け物になっても死のうがどうでもいい

ただまあ……その時自殺できる術を持っておかないとまずいか

「人生を諦めているんですか？」

「いや逆だ、誰かが死ぬのが耐えられないんだ」

「そのために自分はどうなろうといいと？」

「まあ……出来ればアカネ先輩の為に命を賭けたいがね」

「……狂人の思考ですね」

「知ったこっちゃねえよ、それくらい大事だしな」

「……」

「んじゃ俺は行くぜ」

「認められません」

「じゃあどうするよ？」

「ここで経過観察させます」

「無理にでも出る」

「……」

「ちょっと待った」

「マスターなんですか？」

「立香さん……？」

今までの話を聞いていたのか？
……この人は何を考えているか分からない

「ちょっといいかな？ナイチンゲール」

「なんですか？」

「彼のことは僕に任せてくれないかい？」

「断ります、彼は病人です」

「正直な話、このまま閉じ込めるのは彼が壊れる」

「生きてさえいればどうとでもなります」

「化け物になると確定したわけでもないのに摘み取るのは良くないよ」

俺の味方をしてくれているのか立香さんは……？

「ならどうしろと？」

「だから僕に任せてって話だ」

「……納得いきません」

「そして残念だけど急患もいる、そっちをお願い出来るかな？」

「……分かりました」

そうして立香さんに連れられ俺は外へと出ていく

このまま監禁される未来は回避できたらしい

「あの、有難うございます」

「いや、まだだよ?」

「え?」

「僕だってナイチンゲールと同じく今のままで君を帰すわけにはいかない」

「……」

どう言うことだ?なんでそうやって皆、俺に固執するんだ?

「少し二人きりでお話ししようか」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「それで、俺に何の用でしょうか?」

本当に何考えてるか分からねえ……怖い……

「まあ娘の知り合いが化け物ＧＯＧＯで考えてるのがどうかと思ってね」

「それは……まあ」

「それを認められると思う？」

「……ダメですか？」

「正直娘を近づかせたくないね」

「そうですか……」

「娘の思いを無碍にされても困るからね」

「無碍に？」

「当たり前だろう、君のことを気遣ってここに呼んだんだから」

……アカネ先輩に心配させちまった？

ただ察されるところはなかったと思うがどうしてだ？

「ですが、これをやめろと言われても……」

「それは分かってる、それのせいで化け物になるって言うと悩ましいんだけどね……」

「……出来りゃなりたくないんですけどね」

「別になるくらいなら文句は言わないけど……」

「え？」

予想外の返事に驚いた、化け物になっていいの？

「別に理性があるならいいと思う、勿論ならない方がいいがそんな余裕もないだろう」

「理性があるって……」

「アカネは見た目なんて気にしないしね」

「気にしないってなんの話っすか……」

「え？結婚するんじゃないの？」

「ちょっとおおおお!?」

何を言い出すんだこの人は!!

結婚ってなんだよ!!

「???」

「え?.違うのかい?.アカネが彼氏連れてきたってばかり思ってたけど」

「違いますって!!」

さっきまでの暗いムードがぶち壊されちまった……いや悪くないけどさ

「実際のところ君はアカネのことどう思ってるの?.」

「え?.俺をどうこうするって話じゃ?.」

「それはアカネと決めることでしょ?.」

「それはそうなんですが……さっき近づかせる気はないって!?」

「あくまでそれは僕の意見、マシュもアカネに任せるだろうしアカネが賛同するなら否定は出来ないしね」

なんで……なんでそんな話になったんだよ!!

「と言うかそれなら呼び出した意味ないんじゃ？」

「あのままだとナイチンゲールに出して貰えなかったけど？」

「そりゃそうっすね……」

「それ以外は特にいいかなって、アカネを縛る気ないし」

「それでいいんですか……」

「本当は良くないよ、ただ僕達はアカネが危険なのに何も出来ないんだ」

「戦力を出せないって言ってましたもんね」

「それに、アカネがね……他人と距離を取るから」

距離を取る？到底そんな人間に見えないが……
立香さん何かアカネ先輩を勘違いしてる？

「そうですか？」

「知らないってことは相当アカネに懐かれてるね……」

「懐かれてるって実感は無いですが……」

「でも、手紙とか読むと懐かれてると思うよ……君がいない頃は手紙すら帰ってこなかったし」

「えぇ……」

「本当に君の話ばかりだよ……」

「そうなんですか？」

正直驚きなんだが……こうなるとつい好意を持たれてるんじゃ？って思っちまうし

「で、だ」

「なんでしょう？」

「とぼけられるとでも思ってる？」

「う……」

どうやら立香さんは逃してくれないらしい……

……さっきよりはマシだが……どうしようかこれ

―――――――――――――――――――――――――――――――

「……タイムは？」

「答える気があるなら」

なんだこれ……マジなんなんだ？
俺は何をされているんだ？

「結婚とか正直言われても困るんですが……」

「どっちかというと君自身がどう思ってるかかなぁ」

どう思っているか……いや嫌いじゃ無いし大切な人と言われるとそうだが……
どちらかと言えば恩義を感じている相手？

「命の恩人です」

「そう言えば死にかけの時助けられたんだっけ」

「そうですね」

「じゃあ助けられなかったら何もなかったってこと？」

「そりゃあそうでしょう……」

そもそも助けられなきゃ生きてた死んでた以前に冒険者になってなかったろうし会った事もないままだと思ってるわ
そもそも恩人どころか見知らぬ人になるかと

「そう言われるとそうだねごめん」

「いや……問題はないですが」

「じゃあ恩人ってだけなのかい？」

「いや……そうでは無いですが……」

なんでここまでグイグイ来るんだ？

自分達じゃどうしようもないって言ってたし、色々周りの人間を調べたいんだと思うが……

「詳しく話しちゃいなよ」

「……どうしてだか、聞いてもいいですか？」

「えー、また質問？」

「立香さんまたさっきあの子に迫ってたみたいになってません？

「なってるかもねー、別にいいでしょ？」

「まあ……」

俺がアカネ先輩をどう思っているか
恩義以上の物を感じてるし、あの人の為なら命を張れる
化け物になる覚悟だってあるはずだ
……ただこれは少し問題がある

「……アカネのために命を張れるってのも相当だと思うんだけどね」

「ただ自分は……」

「どうしたの？」

「多分アカネ先輩じゃなくても命張ると思います」

まどか先輩にも言われたが
勿論死にたくねえが、それ以上に知り合いを死なせたくねえ……だから死ぬんだろうと

「なるほど……だいぶ難儀な性格しているね」

「よく言われます……」

まあ気になる事は他にも色々とあるんだが……

「ねえキル夫君」

「なんでしょうか?」

「地場衛って知ってる?」

「アカネ先輩から聞きました」

確信までは話してくれなかったけど……

と言うかその人また関係してるの?

「それが理由」

「いや……全然分からないんすけど」

「今はこれだけにしておこう」

そう言われたってどうすればいいのか
と言うか学園の教師だろう？何故立香さんが知っているんだ？

「と言うかですね、そもそも結婚だとか恋だとか分からねえんですが……」

「え？そうなの？」

「学園の前までは海賊生活していたもんで」

「縁がなかったと」

「まあ……そうっすね」

明日を生きることで精一杯な海賊にとって恋なんざ分からねえよ、男手だらけだったし

「じゃあ……うーん……どうしようかな」

「立香さんの場合はどうだったんですか？」

「僕の場合かい？」

「はい、気になったので」

「君の想像以上に壮絶だけどいい？」

「まあ……聞かないことにはどうしようもないでしょうし」

そう言って彼に伝えると
唐突にぐだぐだしていた体を元に戻した

「分かった、少し話そうか」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「……結局は気付いたらそこにいた、ってことですか？」

「そんな所かな」

立香さんの話を聞いてそう感じたが
と言うか気付いたらそこにいたなんざすげえな……

「気付いたらいたなんて滅多にないだろうけどね」

「そりゃ、幼馴染みとかはそうとかは聞きましたそう言うわけでは無いっすしね」

「他には……一緒にいたら楽しいとか？」

「そりゃ楽しいっすよ？」

「一緒にいて当たり前とか？」

「……」

一緒にいて当たり前か……

なんだかんだ義務的な感覚だが気付けばアカネ先輩と一緒にいることが多いような……？

一緒に何かするの楽しいし、いざと言うとき何かしてあげられたらと思うし

「そうですね、割と当たり前に」

「え？」

「え？」

「当たり前なの……？」

「そうですね……出掛けるのはあまりしませんが割と休みとかアカネ先輩の部屋とかに遊びに行きますし」

「そっかー……」

よく考えたらなんでこんなに来てくれてるんだ？ってわけじゃないが……

当たり前過ぎて意識してなかった

「と言うか意識し出すと恥ずかしくなってきたんですが……」

「そっかー」

あれ?なんでだ?急にドキドキしてきたんだが……
いや?だっていつも一緒にいるよ?そん時何もないじゃん

「言わなかった方が良かったのか、もっと早く気付いとけなのか……」

「何がですか!?」

「いや……そのうち刺されそうだなと」

「酷くないですか!?」

「正直ここまでとは思わなかったし」

なんか酷い言われようしてる気がする
俺が何をしたというのか……

「まあ君も自覚してきたしすぐに分かるでしょ」

「分かりそうにないんすが……」

「ああ大丈夫、その時は刺すから」

「立香さんが!?」

なんて理不尽なんだ……

まあ鈍感云々の奴なんだろうけど

話しなかったらマジでボーッと誰の好意も気付かずに学園生活が終わってた気がするしな

「ただ結婚するかなんざ話しましたがまだそもそもそんなこと言われても知りませんからね?」

「もうお腹いっぱいだからいいや」

「聞き始めたのそっちっすよね!?」

　最後らへんまたぐだぐだに戻ってしまったが話は纏まった……気がしない大丈夫かこれ？

「僕としては正直、義息子になる可能性がある以上奥の手は使わないで欲しいんだけどね……」

「それは無理だと思います……」

「分かってる、けど化け物にならないように心を持ち続けて欲しい」

「努力します」

「後流石にアカネがやめろって言ったらやめてね？」

「……多分アカネ先輩の為になるなら使うと思いますがね」

「泣かせたら許さない」

「努力はします」

あれ？何というか話を持ってかれた気がするが……
多少疑問を浮かべながらも部屋を出ていく

…

「どうしたものかなあ……」

先程まで会話していた少年のことを必死に考える
理屈は分からなくない、自分達だって世界やマシュを守る為に戦ってきたから
「無鉄砲さとかは本当に似ているから逆に嫌になる」

娘のためと言ってくれるのは嬉しいが、彼は本当に命を賭けて死にそうだ
だからこそ不安になる

「代償が重いはずの秘密兵器も普通に使いそうだしなあ……」

正直言うと僕でも使って欲しくない
アカネなら尚更だろう、だけど……このままだと使うんだろうからアカネと話し合って欲しい

「アカネに2度も家族を失わせたくないからね……」

そう言いながら写真立てを覗く
中には大事な家族の、自分とマシュとアカネと……タキシード姿の男性が写っていた

――――――――――――――――――――――――――――――

「そろそろ、帰省も終えてきっ君の実家の方に行かないとまずいかな……夏休み終わっちゃうし」

「そうっすね、アカネ先輩には名残惜しいかもっすけど明日あたりにはって所っすかね」

「……えっときっ君何してるの？」

「いやなんと言うか……」

あの後アカネ先輩にあったがなんか無性にこっぱずかしく少し物に隠れている

「いや……きっ君の奇行は今更だからいいけどさ」

「そんなしてなくないっすか!?」

皆して俺をなんだと思ってるんだ……

いや……多少はズレてるだろうけど

「で?ナイチンゲールさんはどうだって?」

「使い続けると化け物になるからやめろってさ」

「じゃあやめてくれる?」

「気を付けはしますが、勿論やめられませんね」

「どうしても?」

「それで誰かが死んだら耐えられないから」

「私はきっ君が居なくなる方が耐えられないんだけど」

「まあそこはお互い様ということで……」

「はぐらかされた」

いや……分かるけどさ……

ただ本当に利用するって言い切ってた初対面の頃から本当に変わったなとは

「まあ、化け物になったら恩が返せないのは流石にまずいとは思うんすけどね……」

「そうじゃないよ」

「まあ……それは分かってますが」

「父さんは反対だろうけど私は……」

「……」

アカネ先輩が言おうとしていることを黙って聞く

今はぐらかしや誤魔化しちゃならねえ

「私は化け物でもきっ君と一緒にいたいよ」

……本当に俺もアカネ先輩と一緒にいるのが当たり前になってしまったせいか
化け物になった程度で離れたくないなとは思ってしまう

「なんでしょうね」

「何が？」

「死にたくないなとはずっと思っているんです。ただ……他人のためなら自分が犠牲になってもって本当に思ってばかりなんすけど……」

アカネ先輩の為なら躊躇いもないって思ってたんだが……

「なんか命が軽過ぎて怖くなってきちまいました……」

「それが普通なんだけどね……」

「ただ……なっちまってもどうにかなるように願うしかないな本当に……」

「ナイチンゲールにはその事聞きにきたのに、絶対安静じゃどうしようもないでしょ」

「ほんと、治療します！とか全力でやって来たしよ」

「ちょっときっ君裏声出さないでよ」

そう言いながら彼女は笑う
本当に笑顔なアカネ先輩が好きだなと

「……ん？」

「どうしたのきっ君？」

「なんでもないです」

「いや何かあるでしょ?」

「ナンデモナイデス」

「観念しなきゃダメだよ」

「逃げるか」

「待て」

一目散に逃げ出す

まさか……こんな単純に自分の感情が出てくると思わなかったし

ああ……なんだろう……さっきから立香さんに言われてこっぱずかしかったのに

……たった今理解しちまって尚更恥ずかしくなっちまった……

どうしようかねえ……この俺の気持ち……

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

第３８話

――――――――――――――――――――――――――――――――

「帰りたい……」

船に揺られながら俺はそう呟く
原密に言えば帰りたくないだが……マジで辛くなって来た

「でもお前が行くって決めたんじゃん」

「そうだけどよお……」

カズマにどやされる……まあ船に乗って何度も何度も聞いてりゃ相手も嫌になるか

「と言うかついて来て言われたから来たのに行きたくねえ連呼してんじゃねえよ」

「申し訳ない」

「まあまあ2人とも落ち着いて」

「狛枝……」

「帰るのが嫌な人はどうしたって出ちゃうからさ」

「いや分かるけどよ……」

「カズマは帰ってないんだろう?」

「ああ、ちょっと帰り辛くてな……」

「お前がって言うと正直意外なんだがね」

「思い出したくねえもん思い出しちまうしな」

「そうか……悪かった」

「別にいいぜ、帰りたくねえとは言えいい加減吹っ切れてはいるし」

過去に何かあったらしいが……聞いて思い出させるのもなあ……
やめておくとしよう

「おいキル夫、私を混ぜないとはどう言うことだ!!」

「はいはい、すみません姉さん」

「面倒くさそうにするなああ!!」

姉さんは色々とあるだろうから誘わなかったが何故かついてきた……
モニカさんが一度は帰ったと言ってたが……大丈夫なのかマジで?

「申し訳ねえ、ただ男同士で駄弁ってたんで」

「まあ、気持ちも分からんでもないが」

「それに実家ボチボチいる予定っすし、急がんでもとは」

「そう言われればそうか、ならば今日くらいは譲ってやらんとな」

「譲るってか……俺は俺のもｎ」

「それじゃあ私は船内に戻るとしよう、じゃあな」

答え切る前に行っちまった……本当に自由な人だ

「大変だねキル夫クン……」

「いや姉さんはマシな方だから……」

「……大変だね」

時折絡みに来る先輩陣が本当にしんどいしそれに比べりゃマシ過ぎるんだよなあ……

特に折原先輩逃げても追いかけて来るし

「慣れたくねえから頑張って逃げることを覚えなきゃならない」

「キツそうだけどねー……」

「アカネ先輩!!どうにかしてくださいよ」

「無理」

「ですよねー」

「なんなら先輩だし」

「3年の壁……」

超えられるわけないのがなあ……Ⅳ先輩に今度助け求めようかな

「と言うかみんなで集まって何?悪巧み?そしてきっ君はなんで後ろに隠れてるの?」

「いやちょっと……」

なんだかんだカルデアから帰った後直視出来ていない、今は狛枝の後ろでコソコソしている

「そんな態度取られる事してるの?」

「そんなことするメンツに見えます?」

「見えるけど」

「酷くないです？」

「だって……ねえ？」

そう言うアカネ先輩の目線はカズマの方を見ている

カズマ……何かしたのか？

「その件まだ蒸し返すんですか……？」

「そりゃきっ君が危険な目に遭いそうだったし」

「……あくまでキル夫なんですね。ご馳走さまです」

俺危険な目に遭いそうなことあったっけ？

「とにかく、悪さするメンツじゃないんで……ってことで」

「まあいいけど、かなでちゃんにも構ってあげなよ？」

「かなでがどうかしたんすか？」

「いや……多分1人でぼーっとしてるから」

「あー……でも1人にしといた方がいいってような感じですし」

「まあ構うだけ構って必要なさそうなら別にいいんじゃないとは」

「邪魔になりそうっすが……」

鬱陶しがられたら嫌だなとは思う

「きっ君ならそう思われないと思うけどね、まっ嫌なら別にしなくていいし」

「一応行ってだけみます、それじゃ」

これは逃走ではない……別方向への前進なんだ……!!

「ああ、じゃあ一度解散かな？」

「別にすぐ集まりゃいいだろうよ、同じ船内だしまだまだ時間あるしな」

「それもそうだね、何かあったら来ていいからね」

「いや……バッチ来いなのも困るからな狛枝……」

カズマは少し呆気に取られていた

―――――――――――――――――――――――――――――――

学園に一度戻ってアカネ先輩と後はカルデアに行く前にあらかじめ声を掛けておいた合流した
その後部屋で暇そうにしていた狛枝も誘って姉さんがどっから聞きつけてきてやって来た

姉さんこそ学園に居れば着いて来ると思ったがかなでが着いて来るのは予想外だった
ダメなわけではないが準備している時に向こうから声をかけて来るなんざ予想してなかった

「おうかなで、いいか？」

「どうぞ」

ドアをノックして許可を得て入る
やはり部屋に閉じこもって本を読んでいるようだが……

「外に出ないのか？」

「どうして？」

「いや……折角の海だぞ？」

「そうだけれども……」

やっぱ無理して誘っちまったか？
いや誘ったとは違うんだが……無理させちまったか？

「海は嫌いか？」

「そんな事はないわ」

「ならどうして……と聞くのは間違いな気がするが……一応」

「分からないもの」

「何が分からないんだ？」

「何をすればいいか分からないもの」

「あー……」

アカネ先輩の推測が当たったと言うか何というか……一先ず見に来て良かったケースだなこれ

折角の船旅でこのままじゃ悲しいだけだし

「んじゃ、とりあえず外に出るか？」

「分かったわ」

そう言って一緒に来るが……
もしかして慣れない環境に戸惑ってるのか？

「ってわけで……外だが……どうだ？」

「周りが青いわ」

「そうだな……」

ごめんその返事は予想外だったかな
なんて返せばいいか分かんねえや

「ダンジョンとかとはまた変わった感じだろ？」

「そう……ね、普段海を渡る事はしないし」

「折角だから青いだけ以外も探すためにぐるっと回ろうぜ」

「分かったわ」

少しは楽しんでもらえるといいなと船を回る

「ちょっと乗り出しすぎないようにな」

「大丈夫よ」

「いや大丈夫じゃなくてな……」

楽しんで欲しいとは言ったが身を乗り出すのは流石にやめてくれ……怖い

「いざとなったら飛べるし」

「飛べるしじゃねえだろうよ……」

唐突にグラッと来たら飛べるかも不安なんだし……
楽しんでくれてるようで良かったっちゃ良かったが
そう話していると波で船がぐらっと揺れる

「うっ」

「ほら言わんこっちゃねえ」

よろけた彼女の手を掴んで引き寄せる
流石に気をつけていたため落ちる事はなかった

「ありがとう」

「楽しんでくれてるのはいいがハラハラさせないでくれよな……？」

「分かったわ」

「本当かねえ……」

とりあえず何ともなしで良かったが……
放っておくと何かしでかしそうで怖いな……

「どうしたの？」

「何がだ？」

「手、離さないの？」

「あー……」

そういや手を離しちゃいねえな……引っ張ったままその切りだ

「離さねえ」

「どうして?」

「離すとまた落ちそうだしな……」

「大丈夫よ」

「まあいいじゃねえか」

「そこまで言うならいいけど」

なんとか説得して一緒に歩く

「なんかわざと離れてない?」

「キノセイキノセイ」

落ちられたら困るから許してくれ……

多分助けるの苦労するし
そう思っちまうのは……抜けてそうだし

「楽しんでるか？」

「もっと自由に動かさせてくれれば」

「……」

「冗談よ、楽しんでいるわ」

「なら良かったが……冷や冷やさせないでくれ」

「ごめんなさい」

「悪いとは言わんが……連れて来て悪かったと思っちまう」

「そんなことは無いのだけど」

「楽しんでくれてるんならいいってわけよ」

「これからの事も楽しみだと思うのだけどね」

「勘弁してくれ……」

　考えないようにしてたのに……親父が怖いよー……

「別に普段通りしてればいいじゃ無い」

「近付けば近付く程出来ねえから困ってんだよ……」

「構えたところで変わらないでしょう」

「そうだけどよ……」

「ならいつも通りいなさい、これが学園生活なんだって」

「理屈はわかる……」

「それに……」

「嫌な予感すんだがなんだ？」

かなで何を言うの？俺のメンタルボロボロにすんの……？

「変な態度してると残念がって学園辞めさせられるかもしれないわ」

「……」

「違う？」

「いや……そもそも辞めさせられるかもだし」

「それでもマシな可能性上がるでしょ？」

「……」

「どうしたの？」

正論をぶつけられて戸惑う……分かってるけどしんどい

「いや……気を付けます」

「それがいいわ」

そうして周りながら何度目かの腹を括った

コミュ　1d7：5　潮田渚

「あれ？キル夫君いたの？」

「いや渚がいた方が驚きなんだが……」

船の中に渚が居た、いやなんで？

「呼んだっけ……？」

「いやなんの話？」

「いや、なんでもない忘れてくれ」

やっぱ呼んでないよな……渚こっち方面だったのか

「他に知り合いいるってこと？」

「結構……ダチ呼んだし」

「別にいいけど……突っ込みどころ多そう」

「まあ……一応はヤバすぎるやつはいない」

「ヤバすぎるって何さ」

「折原先輩」

「居ない方がいいとは言え居るなんて思ってないし」

「だよなー」

やっぱ折原先輩の評価はお察しである

だがまあ折原先輩だししゃーねえだろ

「と言うかキル夫君本当にこっちなの?」

「ああ、そうだけど」

「こっちの方離島とかしかないけど……」

「いや海軍に行く」

「???」

「親父がそこで待ってるって……」

「犯罪者……?」

「何でそう思うんだよ!?」

「いやキル夫君の顔の父親だし……」

「酷ない？」

いや……そう言う顔してるけど……

「と言うか父親が海兵ならなんで冒険者に……全く違うし普通に反対されそうだけど……」

「色々あったんだよ……」

主に恥だらけなんすけど……

と言うか恥まくりで冒険者になったし

「そっか……頑張ってね」

「正直向かうのが怖い……」

「だろうねえ……」

「渚も来る？」

「いや、普通に寄るところあるんだけど……」

「だよなあ」

「と言うか……海軍とか勘弁して欲しい」

「デスヨネー」

正直俺も怖さバリバリだしさ……よりにもよって海軍で待つのーって

「頑張ってね……」

「待ってー……って気配遮断しやがったなああああ!?」

慌てて探すが見つける事はなかった

――――――――――――――――――――――――

コミュ１ｄ６：４　三宮三葉

「さて、言い分はあるか?」

「何が!?」

唐突に姉さんに宣告された……どう言う事?

「立華と一緒に周ったらしいじゃないか?」

「それがどうしました？」

「確か男達の集まりだと聞いたが」

「確かに話してましたね」

「立華は男では無いはずだが」

「いや……話し合い終わったんで……」

終わったと言うよりは終わらせただが察させてはならねえ……

「納得出来るとでも？」

「いやあ姉さんは優しいなあ」

「だっ騙されないからな!!」

いやチョロくねえか?
……って思ったが今俺悪く無いのになんか巻き込まれてる側だわ

「ほら行きますよ」

「何処にだ?」

「周りたいんでしょう?」

「ああ!」

アカネ先輩すみません
なんで謝ってるか分かんないんですがすみません……

「だいぶ心地良いスピードだな」

「なんか言い方に違和感あるんすけど……普段と比べてどうなんすか？」

「遅いな」

「遅いんですか……」

海賊船とかに比べて色々付いてるし速いと思ったが……そうでも無いんだなあ

「王国の船はもっと速いのだらけだ」

「それは姉さんが貴族だからじゃ無いっすかねえ……」

良い船乗ってんだと思う……と言うかこの船が下の下とかみたいな評価は持ちたく無いし

「それじゃ何処見たいんすか？」

「んっ」

手を差し出して来る……繋げと？

「行きましょうか」

敢えてスルーして見る

「立華とは繋いでた……」

「……分かったってば」

そう言って手を繋ぐ……もしかして俺甘やかし過ぎてる？

「では行くぞ！」

「何処に？」

「……食堂？」

「お婆ちゃんご飯はさっき食べたでしょ……」

「!!」

殴られた……いや悪いの俺だけど……

「なんだって？」

「ナンデモナイデス」

「全く……お前はしょうがないやつだな」

「しかし姉さんは、実家帰らなくて良かったんすか？」

「帰ったぞ？」

「いや下手すりゃ日帰りだったんじゃ？学園から結構遠いのに」

「よく分かったな！」

「何のために帰ったんだ……」

「いや……実家に帰っても弟いないし……」

「学園にも居ないからな？」

一応乗ってはいるがガチで弟換算されても困るぞ？

「お前がいる」

「ガチの弟じゃ無いっすからね？」

「いや弟だろ？」

真っ直線に言われても困るんですが……

と言うかやっぱこっち来るより実家に長居するべきだったんじゃ？

「後実家に帰るとお見合いさせられる」

「あー……」

やっぱ貴族とかってそう言うのがあるのか……

俺達にゃ縁がなさ過ぎた話だが

「そうだ、お前を連れてけば時間稼ぎには……」

「勘弁してください」

貴族のゴタゴタに巻き込まないでください
俺はただの小市民です

「姉の願いを聞いてくれても良いじゃ無いか……」

「散々聞いてる気がするし面倒事放り投げるのは辞めて欲しいんですが……」

「ぐぬぬぬぬ……」

悔しそうな顔されても困るんだが

「なら次のダンジョンで勝負だ！」

「出来りゃダンジョンで賭け事したく無いんすが……」

何度も何度も命賭けになってるし本当に命落とすだろうし……

「……あっそうだ」

「うん？」

体が逃げろと言っている……ただ何故だ？逃げられねえ

「この前ダンジョンでキル夫の不注意で崖下に落ちたんだよな」

「その話は気にして無いって言ったじゃ無いっすか!!」

よりにもよってその話を持って来るか
色々と謝罪等はあるが今ここで押されたらまずい奴!!!

「つまりキル夫には手伝ってもらう必要があるわけだ」

「……別のことで」

「どうしようかなー？」

「お願いします」

「姉に対する態度じゃ無いなあ」

「お願いします姉さん」

「もっと弟っぽく」

「弟っぽくって何……？」

「甘えるように」

勘弁してください……そんなの無理に決まってんだろ……

「……」

「あーこれは夏休みにもう一度王国いかないとなぁ」

「お姉ちゃん許して……」

プライドも何も投げ捨てた
マジで王国関連に巻き込まないで

「しょうがないなぁ、別のにしてあげよう」

「ははー」

一瞬のミスが命取りと言う事はガチで思い知らされた
ほくそ笑んでる姉さんを見ると……マジで何されるのか不安になった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「あー……」

姉さんマジで無茶振りだけはしないでくれ

そう思いながらうだうだしている

「やっぱ実家怖いの？」

「アカネ先輩!?」

慌てて近くの椅子に姿を隠す、完全に不審者の完成だ

「毎回それされると傷付くんだけど……それで実家のことまだうだってるの？」

「あっ……」

正直帰省の事すっぽ抜けてた……確かにそれ以上の問題な気がするんだけどさこれ

「何とかなったみたい？」

「なんか気にすれば気にする程災難が降って来るんです……」

「ご愁傷様」

「まあどうにかしないといけない案件なんでどうにかしますけどね」

「どうしてもなら手伝うけど？」

「大丈夫っす」

この件をアカネ先輩に任せるわけにはいかない……身から出た錆だし

「それじゃ、後少しで着くだろうから準備しなよ」

「はい」

「それじゃ」

アカネ先輩はそのまま去っていく

なんだかんだ済んだか……いやこのままじゃダメなんだけどさ

「あっそうそう」

「どうしたの？」

「とりあえず夕日のせいにしておいてあげるから」

「え」

慌てて顔を触る……熱い

もしかして今顔紅くなってる？

「それじゃ」

「あ……」

何か声を掛けようとしたが紅くなってる言われて言葉を続ける事が出来なかった

マジで問題だらけじゃねえか……

これから学園関連の話もするだろうし……色々と胸がしんどい……

そう思いながら海を眺めた

――――――――――――――――――――――――――

第３９話

―――――――――――――――――――――――――

「さて……何から話したもんかね」

「親父……」

遂に久々の親子再会ではあるが……予想通りと言うか……あまりいい顔をしてない……そりゃそうだよな、勝手にしまくった結果だし

「とりあえずだ」

「はい」

「連れてきすぎじゃねえか？」

「あっやっぱり？」

幼馴染みがいるわけでもないのに５人は確かに多いかもしれん……なんなら渚だって誘ったし

「友達も出来てるようで安心はしたが」

「姉だぞ？」

「キル夫……？」

「気のせいです」

「何でだ!?」

姉さんややこしくなるので黙っていてください

「キル夫、お前何というかそう言うのに目覚めたのか……？」

「気のせいですって」

「むーむー」

これ以上はまずいとカズマが抑えてくれたようだ……ややこしくされても困るしな

「で、俺はキル夫と話し合いがしたいから出てってくれると助かるんだが」

「別に聞くだけだしいいんじゃ？」

「あまり身内事を晒したくないんだが……」

ただ……姉さんが去ろうとしないしアカネ先輩は何やら思惑があるみたいだし

「なんというか……親父ごめんなさい」

「分かったよ、仕方ねえな……」

散らすにも時間がかかりそうで諦めたようだ
正直居てくれるのは助かるがこうなるとは思わなかった

「それで、俺はどうしろと」

「帰って来い……が一番楽なんだが」

「だが……」

これだと許されると言うことか？
学園に通い続けてもいいのか？

「そうも言ってられねえ事がある」

「何……でしょう？」

「お前、船に同行した仲間はどうした？」

「!?」

当時親父に反発するために一緒に出た仲間達……
アカネ先輩に砂浜で拾われた後探し回ったが見つかる事はなかった
申し訳ないと言う気持ちは当時あったが……非常なものだ

「それで？無責任に冒険者になったってか？」

「……否定は出来ません」

そうだ、俺はそいつらを気にせず冒険者を……

「あまりきっ君を追い詰められると困りますが」

「嬢ちゃん？何の用だ？」

「少なくともきっ君の明らかに無謀な旅に付き合おうとした時点できっ君だけが悪いわけじゃないでしょ」

「……」

無謀……確かにそうだけだどさ
それに……俺が悪い事には変わらねえだろ？

「だが悪くねえってわけじゃねえだろ？」

「海賊でミスがあったからお頭が責任取りますじゃやっていけないでしょ」

「そりゃそうだ、トップばかりが責められちゃどう足掻いても纏まれねえ」

「確かに忘れて平然と過ごせとは言わないけど責任を取れは言い過ぎでしょ」

「命を落としてもか？」

「きっ君が何かしましたならともかく、災害で全滅したんだし正直自己責任の類だと思うけど」

「アンタはだいぶ達観してるな」

「……ふーん」

アカネ先輩が何かに察したようだが……

一体何が!?話が高度すぎる

「冒険者はこう言うものですので」

「……そんな魔境に通わせろと？」

「……一理ある」

ちょっとアカネ先輩!?

いや……確かに魔境だけどさ

「ウチの馬鹿はどうですか？」

「戦闘力も平均以上だと見てますが」

「こいつがねえ……」

「あっでも……盗賊の技能は3年クラスあります」

「は？」

「は？」

いやちょっと待ってくれ
アカネ先輩は何を言ってるんだ？

「あー……でもそこまでか？」

「え？親父理解出来んの？」

「お前そう言うことばっかりやって来たしな」

「それでも3年クラスなんざ思ってなかったんだけど」

「俺の方も流石に息子がそこまでヤバいなんて思ってなかったさ」

「って言うかマジですか？」

「持ってるアイテムのお陰もあるけど、きっくんの方が誘いたいだろうし私よりも十分強いしね」

「マジか……」

「戦闘もきっ君に負けてるし完敗状態だけど……」

「正直予想外だな……」

親父が呆気にとられてるがそりゃな……俺だってこれ予想外だったし……

「ただ常識は足りてねえだろうな」

「うん」

うんっておい……確かに最初の頃は世間知らずで色々やらかしてたが……

それでも最近マシになってきたよな!?そう言ってくれよ!!

「これでもダメですか？」

「あークソ……マジかよ」

何か計算が外れたような顔をしてるが……なんなんだ……？

「アカネ先輩？」

「きっ君は期待以上ってことで」

「なら尚更帰って来て欲しいんだがな……」

「盗賊としての道に向いてる以上厳しいでしょ」

「そうだよなあ……」

「それに、仲間殺しなら海軍向きじゃないでしょ？」

「それを今持ってくるか……」

俺にとっても今持ってくるかって話なんだが……いや……事実は事実か

「事実だと思いませんか？」

「いびるつもりだったんだが……これを逆手に取られるなんざ思わなかった……」

「でもしょうがないよね、死んじゃったなら」

「悪党なんざ久し過ぎて小悪党になりさがっちまったかねえ……」

なんの話をしているんだ……？

この２人の話が理解できないが……

「良かったねきっ君、学園通うの認められたよ」

「え？」

「いやまだだ」

「これ以上何を聞きたいの？」

「いや簡単な話だ、キル夫」

「なんでしょう？」

「お前は学園に通い続けたいか？」

唐突な質問に驚いた

そう言う質問来ると思ってなかった

「ああ、そっか本人の意思聞いてなかったね」

「まあ、一応な？」

「決まってますが」

「聞かせてみろ」

アカネ先輩を、友を守るって決めたんだ
それが変わることはねえ

「通い続けます」

「そうか、分かった」

「死んでいった奴らには申し訳ねえかもしれませんが……」

「……」

「で？何人生きてるんですか？」

「は？」

何を言い出すんだアカネ先輩は……
生きてる？どう言うことやねん

「ん？全員だが？」

「は？」

何を言い出すんだこの親父は
全員生きてるの？

「全員生きてたんだ、流石に驚きだけど……」

「むしろこいつだけ見つからなくて加護が無いからおっ死んだと思ってたがな」

「手紙来て安心したと？」

「いや、天下の海軍様だぜ？とっくに気付いてたよ」

「……マジか連絡くらいくれても」

「折角弱み握ってんだし甘やかさねえよ」

「本当に悪党だな……」

「今はお前のが悪党だろ盗賊さん」

「うぐ……」

悔しいが言い返せない……
と言うかもう一つ思ったことがある

「アカネ先輩、なんで気付いたんですか？」

「ん？何に？」

「他のメンツが生きてたことっすよ」

「あーそれは」

超能力とかは言い出さないだろうけど
気付くところがあったのか？

「さっきの話の中で全滅したって話あったでしょ？」

「ありましたけど」

「あの時災害って言って一切驚かなかったからかな」

「いや確かに驚かなかっただろうけど……」

「少なくともさっきまでの話のテンポきっ君が悪いみたいな言い方してたのに……災害だって話なら普通は驚くし、冷静な人でも反応すると思うよ」

「確かに……そうなのか？」

「まあ私はそこで生存者が居て報告を受けたと思ったけど、全員生きてるとは思わなかったけどね」

「本当隙出したつもりはねえんだけどな……」

「ところでその人達はなんか言ってたの？」

「ああ、嵐が原因だからキル夫を責めないでくれとな……そもそも行方不明になりやがったが」

「責めないでと言ってたのに……」

「そうは言っても悪いことはしたのは事実だろうよ」

「否定はできねえや」

実際無謀に出なきゃ良かった話でもあるし
そこは叱られて当然な場面だろう

「んじゃ嬢ちゃん達悪いが出てってくれ、息子と話し合いがあるんでな」

「またキル夫を虐めるつもりか!?」

「ほら出るよ」

姉さんが反発しようとしたがアカネ先輩が引き摺っていく
アカネ先輩が出て行ったってことはもう不安要素はないんだろうけど

「何を話すんだ?」

「別にただの親子会話だよ」

――――――――――――――――――――――――――――――

「キル夫、あの嬢ちゃんとはどんな関係なんだ?」

「アカネ先輩ですか?」

親父がいきなりぶっ込んで来やがった……
いやどんな関係かって言えば明白なんだが

「先輩後輩です」

「明らかにそれを超えてるようだが？」

「まあ命を救われた身なんで……」

「ああ、浜辺で拾ってくれた子か」

「そっすね、面倒みてもらってる方です」

「授業料もか……後で立て替えておいてやる」

「いや、いいです」

「よくはねえだろうよ」

「俺が生涯かけて冒険者で返していくんで」

「……」

「そう話し合ってるんで大丈夫だが……」

「結婚するのか？」

「はっはぁ!?」

いきなり何を言い出す……いや待て
うん、言い方が悪かったな

「冒険者やってそれで返すってだけだから」

「いや……結婚するのかと聞いてるんだが……？」

「なんでそうなるん……？」

「いや……少なくともそうにしか思えないんだが……好意なきゃそんな額ポンと払って出世払いになんざしねえだろ」

「確かにそうだが……」

一応はアカネ先輩に命を預けてるしそれに対しての対価だが……まあ第三者には全額をポンと出すって歪だよなこれ

「先輩からのことは一度置いておくとして」

「置いておいて、どうするんです？」

「お前自身はどう思ってんだよ」

「この前も聞かれたなあ……」

カルデアで同じこと聞かれたんだがマジでなんなん？

「そりゃ悪いな、だが親として気になるだろ？」

「よく分からねえんだ」

「何がだ？」

「アカネ先輩をどう思っているか」

「そうかい」

「なんかあっさりしてるな……」

「そりゃ親とは言え悩んでる事なんでもかんでも答えるのは良くないしな」

「薄情者ー」

「知ったことかよ、しかし楽しくなりそうだ」

「息子を娯楽に使うのはどうかと思いますー」

「隙を見せた方が悪いんだぜ？」

「それはアカネ先輩の売り文句で俺のじゃないんですが」

「そういや後の２人はどうした？」

「話変えるなよなー」

後の２人はと言うと姉さんとかなでか？

「三宮さんは言わば姉貴分みたいなもんで……」

「だいぶ懐かれてるな……いいとこのお嬢さんだろうによくお前程度が関係持てたな」

「まあ入学試験の時色々あってそのまま弟みたいな立場に」

「なるほど頑張れ」

「それでいいのか親あああああ!!」

なんか扱い雑じゃねえか？
泣くぞ？俺泣いちゃうぞ？

「かなではよく分からねえ……」

「またか……またなのか？」

「いや……そうではねえけど……そもそも謎だらけなんだよ」

「謎ねえ……確かにちょっと違和感はあったかな」

「違和感？」

「何というか……成熟してるなら聞こえはいいが……別のものを見ている気がした」

「どういう事か分からないんだが」

「とにかく……ハーレムしたいなら止めねえけど多分お前は後悔すんぞ？」

「なんでそんな話になるんですぅ？」

俺は婚約相手を親に紹介しに来たと思われたんだろうか？
なんでやねんと突っ込みたいしカズマや狛枝もいるだろうが!!

「さて、最後に一言あったな」

「爆弾発言はもう十分っすからね？」

「お帰りキル夫」

「ただいま親父」

その言葉に最後まで不安だった曇りが溶け笑顔になる
本当に帰って来れたんだと、心のつっかえが取れた気がした

――――――――――――――――――――――――――――――――

「最後に一つじゃなかったのか親父」

「ああ、だから皆呼び戻しただろうよ」

改めて話が終わったと思ったら親父に皆を呼びに行かされた
これで黒歴史等ならキレんぞ？

「それで要件は何だ?」

カズマが尋ねると煙草を吸い始める

「おい……」

「いや……カズマ、あれはビジネスを始める仕草だ」

「それでいいのかよ……」

海賊時代からそうだ、親父はビジネスの話になると煙草を吸い出す
相手に小馬鹿にしているんだとは思わない、仲間も不安だったようだが目付きが変わり皆も納得したようだ

「キル夫、及びに冒険者養成校の皆さんに頼みたい依頼があります」

「依頼……？正直さっきまでそんな雰囲気なかったが」

「アレは親子の再会の挨拶だしな」

「ジャブが酷過ぎたんですが……」

「きっ君の悲惨はどうでもいいから聞こうよ」

「酷い……」

アカネ先輩も親父も俺を無視して話を再開する

「所謂、島探索だ、俺達の巡回域に新たにダンジョン……と言うか島が誕生した」

「そんなポンポン湧くのかよ……」

ただ……未開の島はすごく気になるな

「海軍で探索しなかったの？」

「する予定だったが……大型の船が近付けねえんだ」

「じゃあどうしようもないんじゃない？」

「俺達も放置したかったんだが……島から飛行出来るモンスターが辺りの船を襲うんでな……放置出来ねえ状態なんだ」

「……それを海軍じゃ対処しきれないと」

「ああ、恥ずかしながら上陸できる数人程度じゃ全滅して終わりだ」

「それを俺達に調査して来いと？」

「ああ、本当は冒険者に頼む予定だったがお前が帰ってくるのと仲間達連れて来たしな」

「だから渡りに船だったと」

「そう言うわけだ、危険だし断っても良いけどな」

話に聞く限り危険な場所なんだろう……

俺は気になるが他がどうか

「最優先事項だろうけど……息子がやっぱ大切なんだね」

「まあな、悪いか？」

「いや全然？」

「何の話です？」

「多分きっ君連れて来たく無かったから最初は言うつもり無かったんだよ、でも強いっ

て言ったから頼むことにしたんだと思う」

「なるほど」

「報酬は弾むが、言った通り断ってくれていい。どうするよ」

「俺は受けるが他はどうするよ？」

「私は行くよ、きっ君だけじゃ死ぬだろうし」

まずはアカネ先輩が賛同する

「俺が言ったところで感はあるが、見てみたいんだよな新しく出来たダンジョン」

次にカズマが乗って来て

「弟が行くなら姉も行くに決まっているだろう」

「どんな希望が、絶望が待っているんだろうね」

「……私も行くわ」

と全員が賛同してくれた、心強い

「感謝する、場所はアイツらに案内させるからよ頼んだぜ」

「おう」

親父に成長した姿を見せるチャンスでもあるしやる気に満ち溢れてくる

そして新ダンジョン……どんなお宝が埋まっているかワクワクで仕方がねえんだ

拳を高く掲げて意気込んだ

――――――――――――――――――――――――――――――

第４０話

「今回のダンジョンは前例がないから、各自心して掛かるように」

「了解」

アカネ先輩の指示のもと、各自が並ぶ
上陸こそしたもののここは未開の地だ

「正直事前情報がないのは初なんだよね……そして問題点として戦士もいないから戦闘の仕方に注意」

「……安易に受けない方が良かったっすか？」

「いや……未開だからこそ盗賊が3人いるのが有り難いかな」

俺達盗賊3人が散開して狛枝含む3人が様子見ながら状況を繋ぐ
丁度無線が4個うまい感じに使えるか……アカネ先輩とカズマは喋れねえけど

「いいのかキル夫、お前が一番危険そうな方面だが」

「通話出来るの俺と狛枝だけだしな」

「っというか……このアイテムやば過ぎだろ」

「カズマも手に入れたあの鉱石で作ったんだぜ？」

「……マジで？」

「マジマジ」

と言うかうっかりして伝え忘れてたわ
今度エジソンさんの所に連れてきゃいいか

「各自深追いはしないように。特にきっ君」

「うっす」

「未開だし恐らくでしかないけど一番危険だと思うから無事に帰って来て」

「気を付けます」

その言葉とともに森の中へと駆けて行った

１ｄ１００：７３

―――――――――――――――――――――――――――――――

「比較的に……安全地帯のようで……何もねえな」

「キル夫クンの方は比較的安全そうかい？」

「ああ、そうみたいだ……正直すぐ戻る予定だったがもう少し探るぜ」

「無茶しない方がいいと思うけど」

「いや……恐らくはここをメインルートにするだろうしな」

「そうなの？」

「一番中央へと向かうのに近いし、俺が唯一連絡取れる相手だしな、他のメンバーは連絡取る以上戻る必要あるし」

「キル夫クンが行く道は一番調査してるって意味でもいいってことか」

「そう言うわけだ、俺ももう少し調べ終わったら戻るし先に2人は戻っててくれ」

位置の確認をし恐らくは無事であろうと祈り連絡だけ伝える

……気絶とかでダメだったら仕方ないが信じるしか出来ねえ

「(……しかしコイツのおかげで探索も安全性も上がっている、本当に助かるな)」

無線を持ちながらもう少し周囲を確認する

「モンスターは見たことない奴ばかりなのに注意だが」

ただ……逃走準備をしていたものの現状姿を見て襲って来る奴がいない……これが朗報か?

ただモンスターの戦闘条件が判っちゃいない以上挑発等は避けたいが

「お宝はねえかな……」

1人で探すものでは無いだろうが周囲を軽く散策する
勿論見当たらないが……流石に領域展開は出来ねえしな

「アイツらにダメージ与えました、全員で襲って来ました……ってなるのは馬鹿だもんなあ……」

「キル夫クン、無茶はダメだよ?」

「わーってるって」

流石にここで展開したらどうなるんだろうとかはやんねえ……親父はやるかもだけど

ってかそろそろ戻った方がいいかねえ

「他2人はどうした?」

「カズマクンはまだ」

「一旦戻るわ」

「お願い……」

カズマは無事ならいいが……反応はあるし行方不明ではねえが

「……いや」

探しに行った方がいいか？

この島は全く理解できてない島だし何があるか分からねえ……カズマ単体じゃ危なそうだが

「……どうしたの？」

「カズマが心配なんだが見に行っちゃダメか？」

「……帰って来てくれた方がいいね、行くなら全員でがいいと思う」

「それも確かにそうだが……」

1．流石に一度戻ってから探しに行こう
2．カズマが何かあると不味いし行くしかねえか
1d2：1

「急いで戻るから準備しておいてくれ」

「分かったけどどうしたの？」

「全員でカズマ探しに行く」

「ああ、了解したよ」

急いで駆ける、先に戻ってりゃいいんだが……距離的にゃないだろうな
と言うか狛枝が戻っとけって言ったのにカズマの位置が一向に戻る気配がない以上は……そう言うことなんだろうけど
不安に思いながらも一度戻った

――――――――――――――――――――――――――――――

「きっ君オシオキされずに良かったね」
「いきなり何を言い出すんですかアカネ先輩……」
「いや、また言ったこと無視して勝手に言ったら怒るしかないし」
「そうなんすか……？」
「少なくともそれはそれは怒ってたと思うよ……」

「それって……」

「がるるるる」

姉さんが威嚇している……なんで威嚇なんだ……？

「してないから許してくださいってば」

「確かにそうだな……」

そう言って威嚇をやめてくれるが……アッサリやめてくれたな

「とにかく急ごうか」

「ああ、狛枝の言う通りだな」

流石に放ってはおけねえし見に行く

アレから全然進んで無いしな

「狛枝、最後尾任せていいか？」

「ああ任せて」

「いえ、私がやるから先に行って」

「かなで？」

「急いでいるんでしょう？」

「そうだな、任せた」

確かに狛枝よりも後ろ見ながら出来る
モンスターが襲ってこないとは言えうろついてるしな

「とにかく進むが……」

カズマの方への道はだいぶ入り組んでいた

「……こりゃ1人で来てたらもっと時間かかってたろうし迷ってただろうな」

「がるるる……」

「いや行ってないんだから怒るなって姉さん……」

「……そうだな」

辿り着けないほどの距離じゃなくすぐに付けた……が帰るのに不安が残る……カズマよく1人できたなここ

「あれじゃ無いかな?」

「カズマ!!」

カズマの元に着いたが……なんだこりゃ……？

「埋まってる……？」

「だろうし急いで引き抜かねえと」

何にはまってんだカズマは……

皆で一斉のと引っこ抜く

「どわー!?」

盛大な声と共にカズマが引っ張り出される

それと同時にカズマを埋もれさせてたものが吹っ飛ぶ

「……なんだこりゃ？猫？」

「しかも沢山いるね……」

ニャーニャーと鳴いてるし多分猫だろう……

しかしなんなんだろうな……この量は

「カズマ……大丈夫か？」

「ああ助かった……」

「何があったんだ……？」

「いや探索してんじゃん」

「ああ、してるみたいだな」

「なんか猫いるじゃん」

「いたみたいだな……」

「近付いたわけよ」

「危険じゃねえか」

んなモンスターとかもいるだろうし……
見かけ騙して襲うとかそう言ったモンスターが

「懐かれてよ」

「羨ましいなおい」

「んで、吸い寄せられるように……大量の猫に埋もれた」

「それは……無事だったのが良かったのやらなんやら」

「一先ず危険ではなかったぜ」

「……畜生……こんなに動物に好かれるなんて」

「キル夫」

「どうしたかなで？」

「ちょっとまずいかもしれないわ」

「何が……げ……」

「フシャーーーーー!!」

猫達が威嚇し始めた……え？なんで？

「カズマクンが取られたからかな？」

「いやいやそんなこと……」

「そうっぽいけど……」

マジかー、皆カズマの方見てるもんなー

「カズマ置いてけばいい奴か？」

「待てやキル夫、ふざけんなよ!!」

「だってー、勝手に猫をもふりにいったー、カズマが悪いと思いまーす」

「一理ある」

「そんなこと言うなよ!?」

「まあ助けはしますけどーどうするんですかー？」

「なあキル夫……適当になってないか？」

「いや……正直こいつらのことなんも分からんし」

「なんか投げるか？」

「キル夫何かある？」

「いや色々あるけど……」

「何を投げるか……って話だが……」

「適当に投げちまえ!!」

「何が通じるか分からんが!!」

１ｄ１００：３５

「これでどうだっての!!」

「何を投げたんだ……？」

「携帯食」

「なんでだよ!?」

「いや……食うかなって」

「確かに食ってるが……」

「この先抜けるか」

「いや……溜まって無理だし……もう食い終わったっぽい」

「んじゃどうなるんだこれ……」

「あーこっち見て……あれ？キル夫の方見てねえか？」

「え？まだ食糧奪われるの？」

「人気者はいいなおい」

「助けたのになんだよそれ……」

「とりあえず、決まったよね……」

「ああ、狛枝」

つまりはこれからやるべきことは簡単だ……

「逃げるぞ!!」

食糧をばら撒きながら逃走した

強いのか弱いのか分からねえが戦わずに済むならしれで一番だしな

カズマが無事なんでそれでよし!

食糧大幅マイナス

――――――――――――――――――――――――――――――――

「さて、きっ君今後のやることと問題点分かる?」

「まあ一応は分かりますが」

「ルートはきっ君が行ったところ、正直そこしか無いね」

「アカネ先輩の方不味かったです？」

「巨大生物が多かったね、本当に驚くレベル」

「見たことは？」

「あるわけ無いじゃん」

「戦わない方がいいっすね」

「そう言うこと……下手したら普通に死ぬし」

「俺の方は比較的安心だと思います」

「退く選択肢もあるけど」

「え？なんで？」

「調査だし危険そうな生物とか色々分かったしね」

「お宝は!?探検は!?」

「なんで出来ないのか分かる？」

「……食糧が足りないからです」

「正直強行軍しなきゃならないんだよね」

「そうなんですよね……」

逃げるために俺の持ってたの全部投げちまったし……

1人分足りないのが流石に厳しいのはある

「元は1週間分は用意したけど……何日かかるか分からないんだよね……」

「はい……」

「で、どうするか」

「……」

俺の冒険心だけで危険な目に遭うの不味いしな……

「退きましょうか」

「いや、行こうぜ！」

「カズマ……？」

「ボクもそれに賛成かな」

「狛枝？」

「私も」

「皆どうしたんだ？」

「折角キル夫クンのお父さんから頼まれたんだしいいとこ見せたいじゃん」

「確かにそうだが……」

「だから行けるだけ探索しようよ」

「アカネ先輩はどうっすか？」

「構わないけど……正直全員がって言うのは驚きだったね」

「だったら探索しますが……食糧大丈夫ですか？」

「多少強行はするけど、大丈夫じゃない？」

「そんなもんなんすか？」

「戦闘面は不安だけど……元からこのメンバーは戦闘避けたいし盗賊神官多いのがありがたいかな」

「それならいいんすけどね……」

「それじゃあ中央方面行こうか」

こうなりゃ意地でもお宝見つけてやる

そう意気込んで真ん中へ進んだ

―――――――――――――――――――――――――――

「本当に中央エリアの敵達襲って来ないね……」

狛枝が驚くがさっきの猫っぽい何かみたいなのもいない
そう考えると有難うと思う反面なんでだろうと思うこともある

「お宝探ししたい？」

「したいっすけど……ある程度目処が立ってからにします」

「それもそっか」

と言うかこいつらにちょっかい出したくないのもあるし、モンスター居ない所のがいいな

「キル夫クン、お宝どう言うのがあると思う？」

「分かんねえよ……ダンジョン自体も理解出来てねえし分かるわけねえだろ……」

「それもそっか、だったらどう言うのが欲しいかってなるけど」

「これ」

無線を出す、正直これ増やしてえ

「ああ……便利だもんね」

「マジであの鉱石がなんなのか分からねえけど……便利なことは分かる」

「学園に渡したんだっけ？」

「いや……渡してねえな」

「ああ、まあそうだよね」

「そう言うことだな」

　相変わらずだが学園に見せるわけにゃ行かねえ……Ⅳ先輩には見せたのが不安だったが、教師達や折原先輩にも言ってないようだし良かった

「ボクも固定で欲しいしねこれ……」

「便利だもんなあ」

「カズマクンとかは持ってるんだっけ？」

「後は沙都子と渚だが……多分沙都子はトラップに使ってそう」

「ああ、確かにトラップマスターの彼女ならそうかもね素晴らしい罠を作ってくれそうだ!!」

「体験する身にもなって欲しいんだがな……」

「なんかあったの……？」

「……罠の実験体に」

「……ご愁傷様」

「何を話しているんだ？」

「姉さん？」

「なんか実験体やら聞こえて不安なんだが……」

「問題ないです」

「そうだよ、キル夫クンなら実験体でも立派だから!!」

「どう言うことじゃコラ!!」

若干罵られたように感じてキレる
悪意ないからこそ尚更だわ

「弟を実験体にしただと……」

「問題ないので」

「そんなこと言ってられないだろ!!」

「まあじゃれ合いみたいなもんなんで……」

「それならいいが」

「キル夫が人気者だものね」

「そうか？」

「少なくとも私が見るときはそう思うわ」

「かなでと見てる時ってどう言う時だよってなるが……」

「普段あの場所にいるから見えるの」

「あー」

「でも本当に良かった、多くの友達に巡り会えたようで」

「うん？」

「どうしたの？」

「いやなんでもない……」

かなでが何やら謎の視点だが……まあいいか時折分からん時があるし

「きっ君話してないで、そろそろ」

「なんかあったっすか？」

「正面」

「……火山？」

本当にどんな地形してんだこのダンジョン……島なだけでも謎なのに

「キル夫ー、話の途中だぞー」

「姉さん、今はそうも言ってられんので……」

「ぐぬぬ、分かった」

姉さんが悔しそうにしてるが……明らかにそうも言ってられない
火山準備してないんだが……どうすんだこれ

「最低限私が準備してるから行くよ」

「アカネ先輩、火山は不味いんじゃ？」

「嫌な予感がするの……」

「え？」

「何があるかは分からないけど……調べないとまずいかもしれない……」

「分かりました」

この火山に何がいるって言うんだよ……

少し恐怖に覚えながらも火山の探索にワクワクも混じりながら……踏み込んでいった

――――――――――――――――――――――――――――――――続

第４０話②

――――――――――――――――――――――――――――――

火山な以上当たり前だが……対応しても暑いものは暑い
と言うかマジでアカネ先輩の準備がなかったら入れなかったなこりゃ

「暑いなさすがに……」

「おいキル夫、暑い暑い言ってんじゃねえよ」

「しゃーねえだろ、事実なんだからよ」

「そう言ってると余計暑く感じんだよ」

「確かに分かる、だが感じたところで今回は事実だ」

「事実なら言っていいわけじゃねえだろ!?」

「まあそうだなすまん……」

暑すぎて少し雰囲気が険悪にまってしまったかもしれねえ……

どうにかしたいんだが……つい苛立っちまう

「２人とも大丈夫?」

「大丈夫ではあるんすけど……何というか」

「暑くて思考が奪われてるかもだけど……尚更ヒートアップしちゃダメだよ」

「君達盗賊なんだし火山の中で取れるお宝の事を考えようよ」

「お宝?」

「先輩の勘を信じて入ったとは言えお宝だって探すんでしょ？」

「ああ……そうだが……」

「いっそボクは発掘禁止区域使って本格的な宝探ししてもいいと思うけどね」

「流石にその余裕はねえだろ……」

「余裕できたらかな、期待してるよ」

「無茶言うなおい……」

「ははは、まあそこは周りと話し合ってかな」

狛枝……普段期待してないけどお前本当にこう言う時ムードメーカー出来るんだな

一気に苛ついた気分は消えたわ

「アカネ先輩は宝箱とかどう思いますか？」

「火山の中でのお宝は見つけた事あるけど」

「え？どんな感じでした？」

「たいしたものじゃなかったよ？」

「そうですか……ダメかあ」

「でもきっ君のレアアイテムとかバンバン出そうだから期待出来そうだけどね」

「ありがとうございます」

そう言われると嬉しいし俄然やる気が出る

よし当ててやるぞーって気分になる

「流石に安全地帯着いてからだけどね」

「やっぱり？」

「ここで使ってお宝出てきて溶岩溢れましたとかだったらまずいでしょ」

「まあそうですね……」

流石にそこまでやばい事起きない気がするが……起きたらすまないのは確かだ
敵を倒して広い場所探すのが先か

「狛枝……悪さしないでくれよ？」

「アハハ、ボクがしてるわけじゃないし厳しいかな」

「わざとじゃねえからタチ悪いよなあ……」

狛枝の不運ここで発動しないでくれよ……
幸運も発動すると揺り戻し来るだろうから来ないでいいから

「……地下行くのもそうっすけどどうやって行くか」

「そもそも行けるのか？って話だが」

「行けない可能性もあんのか……」

「そうだね、どうしようもない時はしょうがないよ」

「でも、可能性があるなら調査と」

「そりゃそうでしょ……一応そう言う名目で来てるのにやらかすわけにはいかないし」

「そっすね……この火山の中に化け物がいたら……いやまあねえだろうけど」

「そいつ」

「そいつって？」

カズマの指差す方を見ると……

「……大丈夫狛枝はやらかさねえだろ」

「やらかすかじゃないんだよね……」

「そうだった……」

分かってはいるが……仲間で組む以上リスクはある
それを気にしないでいられんのがダチかもしれねえが流石に気にする……だからってこれからもｐｔ組むけどな

「とにかく行くしかねえしな」

「そうだね」

その直後……広い場所に辿り着いたんだが……狛枝、お前何もしてないよな……？

――――――――――――――――――――――――――――――

「それじゃあ使うんで距離取ってください」

マグマに入り込まないように調節をしながら流出を行う

……マジで入り切る時点で幸運な気がするんだが

狛枝も意味ありげに気を付けてとか言い出すしよ……お前さあ!!お前さあ!!

「大丈夫？」

「大丈夫っすよ」

イラつきが顔に出ていたのか心配されてしまう
落ち着け落ち着け……危険なことしてんだから……自覚しろ

「さて、お宝よ現れてくれよ」

1d6—1：1—1＝0

「あ……れ……？」

いつも通り使ってるはずだがお宝が出てこない
ミスったか？それとも場所が悪いとかあるか？

「クソ……もう一回……」

立て続けにやろうとするがふらつく
いつも当たり前のようにお宝が出ていたから分からなかったが連発は出来ないらし

い

「……」

「どうしたキル夫？」

「お宝がありませんでした」

「そうか」

なんでこんな時に失態をしちまうのか……

新しいダンジョンでしかも火山……お宝に勝ちがあるだろうに……こなせないなんざ三流もいいとこだ

「んじゃ休んどけ」

「いや、俺がやりますよ」

領域が無くなり休憩地点を皆が作ろうとするが……流石に何も出来なかったくせに休む時間も俺のスキルで奪っちまったわけで……流石に働いて挽回しないと気が済まねえ

「いいえ、キル夫は休むべきよ」

「……必要ないと？」

「十分働いたでしょ？」

「……え？」

かなでは何を言い出す？むしろ何もしてないどころかマイナスじゃあ

「成功失敗じゃないわ、キル夫は今お宝探ししたんだもの」

「でも……」

「いいからキル夫は休んでおけ、こっからは姉の仕事だ」

「姉かどうかは関係ないと思いますが」

「うっさい！大人しくしておけ!!」

結局気圧されてしまった……怖いとかよりかは勢いに乗せられた気がするが……働いた……でいいのか……本当に周りが優しい気がする

「それにどうせまたお宝探しするんだろう?」

「ああ、勿論する予定だが」

「なら尚更休めってことだ」

「分かりました、次こそは」

「いや、無理はするなよ？」

「いや……お宝探しだって大切っすし」

「お宝はあればいいが必須ではない、無茶をしない方が大事だ」

「分かりました……」

姉さんのそう言われる……迷惑かけちまってるか？

「当然やるからには期待はする、だが無くたって責めたりはしないしいつも通りにやってくれ」

「いつも通りとは？」

「お宝を見つけなきゃいけない義務のようなものじゃなくてな」

「まあ義務ではないでしょうけど」

「お宝あるかなとワクワクしてるいつも通りのお前でいろということだ」

「それがいつも通り……？」

確かにそうっぽいが子供扱いされてねえか？

「そう言ったキル夫のがお前らしいと思うし好きだから、初心を忘れずやってくれ」

「はい」

そうだな、お宝は開けるのもだが見つけるかもワクワクだったな……当たり前のように見つけてて忘れてた

よし次は見つかるかなと楽しみにしなきゃな

「元気が戻ったようでよかった」

「姉さんありがとうな」

「気にするな」

……そういや姉さんに好きって言われた気がするが

「そう言えば勘違いするなよ！弟としての好きだからな！」

「あっはい」

なんかく釘を刺された、いや変に意識する前でよかったけどさ

――――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ１ｄ５：３　狛枝凪斗

「どうしたんだいキル夫クン！」

「いや……今回マジでお前重要だってなあ」

「こんなボクに期待されるなんて恐れ多いんだけどね」

「魔術師が少なかったのはすまなかったと思ってる」

「別に？元は里帰りだったんだしオマケみたいなものだしね」

「だからこそ尚更申し訳ないと」

「ボクで補えている以上構わないけどね」

「俺達は悪いと思っちまうがな……」

「適材適所でしょ、気にしないで」

「俺も俺として出来る仕事しなきゃじゃらねえってわけか」

「トレジャーハンターかな?シーフかな?どっちのキミも期待しているよ」

「どっちかと言うとトレジャーハンターかね」

「さっき潰れそうだったし本当に無理しないでね……?」

「流石に無茶はしねえさ」

「それならいいけど」

狛枝も不安そうにしちまってる……申し訳ねえとは思ってる

「それに俺自体がお宝欲しいしさ」

「まあ今回は地底の調査終わってからかな」

「そうだなあ……流石に早いうちに調査だけはしておきたい……何が起きるかだし」

「そうなんだよね……ここみたいな広い場所が見当たるかもあるし……罠とかで行動不能で食糧危機や探索不能だと不味いしねえ」

「食糧はほんとすまん……」

「いやいや、食糧だけが問題じゃないし……アレだってボクの不運かもしれないしさ」

「なんでもかんでも狛枝のせいにする気はねえよ」

「いや……実際ボクの才能はゴミクズだし……相当しでかしてそうだけど」

「俺の周りでそう言うなら言った奴をぶん殴る」

「……過激だね」

「ったりめえだろ、ダチを貶されて許せるわけねえよ」

「……ありがとうキル夫クン」

「何言ってんだ、俺のがお前のこと頼りにするだろうし、今回だって割とお前がキーだと思うぜ」

「そっか、じゃあ頑張らないとね」

「おうおう、頑張って俺達を楽させるレベルでもいいぞー」

「幸運の見せ所だね！」

「それは揺り戻し来るからやめろ!!!」

―――――――――――――――――――――――――――――

コミュ　１ｄ４：３　三宮三葉

「キル夫、お前はどう見る？」

「何がですか？」

「この火山に何かいると思うか？」

「なんでしょうね……いなきゃいいけど、それ含めての調査っすからね」

「実際いたらまずいだろうけどな」

「やっぱりですか？」

「元はと言えば火山あることすら知らなかったしな」

「ですね……クーラードリンクも通過用程度しか持って来てませんし……」

「だから、普段なら準備を整えて来るべきだが……」

「過ぎた事はしょうがないっすし、冒険者な以上いつも万全で備えられるわけじゃないっすから」

「そうだな……」

「冒険者目指す以上こう言うのにも慣れた方が良いのかもな」

「こう言う依頼ばかりだと困るのだがな……」

「ああ、姉さんにはそもそも関係なかったすね」

「む……」

すると姉さんの顔が不機嫌になる……
すまないこれは言い方が悪かった

「いや……だって姉さん冒険者にはならねえだろ?」

「何故そう決めつける?」

「いや貴族で冒険者は認められねえだろ」

「いや……まだ決まったわけじゃ……」

「流石に親が許さねえだろ……」

「ぐぬぬぬぬ……」

「我儘言ったってしょうがねえだろう……」

「折角出来た弟と離れ離れになるなんて……」

「モニカさん戸惑ってたぞ」

「お姉ちゃんは今は関係ない!!」

「……」

そういやモニカさんに諜報部誘われてたな
親としても大賛同だろうけど……アカネ先輩に申し訳立たねえしな

「……ん?」

「どうしたキル夫?」

「いやなんでもねえ」

なんか一瞬姉さんと似た様な駄々をこねてるんじゃね？って思ったが考えれば考えるほど嫌な予感がするので忘れる

「……後で父さんに聞いてみる」

「巻き込まないでくれよな……？」

「絶対巻き込む、と言うか王国召集になると思うぞ」

「やめろって!!」

夏休みは大丈夫だろうけど……その後の俺の人生が不安になってきた……貴族って怖いね

――――――――――――――――――――――――――――――

どんどん山の中を下っていって深いところまで来た……体温がいい加減上がってきてこれだけでふらつきそうだ

「ここか？」

「ああこっから降りれるらしいな」

「ここに何かがいるか？」

「見た感じいなそうだな」

「ここまで潜れる時点でこの火山もやばいかもね」

「だな……」

と言うか火山がひたすらに広い……モンスターの間引きとか出来ようがねえだろこれ

「きっ君……」

「どうしました?」

「索敵できる?」

「一応は出来ますが……どうしました?」

「お願いしていい?」

「構いませんが……何ｇ　……」

見ただけで察した……暑さで限界か……

俺はまだギリギリだが……アカネ先輩と姉さん辺りはだいぶ厳しそうだ

「っと……敵は……モンスターはちらほら居ますね」

「やばそうなのはいる？」

「今は見られないっすけど……」

「なら大丈夫なのかな……」

「いや……でも奥の方ありますし見にいった方が良いかもしれないっすね」

「キル夫、使わないのか？」

「奥見てからな……」

「調べたんじゃ？」

「奥行きどんだけあるか分からねえもん」

「そりゃそうだな……終点までどれだけあるかって話なんだけど」

「アカネ先輩達は休んでます？」

「いや……行くよ」

「んじゃ先頭歩くんで」

一応異常なしとも自分で言い出した故に俺が先導しなきゃダメだな
誰も気にしてねえだろうが尚更な

「……何もなさそうか？」

岩が増えてきた、逃げる時邪魔そうなのが厄介だ……
本当に何もなきゃいいけどよ

「足場も悪いな……」

「戦闘出来なくはねえけどさ」

「この暑さもあるし無理だろ」

「だったら引くべきなんじゃねえの？」

「一応は毒針等も持ってるし雑魚程度なら始末できる」

「仕事熱心だな」

「お前らも納得して受けたろうが」

「そうだなっと……キル夫、大きい岩だ気をつけろ」

「おっと……なんだこりゃ……」

マジででかい岩にビビる……こんなものが崩れてきたらやばいじゃん

「キル夫」

「どうしたかなで」

「恐らく気のせいでは無いと思うのだけど」

「……嫌な予感がするな」

「この岩動いてないかしら？」

「……」

嫌な予感がしますね……

いやいや……この大きさだよな……？

「これがモンスターだとしたら……」

「アカネ先輩も警鐘鳴るわけだ」

「今のうちにどうにかする……」

「……いや」

今音がした……聞こえてしまった

「来る」

そう言うと同時に岩が動き出す

と言うかこれまさか……

「きっ君、退こう」

「アカネ先輩どうしたんすか!?」

「ふざけてる場合じゃない……これは」

アカネ先輩の言うことを理解する

この翼……牙に爪……始めてみたが……

「竜……っすか?」

「正直このメンツでどうにかなる相手じゃ無い」

「ごめんキル夫クン……」

「お前の不運のわけねえだろ!!退くぞ」

「そっちじゃ無い……多分逃げることが出来ない」

「!?」

後ろを見る……足場に岩に……だいぶ遠くまで来た……ああ逃げることが無理かこれ

「アカネ先輩……退けないみたいっす……」

「そっか……盾役はいないから各自回避」

「狛枝がだいぶ危ないが……」

「状態異常を上手く駆使して……竜なんて初めて見るから効くか分からないけど……」

「各自生き残れ……狛枝……いつも通りお前がキーだろうけど」

「……そうだね」

いつもいつも冒険者は命懸けな以上ブラックでしかねえな

だからいつも通りどうにかなってくれよ……竜ってマジでよ……冗談じゃねえよ

ＢＯＳＳ：グラビモス

―――――――――――――――――――――――――

続

第４０話③

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ふざっ……けんなよ……!!」

竜を舐めてかかってるわけじゃないが……本当に理不尽すぎんだろ

状態異常にしようにもそもそもナイフが刺さらねえ

「見た目通りの硬さってことか……良かったやら悪かったやら……」

「何もいいところないでしょう」

「いや……これ知らずにいたら下手したらここいらの海軍の支部滅んでたよ」

「マジで？」

冒険者と違って船で戦うし……飛べる相手には厳しいんだよね

「それじゃあモンスターに襲われちゃまずいんじゃ？」

「いや、強くないのなら個人でも戦えるよ、ただ……これは流石に別」

「ですね……」

事前知識がない奇襲とかされたらひとたまりもないよ

「そう考えると運が良かったのか……？」

「結果は最悪ではあるんだけどね」

「ですね……」

「狛枝か……或いは俺か」

俺よりも今は狛枝の方が優れてるしな……

と言うか俺の方は多分動けなくなるだろうし死に直結しそうだが……

「アカネ先輩……刺さりそうなところあります……？」

「無いねえ……お腹の方は少し怪しいけど……リスク高いし」

「落とし穴は……？」

「きっ君はあのサイズのある？」

「多分……？」

「多分って何さ」

「沙都子から一応トラップセットは貰ってきてるんで……入ってるかもと」

「なんで確認してないの？」

「一度学園に戻った後貰ったんで……こうなるとは思ってなかったし……」

「でも、ダンジョン行くってなったから確認しとくべきだったよね？」

「……ごめんなさい」

「急いで確認して……逃げれるなら逃げたいから」

「分かりました」

　他のメンツには時間かけちまうが急いで探す……正直ロクなもん無いと詰みだし……

1d100：82

「沙都子助かった……」

「あったの？」

「はい、ありました……なんとかなりそうなのが……」

電撃トラップ……しかもこれは拡散型か……

地面そのものまでも罠にしちまうってアイツどこまで罠が成長するんだよ……

「姉さん達に痺れ耐性かけてもらってこれ仕掛けて無効にしながら逃げます」

「それがいいかな……私が誘導するから、きっ君頼んだよ」

「了解っす」

そうして着々と罠を掛け終わる
皆と合流はモンスターのせいで上手くできないが徐々にバフを掛けていく

「後俺と」

距離を取りながらバフを受ける
後は誘導するだけだ

「先に退いてください」

「無茶しないでね」

「いや……狛枝色々すまねえな」

「時間稼げたならいいよ」

「んじゃ逃走経路任せたぜ」

他全員が去りながら罠の準備をする……
盗みが出来ない分罠を仕掛ける練習はしといて良かった

「さてこっちだ」

モンスターを陽動し罠に仕掛ける
罠に掛けるだけなら難なく出来た……
痺れてくれりゃいいが

「……よし！」

罠に掛かってくれた……ざまあみろ
これで俺も逃げ切れりゃ……急いで親父に報告しねえとな

「つなんだ!?」

アイツから煙が出てる……
何か嫌な予感がする……

「急いで逃げ……」

ダメだ……残念だが少し煙を吸っちまった
なんだこの煙は……何もなきゃいいが……

「……とりあえず、坂からは登れたが」

何故だか凄い眠い……ふざけてる場合じゃねえのに
さっきの煙か？分かんねえな

「寝ると死ぬだろこれ……」

そんなことは分かってる……ただ……どうしようもねえかこれ？

「逆に考えりゃここまで逃げてこれて良かったと考えるべきか……？」

「隠れる場所と言いたいが……んなマグマの中で寝たら死ぬ気がするんだが……」

……眠気をどうにかして抑えたいが
んなアイテムなんざ今はねえしな

「ーーーーーー!!」

「は!?」

咆哮が近くなってきた……少しだけ近くなってきやがった
今ので目が覚めたかと思ったが……ダメだなすぐに眠気が来る

「動かなきゃ……」

だがどうやって？動かないのに？

「大丈夫？」

「かなで……先行ったんじゃ？」

「分身よ」

「ああ……そっかそういやそうだったか……」

かなでにはそう言う能力あったな……なら安心か……

「どうしたの？」

「眠気が……酷くてな」

「モンスターに何かされたの？」

「煙を浴びた……そのせいで眠い……」

「これを使って」

「きつけ薬か助かる……」

「持ってなかったの？」

「アカネ先輩に全部回しちまった……」

「……貴方は本当に」

「悪かったって……移動出来るようになったし行くぞ」

火山の出口へと向かっていく

……援軍は望めねえがアカネ先輩達が親父たちのもとに報告できりゃ最悪は防げるただ……死ぬ気はねえけどよ

「なんだありゃ……」

地下から何やらヤバいものが飛んできた
レーザー……？え？そんなもんまで使えるの？

「キル夫急いで」

「ああ……そうだな」

あんなん食らったらひとたまりもねえわ……
流石に勘弁してくれと逃走する

「聞こえんなあ……」

「気にしないで」

「そうは言っての後ろからレーザー来るんじゃねえかって……」

「気を取られてる暇はないわ」

「分かってるがよお……」

このダンジョンの火山にいたってことは他の場所に潜んでたり岩に擬態してないよな……？

探しはしたが正直見当たらなかったけどさ……

「キル夫、後ろ」

「おわっと!?」

何投げてきた!?岩石……？諦めてくれてもいいんだぜ？わざわざ辛いだろうにここ

まで来なくていいんだぜ!!!

「と言うかこれ……足止めしなきゃまずいか？」

「死にたいの？」

「いや……でも確実に追いつかれるぞ？」

「どうにか出来ればいいけど……」

「キル夫クン!!」

「どうした狛枝!?」

無線から音がして反応する……向こうは連絡取れる状況になったのか？

「一先ず火山からは出たよ、すぐに入り口の乗組員達に報告するね！」

「有り難え」

「それとキル夫クン、多分危ないと思って逃走経路にアカネ先輩が罠仕掛けておいたから」

「何処に？」

「大丈夫な位置って言ってたから気にしないでと」

「了解」

「大丈夫なの？」

「大丈夫だと思うぜ」

そのまま追いかけてくるモンスターは天井を壊しながら進んでくる

それと同時に落石に紛れて爆発する

「これか……大丈夫とは言ってたが走らねえと巻き込まれそうか……」

「大丈夫？」

「かなでの方がキツそうだが……大丈夫か？」

顔色は問題ないが……顔に出さないタイプだしな

「問題ないわ」

「ならもうちょっと頑張ってくれ」

「ええ」

出口まではそう遠くないはず……だから出れると信じて……

ただそう都合がいいわけではない

「クソが……」

罠のお陰で窮地を乗り越えているが……モンスターも暴れ出して迂回をせざるを得ないケースが何度も訪れる

畜生……あと地上までどんだけかかるんだよ……

熱気と恐怖で頬を大粒の汗が伝った

――

「かなで」

「何？」

「この道どっちだ？」

「分からないわ」

「……通ったんじゃないのか？」

「……ごめんなさい」

最初のルートから既に大幅に違う道でありあらかじめ探っておけばと後悔はしている

ただ……狛枝に誘導されたルートだしこっちは先行したかなでの本体が通ったと思ったが……

「いや……分からねえなら分からねえでいい……勘でいく」

「それはまずいと思うけど……」

溶岩で周りが見渡せない……

だからこそ今回はこれしかない

「かなで、悪いが少し我慢してくれ……」

「分かったわ」

と言うかよく考えたらかなでは分身だし問題ない……？

疑問に思いながらも領域を展開する

「お宝……かなり出てきたわね」

「今回拾ってる暇ねえけどな……右か」

溶岩の中に沈んでたお宝が浮かんできて視界が多少広がる……

ってかなんでお宝マグマの中で大丈夫なん？

「来る」

「ちょうどいい」

後ろの敵めがけてぶん投げる

「何を?」

「食糧」

「……地上での動物達みたいには通用しないと思うけど」

「いやいいんだよ」

当然の如く喰らう
俺の領域内で俺の物を奪う

「そいつは〝禁止事項〟だ」

悶え出すが……これでどうにか出来ないだろうなあ……竜って本当に理不尽
だが一瞬でも隙が増えてくれるならそれでいい

「んじゃもう一手」

「キル夫何してるの？」

「ちょうど溶岩だらけだしな」

ここならうまく使えるはずだ
失敗しても……まあ時間は領域内で稼いだしなんとかなると信じたい

「よし待たせた」

「急がないと……動くわ」

当然仕込みをしていたため時間はかかってしまいすぐに動き出す

それと同時に転倒し溶岩へと落ちる

「よっしゃ!うまく行った!!」

落とし穴に直接落とすことは出来ないから……角度をつけて落とすのではなく溶岩内へと滑らせる
進行方向によっては失敗したがうまく行った

「キル夫」

「どうした?うまく行ったぜ?」

「急ぎましょう」

「ん?そんな心配しなくても」

「絶対に無事だわ」

「ーーーーーーー」

咆哮と共に溶岩を泳いでいる
ちょっと待って……アイツ溶岩の中そんな無事なん？
嘘だろう……ここまだ下の方だからかなりの温度のはずだが……

「とにかく急ぐだけか……」

勝ち目がねえってのは辛いな……
ただ……狛枝達が準備をしてくれているはずだ
だから……このダンジョンから出られりゃ……勝ちみたいなもんだろう
絶望的に思いながらも諦めずまた一歩強く踏み込んだ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

……何処まで来た？あと少しか？

不安になりつつも少しずつ前進してることに期待を持ちつつ進み続ける

「キル夫クン!!」

「どうした狛枝……？」

「こっちは入口ついて報告したから、あと少しだと思う」

「早くないか……？」

「むしろキル夫クン達がまだ出てない方が驚きなんだけど……」

「迷ってるのかねえ」

「いえ、だいふ道が破壊された結果よ」

「そうか……」

「まあそろそろゴールだと思っておくよ、頑張って」

「ったりめえだ」

竜がなんだ……倒せじゃねえなら逃げ切ってやらあ、こういうのこそ盗賊の本領だしよ

「あと少しだろうよ……頑張れよ」

互いに励ましあいながら進む
そしてやっと通った道についた

「こっからならもうすぐか……」

だが敵は近いし上手く逃げれれるか……最後の最後だがビームはまずい……

「っと違え……」

あのモーションには覚えがある、あの睡眠のやつか
この位置じゃまずいな

「かなでぇ!!」

「え?」

前へと押し出す、事情も話さなかったため戸惑っているが唐突で話す余裕もなかった
眠気が来るが少しは持つ……だから大丈夫のはず

そう思っていたのに、そうとはならなくて

「……な」

体が燃えている?いや燃えてはない……分からない熱い熱い熱い

さっきの催眠ガスじゃねえにか……？

「キル夫!?」

「かなで……早くいけ……」

なんだこれ……こんな隠し球もあったのかよ……

ふざけんな……希望を持たせるだけ持たせやがって……竜って奴は……

「身体が内から燃えている感覚がある……これは……燃え尽きるのか……？」

……動けない……何かしてきたら一瞬で死にそうだが

咆哮が聞こえる……もう終わりか？

「諦めなきゃどうにかなるだろうよ……」

不安に思いながらも前を見るとかなでがこっちに

ダメだろ……かわしたんだから逃げねえと

「かなで……」

「もう大丈夫、安心して」

そうしてかなでの翼の生えた姿は……

「神様……？」

神と思わせるように神々しかった……

その後気を失いかける前に聞いた言葉は

「キル夫さん大丈夫っすか!?」

「今来たんで……ってなんじゃこりゃあああ!?」

そうして聞き慣れた馬鹿達の声が聞こえた
一緒に危険を顧みず夢へと旅立って船に乗った……懐かしい馬鹿達のそのまま竜の前だと言うのに安心して気を失ってしまった

――――――――――――――――――――――――――――――

昔いやと言うほど嗅いだ煙草の匂いで目を覚ますベッドの近くに親父が座っていた

「親父……」

「悪かったな、あんなものがいるなんざ思ってなかったよ」

「いや、冒険者な以上覚悟してるんで」

「息子が覚悟ガンギマリでも困るんだけどよ……」

「だが……そういやなんで救援来たんだ？」

「待機させてたからだな」

「待機……？」

依頼は受けたものの信用されてなかったってことか？
いやまあ実際こんな結果だし冒険者ですらねえからな

「ああ、近くの船に戦力置いてたしな、何かあったらいやだと……お前達連れた小舟もあったから徐々に上陸出来たしよ」

「そっすか……」

「？」

いや……勝手に拗ねてるだけだし気にしなくていいんだが

「キル夫さんに頼んだのだけどボスはそれでも心配だったんすよ」

「おい」

部屋に入ってきた……火山でもそうだが本当に久しぶりに会ったしなこいつら

「そりゃ腕は信用してますが何せよ大事な一人息子っすから心配になるでしょ」

「お前らなあ……」

「海賊時代親父は厳しかった気がするが……」

「キル夫さん居なくなってからかなり親バカしてましたぜ」

「そうなのか？」

「余計なことは言わなくていい」

と談笑に入るが……そうではないだろう

「すまなかったな」

「キル夫さんどうしました？」

「あの日、俺のせいでお前達皆死にかけになってよ」

「いやいや、誰も死ななくて良かったんだしそれにキル夫さんが冒険者になってくれたから今回も助かったわけっすし」

罪悪感はまだ残るが……こいつら全員が気にしないで言う以上はとやかく言うのはどうか……か

誰一人でも文句言えばだったが……逆に心苦しいな

「討伐したでいいんだよな？」

「ああ、キル夫達のお陰で討伐はしたぜ……ただこれからも偶に調査に入る必要あるだろうがな」

「またいたらまずいしなあ……」

「キル夫さんがまた来たらそん時に調査すればいいっすね！」

「いや……色々とダメな気がするが……」

「でも次来るときはもっと凄くなってるだろうしちょうどいいんじゃ」

「まあ考えてはおく……」

そうしてベッドから降りる

「おい、まだ休んでた方がいいぜ」

「いや……皆にも起きたと報告をな……」

足をついて歩こうとするが……上手く歩けない……それどころか足が死んだかのように力が入らない
そのまま倒れる

「キル夫!?」

クソ……どうなったんだ俺の足……？
アイツの熱気を直接受けちまったからか……？
ただ焼け焦げたような雰囲気ではない……無事なはずだが……

それでもまるで死んだかのように反応しない足に震えが止まらなかった

第41話

「それじゃあ、暫くは安静にな」

親父の知り合いの医者に言われた診断はとにかく安静にだそうだ

「暫くっていつまで……？」

「確か学園通ってんだよな」

「はい、今は夏休み中っすけど」

「んじゃ、夏休み終わるくらいまでかね」

「え……？」

「ヒーリングとかは万能じゃねえんだよ、諦めろ」

「この夏はお宝探ししまくる予定だったんすけど……」

カズマ達と大発掘祭するつもりだったんだが……それが出来ないなんて酷いや

「歩く程度ならいいが、走ったり戦ったりはマジでやめとけ……終わって学園が再開したらしょうがねえし許すがよ」

「なんで……こんなことに……」

「足が文字通りこんがり肉だからな」

「食いもんじゃないんすから……」

「足の神経が全て焼き尽くされてこれでも治るのは異常なレベルなんだからな……？」

「どうりで動けない違和感があったが痛みはないわけだ」

「2週間くらいで歩けるようにはなる、そしたら学園へ戻ってそっちで安静にかね」

「動けない状態で学園戻りたくないんすけど……」

「まっ知り合いを頼るんだな、そこまでは面倒見きれねえよ」

「そう言われるとそうだが……」

帰るまでにも迷惑散々かけるだろうしそう考えると辛いものはある

……まあ今は特にそうするしかないんだが

「それじゃあ行くぜ、精々今の間くらい親孝行するんだなドラ息子さんよ」

「今の状況でどうしろってんだ……」

「さあな、自分で考えな」

「えぇ……」

そのまま医者は去っていった

治るってことが分かっただけマシなのか……それとも暫く動けないし最悪なのかは正直分からねえ

「どうだ、キル夫」

「治ることは治るらしい」

「なら良かったが……流石にこっちも迂闊だったな」

「いや……何がいるかなんざ調べてもねえのに分かんねえっての」

「グラビモスがいるなんざ本当にふざけんなって話だがな」

「グラビモス？」

「ああ、キル夫は知らなかったか……キル夫が生まれる前だったしな」

「親父……かつて竜と戦ったことあんのか？」

「そん時は冒険者を雇ってたし戦ったのもグラビモスの幼体バサルモスだ」

「そう言う名前だったんだなアイツ……と言うか成長体!?」

「ああ……成長体だ」

「あのダンジョン出来たばかりなんだろ？」

「ああそうだ、だが何故か居たのはグラビモスだった」

「一体何が……」

「こっちは調査しておくから任せておけ」

「分かった」

「お前はとにかく休め、普段もそんなに休んでないんだろう？」

「いや……休んでるつもりだが……」

「ルームメイトが言ってたぞ？」

「アイツ……」

「休むのも仕事だ、と言うかお前は休み方覚えろ」

「そうは言われてもな……」

「毎回休むのの入院なんざ困るからな？」

「わーりましたっと」

それから何個か注意されて親父は戻っていく

いや……分かるっちゃ分かるんだが……しんどいな正直

「まあ誰か来てくれないと暇で死にそうなんだが……」

そう願いながら……ひとまず休むことにした

……大丈夫だよな？人望そこそこあるだろうし

――

「おい……」

誰か来るかなとは思ってたが……思っていたが……

「多過ぎんだろ!!」

病室に集まり過ぎじゃあああああ
なんなの!?なんで一気に来るん!?
そしてなんで誰も帰る気ないん？

「キル夫クン大人気だね」

「人気とかそう言う問題じゃねえだろ!!」

病人をなんだと思ってんだ!!本当によ

「しょうがないじゃないっすかキル夫さん、俺達皆キル夫さんが心配だったっすし」

「分かるけど空気読んで欲しかったな」

「俺達が読めるとでも?」

「今は海軍だよな!?」

「大して変わってないっすよ」

「それで許されるんだな……」

「俺達は変わらないのがいい所っすから!!」

「いや悪い所だろうよ……」

他のメンツも見る、カズマやアカネ先輩は空気読めてるみたいで姉さんも一度帰ったが……元同僚が誰も帰らねえ!!どう言うことだよ

「と言うか……」

ちょっと待って……確か……

「かなでは……？」

確か帰ってない気がしたんだが……？
辺りを見渡すが……

「かなでえええええ!?」

よく見たら埋まってる!!あらくれ達の中に埋まってる!!誰か、救出してあげて!!

「どうしましたキル夫さん!!」

「友達が埋まってんだよ!!」

「え？何処に？」

「お前ら一度落ち着いてスペース作れ」

「はっはい……」

そう言うと退いてくれてやっとかなでが解放される
だいぶ潰されてたが大丈夫なんだろうか？

「おっと見つけられたのはキル夫クンの幸運って奴かな？」

「いいからお前は早く出ていけ、マジで狭いから……」

「そうだね、ごめんね」

「大丈夫よ」

「色々と迷惑かけちゃったかな……じゃあ皆行こうか」

「うっす狛枝さん！迷惑かけ過ぎちまったっすね!!」

「なんでお前ら仲いいん……？」

本当にいつのまにだよ
まあ仲良いのは悪いことじゃねえけどさ……

「……と言うか」

「どうしたの、キル夫？」

「なんでアイツら０か１００なん……？」

「スッキリしたわね」

「うん、俺も全員いなくなるとは思わんかった」

しかもなんで狛枝が連れていったん？

それについては後で聞くか……

「かなで」

「何？」

「助かった」

「私は何もしてないわ」

「そうとは思えないが……それでも助かったのは事実だしよ」

「それに、あの時助けたのは貴方の方でしょう？」

「確かにそうだが……ただ無駄に助けちまったんじゃねえのか？」

「無駄って？」

「だってあれはかなでの分身だろう？」

「本当にそう思う？」

「……」

実際はそうは思っていない……

自分は分身だからって言ってたがそれいは色々と違和感があった

そしてこの発言的に……

「何故わざわざ騙した？」

「貴方が無駄に責任負いそうだもの」

「そんなことは……」

「自分のせいでかなでに迷惑かけた、かなでがいるなら助けないと……みたいに思われるのは嫌だもの」

「……俺そんな風に思う？」

「自覚ないのかしら？」

「……ある」

と言うか俺はマジでやるだろうしなあ……

だから今怒られてるわけだし

「はあ……」

かなでも呆れてる……うんまあその結果足がこれだもんな……かなでに何もなかったみたいだし後悔ないけど

「私も仲間なんだから借りっぱなしじゃ気が済まないわ」

「そう言われてもな……かなでに何かあると嫌だし……」

「現に嫌だって事が目の前に起きてるのだけど」

「ごめんなさい」

「別に怒ってはないけど……本当に気を付けて」

「はい……」

「本当に分かってる？」

「……気を付けはする」

「何回この言葉言われたの？」

「……」

分かんねえし正直言い合いで勝てる気しねえなあ……まあ……いつも気を付けてもしょうがない時ばかりだし

「……それじゃあ行くわ」

「ん、来てくれて有り難かったもう行くのか？」

「あまり怪我人の元にずっといるのもよくないもの」

「そうなのか……？まあいいやっとそういや……」

「何？」

「気になった事が一つあったんだが」

あの事……聞くべきなのかどうかが分からん……はぐらかすと言うか順序立てて聞くか？

「かなでは神についてどう思う？」

「どう思うって……？」

「いや……いるとか……」

「存在しているのは分かるでしょう？」

「ああ、そうだな……」

本当に存在しているだけだ、何もしてこないし俺には関係すらない
聖気のせの字すらないしな

「どんなのだと思う？」

「どんなのと言われても困るわね」

「かなで自身は居てくれて有り難いとかそう言ったのはどうなんだ？」

「そう……ね……」

考えるような仕草をしたあと

「どうとも思わないわ」

「どうとも思わないのか？神官って結構恩恵受けてそうだが」

「結局それは私のであって、神様のものじゃないもの」

「そうか、そう言うもんなのか」

「ええ、そう言うものよ」

本当は……実はかなでは神様なんじゃないか？って聞きたかった
実際不思議に思う事があったし神々しさも感じたこともある
ただ……そう言われちゃ聞けねえわ

「これで満足？」

「ああ、ありがとうな」

「それじゃあ足が治ったらまた冒険行きましょう？」

「ああ！」

そうしてかなでが出ると同時に外で待ってた人物と目が合う

アカネ先輩……ずっと待ってたのか？

まあ狛枝達が大量に出て行った時には見なかったし……そん時じゃないんだろうけどさ

「入っていい？」

「構いませんが」

「ありがとう」

「お見舞いですか？」

「それもそうだけど」

「他にも要件が？」

「きっ君少し話さない？」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「足が治るって分かって良かったのやら、そもそもこうなっちゃって悪かったと言うべきか……」

「竜相手に生き残ったから良かったでいいと思うっすけどね」

「まあそうかな、本当に無事ではないけど良かったよ」

「まあ、冒険者になるまでに死ぬわけにゃ行かないっすからね」

「それなんだけど……」

「ん？どしたんすか？」

「冒険者にならなくてもいいよ」

「え？なんで……？」

アカネ先輩にとって俺が不要と言う事……？
確かに毎度の如くやらかしてるしそう思うのも無理はないと思うけど……

「いや、きっ君の学費等はロックさんに払ってもらったし」

「え？」

そんな話聞いてない……ただ……確かにそうか
俺が払ってなかったせいで払うのは親父か……

「息子の分だって払って貰ったから、晴れてきっ君は自由の身なんだよ」

「自由の身ったってな……」

「海軍になるもよし、他に夢があるならそれを叶えるも自由だよ」

「アカネ先輩は？」

「そもそも私は学園を調べに来てるから、冒険者になるわけじゃないし」

「……」

「だから色々と一度考えてみたらどうかな？」

「一度……か」

確かに色々な道はある

親父に従って海軍を目指すのだって

かつての仲間達もいるし学園で学んだ事を平和のために生かすことだって出来るだろう

秋山さんのところにだって誘われている
最初はバイトからだろうが学園で学んだ知識でアイテムをこなしたり、自分で素材を取りに行ったりもできるだろう

諜報部は……俺の無線頼りだろうけど……それでも王国に直接仕える以上悪い扱いになる事はないだろう
他にだって色々あるかもしれない

1．海軍ルート
2．店員ルート
3．諜報部ルート

1d3：

「まっ結局俺は冒険者やるんすけどね」

「え？」

「宝探しが俺のロマンっすから」

「……相変わらずだね、痛い目合ってるのに」

「それが俺っすから」

それはこれからも変わらない
昔から宿命付けられたようにお宝探しが大好きだからな

「それに、前に聞いたんすよ」

「何を？」

「俺にふさわしい職業があるって」

「……泥棒？」

酷ない？そんな泥棒に見える？盗むヘタクソだよ？

「トレジャーハンター、それがやっぱ俺の目標っす」

「トレジャーハンターか、苦労するよ？」

「まあでしょうね、冒険者として戦闘もするだろうけどあちこちにお宝探しに行くんすから」

「少なくとも危険だと思うよ？」

「あー、危険なの怖いなー」

「急にどうしたのきっ君……」

わざとらしく言い出す俺に戸惑いを隠せないようだ

「あー危険なのやだなー、どっかに頼りになる先輩とかいないかなー？」

「……」

「立派な盗賊で罠とか安心して任せられる先輩とかないかなー？」

「……盗賊２は相性悪いよ？」

「んなこと知らない、俺は俺なりに強くもなるしこれが望んだことっすから」

「そっか……なら止めないけど」

「なら決まりっすね、卒業後はお互いチームで冒険者っす」

「私の方が1年早いんだけど……」

「まあそこは待っててもらうってことで……」

「……」

何というか……カッコがつかない
いや付けたいわけじゃないけどさ

「しょうがないなあきっ君は」

そう言って本当に純粋に笑ってくれる
俺が好きな笑顔を見せてくれる
あーうんやっぱりそうなんだよな……流石に自覚したわ……いつからかは分からないけど

アカネ先輩のこと好きになっちまってんな……俺

「どうしたの？きっ君？」

「いやなんでもないっすけど」

「そっか……まあいいけど」

ただそれを伝えるのは今じゃないな……
雰囲気とかはともかく、病室でボロボロになってる時に告白なんざ締まりがねえ……
いつかそういう時を探します

「ただまあ……そう言っても暫くはベッドの上なんすけどね」

「学園始まるまでだっけ？」

「ダンジョンとかいけないって……」

「あちゃー、それじゃあ色々と出掛けられないね」

「どこか行く気だったんすか？」

「うーん、明らかに暑くなるの分かってるし海とか？」

「……」

「そんな顔したってきっ君ダメだからいけないよ？」

なんで……なんで足を怪我しちまったんだ俺は……

と言うかさっきとか散々言われた時よりも後悔してる気がする

「行くだけでも……」

「ダメ、海は学園から遠いし……」

「そんなー」

「まあ大人しくしてなさいってことで」

「……ぐぬぬ」

「まあでも、代わりに行けるかな？」

「何かあるんです？」

「夏祭り、いつも学園で行われてるみたいだけど去年は学園戻ってなかったから行かなかったし」

「え？あの学園でそんなもんやるんすか？」

「やってるみたいだよ、時期が時期だから出掛けてたら今年も行けなかっただろうけど」

「ただまあそれも……」

「流石にダンジョンに行ったりはあれだけど夏祭りくらいはいいでしょ」

「本当っすか!?」

「まあただ足に無理させないでね」

「それは気を付けます……」

「それできっ君はどうするの？」

「何がっすか？」

「誰と行きたいかとかみたいな？事情をあらかじめ話しとかなきゃだし」

「アカネ先輩と行きたいっす!!」

「あっうん……いいけどさ」

「どうしました?」

なんか悪かったか?

「これじゃあきっ君と夏休みずっと一緒になっちゃうなって」

「何かダメですか?」

「ダメではないけど……」

「それじゃあ……?」

「照れちゃうと言うか……何というか……まあいいや、とにかく行く予定で了解したよ」

そう言うとアカネ先輩は立ち上がる
多少顔に赤さがある
まあそう言う言い方すると俺もずっといた事とか合わせて意識しちゃいそうで
慌てて顔を布団で少しだけ隠そうとする

「それじゃ、それまでに少なくとも少しは治すんだからね。歩けるように許可出るくらいはなってないと行かないし行かせないから」

「絶対治します!!」

「うん、それじゃよし」

そう言って笑顔でアカネ先輩は去って行った
……怪我の功名とは違うが、夏休みは死んだと思ったがだいぶまだまだ残ってるみたいだ

「絶対治す」

アカネ先輩と夏祭りに行く、それだけを考えて退屈さなどとうに消え去った

なんせ今は治さないといけないから

「それじゃ早めに休みますか！」

普段なら休憩を取るくらいならお宝探ししたいと思ってる頭も今回は賛成して休憩してくれる

楽しみに待ってくれてるんだろうなと

ちなみにこの後来たらしい姉さんには爆睡していて対応出来なかった

ーーー

第42話

「キル夫君久々だね、焼きそばどうだい？」

「オールマイト先生が屋台側でやってるんすね……」

「ああ、ってことで一個いかがかな？」

「ひとまずは待ってる人いるんで」

「そっか、後でちゃんと寄ってね」

足は無事治って歩けるようになっている

いや……実際治ってんのかは分からねえけど……歩くのは許可出てるが

「アカネ先輩時間かかってんのかな？」

　オールマイト先生に待ち合わせ見られるとなんだかんだ言われるのわかってるし移動して待つ
　大体の場所は変わってないし来たなら合流出来そうだが……

「キル夫、何をしておる？」

「え？富樫先輩？」

「何を驚いたような顔をしちょる」

「いや……正直富樫先輩こう言ったイベントに来るのって想像つかなかったので」

「学園に残っておったら騒がしかったからな。結局誰でも来るだろうし、友人が屋台やってるしのぅ」

「え？富樫先輩の友人が屋台を？何処で？」

「いや……知らん方がいいぞ？」

「なんで？恥ずかしいんですか？」

富樫先輩とは恥ずかしがるとかそう言ったイメージないんだが……

「いや……そうではなくて」

「無くて？」

「シンプルにまずい」

「あー……」

「漢飯な以上俺からは文句ないんだが……他の奴らには勧められんわ」

「屋台出していいんすかそれ……」

「なんでもありが学園じゃからのぅ」

「まあそう言われると納得ですが」

「キル夫は1人か？」

「いや、待ってる状況っすね」

「姫柊の嬢ちゃんか？」

「何故いつもそうなるんです？」

「そうは言っても、他のとこの知らんからのぅ」

「そういやそうっしたね」

「元々お主が交通関係広すぎるんだろ……」

「そうですかね……？」

「冒険者な以上顔が広いのはいいが……お主ほどになれる自信はないわ」

「無駄にはならないっすからねえ」

「いずれ交友関係を頼るかもしれんのぅ」

「それなら喜んで……とは言いたいっすけど俺自身関連じゃないと聞いてみないことにはっすね」

「そりゃ当然じゃな」

富樫先輩にはまだまだ教わること多いだろうしな、これからも大事な師匠であって欲しい

「そう言えば、最近戦闘の方はどうじゃ？」

「どうかと言われても……主だって戦闘することが少ないっすね」

「ほう……お主なら先陣切るレベルじゃと思っとったが」

「盗賊な以上限界があるっすからね……富樫先輩には申し訳ないっすけど」

「構わん構わん、元々弟子取るのに相応しくない流派だしのぅ、精々手段の一つにしてくれるなら幸いじゃ」

「そう言ってくれるならいいんですけどね……」

「と言うかお主が戦えん程の敵と戦っとるのか？」

「まあ……そうっすね……」

「……もしかして秘密案件だったかのぅ？それなら申し訳ないが」

「いや……富樫先輩なら構わないんすけど……外部に漏らしたくないんで場所が場所で……」

「あー、すまんな話しにくい場所か」

少なくとも学園に竜と戦ったなんざ言いたくないしな……何企んでくるか分からんしかも今戦えないからそう言うのもバレたくないし

「ただ……自分が未熟なことも確かなんで、また今度教わりに行きます！」

「正直教えることあるか不安だが……来るなら惜しみなく教えるとしよう」

「ありがとうございます!!」

「そして……だ……待ち人はこんのか?」

「そっすね……約束の時間にはなった筈っすけど……」

今回は忙しいのか時間ぴったり辺りになるとは言っていた
だから遅れるのもあるのか……?

「まあ気長に待つしかないじゃろう」

「男がクヨクヨしてても仕方ないっすもんね」

「その通りじゃ、それに夜もこれからじゃろ」

空を見るがまだまだ明るい

流石夏だと思いながら

「まあ19時くらいになれば来るかな……」

「そんだけ待つのか？」

「まあ1時間くらいは待つでしょそりゃ……と言うか流石に来るまで待ちますし」

「1時間……？」

「え？どうしました？」

慌てて時計を見る18時だし問題はないだろう

「キル夫……いくら夏だからってこの空で18時はないぞ……？」

「え？でも時計が……」

「進んどるんじゃないのか？」

「……」

色々と確認する、結果２時間進んでいた
楽しみが先立ってなんか２時間くらいオーバーしちったの？よく分からん……

「カッカッカ、だが遅刻じゃないだけいいだろう」

「まあそうですね……」

１人で周るって気分ではないし、どうするか？一度寮に戻るか？

「折角だし回ってみてはどうだ？」

「いや……１人で回るのは……」

「なぁに、屋台を回ると言うよりかはお主の知り合いもだいぶいるだろうから顔出しにって感じじゃ、どうせ暫く会ってないんだろう？」

「まあそうですね……」

「したらそうしておけ、それにそれはそれでメリットがある」

「なんでしょう……？」

「この後のデートの事をあらかじめ話しておけば突然絡まれたりせずにすむだろう、邪魔されるのも嫌じゃろうて」

「それはそうですが……」

確かに知り合いがいたら久し振りとかで絡んでくる可能性があるか
それはそれでいいんだが……流石にデートの今日は邪魔されたくないしな

「ってデートって……」

「どうせそうじゃろ？」

「そうでありたいとは思いますが……」

「なるほどのぅ……」

「なるほどって」

「まあ俺が気にしたところであれか、では邪魔者は去るとしよう」

「別に邪魔者ってわけじゃないっすけど」

「と言うよりこの後邪魔者になりそうな奴らと会っておけと」

「その言い方は色々とまずいんじゃ……」

「じゃあの」

結局富樫先輩は行ってしまった

と言うか邪魔者と先に会っとけってなんやねん

まあ……ただ……夜楽しめるように今は今で顔出しながら楽しみますか、なんというかアカネ先輩には悪い気がするけど……

――――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ1d18：12　ウィッチ

「おや、そこにいるのは気にしたキル夫さんじゃありませんこと?」

「あ、ウィッチ先輩に沙都子お久しぶりです」

「お久しぶりですことよ」

「学園に残ってたんすね」

「用事は概ね終わってますので」

「なるほど」

「正直キル夫さんの方がいることに驚きですわ」

「そんなに……？」

「ええ、あちこちに引っ張りだこだと思ってましたもの」

「行くところは行きましたけどね」

本当は祭はこなかっただろうしな……

それこそ言われた通りあちこち回ってたと思う……病室で半分くらい過ごしてた気がするわ

「と言うかキル夫さん、1人ですの？」

「あー、ちょっと早く着いちゃったんでな」

「あー……藤堂さんかしら？」

「いや、藤堂はまだ帰ってきてないはずだけど」

「そうなんでしたのね、申し訳ありません」

藤堂は夏休みは実験室に戻っている

少々不安に思うこともあるが……ただ戻って検査等しないと本物の化け物などになっちまったらどうしようもねえし……ボンボルド先生が見る必要はあるだろう

……まあだからこそ夏休み中は一切会えないんだが

「だったら誰が……」

「ねぇねぇ、あまり気にしないのでもよろしいのでは？」

「それはそれで悔しいですの……」

「いやまあ……気にしないでくださいよ」

「そう言えば、ああ」

「ねぇねぇ、どうされました？」

「思い出しましたの」

「何をっすか……？」

「キル夫さんが課外授業の時に、ダンジョンに戻ってましたわよね」

「まあ……そうっすね」

「その時、助けるために戻ったとか」

「キル夫さん本当ですの!?」

「まあ……確かにそうっすが……」

なんで知ってるん？誰がばらしたん？
いやいいけどさ……恥ずかしいのはある

「さながらお姫様を救う王子様のような」

「キル夫さんは王子様と言えるかはちょっと……ですが」

「うるせえ……」

「でもその方でしょう?」

「……まあ、合ってますね」

本当にどっから情報手に入れたんだこの先輩は

情報網が怖いんだが

「もしかして新条先輩では?」

「ちょっと待って、なんで沙都子知ってるん???」

「知り合いですので、後はキル夫さんとの関係からの推測ですわ」

「俺そんな推測されること言ってたっけ……」

「散々アカネ先輩、アカネ先輩言ってる割によく言えますわね」

「……」

あー……確かに盗賊コースでは言ってる気がするわ
同じコースの先輩だってこともあって言いまくってたと思う

「てへりん」

「やめなさい」

「需要ありませんわ」

知ってるがそこまで言わないでくれ……
いや悪いのは俺か……

「本当はなんか納得いかないので邪魔してやりたいところですが」

「やめてください沙都子様」

「まあ好き放題するとねぇねぇに怒られるのでやめておきますわ」

「賢明な判断だ」

「本当に必死ですのね……」

「そりゃそうだ、色々と掛かってるし」

「あら？まさか？」

「いやいやいや……先輩先輩、そう言うことじゃない……」

「なんだ、面白くありませんの」

「人で楽しまないでください」

「残念ですが、ただアカネももっと君にならって行動してくれればいいんですけどね」

「アカネ先輩の悪口言わないで欲しいんすけど……」

「ああいや、申し訳ありませんわ……そう言うことではありませんの」

「じゃあ……どう言うことで……？」

「彼女と組んだりする時、表面上は普通に振る舞ってますが……壁や信頼の溝を感じるんですの」

「そっすか……？」

確かに警戒心は強いがそこまでは感じないが……

「なので貴方がいればそう言った壁も減ってるんじゃないかって、貴方ほど社交的になれとは言いませんが」

「はっはあ……」

「とにかく、彼女の心を溶かせるよう任せましたわ」

「なんでそんな話に……？」

「私だって死にたくないので仲間として冒険する時は信じたいですの」

「ああ……まあ……そうなのかな？」

「キル夫さんには程遠いかもしれませんが……こう言ったことは覚えておいた方がいいでしょう」

「そうなんです？」

「冒険者になったら絶対分かると思うので。嫌と言うほど」

「分かりました、覚えておきます……」

「それでは私達はこれで」

「ではキル夫さんまた講義でー」

「2人ともありがとな、そしてまた学園で」

心の壁を感じる相手か……

よく考えたら普通はいるはずだよな……

「気を付けないといけない時もあるかもしれねえ」

少しだけ心に刻んだ

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

１ｄ１７：１６　マサムネ

「あーーーーーーーっ!!」

「いきなり騒いで何ですか……」

「やーっと見つけたぞ！ここのところどこ行ってたのだ!!」

「何処って夏休みっすから……」

マサムネ先輩に唐突に絡まれた……

富樫先輩の言うように先に面倒になりそうな相手に会っといてよかったかもしれない……

「ぐぬぬぬぬ、まあいい……マサムネと勝負しろ!!」

「今祭中なんですが……」

「知ったことか!!今やるしかないだろう!!」

「……摘み出されますよ?」

「それがどうした?」

「祭りに参加出来なくなりますよ?」

「うぐ……だが……それでも……」

「屋台の物食べれなくなりますよ?」

「やめる」

どうにか収まった……と言うかこの人本当に先輩なのか？
自由人過ぎて冒険者学園に入りたてとしか思えないんだが……

「それじゃあ綿飴を」

「ん？」

何を言い出すんだこの人は

「早く買いに行くぞ、無くなってしまったら嫌だしな」

「ああ……いってらっしゃい」

「いや……買ってくれるんだろ？」

「仮にも俺後輩っすよ？」

「それがどうした？」

「……」

どうやら俺が買わなきゃならないらしい……なんで？

「買ってくれないのか……？」

「1個だけっすからね……」

「分かった！行くぞ！」

甘やかす……と言うか……マジで後で騒がれると嫌なんで……これで引き下がってもらおう

「ふふーん」

結局買ってしまったが……アカネ先輩まだ来てないのに屋台を回ってしまった……

「マサムネ先輩……」

「ん？どうしたキル夫？」

「冒険者としての稼ぎ悪いんすか？」

「いや、そんなことないが？」

「なんで奢ることになったんすか……？」

「いや、１人で買っても寂しいだろう？」

「いや分からなくはないっすけど……」

「だから誰かに奢って貰えば寂しくないだろう？」

「確かに誰かといる以上寂しくはないだろうけど……」

「この名案を浮かんだマサムネは天才という訳だ!!」

「いつもそんな感じっすか？」

「いや……いつもはむしろご飯行くかー？と誘われる側だが」

「なるほど……でいいのかなこれ？」

「褒めてくれてもいいんだぞ！」

「でもそれマサムネ先輩は奢ってもいいんじゃ……？」

「……」

あーこれ財布の紐が硬いタイプか
そう言うタイプには幾ら言っても……

「考えたことなかった!!」

「……」

「名案だなそれ！毎回とは言わないが奢ればよかったじゃないか」

「えぇ……」

「これからはそれも考慮する！ありがとうなキル夫！」

最初の噛み付いてきたときと間反対レベルだなおい……まあこっちの方が安全だろうけど

「じゃあ行くぞ!!」

「いやもう俺そろそろ時間が……」

「知ったことかー」

「なんでじゃーーーー!?」

たこ焼きを奢ってもらいました

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「これから回るっつーのに……」

なんでたこ焼き食っちまったんだろう……いやまだまだいけるけどさ
ただ時間までに解放されてよかった……マサムネ先輩に振り回されて遅れました
じゃ通じない

「さて……そろそろか？」

「お待たせ、待った？」

「っと待っていな……」

返事しながら振り向くと、知らない人がそこにいた……誰？

「ごめん待たせちゃって、じゃあ行こうか」

「あの……誰っすか？」

「そんな、酷くない？分からないものかな？」

「え……すみません……」

え？アカネ先輩なん？根本的に見た目が違う気がするし髪が赤いんだけど……
お洒落すればここまで変わるってことなのかな？

「いいよいいよ、それじゃあ行こうか」

「いいの……かこれ？」

「ダメに決まってるでしょ」

「アカネ先輩……？」

浴衣姿のアカネ先輩がそこにいる
え？アカネ先輩が２人？

「ちょっと、何の用さ？」

「ツレが巻き込まれてるんだけど」

「ほにゅ？」

「ツレがアンタに巻き込まれてるんだけど……？」

「え？君待ってる人いたの？」

「いましたけど……」

「なんで!?独り身だと思ったから声掛けたのに!?」

「俺が１人で祭り来てるかともかく……かなり親しみ深く来てる感じでしたが……」

「うぅ……巻き込んじゃってごめんね……お姉さん帰るよ」

「あっはい」

そうして謎の赤髪の少女は去っていった
なんだったんあれ？

「きっ君、なんで着いていきそうになってるの？」

「いや……その……」

まさかアカネ先輩に見えましたとか言えるわけないしどうしろと……？

「まあきっ君のことだしまた厄介ごとに巻き込まれたんだろうけど……」

「すみません……」

「いや、いいよ気にしてないから」

実際に気にしてなかったとしても本当に申し訳ないと……

「とにかく、そっちが気にするって言うならさ」

「はい」

「夏祭り精一杯楽しもうか」

「はい！」

最初からやらかしはしたものの……
夏祭りはこれから始まる、楽しみで仕方ない

―――――――――――――――――――――――――

続

第43話

―――――――――――――――――――――――――――――

「きっ君どこ回ろっか」

「オールマイト先生が焼きそばやってましたよ」

「行きたい……？」

「いやぁ……」

正直すっごい嫌な予感しかしないよなって……俺個人の時は逃げたけどアカネ先輩いるから尚更逃げねえと

「きっ君の足に響いたら嫌だもんね」

「足は結構治ってきてますが……」

と言うか足に響く焼きそばって何？改造兵器？

「とりあえず食べれそうなもの探そっか」

「了解」

アカネ先輩と一緒に屋台を巡る

なんと言うか……初めて見るものばかりだな

「そう言えばさ」

「なんです？」

「きっ君は祭りとか来た事あるの？」

「祭りは……したことはありますが」

「したこと？」

「仲間達と打ち上げというか祭りってレベルに盛り上がるんすよ」

「そういう感じか」

「はい、だからこう言った祭りは初めてっすね」

「じゃあ楽しまないとダメじゃん」

「そっすね」

色々と見て回る

食い物だけじゃ無いんだな……

「アカネ先輩、ベビーカステラってなんっすか？」

「お菓子みたいで甘い奴」

「美味しいんすか？」

「うーーーーん……あー料理人が上手な人だし美味しいと思うよ」

「それじゃあ一つください！」

「すぐに買いに行ったね……」

当然買っていく、量が多いらしいし一つでいいかな？

「しかし以外だね」

「何がっすか？」

「きっ君甘い物優先して行くんだなって」

「そりゃ……はい」

「うん？」

「アカネ先輩も食べるかなって」

「なるほど……考えたねきっ君」

「はいどうぞ」

「それじゃ遠慮なくと」

パクリと俺の手から食べる

……ん？

「あの……アカネ先輩……？」

「なぁに？」

「受け取るんじゃなくて……なんで直接食べたのかなって」

「あー……まあいいじゃん」

「構いませんが……もう一つどうぞ」

「ん……」

そう言って今度は手で受け取る
そしてこっちを見ずに口に含む

「どうかしました？」

「いや……」

さっきと違って何があったんだろうか？
とにかく食べたみたいだし構わねえけど

「次行こうか」

「はい」

ただアカネ先輩がこっちを向いてくれない
嫌だとかでは無いが……何もなきゃいいが……

「とにかく、食いまくるか……」

たこ焼きだけじゃ物足りない

まずは食ってから考えることにした

――――――――――――――――――――――――――――――

「きっ君よく食べるね」

「普段から食ってるでしょう？」

「まあ……そう言われるとそうか……」

大食いって程では無いとは思うが少食では無いだから祭りだと食いまくっちまうな

「しかし少し高く無いですか？」

「まあ特別料金みたいなものだからね」

「特別料金？」

「うん、折角の祭りで皆楽しんでるしね」

「なるほど……」

「冒険者でも使う知識だから覚えておいた方がいいよ」

「俺、冒険者で屋台とかやる気ないんすけど……」

「そうじゃないよ、希少価値ってもの」

「珍しい部位とかっすか？」

「それもあるけど……今欲しいものがその場にないなら足元見られるよと」

「？？？」

ちょっと言ってることが理解出来ない
必要ならなんで？どういうことだ？

「きっ君、ダンジョンに水はある？」

「あるところはありますが……」

「……火山に水はある？」

「いや、流石に無いんじゃないっすか？」

「そうだね、じゃあそこで水が無くなるとどうなる？」

「えっと……死ぬとか？」

「別に死ぬってわけじゃないよ、分けて貰えばいいし」

「そういやそうっすね、そうすりゃ安心と」

「でも日常の水とそこの水の価値が一緒だと思う？」

「あー……」

そういう事か……用意を怠ればその分痛い目に遭うと

「理解しました」

「それでよしっと」

アカネ先輩はそう言いながら時計を見る

何かあったのだろうか？

「よし、きっ君何かしよっか」

「何かって……？」

「あっ射的あるじゃん」

「射的……？」

アカネ先輩の言う方を見るが銃使うの？俺無理なんだけど

「アレに当てるだけ」

「難易度高くないっすか？俺銃使った事ないんすけど……」

「別に銃使えるから云々じゃないよ、ただ当てるってだけだし」

「それなら出来そうかな……？」

「いらっしゃい、彼女にいいところ見せるのか？」

「長谷川先生……？」

「っておうキル夫か、やってくかい？」

「ああ、じゃあやる」

足は……射的なら大丈夫だろ多分
激しい運動とかそう言う類じゃねえし

「ルールは大体予想つくだろ？」

「付きますが……適当でいいんですか？」

「だってお前達いちいち気にしねえだろ？」

「まあそうっすね……」

「そんじゃ景品当ててみな、そのぬいぐるみとか新条喜ぶんじゃねえの？」

「ぬいぐるみっすか」

確かに正面にデカいぬいぐるみがある……ただアレ落ちんの？自信ねえんだけど

「それじゃあ見せてもらうぜ」

「なんか目がマジなんですけど」

１ｄ１００＜２５　７８　失敗

「（コイツは何かと噂になる奴だしな、一度目をつけたほうがいいだろうどうせ射的くらいなら……）」

「ダメだ」

「は？」

長谷川が辺りを見渡すが彼方此方にコルクが刺さっている
と言うか……どんな風に撃ったんだ？

「きっ君……才能ないね」

「シノン先輩に銃借りた時ああこりゃ無理だなって思いましたもん」

「それは正しい認識だと思う」

「俺もここまでなんざ思ってませんでしたが……」

「むしろここまで明後日の方飛んでくなら逆に何にも当てられなかったのは才能だと思うわ」

「褒めては……ないっすよね？」

「ったりめーだ」

銃の才能は最初から無かったとは思っていたが散々らしい……

いやさ……才能が無さすぎんのも辛いなおい

「アカネ先輩はどうなんです？」

「うん、私？」

「はい、やらないんすか？」

「私はいいかな自信ないし」

「如何にもアカネ先輩なら出来そうっすけどね」

「いいのいいの、と言うわけできっ君ＧＯ！」

「自信ないんすけど」

言われる通りに撃つが勿論当たらない……こればかりはどうしようもないだろう

「よし次……」

「勘弁してください」

流石に何処に飛ぶかわからんレベルの弾をそう何発も打ち続けたくねえわ……

「それじゃあこれで行きますね」

「あっああ……毎度あり」

これで良かったのか?と不安に思うが……アカネ先輩が行ってしまった以上止まる意味もないだろう
アカネ先輩に置いてかれんようにしないとな

「ん?」

一瞬アカネ先輩が長谷川先生の方向いたがなんだったんだ?
分からんしまあいいか

「アカネ先輩、このあと何処行くんです?」

「いい時間だから付いてきて」

「分かりました」

射的で時間を潰せたのか連れてかれる
屋台の方から離れて学園の方に……一体アカネ先輩は俺に何を見せてくれるんだろ

うな……？

―――――――――――――――――――――――――――――

到着したのは保健室だった
正直予想外だし怪我もしてねえが

「足は大丈夫だと思うんすけど心配っすか？」

「いや、違うけど……？」

「じゃあ何……」

話が終わる前に空で何かが光った
慌ててみてみるとそれは花のように咲いている

「なっ……なんだありゃ!?」

「花火、学園の祭りの時にやるんだよ」

「なるほど……こんな綺麗な行事やるんすね」

「それで、保健室からは遮蔽物無いし綺麗に見れるんだ」

「なるほど、確かに綺麗ですね」

花火と呼ばれたものをじーっと見る

空で綺麗に咲いている……こんなことも出来るのか色々と奥が深いな

「綺麗だね」

「そっすね……と言うか俺はこんなこと出来るんだなと驚きまくってますし」

「あははは、きっ君にはまだ早かったかな?」

「早かったってちょっと……」

そうやってアカネ先輩が笑うのを見るとドキッとする……本当に掻き乱されるな……

「どうしたの？きっ君？」

「いやその……」

言い訳が浮かばない……

とりあえずなんか浮かんだこと言わねえと

「えっと……花火もそうっすけど一緒に映る月も綺麗っすね」

「……きっ君、意味理解して言ってる？」

「意味???」

なんか意味があるの……分かんねえ……

「うーん……内緒にしてもいいんだけど」

「ちょっとモヤモヤしてるっすねそれ」

「じゃあ言おうか」

「ワクワク」

「ワクワクすることじゃ無いけど……」

「そうなんすか？」

「私きっ君に告白されたんだけど」

「え???」

ちょっと待って……俺何してん?

ちょっと待って?え?え?俺がアカネ先輩に告白?え????

「あー告白されっちゃったかー」

「あの……ちょっと」

「きっ君さー」

「はっはい!!」

なんて言われるんだろうか?少し怖いんだが……告白した気はないんだが断られでもしたら耐えられねえ気がする

「もし、私が死んでもいいわって答えたらどうする？」

「死んじゃダメっすよ!!」

「……はあ」

なんで呆れられてるの!?ねえ!?

「察してよ……」

「察してって……」

死んでもいいって返しはもしかしてさっきの関連？
ごめんなさい貴方となら死にますって事か？
いや……それなら呆れないか……？

「アカネ先輩、俺は冒険者とか関係なくてもずっと一緒に居たいとは思ってるっす」

「だめ」

「何が？」

「それじゃ足りない」

「足りないって？」

「その言葉じゃ足りないかなー、折角の一度きりのことなのに」

「あー……そう言う事っすか……」

「別に嫌ならいいよ」

「いや……問題ないっす」

元より自分でもそうだと思ってたし
恥ずかしくて言えずじまいだったか……相手がそう言ってるのに言わないわけにもいかないか

「アカネ先輩、好きです」

「……」

「あの……返事は……」

これだけ言ってて違ってたらどうしようと
いや……人のせいにするのは良くないな
ただまあ……振られたら怖いんだが
そんなことはないだろう……と信じます……

「きっ君」

「なんで……」

返事をする前にアカネ先輩が近づいて来る

そうして唇が重なり合う

「アカネ先輩?」

その後のことは花火の音で聞こえなかった

ただ……めでたく恋人関係となったわけだ

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「さて、夏休みが終わるが皆大丈夫かね?」

所変わって学園内、祭りが終わり教師陣が集まっている

「ええ、大丈夫です」

「同じく、だいぶ休んじゃったかな」

「オールマイト先生はいつでも活発なイメージありますけどね」

「はっはっは、元気だけが取り柄だしね」

「なら良かったよ、それで……ボンボルド先生……例の研究は」

「順調ですが被検体が足りませんね」

「また生徒を一人使うのかな？」

篠ノ之束はうんうんと肯定しながら話に混ざる

「ただ……普通の検体じゃ物足りないんですよね」

「物足りないとは？」

「簡単に言うと一般人じゃ物足りないと言うことです」

「なるほど……研究が進まないって認識でいいかね？」

「はい、その通りです」

「それは困ったね……」

「私もそれは困ったね……」

「今貴方の話はしてません」

「……」

オールマイトが不服そうにしている

他のメンツは気にせず続ける

「そしてそう言うことは目星が付いているのかね？」

「はい、ですが少し面倒な相手で……」

「構わん言ってみたまえ」

「分かりました」

「私も興味あるねー、少なくとも実験に使えそうな人はいなかったと思うけど」

「岡島キル夫、彼ですね」

「おや……？真剣そうに言い出すから居なくなっては困るような３年のメンツだと思っていたが」

「キル夫君かい？優秀なのは分かるけど予想外の所だね」

「ええ、彼です」

「理由を聞いてもいいかい？」

「彼、特別な力を持っています」

「ほう……私と会った時は話してくれなかったが」

「本当にかい？彼盗賊としては凄いらしいけど戦士としては勿体無いくらいに普通だし」

「ええ、間違いなく彼の身体を解剖したいですね」

「して、その情報は何処から？」

「藤堂春香……私の検体なんですがメンテナンスする時に記憶を覗かせてもらったんです」

「それで、何が？」

「時を飛ばす、また時を巻き戻していました」

「……それは、本当かね？」

「はい、本当です」

「そんな素振りは一切知らなかったな」

「そう言う加護持ちなんですかね？」

「或いは」

「或いはなんでしょうか？」

「彼自身が神の分体であるか、だろうボンボルド先生」

「ええそうですね、私はそれを追っています」

「ほう、貴方にしては珍しい」

「彼はまるで神に愛されたような悪運の持ち方ですから」

「なるほど、してどうする？」

「普通に拐うのは？」

「よくないね、彼は顔が広すぎるよ」

「障害となりそうなリストは」

「まず、彼と親しい一年は全員アウトだろうね……この学園のことを知らな過ぎるし心情的に彼に付くだろう」

「一年なら問題あるまい、他は？」

「明確なと言えば、トーマス君は向こうに着くだろうね」

「折原も着くと思うぜ？」

「長谷川先生、彼がキル夫君に着くと言うのですか？」

「ああ、着くだろうなんせ人間大好きさんだしな」

「それでトーマス君は元からの仲でと言うことですか……面倒ですね」

「他は２年だと富樫君に北条君に新条君……他は現状じゃ分かりにくいかな」

校長は面倒そうに頭を抱え続ける

「面倒な3年二人がいるとは言えそれくらいならまだなんとかなるかな？キル夫君もまだ未熟だし、一年にはほぼ血が効くだろうしね」

「いえ……もう一人います」

「カーミラ先生？聞いていいかい？」

「〝学園の鉄血児〟オルガ・イツカ」

「なっ!?」

「彼がキル夫君側だと……？」

「普段の神官の授業を見ている限り彼は間違いなくキル夫君側に着くと思います」

「現在の鉄華団の規模は？」

「不明です……」

「学園内にどれだけいるかだ……」

「一つだけ聞いておく……彼の鉄華団には命令が一切聞かなかったんだね？」

「正確にはオルガ・イツカの命令に反するような命令は受け付けませんでした……」

「そうか……ありがとう」

「と言うことは……オルガ君が卒業まで待つべきですかね？」

「いいや逆だろうな」

「長谷川先生、理由を聞いていいですか？」

「恐らくオルガ・イツカは次期団長をキル夫に任命するだろうな」

「何故キル夫君を？」

「鉄華団には率いる能力を持った人間はオルガ・イツカのみだ、それこそまるで魔術のようなレベルでのカリスマがある」

「それがキル夫君にもあると？」

「少なくともキル夫君には人に好かれる才能があるし誰かの前に立って率いることも出来ると思うよ」

「……つまり今季で決めるしかないと」

「そう言うことだ、逆に言うとそれがリミットだろう」

「出来る自信ってありますか？」

「……」

全員が無言になる

彼が敵に回ると言うことは1年全体も不味くなる、少しばれてもやらかせると思ったが……一人でも残って報告されるとまずい

「ああ、いいものがあるじゃないか」

「オールマイト先生、どうぞ」

「武術大会、それがあるし間違いなくキル夫君も参加すると思っている」

「それを利用するときたか」

「はい、間違いなく私と当たって大会の中で確保しようか」

「他のメンツは大会に夢中のまま拐うと……なるほどな」

「問題はキル夫君が決勝に来てくれるかですが……それは信じるしかないでしょうね」

「あーそりゃ問題ねえ」

「長谷川先生が彼のこと分かるんですか？」

アンタの担当は盗賊コースで彼の戦闘力知らないだろうしと

「ああ、間違いなく上位クラスにはつえぇ……そして……後押しをしてやる」

「それならそちらは長谷川先生に任せましょう」

「分かった……」

「それじゃあ吸血鬼の神を作るために彼には礎となってもらいましょう」

全員が賛同する、それぞれの思惑は違えど彼を犠牲に望みへと近づくために

もうすぐ二学期が始まる

――――――――――――――――――――――――――――――――

第４４話

「残念だがお前ら、休みは終わりだ……今日から地獄が始まるぜ」

長谷川先生の言葉を始め学園が始まったと思い知らされる

帰りたいと思う反面やっと身体動かせるかと安堵する

「流石に今日テストしたりはしねえが早いうちに身体戻しておけよ？」

確かに今日テストされてたらまずかったかもな……

暫く走ってなかったから体力が落ちていたと思う

「それに、だ」

「ん？」

まだ何かあるのだろうか？

よく分からないまま長谷川先生の話を聞き続ける

「もう少しすりゃアーナムで武闘大会がある、それにも備えなきゃならねえだろうよ」

「いや……先生……」

「どうした佐藤？」

「盗賊コースっすよここ……」

「そうだな、盗賊コースだな」

「盗賊コースで大会出る人いると思います？」

カズマの言う通りだわ……ほぼ戦士コースの奴らばかりに決まってるし……なんなら俺も自信ないし大会出るくらいならダンジョンアタックしたいしな

「外部からもあちこち来るし初めての相手と戦えるぜ？」

「それこそ別コース向きでは……？」

「後はまあ報酬とかだが……」

「人によってはですが……少なくともここ向きではなさそうですね」

「だよなぁ、俺も言わなきゃならねえってわけで」

「あっすみません……」

「いや、佐藤お前の言うことがごもっともだ」

「……」

「ただまあ、参加０人って決めつけも良くねえしな」

「そりゃそうですね、すみません」

「例えば岡島」

「俺が何か？」

「参加しねえのか？」

「……え？興味ないんすけど」

「なんで？」

「いや俺盗賊っすし」

「お前結構強い自信ないの？」

「ないっすね」

強いと言っても盗賊コースではだろ
雪菜にも藤堂にも……かなでにすら勝てる自信ねえぞ

「そうか……間違いなく決勝リーグ行けそうだが」

「教師が贔屓していいんすか？」

「いや……だって毎年盗賊コースは誰もいませんって寂しいじゃんかよ」

「……まあそうっすね」

「と言うわけで参加な」

「は？」

「え？ここまで言ってしねえのかよ？」

「少なくとも考えさせてくださいな」

「まあそりゃそうか」

「と言うかせんせー授業はまだですかー？」

「あー？お前らも初日でやる気ないと思って雑談交えてたんだが……やりたきゃやるがいいのか？」

「げー墓穴掘った!?」

後ろで生徒たちが騒いで居る

俺的にゃ授業の方が有り難いがすっかり今が授業中なこと忘れてたわ……

「んじゃ岡島、この話は授業後な」

「正直あまり興味がないんすけど……」

「いいから聞くだけ聞いとけ」

「分かりました……」

そんなしなきゃダメか？

俺って最強！よりもお宝!!の方に浪漫を感じるタイプだなんだが

「大変だなお前も」

「カズマは参加しねえの？」

「無茶言うんじゃねえよ……」

「俺参加するなら強制的に混ぜようかな」

「勘弁してくれ……即落ちする」

「流石にそこまでじゃないだろ……」

「いや……マジでやばいと思うぜ？」

「おい、授業始めんぞ」

「了解っと」

今はそれよりも遅れを取り戻すかが大事だな……学ばねえと

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「今日の授業はあまりしたくねえんだが……まあ一応しねえとはな……」

「なんなんですか先生？」

「暗殺だ」

「は？」

いきなり何を言い出してるんだ……？

怖いんだけど

「モンスター相手にですか？」

「いや……対人だ」

「いやいやいやいや」

対人相手の
暗殺ってどう言うことだよ……

「残念だがそう言う必要もあるんだよ」

「ただ……学園で暗殺って教えるものなんですか……？」

「正確にゃまだ暗殺は教えねえ、ただ先輩になると教わることになるがね」

「え？じゃあ今日は？」

「正確にゃ暗殺前の無力化だな」

「無力化っすか？」

「ああ、暗殺するための下準備みたいなもんだ」

「教えちまっていいんですか？」

「ああ、流石に1年のうちに暗殺は止められたがな」

「それでも……」

「言った通り俺はあんま進まねえわけよ……ただこれ覚えてねえと学園外で危険だしな」

「危険なんです？」

「冒険者って案外人にも狙われるしな、だから逃走って意味でな……」

「そうなんですか？」

「ただ……これで問題なのはだ……」

「ああやっぱありますよね」

「無力化したら結局暗殺しちまうんじゃねえの？ってな」

「あー……」

やっぱそうなっちまうよな……そりゃ先生側も教えたくねえわ

「ただ……毎年の恒例なんだよなこれ……」

「これ……1対1でやれと？」

「流石にそれはまずいよな？」

「ですね……」

下手すりゃ昏睡とかもありそうだしカズマとやりあいましたーとか困るわ

「だからこれは座学になるんだよ」

「まずくないです？」

「ああまずい……机上論で実践しろってわけだしな」

「失敗したじゃ済まない案件ですものね……」

「済まねえが……沙都子は体格差的に暗殺は無理だろ……」

「この授業も必講ですもの」

「あー」

「とりあえず教えるが……1人や友人とで練習はすんなよこれは先輩頼れよ？」

先輩以外といえば渚が暗殺も出来るはずだが……
……まあ渚に聞くのもあれだろうな

「とにかく、聞いておけ」

「はい」

「まずは毒蛾の羽って知ってるか？」

「確か毒蛾から取る鱗粉のはずかな？」

「おう佐藤正解だ、その鱗粉にゃ名前の通り毒がある」

「毒ある生物とかもいますもんね……」

「毒蛾は麻痺毒を持っていてナイフとかに塗って敵を麻痺させる」

「文字通り行動不能にさせるわけっすか」

「そうだ、そうやってアイテムを使うのが一番楽でもある」

「アイテムもまず持っていける場所だらけでしょうしね」

「少なくとも暗殺する必要のないお前らは間違いなく持っていけるだろ」

「護衛用にいざとなったら不安っすけどね……」

「まあそりゃそうだろうな、普段から塗ってるならまだしも」

長谷川先生は納得しているが……普段予備武器に麻痺毒辺り塗っておくべきなのか？

「次に魔力ある奴が魔術で……とまあない奴にゃ関係ないし魔術師コースでやるべきだ

ろうけど……」

「なんで魔術師コースのことやってるんです？」

「いや……ボンボルド教師は教えねえだろうからな……」

「え？得意そうですが……」

「そこまでは知らねえよ、ただパラライズって魔術がある」

パラライズ……言葉通り痺れさせそうだが……
原理とか話聞いただけで分かるかねえ……

「これはまあ出来ねえ奴いるから後で聞きにこい、教えてやる」

「じゃあ基本はアイテム使ってですか？」

「後は……いっか、一先ず見せながら教えてやるか」

そう言って長谷川先生は右腕を出す
それと同時に右手が黒く染まる

「は……何が？」

「それなりにコストが高いが、中々優秀な技だぜ」

悍しいと思うと同時に凄いと感じるようだった
果たして俺にアレは出来るのか？

「デスハンド」

その言葉と共に黒板に触れる
それと同時に破壊された

「え……？」

威力の高さや黒板を破壊して良かったのかと言うことやらに言葉が詰まる
ただ……本当になんなんだ？

「すげぇ……」

「俺達もアレだけ出来りゃ戦える……」

などと歓声が上がる
それと同時に長谷川先生が話す

「あーすまん、これ多分伝授無理だわ」

「え？」

いや教えるって言ってたじゃん……なんで？

「簡単に言うと必殺技みたいなもんだし練習だけじゃなくて素質が必要そうだし……」

「じゃあ何故見せたのですの？」

「いや……こう言うのもあったなと」

「使えなければ意味がないのでは？」

「そうだなすまん」

長谷川先生の謝罪と共にチャイムが鳴る
それと同時にちゃっかりと長谷川先生は挨拶を済ませた
皆は文句を言うよりも休み時間と外へ駆け出すものが多かった

「結局は道具使えってことかよ……」

まあそれが盗賊らしいなと部屋を出て行こうとする

「岡島、お前は残れ」

「参加しないっすよ？」

「いやそうじゃねえんだわ」

だったらなんだと言うのか、渋々残っていると

「お前にゃ才能がある」

「いや褒められたって……さあ」

「いやいや違う」

「ん？」

「デスハンドお前なら使えこなせそうだなと」

「マジですか？」

「ああ、実質お前のために見せたんだし……だからこのあと付き合え」

多少不安に残るものの、憧れもあったため補講を受ける事にした

間違いなく必殺技になるだろうと

――――――――――――――――――――――――――――――――

「よう、準備はいいか？」

「構いませんが……なんすかその格好？」

「それは気にしないでいいんだよ、戦闘フォルムとでも思ってくれ」

「はあ……」

「んで岡島、お前の魔術ってもんを見せてくれよ」

「……生憎……調節が苦手でして」

まさか俺のこと知り尽くしててこうして来てるのか？

気のせいだとは言い難いが……

「ああ、確かにボンボルドが気絶するほどって言ってたな……調節出来ねえのか？」

「出来なくはないですが……」

そっちの方か……ただマジでこっちも調節苦手なんだよな……

そう言いながらなんとか調節して放出する

「手に留めろ」

「は？」

慌てて留めようとするが溢れてしまう
留めるってなんだよ

「もう一度だ」

「留めるって……」

「言葉通りだよ、手に抑え込め」

長谷川先生の言う通り何度も何度もやってみる
だいぶ魔力が切れてきた頃にやっと抑え込めた……ただ魔力量が減っただけな気がするが……

「やっと出来たか」

「かなりムズイですよこれ」

「だが次は楽だから安心しろ」

楽って言葉に疑心を持ちながらも話を聞く

「ありったけの憎悪を腕に染み込ませろ」

「は？」

「魔術ってそんなもんだろ？だから恨みを拳に乗せてぶん殴る要領だ」

「そんな無茶苦茶な……」

「いいからやってみろっての」

「……」

……今は幸せ絶頂期なんだが恨む事がない事はない
と言うか学園に対して恨みまくりなのは事実である
そう思うと自然と怒りと憎悪が溜まってきた気がする

「殴るってのは冗談だが……それを心臓に当てるイメージで……掌底打ちみたいなのがいいかもな」

「うす」

言われた通りに木に向かって打ってみる

「デスハンド」

唱えると同時に込めた魔力と掌をぶつける

それと同時に木が倒れた

「え？」

詳しく見ると内側が腐って折れたらしいが……

「これ？人体に大丈夫なんですか？」

「ああ、問題ねえよ」

「本当に？」

「ある程度超越すりゃ平気で暗殺拳になるがな、お前じゃまだ無理だろうし」

「でも木が大変な事になったっすよ？」

「人体を一緒にすんな、そもそも相手なんざ鎧着けてるだろうしな」

「それでも……」

「魔術ってのは一種の呪いだ、それを凝縮したもんだし効果は覿面だ」

「……」

「胸へと打つ事で通常の心臓への打撃だけじゃねえ……言わば心臓を縛り付けるんだ」

「それは……恐ろしいような？」

「つっても一時的なもんだぜ？それに耐え切れず人は気絶する」

「強くなれば……？」

「当然その締め付けも強くなり……心臓が止まって死ぬ」

「危険過ぎじゃないですか？」

「だから文字通り俺の必殺技なんだよ、普段使わねえがな」

「必殺技……」

文字通り俺も必殺技にもなるだろうこれ……
ただ使い方が難しいし調整も必要だが

「まあ俺の場合は必殺技何個もあるがな」

「ははは……」

流石教師なのだと思った
と言うかこう言う技が沢山あるとか勘弁してくれよ

「まっこれも手に入れたと言う事で、大会はどうだっては改めて誘ってみてやるよ」

「いや……無理っすよ」

と言うかこの技、人に打つわけにゃ行かねえだろうよ……

「残念だがそいつ使っても気絶が数秒に奴らばかりなのが武術大会だぜ？」

「……は？」

「俺の必殺技でもあるし気絶はしてくれるだろうよ……ただ長続きしねえだろうな」

「んな化け物ばかりなのかよ……」

「そりゃ外部からも来るしな」

「言ってましたね……」

「だからだよ、一度全力でやってみたらどうだ？」

「全力で……」

勿論人には見せられない力も俺にはある
それに誤ってこの技とかで死人が出るとまずい

「って思いましたが……そもそも間合いに入れるのか……」

「そのための破壊工作だろうが」

武器破壊、部位破壊……これらを利用して叩き込めと……

「でも一瞬じゃ結局どうしようも」

「場外にぶん投げてやればいいだろ？」

「それは……観客もヒくんじゃ……？」

「ばーか逆だよ」

「逆ってなんすか？」

「普段イキリ倒してる戦士達が盗賊に場外にぶん投げられるなんざ笑い者だろうよ」

「そっすかねえ……」

「それにだ……」

「ん？」

「護りたいものあるんだろ？今どれだけ出来るか限界を知っておけよ」

「……」

確かにそれは事実か……俺が何処まで出来るか分かってない今はまずい
そのせいで皆をピンチにさせる事だらけだったし

「分かりました、やってみます」

「おうそうか、盗賊コースまた０人って笑われずに済むぜ」

「予選出来るか分かりませんがね」

「流石に予選はお前なら余裕そうだがな」

そう言って笑い出す
え？本当に余裕そうに思えないんだが……

「まあでも後押しでこいつを渡しておいてやる？」

「なんすか？それは短剣」

「ああ、ソウルイーターって言うんだが名前の通りかなり強い剣でな」

「いや……それは要らないっす」

「見た目気に入らねえか？」

「いや……俺の武器はこれなんで」

「あーいつものククリナイフか」

「だからすみませんね……」

「構わねえよ、慣れてるのが一番だしな」

「はい」

「後で俺のとこに来い、パラライズとかも教えておいてやるよ」

「いいんですか？」

「おう、盗賊の意地見せてやろうぜ！」

「はい！」

「つってもまだまだ余裕あるし色んなコースで学んでおけよ？」

「そうっすね」

一先ずの目標が出来た

アカネ先輩……いやアカネの為にも俺の出来ることを知りたいし

武闘大会へ向けての目標を立て今季は頑張ることとした

第４５話

「きっ君何してるの？」

「まあ、必殺技の練習ってところかねえ」

「必殺技なんてあるんだ」

「ああ、ただ今練習中だけどな」

「ふーん」

そう言うと近づいて来る

「どうした？」

「構ってくれないの？」

「えぇ……」

ホントいきなり何を言い出すんだこの人は

「彼女のこと構ってくれないの？」

「これ習得したいなって」

確かにアカネも大切だけど……本番までに間に合わないとかそれは流石にあっちゃならねえ

「急いでるけど何かあるの？」

「ああそうだな、武闘大会に出場しようかと」

「は？」

「えっいや……どうしたん？」

突然何？マジで何かあんのか武闘大会……？

「参加するの？」

「ああ、そうだが」

「私達盗賊だよ？」

「まあそうだな」

そんなことは百も承知だ

だが出ることに決めたのだ

「無理はしないでね」

「意外だな」

「うん？何が？」

「アカネはむしろ応援してくれると思ったが」

「それで怪我とかしても馬鹿じゃんってね」

「馬鹿ってな……」

「そもそも優勝は無理でしょ」

「……まあそれは分かる……ただ力試しとかも兼ねたいし」

「それは否定しないけどさ」

「出ない方が良かったとか？」

「そこまでは言わないよ、きっ君の自由だし」

「……」

「毎日やってるでしょ」

「ああ」

「偶には休まなきゃダメだよ」

「間に合うかどうか不安なんだが……」

「煮詰まってるだろうし、少しは気分転換もね」

「……それじゃデートします？」

「いや、ダンジョン行こうかなって」

「え？気分転換って？」

「きっ君どうせそれしかして無いでしょ、普段の技も思い出しながらねと」

「構わねえけど……他メンツいるのか？」

「実は先輩に誘われてるんだよねえ」

「……別に俺が構う必要あったのそれ？」

「……道連れが欲しくて」

「……分かりました」

結局デートじゃ無いのが悲しいような……
と言うかなんと言えばいいのか分からんくなった
ただ先輩だらけで活躍する場面なさそうだな

――――――――――――――――――――――――――――――

「キル夫、久々やなあ」

「八神先輩、お久しぶりです」

八神先輩にはお願いしていたが……何というかオルガ先輩のおかげで大体分かってしまったから被害者……？みたいなものだ

「キル夫？貴方もいるの？」

「シノン先輩？」

「ええ、アカネに誘われたのだけど」

「……？」

正直アカネに仲良い人がいるの予想外だったんだがいやそりゃいるよな……何言ってんだろ俺

「キル夫ー、今日もやるぞー!!」

「マサムネ先輩……今日はダンジョンですから……」

「だが、今日こそはお前に勝たないと……」

「仲間割れは勘弁なんでまた今度で」

「ぐぬぬぬぬ……」

なんだかんだで豪華なメンバーだ……そしてまた女性陣多くね？まあ元は俺が行く気ないから女子会に近い何かだったんだろうけど

「道連れが多い方がいいって思って正解だったわ」

「ふざけるなよ」

「でも手伝ってくれるって言ったじゃん……」

「こんな地獄になるってなら来なかったんだがな……」

「いいじゃんいいじゃん」

いつも通り中嶋君を道連れにしました！

悔いはないです！

「しかしこれだけの豪華メンツでどこ行くのだ？」

「古城でも行くか？」

「ただあそこって悪霊とかアンデットみたいなのだらけじゃなかったか？」

「別に問題ないでしょ」

「神官は俺様しか居ないはずだが？」

「頑張ってやー」

「……」

1人の反対をスルーして古城へと行くことになった

―――――――――――――――――――――――――――――――

「本当にゴースト多いなここ」

「戦いづらいわね」

シノン先輩が特に戦い辛そうにしている……八神先輩は魔法を使っているが他は聖水を駆使している
アンデットは逆にシノン先輩がメインだが手応えがイマイチでもある

「（こいつらに即死は微妙だよな……）」

必殺技は流石に使える状況ではないだろう聖水を投げたりステゴロしたりしている

「しっかしキル夫、本当によく殴りかかれるなあ」

「まあ、特に気にしてないんで……」

「マサムネも気にしてないぞ！」

「マサムネは流石に汚れとか気を付けた方がええと思うんやけど」

「大丈夫だ！」

「そうか……」

八神先輩は唖然としてるわ……
いやまあ分かるけど

「マサムネ先輩……」

「どうしたキル夫？」

「大丈夫っすか？」

「ああ、まだいける」

「ならいいですが……だいぶ殴られるようですが」

「いつものことだ！」

「逆にいいんですかそれ？」

「そうは言ってもマサムネは殴られてから始まりだしな」

「え？」

　この子カウンターとかしてるイメージないんだが……さっきからアンデットに殴られてる気しか……

「大丈夫やで、マサムネは強いから」

「強い……？」

何処が？と思うものがある
だっていつも戦ってる時とかあっさりやられてるし……

「いい加減にしろよお前ら……」

マサムネが怒り始めた……何が起きるんだ？
湯気が出てる……

「マサムネはキレたぞ!!」

怒りのままに刀を振るう
え？アンデット一刀両断したんだけど？

「マサムネはなあ、受けたダメージを一撃に返すんや」

「それ……もしかして俺もヤバかったですか……？」

「アンタ、マサムネとどういう風に戦ってたんや？」

「そりゃ……いなすように……？」

「それなら大丈夫だと思うで？」

「あっそうなんです？」

「あくまでダメージ与えてないんやろ？」

「まあそうっすね」

「本当にキル夫は優しい奴やなあ」

「そうですかね？」

「ってお前らー戦えー！」

マサムネ先輩に怒られてしまった戦うとしよう
ゆっくりとだが古城の奥へと進んでいった

ーーー

コミュ　1d5：2　中嶋正義

「……何のようだ？」

「機嫌悪いのか？」

「散々使い回されて疲れている、放っておいてくれ」

「そりゃそうだな……悪かった」

「……なあ」

「ん？放っておけじゃないのか？」

「気になった事がある」

「どうした？」

「貴様……どうしたのだ？」

「え？どうしたって何が？」

「いつものように、お茶らけた態度は変わらんようだが、疲れているように見える」

「そりゃ……前線で戦ってたしな」

「そうではない」

「え？違うのか？」

「根から疲れているように見える」

「……どういう事だ？」

「そのままの意味だ、最近何かにハマっていたりして夜更かしなどをしているのか？」

「そんな記憶はないけど」

「だったら休め、このままだと倒れるぞ？」

「それ、ダンジョン中に言う？」

「忘れた風に装っているが、そもそも貴様が俺様を誘ったのだからな？」

「まあ……そうだが……」

もしかしてだが……毎日の必殺技の練習が体にきてる？

正直……長時間やりすぎてる気はする……本当にアカネ先輩の言ってた通りなのかもな……

「俺様が言えるのはこれだけだ」

「ああ、言われた通り休憩も考えるとするよ」

ただ……本当にさ

「いい奴だな中嶋」

「いい加減にしろよ貴様？」

「だって本当じゃん」

「……っち」

「文句言うなって」

「お人好しはどちらの方だ？」

「は？」

「なんでもない、忘れてくれ」

「いや、忘れる気はねえよ？」

「貴様……」

「どう言う意味でお人好しなんだ？」

「……言う気はない」

「いいじゃん」

「さっさと行け」

「はーい」

諦めて皆の場所へととぼとぼ帰っていった

…

「アイツは本当に面倒だ……」

だが悪い奴ではない……それを理解してしまっているからこそ面倒だ

「そしてとんでもない馬鹿だ」

馬鹿で正直で……そしてお人好しだ
中間試験の時もそうだけど、何も知らない癖に悪人面とも言えるこの顔の俺を信じようとしたし、お陰で生きれたのもある

「本当になんなんだアイツは……」

理解は出来ないが……いや正直アイツを理解したくはなかった

――――――――――――――――――――――――――――――

1d4：2　シノン

「……何？」

「いや、シノン先輩もお疲れ様です」

「前衛の貴方達よりは疲れてないと思うけど」

「それでも、銃をずっと構えてるのは集中力だいぶ使うと思うんですが」

「慣れてるもの」

「慣れてるのは分かるが……それでも相手が……」

「ああ、霊体だらけだったものね」

「そうっすね……集中して撃った弾が……って」

「確かに辛いものはあるけど」

「けど？」

「ガンナーがそれでへこたれちゃダメでしょ」

「強いですね」

「強いとか弱いとかじゃなくてそうしなきゃ生き残れないだけ」

「強いですよ間違いなく、仲間のために戦える人は」

少なくとも俺はお宝のために頑張っているがこの人は仲間のために戦ってるし

「キル夫、アンタが言うの？」

「うん？」

「間違いなく仲間のために戦ってるのは貴方でしょ」

「え？」

「え？ってまさか戦闘に自信ないから仲間にためになってないとかは言い出さないでしょ？」

「それは言い出しませんが他のメンバー皆強いんですもん」

「……少なくとも私も貴方に助けられてるからね？」

「あの時はお互い様な気はしますけどね」

海底洞窟の件だろうけど、あの時助けたのは本当にお互い様だろうと

「互いに有難いと思ってるなら、相殺じゃなくてまたお互いに助け合うって思えばいいのよ」

「そうですね」

その方が俺も気分がいいし特に考えなくていいだろう

「キル夫」

「で、どうしましたシノン先ｐ　……」

言い切る前に渡される
ってこれシノン先輩の銃じゃねえか!?なんでだよ!?

「ちょまっ」

「落とさないでね」

「それは分かりましたが」

「前よりも持てるようになってるわね」

「そりゃ……流石に……」

「折角だからメンテナンスしてみる？」

「え？」

メンテナンス？いやマジで？

「出来ないっすよ？」

「慣れって言うし」

「いや壊したりしたら……」

「あらゆる武器を知ってメンテナンスとか出来るようになると楽になるわよ」

「そりゃそうだとは思いますが……」

ただまあ、それはダメだわ

「今はダンジョン中ですので」

「そうね」

「壊すと流石に不味いんで次回で」

「よく考えたらそうね、また今度にしましょうか」

また今度にする理由も分からないが……とりあえず言えることは……

シノン先輩は予想以上にポンコツっぽい

――――――――――――――――――――――――――――――

「休んどるかー？」

「八神先輩、どうしました？」

「いや、キル夫に用があってな」

「なんの用でしょう？」

「アカネちゃんと何かあったん？」

「まあ、あったにはありましたが……」

　流石にここで恋人になりましたーとかは言い出さんでいいだろう……そこは秘密ってわけではないけど言わないでおく

「まあ大体察したけどそこはええわ」

「ええのはいいですが……他に何か用で？」

「ああ、そやそや忘れとった」

「なんでしょう？」

「キル夫の魔術はいいんやけど……最近何をしているん？」

「何をって？」

「なんか中庭で魔術とは違う何かしてるけど……魔拳って奴かいな？」

「魔拳とは違うんですが……」

「うん？まさかこれも秘密ってことなん？」

「いや……そうでは無いですけど」

「ほうほう」

「必殺技っていうと分かります？」

「必殺技？キル夫そういうもんに憧れてんのかいな？」

「悪いですか？」

「いや悪くあらへんね、むしろロマンとか良いものやと思うで」

「やっぱ分かります？」

「分かるで」

「よっしゃ！」

アカネに聞いてもどうでも良さそうだし……
挙げ句の果てにカズマも分かってくれねえし……ロマン派少ないんだよな

「じゃあわたしが見ればええんか？」

「分かるなら有難いですが」

「何言ってん？私は魔術師やで？」

「それはそうですが……」

でも盗賊コースで教わったし魔術師でやらないって言ってたしどうなんだろうか？
とは思っている

「何もやらんよりはマシやろ？」

「そうですね、ではお願いします」

中嶋にはやめとけって言われたけど……師匠がいる今は普段やるよりもマシになると思うんで
少しでも早くモノにできるといいんだがな……
拳を上げて構え始めた

――――――――――――――――――――――――――――――

続

第45話②

「そもそもどう言う原理なんや？」

「腕に魔力を込めて……そのまま殴るみたいな……？」

「なんで曖昧なんや……」

「いや、感覚でやってるわけじゃねえけどそんな感じなんです」

「魔拳みたいなもんかいな……？」

「長谷川先生は少し違うと言ってましたが……」

「まあそう言われただけじゃ分からんわ……やってみ？」

「了解っす」

魔力を込めて拳に宿す、練習で出来てるのかもしれねえけど……ただ人体に試せるわけじゃねえから不安なんだよな

「あー、そう言うもんかー」

「このまま、ぶち込みます」

岩へと直撃させる、当然岩に穴が空く

人間に直接打てないだろうな……ただ鎧相手だと本当にどうなんだろうなこれ……

「キル夫はどっちがしたいん？」

「どっちってなんですか？」

「そのまんまの意味や、正直どっちもかもしれんけどな」

「ふむ……」

「威力上げたいのと、調整したいのどっちがしたいん？」

「その2択でしたか……おっしゃる通り両方ではあるんですが……」

ただ……今の状況がどれだけか分からない以上どうしようもない……いや高火力なのは分かるけどさ

「威力分からないっぽいけど、それは後で長谷川先生を頼るとええと思うで」

「マジっすか……？」

大丈夫なのか？と不安になる流石に長谷川先生不味くないかと思うんだが……あの

アーマーあれば大丈夫か……？

「一先ずは私が教えといた方が良いって思ったもんもあるしなあ」

「なんでしょうか？」

「収縮と霧散や」

「収縮……」

文字通りなら縮まらせることだが……言い方的に魔力をだろう……
霧散は逆に飛ばすのか……？なんで？

「どうした？」

「収縮はともかく霧散ってなんででしょうか？」

「あー、そっからなん？」

「いや、理論は予想付くんですが……」

「なんで霧散させるかってことか？」

「そうですそれです」

「理由は簡単や、威力調整を始め予め仕込んでおくにもなるからな」

「仕込みですか？」

「魔力を周囲に飛ばしておいて一気に収縮させるんや」

「あれ？収縮ってそう言う使い方なんですか？」

「いや、空気中に含まれてる魔力を吸収するんやけど……そんなもん多少やしな、どうせ

縮めてピンポイント狙いとかも使うとはいえ、どっちかと言うと散らしたのを吸う掃除機みたいな感じや」

「先に散らしておくって感じですか？」

「それもありやし再利用とかも出来るしなあ」

聞く限りだと便利にも思える

特にどっちの技も本来の魔術としても使えそうだし霧散は罠関連にも使えそうだ

「ただ問題は……覚えられるかどうかなんですが……」

「心配しなくてもこれは詠唱やから、才能とかは必要ないで」

「詠唱っても覚えられはすると思うが……」

「2，3節のやし覚えられると思うで」

「2，3節っすか……」

流石にそれじゃ敵にバレる……とか言う話以前に間に合わなくね？収縮したい時とか

「使えなくないですか？」

「え？どして？」

「フレーズ刻んでる時間ないっすし……」

「ん？キル夫魔術師コース来てるんよな？」

「あまり頻繁にじゃないですが言ってますね」

「高速詠唱習って出来ないん？」

「習ってないですが……」

「それじゃあそっからかあ……どんだけ才能があるかやなあ……」

「滑舌いいとかの話じゃないんすよね？」

「勿論、一先ず覚えるしかないな」

「厳しそう……」

それでもどれだけやれるかだが

１ｄ１００：ＥＲＲＯＲ

「心配あらへん」

「何がでしょうか？」

「完璧の出来るようになるまでずっとやるから」

多分人生の中でも八神先輩に一番恐怖したのはこの時だと思う

――――――――――――――――――――――――――――――

無理やり詰め込むに詰め込まれて高速詠唱を出来る様になったのは良いんだが……

「ダンジョンどうするんです？」

「あっ確かにこのままともいかへんな」

そりゃそうだ、ステージもステージだしだからはじめ今回やる気ほぼ無かったんだし

「ただ、中途半端で終わらすのもなとはな？」

「一応高速詠唱出来る様になったんで自己練しますよ」

「ここでやるのは……？」

「霊体とアンデットだけっすよ!?通用しないでしょうよ」

「それもそか、残念やな」

「そもそも精神力が限界なんですけどね……」

「魔力使い過ぎたか……大丈夫なん？」

「いや、正直な話するとかなりキツイですけど」

「ただ、ダンジョンじゃ油断が命取りやで？」

「だから気力振り絞って行きますよ……」

「他のメンツだいぶ待たせてしもうたな……」

高速詠唱を完璧までやらされたらそうなるわ……中嶋とか帰ってないだろうな？

「おいキル夫！」

痺れを切らしたのか、ひと段落ついたのに気付いたのかマサムネ先輩がやって来た

「マサムネ先輩……今は無理っすよ……？」

「何故だ!?マサムネはだいぶ待たされたぞ!!」

「体力限界っすから、決闘したらぶっ倒れる」

「なるほど、なら今日こそはマサムネの勝ちだ！」

「ちょおまっ、マジかよ」

疲労している自分に向かって刀を携えて飛びかかって来る
……あっこれダメだ……流石にスパルタ過ぎたせいで動けねえ

「ぎゃふ……」

「やった、マサムネの勝ちだぞ!!」

それで良いのかよ先輩さん……
倒れたままそう思う

「ちょっとマサムネ!?」

「おうはやて！マサムネは勝ったぞ!!」

「キル夫起き上がれへんのだけどどうするん？」

「マサムネが強かったって証拠だな！」

「……キレるで？」

「だって……だってキル夫が戦ってくれなかったんだもん」

「ダンジョン中って言ったやろ」

「普段だって素っ気無いんだぞ！」

「いや……キル夫倒れて攻略どうするんって話や」

「中嶋に治療してもらって頑張る」

「正解の一つでもあるけど……」

「やった！」

「マサムネ、将来上司とかになっちゃあかん奴やな……」

「何故だあああああああ!?」

ダンジョン内に叫び声が響きわたる

と言うか……察しろよ先輩……

――――――――――――――――――――――――――――――

「何をやっている馬鹿が」

「中嶋、助かった……」

「今はダンジョン中なのを理解しろ」

「はい……」

気絶から立ち直って早々に中嶋に叱られる

まあ……そりゃそうだわな

「貴様には休めと言ったはずなんだがな……」

「いやでも男にはやらねばならない時が……」

「……」

無言でこちらを睨んでくる、はいごめんなさい

「モノに出来たのか？」

「え？」

「モノに出来たのかと聞いている」

「掴み方は出来た……まだ練習は完全じゃないから徐々にだろうけど」

「そうか」

それだけ言って準備し始める

本気で心配してくれたのかなこれは……成果は彼が望んだほどは出せてない気がするけど……

「ごめんなさい……お母さん」

「執行するか……」

「ごめんなぐべっ」

ルールブックの角で殴られた……凄い痛い

「反省しろ……」

「でもマジで母みたいに優しいじゃん」

「もう一発行くか？」

「たすてけ……」

「早く行くぞ」

「はい」

そのままダンジョン攻略へと再開する

最初の頃は多少はまだふらつきはしたが、すぐに戻って無事に戦える

「魔力回復系のアイテム分けてもらえて良かった」

「むしろなんで用意してないん？」

「いや……普段は魔力使うケースが少ないので」

「回復って呼びも込めてるし持たんとアカンやろ？」

「仰る通りです……」

次からは準備しよう……大概俺の場合は飲む前に魔力切れで手遅れになるんだけどさ

「ストップ」

「ん？」

なんだなんだ？アカネ先輩に制止されたが……
見てみると分かれ道か……

「で？どうすんや？」

「通話は出来なくはないけど……」

「きっ君はどうしたい？」

「どうしたい……か」

前なら分かれてとか言ってた気がするが……
今回は何より中嶋しか回復役もいなければ特殊な敵に加え後衛が多めだ
分かれるのは危険過ぎるかな

「分かれない方が良いと思います」

「なんでか聞いて良い？」

「回復役と前衛の不足ですね」

「本当にきっ君が誘ってこなかったら回復役０ってどう言う事だったんだろうね……」

「まあええやんけ！」

「いやはやて先輩……私達強制されたんですからね？」

「はーい反省しとるでー」

絶対してない気がする……

「とにかく右か左か……」

「んなこと一々気にしないでいいだろう！行くぞー！」

「ちょっとマサムネ!?」

マサムネ先輩が駆け出し皆で追い掛ける
方角が決まってしまったが……何もなきゃいいんだけどな……

「そう思っていたが……」

目の前には豪華な扉か……どうすんだこれ
正直回れ右したいんだが……他のメンツギラついて……いや中嶋とアカネは別か……
入るしか無いんだろうなあ……

「行くでー」

「おー」

不安に思いながらも後について行った

――――――――――――――――――――――――――――

ドアを開けると玉座のような場所があった
ほらもういつもと違うじゃん……いやまあ古城と言っても城だからそう言う場所もあってもおかしく無いけどさ

「誰もいなきゃ良かったんだが……」

明らかに玉座に誰か座ってますねえ、勘弁してくれ

「ふむ、客か？」

人間とは思えない存在がそこに鎮座している
蝙蝠のような羽……まさか……

「そうじゃ、お主の思ってる通りの存在である」

「!?」

「どうした、何を驚いている?」

いきなり語りかけて来た事に加えてその内容に戸惑う

「どうしたの?きっ君」

「いや目の前の少女が……」

「少女では無い、それくらいは予想付くだろう?」

少女じゃ無い……見た通りの長命種か……しかもさっきの言葉として吸血鬼がこの古城にいるのか……

「して、お主達は余の城に何のようじゃ？」

「廃墟と聞いてたんやけどな？」

「ダンジョンな以上ダンジョンマスターがいるのは当然じゃろう？」

「ダンジョンマスター……？」

「なんで勉強してないのさきっ君」

「いや……今まで会った事ない気がして……」

もしかしてあのグラビモスって奴がダンジョンマスターだった？

「そうかそうか、光栄に思うがいいダンジョンマスターは毎回見れるわけではないからな」

「ははあ」

「余はロザリンド、このダンジョンのダンジョンマスターをしている」

本能が察している……これと戦っちゃダメだと
まさか程度には思っているが何らかの理由でこちらの行動を予測出来ていると思っているし

「安心せい、今の余は気分がいい。何も無ければ帰してやろう」

「ありがとうございます」

「え、いや戦わないのか？」

「マサムネ先輩……多分無理っす」

「いや……やって見なければ」

「ならば少し遊んでやろう」

そう言うとマサムネ先輩が宙へと浮かび放り投げられた

「うわあああああ」

「まっマサムネ先輩いいいいい!?」

「そこの強面に感謝すると良い、そ奴がいなければトドメを刺していただろうしな」

「……」

「怖いか?」

「そりゃ……人は見かけに寄らずとは言いますが……いつもは明らかにボスの様なモンスターは一回りも二回りも大きかったので……」

「ただの少女の様なものが自分よりも違い過ぎて驚いていると」

「……はい」

「恐怖を知るものこそ長生き出来る、いい事だと思うぞ」

「そうですか……」

「ところで……お主らは……ふむただのダンジョン探索か」

「そうや、古城に吸血鬼が住んでるのは聞いてなかったけどな」

「そもそもダンジョンの造形は気まぐれで変わる、辿り着けさえしなければ知ることもないしのぅ」

「帰りましょうか……」

マサムネ先輩を介抱して起こす
と言うか吹き飛ばされてもピンピンしてたわ……

「そこの……キル夫」

「俺ですか？」

何故名前を……いや……やっぱなんかで知っているのか

「その通りじゃな、詮索は不要じゃ」

「なんでしょうか？」

「面白そうな宿命をしていそうじゃなと」

「面白そうって……」

人で楽しまないでもらいたいが……

「確かに因果から解放してやる事もできるが、それは今やったところでつまらんか……」

「何のことです？」

「〝今の〟お主が気にする必要はない」

「はあ……」

勿体ぶる様な言い方をすれば流石に気になるんだが……

「ただ……そのまま返しても面白くないか」

「結局面白がるんですね……」

「これを持っていけ」

「なんですかこれ……」

黒いスカーフ?本当にこれはなんなんだ?

「どうやら盗賊の様だしな、なのに余のダンジョンを荒らさなかった事への褒美じゃ」

「バトラースーツにスカーフですか?」

ただ幸いなのは色が同じことかもしれねえな……ピンクとかだったらマジで困ったし

「文句があるか?ピンク色を用意してこよう」

「いやぁ素晴らしいスカーフだなぁ!!最高だなぁ!!!」

最高!!うん最高だ!!
慌ててスカーフを着ける、そうすると体が軽くなった感じがする
「そうか、気に入ったと言うならば今回は我慢してやろう」
助かった、本当に
「体が軽くなったんですが、そう言う効果で?」
「ああ、素早さが上がる、盗賊にはいい効果じゃろう?」
「そうですね」
「それと、それを持っていればダンジョンに入って来た時余が理解出来る」
「……それは何の意味がおありで?」

気に入ったとかなら知らんが会ったばかりだぞ?

「何、余の力が必要になってそのうちお主が来ると思っているのでな」

「そうなんですか?」

「そのまま立ち向かう気ならそれはそれで構わん、楽しませてもらおう」

「助けてください……」

「何を?どうやって?」

「……」

遊ばれてる気はするんだが……現状何がどう問題なのかが分かっていない、それが分からないと助けてくれないってわけか

「どうしてもダンジョンの中は娯楽が少ないからな、せいぜいお主で楽しませてもらおう」

「分かりました……」

結局玩具扱いされてるってことは分かった

ただ……将来的に俺が助けを必要だと言うなら……無碍にできないしなあ

「それじゃあ帰ろうか」

アカネが遮って帰ろうとする

それを見て吸血鬼は面白そうな顔をする

「なるほど、そう言う関係だったか、済まないな水をさして」

「うっさい」

「別に取る気はない、安心しろ少女よ」

「うっさいってば」

「え？ホンマなん？」

八神先輩が驚いているが無視だ無視

一先ず今日はずっとご機嫌な気もするけど不機嫌になる前に帰るぞ

「それじゃ、これで」

「気を付けてな、帰り道の手助けなどはせんからな」

「それは構いません……ですが」

「うん？」

「助けて欲しい未来の時、その時はお願いします」

「本当に信じるとはな、お笑いものじゃ」

俺が頼むと笑い出す、それでも本気でお願いする

「失いたくないものだらけですから」

「その時が来ればな、待っているとしよう」

こうして俺達は古城を出た、全滅もあり得ただろうに……正直助かったと思うただそれと同時に不安に思う気持ちも強かった

これから俺に何が起きるんだ?と

――――――――――――――――――――――――――――――――

第４６話

「やあ、キル夫君大会の準備かい？」

「本当にいつも唐突ですよねオールマイト先生」

「そうかな？私は分かりやすいと思うけど」

「いや……見つけられるとかそう言う話じゃないです……」

流石にオールマイト先生の見た目で見つけられないのはヤバいだろって話だし言いたいのはそう言うことじゃない

「なんだかんだいつも絡んでくるなとは思ってますがね」

「そりゃ戦ってないし、気になってるからね」

「俺がオールマイト先生と戦うの無理ですって……」

「そうは言っても逃げてばかりじゃダメだよ」

「そうですか……？」

「だって大会は私も出るしね！」

「え？教師じゃ……」

「そもそも参加者は生徒だけなんて言ってないし外部からも来るしね」

「そう聞いてましたね確かに……」

「だから、試しておくって意味でも良いんじゃないかな！」

「分からなくは無いですが……」

対決するかは運だが……少なくともオールマイト先生は実力があるし勝ち上がることが出来たのならばいずれは当たるだろう

……そもそもそこまで勝てる気はしないが

「やるだけやって見るって事でどうだい？」

「……分かりました」

正直勝てないのは分かってるが動きとか見なきゃダメだよな……

活かせるとは思わねえけど……多少は覚えなきゃ今後もやっていけないか

「え？いいのかい!?断られると思ったんだけどね」

「大会で何も知らぬままボコられるのも勘弁ですからね……」

「いい心がけだね、さて……やろうか」

こうして対決が始まった……何秒持つかねえ……

――――――――――――――――――――――――――――――――

勝負は圧倒的だった

力どころかスピードすらも負けてんのかやっぱ……素手で拳を振るってくるのに武器で殴ってもびくともしねえしな……

「そりゃそうだけどあんまりすぎねえ？」

「これでもまだ本気じゃ無いんだけどね」

「……マ？」

「マだよ」

「タイム」

「勝負中にタイムなんて無いよ」

よく考えたら一方的とは言えまだ意識がある時点で手加減されているか尚更俺の手を見せずに何処までやれるかどうかってとこか

「流石にこれどうしようもねえな……」

このままジリ貧ってか相手のことを分からずじまいで終わりそうだ……同等とは言わないが圧倒的過ぎると勉強にならないとか聞いたことがあったが身を持って知ることになるとはな……

「まあこうなったら……」

呆気なく負けますかと、本戦でも絶望しながらいくら手を隠して置けるかと言うことで

「さて、ではこいつはどうかな」

見せるレベルで思い切り拳を振り上げてくる

パンチが来るが……痛いのは嫌だがこれでＫＯかねえ……

「それじゃつまらないでしょ」

「は？」

その言葉と共に俺の前に乱入者が入る

そうして一撃を受け止める

「今は決闘中なんだけどね」

「いやいや、ただのイジメじゃん、面白く無いよ」

「折原先輩……？」

本当に予想外の人物に助けられて困惑する
マジでなんなんだ？ってレベルで戸惑っている

「だってさ、面白そうな試合してんなって見てたら一方的過ぎたし、先生も調子乗りすぎてて面白く無いなと」

「大会も近いしちょっと本気でねって言うことでね」

「まあいいじゃんいいじゃん、２対１だってどうせ先生が勝つでしょ」

「まあそれもそうか、ただ君達連携取れるのかい？」

「そりゃあ、俺達仲良しですから」

「???」

すっごい嫌な予感がするんですが帰っていいっすか?ダメですかそうですか

「まあまあキル夫君」

「なんでしょう?」

「君は本気じゃなくていいからさ、彼のこと色々分かっときなよ」

「本気じゃなくていいって……」

「どうせ大会までに隠す気だったんだろう?」

「まあ……そうですね……」

正面切ったところで戦士と盗賊、自力には差がある
そのため如何に本番に小細工を残せるかだったが……

「ただ折原先輩も盗賊ですよね……？」

「ああ、そうだね」

「キツく無いですか？」

「そりゃ元々勝つ気ないし」

「……まあそうっすよね」

盗賊じゃ戦士に勝てない、それは流石に当たり前か……勝手に自惚れていたか？

「ただ、勝つためのキーと3年の強さってものを教えてあげるよ」

「なんでそんな……」

「そりゃ、弱い人間が踠いてどうにかしようとするのを見る方が楽しいしね」

折原先輩はナイフを取り出し構えた

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

一応言い訳をすると俺はただ見ているわけではない……

折原先輩に合わせて攻撃しようとしている

ただ２人とも早過ぎる

「いや……やっぱ手を抜いてたんだなとは……」

オールマイト先生がさっきよりも素早く行動している

正直目で追うのがやっとなレベルなんだが……

それ以上に早いのが折原先輩……盗賊なのは知ってるが本当に早いなおい……

「キル夫君」

「はっはい」

敵を一度弾いてこっちに来る、なんでそんな余裕あるんだよ……

「オールマイト先生の腹を狙うといい、そこに集中するといいよ」

「え？」

「それじゃ」

そう言うとまた突っ込んでいく、合わせて飛び込むが簡単に吹っ飛ばされる

「本当になんで折原君が武闘大会出ないのか不思議で仕方ないね」

「興味ないんで」

「残念だね、強いのに」

「そんなそんな、俺は速いだけですよ」

そう言いつつナイフにぶつけてオールマイと先生の拳を宙に浮かす……どっちもどっちでなんで無事なん?俺もナイフ使っても全く斬れないし

「今」

「っ!?はいっ!!」

折原先輩に言われて一瞬の隙をつく

ククリを思い切り腹へとぶつける

当然……ダメージが入ると思わないが……

「ぐっ」

「!?」

嘘だろ……?効いてる……さっきから武器ぶつけてもどこでも平気だったのに
それを誤魔化すかのようにすぐに態勢を戻してぶん投げられる
キル夫くんふっとばされた!

「まあ、もう一発」

いつ仕掛けたか分からない爆符がオールマイト先生の腹部で爆破する
爆薬とかも効きそうにないのだが……苦しそうにしている……なんなんだ一体?

「どうして執拗に狙ってくるかな……」

「そりゃ弱点を狙うもんでしょ」

「弱点……？」

「流石に弱点はあるけど、部位にはないはずだがね」

……だろうな、特にオールマイト先生は吸血鬼だし身体的な弱点は無さそうだが

「君とは戦った記憶はなかったが……そう言うスキルかね？」

「まあ、スキルと言うか経験に近いけど……そうだよ」

「おや、教えてしまってよかったのかね？」

「別に、俺は知ってるだけだし」

「知ってるって……」

「人間観察の一環みたいなもの、スキル的に言えば人体理解かな」

「人体理解……」

「だから、オールマイト先生が今日は腹が弱点と分かるわけ、そこを狙い続ければいい話だろう？」

「確かにそうかもしれませんが……」

なんで分かるのかって言いたいレベルなんだがな……本当にこの人の情報収集力はやべえ

「ところでなんで私は今日腹部が弱点なんだい……自分でもダメージ受けたから気付いたんだが……」

「大方ニンニクでも食べたからじゃないかな？正直そこら辺は俺興味ないけど」

「え?」

吸血鬼なのにニンニク食べるん?この先生

「ああ、キル夫君さ、この先生はニンニク食べて日光浴びて流水や十字架を好むような先生だから」

「はい?」

「弱点は克服してこそだろう?」

「いや……無理なんじゃ?」

「はっはっは、克服出来るまで続ければいつかは出来るさ」

「あっはい」

かなり無茶苦茶だ……ただそう言う姿勢は見習うべき……なのか？

「それじゃ、続けようか」

「え？」

今のタイミングって終わりってことだったんじゃ？

まだしんどいの続けるの……？

「キル夫君」

「折原先輩……任せきりになってしまって申し訳ありません」

「いやさ」

「？」

どうしたんだろう？なんだか様子がおかしいが

「さっき腹部が弱点言ったから気を付けてくるだろうし、絶望的だけど頑張ろうか」

「……」

弱点すらも対策されるとなるとすっごいしんどいなって思った

…

「もう終わりなのが残念だけど、続きは次回か大会でね」

「アリガトヤシター」

ぶっ倒れながら挨拶をする

結局どうしようもなかったのが辛い……

「キル夫君大丈夫かい？」

「折原先輩……だいぶしんどいっす……」

「だろうね、そう言う格好してるし」

「……」

と言うか……助けてマジで
多分助けてくれないんだろうけど

「まあいいや、これを渡しておくよ」

「なんです……これ？」

「ああ、これはさっきの戦いでのオールマイト先生の癖とか」

「掴めたんすか……？」

「それくらいはね、難しくないよ」

「凄いっすね……」

「君がオールマイト先生と当たるか分からないけど覚えとけばいいと思うよ？」

「いいんですかこれ？」

「どうせこれあってもいい試合になるとは思わないけど……マシにはなって欲しいしね」

「分かりました……」

「それじゃ、頑張りなよ」

「助けて……」

「そこまでは俺優しくないかな？」

そう言って倒れてる俺をスルーして訓練場から出て行った

――――――――――――――――――――――――――――――

「助かった……」

「いえ……正直倒れているのが予想外だったので……」

あの後気絶していたが……雪菜に助けられた

情けない姿を見せた感がある

「無茶しすぎじゃないですか？」

「いや……必要があるからな」

「武闘大会出るんですか？」

「ああ、出るが」

「凄いですね、先輩盗賊ですよね？」

「雪菜は出ないのか？」

「はい、1年で特に優れてるってわけではないので……3年には勝てませんし」

「でも勿体なくないか？」

「え？勿体ないですか……？」

「だって一年に一度だけなんだろ？祭りみたいに出るのもアリじゃねえか」

「そう考えるとアリですが……」

「折角なら一緒に出ようぜ？こう言うのはみんなで楽しんだもん勝ちだろ？」

「先輩は出て欲しいんですか……？」

「当然だろ！」

雪菜だって強いと個人的にゃ思うんだがな
と言うか……３年達に勝てないよりもどこまで自分が出来るかとかジャイアントキリング出来るかとかそう言ったもんが大事だと思うし

「分かりました、では私も出てみようかなって」

「おう、それがいいな」

「先輩もちゃんと応援してくださいよ？」

「当然だろ、応援するよ」

「……有難うございます」

「どうした？」

「いえ……なんでも……」

「じゃあ後で一緒に練習するか？」

「いいんですか？」

「むしろ雪菜のが強いだろうし、俺が教えられる側だろうけどさ」

「いえいえ、先輩の戦い方も間違いなく為になるので」

「へぇ、じゃあ互いに楽しみってところかねえ」

「はい！では今から」

「いや……俺さっき倒れてたよな？」

「あっすみません……」

「いや、また今度な……」

「急がないと大会始まるので早めにしましょうね」

「そりゃ当然だな」

「そういえば、誰か誘うんですか？」

「いや、他のメンツあまり増やす気なかったが……」

「2人っきりですか!?」

「いや……流石にあまり色んな人に手をバラしたくねえしな……」

「それはそうですが……私はいいんですか？」

「いいんですか？って言っても俺が誘ったわけだしむしろ手伝わねえの失礼だろ」

「それならいいんですけど……」

「決勝リーグで会おうぜってカッコ付けたいところだが自信ねえんだよな……」

「予想外ですね、自信あると思ってましたが……」

「いや自信はねえよ、諦める気はないがな」

「そう言うことですか」

「実力が無くてもゴリ押しでどうにかしてやるってな」

「本当に先輩って盗賊ってより戦士っぽいですよね」

「そうか？」

「いい意味でも悪い意味でも真っ直ぐですので」

「そうかねえ……」

「少なくとも私はそう思いますよ」

「悪い意味でも戦士ってのはどうなんだろうな……」

「だって考えられる人間なのに、盗賊でパワーが足りないのに……脳筋の所もありますし」

「……っすね」

確かに考えないといけないって所もゴリ押す所もあるしなあ……気を付けないとダメかもな……

ただそれを言われると、少し悲しくなる

「座学もした方がいいですかね？」

「勘弁してくれ……勉強は頭痛くなる」

「それが問題なのでは……？」

「嫌いなものは嫌いだもん……」

「だもんと言われましても……」

「とにかく……特訓な!!勉強は無しで!!」

なんだかんだここでもゴリ押した気がする……まあいいか

武闘大会までにオールマイト先生にどこまで近づけるか……これと必殺技を急がないとな……

決意はしたが……壁の高さに嫌になりそうだった

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

第47話

――――――――――――――――――――――――――――――

「聞いた感じだと、先輩のその技には似たようなものがありますが」

「マジで？魔術師のはやて先輩のところでは珍しそうにしてたが」

「そもそもが違うんでしょうね、私達は先輩のように魔力を込めるわけでは有りませんし」

「そうなのか？」

雪菜と共に特訓……もとい勉強会的なものをしている

まさか即するとは思わなかったがギリギリで練習しても間に合わなきゃアレだしな

……

「はい、私は響と呼んでいます」

「ゆら……響？」

「はい、私達の間ではそう呼ばれて、剣巫が使う技の一つです」

「マジかー……長谷川先生全然必殺技でもなんでもねえじゃねえか……」

「ただ使えるのは剣巫のような特定の者達に限られていますし、魔力を使う点では先輩の技の方がやりやすいと思います」

剣巫……？知らねえ単語だ……陸の言葉ってまだおいちゃん分かんねえんだわ

「呪力を込めて一撃を放つ、先輩のデスハンドの様な一撃性のある技です」

「呪力は確か聖気や魔力とは違うんだったよな？」

「はい、ただ誰でもと言うわけでも無く……確実に先輩は使えるわけがないので覚えなくても大丈夫です」

「いや……一緒に冒険とかする可能性ある以上覚えておいた方がいいだろうよ」

「それはそうですが……会得出来ませんよ?」

「まあそれは諦めるわ、俺戦士ばかり覚えて盗賊ダメでしたーじゃあんまりだしよ」

「それはそうですね……」

「で、だ……雪菜に見てもらって判断すりゃいいか?」

「直接打ち込んでみます?」

「いやいや……流石に危ないだろうよ」

「しかし試さないことには程度が分かりませんし……」

「長谷川先生に普段は人にうつなって言われたんだが……」

「大会で使う可能性ある以上は今は有事でしょうね」

「大丈夫なのか？」

「響や土雷など私の方も危険なものだらけなので……」

「雪菜も大変なんだな……」

「大概は上級生達に付き合ってもらってますが」

「やっぱ次元が……？」

「容易く捌かれるどころか平気で喰らって余裕な人たちも多いですしね……」

「しんどいなそれ……」

普通にデスハンド打ち込んでも大丈夫とか本気で上位学年達は魔境じゃねえか……

いや……それでも大会は出ることに意味があるんだろうけどさ

「互いに練習というか……雪菜は何するんだ？」

「主に基礎の振り返りです」

「いいのか……？それで」

「今更何か覚えたところで付け焼き刃ですし」

「……俺に対して言ってる？」

「いえ、先輩の場合は実際必要なものでしょうから」

「やっぱかー……」

「現状どれだけ長く生き残れるかでしょうし」

「……分かってるが、事実を言われると辛いよな」

「申し訳ありませんが今はもう流石に私が勝つでしょうし……」

「まあ……前回も頭脳で強情に勝ったわけだしな……」

落とし穴に互いに落ちてマウントを取った
相手のがガタイが良ければひっくり返されて負けてたろうしな

「ですので今回も知識で勝つしかないですね」

「難しい事を相変わらずなあ……」

「ですが、他にする方法がないので個人的な勝機を教えておきます？」

「出来るならありがてぇが……いいのか？」

敵に情報を与えていいのだろうかと思う

いや決勝リーグ行けなかったら悲しいとか思ってんのかもしれねえけどさ

「そもそも先輩は何をするつもりだったんです？」

「トラップだな、少なくとも予選はそうして決勝もどれだけ出来るか」

「……予選はいいと思います、ただ決勝では対策されるでしょうね」

「やっぱりそうなのか……」

「と言うよりも、予選で罠で暴れて決勝で通じるわけが無いです」

「……」

そう言われると確かにそうか……だが罠を予選で使わないと不安が残る

「流石にトラップと言うものは特に勝つためレベルの物ならば否が応でも目立ちます」

「サイレントトラップ……沙都子から教わってもそれはそれで目立つだろうしな……」

と言うか沙都子からもトラップ少し学んでおいた方がいいな……本当にやる事だらけか

「では何すればいいか分かりますか？」

「……ステゴロ？」

「ケンカ殺法の師匠である、富樫先輩ですら無理な事を実践しようとするのはやめてください」

「……対人用だよな？」

「いや富樫先輩インテリヤクザ系ですよ？」

「いやいやいやいや……あり得ねえって!?」

流石にそれはねえよ……富樫先輩から教わったのただの殴り合い的なものだらけだぞ？

「なんでそんな否定的なんですか……？」

「いや……そしたらもっと戦い方教えるんじゃ？」

「むしろ先輩の方が知識無いからでは……」

「……泣きたくなるなあ」

「それに先輩はあくまでサブスキルだから小細工をケンカ殺法でってより……純粋な殴り合いの仕方を教えたかったのでは？」

「……確かにまあ、そう言われるとそうだと言うか」

そう言う戦い方を教えてくれと言ったが……

純粋に殴り合い教えてくれてたわけか……通りで覚えやすかったわけだわ……

「あの人漢なら小細工無しでって言うタイプだと思ってたが……」

「少なくとも魔術だの罠だのが跋扈する中でそれは無いと思うけど……ただ正々堂々だとは思います」

「まあ手数が多いタイプだろうな……」

富樫先輩の意外さを知ったが、むざむざ無駄死にするタイプだとは思えないしな

「それに……メンタルお化けですからね」

「それは俺も理解しているが……何処から……」

「それは……っとすみません脱線し過ぎました」

「あ……」

そういや話脱線してたわ……いけねえいけねえ

「それで……ステゴロでは無いでいいんだな……？」

「はい、格上に勝つために必要なのは結局はセンパイの必殺技ですね」

「ただ……それが決まらない……って問題か」

「いえ、決める方法はあるんですよ」

「マジで!?」

正直驚いた……そんな裏技があるなんて……

「逆にそれの対策されるってことか……」

「いえ、オールマイト先生や私ならまだしもほとんどの人は初戦は油断するかと」

「強いなそれ……」

「元々優勝は厳しそうですからね……私もセンパイも」

「俺ができることで……」

雪菜の言い方的に俺だけが出来る技なんだろう……だからこそ油断するみたいな感じか……

届かないなら……

「届かないなら、道筋を作ってしまえばいい」

「では先輩、そうする方法は？」

「届く様にする……邪魔するものを取り除く」

「正解です、そんなこと考えてない人たちばかりでしょうし」

武器、防具……場合によっては部位破壊まで考慮か

そうして肉体へと届く様にする

「平行練習かねえ……」

「ですがセンパイ確かそう言った類の物は得意だったのでは？」

「そう言われるとそうだが実戦じゃまだ自信を持てねえな」

ナイフの補充もしておかなきゃならねえ、まあそれは難しく無いが……

「そして、先輩のデスハンドもまだまだ練習必要です」

「確かに調整覚えただけだしな……」

特に調整覚えたからこそ練習が必要なわけで……そこは気を付けねえと

「と言うわけで練習です」

「むしろ最近休んでたレベルだしな……やらないとまずいか」

「そうですね、頑張りましょう」

「雪菜もか？」

「流石に私は響では無いですよ……」

「そうなのか？」

「そもそも私はトラップ貼れないのでそんな余裕ないです」

「だったらトラップ教えるか？」

「いえ、私の場合自分で嵌るだけなので」

「そうか？」

「そもそも先輩こそそこまでトラップ過信して大丈夫なんです？慣れてるのでそこまで

心配はしてませんが」

「まあ俺は掛からねえしな」

「尚更私使えませんので……」

「だなあ……」

せめて自分はダメな時の予防線として盗賊の凄さを布教する作戦は失敗した
だからこそ自分が何処までやれるかだなこりゃ

――――――――――――――――――――――――――――

「先輩、もっと集中してくださいよ」

「分かっているが……」

凝縮させようと集中する……そして暴発するの繰り返しだ
組んでいる魔力が多過ぎるのか上手くいかずに苦戦する
逆に散らすのは楽だがそれはそれで集めにくい……やっぱり八神先輩の元で練習不足だったか？

「とにかく練習ですかね」

「スパルタ理論でうまくいく様には思わねえが……」

いや確定でダメとは言わねえけどそう言う練習ばかり1人でしてたしな……だから自信がねえ

「と言うか雪菜も基礎練って言ってた割だが苦労してそうだが大丈夫か？」

「何故でしょうね……スランプなんですかね……？」

「お互いスランプだったら困んぞおい」

本番前にダメでしたとか俺も望んじゃいねえし……

「少し休むか」

「……大丈夫なのですか？」

「いや……正直このまま焦っても多分どうしようもねえ」

「それはそうですが……」

「……ごめんな」

「謝られても困りますが……どうされました？」

「いや、俺が誘ったから焦ってんじゃねえかなと」

「少なくとも先輩のせいにする気はありませんよ」

「そりゃそう言うだろうけど……時間が無いのに先輩達と戦えみたいにさせちまったからよ」

「それは自分の未熟さが原因であって先輩は悪くありません」

「そうか……」

ならこれ以上言っても失礼か……他人に押し付けさせようとさせてるようだしな

「先輩は焦ってるんです？」

「焦ってはいるが……そもそも」

もっと根本的な問題がある可能性がある

「こう言った才能が無い可能性まであるからな……」

「それは無いと思いますが……」

「色々カバーして誤魔化してるところも時折あるし、否定はしきれねえ」

「だったら」

「うん？」

「そうだったら先輩はどうするんです？」

「どうするって……そりゃ変わらねえよ」

「それでも変わらないんですか……？」

「だから都合よく思い込む、やること変わらねえならその方がいいしよ」

「確かにそう言われるとそうですが……」

「雪菜にはねえとは思うけどよ、自分に才能がないと思ってもあると思い続けろ。その方がいいからよ」

「……そうですね、ただそれは馬鹿の考え方のような」

「いや……流石に馬鹿なことは自覚してるし」

「そうですか……」

「焦るのも分かるし出来ないのもあるけどよ、頑張りでどうにかしようぜ……」

「いや……今結局それで苦労してるんですよね……」

「……まあな」

「ならダメでは……？」

「……まっまあ重苦しい空気は無くなったしセーフということにしようぜ!!」

「……分かりました」

「苦痛に思ってても仕方ねえし楽しく気持ちで行こうぜ」

「えぇ……」

「いいんだよそれで！」

「根性論やスパルタより酷いですね……ある意味」

「勝ちゃ証明出来んだよ!!」

「私達勝ちも厳しいって言いましたよね!!」

「いいからやるぞ!!」

そう言って結局練習を再開した、本当にいいかなんてやってから決める!!

1d100…53

「少しはマシに……いえセンパイ変わってない気が……」

「難しいんだよ!!」

「だから先輩の方は考える必要あるんですってば」

「分かってるが……面倒」

「それで済むような事ではありませんよね?」

「……雪菜の方はどうだったんだよ!!」

「え？普通に問題ないですけど？」

「え？」

「言ってたように焦ってたようでしたので落ち着けば無事に出来ました、元より出来る事をやるでしたしね」

「……俺も出来る事を」

「勝てませんよ？」

「辛い」

「普段頭を使ってない分頑張ってください」

「ダンジョンじゃ使ってるし……」

「今使いましょう……」

「頑張りゅ……」

残念ながら地獄の練習が再開された
少しずつマシにはなってるが……間に合うよな？

――――――――――――――――――――――――――――――

「疲れた……」

いつも以上にやった気がする……最近休んでたし中嶋に怒られることはねえだろうけどさ……

「これやっても勝てねえってのは辛いよな……」

最初からお宝大好きだから、そういった道を行ったから仕方ねえのは分かる
ただ実力不足のせいで明確に勝てないってなるのは、ただ単純に辛いなと

「盗賊としてはアカネにも勝ってるとは言われたが……」

まあでもちょっと悔しい
1年上とはいえアカネにも戦闘劣ってるし……

「ただ強くはなれる……限度はあるが」

そもそもトレジャーハンターに戦力が必要かって言われると不明だが
あるならあった方がいいだろきっと

「まだ2年間あるけどさ……何処まで強くなれるかな」

少なくとも海賊時代よりも強くなれるようにならねえとただの道化だ

「3年で優勝出来るかってことが普通なんだろうけど……」

でも言われたからには活躍したい、長谷川先生に見込みありって言われた以上は予選落ちは嫌だし決勝リーグでも無様は嫌だな

「沙都子に上位トラップを教わる、破壊系をもっと練習する……必殺技もだ」

時間巻き戻せねえかなあ、ほら俺の魔術で数日くらいぱーっと

当然そんなこと出来ずにベッドに顔を埋める

「深く考えるのはやめるか、頭空っぽの方がきっと楽だしよ」

もっと考えろと言われたが、結局考えてない気がする

ただ単純で貪欲の方がきっとうまくいく、そんな気がした

第４８話

「キル夫さんに教えられることですか……？」

「ああ、正直手数不足なんだわ……なんか無いか？」

「なんか無いかと言われましても……」

沙都子に何かないかと聞いてみる
現状目立つ舞台に仕掛けられるトラップが俺には乏しい
石舞台だろうから落とし穴とかは作れないし

「痺れ罠とかは？」

「正直、見えているトラップを踏む奴なんて居ないだろう……」
「それを誘導するのが貴方のすべき事ではありませんこと？」
「無茶言うなって……」
格下がいるわけない大会でそんなこと出来るわけねえって……
「しかし難しいですわよ？」
「視認できないトラップとかねえのか？」
「仕掛けたところで結局そう言う相手には見つかりますわよ？」
「そう言われるとそうなんだが……」
「むしろキル夫さんが見落としてハマる可能性があります」

「俺はこれがあるから……」

「あのですねキル夫さん……」

沙都子に呆れられてる……え？俺悪いこと言った？

「それは持っていかない方がいいと思いますわ」

「え……なんで!?」

「それ学園に隠しているんでしょう……？」

「……」

そう言えばそうだった……いやそれでも気をつける気だったが……

「それに、貴重品ですし大会にはオススメしません」

「なんで……？」

「まず盗賊相手にするなら、道具を優先して狙うでしょうね」

「そう言われるとそうだが……」

「だから分かりやすいトラップの方がいいですの」

「助かる……」

何も聞かずに大会は不味かったかもしれないな……そう言う意味では有り難かった

「ですので、別の方法を考えた方がいいと思いますわ」

「沙都子、何か浮かぶか？」

「それは浮かびますが……」

「え？マジで!?」

「少なくとも浮かんだ感じではいいと思いましたが」

「どういったん……？」

「少しは自分で考えてみませんこと？」

「餅は餅屋って思ってるしこういうのは沙都子の領分だと思ったんだが……」

「だからといって何も考えないのは違うでしょう？」

「そう言われるとそうだな……すまん……」

そう言われてもどうするかだ……
無い頭を少し振り絞るが……

１ｄ１００＞３０　６３　失敗

トラップを目立ち易くする？それは違う
それじゃあ何も変わらない……
ならばトラップを隠す？これも違う
そもそも舞台でトラップを隠せる場所なんて存在しないだろう……場外したら意味ないし
小さいトラップを仕掛けまくる？ダメだな……
結局意味がなさそうだし……何より邪魔になりそうだ
だったら逆にトラップを仕掛けない……なんでだよ!?

「ダメだ……色々と浮かんだがどれも違う……」

「一応聞かせていただけますか？」

「トラップを目立たせるや逆に隠すを考えたがやっぱ違うなと」

「確かに、隠せる場所も無いでしょうね」

「増やすも減らすも違うだろ？」

「勿論……と言うか減らすってダメでしょう」

「……」

「分かりました、考えて浮かばないならしょうがありませんわね」

「へへっ教えてください沙都子様」

「蹴っ飛ばしていいのかしら？」

「申し訳ない」

「自分にだけ気付くようにすればいいと言うわけです」

「自分にだけ……？」

「偽装すればいいのです」

「偽装……？」

偽装する方法なんてあるか……？
正直それはそれで浮かばない

「なあ沙都子、偽装なんて出来るのか？」

「どうしました？」

「いや……大会中に偽装って結局それが目立つんじゃ？」

舞台の上に変なものが置いてあったら嫌でも目立つだろうしさ……

「ですので、違和感無いものにすればいいのですわ」

「違和感無いもの……？」

「そう、例えば」

「……」

「キル夫さん、普段からナイフを多めに持ち歩いてますわよね？」

「ああ、投げたりとかを始めて色んなものに使えるしな……投擲メインだが」

「ええ、そうすると床に散らばりますわよね？」

「ああ……そうだな」

「ナイフに偽装トラップを混ぜてしまいましょう」

「確かにそりや名案だが……」

「自分には分かり易くして、仕掛けてしまえば良いんです」

「それバレないか……？」

「キル夫さんは外した矢とか落ちてる武器を戦闘中に気にします？」

「しないな……」

「だから決まります、それに周りにも武器が落ちてるだけなので、普通のトラップも混ぜれば意外と後々にもバレないと思いますわよ」

「それで、一度きりと言うわけか……だがそれでも効果あるな」

「いえ……いっそトラップ投げてしまいません？」

「トラップを投げる!?」

「はい、投げたものがまさかトラップなんて思わないですわよね？」

「ああ……仕掛けると違って投げるものなんざねえし……」

「そうしたら……今投げたものもトラップかもしれない……そう思いますわよね？」

「確かにそうだな……」

「下手に弾けばどこか分からないところに飛ぶ」

「俺は分かるけど……どれか探しながら対処は出来ないと……」

「それにナイフに毒混ぜちゃいましょう」

「……下手に捌くことも受けることも出来なくなるってか」

「勿論区別が付いてしまったらどうしようもないですけど……流石にそれ出来る人間はかなり減るでしょう」

「そう言われるとそうだな……」

「後はナイフ以外にも混ぜると面白くなりそうですわ」

「エグいな……」

「トラップに関しては抜かるつもりはありませんので」

「流石沙都子だ……」

「基本は私が作るつもりですが……他の武器とかにも合わせたいですし……少し手伝って貰いますわね」

「当然」

俺のためのトラップだしそりゃ全く何もしないのは間違いだろう

一先ずは……完成品が輝いてくれりゃいいな

――――――――――――――――――――――――――――――――

沙都子の指示のもとにトラップを作るが苦戦する

なんで上手く行かねえんだ

「普段作ってませんの？」

「いや……作ってはいるんだが……ナイフの形にするのが難しい……」

「分からなくも無いですが……それでもやらねばならないでしょう……」

「後数日で本番なのに何やってんだろう感はあるけどさ」

「私だって唐突に言われましたのですけど……」

「ごめんなさい……」

「別に、知り合いが武道大会で活躍してくれた方がいいですし」

「……助かる」

「はい、１個目出来ましたわ」

「早くね!?」

「で、どうですの？」

「いや……むしろこれ手に馴染むレベルなんだが……」

「刃は付いていませんのでナイフとしては使えませんからね……？」

「まあ……それは仕方ねえか……」

むしろトラップなのにナイフとしても使えるって無理だしな……そこは分かってる

「基本的に何かにくっつくと罠として機能します」

「……なんだその利便性」

「普通のトラップですもの」

「え？じゃあマジで投げて弾いた物がトラップになるん？」

「なります」

「おっそろしいわこの子……」

「褒めても何も出ませんわよ」

実際トラップが完成してるし何も無いは無さそうだが……

「キル夫さん、何個くらい必要ですか？」

「１０個じゃ足りねえだろうし……」

「そんなにナイフ持ちますの？」

「普段はもっと持つしな、更に増やすとはいえ１戦１０個くらい使いたいしな……」

「私が作ると言うのに……」

「おっ俺も作るから……」

「期待しないで待ってますわね」

「畜生俺だって……」

1d100：21

「ゴミですか？」

「は？」

「これ使うんです……？」

「使うし……めっちゃ使うし!!」

「才能が無いのは分かりましたので別のことしていてください」

「……何すりゃいい？」

「試してください」

「それもそうか……んじゃコイツ渡しておくわ」

「いいんですか？」

「ああ、沙都子もこれありゃ事故減らせるだろ」

「分かりました」

沙都子に無線を渡してトラップに触れる

踏んだ拍子にかなりの痺れが来る
俺でもこれだけって……相当やばいんじゃ……迷彩してるくせにこれだけあんの……？

「どうですか？」

「正直やばいと思う」

「それはよかったです」

「出来るだけ作るように任せちまっていいのか？」

「構いませんが、こっちも試行錯誤を試すので色々になってしまう可能性がありますが構いませんか？」

「構わねえ、代金は後で払っておくな」

「了解しました、貰えるなら貰っておきますわ」

「流石に払わねえわけねえだろ……」

「それはそうですが」

金は多分……足りるよな？

「それでは集中したいので今日はこれで、大会までに間に合わせますので」

「ありがとうな沙都子」

「いえ、ただ決勝行くまでにやられると言う無様は晒さないように」

「いや、決勝じゃいいのかよ……」

「そもそもそっちでは勝てると思っていませんので」

「酷ない？」

「いや……盗賊のこと自覚してくださいませ……」

「分かってるけどよ……」

「その分、勝てる可能性をお手伝いするので頑張ってくださいませ」

「おう」

トラップがどれだけ輝いてくれるか……俺も信頼してるしこれやばいし……ナイフも補充して戦える準備かな

武器の確認をしながら考えることにした

――――――――――――――――――――――――――――――――

もうすぐ大会か……
遂に後数日になって緊張と共に不安が募ってきた
本来であれば試合までは休む気だったが……休んでいると心が潰れそうだ

「やっほー」

「アカネ？どうした？」

「いやきっ君メンタルヤバそうだから来たけど」

「なんで分かるんすか……エスパー？」

「いや、流石にきっ君とずっと一緒にいたしさ分かるよ」

「そうか……まあ予想通りメンタルがやばい」

「じゃあどっか出かける……？」

「それもいいんだけどどうすっかな……？」

「うん？嫌なの？」

「嫌ってより、なんか体動かしたのもある」

「あー、慣らしって言うか動いて無いと不安なんだ」

「それですね、デートはデートでアリなんだけど」

「どっちが良いの？」

「どっちもしたいがまあ無理だしなあ」

「それはそうだね、両方は無理だねえ」

「じゃあどっちが良いかなと」

「きっ君が決めるんだけどね」

「そっすねえ、穏やかにショッピングとかもいいっすしダンジョンアタックで宝箱探しもしたいからなあ」

「でも残念。決める必要があるんだよね」

「そうだな」

アカネと出かけられればどっちでも楽しいってのもある、ただどうするかと言うと……

1．アカネと一緒にデートに行く
2．皆でダンジョンに行く

1d2：2

「それじゃあダンジョンに行きましょうか」

「怪我するかもしれないけどいいの？」

「しないように気を付けるしダメだったら俺が無能なだけだから」

「そこまで言わないけど……デートじゃ無い理由は？」

「えっとそれは……」

「言いたく無いの？」

「いや……そのなんて言うか……」

非常に言い辛いが……と言うかなんか恥ずかしいし

「大会の前にデートとか……死亡フラグのように思えるので……」

「……っぷ」

「ちょっと笑わなくていいじゃ無いっすか!!」

「くくっ……だってきっ君そんな事気にする繊細な人間だと思わないじゃん」

「俺だって気にするんですよ!!」

「そっかそっかー」

「死にたくねえんすから、許してってな」

「まっきっ君に死んで欲しく無いし我慢しますか……ダンジョンの方が死にそうだけど」

「だっ大丈夫だしい……!!」

「それは分かったけど誰誘うの？」

「ああ、それは決まってる」

「それじゃ任せていい？」

「ああ」

「それじゃあまた後で」

「学園前に居てくださいね」

「了解」

…

「義勇、ちょっといいか？」

「どうしたキル夫？」

「一緒にダンジョン行かねえか？」

「２人が必要か？」

「そりゃみんながいいけど、義勇にも期待してんだからな？」

「他のメンバーは？」

「アカネ先輩と……後はカズマ誘う気だったがダメだった……」

「佐藤は何故だ？」

「入学式の時に組んでた6人だってなと思ってよ」

「なるほどな」

「義勇は大丈夫なのか？」

「何がだ……？」

「いや……武闘大会あるだろう？」

「興味ない」

「そうか……」

本当に他人と関わるイベントとかには消極的だな……依頼やダンジョンも他のメンツとは行ってないっぽいし

「じゃあ５人で行くか」

「おう、キル夫俺も混ぜてもらっていいか？」

「え？」

唐突な聴き慣れた声に驚く

「オルガ先輩……？」

「おう、ダメか？」

「いや……構いませんが三日月先輩は？」

「ミカは忙しいんで今回は俺だけになるがな」

「いいんですか？」

「流石にミカと１００％一緒にいるわけじゃねえよ」

「それはそうでしょうけど」

「俺は構わない」

「そりゃよかった、確か冨岡だっけか？」

「ああ」

「よろしくな」

「それじゃあ６人ですが……問題ねえかな？」

「流石に増やしすぎちゃどうにもならねえだろうしよ」

「それもそうですか」

「んでいつからだ？」

「大会も近いんで準備したらすぐ行こうと」

「了解だ」

皆一度解散して準備する

女性の準備は長いと聞いたが……姉さんもシノアさんも早くてよかった……アカネ待ってると不機嫌になりそうだし

「さて、どこ行くんだ？」

「病み村に行こうかと」

「懐かしいな……」

「油断しないように頑張っていきましょうか」

「応!」

病み村の攻略……あの頃よりは強いが……それでも油断せずに頑張っていかねえとな

荷物を再確認しながら、一歩踏み出した

――

第４９話

「懐かしいと思う気持ちもあるが……感慨にふけっている場合じゃねえな」

毒の沼地を避けながら病み村を潜る
こんなに多かったっけなと思いつつも避けれる量なのは安堵する

「だいぶ真面目じゃねえか」

「オルガ先輩？」

「前ここに来たペーペーの頃はニケに任せてプラプラだったしな」

「そんなですか？」

「ああ、お前は変わったよ」

「姉としても嬉しい限りだ！」

「……ああ」

アカネがサポートに回って自分が探索する
初めてではないが、広いダンジョンでするのは珍しい
まあ1年だけで測りきれないダンジョンに入ることは滅多にないんだが

「実際こう改まってみると盗賊の仕事って多いですよね」

「シノアさんとかも戦士として活躍してると思いますが……」

「いえ、実際のところ何も考えず鎌振ってるだけですし」

「いやいやいや……冒険者は考えてやらねえと務まらないでしょ……」

「嬢ちゃんはまだしも実際あまり考えてない奴はいるぜ？」

「マジですか……注意しねえと……いや先輩だと出来ないか……？」

マサムネ先輩は例外として……あの人は考えない方がうまくいくだろうし
他には……考えてなさそうな人はいるだろうけど……考えてなさそう止まりだろ

「ニケとか適当なこと考えてんぜ」

「盗賊うううううううう!?」

ちょっと何やってんすか……盗賊がそれじゃあダメでしょ!?

「アイツは天運とか勇者とかそんな感じのでやってるからな……」

「ひぇ……」

「アイツはそう言った感じですげえんだよ」

「……俺も参考にした方がいいのかな？」

「無理じゃねえの？」

「まあそうですよね……」

「お前はむしろ考えるからこそ強いんだろうよ」

「そうですかね……？」

「新条にも言われたんだろ？」

「考えろとは言われてますが……」

実際死なないようにとは言われているが……そりゃそうだよな……考えないと死に
に行くようなもんだしな

「俺も同じだ」

「何が……？」

義勇に同じって言われても分からないんだが……
と言うか……まあいいか

「勇君折角ですしもっと喋ったらどうです？」

「？」

「シノア……多分無理だ」

「もうそう言ってる場合でもないと思うんですけどねえ」

「勇君は改善しないか……」

「何年もそうですし難しいでしょうし……それに」

「それにって……？」

「貴女ですよ貴女、みっちゃん分かってます？」

「え……？何がだ……？」

「みっちゃんが最近キル夫さんばかり構っているせいで……勇君の方見ているの私だけなんですよ!?」

「……すまない」

「別にいいんですが……取っちゃいますよ？」

「何がだ……？」

「勇君、取っちゃいますよ？」

「？？？」

「ダメですねこれ……キル夫さん任せていいですか？」

「？？？」

え？姉さんの面倒みろって……

流石に自立出来るでしょ……貴族なんだし義勇みたいにコミュニケーション取れないわけじゃないし

「キル夫さんもですか……」

いやそんなこと言われても分かんねえし……

「と言うかだ……」

アカネの顔が怖い……マジで何が……？

「あのー……新条先輩？」

「きっ君はあげないよ？」

「そう言われましても……多分そうしないとみっちゃんが……」

「どちらにせよ、本人達にそんな気ないでしょ」

「えっと……」

「キル夫、偵察行ってこい」

「え？でもオルガ先輩必要なさそうって……」

「いいから行ってこい」

「はっはい!!」

慌てて俺は先行して行った

オルガ先輩は大丈夫そうとは言ってたし問題ない気はするんだけど気を付けなきゃならねえな……

――――――――――――――――――――――――――――――――

「異常は無さそうだが……」

先行した先で色々と調査する

まだまだ奥には行ってないが1人で行き過ぎても仕方ねえな……

「ただ……罠だけは死ぬ気で気を付けねえと」

そう言えばそのやらかしをしたのは病み村での事だったな……正直今でもミルドレットに勝てると思わねえし……

「もう半年は経ったのか……」

気付けば1年もあっという間なんだろうな……

確かに色々と濃かった1年だけどよ

「後輩を……考えるのはまだ早いな……」

まだ半年あるんだっての……色々と焦ってないか？

自分でそう思いながら……あっここ罠あるじゃねえか……慌てて解除する

「こっちは解除完りょ……」

無線で通話しようとして閉じる……そうか今回誰も会話できねえじゃん……油断してたわ

「一旦戻るか……」

としたがそう言えばオルガ先輩にゆっくり念入りにっては言われたか……

「いったいなんなんだろな……」

気にしなくていいってオルガ先輩は言ってたけど……何を気にしなくていいんだろうと

と言うかそもそも俺がいなくて義勇さん大丈夫なのかな……

信じるしかねえか

「んじゃどうすっかねえ」

1．もっと周辺を探索する
2．能力を使い宝探しに勤しむ
3．いっそ奥まで行く

1d3：2

「……誰もいないしちょうどいいか」

探索も大事だが一度見回ったしお宝発掘後に罠探知をして行こう

「流出領域……」

発掘禁止、ここは俺の採掘場だ
さてどんだけ出てくれたか

1d6—1：3

「悪くねえな……」

久々にお宝を発掘したって感じがする
火山じゃ全く見つけられなかったからなあ……

「開けるか……」

待つのも考えたが開けることにした……つーのも宝箱の罠とか怖いしな

「さてと……」

３ｄ１００：（４８、５６、７７）

ひとつだけ言えることはミミックの存在が頭から抜けていた、今回は出なくて良かったけど

「なんだこれ……」

武器は分かる……ただ弓だしシノン先輩も使わねえだろうからいいけど……
問題はこの粉と薬だ……分かんねえから持ち帰るか

「流石に飲むわけにはいかねえよなあ……」

同様に敵に飲ませるわけにもいかねえわ……
強化なんざされてプチっとされたらまずいし

「罠の探知だけして帰るか……」

そうして罠の探知をするが……

「……え?」

なんかすっごい増えてね……?

なんで……いや前もこんな感じで油断したから踏んだんだろうけど……多いなこれ

「オルガ先輩……マジで帰んの遅くなりそうだわ……」

地道な作業に嘆きながら罠を解除し始めた

その最中だが

「ん？アレは？」

何かを見つけた

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「オルガ先輩、なんできっ君行かせたんですかー？」

「いや……アイツ可哀想だろう色々と」

「しょうがないじゃん、このままじゃきっ君もっと可哀想になると思いますよ？」

「そうか？」

「多分きっ君将来だいぶ寄られると思うので」

「そんなにか……？」

「姉としては認めんぞ！」

「挙句の果てにこうですし」

「そうか……」

「まあ、私としましてもキル夫さんはモテると思いますよー有望な盗賊ですし強いですし……今回の大会も出るようですから尚更ねえ」

「大会出るのかよ……流石キル夫だぜ！」

「だから人気また出そうかなと」

「流石だな、キル夫」

「それだけモテるって事ですが……」

「それじゃあ私を構わなくなるじゃないか!!」

「……」

「キル夫避難させて正解じゃねえの？」

「いずれは対面することになるんだけどさ……」

「それはそうだが……そんなことそもそも考えてねえだろうし」

「考えてないとか言ってられないと思うけど……」

「ハーレムとかはどうなんだ……？」

「ダメに決まってるだろう!!」

その言葉に三葉が最初にマッタをかける

「いや……そもそも聞いてる相手が違うんだが……」

「私のキル夫がそんなこと認められるか!!」

「……はい、みっちゃんは少しあっちいってましょうね」

「シーーーノーーーーアーーーー」

恨めしそうに三葉が引きずられていく、当然と言えば当然なんだが

「言った記憶無いんですが……」

「流石にキル夫見てりゃ分かる」

「それでハーレムですか？」

「まあアイツが問題ありそうならそもそもしないかもだけど」

「するつもり自体ないので」

「そうなのか、意外とは言わないが冒険者やってると増える奴は増えるぞと」

「ハーレムなんて成立しないですし、きっ君管理出来るような人間じゃないので」

「まあお前が管理する側だろうな確かに……」

「それに、私ですら苦労したのに何人も愛せる程器用じゃないよきっ君は」

「……そう言われるとそうなのかもな、仲良い人間は多いからそれだと泣かせる奴多い気がするけどよ」

「まあ、きっ君がどうしてもって言うなら考えはするけどね」

「嫉妬深い気がするが気のせいか……？」

「恋人の頼みだしね、実際は嫌だし暫くは困るけどさ」

「本当に愛されてそうで良かったな」

「そうだな、俺としても安心した」

「……冨岡、聞いてたのか？」

「ああ」

「別に口突っ込んでくれて良かったんだが……まあそれはいいか、と言うわけでもねえな」

「何がだ？」

「……お前の家もかなり名家だったしそのうちこう言う話になると思うからな？」

「さあ、そこまでは俺も分からないし」

「気にしてないのか？」

「縁があればその時でいい」

「あの２人は……？」

「???」

「ああそうか……」

「きっ君は鈍感じゃなくて良かったかなあ……」

「俺もそう思うな」

「遅いな」

「急に話変えてどうしたのさ冨岡君」

「キル夫、遅くないか？」

「……確かに遅いかも」

「ああ、あらかじめゆっくりでって言ったしな」

「それで済む時間か？」

「……確かにか、行くぞ」

「そうだね」

「おう嬢ちゃん達、そろそろ出発すんぜ」

「キル夫が帰ってきてないのにいいのか？」

「流石にそっち側は罠ねえだろうし最悪罠踏まずに済むしな」

　無線を見せて納得させる、恐らくはなんともねえだろうと思っているがそれでも皆で探し始めた

十数分後宙吊りにされてるキル夫の姿があった

――――――――――――――――――――――――――――――

「いやぁ、助かったっす」

「何があったんだよ……」

「いや……新しい罠が生えてきて運悪く……」

「きっ君罠効かないはずだよね？」

「……」

「黙ってちゃ分からないよ、まさか無線無くしたとかじゃないよね？」

「……した」

「うん？」

「押してってボタンがあったんでつい押しました」

「馬鹿じゃないの？」

「いやボタンってロマンじゃないっすか!?」

「押すのはないでしょ、１人だからと言って」

「宝箱も罠なかったし大丈夫かなって」

「キル夫……ミルドレットとか来てたら死んでたぜ？」

「……すみません」

「んで収穫は？」

「罠結構な頻度で増えてますね、割と解除しましたが吊られてる時に増えてるかも……」

「全部解除したよ」

「いつのまに……？」

「ちょっとした裏技あるからね、これくらいの罠は増えても問題ないよ」

「助かりました……」

「それできっ君宝箱は？」

「まずは弓ですが……これは誰も使いませんし……後はこれです……」

「粉と薬……かあ」

「初めて見るな……粉は見たことあると思ったが……」

貴族連中にも初対面らしい……高級品ではないのかな？

「おいキル夫……」

「どうしましたオルガ先輩？」

「そいつは処分しろ」

「え？」

「液体の方だけでいい、処分しておけ」

「なんなのか分かるんすか？」

「悪いが言わねえ、ヤバいものだとだけ言っておく」

「分かりました……」

「きっ君いいの？」

「俺バイトもしてましたしそれなりにアイテム知識あるんで……それでも分からないでヤバいものって言われたらヤバいもの確定なんで……」

「まあオルガ先輩は確かにそうだろうね……、本当にやばいと思う」

液体を焼却して捨てる
残骸すら残らないように念入りと

「それで粉は？」

「分からねえな……臨也なら分かると思う、まどかは自信ねえ」

「よりにもよってっすか……」

「まあ……悪い物は覚えているし大丈夫な物だと思うぜ？」

「分かりました」

「と言うかカーミラ先生や束先生はダメなのか？」

「学園はダメだ」

「そっそうか……」

姉さんが聞いたがまあ学園は無しだな……最初から選択肢から切ってすらいたわ

「それじゃあ行くか」

「はい！」

罠のチェックを最低限だけして進み始める
ミスはした分代わりに何か出来りゃいいがな……

…

「キル夫が物分かり良くて良かったな……」

さっき焼却したアイテムを見ながら安堵する
これだけは絶対に持ち帰ってはならない
ロイヤルハニー、正直キル夫を守るためなら持ってこいのアイテムだが……アイツにはまずい

「絶対性格的に使わねえからな」

女王蜂のように使えば従わせることが出来る悪魔のアイテム……教師達には効かね

えだろうし友人や先輩に使うような人間じゃねえからな……

「念のために持ち帰るってわけにもならねえ……」

学園に渡る可能性がある以上は破棄するしかない、鉄華団に使われたらアイツどころか俺の命すら危ねえしな

その意味では速攻で処理出来て良かった

「そうして、それを伝えると学園との武器として新条が利用しようとする……アイツは自分で手を汚すの躊躇わねえし……」

だがまず彼女は学園に探られてるだろうし見つかる可能性が高い……秘密裏に破棄出来た自信はなかったな

「学園と戦う可能性か……」

正直０じゃねえし学園で不審に消えた仲間だって居る……恐らく学園が関わってい

る

俺もそろそろ卒業な以上は戦争するならもうほぼラストチャンスだ

「ただ……情けねえな本当に」

アイツが狙われていると言う自覚はある、ただそれさえも利用しようとしている
岡島キル夫、アイツの力と人脈は必要になる
何よりアイツしか後継者が浮かばねえような集団だしな……
謙虚なのはいいんだが……誰もリーダー継ぐ気ねえしな……

戦争したらどうなるか分からねえが……これ以上は学園の好きにさせられねえ……

「俺達鉄華団は止まらねえ、成し遂げてやる」

俺の命に換えても、生き延びてもらわねえとな
1人の男が改めて決意した

続

第４９話②

「オルガ先輩、だいぶ敵が強いんすけど……」

「そうだぜ？そういやあの時は対して戦ってなかったんだな」

「そうですね、俺はあの時は色々と教わるばかりでしたし」

「ミカも富樫もいたしな、戦士はあの頃のお前じゃここの敵キツかったろうしな」

「ですね……今でも義勇とかいて助かっただし」

「本当にアイツ強いな……1年だろ？」

「はい、俺も足元に及ばないレベルなんすけど……」

「そりゃすげえな……」

呼吸ってよく分からねえけど……どちらにせよ何使われようが敵わないのは分かる
どんだけ強くなりゃいいんだろうな

「キル夫もその呼吸とか覚えてみたらどうだ？」

「いやぁ……無理ですって……」

「俺の先輩にも呼吸を使える奴いたぞ？」

「呼吸ってやっぱりメジャーなんですかね？」

「分からねえがよ、そっちの呼吸見たことねえし……先輩は波紋の呼吸って言ってたな」

「波紋……なんかカッコいいっすね」

どんな感じか分からないけど気になりはする……ただ既に学園にいない人らしいしな……

「そもそももう呼吸を使えるのが学園にどれだけいるかだしな……」

「それもそうっすね……戦士コースでやってる時に見ないですし、あまり多くないかなっては思います」

そもそも武器種とか考えると俺も覚えられない気もするんだけどな……そこはやっぱ呼吸俺向きじゃないでしょ

「どうしたキル夫？」

「とりあえずは出来る範囲で強くとはですね……」

「相変わらず貪欲だなお前は」

「そりゃ、学園に来た以上は貪欲にこそですよ」

「来年あたりにゃ学園最強になってんじゃないのか？」

「いや無理ですよ絶対……」

「俺はそん時いないけどよ、期待してんだぜ？」

「期待に応えたいですが無理しない程度にしておきます」

「そりゃそうだな……盗賊なのに何にも盗めない、罠も張れない……挙句の果てに斥候も出来ないとかになってたら笑っちまうもんな」

「元々盗みは得意じゃないですけどね……」

「ダメだぜキル夫！盗賊やんなら得意苦手じゃなくて、全部こなせよ」

「頑張ってはいるんですけどね……」

「と言うわけで宝出せ出せ！」

「無茶ですって……!?」

「無理は嘘吐きの言うことだぜ！」

「いやだあああああああ」

気力が足りないのに無理してやろうとして少し倒れた
倒れたため、沼地の毒が口から入ってきて少ししんどかった

――――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ１ｄ５：４　柊シノア

「どうしました、キル夫さん？」

「いや、特に用があるわけじゃねえが休憩に入っただけだ」

「なるほど」

「シノアさんだってそうだろ？」

「確かにそうですねぇ」

髪の毛を弄りながら返答する

そんなに髪の毛気になるんかねえ？

「と言うか流石に用がないって正面から言うのもどうかと思うんですけど」

「……どうしろと？」

「構ってくださーい」

「えぇ……」

「ちょっと！なんでそんな不満そうなんですか？」

「義勇に構って貰えばいいじゃねえか……」

「マジで言ってます？」

「ごめんなさい……」

シノアさん相手でも無理なん……

いや確かに会話出来るくらいって感じはするけどさ

「キル夫さん、なんかカッコいい技無いんです？」

「カッコいい技ってなんだよ……」

「そりゃもうビームみたいなとか」

「それ盗賊の技じゃなくてやんの魔術師だろうよ……」

「えー、じゃあ無いんですかー？」

「いや……カッコよさならシノアさんみたいに鎌振り回してる方がカッコいいとは思うが……」

「やっぱ分かります？」

「……」

つまりは褒めて欲しかったって事でいいのかな……

「俺はこの武器気に入ってるけど……カッコいいってより馴染むって感じだしな」

「本当に面白い形してますよねぇ」

「そうか？」

使い込んだククリナイフを見る

ナイフとしては少し大きいし違和感は残るだろうが……武器としてなら問題なく見れるが

「その形、何かに似ていると思いません？」

「似てるって……」

そりゃ武器だし刃物とかには似てると言えばそうだろうが……ただ何を求めている

かかー
武器って考えただけでも色々あるし、なんなら俺が知らない武器だって沢山ある……
難しいな……下手に答えるよりは分からないって言った方がマシか……？

「ちょっとちょっと」

「あん？どうした？」

「どうしたかありませんよ、分からないんですか？キル夫さん!!」

「そりゃ……色々ありそうだし……」

「三日月形にも見えるそのフォルム、鎌に似てると思いません？」

「えー」

確かに似てなくも無いかもしれないが……なんか無理やり過ぎないか？って感じは

する

シノアさんの鎌を見る限りやっぱ無理がありそうな……

でも鎌か……うーん小さいサイズの鎌なら……

「草刈り鎌的な？」

「その扱いはカッコ悪く無いですか……」

「そうかー？」

「そんな……キル夫さんならわかってくれると思ったのに……!!」

「俺は武器よりも宝派だしなあ……」

「そう言う人も分かるは分かりますが……」

「なんかそこまで乗り気じゃないようだが」

「ウチは貴族ですし困ってませんので、お宝に拘りが……」

「あー……」

　確かに貴族にはそこまで興味ないのかな……？分かんねえや

「と言うか貴族が羨ましい……」

「キル夫さんそんなに金持ちに興味ありましたっけ？」

「無いけど？」

　正直お宝に興味があるわけで金持ちだーには興味ない……
　いや返さなきゃいけないものとかあるから全くいらないわけじゃ無いが……

「ならキル夫さん貴族って面倒なだけですよ……？」

「いやだって……貴族ってダンジョン持てるじゃん」

「欲しいんですか……？」

「毎日お宝探しできる！」

「……」

え？なんでそんな微妙そうな顔するの……俺おかしいかな？
いいじゃん!!お宝発掘したいじゃん

「予想以上のお宝狂いですね……」

「全員がダンジョン持てるわけじゃねえだろうけど……まあ自然湧きしたダンジョンも多いしな」

あの島だってどっかの貴族が買い取る可能性あるしそう考えると羨ましいよなグラビモスはもう勘弁だけどさ……

「手に入れられないってわけじゃ無いですけどね……」

「マジで……!?」

ダンジョン経営できれば冒険者やらなくても収入ある上に自分も好きな時にお宝探し出来るんじゃって思うわ

「簡単な方法ですよ?」

「簡単すぎると嫌な予感がするんだが……」

「みっちゃんと結婚すれば貴族ですし経営をしっかりして利益をしっかり出せるならダンジョン持てるかと」

「結婚……ですか……？」

「嫌なんです？かなり仲良いと思ってたんですが？」

「そもそもだ、姉さんは義勇追って学園来たって話聞いたけど……義勇と結婚するんじゃ無いのか？」

「いやそれがですね……この前みっちゃん誘ったら断られまして……」

「え？」

「勇君は弟だし結婚なんて出来るか！って」

「ええ……」

姉さんなんでそんな拗らせてるんだ？

と言うか初めに会った時言ってたけどマジで義勇弟扱いなん？

「キル夫さんが甘やかし過ぎたのでは？」

「そんな記憶はないが……」

「と言うわけでみっちゃんの将来が割とヤバいです」

「それ結局俺がどうこうしようにも同じだけでは？」

「多分そうじゃないですか？」

「どうしろと……？」

「もういっそキル夫さんに任せようと」

「そもそも俺恋人いるし……」

「ですから縁を任せようかなって」

「親がするものじゃ……？」

「そうですけどねえ……でも心配なんです。このままじゃ暴れそうだし行き遅れそうだし……みっちゃんのことちゃんと見ておいてあげてください」

「ああ……」

そもそもの問題だが互いに仲が良い自覚があるが、俺も俺で早いうちに弟とされてしまったために……互いに恋愛感情はない気しかしないんだが……

姉さんには悪いがそうとしか思えなかった

――――――――――――――――――――――――――――――――

コミュ１ｄ４：１　新条アカネ

「だいぶ疲れてそうだね……」

「そうっすね……色々メンタル的に」

「何があったのさ……」

「シノアさんに色々言われまして……」

「あー、きっ君の姉さんのことかあ……」

「なんで分かるんですかねえ……」

「まあ多少は予想付くしね」

「凄いっすね……」

「まあ前に言われたからなんだけど」

「あっそうなんだ」

「で、きっ君はどうしたいの？」

「どうしたいって……」

「恋人にしたいとかそう言った奴だよ」

「いや……何言ってんすか……」

アカネに嫌われたとかは無いと思うんだが……嫉妬でも無さそうだし……なんだこれ本当に……

「それでどうしたいのかって聞いてるんだよ」

「いや……正直分かんないな」

「ふーん」

「と言うかアカネは嫌じゃねえのか？」

「別に？」

「別にって……」

「きっ君がそんな多くの人を愛せるような器用な人間には思わないけど、でもどうしてもってなら止めはしないし」

なんで？と聞くのは違うだろうな……

ただ……どうすりゃいいんだ？

「現状はあっちは姉で俺は弟っす」

「実家がどうにかしないと拗れそうだけどね」

「やっぱっすか？」

「確実にきっ君取られるの嫌がってるし」

「取られるって……」

「でも本当にそう思ってるよ？」

分かるからこそ正直困る
ただ姉弟辞めて恋人やりましょうとか違うし現状はどうだろって強いし

「と言うか他はどうなの？」

「他ってなんすか……」

「かなでちゃんとか、きっ君優しいからあちこちでフラグ立ててるんじゃ無いの？」

「かなでとかフラグ立ててるかどうかまでは分かんねえし、マジどうしろって言うんだよ」

「しーらない、きっ君の問題だし」

「扱い切れないとかあるんすかねえ……」

「そして最悪の結末に……」

「どう言うことっすか……」

「ｎｉｃｅ　ｂｏ　……」

「やめて!?」

「まあ本気で好きになったってなら止めはしないよ」

「それはそれで少しは気にしてくださいって思うんだけどな……」

「だって私も本当に恋しちゃった側だしねえ」

「いきなりぶっこむのずるく無いっすか？」

「べっつにー」

「そう言えばアカネはダンジョン経営って……」

「きっ君じゃ絶対採算取れないからダメ」

「……」

一番通したかったところがダメだしされる悲しみを感じた……

まあ確かに俺じゃあダンジョン運営は出来ないだろうけど

――――――――――――――――――――――――――――

「聞いてくださいよオルガ先輩!!」

「どっどうしたキル夫?」

「アカネにダンジョン運営ダメ出しされました」

自分でもダメだとは分かっているが、それでも即否定は納得出来ないのでオルガ先輩に伝えに行く

「まあ……お前じゃ無理だろ」

「ええ……」

「第一ダンジョンの管理は簡単じゃねえよ」

「それはまあ予想付いてますが……」

「北の国の王国でダンジョン経営してるらしいが……利益はすげえが投資とかもすごく必要だぜ？」

「確かに金は必要かあ……」

「冒険者やりながらダンジョンのための費用を貯める、これが目標なんじゃねえの？」

「だいぶ厳しそうですが……」

「別に出来なきゃいいだろ、冒険者は続けられる限り間違い無くお前は続けるんだからよ」

「それもそうですね」

「なんなら鉄華団継ぐか？」

「え？」

「冒険者ってよりも冒険集団になるだろうけどよ、それもまたありなんじゃねえの？」

「オルガ先輩が団長じゃ無いと不味いんじゃ？」

「いや、俺は冒険者になる気はねえしな……」

「そうなんですか？」

「どうせ俺は戦えねえしな……」

「それでの指揮官いるだけでだいぶ変わるとは思いますが……」

「それよりも頭使った方が楽なんでな、会社とか立ち上げる気で考えているぜ」

「会社ですか？」

それじゃあ尚更団長のままの方がいいんじゃ？

「なあキル夫」

「なんです？」

「お前もと海賊だよな？」

「ですね、俺は海賊です」

「お前の部下達は会社で働けると思うか？」

「無理でしょうね……荒くれ者多いんで……」

「そうだろ？適材適所ってものがある」

「そうですね……」

「んで学生のコイツらには無理だ……会社で働くのは」

「一応勉強はしてますけど……」

「そういうのは最低だしなこの学園」

「ですね……じゃあ三日月先輩も？」

「いや、ミカだけは着いてこさせるが……基盤が出来たら多分そいつらも雇うけど。それまでは全員キル夫が率いてくれって」

「何人いるんですか？」

「沢山いるぞ」

「キツそうっすが……」

「まあ俺もガッツリやってるわけじゃねえし学園にいる間だけだしな」

「いいんすかそれで……」

「流石に将来を面倒みろなんざ言わねえよ」

「と言うか学園でもあまり組めそうに無いですが」

「相談役とかしてやりゃいいよ」

「そんなもんなんですかね……？」

「ああ、誰かを励ましてやりゃいいそう言うの得意だろ？」

「どうですかね？」

「お前は誰かと関わるの得意だし、鉄華団じゃないとしてもリーダー向きだとは思うぜ、まあ考えておいてくれ」

「分かりました……」

リーダーの素質があるか不安だがそれで誰かを助けられるじゃら臨むところだ
話聞くだけで誰かの心が落ち着くってのもあるなら尚更な

「前向きに検討した方がいいかなこりゃ……」

「頼むぜ！」

リーダーと言う今後の可能性も考えるべきだと思った

…

「ひとまず伝えることが出来た……」

団員達にはそれとなくアイツになる可能性があるとは伝えておいたが……それを本人が知らないのが不味いしな

これで俺自身が何か起きても大丈夫だしアイツに何が起きても結構マシになると思う

「何も無いのが一番だが……俺がいなくなった後までは分からねえ……」

そのために態々ダンジョンとかでも指揮をして戦ってねえのに……テストも雑にやってんだがな……留年させる気はねえだろうしな

「こっちから攻め込む気でもいるが、それも出来ないならアイツを護れる態勢が必要だ」

後は学園帰ったら速攻で引き継がせる……それで問題ないか
なんなら今から帰ってもいいが……

「なんだろうな……この嫌な気配は……」

キル夫は見つけてないし他のメンバーも見つけてないが……聖気が反応してやがる
……不安を感じ取れる嫌な雰囲気だ……
1年の三宮はまだまだ未熟だろうし分かってねえとは思うが……どうやらこの病み村に何かがいるらしい

「アンデット系か……？それなら盗賊の探知にかかりづらいし俺も分かりやすい」

ただ……正体や位置は把握出来ずに現状は警戒に留めている
出会わないで欲しいが……放置しておくことも出来ない

「話しておくか……」

むやみに怖がらせるのは趣味じゃない、ただ何かあった時は後手に回る……

それだけはあってはならない

だからこそ……一度みんなを集める

そして伝える

この病み村に何かがいる　と

――――――――――――――――――――――――――――――

続

第４９話③

「なんかってマジでなんなんすか？」

恐る恐るオルガ先輩に尋ねる

「いや……分からねえよ。」

「分からないですか……。」

「ああ、嫌な予感がひしひしとするだけだ。」

「一旦戻って体制立て直しますか？」

「悪いがそんな時間はねえと思ってる」

「なっ……」

「オルガ先輩」

「どうした新条」

「流石に退くべきじゃないですか？」

一方のアカネは退却の指示を出している

「新条の言うこともっともだが……この気配が去っちまうと面倒だ」

「すぐに去りそうなんですか？」

「分からねえ……」

「だったら尚更一度帰るべきだと思います」

「お前達、ダンジョン来るのに装備とか手抜いたわけじゃないだろ？」

「それはそうですけど、対ボス用の装備なんて準備してませんって」

「してないのか？」

「きっ君このダンジョンアタック終わったら大会なんだよ？軽くで済ませる気だったし」

「そうか……そういやそうだよな……」

オルガ先輩が必死に悩んでいる

確かによく分からないとはいえ放置できない物を置いて行くのも不安が残るか……

「しょうがねえな……」

そしてオルガ先輩は決めたようで

「オルガ先輩、どうしますｋ　……」

「キル夫、お前が決めろ」

「……は？」

いやいやいやいや……なんでこれ俺が判断する場面になるの!?
先輩達が話し合ってたんだからそっちで決めるんじゃ？

「……」

「アカネ……なんとか言って……」

「なんでオルガ先輩がそう言ったか分かる？」

「いや……分かりませんけど……」

責任を負いたくないとか面倒ごとだからと言って他人に押し付ける人じゃないし
だからこそこの展開に驚いているのだが……

「よく考えてみて」

「……」

考えろって言ったって正直浮かばない……
頼りにしているからとか……そう言った単純な……

「……いや待て考えろ」

頼りにしている……なんでそう思ったか
それは簡単だ、頼られたからだ

じゃあ何を頼られた
先行した偵察を始めに調査を……

「あっ」

「気付いた？」

「はい、今のこの村の情報を一番持っているのは俺ってことですね」

「そういうこと、きっ君には話は聞いたけどそれでも実際に見たきっ君の方が知ってるし」

「そしてだ、キル夫偵察中にやばそうなもんなかったんだよな？」

「はい……オルガ先輩の言うようなヤバそうな生物はいなかったですね、せいぜいさっきあったのは罠ぐらいと」

「んじゃそれがだいぶ遠くにいるか、隠れてるかだよな」

「そうですね」

「それを踏まえても踏まえなくてもいいから、お前が判断しろ。帰り道の安全がどうかとか、この後何するべきとかな」

「そうですね……」

ここは大事な場面だ
先輩達も信じて俺の答えを待っている
間違いなんて犯さないようにしなきゃならねえ

1．オルガ先輩の経験を信じて敵を逃さないようここで戦い抜く
2．アカネ先輩の直感を信じて引いて退却する
1d2：2

「逃げた方がいいと思います」

「理由はなんでだ、聞くぞ?」

「装備等もありますが、まず俺達は入り口から入ってきて見当たらなかったこと。そのため病み村の奥深くにいるのならばすぐには出れないと推測します」

「確かにそうだな、見つけられる位置にいたなら既に気付いているだろうし」

「オルガ先輩の言うことだから気のせいではなくて、いるとは思ってますしね」

「察知はできてねえんだろ?俺は今でも嫌な気配するが」

「出来てないですね……」

「ゴースト、アンデットそこらは盗賊じゃ察知出来ねえしそうだと思ってる」

確かに生きてないならそこまで察知できないかもしれない
古城でも量が出て来たため分かったが、単体の敵の察知はあやふやなところはあったしな

「もう1つは半端に挑んで負けたら意味ないですね」

「そりゃそうだが……」

「この前、アカネ達との時も、火山で痛い目あったんで……オルガ先輩がそこまで言うんなら不安もあるので」

「なるほどな……」

「なので撤退……」

「おう、動く準備はしてたし一度退くぞ」

「いいんですか？」

オルガ先輩リーダー気質だし、何故とかもっと色々と言ってくると思ったがあっさり退いてくれるとは思わなかった

「元からお前に任せるって言ったろうよ」

「それはそうですけど」

「それで理由を言われちゃ仕方ねえよ、前進のつもりだったはずだが撤退すんぞ」

「はい！」

こうして2度目の撤退戦が始まった

何者にも襲われなきゃ楽なんだが……

――――――――――――――――――――――――――――――――

「キル夫、そっちは問題ないか？」

「はい、オルガ先輩の方は？」

「何かが近付いてる気がしてるな」

「マジですか……？」

「急いだ方がいい」

全員で急いで駆ける、依頼人とかが居ないおかげでスピードも落とさずに済んだ

「病み村ってこんな広かったか!?」

「落ち着いてきっ君、まだ大して行ってないから」

「そうでしたっけ？」

「だから落ち着いて」

「分かりました」

1人だけ焦ってる……それじゃあダメだって分かってるのに……
落ち着いて行動しないとまたやらかす事は分かるはずなのに……

「安心しろ、キル夫」

「義勇？」

「最悪でも俺達は戦えはする」

「選んだのが間違いってことか？」

「逆だ、万全を期す為に退くわけだ。戦えないわけじゃないから選択を間違えたなどとそう考えるな」

「……分かった」

「……」

励まされたんだろうな
普段褒めるの苦手だろうから驚いた

「大丈夫だ、落ち着いていきゃ問題ねえ」

後は運がいいのか悪いのかだ……
そう思っていたのに

「ツツツツツツツ〃」

「なんだなんだ!?」

なんかの声が聞こえた
ミルドレットみたいな優しいものじゃない
もっとおぞましい何かだ

「おいキル夫」

「はっはい居ましたね……」

「いや……もっと単純な話だ」

「なんでしょう……」

嫌な予感がする……どうしてだ

「逃げたのが正解だった、あのまま残ってたら死人が間違いなく出てたろうな」

「……は？」

嘘だろ……なんでそんなヤバいのが病み村にいるんだ？
わざわざ毒対策をしていたのにここはそれで大丈夫だって話だったんだが

「ドラゴンだ……」

「また……竜っすか？」

「お前達の場合はまたなのか……どうやらそのようだぜ？」

「冗談って話なら嬉しいんですけどね」

「と言うか……だ」

「あり得ないよね」

「何がです？」

「新条の言う通りあり得ない話だ。こんな場所にドラゴンが生息しているわけねえ」

「じゃあ偽物……」

「いや……本物だ……誰が呼びやがった？」

汗が流れる、走り続けたせいで熱された身体から放出されたのもあるが、それよりも恐怖が勝る

「逃げ切れますか？」

「見つかってなければだが……叫んだってことは見つかっただろうな」

「じゃあ厳しいと」

「と言うかおかしくない？」

「何がだ？」

「なんでドラゴンがいるのに……私達が察知できないの……？」

「確かに……」

「……おい」

「どうしましたオルガ先輩？」

「全力で逃げるぞ、今まで以上に!!」

「きゅっ急にどうしたんです!?」

「そのドラゴンは死んでやがる！死んで動いてやがるから、対処は今はどうしようもねえ!!」

１ｄ１００＜１０　５７

「こっこれか……？」

「クソが……ミカがいなかっただけマシだが……きついなこりゃ……」

巨大なドラゴンが目の前に立ち塞がる
しかし通常のドラゴンとは異なり明らかに異形な姿だ

「身体が腐ってる……？」

「おいキル夫！」

「はっ!?」

腐臭に気を持ってかれそうになるが掛け声に必死に耐える
さてどうすりゃいいんだこれは……

「キル夫、武器を投げろ」

「はいっ」

オルガ先輩に言われた通りにナイフを投げる
肌に傷はつきそうにないと思いながら……

「……は？」

傷が付かないで済む話じゃない
当てたはずのナイフが溶けた……？

「急いで学園に戻って神官をありったけ呼ぶぞ」

「こっこいつどうするんです!?」

「俺がどうにかすっからよ……急いで呼んできてくれ」

「それじゃあオルガ先輩が……」

「しかし運が良かったな……」

「なにが運が良かったんですか……!!」

どう見ても運が悪いだろう……こんな化け物にあっちまったし

「こいつはこの村にいたんだ……、見つけられなきゃ被害は甚大……で済んでもいい方だぜ?」

「最悪は?」

「……成長していたら不味かったな」

「……死んでいるのに？」

「なぜか成長する奴らがいるんだ」

「きっ君も行くよ」

「え？」

「早く行け、呼んでこれなきゃ最悪なんだからよさっきお前も言ってただろうよ」

「……はい」

先に言った義勇達を追いかけるように後を追う

ドラゴンが襲ってこようとするがそれをオルガ先輩が聖気でヘイトを稼ぐ

「生憎俺はまだ止めってねえんだ、こっちを相手してくれないか？」

敵に相対して不敵に笑う

単騎で勝てるわけがないのに……それでも送り出すように

「オルガ先輩……!!」

「鉄華団は任せたぜ！」

そう言いながら駆け出す

伝えなければより酷い結果になると確信しながら……

――――――――――――――――――――――――――――――

足が重い、走っていたはずなのにすぐに走れなくなる

辛い……重い……痛い

「きっ君」

「なんです？」

「ふざけてる場合じゃないんだよ」

「分かってますけど……足が重いんです」

「そりゃ君がそう言う人間なのは分かるけどさ」

「……」

「でも先輩に託されたの分かってる？」

「……はい」

間違いなく鉄華団を任せるって言ったし
ここで変なことするのが一番まずいのは分かってる

「君まで死んだら残った人はどうなるのって」

「それは……分かってますよ」

「……戻りたいなら戻っていいよ」

「……え？」

アカネからそんな言葉が出てくるのは驚きだったが……何か理由があるのだろうか？

「全てを捨てる覚悟が出来るなら戻っていいよ」

「……っ」

「普通に死ぬって考えた方がいいよ、いや普段からそうだろうけどさ」

「そうだな……」

「それでも行くの？皆を置いて」

行かないのが正解だろう
オルガ先輩も来て欲しくないだろうし来たら後悔だけが彼にも残される
だから帰るのが正解だ……

１ｄ１００＜１０　４　え？

「アカネ、すまないけどやっぱ行くわ」

「そっか」

「後は任せた」

「何言ってんの？」

「え？」

「ほら早く行くよ」

いやいやいや……アカネは何を言っているんだ？

「いや……アカネ、あのだな……」

「私も行くよ、当然でしょ」

「……え？」

「君を置いて行けるわけないでしょ？早く行くよ」

そう言って行ってしまった……え？マジで……？
と言うか追いかけないとまずい……急げえええええ
さっきの重かった足取りとは違ってすぐに駆けて行った

――――――――――――――――――――――――――――――

流石に限界か……本当になんでドラゴンがいるんだよ
腐食した腕を見ながら半ば諦めて考える

「こんな場所に自然発生するなんざ思えねえ……」

０ではないが、アンデットになってからだいぶ時間が経っている
誰かが放出したと見るのが正しいな

「キル夫達の姿はもう見えねえし後は来るまでダメージをどれだけ残せるかだ」

だいぶキツい状況と言うよりもこれ以上なにか出来るようには思えねえ、ただやるしかない

「全く……団員を守るのも楽じゃねえ」

段々弱ってきた目で敵を見る……本当にデカい……そしてその奥に……何か

「オルガ先輩……!!」

「……なんで帰ってきやがった!!」

逃げろっつったろうに、かつてアイツに助けられたことはあるけど……今回は無理に決まっている

「早く退け……後少しだけ持たせてやる!!」

よく見りゃ新条もいるじゃねえか……

馬鹿じゃねえのか?アイツらが退くって言ったんだろうに
と言うか来るタイプじゃねえだろう

「来たのはいいけどどうすんだよ!!」

「何か投げるものは……」

慌ててバッグの中を漁る、正直来る前に漁れって話だが……
使えそうなものは……

「これしかねえか……」

あらゆるものが効かないと判断して最後の賭けとばかりに小瓶を取り出す
先程入手した粉が入っている瓶だ
正直何だか分からないが……ええい

「食らえやあああああ」

全力でドラゴンへと投擲する
そしてぶつかる、それで終わりだと思ったが

「っ苦しんでる!?」

正直何が起きたのか分からないと言ったばかりに苦しむ様を見ている
っとそうじゃないオルガ先輩を……

「大丈夫っすか!?」

「なんだよあれ……あんなもの持ってたのかよ」

身体中が溶けておりだいぶ危険な状態だ……急いで連れ帰っても間に合うかどうか

「あの粉っすよ……」

「ああアレか……」

ドラゴンの方を見る、接触部位が光りながら内側へと入り込むようで必死に暴れている

「もしかして……聖者の灰だったか？」

「聖者の灰ですか？」

聞いたことない名前に尋ね返す

「とある聖者さんの遺灰らしいが……普通は鍛冶等で呪いを払うために使うらしい」

「呪われたアイテム……多いですね確かに」

そもそも遺灰を素材に使うとかどうなんだとも思いつつ話を聞く

「アンデットもいわば死に呪われた奴だしな……効いたのかもな」

「じゃあこのまま……」

「いやあの量じゃ無理だ……暴れているうちに逃げるぞ」

「はっはい」

オルガ先輩に肩を貸しながら逃走する
左足は肉が溶けきっておりとても歩けそうにない

「このまま間に合うか……」

「大丈夫だろ、だってお前が助けに来たんだぜ？」

「オルガ先輩……」

先輩が言うように苦しみに逃れるためか羽ばたいて離れていく、そのまますぐに落ちた

今は安堵するがすぐさま準備し直さなきゃならないだろう

「生憎……このメンツじゃトドメ刺せそうになかったのが残念だが……戻ったら反撃するぞ」

「はい！」

「まあ俺は無理だろうから……頼んだぜキル夫」

「了解っす、オルガ先輩は休んでいてください」

「まさか……生き残れるなんざ思ってなかったがよ」

アカネに先導されるまま先へと進む、モンスターはドラゴンに怯えてか数も減りアカネが１人で戦える量に留まっている

急がないとまずいとそのまま迂回すらせず出口へと向かって行く

そして帰った後すぐに戦闘の準備をしないとな

グラビモスとは違う、次こそは狩らせて貰うぜドラゴンさんよぉ！

ＢＯＳＳ：不死竜

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

続

第４９話④

「集まっていただいてすみません、ただし放置出来ない事態が発生してしまったため手伝っていただくことになりました」

神官をメインに盾役など多くの人に集まって貰った
よくここまで集まって貰えたなと思いながら準備を始める
そしてドラゴンを知る俺が先導を切る

「オルガ先輩が言うには、アンデットドラゴン……つまりは不死龍らしいです」

「そのオルガ先輩はどうした？」

「今は重症で入院中です」

そのまま時間がなかったこともあり街の医者に任せる事にした
無事だといいんだが、こればっかりは祈るのみだ

「へぇ」

「どうかしたんですか？」

「いや、ドラゴン相手に残った先輩を救出できるなんてやるじゃねえの」

「運が良かっただけですけどね……」

「ただそれならやっぱお前にリーダー任せられそうだな」

「え？リーダーって？」

「おい皆！こいつは知ってる奴もいるかも知れないが次期鉄華団リーダーだぜ！」

話しかけてきた神官の先輩が皆に伝える

「おう、鉄華団って事は俺達のトップか」

「あの鉄華団のリーダーなら安心して任せられるな！」

そう言った歓声が湧き上がるばかりだった

正直……指揮とかは出来ないし不安なんだが……

「大丈夫？」

「三日月先輩……本当に今回は」

「オルガが自分で選んだんだし文句はないよ、それ以上にキル夫が大丈夫かでしょ」

大事な幼馴染みが重症にながらも俺の方を心配してくれている

ただ……心配されている通りリーダーの自信はないけど

「……」

「別に俺達はキル夫にあれやれとか指示出せとか言わないよ」

「言わないんですか？」

驚くと共に、信用されてないんだなって思う

まあ1年に全部任せるような奴もいるわけないだろうけど

「そもそもオルガは戦闘苦手だし戦わなかっただけでキル夫は違うでしょ」

「でも指揮出来るかどうかとかは」

「出来ない人間に求めないよ」

淡々と正確にものを言う
正直グサっと刺さっているんだが……

「俺達が欲しいのは旗であり目標、その目標に向かって走れる人がリーダーやればいい」

「俺の目標は……」

「お宝探しでしょ?学園にいる間はロマン求めてお宝探しとかもありだと思うしね」

「いいんですかそれで……」

どのコースもそれぞれがお宝探しし始めるとなんか嫌な感じしかしないが……まあそれでいいならいいや……とは思った

「下手に強さ求めて戦いに明け暮れるよりもいいでしょ、オルガはそうしなかったけど、同様にキル夫もしないし」

「まあ自分は盗賊ですから本来は戦いを避けるのが大事なんですけどね……」

ただハイブリットや戦闘狂も多少混じっていることもあり逃げ特化にもなれていない

そんな中途半端で

「俺達はただリーダーが必要でそのリーダーが手を抜いたりするわけじゃないだろうし、リーダーがキル夫なのは問題ないよ」

「分かりました」

「それじゃあキル夫、そろそろ始めるよ……オルガを嬲った奴を殺しに」

「はい！」

前を向くと全員がこちらを向いてくれている

数十人……下手すれば１００人いるかもしれない……その皆向けて

「それじゃあ病み村に出発」

冒険者と言うには異常な人数が一斉に病み村へと向かった

――――――――――――――――――――――――――――――

「ドラゴンは何処だあああ」

血気盛んなメンバーがドラゴン探しをしている……危険だって言ってるんだが、元気良すぎねえか？

「大丈夫なのか……？」

「別に、アイツらはそう言うタイプだし良いんじゃないの？」

「そうなんですか……？と言うか三日月先輩は行かないんですか？」

「俺はキル夫の護衛がメインだから」

「そうなんですか」

「本当はオルガの護衛がメインだったけど、今はそうは行かないからね」

「……すみません」

「逆だよ、キル夫達のおかげで早く見つけられたんだ」

「そうそう、私達も驚いたんだからね」

「まどか先輩？」

そういや見かけなかったが神官が集まる以上は彼女もそりゃいるか

「死体は本当は動いちゃいけない、なのにアンデットとしていきる……恒温系モンスターならまだあるけど、竜なんて本当にどう言うことってレベルだから」

「居ないわけじゃないんですよね？」

「一応はね……ただ造られた生物の可能性が高い」

「オルガ先輩も言ってましたが……」

「ねえキル夫君ちょっと良いかな？」

「後でいいですか？……先ずはドラゴン先で」

「流石にこのメンツ集めたら負ける事はまずないし、いいでしょ」

「……そこまでして話したい事なんですか？」

「そうだね、もう時間ないし」

「時間って？」

「武闘大会のだよ」

「その関係でまだあるんですか？」

「どうにかして辞めてくれないかなって」

「いいって話してませんでした？」

まどか先輩にもこの旨話したはずなんだが……

「ねえ、この竜って何処から産まれたと思う？」

「それは分からないですが……」

「この近くってさ、こういうの研究できる施設ってないんだよね。大きな施設はあってもアレだけ大きいドラゴンを隠せる場所なんてね……？」

「なら遠くですかね……？」

「出来る場所一つだけあるんだよね」

「鹿目」

「ううん、やめないよ」

「……」

いったい２人は何を言ってるんだ？

「教えてもらってもいいですか……流石に収穫なしだとどうしようもないですし、オル

ガ先輩に申しわけが立たねえ」

「学園だよ」

「……」

またか……またなのか？しかもよりにもよってこれは……外への被害が尋常じゃないだろうよ

「学園はそう言うことするしね」

「だからまずいって訳ですか？」

「うん、正直キル夫君を放っておくのは違うだろうしね」

「……どうしろってんですか？」

「リーダーやる以上は無茶して欲しくないってのもあるけど」

「まどか先輩鉄華団入ってないでしょうよ」

「うん、そうだね」

「だったらなんでそこまで……」

「いくらキル夫君を信じてるからって友人の作ったチームだしね」

「そう言えば同じ神官でしたね……」

　同じコースの先輩達もあまり仲良い人達も少ないかもしれないけど……少なくともまどか先輩は他人と距離を詰めるのはうまそうだな

「だったらどうしろと？」

「実力見せてもらおうかなって」

「竜で？」

「いや、流石にそんな事は言わない……竜に汚染されると大会出れないかもだし」

「それじゃあ不味いんじゃ？」

「多分もう神官達が囲んで浄化しているだろうから問題ないよ」

「えぇ……」

そんなことあるかと言いたいんだけど……確かに俺が竜に出来ることは無いと思うが苦戦したのにそれって……

「オルガ君以上の神官が３０人くらいいるんだよ？無理でしょ」

「そっすか……」

「じゃあ俺はまどか先輩と戦えと？」

「正直私は神官よりだしキル夫君を止められるか分からないんだよね」

「いやぁ……」

十分格上な気がするけど……なんか目的があるのか？
正直分からねえ

「ミカ君お願いしていい？」

「え？」

ちょっと待って……それはダメじゃ無い？
どうすれば勝てるって言うの？確かに大会じゃ当たるかもだが優勝狙いでは無いし

……

「俺？キル夫を攻撃する気はないんだけど」

「このままじゃオルガ君と一緒になると思うけど」

「……まあ、そうか」

その言葉を言うと武器を構える
やる気なのか……？

「バルバトスはダメだよ」

「んっ了解」

「後ミカ君」

「何？」

「察して欲しいな」

「……あーそう言うことね」

何を言ってるんだ？分からない
とりあえず戦うしかないのか……
なんとしても大会に出させたくないんだろうけど……そうだとしてもここで蹲いてはいられないか……
そう思いながら三日月先輩に向けて武器を構えた

――――――――――――――――――――――――――――――――

……何かがおかしい
三日月先輩は攻撃をしてくるが頻度が少ない
しかもバルバトスは使っていないとはいえ武器はいつものだ

何度か斬られたはずだが斬れていない……刃を落としている？

「三日月先輩……何がしたいんですか？」

「五月蠅いよ」

答えてくれずに武器を振り続ける
ただし……大振りで隙だらけだ
ただそれすらも罠か……

「キル夫こそ、何をしたいの？」

「何って……認めてもらわないとって」

「本気で思ってるの？」

「そうです！」

「だったらなんでキル夫君は攻撃しないの？」

「まどか先輩？」

「隙だらけの相手でも無視してるよね？」

まどか先輩が話すと同時に三日月先輩が攻撃が止む……話を聞けってことか

「三日月先輩がそんな隙を晒すように思えません」

「……実際に晒してるなら？」

「……」

確かにそうは思う……ただ本当にか？

「キル夫君、武器振れないんじゃない？」

「……は？」

そんな訳ないだろ？今までどんだけ戦ってきていたと思ってるんだ？

「戦士コースだって言ってますし人と戦ったことだってありますが」

「それじゃあ仲間に武器を振るったことはある？」

「そりゃ戦士コースで……」

「刃が付いてない癖に武器？ふざけないで」

「……海賊だってやってたし、闇ギルドの人間とも争ったことあります」

「だからって仲間に武器を振るったこともないし、人を斬る経験だってほとんど無いで

しょ」

「確かに……」

だからって出来ないかって……俺だって覚悟したんだぞ

「だったら斬ればいいじゃん」

「三日月先輩……バルバトスどころか鎧すら着けてないんですか」

普段バルバトスを使うのが理由かロクに鎧すらつけていない……

「それが？」

「斬ったら」

「甘えるな」

「!?」

まどか先輩の声色が変わる

これはガチだ

「ただでさえ大会はまずいって言ってるのに、生身の人間を斬れる覚悟もない？ふざけないで」

「……そうですね」

だから斬る……斬るしかない……斬るしかないんだって

「まだ？」

「後悔しないでくださいよ」

「三日月先輩だってオルガ先輩に任せたはずなのに……これでいいのか？」

「覚悟だよ」

「……」

覚悟か……確かに自分は色々と舐めてるだろうし
そのくせ甘ったれてるわけか
護りたいものを護るためには力が必要なのは事実
だから、そのために非情も必要

「……」

目を瞑り罪悪感から逃れるようにしながらも
覚悟だけはしたと武器を三日月先輩に振った

ガキンッ

「え？」

「いや、キル夫護るのが仕事なのに怪我するわけにはいかないでしょ」

「ええ……それって……」

「別に覚悟を試させたかっただけだけどね」

「じゃあ合格ですか？」

「失格に決まってるでしょ、何目瞑ってるの」

「……」

やっぱそこは甘えたんだよな……それでも目を開けたまま人を斬った感触からは逃げたかったが

「ただ……振るえないよりはマシかな、ここで振れなかったら学園から追い出そうも考えたし」

「……マジっすか？」

「だってもう冒険者向かないもん」

「そりゃそうかもしれませんが……」

「だからキル夫君」

「……なんでしょう」

「覚悟は大会で見せて」

「いいんですか？」

「ただ、負けたら全てを失う。そう思った方がいいよ」

「そうですね」

「……ただまあキル夫君は予選突破出来れば良いところかな、大した技もないだろうし本戦は」

「ミカあああああああ!?」

話してる最中に向こうから大声が来た
見ると竜がこっちに突っ込んで来ている

「は!?やれるって話なんじゃ!?」

「浄化はされてるしかなり弱ってるね……けど逃すなんてダメな人達だな」

凝視してみると確かに腐食してる部位は無くなっている
それにスピードも落ちてる気がする

「キル夫君、ちょっと避けてて」

「いや……」

「えっちょっと!!」

まどか先輩の制止を無視して敵に突っ込む
覚悟が足りないだの、人は斬れないだの火力がないだの
全部事実だよ畜生!!だからこそ見せてやるよ

「こっちに来る前に収縮は終わった……食らえやデスハンド!!」

ちょうど足をついた瞬間を狙って足へと打ち込む
ぐらつくかと思っていたが、弱っていた竜に加えて纏まった威力はそれ以上で足が吹

き飛んでいた

「ここまでなのか……」

そう思ったのも束の間、足を一本無くした竜はこちらへと倒れ込んでくる

「うわあああ!?」

「何がしたいのさ?」

慌てているところを三日月先輩がバルバトスに乗ったまま助けてくれる……助かった

「ありがとうございました……」

「技を見せたかったのは分かったけど、油断しすぎ」

「自分も威力はそこまでとは……」

「そう……」

だって今までの見てて足が吹っ飛ぶなんざ思わねえじゃん……おっそろしいわ

「……ふーん」

「どうしましたまどか先輩？」

「いや……少しだけは期待しようかなって」

「……はい！」

実力はまだまだだと思うけど、少しでも認めてもらえたようで嬉しかった

そのまま無事に皆で討伐は完了したのだった

「失敗作が倒されたようです」

学園で教師達が集まっている中ボンボルドがポツンと溢す

「いや……失敗作ってどう言うことよ？」

「いやあドラゴンで実験していたんですけどねえ、つい失敗して病み村に放ったんですよ」

「何してんだお前……被害がヤバイだろ……しかもウチだってバレるやつじゃん」

「倒されたから良いじゃないですか」

「どうりで数日前に生徒がこぞって病み村に向かったわけか、成る程ね」

「良かったですが……神官もだいぶ行ってたのでみんな無事でよかったです」

「ほらあああ、俺言った通りじゃん！倒されたから良いわけじゃないじゃん！危険だったじゃん」

「おやおや……」

長谷川先生は怒り気味だが、ボンボルド先生は悪びれもない様子だ

「そして聞いた話なんですが、どうやら竜にトドメを刺したのってキル夫君らしいですよ？」

「は？キル夫がか？」

「長谷川先生、彼に何か教えたのかい？」

「教えてねえよ、盗賊に無理させんな」

オールマイト先生に嘘を付くがここで彼にバレてはいけない
少なくともキル夫はコイツを倒してくれないと困るから

「そうか、色々と勉強してるようで良かったよ」

「しかし竜殺しが出来るなど英雄そのものではありませんか?」

「いや、そう言うがアンタが手を加えたんだろ?」

「そうですね、強いて言うなら強化ですが……」

「マジでやったのか?キル夫……アイツどんだけ成長してるんだよ」

何をやったかまでは把握できなかったようだが、一介の盗賊が竜殺しなど出来るほどもなく期待が高まるばかりだった

「私と即対決にしちゃダメ？」

「権力行使はダメに決まってんだろ」

「ちぇー」

「まあなあオールマイト先生、仕込みも済んだし彼なら貴方の所まで辿り着くでしょう」

「そうですね校長、彼を信じるとしましょうか」

「では、明日から始まりますが気の抜かないように」

「はっ」

「全ては我らが大義のため」

ついに始まる、武道大会が

各々の思惑を乗せながら、皆が勝利を目指して

―――――――――――――――――――――――――――

第５０話

―――――――――――――――――――――――――

「レディースアーンドジェントルメーン」

当日になって司会が大声で叫ぶ
それに合わせて完成があちこちで上がる

「今日から皆が待ち望んだ武闘大会が始まります！私は今回の司会の一人である藤堂晴香です！」

藤堂が司会をやるのかと思ったが……確かに学園側の人間って意味では正しいとは思うわ

「これより始まりますのは予選、決勝リーグへの突破をかけた戦いとなっております！」

８枠しかないんだよな……なんとか滑り込まないといけない

「予選リーグは大多数で行い生き残った人が決勝突破です！」

それを８回か……全員倒さないと突破できないなんて聞いてないんだけど

「キル夫、頑張ってね」

「あれ？三日月先輩は？」

「俺は参加しないよ、オルガの様子途中で見に行くし」

「なるほど」

「キル夫は行かなくていいの？」

「俺はＢみたいですからすぐみたいですけど参加者多いらしいので今行くと詰まるっぽいです」

「それじゃ少し見て行くといいんじゃない？」

「そうですね」

間も無くしてＡグループの戦いが始まる
いきなり乱戦が始まって見辛い事もあるが……それとは別に盛り上がるで興奮している

「キル夫楽しそうだね」

「いやこう言った試合見ることは少なかったので」

乱戦自体は海賊時代に見たことがあるが
あの時のように命賭けじゃないし楽しんで見てられる

それに……

「あの人強いですね」

「あああの人は……」

徐々にバトルの中でも見えて来た強い人が

「有名なんですか？」

「俺達の先輩だよ」

「ってことは元学園の人間ですか？」

「そうだね、去年卒業したジョナサン・ジョースター先輩。聞いたことはない？」

「確か……オルガ先輩が呼吸を使う人と」

「そうだね、どっちかと言うと彼の場合は波紋って扱いだろうけどさ」

「俺じゃ出来なそうですが、オルガ先輩に聞いた時はヤバそうって感じましたね」

「実際見てれば分かるよ」

言われるままに視線を彼の方へと戻す
声がこちらにまで届かないのは本当に残念だが……ただ……

「光ってないっすか？」

「光ってるね」

「普通なんですか？」

「波紋じゃ普通だよ」

「そうなんだ……」

波紋をそもそも知らなかったからなんとも言えないけど……普通ならいいか……普通？

「まあこれは勝負あったかな？」

「そうなんですか？まだまだ暴れそうな人いると思いますが」

「俺達の先輩出来た人だよ？」

「……それはそうですが」

若干懐疑的になりながらも試合を見続ける

敵が次々に吹き飛ぶのを見ると確かに勝負あったなとは思いたくなる

「ほら、決まるよ」

三日月先輩がそう言った瞬間地が震えた
それと同時に皆が飛んでいく

「何が……？」

「見えないかい？」

「見えないです」

「山吹色の波紋疾走、彼の必殺技だよ」

「必殺技……やっぱ誰しもが持ってるんですね」

「キル夫も持ってるだろう？」

「しかし対抗できるか不安なんですけどね……」

「自分が出来るだけやればいいでしょ、ほら終わるよ」

「Aブロック勝者ジョナサン・ジョースター選手です！」

その言葉とともに歓声と拍手が上がる
ジョナサンさんが喜んでそれに応える
いやあ……イケメンだな本当に

「続いてBブロック選手集合してください！」

「それじゃあ行って来ますね！」

「行ってらっしゃい」

そうして向かった

俺の予選が始まる

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「それではＢブロック始まります！」

「おっしゃ行くぜ！」

ざわざわと集まったメンバーを見る

強そうな奴もいる……ただ勝たないといけない

「さって」

「それでは開始します！」

ＧＯサインと共にアイテムを投げ出す

罠を予選では使いたくないが使う事も考慮しないとな

速攻で投げた手榴弾を前に逃げて場外に飛ぶ物、他者を踏む者などいて少し減るこの調子で減ってくれればいいんだが

「兄ちゃん、投げ道具なんて卑怯じゃないかいっ！」

そう言って奮ってくる拳をいなす
軽いな……このくらいなら問題ない

「生憎こうしないと勝てないからよっ！」

蹴飛ばして払う、次々くるがいつもよりも楽だ……俺強くなったのかな

「……何あれ？」

一方試合を見ていた三日月・オーガスは違和感を感じていた
何故こんなことになっているのかと

「やっほー、ミカ君どうっすか？」

「走りか」

三日月の座ってた席の隣に走り鴉が座ってくる

「なんか不満っすか？」

「そんなことはないが」

「折角弟子が戦ってるし見ないとって思ってっすね」

「弟子だったのか？」

「そっすよ……あまり頼ってくれなくて悲しかったっすけど」

「で、その弟子はこれでいいの？」

「どうもこうも……ウチらが言うことじゃないでしょ」

「……何を企んでいるんだろうね学園は」

Bブロックは明らかに作られた試合
余所者だったりトーシロだったり、明らかにキル夫が勝てるように仕組まれているとさえも言える試合である
勿論気付いていないが

「まあキル夫の腕なら負けないでしょ、罠も沢山用意して来たみたいだし」

「……まっ普通ならそうっすよね」

「どうかしたの？」

「いや……どうやら何かやらかすようっすねー」

そうして三日月は試合会場の方を向くと
危惧していた通りやらかしていた

「中々やる様ですね」

「アンタもな」

「罠とか使えないので羨ましいばかりです」

「練習するしか無いけど、後で教えるか？」

「生憎、僕には体術しか無いのです」

「その分足技とかすげえじゃねえか」

「勝てないのが残念ですけどね」

「いいや、正々堂々殴り合おうぜ！こんな面白そうなの罠で終いにしちゃつまらねえ」

気付けばBブロックは二人になっていた罠で終わらせるつもりだったが……相手がそれならステゴロで勝負だな

「養成校1年の岡島キル夫だ」

「来年養成校入校予定のロック・リーです！」

「おう、期待してるぜ後輩」

そうしてバトルが始まる

遠くで先輩は呆れていた

――

「行きますよ！」

素早さに任せた蹴りが飛んで来る
少しのけぞるが威力はそこまでじゃ無い……
ただ……本当に早いなおい

「倒れて……くれませんね」

「当然だ……倒れるわけにゃ行かねえんだよ」

「だったらすみません……決めますね」

何かが来る……と思った瞬間には消えたか
でもこう言う時は決まって

「後ろだろ……!!」

速攻で後ろを向くが誰もいない
は？何処だ……っと

「下か!?」

「行きます！」

「ガッ……」

顎を蹴っ飛ばされて吹っ飛ぶ
俺が飛ばされるなんざ思わなかった
そのまま捕まる……何をする気だ

「表蓮華!!」

頭から地面へと直撃する……
気絶しそうなのを足を刺してなんとか耐える

「甘えんだよ」

「気絶しないんですか!?」

「悪いが喧嘩の師匠はゾンビみたいなもんでな……体術で負けちゃならねえよ」

「ですが、動けない以上はこれで終わりです」

正面から突っ込んで来る
これで終わりにするつもりだと
そしてその一撃をモロに受ける
だがそこで終わりだ

「どうせくらい慣れてるだろうけど、それで当てられなきゃ話にならねえしよ……」

「捕まえるだけでも精一杯でしょうに」

「ああ、だがそれ以上無理をするんだよ今から」

波紋ってものを知らない、だから出来るだけやる

「まだまだ使いこなせてねえけどよ、こう言う使い方なら持ってこいだ」

左手でスカーフをギュッと閉める
同時に首筋に痛みが走り血が流れる

「ホント吸血鬼らしい贈り物だぜ」

「何を……?」

「前の試合見てただろ?先輩からの餞別だ受け取りな」

ジョナサン先輩のような技を目指してラッシュを続ける

スピードが上がるって言った癖にその分血を飲ませろとかどんだ不良品なんだっつーの、多少なら悪く無いが結構血を奪われる
ただ、腕だけなら量もまだなんとかなるけどな

「オラァ!!」

これが俺のケンカだと言わんばかりのラッシュを続ける
当然富樫先輩のように頭を使った戦い方は出来ねえけど、その分どうにかする

「んじゃっ終いだ!!」

最後のラッシュと共に場外へと飛ばす
少なくとも体術しか出来ないアイツにとって復帰するのは不可能なことだった

「そこまで！Bブロック終了です!!」

「うおっしゃあああああ!!」

やってやったぞ長谷川先生！盗賊だってやれば出来るんだってよ

「お見事でした」

「いや、アレで気絶仕掛けたし中々だったぜ？」

「ただ……僕は一回の攻撃で負けたようなものなので……」

「そんなこたあねえよ、逆に殴り合いでここまで出来たら中々だろう」

「来年楽しみにしてますね！」

「おうっ！」

「次はCブロックです！」

「おっといけねえ」

そうして握手を交わして観客席へと戻っていった

刃物使ってたらラッシュで相手がミンチになって、腕だけと握手とかもあったと考えると怖かったな……

――――――――――――――――――――――――――――

「お疲れ様っすー」

「あっ走り先輩もいたんですね」

席へ戻ると二人が揃っているのを見かけ、隣へと座る

「そっすね、頑張ってたの見たっすよー」

「どうでした？」

「控えめに言うと」

「控えめなんすね」

あまり褒められないか……まあ本戦で頑張ろう

「わざわざ体術特化に素手で挑んで馬鹿だなあって」

「控えめな罵倒!?」

「そりゃそれがウリの相手に合わせてるんすもん馬鹿っすよ」

「ごめんなさい」

まあ確かに……そう言われるとそうだな……

本戦ではやらかさねえようにしないと

「キル夫、Ｃブロック始まるよ」

「オールマイト先生か」

「やっぱりね……」

「あの三日月先輩……？」

「キル夫、Ｃブロック見てどう思う？」

「いや……オールマイト先生がいるなってくらいしか」

正直人数多いし見切れてないのもある

「学園の名だたる生徒達はほぼここにいるよ」

「なんで……くじ運がそんなに……？」

そういや俺学園の生徒を1人も見なかった気がする

「仕込みっすね絶対」

「なんで……？」

「キル夫君を上がらせたかったんじゃないっすか？」

「そんなことする理由が分からんのですが」

「それだけじゃないね、名だたる生徒を落とそうとしている」

「それこそなんでっすか……？」

「多分君を上がらせようとしている」

「色々と謎っすね、意味ないでしょうに……盗賊を上らせたい学園の見栄……？」

「うーん、まあ理由はどうでもいいや」

「いいんですか!?」

「今はそうじゃなくてオールマイトの試合見ることが君の使命だから」

「そうですね」

そうやって見ていくが……３年生達も強い……ただ先生が負ける気がしないなこれは

圧倒的なパワー、またスピードでどんどん学園生達を飛ばしていく

「……あれ？」

よく見たらあの中に姉さんも居たが吹っ飛ばされた

「キル夫はさ、勝てるの？」

「勝てるかどうかじゃなくてやれることをやって勝つんです」

「そっか……期待してるよ」

「おうっ！」

Cブロックが終わったのはあっさりとだった

各生徒が頑張ったが、やはりオールマイト先生には勝てなかったようだ

「次はDか……」

「見てなきゃダメだよ」

「分かってます」

この中の誰かが俺と当たるんだから見といた方がいい

盗賊が情報は少しでも手に入れなけりゃ勝てるものも勝てなくなる

そう思いながら食い入るように見ていた

そして８人の決勝進出者が決まった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「それでは決勝大会は明日行われます！皆様楽しみに待っていて下さい！」

藤堂がアナウンスを終えると帰る人たちもチラチラ見え始めて来た

俺も流石に今日はすぐに帰るか……明日からは本番だ

「よう」

そして帰ろうとした時に声をかけられた

「……爆豪か」

「お前みたいなモヤシ野郎が残るなんてな」

「まあなモヤシってほどヘナチョコではねえが」

「ケッ」

言い返したらケチ付けられた……なんでさ

「明日はよろしく頼むぜ」

1回戦の相手……正直予想外でもあったが爆豪と当たることが分かった

残ったのもすげえが……正直いきなり厳しそうな相手だなと

「よろしくか、それは出来なそうだな」

「なんでだ？」

口は悪いがこう言うところは結構真面目なイメージあったんだけどな

「テメエも分かってんだろ？」

「何をだよ」

「予選だよ、明らかに舐められてるってな」

そう言うことか……確かにCに集まりすぎたせいで他が温かったところも多いイメージだったしな

そう考えると不機嫌になるか

「勝てたからよしだろうよ」

「は？それじゃあテメエは勝てなくて当然だったってわけじゃねえか」

「勝った分は頑張るがね」

「まあいい、つまんない試合だけはさせんなよ」

んなこと言ったってどうなるか分からねえしな
しかし爆豪か……予想以上に面倒な相手に当たった
爆破系トラップは効果薄いし、糸系は燃やされる
少し考えねえとな

「勝った以上はこれからも勝つ」

相手がきつかろうと０じゃねえんだ勝って見せる
そうやって明日使う物と使わない物を分けつつ勝つための準備を始めた

第５１話

「１回戦!!爆豪勝己対岡島キル夫始まります!!」

歓声と共に場の盛り上がりが高潮する
やっぱ一大イベントなんだなと思い知らされる

「冷めちまったらすまねえな、一瞬で終わりそうだしよ」

「おいおい、俺だって予選突破したんだぜ?」

「ケツ、組み合わせに救われただけだろうよ」

それは確かに事実だな

運は実力のうちとも言うが、三日月先輩に言うように仕組まれた試合に思えた

「それは爆豪だって同じじゃねえの？」

「あぁ？」

「運勝ちにしろなんにしろ勝ったもんは同じなんだからそうやって行こうぜ？」

「カカッ、そう言うのは少しでも耐えてから言うんだなクソ野郎がよ!!」

互いの言葉での牽制は終わり爆豪が突進してくる
炎をジェットのように操ってくるせいか本当に早い

「クッ」

ナイフを投げて撹乱する

「当たるかってんだよ!!」

しかし全部をかわしてくる
一本くらい当たるか舐めた真似してくれりゃ良かったんだがな

「テメエの小細工なんざ見通しなんだよ」

その言葉と同時に後ろで地面に衝突したナイフが爆発する
流石にこれはバレるか

「相変わらず雑魚らしい戦い方だな」

「はっ残弾無くなって全部避けきれんなら認めざるをえねえわ」

続けてナイフを投げる
しかし今度は避けようとしない

「考えなんざバレバレなんだよ!!」

そして爆豪は炎でナイフを撃ち落とす

そのままナイフは落ちていく

「爆符は高ぇよなあ、無駄にしたくねえよなあ!だからバレバレなんだっつーの!!」

全部を避けさせようとしたがそうも行かないらしい

「(領域を展開してもこいつは絶対に落ちてるものを拾わねえ)」

拾ってくれるなら発掘禁止で祟りでも食らわせられたんだがそうも行かないよなと

「おいおい、終わりか?呆気ねえよなあ」

爆豪が近づくと共に俺は戦斧を構えた

「いつもと違うようだがだからなんだって話だな！」

いつものククリとは違う、それでも気にせず突っ込んで来る
相手に合わせて回るようにブンブン振り回す

「力技か、その程度じゃどうにもならねえがな」

一度足を止めて隙を伺おうとする
だからこそ今だ

ハンマー投げかのように戦斧をぶん投げる
それだけじゃなく

「加速しろ」

口内を傷付けスカーフを血に濡らす
手の素早さを上げて異常なスピードでぶん投げる

「なっ……」

慌てて避けるも避けきれず手甲を砕き腕から血が流れる
直撃はしなかったか……

「曲芸としては中々だったんじゃねえのか？」

「その程度なのは残念だな……」

「一度きりの奇襲が残念だったなァ」

よし……いい具合に頭に血が登ってる
これならもう一つの手も……
そう考えながらナイフを投げる

「おい、何処に投げてんだ？」

しかしそれは飛んでいる爆豪よりも更に下側に向けて投げられた

「前しか見てねえから分かんねえんだよ」

カンッと金属音と共に床から何かが爆豪の元へと飛んでいく

「あ？」

そして弾かれたトラバサミが宙を舞い太腿へと噛みつく

「クソが」

しかしそのまま勢いは収まらず右ストレートでぶん殴られる

「クッソ……止まらねえのかよ」

「この程度で怯むかっての」

そう言いながらトラバサミを外す

だいぶ肉に食らいついてくれたようだが、残念な事に全然無事そうだ

「（なんか塗っとくべきだったな）」

爆豪が怒りで前だけを見ているときに仕掛けたが、何かを塗っている余裕はなかった

予め塗っておけば良かったと後悔しながら地雷を滑らせて仕込む

「残念だな、どんどん出来る手が減ってきてよ」

爆豪の言う通り徐々に手数を見せて来た

流石に二度目が通用すると思えないしだいぶ厳しい

「段々あったまって来たな、油断すりゃ命取りになるだろうよ」

爆豪の能力は長期戦向きだが……俺自身がどうにかする力が足りなかった
だからこそ不利になる

「オラ、前だぜ?」

「っ!!」

慌てて前を向く……いや、正確には爆豪の言葉によって向かされてしまった

「閃光弾」

「あああああああ」

そしてその呼ばれた直後に目眩しを喰らう
正面から直撃して尋常じゃない光量に目を焼かれる

「ぐっ」

その隙に腹にどでかい一撃を喰らうが慌てて薬を飲んで目を直し状況を立て直す

「案外短いもんだな」

「目眩しは致命的だし……そりゃ対策もされるさ」

「モロ食らってるくせに都合のいい奴だ」

あっぶねえええ、偶々持ってて良かった
目眩しなんざ使ってくると思わなかった

「んじゃこれは止められるのかよ！」

全体に火の粉を飛ばしてくる
回避しきれないしこう言った類が一番面倒だ

「それくらいなら問題ねえ」

魔力を飛ばして火の粉を散らす
毎度の如くこれをやっちまったら魔力がもたねえ
ただ……違和感なしに仕込みはできたか

「んじゃ我慢比べといくか」

「ちっ」

察しやがって一番されたくないことをされた
魔力がだいぶ削られるか

「乗ってやるかっての」

多少のダメージは受けたとしても魔力を残す……じゃないとマジでガス欠しちまう
火の粉を回避しようとするとニヤリとして来る

「痛ッ!?」

ただの火薬と思いきやぶつかって来て爆発しやがった

……能力はここまで凝縮出来るのかよ……厄介過ぎんだろ

「わざわざぶつかるとはな、お笑いだぜ」

「……」

１発程度なら問題ないんだが……これは何度も食らうとまずい

しかも拡散されている以上また魔力を消費して……

「次行くぜ？耐え切れんのかよ」

次のを放とうとしてくる

攻めなきゃダメか……

ポシェットシールドを展開してスカーフを締める
血が足りなくなりそうだが今使わないとそれ以上に流れそうだしな

「食らうかっての」

超加速で距離を詰める
爆発を盾で防ぎながら進むが、盾の無い右手はかなり痛む
それでも武器を落としてはならないと気張りながら爆豪に向かってククリを振り下ろす

「ってえな!!」

頭部へ直撃したのにまだピンピンするかよ
すかさず追撃と左手の盾で隠していたナイフで狙う

「食らうわけねえだろ!!」

「ツダ……」

左手に一撃を喰らいナイフを落とす

「残念だったな、それが本命だったろうによ」

「……」

「毒だか麻痺だか塗ってたんだろうけどよ、そうも行かねえよ」

「そいつはどうかな」

「無理すんなっての、わざわざ隠してたのがバレてんだよ」

「……」

「さて……テメエはボンクラ程じゃねえが雑魚にゃ変わりねえんだよ、次の試合のため

に終わらせるぜ」

爆豪がいい加減舐めた態度が終わる
発言的には舐めきってるが目がマジだ……
まだ仕込みは足りねえよ、どうしたもんか

――――――――――――――――――――――――――――――――

当然だが戦士と盗賊でステータスが違う……
盗賊は技能で戦う職業であり、正面から盗賊が勝てるわけがない
いくら仕込めるかだ

「（武器を投げる余裕すらねえ）」

防戦一方だが更に状況は悪い
収納性を考えてポシェットシールドにしていたのもあり、防御面で劣り耐久がやばくなってる

だからと言って緩めると背中から爆撃が、正面から拳が飛んで来る
眩みそうなのをなんとか耐えるがキリがねえ……

「加減してくれよってな」

「生憎だがもう終わらせるんでな」

まあそうだよなあ……どうすっか……

「オラ行くぜ」

「……耐久がもうアウトだな」

シールドを仕舞う、このまま使い続けるとぶっ壊れる
ぶっ壊すと直す自信ないし仕方ない……
そのぶん爆豪に殴られるが……この後も使うし仕方ねえだろう

「舐めてんのか?」

「いや、ステゴロの方が合ってるんでな」

「乗らねえぞ?」

「残念だな」

ナイフを投げる、それもわざと外すように
それを見て嘲笑うようにする

「どうせワイヤーだろうよ、分かってんだよ!!」

速攻でワイヤーは燃やされた
少しくらい引っかかってくれても良かったんだがな

「殴り合い言う癖に全然した記憶がねえんだがな」

「しょうがないしょうがない」

「しょうがなくねえよ!!」

挑発に乗ってくれたか？

「はぁ……」

「なんだよ……」

「やめだやめ」

「あん？」

降参すんのか？爆豪がすると思えなかったが

「次の戦いなんか考えるのが馬鹿だった」

「あ？」

「一撃で終わらせる、死ぬと思うから治してもらえよ」

「……」

マジで来やがったか……だがチャンスでもあるんだが
正直賭けだ、いつも通りの運頼みだ

「終われや」

そう言うと爆豪の周りの熱が更に高まる
尋常じゃない熱量が俺にも伝わってくる……熱い
それと合わせて俺はポシェットから道具を出す

「Ａ・Ｐ・ショット」

「危ねっ!!」

慌てて手に持った煙玉を床に叩きつける
突然膨大な量の煙が舞台を包む
観客たちや実況から不満が出ているようだがそれをスルーする

「（危ねえええええ）」

なんでアイツビームなんざ持ってるの!?
煙玉で焦点ズラさなゃまずかった

「生憎テメエが動いてんのは見えてんだよ」

でええすううよおおねえええええ……
畜生見つからないと思ったんだけどな

「次は当てる」

「恐らくは熱が見えんのか」

だったらギリで避けれそうだがどうすっか

「はっ、そんなもん続けると思ったか間抜けがよ!!」

煙が激しく揺れた……ビームじゃない!?

「ハウザーインパクト!!」

爆発音が近づいて来る……爆発と共に突撃してくれるのか？

待っていたことだが……爆発しながら来るのか

「だったらドシンプルだな」

身体への負担なんざ知らねえ……時が進んでくれるかどうか
いつもの俺の魔術が発動してくれるか

「「俺の勝ちだ!!」」

互いにそう叫びぶつかり合う……筈だったが

「何処だ!?」

爆豪はキル夫の姿を見失う、そして慌てて探し出す

「うおらあああ」

直後に上方から衝撃を受ける
目の前にいたはずなのに、しかも尋常じゃない高さの空にいた

「ッガ……」

そのまま爆豪は頭から床に叩きつけられる
さっき以上の渾身撃に本来なら起き上がれないはずだが……

「この程度で終われるかっての！」

意地と根性で無理にでも立ち上がる
だが……

「俺の勝ちっつったろうが」

「……何をした？」

爆豪が硬直して動けなくなる
頭から直接脳へと痺れが周り立ったまま動くことが出来ない、本当なら喋れるのもおかしいんだけどな

「足りない罠をどう使うかだったが……運が良かったなこれは」

「足元に仕掛けた記憶はなかったはずだが」

「仕掛けたよ、さっきな」

「……」

「お前が撃ち落としたんだよ」

「……ナイフに毒じゃなくてナイフに見せた罠か」

沙都子特性の偽装罠、うまく決まるなんざ思わなかった

煙を撒く前に場所確認して良かったが、うまく刺さってくれた

「だがどうすんだ?十数秒もありゃもう解けるぜ?どうにか出来んのかよ?」

腕に魔力を溜める、ちょうど見えない今こそ必殺技をと

「あるんだよそれがな」

「ハッやってみやがれ、潰せなきゃ俺の勝ちだぜ」

「デスハンド!!」

溜めた魔力を腹へとぶち込む
鎧は砕けダメージが入ったはずだ

「……残念だったなぁ!!」

口から血を流しながらもニヤリと笑う
本当にこいつ化け物だな

「もう魔力を練れねえだろ？使い切った一撃だろうしな」

「確かに割と限界だな」

時を移動したこともあり魔力がほぼ底を付いている、だからこそ生成することはできない

「だから、仕込みを使うんだよ」

先程散らした魔力は少しは霧散してしまったがまだ十分残っている
それを収集する

「……さっきの以上だぜ？死ぬと思うから治してもらえよ？」

さっきの爆豪の言葉を重ねる

「はっ笑わせんなよ」

爆豪はそれだけ言い残して

「デスハンド!!」

２度目の必殺技を全力でぶち込んだ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

２度目の巨大な爆発に煙が全てぶっ飛ぶ
展開の進んだ状況に観客達は驚いていた
一体何がと思いつつ舞台を見下ろす

「……」

「……流石に毎日練習していたおかげで２発なら身体が耐えたか」

そこで皆が見たものは
倒れている爆豪と立っているキル夫の姿
心の底からキル夫が勝つと思っていた人は数える程であったため皆が驚いている

「一体何があったんだあああ、キル夫選手だけが立っているううう」

藤堂も驚いたようにアナウンスを続ける
こいつも俺が負けると思ってたな……いいもん……

「勝者岡島キル夫選手!!」

その言葉に歓声が上がった
盗賊が戦士に勝つと言う大金星に皆興奮が冷めやらないようだ

「何があったんですか?」

「まあ秘密な」

「えー」

「次の試合でも使う気なんだよ」

ネタバレされてたまるかっての、これバレたら俺マジで手段が減るし

「それでは両者を急いで治療室へ」

「っと爆豪生きてるのか……？」

慌てて爆豪の方を見る

「テメエ、甘ちゃんじゃなかったのかよ」

「何がだ？」

「こんな平気で人が死ぬ技なんざ撃てる奴とは思わなかったぜ？」

「だって爆豪生きてるじゃん」

と言うか爆豪生きてるじゃん良かった……

ここの舞台の上では死んでもすぐなら治療ができると聞いていたが……それでも流石に目覚めが悪くなるし

「それは俺がタフだからだっつーの」

「だから二発撃ったし」

「救いようのない奴だな……」

いやそれはお互い様だろうに

「負けんじゃねえぞ」

「自信ない」

「テメエ……」

「そもそも今回だって奇跡だしな」

明らかなジャイアントキリングだろうし、俺自信も本気で勝てると思っていなかった
だからこそ嬉しくもあるが今後が不安でもある

「ケツ、運も実力のうちなんだろ?」

「ああ、そうだな」

「だから負けたらぶち殺す」

そう言って医務室に連れて行かれた……死刑宣告されたか

「俺も休むか……」

２回戦までは時間があるがダメージがでかい
休んでおかないと次に響く……魔力どころか血もだいぶ減ったし……あとシールド補強出来ないかな……

「やる事は多い」

明らかに格上だらけの武闘大会だが、ただで負けてやる気はしない
そして運勝ちでもなんでも勝ってやると思いつつ舞台を降りた

「お疲れ」

「アカネ？」

すぐ側にはアカネが控えていた

「じゃ次の試合でしょ？」

「なんかもっと喜んでくれてもいいと思うんだが……」

「だって私どうでもいいって言ったじゃん」

「……」

それでも褒めてくれたっていいのよ？

「出掛けるよ」

「俺休みたいんだけど」

「どうせポーション飲みまくるだけでしょ？だからいいじゃん」

……まあ俺の都合で寂しい思いさせた感あるしそれはそうか

「何処行きたいんだ？」

「甘い物食べたい、武闘会中は安くなってるし」

「分かった分かった」

言われるままについて行く
好きな人と居る方がただ休むよりは効果あるかなと思いながら
そして街へ出かけながら思った

あれ？次の試合全く見ないの拙くねって？
既に手遅れだったのは言わんでもない、諦めた

第52話

―――――――――――――――――――――――――――――

「おう兄ちゃん、アンタ大会1回戦突破した兄ちゃんだろ?特別にタダにしてやっから受けとんな」

「ありがとうございます!」

おっちゃんからジュースをもらってそれを飲む
そしてアカネとぶらりと回る
今日は何がしたいんだろうなと思いながら

「で、どうするんです?」

「だいぶ不機嫌だね」

「まあ、大会中ですからね」

「大会ばっかじゃなくて、こう言ったのも楽しむべきだと思うよ？」

「そりゃそうですけどね……」

学園とは違ってなんでもあるようにさえ思えるくらいの賑わい
楽しまなきゃ損だってのも分かるが……

「ほら見てきっ君あれ」

「なんだありゃ……」

「パワーストーンだって」

「興味あんのか？」

「いや、無いけど」

って無いんかい、ああ言うのに興味があるとか言い出すと思ったが

「自分の運を信じるならまだしも神頼みって馬鹿らしいじゃん」

「そんなもんなのか？」

「そうでしょ。と言うか一番神信じてないだろう君からそんな言葉出るんだね」

「まあ……それはそれこれはこれ感はあるし」

「見に行こっか」

「興味ないんじゃ？」

「興味ないからこそだよ」

「???」

アカネは一体何を言っているんだ?

「わざわざこう言ったものをどう言ったご利益で売りつけるのか興味あるじゃん」

「……だいぶ趣味が悪いことで」

「知ってるでしょ?」

「……まあな」

アカネの性格上そう言ったもの見るのが楽しいか

俺としては……なんか胡散臭い品見ることになるが……まあアイテムの知識広めますか

「いらっしゃい」

「これどう言う効能があるの？」

「おうお嬢ちゃんお目が高いね、そいつは健康祈願だ」

「健康祈願ねえ……」

そう言われたアミュレットをアカネはマジマジと見ている
確かに……健康になりそうな見た目している気がするが
ただアカネは興味なさそうに次の物を見る

「……」

「おお嬢ちゃんいいもの見るねえ、そいつは金運祈願だ。いつのまにかガッポガッポになるぞ？」

「これにお金かける時点で出費増えてるんだけど」

「……」

言い返せないのか店主は少し引き攣った顔をしている
まあ予想外の客だろうしな

「ふんふん」

それなりに周りの石も見ていく
その度に何か言われるのかと店主はビクビクしているようだが、金運祈願以外は特に何も言わなかった

「……あれ？」

「どうしたアカネ？」

何が疑問に思ったようでそれを見にいく
えっと……指輪か？

「そいつは指輪だよ」

「あの、それだけですか？」

「その嬢ちゃんになんか言われんのが怖いんだ、許してくれや」

店員……それでいいのか？

「ふーん」

素っ気なさそうにしているが、さっきよりもマジマジと見ている
もしかして欲しかったり？

「欲しいのか？」

「……別に」

どっちだろうな……欲しそうにも思えるんだが、余計な事はしたくないって気持ちもある

リスクを考えると

「おう、兄ちゃんそいつ買うかい？」

「え？」

「彼女さんが欲しがってるんだろう？安くしておくぜ」

「じゃあそれなら……」

「いらない」

「え？」

「出ようきっ君」

「あっああ……」

「まっまたのお越しを……」

店員さんには本当にかわいそうなことをしたかもしれない
ただ……明確にいらないって言うなら良かったんかねえ

「よかったのか？」

「何が？」

「指輪、気になってたみたいが？」

「そう見えた？」

「ああ、見えたが」

「ふーん」

「ふーんってさ……」

「指輪ってさ」

「ああ」

「女の子の憧れなんだよ」

「マジで？」

そういうところが俺は疎いって言われるんだろうけどさ……
ただ知らないもの知らなかったんだ……許してくれ

「うん」

「だったら欲しかったってことか……気付かないで悪かった」

「違うよ」

「え……違うの……？」

そう言う話だって思ったが違うんかい
だったらどう言うことだ？

「アカネは他の人と違うから一緒にしないでほしいって言うことか？」

「それも違うよ」

「えぇ……」

えっと……どう言うこと？俺が分かんないのが悪いのかこれ
他の男達だったら分かるのかね？だったら尊敬するわ

「当ててみて」

「相当難易度高くないですか？」

「当てるのが男の役目でしょ？」

「そうなのか？……まあそうなんだろうな」

必死に考える、ただ浮かばないのは悪くなくないか？
欲しくないからかって言うと欲しそうにしてたし
だったらなんで欲しいってならなかった？

分からん!!

「分かりません」

「素直なのはきっ君の良いところだけどさ、考えた?」

「考えはしました……」

「そっかぁ」

「勉強不足ですみません」

「勉強不足なのは事実だけどさ……」

そりゃそうだろうしなぁ
と言うか入学以外学力を競った記憶がないんだが
そもそも俺はこう言うの疎いしさ

「きっ君さ、さっきの店ってどう思った?」

「どうって言われましてもねぇ……」

　強いて言うなら店員さんが可哀想に思ったかな、アカネにとっちゃ当然だったのかもしれねえが

「胡散臭くなかった?」

「まあ、パワーストーン屋ってそんなもんじゃないんですかねえ?」

「もっとマシな石置いてる店はあちこちにあるよ」

「じゃあ指輪も?」

「指輪は質は多少マシだったね」

「だったら」

「もう一回言うけど女の子にとっては大事な物なんだよね」

「ふむ……」

「妥協なんてされたくないし、良いもの欲しいんだよね」

「妥協は……するつもりは無いですが」

アカネが欲しいって言ったものは手抜いたりしたく無いし、元からそんな気はなかったが

「結婚指輪とか色んなものあるしねえ、大体は恋人に贈る大切な物」

「けっ結婚!?」

「流石に早過ぎかもしれないけどさ」

「まあ……まだ冒険脳だしなあ俺」

そう考えるとダンジョンの宝箱とかで出て来た指輪プレゼントとかもダメなパターンじゃ無いっすか、危ねえ危ねえ……綺麗だからと渡してたかもしれねえ

「まっそう言うものはちゃんとしたところでちゃんとした物を頼むってことで、ね？」

「ウス」

無駄金は使わないつもりだが……それでも貯めとかなきゃなあとは思った

指輪ってさっきの店はそこまでだったが……マジな奴だとどれくらいするんだろうな

少しだけ、未知の恐怖に震えた

――――――――――――――――――――――――――――――

「俺、こんなことしてて良いんですかね……？」

なんか並んでいる店にアカネと一緒に並んで来ちゃったけど……良いのかなって

「どうしたの？」

「いや……俺明日2回戦だけどわざわざ人気の店まではアリなのかって」

「またその話？」

「だって……1回戦上がってきたメンツばかりだしな」

「それは分かるけどさ」

「心配なんでっと」

「きっ君いつ休んだの？」

「え？いつって？ちゃんと寝てますが」

「そりゃ寝てはいるだろうけど……そうじゃなくてさ」

「ん？」

「休んで無いじゃん」

「休んでますよ？」

「中嶋に言われたでしょ、精神的に休んでないって」

「精神的に……」

「きっ君大会前日までクエスト受けたり鍛錬してたりしてたしさ」

「そりゃそうですが……」

「明日試合だけど少しだけ戦いから離れた方がいいでしょ」

「……」

精神的に疲れてるだっけ？中嶋にもそう言われたが……

やっぱり自覚がないんだよな

「ひとまず甘いものってね」

「まあ美味しいですね」

人気店ってことだし確かに美味い

食い過ぎも良くないがな

「ご馳走様でしたと、それじゃあ行きますか」

「それじゃあ何処行く？」

「草原でも行きましょうか」

「分かった」

そうして草原へと辿り着く
祭りを楽しむのも良いが少し休むかと

「何するの？」

「休めって言ったんだから何もしませんよ」

「そっか」

そうして草原へ寝転ぶ

本当は大会が気になるんだが……それはそれでやらかしたら嫌だなと

そう思ってたが気付いたらすぐに寝てしまった

「おやすみきっ君」

この時のアカネの顔はやっと落ち着いたような顔をしていた

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

大会の二回戦が始まった

相手はあのジョナサン・ジョースター

元々敵いはしない相手だと分かっているはずだが

それでも圧倒的な力の差を見せつけられた

「……」

「なんすかジョナサン先輩」

「正直、君には失望したよ」

「なっ何を言って!!」

「オルガ君から後を継いだと聞いていれば、一回戦を突破して期待していたと思えばこのザマだなんてね」

「戦士には敵わねえのはしょうがないでしょうが……ましてや先輩だし」

「戦士には敵わない?ふざけないでくれないか?」

「何がだよ!!」

敵の挑発に乗ってしまっているようでシャクではあるが力の差と言うものは存在するし

「自分は盗賊だから、それは言い訳だろう?」

「言い訳って」

「1回戦で君がやったように盗賊にも戦い方があるはずだろう?その筈なのに勝てるわけがない?まずその心が間違っている!」

「うっせえ……だったら!!」

ナイフを投げる、罠を張る今までやったことを全部活かす

しかし届かない

「やっぱ……差があんじゃねえか」

「差だって？」

「１年と元３年じゃ差があるに決まってんだろ!!」

「……」

「なんだよ」

「ロクな練習もしてない癖にふざけているのかい？」

「なんだと？」

「君は大会までにまともに練習したのかって話だよ」

「したに決まったんだろ!!ずっとずっと苦しむ程したんだぞ？」

「それで自分が満足出来るまでしたのかい？」

「……」

していない、本当であれば二回戦の戦いだって見てからする筈だったのに
一方の相手は煙幕はあれども俺の戦いを見ていたはずだし
相手を知った動きは出来たはずだ

「本当に、君は言い訳して逃げてるだけなんだよ」

「畜生がああああああ!!」

怒りに任せ飛びかかる、そんな短絡的な事はしてはいけないのに

「……せめてもの情けだ、これ以上惨めを晒す前に終わらせてあげよう」

そう言うジョナサンの体は漲っていく
しかしもう避ける事は出来ない

「山吹色の黄金疾走」

「カハッ……」

そのまま血を吹いて倒れる、立ち上がる気力もない

「せめて君が今度はもっと強くなっている事を祈っているよ」

こうして俺の大会は終了……？

そこで目が覚めた

――――――――――――――――――――――――――――――――

何をやっているんだ俺は……

落ち着け、まだ二回戦は明日だ

しかも相手はジョナサン先輩じゃねえだろうが……!!

「クソっ……ある意味悪夢だな」

そう言いながら二回戦の相手を見る

良く分からん奴とオールマイト先生、どっちかではあるが……十中八九オールマイト先生だろう

「……ジョナサン先輩より強いんじゃねえか?」

どう考えてもそうじゃないかと不安になる

本当にこのままでいいのかと

「実はジョナサン先輩がまだ足りないって思って夢に来たんじゃ……?」

無論そんな事はあり得ないのだが、今の俺には不安しか残ってない

どうあがいても練習が足りないと

今やったところで付け焼き刃にしかならないはずなのだが

「足りない……まだまだ足りない」

どうしても足りないと立ち上がる

届くか届かないじゃなくて……何処まで行けるかだ

「どうしたの？」

それに心配してかアカネが声を掛ける

「足りねえ」

「何が？」

「もっともっと、練習しなきゃ追いつかない」

「は？」

「最後の仕上げをするから」

「ワーカーホリック？」

「なんじゃそりゃ」

「とにかく……働き過ぎに近いものだから今日は休んで」

「ダメだ……それかあ間に合わない」

「間に合わないじゃないでしょ！」

「届かないんだよ!!」

「この後のきっ君の人生の方が大事でしょ!!ぶっ壊れちゃうかもしれないんだよ!!」

珍しくアカネが激昂する
だが今回は止まることができない

「今回ばかりは止められないんだよ、第一学園に負けちゃまずいんだろ？」

「きっ君がどうにかなったら手遅れなんだよ、あの時だって……足がもう治らないかと思ったのに」

「冒険者は命を張ってるんだから、今更そんなこと気にしちゃられねえだろ」

死なないで、かつてのその言葉も既に薄れていって
彼女を守るために強くならなきゃいけないそればかりが先走って
その結果、より深い傷を彼女に与えているとも知らずに

「あっそう、好きにしたら？」

「ああ、そうする」

アカネはそう言ってどっかに行ってしまう
彼女がもう戦わなくてもいいように
肩を並べて戦うって考えもあったが
ダンジョンで痛い目にばかり会うからこそアカネにそんな危険な事はさせたくないと
ジョナサン先輩が夢の中で力不足って、練習不足って言ったことが分かる程度なのだから強くならないとと
武器を取り出して振り始める、オールマイト先生の戦い方は折原先輩に教わったから明日、負ける気で戦うわけには行かねえと

…

「どうして分かってくれないんだろ?」

彼は明らかに過剰すぎる、自分に負荷をかけ過ぎている
このままじゃ壊れることなんて目に見えている

「見え張りたい気持ちも分からなくないけどさ」

男ってそう言う生き物だし、ホントこう言うのって私はダサいって思うけど

「まさかきっ君、私を守る立場だなんて思ってないよね？」

そんな事はあってはならない、護るのは私の方だと
それだけの力は私にはある、だけど……まあ言ってないし理解してなさそうだけど

「ただ……私が2年になった以上は察してくれないかなって思ったけど無理かな」

彼には無理だろうと思った、ただ……なんで盗賊の癖に自分が全部できるなんて思い込んでいるのだろうか？

「イラつく」

悪いのはきっ君の方だし絶対私の方から謝らない
本当にシャクだが彼は痛い目に遭わないと勉強しないんだなって

「きっ君が居なくなったら私に何が残るんだろうって」

母親も父親もいる、いるしきっ君の前ではいい子を演じた
ただ、あの人たちは娘よりも世界の方が大事な人間だ

「だからこそ、心から本気で私を愛してくれたのは君だって言うのに」

私にとっても一番は彼になっていた、失いたくないもの

「……」

だからこそ、使命に囚われないで欲しいのに

壊れないように気をつけて欲しいのに
強くなることだけに固執しないで欲しいのに

「カッコ悪いよ、きっ君」

結局、互いの溝は埋まらないまま二回戦へと向かうのであった

――――――――――――――――――――――――――――――

第53話

―――――――――――――――――――――――――――――

「それでは、二回戦！冒険者養成校1年岡島キル夫対同じく学園の教師オールマイトを始めます！」

気分は最悪だ

あの後頭を冷やすには遅かったし、アカネとは仲違いしたままだ

俺のことを心配してくれてたのに……負けるって分かってもどうやら納得できてなかったわけであって

「大丈夫かいキル夫君？」

「……何がですか」

「始まる前から苦しそうだけどね」

「気のせいですよ」

「それではバトル開始！」

大したマイクパフォーマンスもしないまま試合は開始される
長期戦になればなるほどこっちが不利だ
速攻で決めなくては……

「さて、初めは軽くかな」

軽くという割にはかなりのスピードでこちらへと突っ込んでくる
冗談じゃない、当たるものかとかわす

「弱点が分からねえのは辛いな」

「今日は彼が居ないから弱点は探れないだろうね」

折原先輩が渡して来たメモを頭に叩き込んだが……正直技術が追いつける気がしないな

ただ……決めるのは油断している序盤しかない

「収縮……」

先程まで行われていた先輩達が戦闘中に散らした魔力を集める

相手は気にもかけていない

だからこそ……この一撃に賭けて……

「デスハ……」

全力でデスハンドを叩き込もうとする

しかし、腕の猛烈な痛みに逆さ手で抑える

「うぐっ……あああああ」

「ダメじゃないかキル夫君、腕を怪我しているようだ」

不安になりながらも腕を見る
腕は腫れ上がっていた

「何したんすか……？」

「何もしてないよ、強いて言うなら君が心当たりあるなじゃないか？」

「……」

昨日あの後の練習中に腕の痛みは多少あった
ただ……そんなのは一々気にしてられないと
リスクすらも投げ捨てて練習に励んでいた
休んでる時間なんてなかったから

「折原君のことを思い出すね」

「は？何を？」

「あの時は私の脇腹ばかり狙って来たしね、同じくさせてもらおうかな」

「あっクソっ……」

慌てて盾を展開するが、スピードを無視した拳を叩き込む
既に腕の骨が折れてるかもしれない

「残念だけど、どうしようもないよね」

「なんでだよ……!!」

「力の差は分かっていたよね？」

分かってはいるが……分かってはいるが降参なんざ出来るか!!
アカネにあれだけ啖呵切って情けないままで終われるかよ!!

「うーん、やっぱどうしようもないかー。しょうがない君は諦めよう！」

「え？」

全力で脳へと鉄槌が入る
爆豪のと違うその力に気を失いかける
ただ気絶する最後に聞こえた声は、実況のアナウンスと

「私が欲しかったのにな」

っと言うオールマイト先生の言葉だけだった

――――――――――――――――――――――――

「っは!?」

気絶から慌てて目が覚める、ベッドのような場所だが……予想していた医務室や集中治療室ではない

「……え?」

「お目覚めかねキル夫君!?」

「校長……?」

校長先生が座っている、身体を起こそうとするが起きれない

拘束されている、一体何故とは言わないが……

「なんのおふざけですか?」

一応言ってみる、おふざけであってくれと願いながら

「君が一番分かっているんじゃないのか？」

「……」

ただ、そうはいかなかった

なんで……急に？

今までこんな事なかったのに

「まず一つだけ聞いておこう、〝オルガ・イツカは？〟」

『重体で入院中だ』

つなんで今俺が何を口走った!?

「やはりか、どうりで見かけないと思ったよ」

「……何がしたいんです？」

「君は神をどう思う？」

「神……、なんでんなものを答えろと？」

「ふむ、どうでもいいと思ったが……気になる反応だな……ならば〝正直に話したまえ〟」

「クソが……」

その名前を話すんじゃねえと……必死に抗う
それでもつい言葉が出てしまう

『クソッタレな存在だよ』

「てっきり君は神に好かれていると思ったが」

「ふざけんな!!なんであんな奴らに……!!」

「会ったことあるのかね？」

「逆だ、俺だけ俺だけ見捨てやがった……!!」

「加護がない、か……」

「うるせえええええええ!!」

「……だが君は神に愛されているように思うがね」

「何がだよ」

「その能力、明らかに人間のものじゃない……神から授かった物だろうよ」

「……」

「もしかしたら君にその力を与えたのは、異世界の神なのかもしれないな」

「……それで、それがどうしたんだよ？」

「時にね、吸血鬼の地位は低いと思わないかね？」

「……いきなりなんだよ？」

急に話を変えて来て、何が目的だ？

「それもそのはず。吸血鬼は数も少なければ、大いなる力もない」

「だったら勝手に滅びりゃいいじゃねえか」

俺達の邪魔をしないでくれと

「……だからこそ作る必要があるのだよ」

「……さっさと要件を話せよ」

「吸血鬼の神をね」

何を言い出してんだこいつは？
ついに拗らせて頭がおかしくなったのか？

「それで、神を作ってどうするんだよ」

「吸血鬼の立場を上げるのだよ」

「……俺にもそれを信仰しろと？」

「いや、そうではない」

「だったら……」

「後少しまで研究に届いている……その最終段階への礎だよ」

「は？」

「さて、後はボンボルド先生に任せるかな」

「待て！これで誰もが気付かないとでも思ってんのか!!」

人が失踪することがあることは理解出来たが
それでも……消えて無くなったら誰もが黙ってるわけねえだろうが
流石に大会に出てた俺を気にしない奴なんざいねえだろうよ!!

「ああ、それは問題ない」

「何がだよ……」

「君は勝手に話したくないことを話していたのは覚えているかい？」

「……」

頬を嫌な汗が流れる

まさか……そんなことあるわけないだろう？

「吸血鬼の血が入った人間はその主人には逆らえない」

「……入学の時に入れた奴か」

「そう、命じて声が届けばそれは伝わる」

そんな話聞いたことねえよ……嘘だろ……？

勉強不足だったんだろうなと今更悔やまれる

「生憎オルガ君には通じないから困っていたところだが……ちょうど居ない今が良かった」

「オルガ先輩何かあったのか」

「ただそれ以外の皆は〝岡島キル夫の事を忘れろ〟これを言えばいい」

「……そんなのありかよ」

「それではキル夫君、来世があるとしたらまた来世で会おう」

そうしてボンボルドに引き摺られて実験室へと連れていかれる

後悔やら義憤やら様々な感情があったが

一番思ったことは最後に喧嘩別れしてしまったアカネに会いたいと言うことだった

そのまま学園から一人の少年が失踪した

――――――――――――――――――――――――――――――

「クソっ……キル夫……なんでテメエまで」

血塗れになったオルガは悔やみながら座り込む
キル夫が居なくなってすぐ、傷が回復しないまま襲撃された
なんとか逃げようとするも限界が近い

「クソが……」

アイツを護りきれなかったことを悔み続ける
自分は助けてもらった立場なのに助けてやれなかっっと

「はあっ……俺もすぐ後を追うことになろうとは残念だな……」

学園を許さないと思いつつも既に力も湧かず倒れ込む
畜生……本当に俺は一人じゃ無理なんだなって

「アイツらにはまだ俺が必要だってのに……」

ここで止まるわけないと……そう思っていながらもそのまま止まらない血に苦しむ
そのまま自分の死を悟った

「神様よ……こう言う時にこそ報いてくれねえかな……」

その声は誰にも届くことがなかった

――――――――――――――――――――――――――――――――

「おいキル夫……お前は何処だ……？」

三宮三葉には弟がいた

義理の弟ではあったが、呆れながらもそれを受け入れてくれていた
その人物確かにそこにいたはずなのに
皆口を揃えてそんな人物はいないと言う

「嘘だろ！キル夫だぞ!!お前も助けてもらったじゃないか!!」

「そんなこと言われても知らないものは知らないさ」

「そんな奴だと思わなかった……アイツは居なくなったんだぞ!!探さなくていいのか!?」

そう言われても肩を竦めて知らないと言う
なんでだよ、なんでみんなそんな事を言うんだよ

「勇君もシノアも……新条先輩だって知らないって言う!!そんなわけあるもんか!!」

あんなに仲良くしていただろう!!

勇君だって大切な唯一の友達だったろうに……なんでそんな知らないなんて言えるんだよ……

「かなでも狛枝もどっかに消えてしまった、アイツらなら知っていたと思ったのに……」

かなでや狛枝のことは皆知っているらしいが、学園を辞めたって聞いた

「なんで……なんで皆からキル夫の事だけが消えてるんだよ」

大会の結果を見直しても彼の名前は別人に書き換えられている

そんな奴、皆見てなかったし、いなかっただろう……

「お前は幻なんかじゃない……そこにいたのだろう、なんでだよ……」

誰にも知らない弟をずっといたと少女は確信した

そしてそれから、ずっと彼女は弟を求めていた

それは、後輩達にも及んだ

――――――――――――――――――――――――――――――

「二人とも聞き分け良くてよかったよ。もっと反発されると思ったけどね」

新条アカネは冨岡義勇と柊シノアにあるお願いをしていた
岡島キル夫の事を忘れたことにしてくれって
このまま探り続けるのは3人の身が危ないと
文句こそあったものの三宮三葉の身を案じ受け入れてくれた

「さってと……あの二人が何処に消えたのかは分からないけど、私は私としてやる事をやらないと」

復讐なんてガラにもないって思っていた
家族を……兄を失っても少しは気にしたとはいえそこまでなんとも思わなかったから
ただ……それでも許せない、それ以上の存在を、ただ一つの大切なものが奪われた

自分が愛して、自分を愛してくれた人を奪われた

「絶対に許さない」

自分の力だけでは足りないことが分かっている
だから、強くなる……彼が嫌っていたから、きっ君と会ってから今まで一度もしなかった脳髄を再び使い出す

「私だって、全て奪うよ。それが盗賊だもん」

学園の有望な人間の脳髄を全部貰ってやる
強くなるために、学園から奪うために
彼が居ない世界で誰が死んでも構うもんか

「情なんて要らないよね」

来年からは新入生を後輩では無く、脳髄と思うことにしよう

所詮その程度の人間にしかならないのだから
後輩達の命なんて彼に比べたら何人居ても足りない

そうして時は進む

…

「オッス！俺やらない夫！冒険者を志す一般人だ！」

一人の正面が冒険者養成校の門を叩いた
風貌は多少キル夫に似ていたようにも思えたが、どう見ても別人だ

「そんなわけでやって来たのが冒険者養成校！」

冒険者としてやっていく為に成長する為にここに通う
強くなる為にここに通い出す

「俺は冒険者として成り上がる!!俺にはその自信がある!!」

少年は野望を持っていた

「可愛い幼馴染みや友人と共に最強のパーティ（ハーレム）を作るんだ!!クックック、ワクワクが止まらねぇ〜〜〜」

こうして踏み台（キル夫）は役目を終えて物語は主人公（やらない夫）へと移り変わる

そしてこれからやらない夫の冒険が始まる

――――――――――――――――――――――――――――――

終わり???

「っとここまでが正史だ」

一つの影が貴方……岡島キル夫の前に立っている

「悲劇としては一流なんかねえ、よくあるチープな話だと思うんだけどな」

良くある話と彼は言い出す
人生がよくあってたまるものか……

「わざわざなんで俺に文句を言うんだよ?」

「別にいいじゃねえかそれくらい文句言ったってよ。でさ、お前もそう思わねえか?ってな」

「知るかよ、これが正史なんだろう?だったらもう俺を休ませてくれよ……」

どうしようともどうすることも出来ない
もう俺の役目は終わったんだしもういいだろうと
踏み台としての人生だったが……今はなんだかもう疲れたんだ

「本当にこれでいいって言うのか？」

「いいんだよ、どうしようもないし……どうにかなるってのか？」

「いいも何もお前は前は俺に頼んだろうよ」

「は？」

そんなことした記憶がない……

第一目の前の見えない存在はなんなんだよ、会った事ねえぞ？

「ほら、海で溺れた時に死にたくないって俺に頼んだだろうよ」

「海……学園に来る時に……!?」

「あーそんなだっけ？覚えてねえわ」

だいぶフランクだなこの人……まあ助けてもらった恩人なんだろうけどさ

「まっそん時少し〝俺の能力が移っちまったけど〟使いこなせてたようだしな」

「俺の能力だ？」

「時関係、本当は渡すつもりはなかったんだが助ける為に渡っちまったらしい」

「もしかして……」

「なんだ？」

「もしかして……アンタが神ってやつか？」

「あーそうだな……予想は出来てるだろうが、この世界の神じゃねえんだけどよ」

「なんでこの世界に？」

「偶々知り合いの気配がしてな、この世界に来たんだが……死にそうだったからよ面白そうだと助けてやったんだ」

「……まさしく神の気まぐれか」

本来ならばあそこで死んでたのか俺……

校長の言ってた別の神の存在って目の前のこいつのことかなやっぱ

「じゃあ、アンタに頼めば願いを叶えてくれるのか？」

「何を願うんだ？」

「……アカネにもう一度会いたい」

会って謝りたい、好きだったと伝えたい……元気でいてくれと伝えたい

もう戻れないとしてもアカネに伝えなきゃって思うことが沢山ある

「……条件が一つだけある」

「なんだ？」

「お前、俺の眷属になる気はねえか？」

「眷属……？」

神の下僕ってわけか……俺の嫌いな神の……
いやでもこの人は、俺の事を助けてくれてたわけか

「ああ、人間をやめることにはなるが……見た目は変わんねえようにしてやるよ」

「分かりました」

「いいのか？即答で」

「俺は彼女のために化け物になる覚悟だってありましたから」

「っかー熱いねえ、それじゃ遠慮なく眷属にっと」

そうすると謎の光を浴びて力が湧いたような気がする

何というか自分だが自分じゃない感じ……

「あっさりなれるものなんですね」

「まあな、いいだろう楽で？」

それでいいのか……ただ契約は遂行された

「それじゃ彼女の元に……」

「それなんだけどよ」

「なんです……？」

まさか出来ないとか言い出さないだろうか？
そんな眷属になったのに嘘でしたは許されないし俺もブチ切れるが……

「お前が物語を作らないか？」

「どういうことです？」

「これはやらない夫っつー男の物語、それじゃなくてお前の物語をだよ」

「どうするんです……？」

「この物語はこのまま進む、だから戻して別の物語を始めてやる……分岐点のようにな。
そしてその分岐点はお前が主人公の物語だ」

「出来るんですか!?それに戻るって!!」

力が一部とはいったが俺だって数秒のはずだそんなこと出来るわけは……

「なーに他所では全にして一、一にして全なる者とまで言われた存在だぜ?眷属のためにそれくらい余裕だっての」

「全なる者……」

改めて恐ろしい人が主人になったらしい

「お前自身も眷属になって強くなったが限界はある、だから仲間を頼れ」

「皆を……巻き込むんですか?」

「ああ、今まで紡いできたからこそそれを使って今度はお前が頼る番だよ」

「分かりました」

「精々戻ったら嫁さんに謝るんだな」

「そうですね……結局アカネに良いところ見せようとして馬鹿ばかり……」

「おう、その扉からまず俺のダチの世界に繋がる……そこから出ると少し巻き戻った世界に戻れるぜ。そっちの時間だと大体1週間くらいかねえ。そっからはお前の物語だ」

「ここまでしてくれて良かったんですか?」

「例え人間みたいなちっぽけな存在であっても喜劇のが面白いしな」

そう言われて、扉をくぐる
元いた世界に戻るために

「じゃあな眷属……」

「希望は絶望に負けちゃならねえだろ？」

「なぁんだ、分かってたんだキル夫クン」

「それじゃあな〃狛枝〃また死んだら会おうぜ」

「あんまりキミには死なないで欲しいけどね」

聞き慣れた声が後ろから聞こえた
その声に感謝しながら扉へと消えていった
これから彼の物語が始まる

キル夫は冒険者養成校で絆を繋ぐようです。

第５４話

「久しぶりだな兄さん」

「ああ、やっぱりあんたの所か」

何度目かのバーに辿り着いて席に着く
もう戸惑いなんかない

「だいぶお疲れのようだな、酒が出せないのを申し訳なく思うばかりだ」

「いいじゃん酒出してくれよ……海賊生活で慣れてるんだ」

「ダメだ」

「ちぇー」

諦めてコーラでも頼む、文句を言いたいが仕方ない

「せめて、全て清算してからにするんだな」

「精算……今までの分も払って？けど俺この世界に金なんざ持ってきてねえぞ？」

「そう言うことじゃねえよ」

「うん？」

「お前自身がこの件にケジメ付けられたらって話をしてんだ」

「ケジメか……」

「不安か？」

「大丈夫っすよ、なんなら今から」

そう言って部屋を出ようとする

一度皆に会いたいと思いながら

「まあ待ちな、まだ頼んだ物手すら付けてねえだろうが」

「そうですが……でも急いで……」

「この世界は俺の特別な空間だ、時間も現実よりも幾らでも余裕がある」

「……」

「少し今後について考えていけ」

「いいんですか？」

「アンタに個人的な興味が湧いた。そして何よりアイツの頼みだしな」

「狛枝ですね、色んな場所に影響力あるなアイツ……」

「狛枝……か、アイツはこの世界ではこう名乗っているんだな」

「そうですね、食えない奴だと思ってたけどこれは予想外だった……」

「確か眷属になったんだっけか？」

「なりました、本当はこう言ったので力を手に入れるのは違うとは思うんですが」

「別に、他の奴らだって神の加護受けてるしいいだろうよ」

「俺……神が納得出来ないって立場だったんですが……」

「お前は元からアイツには愛されてんだよ、異様な程にな……正確には興味の対象かもしれないが」

「まあ興味は前からあったのは分かってたんすけどね」

「もしかしたらこの世界の神にも愛されてるかも知らないかもな」

「いやないでしょ……」

「アイツが既に俺のだって主張しているようだしな。アイツのせいで近寄れないのだいぶ居るかもだし」

「狛枝……」

「いいのか？上司だろ？」

「そうなんですけど……今更敬えないと言うか」

「まあ許されているなら、お前達はそれでいいと思うがな……」

そう言いながらコーラが出される

……と言うかさっき頼んだんだが今更？

「さて、それじゃあ建設的な話でもしようか」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「さてまずは現状だ」

「俺は何処まで戻されたんです？」

「そうだな……武闘大会が始まる数日前だ」

「ってことは病み村前か……」

「じゃあそこでキーになるのが？」

「病み村の竜……」

オルガ先輩を追い詰めたアイツをなんとかしなきゃいけないのか……俺でも行けるか？

「違うな」

「え？俺は無理と？」

「何を言っているんだ？」

「いや、俺が挑むのが違うのかなって」

「そうじゃない、俺が言ったのは重要なのはそれじゃないだ」

「え？竜をやばくないって？」

「事前情報があるんだそれ程苦労も減りそうだしな、重要なのはオルガ・イツカだな」

「オルガ先輩……確かに重傷を負いますし今は鉄華団のリーダーですし重要どころしか無いですね」

「ああ、ただ迂闊なことはやらかさないだろうし問題無いと思ってはいるが」

「と言うか……マスターはオルガ先輩のこと知ってたんですね？」

「ああ、アイツ……狛枝が話していたな。学園には珍しいタイプの神官だって」

「珍しいですか？」

「ああ、神官ってのは基本後方支援とか大人しいのが多いしな。リーダー気質なのは珍しい」

「ああ、確かに戦わない人がリーダーってのも納得出来ない人多いですもんね」

正直俺にとっちゃ謎なんだがな……

リーダーは出来る人がやってくれって感じだし

「もう一つアイツには大事な場面があるぜ？」

「え？オルガ先輩なんでもありですか……？」

「実際俺たちでも驚いているんだがね……アイツは吸血鬼への抗体がある」

「ん？ああそうだ……!!吸血鬼関連の問題もあるじゃねえか!!」

指示に逆らえない、それを俺達はどうすればいいんだって

嘘は吐けないと言うかそうしたら仲間割れとかさせられちまうんじゃねえのか?と不安しかない

「どうにかならないか……神様なんだろ?」

「残念ながら無理だ、狛枝なら出来るだろうけどな」

「だったら……」

「いや、多分無理だと思うぜ?やるなら既にやってるだろうからな」

「クソっどうすりゃいいんだ?」

「頼れるものをなんだって頼って考えるんだな」

「……キツいが分かった」

「前同様武闘大会がお前達の重大な戦いになるだろうさ、頑張れよ」

「まだまだ問題だらけなんだけどな……」

「大まかなことが決まったならそろそろ大丈夫か？」

「ああ、まだまだあるが……仲間とそれは話そうと思う」

「了解した」

空になったグラスを見たようだ
もうそろそろ目覚めの時間か

「いつも通りのベッドでいいか？」

「いや……頼みたい場所がある」

「……分かった、出口はそこにしておくぜ」

「ありがとな、マスター」

そうして扉へと手を掛ける
こっから忙しいが……次こそは間違えない
大切な人、友人皆護るために
一人じゃ足りないからこそ、幾らでも皆を頼ってやる

「夢の王、ヒュプノスの祝福あれ」

扉を潜る時にそう聞こえた

――

いつ振りだったかここに来るのは
ただ……ここに来るのは間違いなく必要だった

「よし……行くか」

大きな扉を開ける
その先には一人の少女が座っていた

「案外、来るのが早かったな」

「久しぶりです……ロザリンド様」

「ほうほう、早速余に用が出来たか」

「はい……どうにか出来ませんかと」

俺だけの問題ではないが、こればかりは俺一人で頼まなくてはならないと思った
勿論、一人で来るのは許されないことが分かっていたからこそ……あの人にここへ来ることを頼んだ

「そうか、お主は人間を辞めたか」

「はい、それが必要だったので」

「残念だ。お主が眷属になることで条件を飲ませようと思ったが……神には勝てぬな」

「それだと眷属になれないなら無理とは言いませんか？」

「構わぬ、退屈だったしな」

「ありがとうございます!!」

ただここまでいい人だと裏を疑ってしまう

仮にもダンジョンマスターだし……

「ククク、裏か」

「あっ!?」

そうだ……この人心読めるじゃん……やばいやばいやばい……

「ほうほう」

「いや……悪気は無かったんです」

「当然だが裏はあるぞ?」

「え?」

「余をそんな善人に思えたか?」

「はい」

「……当然だが理由がある、余の血で書き換える。学園の生徒を余の眷属にする」

「それは……」

「それは……許可していいのか？正直まずい状況になるんじゃないか？」

「余はダンジョンから出られないからな、不安ならこのダンジョンに寄らねばいいだろう」

「あの……俺は？」

「そもそもお主は既に別物が書き換えておる、余でも無理な相手がな」

「そりゃ良かったのかそうでもないのか……？」

「この血だ」

そうしてロザリンドから血を渡される
小瓶のようだがこんなもんなのか？

「一滴あれば十分だ、それに余も吸血鬼な以上、あまり甘やかす気はない」

「分かりました」

学園全員分には足らないな……選別とは少し違うが……ちょっと考えて使う人決めないとまずいか

「ありがとうございました」

「報酬に……いや、やはりいいか。非人の血は不味そうだしな」

「……それはちょっと分からないですが」

「帰るがいい」

「マシな世界になるように努めます」

「たわけ、世界が変わろうとダンジョンは変わらぬわ」

「そうですね……」

「ただ、暇潰しの話には持ってこいだ。やってみせろ」

「かしこまりました！」

ダンジョンから出ようとするもそういやこのステージはゴースト系が……

ロザリンドさんに助けを求めたが笑ってるだけで助けてくれなかった

――――――――――――――――――――――――――――――――

学園に帰ると慌ただしかった、一体何が……？

「おうキル夫!!おめえ何処に行ってやがった!!」

「オルガ先輩!?」

怪我前の元気なオルガ先輩を見て涙が出そうになったが今はそれどころじゃない

何か様子がおかしい？

「新条が探してたぞ!?」

「えぇ!?」

アカネが探してたのは予想外だったが一体何が？消えて数日経ったはなさそうだが

……

「聞いた話だとお前が話の途中で消えたらしいぞ」

「え？」

なるほど……俺はこの世界に帰ってきた時に同時に消えたのか……？
それだと違和感は無くなるが色々とタイミングが最悪だな

「探さないと」

「着いていくぜ」

「はい！」

オルガ先輩と一緒にアカネを探すことになった
変な場所に行ったりはしてないと思うけど

「何処へ行ったと思うか？」

「分からないですね。アカネは割と決まった場所よりも色んな場所にいるので」

「そうか……更にお前を探してるなら更に見当たらなそうだ……」

「思いつく場所全部行ってみます！」

「おう！」

そうして色々と思いつく場所へといった
盗賊コースの教室には同じコースの友達らと、ニケ先輩がいた

「キル夫さん、どうしました？」

「ああ沙都子か、アカネを見なかったか？」

「新条先輩ですか？見てませんね」

「キル夫……お前まさか新条先輩を怒らせたのか？」

「いや……カズマそうじゃねえけど……」

「とにかく、必要なら一緒に探そうか？」

「渚もいいのか？助かる」

「いいってことよ、奢れよ？」

「先輩ですよね、ニケ先輩!?」

「別にいいじゃねえか」

そうして４人を連れて探し始める

……なんで全員で同じ場所を探しているんだ？

中庭を探した、姉さん達３人がいた

「姉さん！アカネを見なかったか？」

「どうしたキル夫!?新条先輩は見てないぞ？」

「そうですか……何処に……」

「キル夫、大丈夫か？」

「ああ義勇……ちょっと探しているがアカネが見当たらないんだ」

「大変じゃないですか？私達も手伝いましょうか？」

「助かる」

誰も見てないのは怖くなる

俺がこうなったからアカネが代わりに拐われたとかあるんじゃないかって

「何処へいく？」

「思い当たるところ全部行きます」

「分かった！見つかるよな……？絶対いるはずだ」

そう言って全員で探し出……だからなんで分担せずに全員一緒なの!?

万が一拐われたことも考えてボンボルド先生の実験室の近くまで来た

そこには先輩達がいた……なんでここに？

「先輩達、何してるんですか？」

「ああキル夫君ですか、少し気になったことがありましてね」

Ⅳ先輩が対応してくれる

ただ何が気になったんだよ

「君が気にしなくても大丈夫だよ」

「なんか臨也先輩にそう言われるのが珍しい気がしたが……まあ気にしないことにします」

「ふふん、やましいことは何も無いから安心していい」

「マサムネ先輩がいる時点でやましいことはないと思ったので、そこら辺は全く持って心配してないんですけどね」

「どう言う意味だ……？」

「そのままの貴女でいて下さいってことで」

「分かった……」

「それで、なんか用っすか？」

「アカネ見なかったかって」

「こっちは暫く居ましたが来てないっすね」

「ならいいですけど……」

　このメンツ仲良かったのかと思いながらも……そう言えばここにまどか先輩いないなって

「それじゃあ俺達も探そうか」

「いいんですか？」

「いいよいいよ、もう用事は終わったしねマサムネもいいかい？」

「構わない！」

マサムネ先輩よく分かってるが不安だがそれでも探し始めた
あーはいはいやっぱ同じ所行くんですね、知ってましたよ

訓練場を探したデク達が居た

「おうデク、調子はどうだ？」

「調子はいいよキル夫君、大会は出れないけど」

「デクは出ないってグダグダ言ってるが、俺は出るけどな」

「まあ爆豪は出るだろうなとは」

実際大会で当たったしな

これで出ないって言ったら流石に驚くわ

「それで、キル夫……どうしたの？」

「シノン先輩……実はアカネ先輩が……」

「そう……私達の力……いる？」

手伝うと言い掛けたようだが後ろのメンバーを見て躊躇う

本当になんでみんな一緒なん？

「俺は手伝った方がいいと思うがのぅ」

「富樫はそう思うの？」

「応、これもまた訓練じゃろうし」

「人は多い方がいい、当然だろう？」

オルガ先輩も富樫先輩も協力してくれようとする……ありがたい

「そうですね……僕も手伝います！」

「ケッやってられるｋ　……」

「かっちゃんも！」

「は？誰が手伝うか……」

「かっちゃん!!」

「っわかったよ」

爆豪を納得させた……やっぱデクって凄いんじゃ？

そのままメンバーを探す……もしかして外か？

そうして外に向かうと、なんだかんだ付き合いの深い皆がいた

「中嶋？何してるんだ？」

「キル夫か!?お前何処へ行っていた!!」

「すまねえ、少し迷子になってたようでな……」

「心配させないでください。私達以上に先輩のこと新条先輩が探してましたよ？」

「ああ雪菜、有難うな。既に聞いてるぜ」

「まあ、見つかって良かったね。後は先輩のところに行けばよさそうだ」

「藤堂も探しててくれたのか？ありがてえ」

なんだかんだ皆探しててくれたようでよかった
やっぱ持つべきものは親友だって

「何処へ行ったか分かるか？」

「それは……」

かなでに伝えられた場所にみんなで向かった

――――――――――――――――――――――――――――――――

浜辺に一人少女が座っている
ここに来れば少年が流れ着いてくるって思っているのだろうか？

「……何処に行ったの？」

新条アカネはこの場所に来た
岡島キル夫と新条アカネが出会った場所、もしかしたらまたここに流れ着いて無いかって

「……居ないなあ」

自分は好き勝手言ったし見限られちゃったかな？
きっ君は流石にそんなことしないと思いつつ心配になる
ネガティブなままじゃダメだと、学園に帰ってないかって帰ろうとする
そしてその姿を見た

「アカネ」

「きっ君……何処行ってたのさ」

「ごめん……」

「本当に心配したんだから」

やっと会えたしやっと謝れた……そう思うと安堵してグラッとする

「大丈夫!?」

「大丈夫です……」

疲れが溜まったのか立つのに時間がかかったがそれでも立ち上がる

「それより……言わなきゃいけないことが……」

「どうしたの？」

「皆さんも聞いてください」

運が良かったのか悪かったのかみんなで集まってるから揃っている

それに学園の外に出れた……これも都合が良かった

皆疑問に思っていたがすぐに聞く態勢をとってくれる

「単刀直入に言います」

この言葉に全てがこもっていると思いながらも

「皆さん!俺を助けてください!!」

――――――――――――――――――――――――――――――

第５５話

――――――――――――――――――――――――――――――

「はじめまして、僕の名前はジョナサン・ジョースターだ」

「はじめまして」

正確には、俺達はじめましてじゃないんだが……まあ言った所で仕方ないよな

「それで僕の力を借りたいんだって？」

「はい、どうにかと思いまして」

あの後、過去に戻った事や血の事を話した後にオルガ先輩に彼を呼び出して貰った

理由は簡単だ

「しかし病み村にそんな化け物がいるのかい？」

「はい……います。なのでジョナサンさんにお願い出来ないかなと」

「本当は依頼料を取るのが普通なんだけど……」

流石に竜の討伐を払える金はない

「本当にいたならまあ払わなくていいかな、君達が出現させたわけじゃないんだし、危険なのには代わりないからさ」

「本当に一人でいいんですか？」

「ああ問題ないよ、この依頼ジョナサン・ジョースターが受けさせてもらおうってね」

「ありがとうございます!!」

「しかしオルガ、面白い後輩を見つけたね」

「やっぱ分かりますか？」

「ああ、彼からは物凄いエネルギーを感じるよ」

「分かります！キル夫はやってくれる男だって!!」

「あの……過度に期待されても困るんですが……」

「過度じゃないぜ？良識の範囲内でだ」

「絶対違うでしょ!?」

本気でそう思ってるんだろうけど、それは間違いなく良識の範囲ではないでしょう!?
実際煽てると見せて無茶振りですからねえ……

「それじゃあお願いします」

「ああ、君達の方を手伝えずにすまないね……」

「構いません、病み村の件で手伝っていただけるだけでも感謝ですから」

「事情は聞かないけど、また会えることを楽しみにしているよ」

「はい、こちらもです」

そうしてジョナサンさんが部屋を出て行く

それと同時にオルガ先輩が口を開いた

「これで良かったのか？」

「はい。オルガ先輩、彼を呼んでくれて有難うございました」

「それくらいなら構わねえが……まさか俺が重症負うことになるとはなあ……」

「未来を知らせることになってしまって申し訳ないんですがね……」

「構わねえよ、と言うかだ……キル夫、お前分かってんのに武闘大会出るってマジか？」

「はい、出ますよ」

「そしたら結局無駄じゃねえのか？対策はあるとしてもだ」

「いや……オールマイト先生を仕留める、正面から戦うと被害が出るしな」

「だからって……明らかにお前一人の方が危険じゃねえか!!」

「じゃないとあの人には隙がないですから」

「隙っつったってよ……」

オールマイト先生は一見おおらかで適当そうに見えるが……

「実際はオールマイト先生は用心深く執念深いタイプですよ」

「あの教師が？ねーだろ？」

「いや……油断すると痛い目に遭います」

「分かったっての……だがどうすんだよ」

「どうするって？」

「それだけ言うんだ、方法はあるんだろうな？」

「心当たりがあります」

「……分かったよ、そこまで自信があるなら仕方ねえか」

なんとか納得させられた

ただ……オールマイト先生を狩るにはこれが一番だが……勝てるかは不安だな

正直手札を全部見せるしかないだろうし残るのメンバーだって厄介者だらけだ

「それで、大会までどうするんだ？」

「会う人がいる……」

「付いていって大丈夫か？」

「いや、一人で行きます」

「お前が一番キーなのは分かっているのか？」

「大丈夫です、戦闘にはならないんで」

「分かった……が気をつけろよな」

「勿論です」

そうして、出来れば会いたくないが……それでも会わなきゃいけない相手の元へと向かった

――

「よう岡島、なんか変わったか？」

「そう思えます？」

「ああ、なんかやったか？

「なんかってなんすか……」

「もしかして、脳髄とか決めたか……とにかく別人に思える」

「……」

長谷川先生、学園の人間で正直一番今関わりたくなかった相手だ
ただ関わらなきゃならないんだけど

「何の用も無し、そんなわけじゃねえだろ?」

「勿論です、用があってきました」

「なんだ?予想がつくがよ」

「予想がつくなら良かったです」

「ただ、こう言うのは新条がやると思ってたがな」

「アカネは今別案件をしているので」

正確には何してるか俺も分からねえが用事があるって何処かに行ってしまった
足取りは知らないが流石に大丈夫だと思う

「んで、用が予想付くならまだ良かったって考えるべきかねえ……俺としては最悪なんだけどな

俺からしても長谷川先生の言う通り実際は良くはないんだけどな……ただ四の五の言ってられない

「仲良くしません？」

「俺は岡島と仲が良い教師だって思ってるんだけどな」

「俺の言いたいこと分かってるのに、そう言い出せるのは凄いっすね……」

「いい教師だろう？」

「……」

「言いたい事はわかるぜ？だがはいそうですかっては言い辛いしな」

それは分かっているがこっちが折れるわけにはいかない

「と言うかだ何処でその情報手に入れた？」

「信じられる友からっすよ」

「なるほどねえ、どっちみち避けられないってわけかい」

「そう言うことです」

「だが今の俺は現状に満足してるし雇われの身だぜ？」

「そりゃそうですがこれが終わり次第少なくとも学園は効率の良い場では無くなりますよ？」

「なるほどな、そう来たか」

折原先輩から話は聞いている
長谷川先生についてと立場について
てっきり俺は長谷川先生も吸血鬼だと思ってたんだけどな

「だったら岡島、お前の方についてメリットあんのか？」

「え？無いですけど？」

「それで勧誘ってよく出来たなおい」

「勧誘じゃないですけど？」

「は？」

驚いたような顔をしているが勧誘する気なんざ一切ねえと言うかそこまで長谷川先生を信じられない

「仲良くしたいってだけで、戦いたくないってだけですよ」

「どうあがいても避けられないと思うが？」

「単純にどっちにも付かないで欲しいってだけです」

「吸血鬼相手に蝙蝠やれってか、面白えな確かに」

「これなら断言してメリットがありますよ？」

「言ってみろよ」

「まずどっちとも戦わずに済む、これだけでも十分でしょう」

「確かに……オルガ・イツカの人脈にお前の人脈が合わさった最強タッグなんざ戦いたくもねえ……」

やっぱコミュニケーションって化け物になるんだなって

「そして、絶対にあり得ねえが俺達が負けても学園に戻れるだろうよ」

「そうか？俺は始末されると思うがな」

「わざわざ敵対したわけでもないのに、学園の裏を許容出来る人間を放るわけないでしょ。勿体ないしな」

「……言い分は通るな」

「結局の話、アンタとの戦いを避けられりゃいいんだ、そんためにメリットは隠さずに話すさ」

「勝手にやってろってのは俺も分かるが……残念だがこれを放置じゃ旨みが少ないんだよな」

「だったら俺に何か要求するか？」

「そうだな……だったらシンプルにだ」

そうして長谷川先生は武器を取り出す

普通なら力を示せとか言ってきて〝隙を見せそうになる〟が一切隙が感じられない

「ソウルイーターですか……」

「やっぱ履修済みか」

既に折原先輩から情報を得ている
傷つけられてもアウトだと

「まあんなことは今はどうでもいいんだけどな」

「でしょうね……」

ただ長谷川先生の要求としては知ってようがそんなことは問題ないはずだ
だからこそ……タチ悪いんだが

「簡単な話だ、仲間になろうぜ？」

「正直断りたいんですが……」

「それじゃ納得させろ、じゃないと敵だぜ？」

納得させろか……だいぶ無茶を言いやがる
最初からこれを通す気だったか？
このまま去る事も出来るんだが……もう一つにのものを達成出来ない

「（考えろ、納得の答えがあるはずだ）」

「どうした岡島、はいかいいえでいいんだぜ？」

「その理由を話さなきゃダメですけどね……」

「へへっ、そりゃそうだろうよ」

納得させるのがこんな難しい相手なんざめんどくせえな本当に……
ただ敵対して欲しくねえだけなのにな……

「敵対……」

「どうした？」

「やっぱ断ります」

「理由はどうだか聞いていいよな？」

「簡単な理由っすよ、俺は仲間じゃなくて中立頼んだんですよ」

「そうだな、それは聞いた」

「アンタになっちまったら、アンタが俺であっての俺の仲間であって学園の敵になっちまうじゃねえか」

当たり前だ、アンタになっちまうって言うならアンタだって俺になる

そりゃ中立なんて保てるわけがねえ、ダメじゃねえか

「お前の仲間はともかく学園の敵ねえ、本当になるのか？」

「なるに決まってんだろ？学園の欲しいものをかっさらっちまうだからよ」

「随分お前は自分に価値を付けてるんだな」

「ったりめえだろ、じゃなきゃ俺もここまで必死じゃねえよ」

「そりゃそうだよな、残念だ」

「そこまで学園に喧嘩売りたかったのか？」

「いや、学園にゃ喧嘩売りたくねえがそんだけアンタが魅力なんだよ」

「嬉しくはねえな」

ソウルイーターが玩具にしたがっている事を喜べるわけがねえ

「はっ言ってろ。しかししょうがねえな……タダ同然で中立せざるを得ないとはな」

「助かる」

「さて、色々と練り直しだな」

「ああ、長谷川先生いいっすか？」

「まだなんかあんのか？」

「こっちの方が重要案件なんで」

「中立よりも大事な事あんのかよ……なんでも出来るとは思うなよ？」

「ああ、大事な事っすよ」

「聞かせてみろ」

「盗賊コースの授業してくれませんか？長谷川先生」

「なるほど、面白え」

オールマイト先生に通じる決定打を……手に入れなきゃならねえ

「必殺技じゃ物足りねえか？」

「オールマイト先生に太刀打ち出来ると思うなら」

「無理だろうな」

「だったらどうすれば……」

「吸血鬼の弱点って知ってるか？」

「流水……ニンニク、十字架に日光に……どれもこれもオールマイト先生には効きそうに無いんですが」

「だったら吸血鬼の殺し方って知っているか？」

「いや……弱点でどうにかするんですか？」

「心臓に杭を打ち込むんだよ」

「杭ですか……」

武闘会までに杭なんて間に合うのか？

正直、武器屋で見た事ないんだが

「しかも長寿の吸血鬼様だ、特別な杭が必要だろうぜ」

「……間に合うわけがないか」

「ところがそうでも無いんだな」

「まさか先生持ってるんですか？」

「んなわけねえだろ？ただのおっさんだぜ？」

「ならどうすれば……」

「鹿目のところ、あそこは代々伝わる神官一家だ。だからあるだろうな」

「本当ですか!?」

まどか先輩が持ってるのか!?マジで予想外なんだが

「１００％じゃないが、まずあるだろうな」

「分かりました!!」

「授業はもういいのか？」

「今は優先することが出来ました!!」

「まっそうだろうな」

「長谷川先生、ありがとうございました！」

「まっ頑張れよ」

長谷川先生に応援されるままどか先輩の元へと向かった

「しかし、貸してもらえるかねえ……アイツは岡島の仲間になるか分からねえのによ」

「まどか先輩……今なんて言いました？」

「だから貸せないって言ったんだけど？」

「なんで……ですか……」

「学園に反抗する力をって言われても正直反対したいんだけど」

「……」

確かにみんな集まったあの時まどか先輩は居なかったが……こうなるとは思わなかった……

「学園とは本格的に戦うことになりました……だからまどか先輩の力も必要なんです」

「ふーん、そうなんだ」

「そうって……」

「ダメですか……？」

「ダメも何もなんで味方しないといけないのかって」

「じゃないと、大変なことになるから」

「神を作るための生贄だっけ？」

「……そうです、ロクなことにならないでしょうし」

「それに神官一家なら新しい神の存在とか……」

「どうでもいいかな」

「どうでもいいって……」

「私には、私の一家には信じている神がいる。でも排他的なわけじゃなくて、それ以外の神なんてどうでもいいんだよね」

「……そうですか」

確かに興味ないって言うのも分からなくはないが……どうしろって言うんだ

「それでさ、キル夫君」

「なんでしょう？」

「貴方から異なる神の気配がする」

「……!?」

そこまで見えるのか

「神様を造るって言うのも異質だけど、異なる世界の神様って言うのもおかしいよね？」

「……」

「それに狛枝君ってどうしたの？」

「狛枝……」

狛枝はこの世界にはもういない……
正確には元の姿に戻ったからここにはいない
……そしてアイツの魔法で皆の記憶からも消えた筈なんだが

「恐らく外の世界の神様って狛枝君だったんでしょ？」

「そうですね……」

「……そうだったんだ」

正直に話すしかない……嘘なんて吐けるあいてじゃない

「なんでそんな力を借りたの？」

「借りたって……」

「そうでしょ？理由を教えてよ」

いつもとは違うおちゃらけた先輩じゃない

一緒に冒険した時よりもマジな目だ

「そんな明らかな人ならざる力で世界を滅ぼす気なの？」

「皆を守る為です」

「本当に……？」

「本当です」

皆を守るためにこの力を

「皆のためなの？」

……皆のため、それも事実だが本質は

「皆のためでもありますが……死にたくないから」

「死にたくないから？」

「はい、死にたくないんです……この力を手に入れないと死ぬから……アカネを守れな

いから……俺は化け物になったんです」

「自分で化け物言っちゃうんだ」

「気付いてたでしょう？」

「まあね、それくらいは明らかだったしね」

「……だから……死にたくないから手を貸してください！」

「いいよ」

「まどか先輩……お願いしま……え？」

「だからいいよって」

「アッサリしてますね……」

「そりゃ経緯話して貰ったし、何より生きたいからって個人の中での問題だからね。好き勝手に神造りたいって他者にも影響する行動と比べると全然違うしね」

「良かった……」

「それじゃあ、大会に間に合うように用意すればいい？」

「そうですね、オールマイト先生相手に必要なので……」

「ああそれじゃあこれもプレゼントするよ」

「なんですかこれ……？」

謎の玉みたいなものを貰う……本当になんだこれ？

「これはアイテムを一つだけ収集できるアイテム……」

「便利ですが一つだけなんですね」

「これで杭を潜ませておくといいよ、バレたらまずいしね」

「確かに……ありがとうございます!!」

杭持ってるのバレるとやろうとする事がバレてしまうし、まずいか……そうなるとこう言うのが確かにあるといいか
ただ攻撃すれば良いとしか考えて無かったので、本当に助かった……

「それじゃ、応援してるよ」

「はい!!」

まどか先輩にも応援されて他の準備も整える
そうして日が過ぎて次こそ負けられない武闘大会が始まろうとしていた……

第５６話

―――――――――――――――――――――――――

「それでは！二回戦を開始します！」

大会の予選、１回戦は苦労することはなかった

前よりも強くなったしそりゃそうだが……爆豪には可哀想なことをしたかもしれない

ただ負けられない以上は同じように心掛けた

「大丈夫かいキル夫君？」

「……何がですか？」

同じように繰り返す、隙を突くために

普段警戒心の塊のオールマイト先生を刺すにはここしかないから

「さて、最初は軽めに行こうかな。」

そう言ってラッシュに入る
これは既に見た、多少捌く
流石に全部食らってはぶっ倒れる
致命傷は避けないと

「だいぶ良い動きをしてるね」

「そうですか?だったら生徒の未来を期待して負けてくださいよ」

「残念ながら、そう言うわけには行かないんだけどね」

「残念だ……」

軽口を叩き合いながら戦闘を続ける
なんとかまだ優勢だ
ただ……手を抜いているんだよな

「中々やるねえ」

「じゃねえと死にますし」

「死んだってすぐ治るし一撃受けても良いんじゃないかな？」

「勘弁」

そうして隙を見せてくる
罠なのを分かっててあえて突っ込む

「ダメじゃないか、見え見えだっただろうに」

「マジか……！」

バレないように、勢い良く突っ込んだ先にカウンターが入る寸前一瞬だけ時を戻す
無理に体を捻ったように振る舞いながら反撃する

「爆破しろ!!」

肉体へのダメージはそこまで期待してない
今は鎧を砕く事に専念するだけだ

「ぐっ……身体を無理して一撃入れてくるとはね」

「はは……無茶振りをしてでも与えようとしたダメージに対して、そちらの被弾は鎧だけってのもショックがでかいですけどね」

勿論ノーダメージだが余裕を見せたりはしない
先生にとっては俺は雑魚なんだから雑魚として振る舞う

「なら今が攻めるべきかな」

そうしてオールマイト先生が突っ込んできて

「なっ!?」

来ると同時に地面が爆発した

やっぱ引っかかってくれたか

「もうちょっと踏み込んで欲しかったんですけどね」

「やれやれ見えないトラップなんか作ったのかい？」

「あれま、バレちゃいましたか」

当然そんなものはない

俺が沙都子に頼んだのは、前の通りに加えて瓦礫に偽装した罠だ
当然だがそんな事教えてやるもんか

「(瓦礫なんざに偽装するとは思わねえし、これからも怯え続けるだろう)」

続いてナイフを投げる、勿論今日は全部が爆弾や劇薬だ
決勝なんざどうでもいい、本番はここだ

「さて落とさせて貰う……っく」

当然、全部が爆発する落とそうとした腕が爆破したり劇薬に触れる、少量ならまだしも多量を浴びせてやる

「キル夫君、この劇薬はご禁制じゃないかな?」

「はっはっは、教師に勝つには正攻法じゃ無理ですし」

「後で説教ね」

「えー」

しかし勘弁してくれよ、今ので手もだいぶ焼けて機能が落ちてるだろうに、それでも気にせず突っ込んでくるのか

「だいぶやってくれたね」

一方的にやられてた前回とは違うが……それでもキツイな

「罠だって気にしねえとは本当に立派な先生だ」

「褒められても拳しか出ないよ」

「勘弁してくれ……」

爆破に巻き込まれてただじゃ済まないはずなのに……
その爆風を利用して飛んでくる……嘘だろ!?

「はい、ズドーン」

「つざけんな……んだよそれ」

避けようとも間に合わず一撃喰らう
投げるのに集中していて動かなかった事がマイナスに出た……動いていれば時を飛ばせたのに

「残念だが差だよ差」

「んな言葉で納得出来るかっての……」

痺れ罠は迷彩柄用意出来なかったがそれでも罠を踏ませるしか
或いは……

「考えてる暇はないでしょ」

「おっと……」

わざとして来た大振りの攻撃を避ける
わざわざかわせるような致命傷を放ってくるからタチが悪い

「さて、どうするキル夫君?」

「やるしかねえだろうが!!」

武器を強く握りしめて立て直した

一進一退、とは言わない

今でこそ身体が追いついているものの、相手がまだ本気じゃない……人間辞めても追いつかねえか……まあそうだろうなこれなら脳髄大量に決めておくべきだったんだろうけど……やらないって決めたしな

「どうした？息が上がって来てるよ」

「そっすね……まだ若造なんで……」

「ただもっと頑張って欲しいかな、まだ君とは楽しみたいし」

「完全に遊び相手じゃないっすか……」

「だったらもっと楽しませてくれないかな？」

「……はぁ」

どうする?今は完全に舐め腐っているが……
だからこそ出来る……
距離を詰めながら、一撃を狙う
当たる寸前に一歩巻き戻し攻撃をかわす

「ん?かわしてるのかな?」

「さてどうでしょうかね」

「腹に何か仕込んでいるの方がありそうかな?ただ手応えがないのもおかしい」

「さあて、種明かしはしませんよ」

「だったら、種明かしするまでは持ってね」

そう言いながら一気に突き進んでくる
慌てて下がる、そうして……左手の物を飛ばす

「さて今度は避けられないだろう?」

拳を腹に入れられて吹っ飛ぶ

……危ねえ……なんとか加速が間に合った

「うーん、やっぱ浅いかな?」

だが浅いはずなのに吹っ飛ぶのはマジでなんなんだよ

だが……決まった

「おや、鎧が完全に壊れたか……盗賊の技かな?」

まず一段階……次のステップだ……

「これだったら君の一撃は届くかな?」

「折角ならその筋肉も剥げてくれませんかね？」

「無茶を言うね君は……」

「そうじゃないと……キツイじゃないですか」

「全く、そろそろ本気で行く気なのにね」

「え？」

それと同時に頬に熱が走った

直後、痛みが来たことからぶん殴られたのだろう

「早っ……」

態勢を立て直す間も無く次の拳が飛んで来る

「なん……おかしい」

時を進めるも巻き戻すも間に合わないスピードで決めてくる
慣れるしかないが身体が持つか？

「まだ終わらないだろう？」

「当然だっつの……」

手元にはまだ罠もナイフも潤沢だ……これをどう使うか

「……これは」

トラバサミ……こんなもの持って来てたっけ？
ただこんなもの効くはずないよな……？

「待てよ……？」

「いや待つわけないでしょ！」

正面からの衝突に加速体当たりで一方的なダメージを避ける
当然受けてるのはこっちが殆どなんだが

「……」

このトラバサミがオールマイト先生に効くわけないのは相手だって分かっている
だって足太いし……だからこそ使えるのか？

「ほら、キル夫君。何か隠してるでしょ？」

「!?」

当然バレてるはずはないのだが……ビクッとする
いや大丈夫だ……大丈夫に決まっている

一回戦と同じにやれば大丈夫のはずだ……魔力を散らしておく

「おや？」

「どうしました？」

「いや、空気の流れが変わったね」

「先生ってそう言うの読めたんですね」

「まあ、教師だしね。これくらいは読めないと話にならない」

「まあ、お望み通りの必殺技の準備って所ですよ」

「ほうほう、やっぱあるんだね」

「まさか、可愛い生徒の必殺技の準備くらい待ってくれますよね？」

「その代わり、失望させないでよね」

案の定と言った所か
必殺技って言えば待ってくれると思ったが、待ってくれるなこれは
だから散らし続ける……2撃目に備える為に

「さってと、これで準備完了だ」

「へえ……不穏な感じはしたけどそれだけなんだね」

「まあ手数で勝負な以上、必殺技だって手数っすから」

「なぁんだ、素敵な一撃じゃないのか」

「種を明かした盗賊なんてただの雑魚っすから、伏せますよ」

「長谷川君が秘密にしたものだから、結構面白そうと思ったがロマンには届かないかなぁこれは……」

そう言って落胆する
俺にゃこれが決まると思ってるし決めてやる
チェックメイトの前のチェックの準備を

――――――――――――――――――――――――

「……でだ、キル夫君。その必殺技はいつ来るんだい？正直私は待ちくたびれたよ」

「残念ながら用心深い性格なんでね、そう易々と奥の手は出せませんわ」

「よもや、時間稼ぎが必殺技とか言わないよね？」

「ははは、いいっすね。だったら今からそれを必殺技にしましょうか」

「……」

不穏な無口だ……オールマイト先生の目がマジなように見える

「……どうしました？怖いんですか？」

「……ああ。君がひたすら隠したいのがいつものだと思っていたし、強気で自信あるのが珍しいってね」

「……」

「……その技、大層自信ありそうで驚いただけさ」

「まあ、これしかないですし自信ありますよ」

「なるほど、それだからこそ隠したのかな？」

「だったら来なよ、一撃だけ許してあげるよ」

「それじゃ遠慮なく……」

とはいかないだろうな……心臓狙いなのがバレたら避けられるだろう

「だから一撃……!!」

速攻で決める、いつも以上に……もう分かるように時を飛ばす

「!?」

「デスハン……」

心臓狙いのその手にバレたのか慌てて避けるモーションをとる……

ちょうどいい……狙いは心臓なんかじゃない……

「決まれや!!」

狙いは脚だ!!ぶち当たれ!!

「があっ」

狙い通りオールマイト先生の脚を一本落とす
重心が傾いた瞬間を狙って

「させないよ」

慌てて距離を取る……片脚なのにやるな……

「正直君に脚を持っていける力があると思わなかったね……」

「仕留めきれずに残念だったがな……」

「だがもうさせないよ」

そのまま片脚で飛んでくる
盾を展開して全力でブロッキングする
残念ながら盾は砕けた

「さてもう盾もない、次の一撃で……っ」

オールマイトの足元でガシャンと音がする
トラバサミに掛かったな

「何をしたんだい?」

「そりゃ勿論、オールマイト先生の弱点を」

日光、ロザリオとか……あれば良かったんだが当然そんなものはない
だから……唯一使えるニンニクを使った

普段から慣れているせいで残念ながら行動不能にはならないらしいが……

「片脚なのにその脚が毒されちゃ動けねえよな」

魔力を収縮させる、もう一発の準備だ

「やるね、一撃は覚悟するが……それで決まらなきゃ終わりだ」

そう言うオールマイト先生の身体に翼が生える

……文字通り吸血鬼の姿になる気か

「収縮、そのまま心臓を喰らえ……!!デスハンド」

そのまま心臓めがけて一撃を放つ

ただし頑丈だったらしい……

身体に穴を開けて心臓が見えたが……その鼓動を止めるにはあと一歩届かなかった

「あと一歩だったね！それさえ当たれば私もダウンしていただろうが……届かなかったなら」

「ちょうどいい」

「え？」

その言葉に囚われオールマイト先生は一瞬遅れた

そう、一撃の隙ができた

一方のオールマイトは既に周りの空気から魔力は感じないし何をするのかと考えた瞬間後悔する、すぐに逃げれば良かったと

「出やがれ!!」

隠し持っていた玉から杭を取り出す、全てはこれを決める為に

「チェックメイトだ!!」

して判断の遅れたオールマイトの心臓へと直接打ち込んだ

「馬鹿な!!」

全ては慢心していて、心臓へと届きそうになって焦り出す
だからこそこのジャイアントキリングがなった

「私は神に……」

「誰も神にさせるかよ、俺だって死にたくねえんだ」

「そうか、残念だ」

後悔は残ってそうだったが、それでも最後は満足したように消えて行った

「勝者!!岡島キル夫!!」

金星に多くの生徒が喜び、オールマイト先生に賭けていた人物達が悔しがる
すぐに杭を仕舞い、目線を向けるがしっかりと見られていたようだ

「……」

「あちゃー、見られたか……」

校長先生は何か言っているようだが聞き取ることが出来ない
明らかな敵意だけは伝わる……

「上等じゃねえか……」

違う方を見る、その目線の先には長谷川先生がいる
満足そうな顔をしていて俺が見たのを気付くと笑ってやがる

「上等」

残しておきたくなかったオールマイト先生はトドメを刺した
そしてそれに長谷川先生も俺も……そして仲間達も満足しているようだ

「まだまだ敵はいるが……」

「あの……キル夫さん？」

「あ？藤堂どうした？」

「あの……ヒーローインタビューしたいのですが……」

「あー、ヒーローインタビューか……あったっけ？」

「ジャイアントキリングですし、次は決勝戦なので意気込みなどを聞いておきたいんですよ」

「なるほどな……」

正直そんなものがあるなんざ驚きだったが、ちょうどいいと言えばちょうどいいのか？

「ではマイクに向かって一言」

「皆さん、応援ありがとうございます。皆様もいたからこそ勝てたかもしれません」

如何にも優等生のような台詞を吐く、ザラじゃねえんだがな

「ただ申し訳ありませんが……決勝戦は辞退します!!」

「え!?」

藤堂が驚くと共に、会場がざわつき始める

そう言えば助けてくれとは言ったが、藤堂に今後のこと言ってなかったな……大会準

備で忙しかったようだし

「ちょっと、そもそも大会出たこと自体驚きですが、なんで辞めちゃうんですか!?」

耳打ちして焦りを伝える

ただ……今の俺にとって優勝はどうでもいいから

「やる事がある」

「やる事って……優勝する以上に大切な事なんですか!?」

「ああ」

藤堂にそう伝えてマイクを再び取る

それと同時にオールマイト先生にトドメを刺した杭を取り出し、校長先生の方へと向ける

「ほう、何をする気か」

「校長、下がっていた方が……」

「いいや、届かんよ。それに彼が何をするか気になる」

吸血鬼を殺した杭を前にして笑うように見つめている校長に若干恐怖を持ちつつも、ピンと立ち直す

そして大声で叫ぶ

「行くぜ校長!!あんたに宣戦布告だぜ!!」

――

第５７話

宣戦布告から翌日、各自学園には戻らず戦争の準備をしていた
その中で、重要な立場であろう俺が何しているかと言えば……

「……あの」

「……」

「……もしもーし」

「……」

「いや、なんか反応してくれよ!!」

「キル夫が悪いんだろうが……!!」

オッスおらキル夫！今は吊るされているんだ！

……誰か助けてください

「なんで本当に宣戦布告なんざしやがった……」

「いやだって……大事かなって」

「お陰様で予想よりも早く学園との全面対決だろうが……!!」

「いやだって武闘大会が本番だって話は……」

「だからって、アレはねえだろ……学園で荷物の整理とか済んで無いんだぞ!!」

「いやだってオールマイト先生トドメ刺しちゃったし」

「戦いになるのは相手も分かってた話だし、牙を剥くのが当日にっては流石に思わねえだろ」

「そうですかね？」

「一時間でもありゃ良かったのによ……クソッ」

「……真面目にやらかしまくったようですね……申し訳ありません」

「……暫く吊るされておけ」

「そんなー」

そんなわけで吊るされているのである

「んで、どうするんだリーダー？」

「敵は？」

「掴めるわけねえだろうが……」

「ええ……」

「少しは分かったけどよ……それでもお前が言ったの武闘会の数日前だしいきなり宣戦布告しやがったからな？」

「……」

「1年のマルシル、壇黎斗……2年の吉良も敵だろうな……3年は分からねえ」

「誰か敵対しそうな人いますか？」

「避難できなかった奴らが血で逆らえずに敵対しそうだなとは」

「……」

「おいなんか言えよリーダー」

「すみませんでした」

「少しだけは一時的に家に帰したから減っているがまだ多いぞ？」

マジで俺がやらかした事に気付く、オールマイト先生だけはいなくなったとしてもだ

「特に神官やお貴族様以外がヤバい……逆らえるわけねえだろうしな」

「……俺も今こそ大丈夫ですが、逆らえなかったのは分かっています」

「極め付けは教師陣だ……校長を始め、カーミラ、ボンボルドに、長谷川泰三……」

「ああ長谷川先生は敵じゃ無いですね」

「どう言うことだ？」

「中立の約束したからな」

「……聞いてないんだが？」

「ごめんなさい……」

「まだ何か隠したりしてねえか？」

「俺はして無いです」

……してないよな……大丈夫だよな？

「他は？」

「把握しきって無いです……」

「俺が各自に聞いておくか……」

「俺が聞いてきますよ？オルガ先輩の手を煩わせなくても」

「いいからお前は吊られて反省してろ」

「はい……」

そうして吊られたまま一人残される
正直頭に血が溜まってきて辛くなってきたんだが

「相変わらず面白い事やってるねえ」

「誰だ？」

後ろから声がするが、吊るされて見えない

「久しぶりだな岡島キル夫」

そこには予想外の人物が立っていた

――――――――――――――――――――――――――――――――

「何のようだ？」

「おいおい、冷たいじゃねえか」

野原ひろし、闇ギルドのトップだったはずだが……俺達は読んだ覚えはないが？今ここになんのようだ？

「アンタにいいイメージ無いしな」

「そりゃそうだろうな、仲良くしようぜとか言われる方が驚きだ」

「で？裏の人間が何の用だ？」

「ん？用なんてねえよ」

「じゃあなんでいるんだよ……」

「学園に用があるからな」

「……!?」

嘘だろ……学園に関わるとでも言うのか？

「おいおい、顔色が変わったぜ？」

「マジ……なんですか？」

「ああ、依頼されたからな」

闇ギルドを敵に回すのは本当にまずい……散々盗賊コースでも言われたしな……

「金を……」

「悪いが先に頼まれた依頼を帰るわけにはいかねえんだよ」

「ちくしょう……」

嘘だろ？この男を含めて敵対する人数が多すぎる……どうしようもねえじゃねえかしかも闇ギルドの構成は全くもって知らない……絶望的だ

「じゃあな」

「待ちやがれ!!」

「待てって言われてもなあ」

「ここまでうまく行ったんだ……やめてくれよ」

「裏の人間に情なんて通じねえよ」

「……クソっ！降ろせよ!!」

「それは俺じゃねえだろうが……」

「止めてやるー、やるー」

「……はぁ」

なんか呆れられた、確かに見苦しいかもしれないけどな

「……学園の生徒の避難誘導、それが俺達の役目だ」

「え？」

「依頼者は長谷川泰三、学園が焦土になる可能性もあるから避難させろってさ」

「本当ですか!?」

「ああ、ただし今ダンジョンとかに出てる奴とか把握できてねえ奴とか頑固な馬鹿とかは無理だろうけどな」

「それでも、ありがとうございます」

吸血鬼問題は少なくともこれで減少するか……

しかしなんで長谷川先生が？

「学園の騒動に巻き込む気はねえってさ、らしくねえ甘さだと思うけどな」

「そっすね……徹底的中立だと俺も思ってましたんで」

「ならいいのかねえ、まっ話過ぎても仕方ねえか。俺はもう行くぜ」

「お願いします……少なくとも生徒達は悪い人じゃ無い人たちが多かったんで」

「悪人０では無いのな」

「０では無いですね」

「そりゃそうか……」

流石に他人を襲ったりする生徒もいたらしいし、実際は会ったことないけどさ……

ただし、殆どの人達がいい人ばかりだった

だからそう言った仲間達を操り人形にさせたくない

「そういや一つついいか？」

「なんですか？」

「東風谷早苗って知ってるか？」

「いや知らないですが……」

初めて聞いた名前だ、なんかあったんだろうか

「俺も知らねえんだが、長谷川の奴が言ってたから気になっただけだ。知らねえならいいや」

「はぁ……」

「んじゃあばよ、またそのうち依頼があればご贔屓にってな」

「頼りたくねえが職業的に関わることになりそうっすね……」

「そう言うこった」

そして野原ひろしは消えてゆく、出来れば下ろして欲しかったがそうはしてくれなかった

「少なくとも敵は減ったか……」

絶対学園に隠し種はあるだろうが目に見えた敵が減るだけでもマシだ……

と言うか……操られただけの仲間に剣を向けるなんざ嫌だったしな

「相変わらず甘いんだろうけど」

それでいい、とは言われてるが不安になることがよくある

それで仲間が被害を被ったらと

「非情にはなれないのは甘いかねえアカネ……」

「別にいいんじゃない!?」

「おわっ!?」

唐突に声がしてビビる、えどこ?

「久しぶりだねきっ君」

「アカネ帰ってきてたのか?」

「うん、今ってところかな」

「無事でよかった……本当に一人で行かせて不安だったんだけどさ」

「無事だって言ったじゃん、きっ君は心配症だなあ」

「こっちは一度失ってんだっての」

「どっちかと言うと、失ったのはこっちの方って話なんだけどね」

「ごめんなさい……」

「で、なんできっ君は吊るされてるの？」

「降ろして……」

「うーん……まあそうだね降ろそうか」

「助かった……いい加減頭から血が出そうで……」

「ああ真面目な話があったから降ろす事になっただけでまた吊ると思うから」

「なんでさ!?」

「だって吊るされてるとなるとほぼきっ君が悪そうだし」

「気のせい気のせい」

多分俺のせいじゃない……

いや俺のせいだがもう吊らないで……

「それでアカネ、真面目な話ってなんだ?」

「ああそうそう、入ってきて」

「……!?」

「キル夫、面白そうな話しとるなって」

「はやて先輩!?」

オルガ先輩が言うにはグレーラインと言っていたが……何の用だ……？

「まっ面白そうな話って言っても……真面目な話やけどな」

そうして目つきが変わった

ねえなんでいつもこんな感じでポンポンが痛くなる立場なの？学全く無いよ俺……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「えー、それで真面目な話っていうのは……」

「兄のことなんやけど」

「お兄さんいたんですね」

「学園で……完全に魔術師コース籠りきりで、キル夫が会うことは無かったんやけどな」

「それでその兄がどうしたんですか？」

「八神月って言うんやけど……まあ今は勝手に夜神って名乗ってるらしいけど、それはいいとして……その兄が学園に協力して何やらヤバいこと企んでるらしいんや」

「学園に協力してる時点でヤバい気がしますがそんなですか……？」

「新世界の神になるって言ってた馬鹿な兄だって事は分かってたけどな……学園が神の研究をしているとか言っているのを聞いて可能性があるとか言って行ってもうた」

「おおう……それはもう」

「まあな……そんなんでも兄やしなあ……どうにかしたいって思ってるんや」

「確かにそれはそうですし……俺も兄弟とか居たらどうにかしたいって思いますね」

「それに……学園信じてないどころか研究対象にされたら……分かるやろ？」

「ロクな未来にならないですね……」

ボンボルド先生の研究室で末路を辿ったもの達を知っている
それどころか……俺自身もどうなったか分かってるし

「だからわたしもキル夫に協力したいなあって……今更だとアカンか？」

「いや、願っても無い申し出ですが」

「そんなら良かったけどなあ、馬鹿な兄のため頼むわー」

「はい、そりゃ勿論了解です」

「それで、キル夫聞きたい事とかある？」

「ああ、一つだけ聞いておきたいですが……」

「なんや？言うてみ」

「敵になりそうな人物って誰か分かります？」

「あー、それはなあ……」

正直居なければいいんだが……居たとしても知れるだけマシか……

「魔術師コース、このメンツは不味いかもしれへん」

「魔術師コースですか？」

「3年のわたしやⅣなら大丈夫やと思うけど、ボンボルドがなんか持ってるらしくてⅠ、

２年は洗脳されてると思うで」

「１、２年ですか……？」

「ああ、残念やけどここは戦う必要あると思うで……」

「魔術師コースだって友人いるんですけどね……」

「後は……他の生徒も吸血鬼には逆らえないって話やな……」

「それなら良かった、３年戦士コースとか死んでも戦いたくないからなあ」

「それはそうですね……戦わなかっただけでも幸いです」

「……っと私からの真面目な話だけど、他になんかあったりする？」

「アカネはなんかあるか？」

「先輩は何処まで出来ます？」

「何処までって？何か躊躇うとでも思っとるん？」

「今回ってきっ君の命が賭かっているんですよ、だから私達だって命を賭けるんだ」

「なるほどなあ……」

「だから、先輩も命張れるかって話ですよ」

「確かに、言いたい事はわかるけどなあ……それでどうするかやけど」

やっぱ辞めたとはならないだろうけど……

無理して命張ってもらう必要はないんじゃ無いかって思ってるし……この戦いが終わったとの人生だって存在しているんだし

「乗ったでそのギャンブル」

「ギャンブルじゃ無いんですけど……」

「キル夫のために命を張れるって話やな、知らない間柄ってわけでは無いしなあ、一緒にダンジョンも行ったし」

「それはそうですけど……いいんですが？」

「そもそも学園に馬鹿な兄の為の隙なんざ見せたく無いしなあ」

「それはそうですね」

「だからキル夫、私も一緒に戦うで」

「有難うございます!!」

……と言うかさっきも一緒に戦うって話だったような
協力してくれるってわけだしまあいいか……

「それで、これからどうするん？」

「裏の奴らが仕事を終わり次第……学園に攻め込みたいんだけどな」

「裏って？」

「闇ギルドです、協力っていうか……頼んだ人がいたので」

「あー、わたしはそう言った組織は知らんけどやっぱ凄いん？」

「学生を外に連れ出すみたいですね」

「あーきっ君頼んだの？それなら眷属問題は気にせずに済むのかな？」

「俺では無いですけど、頼んだ人がいましてね……お陰で助かっています」

「ほうほう、わたしとかも将来頼ることになるかもしれへんなあ……」

「性根の腐った人達の集まりですけどね」

「こらこら、助けて貰うんやろ？」

「そりゃそうですけど……」

「だったら悪く言わない事、大事やで？」

「……かつて命狙われたんすけどね」

「……予想以上に壮大な人生送ってるなあ」

「慣れましたけどね」

「……とにかくそれを待つんやな」

「そう言う事です」

「了解や」

「それじゃあ数日後って所やなあ」

「何が数日後なんだ?」

「あっオルガ先輩」

オルガ先輩も帰って来ていたようで合流する
ちょうどいいタイミングっちゃいいタイミングだな

「どういう事だキル夫?」

「学園に攻め入るのは数日後って形かなって」

「それくらいだとは思ったが急にどうした？」

「闇ギルドの人間が、学生達を学園外に誘導してるから少し待ってくださいって事です」

「なるほどな、了解した……眷属は減るし、友人達を撃つ必要が減るのは有難いな」

「そうですよね、なんで結構マシになるかなっては」

「ああそうだな、それが本当なら都合が良い」

「敵もだいぶ減って味方も増えて来ましたんで……どうにかなればいいかなって」

「違うでしょきっ君」

「うん？」

「どうにかするんだよ、そのために私達はそれぞれ頑張るって決めたんだからさ」

「そうだな……すまない、弱気になっちまっていた」

「別に良いよ、それ含めて支えるって言ったもん」

「ありがとうなアカネ」

「んでキル夫言っときたい事がもう一つある」

「どうしましたオルガ先輩？」

「お前どうやって抜け出した？」

「ああそれはアカネ達に助けられて」

「なるほど、まあ帰って来たら解放しようと思ってたしそれはいいか」

「じゃあなんでまたロープを持ってるんですか？」

「いや、俺にも思うことがあってだな」

「……何ですか？」

「闇ギルドの奴なんで黙ってた？」

「え？黙ってたわけじゃ」

「さっきお前は隠し事はもう無いって言ったよな？」

「その後来たんで……」

「ミカはこの2人以外来てないって言ってたが?」

「いや、裏の人間だし見つからないように来たんでしょ」

そうだよな!?と言うか来てたしそうなんだよなひろしさん!!

「もう一度縛られておけ」

「何故だあああああああ!!」

そうして、吊るされる運命の少年の叫び声が部屋中に響き渡ったのであった

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

第５８話

学園内には様々な施設がある
その中でも特に危険とされているのはボンボルド教師の研究室である
触手は蠢き、実験体生物すらも徘徊している
挙げ句の果てには量産された教師がいると言う噂まで立ち込めている
その研究室に３つの影があった

「全くもって、趣味悪いよね」

「今は喋っている暇はないっすよ」

キル夫が縛り上げられている頃、とある任務を頼まれている３人が研究所へと訪れていた

3年盗賊コースの折原臨也、そして同じく3年の走り鳥
この二人は3年のレッテルに恥じないスキルの手数から今回の担当になった

「結局、私が足を引っ張りそうなんですけど大丈夫ですかね？」

そうしてもう1人、1年戦士コースの藤堂晴香
彼女はここの内部を詳しく知っているために担当なった
以上この3人が研究所内に存在していると言われる、ボンボルド教師のコピーを探している

「晴香ちゃん、奴らがいそうな目ぼしい場所とか分からない？」

「流石にそう言う話はされてこなかったので……」

「そう言われるとそうだねえ……俺だって間違いなくしないしね。ただそうか……成果無しはまずいから探すだけ探さないとね」

「すみません」

「謝る事はないさ、今から探すわけだしね」

「そうですねえ……何処にあることやら」

「しかも、ここの化け物達と視覚共有してるんすよね？」

「そうですね……それで捕まった生徒も沢山います」

「うっわ……大変だねそりゃ、俺も捕まりたくないねえ」

「え？喜びそうじゃないっすか？」

「まさか、こんな化け物達と俺の興味を一緒にしないで欲しいんだけど」

「えー、こんな知識知らないとか言い始めそうだったっけど」

「わー俺の印象最悪だねえ」

「いい印象持つ人なんていないっすよ、彼との初対面だって忘れたんです？」

「それでも仲良くしてくれるってキル夫君は間違いなく善人だろうってね」

「実利だけと思うっすけどねえ」

「それでもさ。と言うかさ鳰ちゃんそこに突っかかってくるの酷くない？」

「ちょっと、喧嘩しないでくださいよ……」

「ごめんねえ、3年の盗賊同士って皆仲悪いから」

「と言うか陰キャの塊みたいな盗賊でアレだけの交友関係が広げられるキル夫君がやばいんすけどねえ」

「それはそうだね、彼は盗賊には思えないくらいになんでも吸収しようとするしさ」

「本当に凄いですよね、私も彼に助けられましたし」

「ああ、そういえばⅣも言ってたっけか」

「そうですね、Ⅳさんと２人でここへ来てました」

「キル夫君とⅣ　……どう考えても２人じゃ無理そうっすけどねえ」

迫りくる怪物に隠れながら呟く
こういったのを避けれるようには思えないが……

「さて……地下かな？」

「まあ地下っすねー」

「そう言えばキル夫君達は地下に行ったのかい？」

「いや、行ってないです」

正確には結界があって行けなかったのもあるが……間違いなくその先にあるだろうとは思った

「で、これかな？」

地下を見つけるが結界が張っているせいで入れないただこの先だろうなと

「鳰ちゃん時間稼ぎ頼んでいいかい？」

「しょうがないっすねえ、何分っすか？」

「3分あればいいかな」

「ヒュー、流石っすね」

「え?3ふ……え?」

流石に戸惑う、ボンボルド先生が明らかに隠したいものだろうはずなのにその結界を3分で解けるの?え?

「ほら晴香ちゃん、なんか来てるよ?君が頼りなんだから」

「はっはい!!」

慌てて武器を構える……すると角から敵が……

折原先輩は今解除中でしたよね?なんで分かったの!?

「と言うか戦ってしまっていいんですか?」

「どうせこれを解除する以上はバレるだろうからね」

「なるほど……」

納得しながら出来損ないを壊す

このくらいなら元から余裕だったが、学園に入ってから強くなってより簡単になった気がする

「さて、終わったよ」

「早過ぎませんか？」

「だって多くかかって3分だったしね」

「だからって短縮するとは思いませんでしたが……」

「それじゃあ行こうか、本番はここからだよ」

３人は階段を降りていった……

―――――――――――――――――――――――――――――――

階段を長時間降りていって謎の実験室のようにも思える場所に着く
不気味で少し足が止まったが先輩達は気にせず進んで行った

「あの……？」

「ここでは無さそうかな……」

「ここでは無いって？」

「ん？ボンボルドの量産個体の場所だよ」

「そう言えばそうでしたね……」

「しっかりしてよね」

「いや……さっきから不味いものしか見てないせいで」

「まあそうか……ただ気を抜いている暇は無いからね」

「はい」

急いで何かあるか探せと言われたし散らかすように探すわざわざこうすれば同じ場所は探さないだろうし決して整理出来ないわけではない……出来ないわけでは……

「何かは……そっちは無さそうっすね」

「確かに無いですけど……」

「ただ無いからってそこまで荒れないように……」

「いえ……荒れてるってわけじゃ」

「まあいいっすけど……次行くんで急いで欲しいっすね」

「了解」

「さて、急ごうか……」

そうして折原先輩が急いで登っていって……止まる

「どうしました？」

「登らないほうがいい」

「え？」

突然どうしたんだろう？
登るなって言われても……先に行かなきゃってことかな？

「ねえ晴香ちゃん」

「どうしました？」

「命を賭ける気はあるかい？」

「え？」

命を賭ける、元々その気だった
だが今何故それを念押しするんだ？

「これ以上先は命の危険がある……現状でもまずいのは変わりないけど」

「この先行ってもどうせ危険なのは一緒でしょ？」

「そうじゃない……この奥は肉体的な意味で確実にやばい」

「……聞かせてもらっていいですか？」

「入口が巧妙と言うか……見事に騙されたよ。登ろうとすると肉体に被害が及ぶ……」

「え？」

「俺は今入口方面に登ろうとした……ただそれだけなのに軋むような痛みがあったよ……恐らくそう言う領域なんだろうね」

「なっ……そんなのって……」

第一自分の研究室とは言え領域を常に展開していると言うことになる

更に言うならば、その場に居ないはずなのにだ……

あの人はどんだけ化け物なんだ……？

「これより奥は更に危険だろうねって意味でだ……君は行く気があるのかい？って……正直ここまでの情報を持ち帰るだけでもかなりだろうし……」

「ちょっとーウチはどうなんすかー？」

「君は言わずとも来るだろう？」

「もち、可愛い後輩のためっすし……一応は救われた側なんでー」

「ってわけだし……これより下は君だって知らない場所だろうからね……」

「……」

「早くしないとあの先生も来るだろうしすぐ決めて欲しいけどね……」

この段差を登るだけでもまずいってことか……更にこの奥に行けば……死ぬかもしれない

……でも答えは初めから決まっている

「行きます」

「分かったよ、じゃあ行こうか」

そもそもここで逃げるなんて死ぬ気がなかったって話だし……

私は小さい頃にここに連れてこられて既に死んだような身だ……だからこそ彼を同じようにさせたくない!!

――――――――――――――――――――――――――――――――

「さてここか」

遂に見つけた……相当地下だったが……それでもあの人のパーツを

「ただなんで動いているんですか……」

「何かを使っているね」

「多分、行方不明の生徒達を肉として動かしてるんじゃないですか？」

「……酷いことを」

「でも君だって、そうなる可能性はあったんだよ」

「……私は別の意味で最悪ですけどね」

「……埋め込まれているんだっけ？」

「結局身体の中から取り出すことも出来なかったので……」

「大丈夫なのかいそれ？」

「……自分の意思と瀕死の時以外は出ないようになっているので」

「逆に瀕死でも出るんだ……大丈夫？」

「はい、そうなるくらいなら敵陣に突っ込むので……」

「不安なんだけど……」

「まあ話はここまでにして……今はこれをどうするかっすよ」

「壊さないんですか？」

「そうしたいんだけどさ……恐ろしいレベルで罠が張られているんだよね」

「……キツイですか？」

「やる事はやるけど破壊しきるのはキツそうかな……」

「何か出来るんですか？」

「まあ仕込みだけしておくよ……。各自逃げる準備を」

「了解っす」

何をするか分からないけど……折原先輩を信じて逃げるとしよう
退路を確保しないと……

「さて……どれだけの事が出来るかな」

折原臨也は持って来たバッグを覗く
そこには異常なほどの妨害に特化したアイテムが入っていた

「筋弛緩剤はまず入れるとして……どれだけこの個体を弱らせられるか」

オリジナルは元よりどうすることも出来ない、そんな事は分かっている
この個体達を破壊出来るなら、しようとしたが……近づく事が出来ない以上確定を持って破壊出来たとは言えない……ならそれに賭けて中にグレネードを投げるとかは目標を視認出来なくなってしまうだけでリスクがあり過ぎる
……だからこそ出来ないのならどれだけ個々を弱く出来るかだ

「とりあえず色々とぶち込んで動きを見ますか」

「この肉体達に何がどれだけ聞くか分からないからねえ」

破棄をするならそれはそれで都合がいいが流石にそれは無いからこそ……出来るだけ効いてくれと様々な物を放り込む
肉は多少溶けたようだがまだ原型を保っている

「普通の人間なら崩れるはずなんだけどな……本当にあの教師は好き勝手やっていたようだね」

液体や劇物は投げたしこれで死んでくれるならって思ったがそんな事は無かった

「まっこれで終わりっと」

魔力の生成を妨げるガスを投げ込む

魔術師相手には絶大なはずだが……どれだけ入るかが自信が持てない

「これでも、自分自身で生きようとすれば俺も好きだけど。流石にただの傀儡の肉塊じゃあねえ」

せめて来世はと思いながら部屋を後にした

「待っていてくれたんだ」

「いや……登れないだけっす」

「あー……」

先に進んでいた2人は登るのに困難していた……そうだろうなとは思ったが

「どうしようか……」

「ここまでとは思いませんでしたね……」

「とりあえずこの階をもう少し漁ろうか……」

「え？急がないとまずいんじゃ？」

「間違いなくこのまま登っても死ぬだけだしね……ならせめて何かないかなって」

「あると思います？」

「無きゃ死なせたくない奴も死なせるだけだしね」

「それもそうですね」

そうして違う部屋を漁り始めた

――――――――――――――――――――――――――――――

正直ここにある物がなにがなんだか分からない

2人はある程度分かっているらしいけど……本当に凄いと思わされるばかりだ

「そっちは何かある？」

「飛び用のはあるっすけど……ちょっと距離足りないっすね」

「肉体が化け物の奴ら向けだなこれ……」

「あの……」

「ああ晴香ちゃんは分からないだろうから休んでていいよ」

「そうは言っても……」

「地下抜けてからが本番だ、その時に君の戦力が頼りだしね」

「……分かりました」

何も出来ないのはもどかしいが……後で何も出来ないってなるよりはマシか

「これはどうかな？」

「あー確かに使えなくはないかもしれないっすけど……」

「何か？」

「それで上がって一気にダメージが来ると……」

「ダメか……やっぱり普通に登るしかないかな？」

「そっすねえ……」

「それじゃあ時間が……」

「幸いポーションもかなりの量入手出来たし……ゴリ押しには十分そうだから」

痛い覚悟はするしかないか、それは仕方ない
どれだけ早く登ってポーションを節約出来るかってわけになるか

「ほら、晴香ちゃんもポーション持って」

「はい……では行きましょうか」

「気を付けてね」

「勿論です」

そうして3人は階段に戻る

一度折原先輩はアレ達の姿を見に行ったようだが……どうにかなりそうらしい

そのまま階段を登る……身体が痛い……ただ我慢するしかないとポーションを飲みながら駆け上がる

「まだ遠いけど……それでも少しは進んだよ」

1／3くらいは進んだだろうか？

ポーションの余力はまだある、どうにかなりそうだ

「おやおやおや」

と、都合の良い事は最後まで行かない

「あっ先生こんにちわ」

「こんにちわ、折原君。こんな所で会うとは意外ですね」

「うっかり慢心していたせいで罠踏んでしまってワープしちゃって……案内してもらっても良いですか？」

よくそれだけのことを言い出せるなと……口がここまで回るのは正直羨ましい

「残念ですが、それが真実だとしても帰すわけには行かないのですよ」

「えー、そんなこと言わずにさ」

「残念ですが悪い生徒には退場していただく必要があります」

「階段でやる気？俺とて暗殺くらいは出来るよ？」

避けられる場所ではない

魔術師の技も避けられないが盗賊の攻撃も避ける距離ではない

一撃さえあれば暗殺する事が出来るそれが例え吸血鬼であろうともと言った所だろう

「校長がいればそれさえも封じられたのですが……どうしようもありませんね」

「俺達は地上出たいだけだし、良いですよね？」

脅迫じみた交渉だが……見た感じはこちらが有利に見える

「残念ですが、それは出来ません。教師として悪事は見逃せませんから」

「全く……どっちが悪だよ……」

そうしてナイフを構えてボンボルド先生を刺そうとして

「私が何かする必要はありませんしね」

「え？」

一瞬で詠唱されたかと思うと足場が崩れる

「なっ……」

「落下死するかは分かりませんが……この階段の終わりに回復はありませんから。さようなら」

どうにか何処かを掴もうとするが……それすらも叶わずに……私達は下へと落ちて行くだけだった

続

第５８話②

―――――――――――――――――――――――――――――

必死に壁をよじ登ろうとする
しかし起伏の少ない壁と、登る事でのダメージで手を離す

「くっ……」

「だいぶキツいね、俺なんて登る欠片すら見つからないし」

走り先輩はまだ気絶している
落ちる寸前に何かをしていたようで、だからこそ私達は全員生きれたようだけど

「俺が妨害やデバフ用、鳰ちゃんが臨時用とかのアイテム持ってきたしね。俺も助けられたけど」

「……回復あるなし以前に登れる場所がないですか」

「そうだね、キル夫君達に終わり次第迎えにきてもらうしかないかな……」

「来てもらえるでしょうか……」

「ただ、問題はそれじゃないんだよね」

「他に何かあるんでしょうか？」

「食糧問題だよ……俺はそこまでは食べないけど、それでも流石にきついかな」

「確かに……出来るだけ荷物減らすために２日分しかありません」

「流石に１日２日で片付く問題じゃないしねこれ」

「そうですね……しかもここに気付くのがいつになるかですか」

あまりの状況の絶望さに俯いてしまいかける
ただ……諦めてどうにかなるわけでもないか……

「で、ほらいつまで寝ているんだい？」

「ぎゅむっ……」

走り先輩が叩き起こされた
余計なエネルギーとか考えたらまだ寝ておいた方がいいとも思ったけど……よく分からないや

「どうしたっすか……」

「現状分かるかい？」

「あー落ちて……だいぶ察したっす」

「で、どうするかってあるかい？」

「今ウチ目が覚めたばかりなんすけどね……登れる場所は？」

「晴香ちゃんが色々と試していたけどお手上げ状態だね」

「え？詰みじゃないっすか？」

「そうなんだけどさ、何かないかなって」

「……少なくとも今すぐには浮かばないっすね」

「それじゃあダラダラしてるしかないか」

「そうもいかないっすよ」

「え？」

「聞こえません……？」

その言葉に折原先輩はハッとする

え？一体何が聞こえるの？

「耳の調子が悪かったかな……聞き逃しちゃいけないものだったね」

「何かあったんです？」

「人では無い何かが徘徊しているようだ……しかも尋常じゃない大きさのようだ」

その言葉に冷や汗が流れた

――――――――――――――――――――――――――――――――

「どういう事ですか？」

「大きな声は厳禁で……多分どうしようもないし」

「了解しました、しかし……どうした……いや何がいるんです？」

「音的には生物ではあるかな……ただ肉を引きずる音が長い……だから大きさも可愛いレベルじゃないね」

「そんな……」

「とにかく、それにバレないようにしながら……どうにかするしかないっすかね」

「どうにかって……？」

「現状はノープランっすけどね」

「ですよね……」

もう一度駆け登ろうかって悩んだけど、落ちて騒音を鳴らすだけとしか思えなかったため、一度諦める

「音が近づいてません？」

「気付かれた……か、或いはただこっち来ているだけか……後者ならいいんだけど」

「……ちょっと待ってて欲しいっす」

「走り先輩何する気ですか？」

「ちょっと様子見てくるっす、このままじゃ逃げ場もないんで」

「大丈夫なんですか!?」

「いやまあ……そうするしか無いんで……」

若干に嫌々そうに見える顔をしながら何かが歩いているであろう道の方へと向かう

「……大丈夫ですよね、走り先輩」

「信じようか、俺達はそれしか出来ないし」

1秒1秒が長く感じる、信じながら待って……

そして帰ってきた

「無事で良かったで……」

安堵しようとしたが、走り先輩の顔に戸惑う……青くなっていて……何があったんだって

「これは……まずいっすよ……」

「聞いていいかい？」

「アレハ……分かりたクないっす……」

目が赤く充血している、走り先輩は一体何を見たの？

「メンタルポーション飲んで落ち着いて……」

急いで一気に飲み干した……そんなレベルだったの……一体何が……？

「っはー、蘇ったっす」

「そんな危険なものだったんですか？」

「……異物と言えるレベルでは、正直発狂したいレベルだったっす」

「気を付けたほうが良さそうだね……」

「多分目的はこっちじゃないっすけど……、そろそろ近くを通るっす」

「……ちなみに大きさは？」

「……ウチらの数十倍くらい？」

「……そっか」

敵いようがないと走り先輩が来た道を見返す

一応逃げる準備をするならそっちだろうなと思いながら

迂闊にそっちを見てしまった

「……」

なんだアレは……化け物で済む話じゃない……
失敗作？失敗作だってもっといい形をしている……
だったらなんだ？

「おい、晴香ちゃん!!」

アレは存在してはならない……そんなような
そう頭では思いつつ……身体が勝手に動く
やってはならない、悲鳴をあげてしまう
そしてその何かは此方を向く

「……仕方ないか、アレを見たらそうだろうし」

折原先輩は何故か無事そうにそれを見る
走り先輩は嫌そうにそれを見ている
私は……分かんないや

「失敗作ですらないね……ゴミかな？」

「ゴミっすか？」

「失敗中の失敗を地下に捨てて……それが纏まったんじゃないかなって」

「最悪っすね」

「……晴香ちゃんもまずそうだし……戦うしかなさそうかな」

戦えるわけがないのにそれでも仲間の為に挑もうとする

「セイコウサクメ」

「アイツがなんか言った？」

「成功作……？晴香ちゃんか……不味いね彼女をどうにか逃すかか……」

二人は理解すら出来ないそれに、武器を構えた
間違いなく、狙いはこの後輩だから

――――――――――――――――――――――――――――

「……っ」

気付けば気絶していた……何があったんだっけ？

「そうだっ……」

あの何かを見てそのまま気絶したんだ……
気絶なんてしている暇なんて無かった筈なのに

「二人は……」

慌てて二人を確認する
すぐ近くで血を流して倒れている

「え……なんで……」

すぐに理解する……元々地下で暗くて気付かなかったがすぐそばにそれはいた

「っひ……」

「ニクイニクイニクイ」

全力で押しつぶしてくるのを避ける
当たったら致命どころか即死だ……

「どうしよう……」

考えを止めれば死ぬ、だから動き続けないと

「ユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイ」

「私だって被害者だ！そんなこと言われても困るよ!!」

刀で斬り付けるがその刀を飲む混む
そのまま捕まりかけるが慌てて手を離す

「……攻撃も通らないんだ」

爛れ落ちる肉を見る、しかしまたその肉が吸い込まれる

「何が効くか……？」

バッグには焼夷手榴弾……これなら効くかもしれない
ただ効いた場合あの肉が全て燃える
先輩も私もただじゃ済まない……どころか死ぬだろう

キル夫さんから貰った火炎トラップもありますが……これでは足止めくらいにしかならないだろう

「……」

「ヒトツニナレ」

なり損ない達が身体を伸ばしてくる

……当たれば間違いなくアウトだが、巨体に部屋を飲み込まれて逃げ道が無くなる

「嘘……」

そのまま腕のような部分に身体が飲み込まれて行く

息が……出来ない……

「コレデコレデコレデコレデセイコウサク」

「……ダメだ死ぬ」

何も感じなくなって……五感が全てなくなってもう終わり……

そうして気を失いかける瞬間

「痛い痛い痛い痛い……」

背中の痛みで意識が覚醒する

自分の中に埋まる、触手が背中を破って這い出てきた

「そっか……成功作って言おうとも私だって化け物じゃん」

当たり前のように学園で暮らしていて忘れることもしばしばあった……でもそうだね、これが埋まっているんだもん、これと同じだよ

「うあああああああ」

痛みに耐えながら背中から暴れさせる
いつもは痛みで自我を失うけど……今日だけはそう言うわけには行かない……

「無意識で暴れるわけにはいかないから……」

触手が塊の中を荒らす、それに苦しむが如く吐き出される
……助かった、と言っている暇じゃない

「倒す事は無理……だったら何が出来るか……」

二人を安全な場所に……ってわけにもいかない
これのせいで安全な場所は精々上しか……

「上……」

登ればダメージを受ける、ただそれは登ればであるはずだ……

「命はさ、張れるって言ったって……怖いものは怖いよ」

ただ……それしかない……やるしかない

「ニガサナイ」

突進してくるそれに火炎罠をぶつける
やはり身体が燃え出したりはしないが、苦しんで引いている

「今……」

背中の触手を更に増やして二人を掴む
更に破れるような痛みと、血が背中から流れ出すのが分かる、がそんなのどうでもいい

「いっけえええええええ」

二人を上まで持っていく、そして上昇のダメージが自分に入る

「あぐっ……」

全身から血が無くなったんじゃ無いかってくらいにまた血を流す、血を吐く

「止まるわけにはいかないから……」

身体にここまでの物が埋まってたんだってくらい伸ばし続ける
自分の身体に入りきる、入りきらない所か……何倍、何十倍もの長さのものが出てきて戸惑う

「入口は分からないけど……」

ただただ伸ばし続ける、どこまでか分からないから限界まで
その分負荷がかかり、今どうなってるのか分からない

「マテ」

身体が伸びて来て腕を掴む

「邪魔をするな!!」

〝自ら〟の腕を斬り落として触手を伸ばす、そっちを気にしている暇はない

向こうで腕が取れた拍子にのけぞったらしいがそんなの一々気にしてられない

「……ポーション!!」

残った腕でポーションを流し込みながら意識を保つ

一度に多量摂取は危険だが……そんなこと言ってられない

「既に化け物にされている私はポーションの多量摂取は簡単に理性のない怪物になるって」

「伸びきった……、入口に届いていればいいけど」

さて後は仕上げだ……届いてなかったら悪いけど、もうすぐ目が覚めるだろし
そして私は焼夷手榴弾のピンを抜き、放り投げた

―――――――――――――――――――――――――――――

折原臨也は目を覚ます、しかし違和感を覚える
藤堂晴香、彼女を庇ったまではいいがその後の記憶はない

「ここは研究室の……地上階？」

周りを確認する、鳰はいるようだが

「鳰ちゃん、流石に寝てる場合じゃなさそうだ」

先ほど以上に振り回して無理やり起こす

悪いがのんびりしているわけじゃ無いから

「……申し訳ないっす、気絶してました」

「俺もしてたからいいよ、でも今はそうじゃ無い」

「……地上階っすか？」

「そのようだね」

「どうして……は分かってなさそうっすね」

「そうだね、分からない……ただ地上に戻って来たと晴香ちゃんが居ないことだけは分かる」

「探すって言っても……許可は出ないっすよね」

「勿論だ、俺達は帰らなきゃいけない。伝えなきゃいけない事もあるし」

「……そうっすね」

「助けたって思いきや助けられたのが俺達ってね」

「……後輩に助けられたのは初めてじゃないっすけど……それでも複雑っすね」

「そうだね、俺達がいながらなんてザマだってね」

「キル夫君がいれば助けられたんじゃ……そう思うようなクズに成り果てちゃったっすね」

「まあそうだね……ただ俺達はその奇跡を信じるしかないよ」

「いや居ないっすけど」

「居なくたって、彼の奇跡はそんなものじゃ終わらないさ。俺は人間を愛してるけど、そこから起こる奇跡だって愛してるのだから」

「はぁ……まあそう言う話はどうでもいいんすけど」

「鳰ちゃんが聞いたんじゃないか」

「いつもの出されて困ってるんすけどね……」

「元気出たかい？」

「元気は元から元気っすよ、血を流し過ぎてハイになってるだけかもしれないっすけど」

「ふぅん、まあどうでもいいや」

「あっはい……」

「じゃあ、キル夫君達の元に戻……」

パチパチと音がする……慌てて音のする方を確認すると施設が燃えている?

「ははは……晴香ちゃん流石だね……ただこれ俺がデバフ撒いた意味が無くなってるかな?」

「いや、案外そのせいで逃げ出せなくなってるとかもあるっすし気負わないでーって」

「別に気負ってはないけどさ、とにかくこうなった以上俺達は生きないとダメか」

「そうっすね……」

3年の盗賊コースの折原臨也、同じく3年の走り鴉
この2人は研究室から脱出した
入って来た時に比べて1人足らずに……

…

「やられましたね……」

ボンボルドは燃える研究所を見ている
あの研究所には全部では無いが、かなりの自分のストックがいた
それが全部燃え尽きてしまった、取り返す事も不可能だろう

「初めからトドメを刺しておくべきでしたか……」

誰がやったのか、3年の2人か……それとも娘とも言えるべき存在であるあの子か
晴香だったら成長を喜びたいところだが、その代償は幾ら何でも大き過ぎた

「全く、あの子の成長を喜べないのは悲しい事ですが」

他の失敗とは違う成功品、嬉しくもあり複雑でもある
燃える研究室を見ながらそう思っていた

「無事に出れたかどうか、貴女を待っていますよ」

そう言い残して他のストックを確認するために燃える研究室を後にした

――――――――――――――――――――――――――――――

身体が熱い、溶けるような感覚さえ覚える
上を見上げると先端の触手すらも燃えているのを感じる……
隣で肉塊が燃えており、強烈な匂いを発している

「……」

もう助からないのは分かってるんだしすぐに燃え尽きて欲しいのだけど……苦痛が続いてしんどいだけだし

「こっから助かるなら奇跡だけど」

彼ならあり得るって考えてるけど、ここにいない
だからそんな奇跡すらもあり得ないんだと

「懐かしいな……」

彼との出会いを思い出す、ここに来て助け出してくれた彼のことを
目の前の化け物のような私を笑顔で受け入れてくれた人を

「実験達として学園に利用されるだけされて死ぬだけだっただろうね……」

もう実験体になる前の記憶は残っていない
実験体中の記憶も消されていて……殆ど今の記憶にあるのは彼だけだ

「……これで少しは恩が返せたかな?」

意識が限界になってもう終わりなんだなと自覚する

来世は普通の女の子で、普通に恋したいなって

「……ダメだ、本当はそう思ってるのに思えないな……人間に戻り過ぎちゃったのかな？」

泣いているんだと思う、涙さえ出ないのだけど
この世界で生きることを許されたんだから本当はもう少し生きたかったなって

「キル夫君……」

彼に祈った……神様では無いただの彼に

１ｄ１００＼５０　３８

「あれ……」

霞んだ目が誰かを捉える

えっとあの人は誰だっけ？
知っているはずなのに思い出せないと思いつつ、ここは危ないって
ただその言葉すら出なかった

「……ああ、藤堂さん。希望に満ち溢れたキミがこんな風になってるなんて想像も付かないね」

「貴方は……」

「そっか、ボクの事なんて思い出せないよね。そりゃそうさボクはこの世界では居なかったんだから」

何を言っているんだろう彼は……と言うか居なかったはずなのに

「早く逃げ……」

「ああ無理しちゃダメだよ、このままじゃ希望溢れるキミまで死んじゃうから……」

何を言っているんだ……私は死ぬしか無いだろうに……それ以外なんて

「本当はもう関わるつもりはなかったんだけど、化け物同士の好みよしみで一度だけ奇跡を起こしてあげようかな」

「何を……」

「まあそうだね……奇跡を最後まで諦めなかったキミへのプレゼントって事で」

そのまま光に包まれる
一体何がと思ったが……目を開けると砂浜に居た
確かここは……学園近くの血は大分流した筈なのに……身体が無事とは言わないがだいぶ危険からは離れた

「……どう言う事」

何より、身体に居たはずの触手の気配を感じない中が空っぽになったように思える

「本当に奇跡が起きたのかな？」

フラフラだけどそのまま一人で皆の元へと向かった

多少は驚かれたが……それ以上に帰って来てくれたことを喜んでくれたらしく、皆笑いながら受け入れてくれた

ただいま皆！

――――――――――――――――――――――――――

第５９話

「キル夫、準備は出来たか？」

「はい！準備出来ました！」

皆んなの前に立つ前に確認し直す

うん大丈夫だ

「こっからが肝心だからな、しっかりしろよ！」

「はい！」

そうして皆の前の立つ

怪我でまだ動けない藤堂以外は皆揃っている
ついに……か

「皆集まってくれてありがとうな。そしてこっからが正念場だ！」

「気にしなくていいぜ、これは俺達の問題でもあるんだしよ！」

カズマがまず賛同して他の皆が続く
俺達も吸血鬼にいいようにやられっぱなしじゃすまないってさ

「裏ギルドによる生徒達の避難、3人によるボンボルドのストックの破壊、これによってだいぶ戦えるようになったと思う」

正確な敵の人数は分かってないけど、それでも敵は減っているのは確実だ
そう考えると感謝しないといけない人が沢山いるな

「今日、学園に全員で突っ込む。だから本格的な戦争が始まるわけだ」

懸念はまだある、ただ減った今飛び込まないと劣勢になるだけだ
だから戦争を始める

「居ないとは思うが言っておく。無理強いする気はない。嫌ならそのまま帰ってくれていい。学校の範囲外ならアイツらの言葉も届かねえだろうしな」

居ても誰も責めるなよと告げる
実際は居ないとは思うじゃなくて居ても出辛いのをなんとかしたかった……だが

「本当に命懸けだからな？死んだって誰も文句言うんじゃねえぞ」

「それなら正面突破しない方がよくね？」

「いや、オルガ先輩が言うには敵に搦手は勝てないし、余計な事をすると罠に嵌るだけだから正面からの方がいいってよ」

「確かに……長谷川が居なくてもボンボルドがキツいか」

あの人にこう言った場面では隙が無いだろうし何よりストックを燃やしたばかりだ

……あらゆる事態を考えてるだろう

「ってわけで正面からだぜ？相当キツいだろうが大丈夫か？」

脅すように言うが誰も去ろうとはしない

……俺だったらまず逃げたいんだがな

「それぞれの決意は伝わった。わざわざ弱気な事言って悪かったな」

「いや、当然だろうよ。逃げたい奴は逃してやらなきゃダメだしな」

「いいならいいんだけどよ」

「本当にお前はお人好しだよ」

「それでいいんだよ、それが俺らしいって言われたんだからな」

「だろうな、だからこそ俺達は付いていくんだ！」

改めて前を向き直す、そして着いてきてくれた皆を見る

「ターゲットは校長、カーミラ、ボンボルドこの３人は確実に討伐する。残して神の研究はもうさせねえ」

もしかしたら先生達の中でも和解出来た道はあったかもしれねえ
ただ……俺は英雄じゃねえんだ敵を含めた全員なんざ救えねえ

「この世界のためなんざ言わねえよ、俺達にそんな使命なんざねえしな。ただ生き残る為に戦う……!!」

こっ恥ずかしい事を言っている気がするが……それが俺らしくていいんだ

「キル夫殿、私は冒険者じゃないので手伝えませんがアイテム等を渡しますので……役立ててください」

「秋山さん有り難うございました！」

「ご武運を」

実際世界なんざのために戦わねえ
冒険者らしく自分達のために戦う
そう叫んで拳を上げた
さて、出発だ

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「学園……？」

数日見ない間に学園がかなりの変貌を遂げている気がする

「ボンボルド……だいぶやりやがったな」

「大丈夫なんですかこれ？」

「どっちみち行くしかねえよ」

「そうですね」

明らかに魔王城？みたいな感じになった学園に向かって走り抜ける

「オルガ先輩、アレなんすか？」

「……大砲だな」

「なんであるんですか？」

「さあな、気を付けろ！」

発射された砲弾を躱し前へ進む
岩の様な形状だったが……当たるとまずそうだ

「これはっ!!」

「沙都子、どうした?」

「ねぇねぇの……」

「何がっ……」

続いて来た砲撃を必至に躱す
そしてその瞬間見えてしまう
砲撃手に沙都子の姉がいる事を

「ウィッチ先輩……マジかよ……」

ってことはこれは大砲に混ざって詠唱しているメテオか……ＭＰが続くまで永遠に撃ち込んできそうだ

「先に……進めねえな……」

遮蔽物に隠れて隙を窺っているが絶え間なく飛んでくる砲撃に明日を止められる撤退するわけにも行かねえが……このままじゃ進めねえ

「どうすりゃいいんだ……」

「言ってんだろ、こう言う時は味方を頼れってよ」

「ニケ先輩……？」

「ここは任せな、引き付けてやるからよ」

光魔法かっこいいポーズ！
ニケ先輩がそう叫ぶと砲弾は全て彼の方に集中して行った

「よし行け！」

「有り難うございます!!」

隙が出来た砲撃を潜り抜け、城門の先へと抜けて行った

「さて……問題は俺も近付けないんだけどな」

多少の被弾しながらポーズを続ける
撃ち続けるのをやめてもこっちに引きつけないと行けない
このままじゃ……不味いが

「死ぬってタマじゃねえと思ったんだけどな」

ウィッチの奴が詠唱を始めやがった
回避したいが……ダメージのせいで動けねえ……
ここで終わりか……勇者は死なねえと思ったが

「クエーサー！」

光の粒が降り注いでくる
直撃す……

「ニケ先輩!!」

叫ぶと共に思い切り引っ張られる
お陰で遮蔽物に入れたが……

「沙都子、お前なんでいるんだ!!」

「ねぇねぇの様子がおかしいんですもの、放ってはおけませんわ」
「だからって盗賊が2人でどうするんだよ、勝ち目ねえだろうが」
そもそも近付けないで終わる
道連れが増えるだけなんて勘弁だ
「それなら大丈夫ですの」
「何がだよ」
「頼りになる前衛が居ますから」
「あん？」
そうして遮蔽物から顔を覗かせる

キル夫達の方に行ってないか心配したが……ウィッチは至近距離で一撃喰らっていた

「吹っ飛べや!!」

「くっ」

「爆豪？なんでアイツが……？」

「暴れたくて仕方が無かった様ですわ。だから一緒に来ましたの」

「確かにこれなら勝てないわけじゃないが……」

「私達はアシストに留まりますが……それでどうにかするしかありませんわね」

「だな……戦えるなら戦わねえとな死にたいわけじゃないんだし」

「それじゃあねぇねぇ……聞かせて貰いますからね！」

敵対することになった姉妹
その妹は姉がどうしてそこに居るのか、問い詰めるため武器を構えた

――――――――――――――――――――――――――――――

「なんで中庭がこんな広いんだよ!!」

「恐らくはダンジョン化してるね」

折原先輩がそう言っているが……学園をダンジョン化なんて正気か？

「とにかく進むしかないよ」

「そうですね……」

とにかく進むしかない……
そう思いながら前へと進む

「キル夫君、次の敵が……」

もう誰が居ても驚かないと思っていたが……そうも行かなかった

「ゆんゆんさん？」

「……」

確かに魔術師コースだとは言え敵に回るなんざ思っていなかった
カズマと仲が良いらしいし……穏便に済ませたいが

「あの……どいてくれませんか？」

「……」

「ゆんゆんさん？」

「校長は言いました」

「何を……」

「敵を倒せばめぐみんを蘇らせると！」

「そんなこと出来るわけ……!!」

「出来ます!!じゃないとめぐみんは報われないんだから!!」

「……」

本気で信じ込んでいる顔だ

説得は無理かもしれない

「だから……私は……」

「あーそうだな、めぐみんは蘇るかもしれねえ」

「カズマ!?」

「そうですよね！やっぱカズマさんが」

「ただな、俺達が知ってた、仲良かったためぐみんは絶対に戻って来ないんだ」

「……そんな事はない！」

「それに、死んだ人間をいつまでも現世に縛り付けるのも間違ってると思うぜ?」

「カズマさん……それ以上言うと撃ちますよ?」

「残念だけど、今回ばかりは正しいのは俺だよ」

「カズマ……」

寂しそうな顔をしながらゆんゆんさんを見つめている
理解はしているが思うところはあるのか？

「ほらキル夫、先行けよ」

「でも……」

「これは、俺自身への贖罪の意味もあるんだよ」

「分かった、カズマ死ぬなよ？」

「努力はする」

カズマを信じて進む……
俺は向かわなきゃ行けないから

「キル夫君」

「どうしました走り先輩？」

「ウチが友人の事見てるんで安心して進んでいいっすよ？」

「でも……」

「男としてカッコつけたいのは分かるけど、間違いなく死ぬんで、ウチがサポートするんで」

「分かりました！お願いします」

「キル夫君が要っすからね頑張って」

「了解しました！」

２人に任せて先に進む

ゆんゆんさんとかも大事だが、それ以上に校長を、教師陣をどうにかしないといけないから

「先輩がいるのは心強いっすけど……どうしますかねえ」

「罠に掛ければいいんじゃないっすか？」

ゆんゆんは確かにそう言った類に免疫が無いだろうから引っ掛かりそうだが

どちらにせよ２人が散開した程度じゃ見破られるだろう

「エクスプロージョン！」

「は!?」

いきなりぶっ放してくるなんざ思わなかった
間に合うか?

「のわ!!」

何かに躓いて転ける
その直後真上にエクスプロージョンが通る……怖……

「カズマはん大丈夫かいな」

「日影……お前今まで何処にいたんだよ!?」

「そりゃゆんゆんと一緒になあ……ただもう……見てられんのや……」

友人の事を思いながら徐々に壊れて行く彼女の事を……

「だから罠で止めるんやろ？手伝うで」

「助かる！」

ゆんゆんを傷付けたくないけど止めないと行けない……
だから……めぐみんと同じようにさせないためにやってやっからな!!

――――――――――――――――――――――――――――――

「やあ、君が岡島キル夫君だね。さようなら」

突然の言葉に戸惑うも何かを書き始め……意識が……

「反魂唱」

「苦しくなくなった……!!」

今一体何が起きかけていたんだ……？

「キル夫君、今殺されかけてたよ」

「マジですか……？」

「うん」

「……まどか先輩、有り難うございます」

「いいよ、それより彼は……」

茶髪のキザそうな青年
手には本を持っているようだが魔術師か？

「兄さん、いきなりな挨拶やな」

「はやてか、邪魔をしないでくれないか？」

「兄さん……と言う事はこいつが八神月か」

「ああそうさ、不甲斐ない妹と比べて優れた兄。それが僕かな」

「大した自信家じゃねえか」

「実際凄い事は事実やしな」

「マジかよ……」

予め聞いていたが、それでも間違いなく苦労する相手か

「学園から秘密兵器を貰ったからね、1人ずつ処理させてもらうよ」

またノートを書こうとするのをはやてさんが魔術で止める

「その程度かい？僕の妹ながら情けないね」

「うっさい、１発殴らな気が済まへん」

「早々にノートに書いて終わりにしよう」

素早い手付きでノートに書き込む
一瞬苦しむがすぐに反魂で無効化された

「キル夫君は先に進んで」

「まどか先輩……」

「大丈夫、私は即死を止められるから。はやてちゃんを守って見せる」

「分かりました、生きてくださいよ！」

「うん！」

兄を止める、それをまどか先輩に託して先へと進む
早いうちに止めないとノートのせいで手遅れになるかもしれない
そうはさせたくないから

「さて……結局行かせてしまったけどすぐ終わらせればいいでしょう」

この場には八神はやて、鹿目まどかそしてもう1人残っていた

「誰が居ようと変わりはしないんだけどさ、そこの後輩も残って大丈夫なのかい？」

「聞きたいことがあったしな」

「いいよ、可愛い後輩に免じて聞いてあげよう。何が聞きたい？」

夜神月はもう1人残った生徒、中嶋正義の答えを待つ

「お前、そのノートで何人殺した」

「数え切れないほどの悪をかな、この世にはゴミが多過ぎる」

「……それは同感だな、アンタとは反吐が出る程行動全てが一緒だ」

救いようのない人間達を私刑で裁いてきた
それは自分だって同じである
だからこそ、同族嫌悪でもあるのか
中嶋正義にはそれが許せなかった

「分かり合えるか、君は賢い人間だよ」

「アンタも悪の1人だってことがな」

「なんだと……？」

「分かり合えるわけがないだろう？アンタは悪で俺は正義だ」

同じだからこそ自分は正義でアイツが悪だ
そう言い聞かせて本を出す

「……僕は悪なんかじゃない!!悪は学園に刃向かうお前達だろうが!!」

激昂した夜神月は殴りかかって来ようとする
それを躱しルールブックを開いた

「殺人罪の罪により、台を蹴れ判決執行のルールブック」

互いの私刑が始まった

―――――――――――――――――――――――――――――――――

「さてここか」

次の部屋に向かおうと扉を開けようとする

「……っち」

しかし唐突に襲い来る不安に気圧され、開けずにドアを蹴り飛ばすと、直後に爆発した

「なっ!?」

「おや、行儀の悪い奴だ」

「吉良先輩……」

明らかに敵対すると言われていた吉良吉影、その男が前にいた

「久しぶりだねキル夫君」

「野外授業の時以来ですね……」

「もうそんなに経つんすね……」

あの時の吉良先輩は面倒臭そうだが、真面目に立ち会ってくれた
俺に技を教えてくれたのも彼だ

「正直、恩人でもありますし敵対したくないんですが……」

「だったら大人しくやられてくれないか？」

「そう言うわけにはいかないですが……何故学園側に」

「私は静かに暮らしたいんだ」

「静かに……」

「絶望も喜びも必要じゃあ無くて、ただ平穏ならそれでいい。だがそれを崩したのは君達だ」

「それは……俺だって死にたくないんだ」

「だから乗り越えたまえ、キラークイーン・シアーハートアタック！」

吉良先輩が叫ぶと髑髏のような顔をした生物のような物がそのままこっちに突っ込んで来……

「甘い甘い！」

その言葉と共に爆発する、一体何……

「マサムネせんぱあああああい!?」

「安心しろ!この程度無事だ」

そう言いながら倒れてピクピクしている

……本当に大丈夫なのか?

「あのマサムネせんぱ……」

「大丈夫だあああ!」

そう言って叫びながら起き上がる

傷は殆ど修復している

「結構爆発がヤバいがマサムネなら余裕だ!むしろ後輩には任せられないし行くといい!」

「それなら君が嬲り殺しになるだけだ！シアーハートアタック！」

同様の物が発射されると同時に爆破する

慌てて吉良先輩は周囲を確認し、理解した

「シノンか貴様……」

後ろを確認すると銃を構えたシノンさんの銃口から煙が上がっていた

「先輩だけじゃ盾になって爆破されて終わりだからね、私が残るよ」

「分かりました……頑張ってください」

「うん」

「だったらそこの盾にしかなれない先輩は後回しでまずは君か……」

シノンを攻撃しようとするが咄嗟に身を翻す
一瞬遅れれば喉が掻っ切られていた

「……外しちゃった」

「渚!?」

「ああキル夫君大丈夫。僕も残るし、彼には恐怖に怯えてもらうよ」

「だったら君を……!!」

渚を狙おうとしたら頭目掛けて狙撃が飛んで来る
また態勢を戻すと暗殺が目の前にまで迫って来る
無理に暗殺しようとするとマサムネ先輩が庇って爆破されて立ち上がる
……これなら大丈夫そうか

「ほら早く行って!!」

「ああ、頼んだぜ」

「行かせるかキラークイーン！」

「ぐわー」

何度目かの庇ったマサムネ先輩が爆破されながら先に進む元凶達を倒すために

「後は教師陣と数人か……やってこうぜキル夫！」

「はい、戦ってくれてる皆のために勝たないと！」

そうして次の扉を開けた

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

続

第５９②

ドアを開ける、ドアを開ける、何度目かのドアを開ける
地形のせいか迷子になりながら進んでいる……畜生、正規ルートはどっちだ!?

「だいぶ騙されてるね」

「盗賊なのに情けねえっすわ……」

「しょうがないでしょ、私達だって一緒に迷ってるし」

アカネが言う通り、みんな一斉に迷っている
折原先輩が気を利かせて地図を書いてくれたおかげで多少はマシだが……無ければ皆で迷っていただろう

「なるほどね」

「何か分かりました？折原先輩」

「ループしてるかな、強行突破しないと行けないかもしれない」

「ループですか……？周りが全く同じように見えませんが……」

「だから、ループしていないように思わせてるんだよ。実際はしててもしてないと思って進み続けてしまう」

「怖いですね……」

「出来るのはタチの悪い魔術師……ボンボルドかな」

「どうすればいいんですか……？」

「そうだね……かなでちゃん」

「私……？」

「解除お願いしてもいいかい？」

「オルガ先輩じゃ無いんですか……？」

「いいや……今回はかなでちゃんかな」

「分かったわ。」

「かなで、大丈夫なのか？」

「……ええ大丈夫よ」

そうしてかなでは何かを唱え始める
一瞬光で目を眩ました後、ドアの前にいた

「あれ……ここは……？」

「まさか……一歩も進んでいなかったのは予想外かな」

「……この先にいるんですよね？」

「ああ居るだろうね」

ボンボルド、恐らくは校長以上に面倒で一番因縁のある奴な気がするが……
何にせよ止めないといけない

「ドアを開けてすぐっ!!」

開けると同時に突っ込んでって奇襲する

成功すればよし、失敗でも……

「なっ……」

鋭い礫が飛んで来る
こっちが来るタイミングもお見通しってわけかよ……

「そのまま……問題ないわ」

「かなで?……分かった」

彼女を信じて避けずにそのまま突っ込む
突如礫が砕けボンボルドに蹴りを一発キメる

「……なるほど」

「もう一ぱ……」

「キル夫！下がれ!!」

「くっ……」

オルガ先輩に言われ追撃をやめて下がった
いくら何でも一人で突っ走りすぎたか

「全く……たくましい限りですね」

「そりゃどうもっと」

「ただ……研究所を燃やしたりなどとただの生徒にしてはヤンチャが過ぎるようですが」

「なんだったらこのまま学園だって燃やしますよ」

「全く……少し痛い目に遭わないといけませんね」

「おっし……じゃあ全員で……」

「キル夫!!上の方から強大な魔力を感じる……」

「なにを……」

上を向くが……なんだ?
目に見える位置では無いが……何ヲやっテいル?

「ついに始めましたか」

「何がだよ」

「私も向かわなければならないので話している暇などありませんよ」

「畜生!!校長か!」

何をしやがっている
分かんない以上のんびり戦っている暇は無いか

「まーた誰かを置いて行くしか無いね」

「分かっていますけど……今までの相手と桁違いなんですよ!!」

何人いれば勝てるって言うんだ……分からない、自信がない

「悩ましいだろう?」

「折原先輩……」

「だから俺が残るから頑張りな」

「無茶ですよ!!」

「いいよいいよ、どっちみち相手は規格外だ」

「命を無駄にはしてはいけませんよ」

なんで相手にまで心配されているんだ……

「それに……俺は階段を落とされた借り、アンタは研究所を燃やされた借り、ちょうどいいじゃん」

「……」

「それじゃ言っていいよ」

「……でも……いや分かりました!!」

一瞬躊躇ったがそのまま進んで行く
折原先輩一人じゃキツいと思うが……それでもだ

「……いいですねえ友情は」

「すんなりキル夫君を通しちゃうんだ、てっきりキル夫君を取り押さえようと暴れてくるって思ったのに」

「問題ありません……狙いは彼じゃないので」

キル夫達が通り過ぎて油断していた今かなでに何かが迫る
最後尾を走っていたため前の皆は気付くのが遅れる

「貴女……何者ですか?」

影が彼女を捕らえ引き摺り込まれる
その瞬間、かなでは姿を崩し人形が現れる

「なっ……」

「やれやれ、臨也君の予測はよく当たるもんだ」

「そりゃそうでしょ、だって彼女只者じゃないよ」

進んだ先からⅣが戻って来て新たな人形を呼び出す

「もしかしてキル夫君と一緒の神の一部なのかな?」

「かもしれませんねえ、そこの教師が欲しがりましたし」

「……おかしいですねえ、魔術師には私の血が入っている筈なんですが」

「残念無念、テメエの血なんざ書き換え終わってんだよ」

キル夫が持って来た血アレのお陰でボンボルドの言葉など何も意味をなさない

「……他のメンバーも言い聞かせられてるんだろうな」

「かもしれないし自主的かもしれない、俺達には関係ないけどね」

「それもそうか、今は散々なファンサービスのお礼をしなくちゃならないな」

悪友二人が肩を並べる

2年間は師と仰いだが、今は尊敬など一切消えている相手に

「本当のファンサービスを教えてやるよ」

「特別に俺もファンサービスしようかな」

「やれやれ……本気で戦わないとまずそうだ」

直後、衝突して土煙が舞い上がった

――――――――――――――――――――――――――――――

後敵は何人いるんだと思いながら扉を開ける
そこは大聖堂……と言うか学園の食堂だ
何故ここだけ残っているんだ？

「キル夫さん、お待ちしていました」

カーミラ……神官コースの教師で、俺とはほぼ関わりが無かった
折原先輩の話では……校長は彼女を神にする気だったらしい

「待ってた……ねえ……」

「一度話し合いたいと思っていたので」

「話し合う時間なんて無いです。先に行かせて貰います」

「何故ですか？」

「校長のこの馬鹿げた事を止めなければならないので」

「馬鹿げたですか……？」

「……何か？」

「吸血鬼の神を造るって事の何処が馬鹿げていますか？」

「全部ですよ、神様を造ることもおかしけりゃ、そのために何を犠牲にしてもいいって言うのもおかしい。それを自分の都合の良いように押し付けるのもな」

「……」

「オールマイトは力に憧れて神に成りたがっていた。そりゃあの人らしいしな……ただそれをせずアンタにしようとしたのは結局自分でリスクを負わずに、いざと言う時に操るだけじゃねえか」

「黙りなさい！」

「結局、校長は吸血鬼は不遇だとかは詭弁で、神を殺してトップに付きたいだけだろうが！そのために生徒の命……それどころかカーミラの命さえも厭わない？ふざけんなよ」

「黙りなさい!!」

怒りを露わにし、オーラのような闇のような
全身が黒く包まれる
怒らせてまずいと思ったが、校長と合流されると言う最悪な事態は回避出来たので良しとする

「人間風情が……」

爪で引き裂かれそうなのを防ぎそのまま三日月先輩が突っ込んで行く
しかし手応えは薄いようだ

「オルガ……キツいかもしれない」

「どれくらいだ?」

「彼女を神を造るベースにするのも分かるくらい。強さは……校長より上だと思う……」

「そうか……仕方ねえ不味いが最悪よりはマシか……そこの3人組手伝え」

「え?」

姉さん達が突如呼ばれて戸惑う
正直俺も呼ぶとは思ってなかったし

「こっちも全力出さないと不味い。だから頼むぜ……それと」

俺の方を向いてくる

全力って言ってたし俺も出るのか

「悪いが俺もここでカーミラの足止めに入る。だからキル夫先へ行ってくれ」

「大丈夫なんですか？」

「なぁに、そのためのあの３人だ」

「オルガ先輩……無事を」

「おう、それと新条に富樫、３年はもういないからお前達が肝だ。頑張れよ」

「押忍」

「言われなくても」

そうして理性を失っているカーミラの隣をバレないように越して行く
背後を突かれたら不味かったが、あの5人が引き付けてくれていたらしい
割と最強メンバーだし信じながら進むとしよう
……もうすぐ校長だ

――――――――――――――――――――――――――――――

荘厳な扉がある……ここに校長が……

「気を付けろよ」

「分かっています」

富樫先輩に注意をされながら扉を開ける

もう逃げることなんて出来ない

「さて、アンタの野望を……!!」

「はーっはっは、私だよ!」

そう言えば……コイツも居たんだった……

檀黎斗……それにマルシルか

「残念だけど通すわけには行かないわ」

「邪魔しないでくれ……俺達は行かなきゃならないんだ」

「そうも行くまい、私達も妨害が目的なのでな!!」

「邪魔だあああああああ!!」

この奥から強大な魔力を感じる
急がないとまずいのに

「ガードスキル、ハーモニクス」

かなでがその言葉を呟くと、部屋中にかなでが増える

「……すまない、助かった」

「先輩からは、私も最奥まで行けと言われたのだけど……仕方ないわ私がやる」

「じゃあ他に……」

「1人でいいわ」

「でも……」

「大丈夫、それにメインはこの奥でしょ」

「……そうだな」

「すぐに行くわ、だから頑張って」

「……ああ」

1年2人だ皆で戦えばすぐにでも終わると思う
ただ……奥のそれがなんなのか分からないし手遅れになってはいけない……
それにだ、オルガ先輩達がすぐに来てくれるだろ……なんせあの黄金メンツだぜ？
だから……危険でも1人でお願いする……

「ほんっと……終わったら皆に謝らないとな」

残った全員で間をすり抜けて行く
2人は魔術を唱えようとするも赤い目をしたかなで達がそれを止める

周りを抑えてくれているのもあって楽に通り抜けた

「ちょっと！貴方が大丈夫だって言ってたのに通り抜けられちゃったじゃ無いの」

「はーっはっは、私でも失敗はあるさ。あらゆる生物失敗などないなんてあり得ないからね」

「……そう言ってる暇ないでしょ、急いで倒して校長先生の元に向かわないと」

「まあ焦るな、私にはこれがある」

そう言ってベルトを付けライダーへと姿を変える

「何その……趣味悪いの」

「残念ながら校長に渡す余裕はなくて1人分だがね、私の秘密兵器さァ！」

「それあるならさっさと使っておきなさいよ!!」

「いいだろう別に、そして立華ぁ！神の力を見る時が来たようだな」

「神は貴方じゃなくて……先生でしょうが」

「いいや私も神だ、そう決まっている」

「いいえ」

「む？」

黎斗の言葉に反論する
その行動は誰にとっても意外であり驚いている

「貴方〝は〟神じゃないわ」

彼女は淡々とそう言い放った

――

ここは……屋上……か？

開けた場所、そして時空が歪んだかの様に大きな穴が開いている

その前に彼が居た

「校長……見つけたぜ!!」

「……岡島キル夫か、協力者が結構居たしここまで来れないと思ったんだがね」

「俺にも仲間がいたんでね」

「それもそうか……まだ君だけなら楽だったんだがね」

今だって最終戦のために1人でも多くを残してくれた

新条アカネ
富樫源次
姫柊雪菜
緑谷出久
そして足止めしてくれた皆
皆々最後まで付いて来てくれた

「しかし、後少しで完成なんだ。大人しくしてもらえると助かるね」

「そうするとでも?」

「ああ勿論だ『仲間を刺しなさい』」

「はいはい分かりましたっと!!」

ナイフを持って方向を変えて校長へと投げる
勿論撃ち落とされた

「やはりか……何かしたな」

「気難しい吸血鬼に手伝って貰ったんですよ」

「吸血鬼の面汚しだな」

「はっ、他者を利用して食い物にしか出来ない奴よりマシだと思いますけどね」

「口の減らない奴だ」

「言い返せない大人よりはマシだと思いますがね」

そこまで言うと儀式を中断してこちらへと向いてくる

「仕方ない……いつまでも儀式を中断するわけにはいかないからね。すぐにケリを付けるとしよう」

「俺達は勝つ為にここに来たんだぜ、今度は負けねえよ」

「やはり……と言うべきか色々と漏れていると思ったがかなり戻したな」

「とある神様のお陰でな」

「羨ましいね、我々に神は居ないというのに」

「だから造るってか」

「おかしいかね？」

「神だの何だのだけなら文句はねえが他者から奪うっつうなら許せねえよ」

「盗賊の癖に下手な正義感だね」

「はっ逆だ盗賊だから自分のものには手を出させねえんだよ。恋人にも仲間にも、神様にもだ」

「本当に面倒な人間だよ君は」

「まあな、して盗賊らしく言うなら……」

何も奪わせない、いや違う

「俺達の明日を奪わせてもらうってとこかな」

各場所で最終決戦が始まる
自分のために送り出した仲間のために
自分を満たすエゴのために、戦いたいから戦うために
明日を手に入れるために皆戦い始めた

――――――――――――――――――――――――――――――

最終決戦：沙都子編

北条沙都子は考える、なぜ姉が敵になったのか
北条沙都子は考える、どうすれば姉に勝てるのか
北条沙都子は考える、どうすれば姉を助けられるか

「うおらあああああ」

爆豪勝己が突っ込むことにより、姉からのメテオは止まっている
ただ、隙を見て撃とうとしてくる辺り、本気で対処しないとまずいかも知れない

「やれやれ、魔術師相手にするのは骨が折れるな」

「先輩、大丈夫ですの？」

「ああ、まだ行ける」

後輩達に負けるものかとニケは気合いを入れ直す
ただ見るからに攻めあぐねているようだ

「と言うかニケ先輩……その伸びている物って何ですか……？」

「これは勇者の剣だけど？」

「勇者の剣……？」

「ああこれだ、結構伸びるんだぜ？」

見ると先輩のような形状の剣がウネウネしている……なんだか虫みたいで正直気持ち悪い

「……それ以外は？」

「悪いがこれ以外は届かねえ」

「そうですの……」

このチームの一番の問題点は射程距離だ
元々魔術師コースの人間がほぼ敵だったのもあるが
キル夫の味方した遠距離持ちは少なかった
どうにか高台から落とさない限りは自分の罠は届かない

「爆豪さんが頑張っておりますけど……」

彼は頭に血が上ってるのか分からないが、ただ単に合わせる事なく1人で挑んでいる
落とす気配など感じられない、わざわざ高所に登るためガス欠になっているようだが
それにより彼は一層機嫌を悪くしている

「せめて……話を聞いてくれればいいのですけど」

「無理じゃねえか?アイツ我慢すんのが面倒臭えってここで暴れてんだろ?」

態々奥まで行って待つ気が無かった、だからこそ初めの場所で戦っている
普段の性格からも暴れたがっているようなので、指示を聞いてくれるとは思えない

「テメエ!上でチョロチョロしてんじゃねえ!!」

それなら落としてくれませんか……と叫びたくなるのを我慢する
……爆豪さんの火力でも無理なのだろうか?

「行くぜ俺の剣!!」

一方のニケ先輩の剣は勢いをつけて伸びて行くが
銃や魔術のスピードには到底追いつけない物で容易くかわされる

「メテオ！」

こっち方面へと降り注いでくる

すぐさま鉄化罠を踏んでニケ先輩と共に一時鉄化しながら被害を無くす

「爆豪さん!!」

鉄化しながら状況を確認する

「クソが!!」

爆破して攻撃を防ぐが効果は芳しくない

徐々に彼の傷も増えている

「こっちに!!」

「あぁ？」

ポーションヒールを行うが範囲内に入って来ない
一部の傷が出血してるし治療したいのだが

「傷を治さないと……」

「必要ねぇ」

多少は改善されたって話は聞いた気がするが……まだダメらしい
爆豪さんは降り注ぐ大砲を爆破しながらねぇねぇの目の前へと飛んで行く
しかし……またガス欠でいなされる

「これじゃあ……ダメですの」

纏まらないと……姉に敵うわけがない
そう思いながら……どう説得するかを悩んでいた

――――――――――――――――――――――――――――――

メテオが、上級魔術が飛んでくる
魔力が枯れたら大砲を撃ってきて、また溜まればメテオが飛んで来る
ポーションの在庫も心許なくなってきた

「大砲だけでも壊せれば楽かも知れませんが……」

流石に鬱陶しいと爆豪さんが大砲を爆破しているようだが……破壊された形跡がない、頑丈なようだ

「壁も……頑丈ですわね」

「斬れなくはないが……意味がないな」

「斬れるんですの？」

「ああ、俺の剣はちょっぴり特別なんでな」

「ウネウネしてるのに？」

「ああそうじゃねえんだが……まあ説明は後でいいか。爆豪をどうするかだ」

「……それはそうですけど……したとしてどうにかなりますの？」

「引きずり落とすだけなら出来る……2つ必要だが」

「聞かせて下さいませ」

「1つは今言ったように3人で戦う……と言うよりも俺に合わせてもらう必要がある」

「……もう一つは？」

「城壁まで俺が飛ぶ必要がある」

「あのポーズでですか？」

「いや、カッコいいポーズじゃ流石にダメだ……何かないか？」

「ジャンプパッドはありますのですけど……」

「……足りないな」

「やっぱり……ですか？」

「ああそうだ。これも爆豪の力が必要になる」

ジャンプパッドに爆破を混ぜて一気に空を飛ぶ、これさえ出来れば

「当たらねえな……クソッ!!」

「爆豪さん話を……!!」

「五月蝿え!!」

話を聞く気がない
こっちのことなんて一切気にしてないが

「どうしようもないか?」

「……いえ、1つだけ方法があります」

「聞かせろ」

「少々奥の手ですが……話を聞かざるを得ない状況を作ります」

「……なんだアイツら?」

何かを企んでそうな2人を爆豪は一瞬だけ見たがすぐに視線を敵へと移す
位置的に仕方がない事ではあるが、見下したような位置関係が気に入らない

「引き摺り下ろしてやるよ!!」

城壁へと熱線を飛ばすが効果がない
……一体何で出来ているんだよ

「まだだ」

前へと飛ばす熱線の勢いに徐々に押され下がりつつも撃ち続ける
そして……下へと落ちた

「……なんだ?」

最初は城壁が崩れたのかと思った
しかし違う……落ちたのは俺の方だと

落とし穴に落ちたようで視線が徐々に奈落に落ちていくことに気付く

「……誰が、こんな事を」

そう疑問に思いながら少しだけ潜った場所に地下があり、そこで2人を発見する……

「お前達の仕業か?」

「……そうですわ」

「邪魔するなんざ、それなりの覚悟は出来たようだな?」

あの時、落とし穴を爆豪の後ろに準備していた
それにより、気付いた時には落ちたが……当然とは言えかなり不機嫌で殴りかかってきそうだ

「すみません、こうでもしないと聞いてくれないと思いましたので」

「必要ねえよ」

「必要無いって……」

「おい爆豪」

「足引っ張られるのは勘弁だ」

「引っ張るって……」

確かに現状は戦闘は彼に任せきりだ……だからって

「無理に命なんざかけんじゃねえよ」

「私だって……やれる事が」

「志は立派だが……弱いのは問題なんだよ」

「爆豪!!いい加減に……」

「いいえニケ先輩……合っています……」

「北条……」

「弱いのが悪い、冒険者な以上当然ですわ」

「そう言う事だ、だから……」

「ですが爆豪さん、間違っている事がありますわ」

「あ?」

「皆で戦う事は弱いことではありませんわよ?冒険者だってそれが当然ですし」

「何が言いてえんだ？」

「爆豪さんは弱い事が悪い、更に言うなら皆で戦うのはのは弱くてカッコ悪い。そうお思いでしょうが……そんな事はありません。強い事ですわよ」

「……ざけんなよ」

「冒険者は信用は大事でも、恥やプライドは時に捨てなくてはなりません。仲間の為になんて言いませんよ、自分のために勝ちませんこと？」

「……勝手に合わせろ」

「いいえ、申し訳ありませんが爆豪さんに合わせていただきますわ」

「弱い奴に従う気なんざねえよ」

「あら？確かに私は弱いですが」

「じゃあ決定だ、合わせられなきゃ置いていくけどな」

「私達２人だと爆豪さんより強いですわよ？」

「……っけ」

そう言うと爆豪さんは渋々話を聞いてくれた

―――――――――――――――――――――――――――――――――

２人は行動を合わせ始める
自分は城門へと近づく
降り注ぐ砲弾を必死に躱しながら

「後少し……」

爆風に巻き込まれ腕が焼ける、ただそれで止まる事は出来ない
ただ目的通り、ジャンプパッドを設置する

「準備完了しましたわ!!」

「それじゃあ爆豪合わせろよ!」

「本当にいいんすね?」

「勇者がその程度でやられるわけ無いしな」

「その腐った脳味噌ごと爆破してえが……」

「んじゃ行くぜ」

ジャンプパッド向けてニケ先輩は走ってくる

それに合わせて爆豪さんが閃光弾を起こし一時ねぇねぇの動きが止まる

その隙に爆豪さんが飛んでニケ先輩がジャンプパッドを踏む

しかし、城壁に向けてじゃなくて爆豪さんの方に

「頼むぜ爆豪!!」

「っ爆破式(エクス)カタパルト!!」

飛んできたニケ先輩を掴んで爆発しながら投げ飛ばした

ジャンプパッドだけでは届かなかった城壁の上へと目指して

「届いてくれよ……これは善行なんだからよ……光魔法キラキラ!地の剣!!」

さっきまでなんか太鼓みたいなの叩いていた場所からツタが伸びていき、ニケ先輩の手に剣が届く

「さっきオッポレオッポレって言ってたのは……アレが理由ですの？」

「……届くかだし……届いてどうなるんだよ」

爆豪さんは呆れていますが……信じます
この場面ニケ先輩がどうにかしてくれると

「届いた!!行くぜ!!」

本来であれば届くはずのないツタが伸びて行き、城壁へと届いたようで……ただ何をする気なのだろう

「いつのまにここまで……ですが、やらせませんわ！」

そうして高速詠唱を始める……ニケ先輩がまずい

「遅いんだよ！」

そのままニケ先輩は……剣で城壁を斜めに叩っ斬った……え？

「……なんですの？」

ねぇねぇが乗ってた場所が大砲もろとも滑り落ちる
そのまま降って来た

「っとニケ先輩……!!」

空から降ってくるニケ先輩をツタトラップに嵌めて回収する
身体は無事なようだ

「っく……」

「さて……ウィッチ、チェックメイトだぜ？」

「認めませんわ……」

「ねぇねぇ……？」

「この私が負けるだなんて認めませんわ!!」

「一体どうしたんだよ？」

「妹に負ける姉など認めませんわ……」

至近距離で詠唱を始める

しかし、簡単に爆豪さんが止める

「させねえよ」

「ぐっ……」

「何があったんですの……？」

「優秀な妹には分かりませんの……」

「え？」

「キル夫さん程は聞きませんが……それでも1年のホープの盗賊……それに比べて落ちこぼれですの」

「ねぇねぇが落ちこぼれ……？」

アレだけメテオを撃って、魔力が回復してむしろ自慢の姉だったが

「同じ魔術師の1年にすら負ける始末、だから力が欲しかった」

「1年に……？」

今年の1年はそんなに凄かったのでしょうか？
ねぇねぇが負けるなんて驚きでしたが

「ちげぇよ……」

「ニケ先輩……？」

「ウィッチ、お前が弱いんじゃねえよ。全部学園の仕業だ」

「学園の……」

「お前だって分かるだろ？どうせ学園からその力を手に入れたんだろうから」

「……」

「ニケ先輩、どう言う事ですの？」

「今年の魔術師のほとんどはボンボルドが実験したらしい、だから帰ってこなかった奴と、成功した優秀な実験成果だけ残った」

「……そんな事が」

「だから勝てる勝てねえじゃねえんだよ、最初からズルしてた奴らなのに……アンタは真面目にやってただろうが」

「ですが……それで負けるなら」

「何人かはまだ残ってるだろうが、殆どの1年はただの人形だよ。そうなんなかっただけマシだろうよ」

「ニケ先輩、ねぇねぇは……？」

「改造は受けてないと思うぜ、なんかアイテムで無理して魔力を作ってたような感じでよ」

「ねぇねぇ……」

「それで……それで」

ねぇねぇの元に魔力が集まってくる

何をする気か分からないがやばい

「ねぇね……」

「それでも妹にすら負ける始末、そんな結末は認めない」

同時に闇が展開される……あの中はまずい

「何を……」

「ブラックホール、だから全部吸い込んでやりますの」

「やめてねぇね……」

「おい先輩、トドメさすがいいな？」

２人の間を遮って爆豪さんが入ってくる

トドメって……？

「ダメだ、どうせ術者を消した所でこれは消えねえ」

「だったらどうすんだよ」

「任せろ、もう夜だしな」

空を見ると月が今にも出てくる

だからなんだって言うのか？

「ウィッチ、アンタは優秀だよ。俺だって何度も助けられたしな。そして幸せだよ……ずっと自分のままでいられるんだからな」

「ニケ先輩……？」

「ついこの前だよ、俺が実験体になったのはな。自分で居られない時間が出来たのは」

そうしてニケ先輩の身体が変わっていく
人間のような等身大だが、それはまるで吸血鬼のようだった

「ニケ先輩……何が……？」

「……」

何も答えずブラックホールへと近付く、そして喰らった

「え……？」

何が起きたか理解できないまま、ねぇねぇの方へと向く

「ヒッ……」

そうして目に見える恐怖が目の前に
……まるでお前が望んだ力の代償だと言わんばかりに

「殺さな……」

何かを言う前にニケ先輩が詰め寄り……
ねぇねぇにキスをした

「……え?」

戸惑うままそのまま次は爆豪さんの元に近寄って……キスをした

「???」

理解出来ずにそのまま困惑しているとこっちへと近づいて来る
しかし近付く前に罠が作動して拘束された

「……2人とも大丈夫ですの？」

「……」

2人とも硬直したまま動かない
もう戦いとか言っていられるまでもなく、そのまま皆動かぬまま朝になったのだった

――――――――――――――――――――――――――――――――

「どう言う事ですの？」

「いや……学園によって化け物にされたんだが……中途半端で夜になるとああなっちま

うんだ」

「……なるほど」

「それで認められるとお思いで？」

「おいウィッチ、お前敵だったろうが」

「あの唐突な事でその気すら奪われましたけどね」

「だったら結果的に良かったじゃねえか」

「後ろの見てもそう言えますの？」

ニケが後ろを振り返る

誰もいなかった……なんなんだよ

「騙されましたわね」

「……おいコラ」

「ただ爆豪さんから言伝がありますわ」

「……なんだ？」

「と言うかマジギレしてましたわよ」

「あの……爆豪……」

「今回のキル夫達が終わったら遠慮なくぶっ殺すだそうです」

「マジかよ……」

ニケ先輩は頭を抱えてますが正直自業自得でしょうに

「で、話変えるんじゃねえよ。仮にも敵だったウイッチをこれで許せるわけねえだろう？」

「乙女の唇を奪った癖にまだ言いますの？」

「当たり前だろ、ふざけてんのか？」

「ねぇねぇからこれ以上奪いますの？」

「おい北条、なんでお前そっち側なんだよ」

「私はねぇねぇの味方ですの！」

「……妹がコンプレックスじゃ無かったのか？」

「アレから沙都子と話し合いましたの」

「何をだ？」

「どっちが優れてるとか分野が違うし関係ない、私とねぇねぇが２人で強いんだって」

「まあいいならいいけどな」

「それで、この後どうするんですの？」

「ん、ああそうだな……キル夫達の方終わってると思うが救援に向かうぞ」

「そうではなくて」

「？」

「私達のことですの」

「……今ふざけてる場合か?」

「そうですわねぇねぇ」

「ああそうだ北条も言ってやれ……」

「こんなのが義兄だとは認められません!!」

「先輩だぞ!?」

なんだかんだそのまま全員でギャーギャー言い合った
爆豪が先に行った無事を願うだけだ
勿論キル夫も無事でいて欲しいと願う

「ねぇねぇのような被害者もキル夫さんなら止めてくれるでしょう」

北条沙都子は、ただそう信じて

最終決戦：カズマ編

ゆんゆん自体はそこまで強くはない
普通に戦えばまず負ける事はないだろう
ただ……弱くもないし、メンバーに難点もあった

「いやぁ……しかしむずいっすね」

走り先輩もだいぶ苦戦している
俺が言った一言のせいだ

「暗殺なら得意っすけど……普通の戦闘は最近やって無かったからねえ……」

「すみません……」

「しょうがないっすよ……正直ブチギレたいっすけど。必要な事っすから」

走り先輩にゆんゆんを生かしたままって話した
ここの3人は全員盗賊で、更に言えば3年の走り先輩は暗殺特化だと言うのにそれでなお彼女にそう言った

「Ⅳでも残せば良かったっすね……アレなら1人で余裕でしょうし」

そう言いながらだいぶ動き辛そうにしている先輩を見て苦しくなる
せめて自分達もどうにか出来ないかと加勢するがハンデみたいなこの戦い方ではゆんゆんでもきつい

「日影、罠を」

「了解」

罠を仕掛けるたびに何度も罠を魔術で破壊されるが、それでも踏んで貰うのを祈るしかない

正面きっては魔術師相手だと即死レベルがいつ飛んでくるかだし

「ゆんゆん！こんな事して何になるって言うんだよ!!」

「カズマさんはめぐみんを蘇らせたくないんですか!!」

「めぐみんはもう死んだんだ！しかも学園外なせいで再生不可能な形でな！だったら生き返らせるのは違うだろうが!!」

「めぐみんは死にました……けど生き返らせるのは間違っていません!!」

平行線だ、しかもまちがいなく最悪な方へと向かっている

「絶対にめぐみんを!!私だけでも!!」

「おいゆんゆん、やめろ!!」

何をする気だ……嫌な予感が

「流出……めぐみん力を貸して!!」

何やらゆんゆんの周りから広がってっている

これはまさか……キル夫と同じ……!!

「流出領域、暴走魔法陣!」

「何!?ぼうそ……」

「エクスプロージョン!!」

また爆裂魔法か、当たらなければ……

「なっ……」

いつもよりも範囲が広い……躱しきれずに被弾する

「いてえ……何が起きたんだよ……爆裂魔法は範囲が広がったりしねえ筈だろうが……」

「暴走っす」

「暴走……？」

なんだそりゃ……初めて聞いたぞ？

「会心の一撃みたいなもんっすよ、魔術が暴走していつも以上の猛威力を振るうって感じっすね」

「それじゃあ今のは運悪く？」

「いや……多分ゆんゆんちゃんが展開した領域が原因っすね」

「領域……キル夫と同じ奴か」

「そっすね……所謂魔術を暴走させ易くなるまずい奴かと」

「まずい？それだけならまだキル夫のに比べてマシかって」

「……こっちは誰一人魔術を使えないんすよ」

「……マズいな」

「完全に相手だけが有利な領域っすからねえ……」

「その……走り先輩は使えないんですか？一応は……3年ですし」

「領域はあるにはあるんすけど……」

「だったら……」

「正直これ以上に最悪な展開になるんで使えないんすよね」

「え？有利にするためのものじゃ？」

「ウチの領域……リドルはここで使うと今以上にまずいっすね」

リドル、その名の通り全てが謎になる
敵味方どころか全てを理解出来なくなるが、味方が複数人で敵が単体しか居ないこの場面ではただ同士討ちをさせるだけになる

「だったら日影は……」

「わしがカズマはんより優れてると思います？」

「思うけど？」

日影だってそりゃ優秀だし
盗賊コースがキル夫だけじゃねえぞ？皆友人達だってすげえし

「……申し訳ないけど、出来へんのや」

「……それは分かったがなんでそっぽを向く？」

「別にええやろ……それよりゆんゆんや」

そうだな……暴走を止められない以上はそれをうまく掻い潜らないといけない
正直言うとかなり厳しいが……それでも殺さない様にするって決めた
普通に比べてかなりハードな事をやってるなと思いながら戦いを再開した

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「エクスプロージョン!!」

「何度目だよ!!」

十発以上飛んできてるぞ？
おかしいだろ！めぐみんだって一発でぶっ倒れてたのに

「何発も耐えてる俺達も異常だけどさ」

耐火のポーションと耐爆のポーション
耐火はともかく爆発耐性なんざ初めて聞いたぞ？
走り先輩曰く1個で相当値が張るから大損らしいが……

「だいぶカットしてるしな……」

エクスプロージョンの全部を避けれているわけではない

だが無事だと言う事はそれだけの効果だ

「報いたくはあるんだけど……」

そう思いながら罠を設置するんだが全部爆裂魔法で蒸発する

沙都子とかの罠ならこう言う場合とかに使う罠もあるんだろうけど……生憎俺にそんなものはない

「……そろそろまずいっすね」

「ああ、ポーションがあってもダメージが溜まるしな……」

「違うっすよ」

「え？何がだ……」

「カズマ君はエクスプロージョンってどう思ってます？」

「めぐみんも得意としていた最大クラスの魔術だと思います」

「そっすね、じゃあその必要魔力はどう思うっすか？」

「めぐみんがぶっ倒れる程だったし……莫大かと」

「そっすね……莫大っす」

「それじゃあ……後少し耐えれば勝ちってことか!?」

それなら何がまずいか……いや走り先輩が限界なのか？

「違うっすよ」

「……違うのか？」

「その考えならもう爆裂魔法は撃てないはずっすし」

「……そうだよな、それはおかしいと思った」

めぐみんが一回しか撃てないし魔力はめぐみんの方が優れていた……
省エネ方があったとしてもあり得ない

「代わりのものを使ってる可能性が高いっすね」

「代わりって何があるんだ……？」

「勿論……魔力の代理となるなら命でしょうね」

「……は？」

「しかも……多分自分の命使ってると思うっすけど」

「……何言ってんだ?」

「いや……ボンボルドはストックが焼かれた以上ストックを自分に回すでしょうからリソースこっちに割けないでしょうし自分かなって」

「そうじゃねえよ……!!なんで命張ってそんなことしてんだよ!!」

「わしらだって命張ってるとちゃいます?」

「それは……そうだが……」

「あってます。ゆんゆんはボンボルドに命を燃料にしてたん」

「アイツ……!!」

「ただ時間は無かった……だから道具を使って命を魔力に変えてるって聞いたで」

「……道具か」

それがどんなものか分からない、ただ肉体を改造されたわけじゃなくて道具に頼っているならまだやりようがある

「……よし!!」

「どしたん?」

「道具なんだよな?」

「道具や、何を貰ったか不明やけどな」

「だったらいい!やってやるよ!!」

たったそれだけだが、それだけは俺の得意なことだ

ゆんゆんの命を奪うもの……盗んでやるよ

…

「エクス……プロージョン!!」

身体から血が抜かれる様な感覚に襲われる
どれだけの命が吸われたのか分からない……
ただ止まるわけには行かない

「待っててね……めぐみん……」

何やら相手には手品があるのか爆裂魔法が通らないけど……それもいつまでも続かないはずだ
だってめぐみんの爆裂魔法が負けるわけないから
こっちの命が尽きる前に……全部終わらせる、やって見せる!

「カズマ君……なんで分かってくれないの……」

めぐみんの事だって仲間だって言ってくれたよね？
だったら助けないとおかしいよね……

「日影だって……なんで？」

ずっと一緒にいてくれたのに……なんで今はそっちにいるの？
私が間違ってるの？

「そんなことない。そんなことない」

私は正しい、私が間違っているはずない……だから私を否定するな!!

「私は……めぐみんは……間違ってない!!」

間違ってるのはお前達だ……だからこれで決める……
首飾りに触れる

尽きた魔力の代わりに命を放つ準備を

「エクスプロー……」

「スティイイイイイイル!!」

「え？」

それは賭けだった、ゆんゆんから何を盗めばいいのか分からないから……
しかし目にした彼の手には首飾りが握られている

「魔力が足りな……」

……足りないけど、振り絞れば後一発くらいなら出ると思う
多少弱くたってこれで決まるかもしれないから

「俺はキル夫や長谷川先生程才能無いからな……ゆんゆん達どころか盗賊コースの中で

も魔力が低い」

「何をっ……」

「長谷川先生は暗殺の技言ったが……俺にとっちゃ救う技になっちまったな」

「エクス……」

「デスハンド」

「あぐっ……」

「少し眠っててくれ……誰もゆんゆんに死んで欲しく無いんだからな」

体力も命も使い切っていて、めぐみんを蘇生することだけを考えロクに休みもしなかった

そんなギリギリの身体は……心臓を揺さぶられて倒れた……

―――――――――――――――――――――――――――――――

「ゆんゆん!!」

「……離して!!」

目を覚ましたゆんゆんはまだ暴れる
縛っておいたが……まだまだ敵対する目をしている

「お望み通りカズマ君の言う通りなんとか救えたっすけどどうするんすか?」

「走り先輩……ゆんゆんと話していいですか?」

「それはいいっすけど……日影ちゃんと合わせて話しといてってことで」

「あっ……行くんですね。任せっぱなしですみません」

「まっウチが行ったところで多分役には立てないんで、ウチは出口の確保始めるっす」

「あー……それも大事ですね」

「それじゃ、後はお若いもの同士ってことでー」

明らかにまだ……下手したら日影より若いのでは？と思うレベルであろう走り先輩がそのまま来た道を戻って行く

あの先輩なら帰り道を探すのは余裕だろう

「さて……ゆんゆん」

「……ふんっ」

「意地張る場面じゃ無いと思うんだが……」

「めぐみんの事を考えられない人間なんて知りません」

「……学園のやってる事分かってるだろう？」

「それでも……めぐみんが全てだから」

「……学園がめぐみんを蘇らせられるわけねえだろうが!!」

「決めつけないで下さい!!」

「だったらなんだよ？学園は折角作ためぐみんの墓を研究のために暴いたのか？」

「……分かりません」

「めぐみんの遺体もあるかどうか分からねえのに……復活させられるわけねえだろ」

そもそも……中嶋が遺体を悪用されない様にって火葬を提案して、葬ったんだ……め

ぐみんの蘇生なんざ肉体がないのに無理に決まってるだろうが

「でもっ」

「それはめぐみんじゃねえよ、めぐみんに似たただの肉塊だ」

「そんな言い方……」

「ゆんゆんが蘇生させたい気持ちも分からなくねえけど……俺達の仲間だってめぐみんを馬鹿にするんじゃねえよ!!」

「っ……」

めぐみんに似ためぐみんじゃ無い何か……
どんだけめぐみんを侮辱すれば済むんだよ

「俺達だって、何人も友人を失ってるよ……学園ってそう言う場所だ」

「……」

勿論この学園は異常な程だが……それでも冒険者でも死ぬ奴はいる
未だに昨日話してた奴が次の日に死んだって報告を受けたのは割り切れてねえよ

「生きようとはしたよ皆、皆だ」

「だったら……」

「でもな、死ぬと分かったら皆割り切ったんだ……代わりに生きてくれってな」

「なんで……？」

「皆冒険者だから割り切ってんだよ……勿論割り切ってなかったやつも居るだろうが……それの殆どは自分のせいじゃなくて学園のせいだぜ？」

「そんな……」

「それが今、起きかけてるんだよ」

冒険者としてじゃねえ、学園がアイツを殺そうと、実験体にしようとしている……それだけはさせねえ

「キル夫さん……ですね」

「ああ、アイツが理不尽に学園に殺されかけて助けてって言ったんだ……だから助けるに決まってんだろうが!!」

「どうして……そこまで出来るの……？」

「お前と同じだよ」

「え？」

「ゆんゆんとめぐみんが幼馴染みなように、俺は学園で一番最初の友人だ。なんせ学園に入る前から仲良くなったんだぜ？」

「だから……カズマ君も命を賭けれるの？」

「……例え死んでもアイツには生きてくれって言える程にな」

「……凄いね、死んでもそんな事言えるなんて」

「めぐみんはどうなんだ？」

「え？」

「めぐみんはゆんゆんに一緒に死んでくれって言うのか？」

「……いや、紅魔族の里ではそこまで仲は良く無かったけど……それでも学園に来て仲

良くなって」

めぐみんならきっと言ってくれたと思う

「……万が一私が死ぬことがあったら私の分まで生きてくださいって言ってくれたかな」

「だったら何してんだよ」

「そうだね……本当はめぐみんの分も生きなきゃいけなかったのに」

もう涙すらも残ってないと思っていた
なのに、目から温かいものが溢れる
自分が泣いているんだなって

「でも私は弱かったから、めぐみんが居なかったら生きていけないから」

だから、だからめぐみんの想いを結果的には踏みにじってしまった

「これからだって、自信がないよ……」

「ずっと日影がいたじゃねえか」

「……え？」

「もしかしてわしのこと忘れてますん？」

「……あっ」

最初はパーティーを組んだくらいだった
でもめぐみんが死んだあたりから、彼女はいつも近くにいた
カズマ君も何かと近くに居てくれたけど……日影はそれ以上にこの戦いで別れるまでずっと居てくれた

「一人じゃ生きていけねえなんざ誰だって一緒だ。だから皆で生きていけばいいだろうが」

「でも……私は敵対して何度も爆裂魔法を……」

「キル夫も俺も気にしねえし、走り先輩だって暗殺を止めてくれたんだぜ？許してくれるだろうよ」

「でも……」

「めぐみん程とは言わねえけど、もうちょっとお気楽に生きろよ。アイツだったら悪気無しでもうこっち側にいるだろうしな」

「……めぐみんならそうですね」

「だから深く考えるな、また皆で仲直りだ」

「いいの？」

「日影」

「勿論やろ、仲直りするためにわしは敵になったんやから」

日影が笑いながら答える

「日影……感情無かったんじゃなかったのか？」

「ないけど？」

「今笑ってなかったか？」

「笑ってへん」

「……ふふふ」

ついにゆんゆんも笑い始めた、これなら大丈夫か？

「それじゃあ……休むか!!」

「え!?カズマ君助けに行かなくていいの!?」

「そうは言ってもなあああ、俺誰かさんのせいで疲れちゃったしなあああああ」

「ごめんなさい!!ごめんなさいって！」

「キル夫なら大丈夫だ！だから走り先輩も出口を探しに行ったんだしな」

「それならいいけど」

「ゆんゆんも命使い過ぎたろうが……休め休め」

「うん……分かった」

「めぐみんの寿命の分も生きなきゃいけないんだから長生きしなきゃいけないんだぞ」

「えぇ!?どうかなあ」

「頑張るんだよ!!」

めぐみん、今はもうこの世界に魂も残ってないかもしれない
だけど、言わなきゃいけないことがあるの
私……貴女の分も生きるから!!

――

最終決戦：正義編

中嶋正義の生まれは貴族であった
しかし、彼は幼少の頃から富や名声に興味は無く、真実と正義だけを信じ続けた
その行いが顕著になったのは、父親が何処からか判決執行のルールブックと言う書物を入手して正義がそれを受け取った時からである

そこから自分の親を裁くのには時間がかからなかった
汚職に賄賂、人が生きていけないほどの重税
挙げ句の果てには奴隷をいとも容易く殺す姿を見て悪人だと理解した

「親だろうと、悪は悪だ」

その後群がる奴らも窃盗に違いないが、本来は彼らの物であるとなんとか溜飲を抑え

暮らしていくための銭を持ち家を去った

「結局あの犯罪者共を見逃したのも後悔があるがな」

そのまま街の教会に住み着くことになるが、そこでも悪人を裁き続け、神父に学園へと押し込められた
人の汚さをもっと知れと

「冒険者と言うものは悪だらけだろうと」

ここで俺の正義を執行するべきだと
一種の正義に酔っていた

「だが馬鹿がいた」

全てが自己責任の冒険者でも、自分よりも他人を優先する
初対面の癖に信じようとする、その癖自分が傷付いても文句を付けないただの馬鹿が

「文句のつけどころのないような大馬鹿だ」

俺に対して元海賊と言った
言い逃れの出来ない犯罪者だ、間違いなく裁けば死刑になるだろう
しかし裁けなかった

「裁判官が情で動く……それはあってはならない」

その筈が……その日から裁くのを躊躇うようになった
本当にこいつらは救いようのない人間かと

「そのために俺はここに入れられたのか？」

悪はまだ改心しようがあるかも知れないと

「ただ〝コイツ〟だけは別だ」

悪人だけじゃない、自分の理想の邪魔になる人間は殺す
さっきだって、息をする様に自然にキル夫を殺しかけた
自分が正義なのだから構わないだろうと

「俺様は改心なんざしない」

夜神月が正義だと言うのならそれでいい
だが俺様にとってはアイツは悪だ

「裁け、判決執行のルールブック」

「おっと危ない、君も似たような能力を持っていたねそう言えば」

「一緒にするな」

「同じような物だろう?理想郷を作るために悪を殺している」

「同じわけがあるか、誰でも殺せるノートと、悪を裁ける法典だ。勝手が違う」

「……まあ違うと言うなら構わないけどね。馴れ合うつもりはないし」

「ただ、貴様も俺様も……正義に酔っていると言う意味では同等だろうな」

だから俺様にとって悪人でしかない貴様は絶対に裁く

――――――――――――――――――――――――――――――

「やれやれ、即死耐性どころか妨害まであるとは面倒だね」

ここにいないメンツの名前を書くもその効果は掻き消される

慢心せずに書いておけば誰かしら殺せたかもしれないが……どうせ少し遅くなっただけだし問題ないと

「魔術も近接も君達には負ける気はないよ」

元々才能は上位だった、ノートなんて無くても冒険者として大成できるほどには
ただ、一回の冒険者じゃ正義を為すことが出来ない
手を下せない相手がいるから

「中嶋君、正直君の才能は惜しいよ。悪人を無くして新世界を作る。それは君だって同じだろう?」

「中嶋、馬鹿の話なんて聞かなくてええで」

「昔なら頷いていただろうな」

「何故今はダメなんだい?理解に苦しむよ」

「……改心するチャンスは必要だ」

「改心だって？ふざけているのかい？」

「至って真面目だ」

「反省している。口だけなら何とでも言える。そのせいで救いようのない獣がどれ程檻から解き放たれたか」

「それは知っている……忌むべきことだとな」

「それなら……」

「ただ、全員が全員そうではない」

「何を……」

「人間賛歌を歌うつもりはない。ただ、エラーは存在するのだ」

「だから見逃すと？犯罪者をかい？」

「救いようの無い悪は存在する、そいつは裁くべきだ。だが、全てが救いようが無いわけではない」

「そうか、君なら分かってくれると思ったんだけどな。僕が作る悪人の居ない平和な新世界を」

「ならば答えてやろう。そんなもの……善人だけが損をするディストピアだ」

犯罪者は消えるわけがない
縛ったところで、馬鹿はやるし生き延びるために手を染める奴だっている
それに、ルールを守っていた善人も気を使うようになり……今以上に損になるだけだ

「ゴチャゴチャうるさい、兄さんは間違ってるから止めるだけや」

八神先輩は魔術を唱えるが、同等クラスの魔術で掻き消される

先輩の矢も鎌で打ち落とされる

「動揺すらしないか」

明らかにキツイ位置のものも涼しい顔で全部対処する

少しくらい心が揺さぶられていてくれた方がよかったんだがな

「はやて、やっぱりその程度か」

「人から貰った力でよくそんな威張れるなぁ」

「これは僕の力だよはやて」

「そんな我儘な能力が自分のやって言うなら恥ずかしくて仕方ないけどなー」

「全くダメな妹は持つものじゃないな」

「馬鹿な兄を持つ妹の気持ちも考えてや」

「安心しなよ、天才だからさ」

喋りながらノートを書く、まどか先輩が事前に防ぐ

「本当に目が効くね君は」

「させるわけには行かないからね」

「……君さえいなければ楽なんだけど」

「私達を無視するなあああ」

「ほら単純だ」

八神先輩の魔術を切って返しのファイアーが飛んでくる

火傷を即治療して次に備える

「おや、中嶋君は来ないのかな？」

「……」

わざわざ挑発して来るか、だからと言って乗るわけにはいかないが

「一撃くらい喰らっても構わないよ？」

「……」

「おっと流石にそれは無しだ」

「わざわざ先輩は喰らうと言ったはずだが？」

「即死は違うだろう……」

「……」

普段戦闘はあまり行わない
神官としての行動を全うしているせいもあるが……他の能力、特に戦闘能力は著しく低い

「……」

当然だがあのノートと言うイレギュラーに対する対策手段がない
むしろ先輩にあるのは驚きだが……結果的に現状はお荷物となっている

「(裁くか？目の前の男は間違いなく自分の邪魔のものを全部殺している)」

ウィッチやゆんゆんとは違う
学園に着いただけではない……明らかにずっと前から犯罪者だ
吉良吉影もだが……彼らは終わり次第捕まるだろう

それならば裁いてもいいのではないかと

「……」

八神先輩の方を見る、あんなのでも一応は兄だ
殺す事だけが正しい事なのだろうかって……

「……クソッ」

どうすればいいか……
あの時から……幾ら悪人であろうとも殺すのも躊躇いがあるが

「……中嶋、どうしたん？」

「……面倒だ」

「聞かせてくれへん？」

「そんな余裕はないだろう？」

「安心し、まどかもいるし兄はわざわざ攻めてこようとしてないから」

「……そう言えばそうだな、攻めてきていない」

「下手にプライドが高いのが理由やな、自分から攻めるのをよしとしてへん」

「なるほどな、それは今回はマシなわけか」

「そうやね……だから言いたいことがあるなら言えるわけや」

「……ルールブックがある」

「……なるほどなあ」

「文字通り相手を殺す、あの男なら間違いなくな」

「そりゃ躊躇うわけや」

「……どうする？」

「これ以上あの人が汚名を浴びるよりかはマシやな」

「……分かった」

「……ああそう言えばあったわ」

「……何がだ？」

「気にせんでええ、とりあえず中嶋は頼むで」

本当は生きていて欲しいのだろう、キル夫にはそう言っていたし

ただ死ぬなら死ぬで引導を渡さなきゃと考えているのだろうな

「……分かった」

悪人であることには変わりがない、ただ最近はそれでさえも躊躇ったただ……必要であるならばまた自分の正義を貫くだけだ

「話は終わったかい？その間も即死だけは避けるしさ」

「……ああ問題ない」

「それじゃあ、いつまでも時間かけるのもカッコ悪いし終わらせようか」

ついに攻撃にへと入るか……
魔術も攻撃面も三人でもだいぶ辛いがどうするか

「まどか、プランBや」

「大丈夫なの？」

「それしかあらへん」

「分かった……」

二人は一体何をする気なんだ……？
そして俺はどうすれば……

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「へぇ、予想以上に攻めて来るね」

俺も驚いたがさっきと違って先輩達がガッツリ攻めている
夜神がノートを書こうとした瞬間を撃ち抜いて書かせない

「さっきまでそれをやらなかった理由は……」

当然答える余裕は無さそうだ、だったら合わせるしか無い

「大した事は出来んが」

一流の神官は聖気を纏って戦うらしいがそんな事は出来ない
ただ聖気を放出してアシストや攻撃する

「本当になんなんだ……」

聖気を纏っているわけでは無いのに、戦士ともまともに戦える女性
鹿目まどか……本当に彼女は

「いいのかいはやて、こんなペースで来て」

「とっとと終わらせるつもりやしな」

「そっちの方が先に終わりそうだけどね」

「ぐっ……」

柄で殴られて八神先輩が沈む……が様子がおかしい

「おい、どうした」

「……平気や」

「平気なわけは無いだろう、なんせ身体は治りきってないんだから」

「どういうことだ？」

「妹は小さい頃に病があって動けすらしかなかった……死にかけてすらいたけどね」

「……そんな話は聞いてないが」

「言うわけないだろう？長時間戦えば足手纏いになるなんてね」

「……っく」

威圧をしようとしてるようにも見えるがそれでも心臓を抑えている
そんな姿今まで見たこと無かったが……

「しかし、後輩の驚いた顔を見ると普段は隠し通せていたのか」

「……」

「皆命を掛けているって言うのに妹は手を抜いていたのか」

「うるさい……」

「本当に……なんで僕の妹なんだい？」

「うるさいうるさい!!」

「八神先輩!!」

「大丈夫や……今の会話で少し休んだし」

「大丈夫、はやてちゃん？」

「行ける」

「……分かったよ」

「……シュベルトクロイツ」

「!?」

魔導書だけかと思っていたが杖もあるのか？

「まどか!!」

「うん、シューティングスター!!」

まるで弾幕のように大量の矢が準備される
そのまま夜神へと降り注ぐ

「祈りを絶望で終わらせたりしない、この一撃で貫いて!!」

「それならまだ」

全力で避けにかかる、当たらないか

「ラグナロクブレイカー!!」

「八神先輩!?」

八神先輩……無茶じゃないのか？明らかに規模が……身体が……

「さあな、死ぬことになるかもしれんがかまへん」

命を賭けての一撃か
防ぎきれてないようでダメージを負っている
そして何より……俺様に背中を向けている

「……はやて!!僕の勝ちだ!!」

全てを耐えきったこれ以上はやては動けない
もう負ける要素はない

「……数多の殺人罪により台を蹴れ、判決執行のルールブック」

「ぐっがっ!!」

「……八神はやては命を賭けた、文字通り死ぬ覚悟でな。俺様もこれ以上潔癖でいるわけにもいかない」

今更一人殺した所で何も変わらないはずだ、俺の手も血みどろだからな

……そう思っていたのだが、久々なせいかクるな

「今やまどか！」

「うん、分かった!!」

「何をする気だ?」

「私だって聖気を纏えるんだよ」

そうして聖気が身体を包んでいく
その姿は……

「私が全てを救済してみせる！」

「……なんだアレは？」

装甲が厚くなったというか……なんだあの重装備は

「タイタスモード！」

そのまま絞首されている夜神を吹き飛ばす
縄は千切れたようだが……見えない距離まで吹き飛んだ

「ふぅ……このモード一瞬にしか続かないんだよね」

「……なんなんだ今のは」

八神先輩を治療しながら尋ねる
本当に色々と突っ込みどころしか無かった

「私のとっておき、使うとは思わなかったけどね」

「……何故言わなかった？」

「正義君の覚悟を見るためかな」

「覚悟……？」

「……最近裁くのを躊躇っていたの分かってたしね。本当に悪人を裁けるかなって」

「……更生しようはある」

「絶対する気のない人間はダメだよ……結果的に月君生かしちゃったけど」

「そうか」

「……それでも救済する必要があるからね」

「……何か言ったか？」

「ううん、何も」

「……それで夜神はどうするんだ？」

連れて行くのだろうが、結果死罪になりそうだな
止めた上に裁いてもらうわけだから構わないが

「それなんだけど、私が貰ってもいいかな？」

「……」

八神先輩の方をチラッと見る

「……あーかまへん」

「ありがと」

そう言って向かって行くが……何をする気だ?

「大丈夫なのか?」

「まあ、どうせ死ぬだけやしいいっかなって」

「……そうか」

深く考える事はやめよう、俺はキル夫のように誰にでも優しくする気はない

「それより私が無事だったのに何もないんか？」

「知るか、動けるようになったなら行くぞ」

「酷いわー、この後輩酷いわー」

「キル夫達の方もあるしな」

「……そっか、仲間のために頑張らんとな」

「倒れられても面倒だがな」

「……本当に口だけは悪いけどいい奴やなあ」

「……黙れ」

悔しいが結局は足手纏いか、これ以上進んでも

病弱な先輩様が限界だそうだし俺達は休むとしよう

どうせ貴様なら勝つのだろう?そうでなければ今までが無駄になるのだから更生された俺様もだが

そうしてルールブックを閉じる、アイツがこれ以上開かせる事はないだろうと思いながら

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

最終決戦：シノン編

―――――――――――――――――――――――――――――

「キラークイーン」

「痛っ!!やめろ!!」

「なんで貴女は無事なんだ……」

相変わらずマサムネ先輩は何度も爆発しながら平然と立ち上がる

僕から見ても人体は凄い！じゃ済まないと思ってる

「……っく!!」

「ダメか」

マサムネ先輩の存在感を利用して暗殺を試みるが上手くいかない
目の前からなら爆弾にされる恐れがあるが、生憎ヘイトを買ってくれている人がいるため動きやすい

「目の前のがスルー出来ないのが本当に面倒だ……」

「こらー！マサムネを無視するなー！」

「出来る物なら……したいがね」

戦闘に置いて劣ることないしただのタンクなら無視すれば済むと思っていた
しかし……

「潮田渚め……」

あの男が余計な事をしたから面倒になった

「マサムネ先輩、落とさないでくださいね」

「ああ問題ない、これで攻撃すればいいんだろう？」

マサムネ先輩にはある武器を渡していた
本人は分からず使っているが間違いなく嫌いだから仕方がない

「そうです、お願いします」

毒針、それはなんてことないどころか攻撃力の無い武器だ
しかし、急所に当たれば相手を殺せる悪魔の武器
元々吉良先輩に力負けするマサムネ先輩だし本来であれば盾でしかない彼女を無視したいだろうけど……無視をできなくした

「……っち、そんなものを信じられるとは暗殺者も運頼りか」

「いいえ違いますよ」

「ほう、何が違うのかね?ただの言い訳としか思えないが」

「信じているのは僕じゃ無い、貴方だ」

「……本当に小賢しいね」

「どうせ毒針が当たらないなら避けなくてもいいんじゃ無いですか?」

「……」

当然、そんな事は出来ない

吉良吉影は慎重で有名だ、それに警戒心が高い故に毒針とかを放ってはおけないだろう

「暗殺って言うのは一瞬で行うべきなのかもしれない、でも先生は違った」

「先生？」

「皆で力を合わせて削っていく、それだって立派な暗殺だ」

「？？？」

マサムネは混乱している

「マサムネ先輩はとにかく振っていればいいです」

「分かったぞ！」

「……」

考えて動いてくれるならまだいい

ただ、こいつは何を考えていない

だからこそ面倒だ

「シノン先輩、一撃で仕留める必要はありません。脚を狙ってください」

「脚の方が難しいのだけど……。」

「頼りにしてますので」

「くっ……」

個々人は強くないというのに……3対1なせいもあるがだいぶ厳しい
しかも殺す事に躊躇いがない……何も考えていない1人を除いて

「キラークイーン」

「おっと僕は当たらないよ」

「うぎゃー!!」

「……先輩を盾にするなんて酷い後輩もいたものだ」

「適材適所と言う物がありますので」

「使い捨て盾扱いだろうよ」

「そんな事は無いですよ」

「本当、アンタが指揮するとは思わなかったけどね」

「消去法に近いですし、……シノン先輩、右に注意」

「……危ない」

シノン先輩に注意を入れて攻撃を躱す

接近した魔術師相手だろうと隙を見せてはならない

「全く、一人でも落とせれば楽なのだがね」

「申し訳ないですが、そうさせるわけにはいかないので」

「無視するなあああああ!!」

マサムネ先輩が暴れ出す
本当に手がつけられないな……

「くっ……」

吉良先輩に毒針が当たる、急所は外した様だ

「やはり、そんなものは私には通じないよ」

「だったら後１００回くらい刺します？」

そう言って毒針を飛ばす、刺さるが急所には当たらない

「勘弁してもらいたいんだがね」

「近付くと爆弾にされますからね、トドメかそんな余裕がない時に近付かせて貰います」

「本当に厄日だ」

「だったら協力しなければ良かったのでは？

「君に言われたく無いのだがね」

「？」

「人殺しが許されるなんてね」

「……許された覚えなんて無いですけどね」

「中嶋正義、潮田渚……君達も同類だと言うのに」

「……っ」

一瞬思考が止まった瞬間銃声がする

その音で正気に戻る

「……シノン先輩、有り難うございます」

「油断している暇は無いわよ」

「すみません」

持ち直して距離を取る

身体は爆弾に……されてないな

「危ない……」

触れた物を爆弾に出来るってどんなインチキだって思う
それを耐える味方も恐ろしいのだが

「（この人の体力はどれだけあるんだ……？）」

3人で戦っていて何故ここまで余裕なんだと
毒針に混ぜて麻痺毒まで使っている……
何かを隠し持っている様に見えて……まだ余裕そうなのか

「……」

ナイフを握りしめる、やはりこちらがどうにかするには暗殺しかない

「どうにかしなくちゃ……」

先生の意思を無駄にしないために

――――――――――――――――――――――――――――――

才能の種類は一つじゃない、君も才能に合った暗殺を探してください
先生の言葉だった
僕にはナイフが合っていたけど、吉良先輩のような人やシノン先輩の様に暗殺だって
他者多様だった

今から命を刈り取る者は命の価値を一番知っている
先生の言葉だった
最初手を汚した時は嫌悪感から吐いてしまった
命の価値は分かっていてもそれは冒涜以外の他ならないと
だから食事も暗殺も命をいただく行為に変わりはない
だからこそ顔色変えずに仕事をする

他にも先生には教わってばかりだった
それを今まで活かしてきたし今回も活かさないと

「……シノンさん」

「話してる余裕は無いんだけど」

「足止め用の弾ってありますか？」

「あるけど……ただの弾でさえ当たらないのに無理よ」

「……当たらなくても効果のある弾は」

「……あるにはあるわ」

「いつでも撃てる様に準備してもらっていいですか？」

「キツいんだけど」

「お願いします」

「分かった……」

後はマサムネ先輩だが……そのままやって貰う以外はないか

「……決める」

「いい加減にして欲しい物だ」

「ふっマサムネの勝ちだ!!」

「……何故そう思うのか分からないが」

「トドメだあああああ」

毒針で急所は低いと言うのに何故か勝ちを確信して飛び掛かる

「馬鹿で助かったか」

「何をおおおお」

「キラークイーン」

「そんなものは効かな……」

「爆破しろ」

吉良がそう言うと足元が爆破される

「なっ……」

吉良は飛んでそのまま戻るが、マサムネはそのまま落ちて行く

「うわあああああああ」

「……どうせ貴女の事だ、生きていると思うがすぐに帰ってはこれまい。この隙に決めさせて貰うよ」

「マサムネ先輩……」

今近付かせるわけにはいかない……

それと同時に余裕が無い……急いで弾の準備の指示を……

「やっと隙が出来たか」

「マサムネ先輩が来るまで鬼ごっこしてもいいんですよ?」

「そうはいかない、キラークイーン」

「っ……」

慌てて相手から離れる
爆弾にされるわけにはいかない
その瞬間ニヤリと笑う

「シアーハートアタック」

その言葉とともに骸骨の何かが迫って来る
それの向かう方向は……

「シノン先輩!!」

「え？」

飛んで行って……爆発した

「シノン先輩!!」

「後は君一人だ」

「っ……」

爆弾を飛ばせるとは思わなかった……これは僕の思考の浅さだ

「さて、終わりだ」

飛び込むにしても届かない……さっきの爆弾で終わりだ……避けられない

「終わりだ、シアーハートアタック」

「……」

銃声が聞こえる……これはまさか

「シノン先輩……」

顔を見ていないが全力でいい顔をしているんだろうな、これを無駄にしない様にしないと

「残念だったなシノン、まだ倒れてないとは驚きだがハズレだ」

「当たりよ、ばーか」

確かに吉良に弾が当たる事はなかった

ただし……その場が凍りつき吉良の足も凍った

「なっ……!?」

「……渚、後は任せたわよ」

そのままシノンは倒れた、意地だけで仕事をやり通した

「何処に行った!?潮田渚!!」

吉良は既に姿を見失っていた、慌てて探すが見当たらない

「何処だ!!出て来い!!」

全身を探す、足に気を取られながらも
そして気付けば目の前にいた

「潮田渚……!!」

「さよなら」

頸へとナイフを押し込み致命傷を与える
そのまま離れ……

「私の勝ちだ!!キラークイーン」

「うっ……」

身体が爆弾にされる、自覚は無いけど汗が止まらない

「終わりだ」

「吉良先輩、第二の刃を持たざる者は暗殺者を名乗る資格なんて無いんですよ」

「は?」

油断した今こそ全てが決まる
全部の条件を満たした最後の武器を

「最後の武器は僕自身だよ」

吉良に爆弾にされた自分自身を最後の武器に、密着して爆破する身体を巻き込むために

「やめろおおおおおおおおお!!」

「吉良先輩、殺人鬼なのに殺人鬼としてまだまだだね」

――

シノンは目を覚ます、そこには誰もいない

「渚!?」

慌てて探すが見当たらない、マサムネ先輩も探さないとと下へと降りる

「二人とも、何処？」

この辺はだいぶボロボロになっている
吉良が暴れてたし……こうもなるかと

「じゃなくて……何処？」

そのまま歩いていると……埋まっている人間を見つけた

「……マサムネ先輩？」

「ぐむーぐむーー！」

埋まっているマサムネ先輩を引っ張り出す
一体ここで何があったのだろうか？

「ふぐっ、助かったぞシノン」

「何があったんですかマサムネ先輩」

「いや、普通に落ちただけだ」

「……そうですね、それで先輩、渚を見ませんでした？」

「見てない、と言うか埋まってたしな！」

「そうですよね……」

そのまま二人で探し回る……

そして……血溜まりと、渚のナイフが見つかった

「渚……」

そこで全てを察する、渚は死んだのだと
そして同時に吉良を倒したのだと……
そうじゃなければ私達だって生きてないはずだし……

「でも……何処に？」

「負けて死ね（バイツァ・ダスト）」

そこでまた私は気を失った

――――――――――――――――――――――――――――――――

「……え？」

目を覚ますと、私は降りたはずなのにまた元の場所に戻っていた
そして目の前で渚が爆発している

「渚!!」

「おっと早めのお目覚めかな?」

「吉良、アンタ……」

「安心したまえ、君を始末するのは最後だ」

「ふざけるな、アンタなんかに……」

「残念ながらそれが運命なのだよ」

どうしようもない無いのか……本当に、前衛の居ないガンナーはどうしようもない

「その手だけはいつまでも残しておくとするとしよう、感謝したまえよ」

「……は?」

いきなり何を言い出すんだこの男は

「さて、じゃあ行こうか」

「最後じゃ無かったの？」

「気が変わってね、待ちきれなくなったんだ」

「くっ……」

迫って来る、狙いをつけたまま逃げられないただ……この期を逃すと後がない……

「……辛いわね」

どうしようも……ないの？

「だから無視をするなって!!」

地面から突然生えて来たマサムネ先輩に皆が戸惑う
そして、その隙にマサムネ先輩は吉良を刺す

……急所に当たった

「ぐあっ……馬鹿な……運が味方している筈なのに……」

「え!?決まったの……?」

「……吉良吉影、お前はもう終わりだ!!」

「言ってしまったな……」

その言葉とともにマサムネ先輩は爆発して姿が見えなくなる

「……なんなのこれ？」

「バイツァ・ダスト、キラークイーンの新しい能力だ」

「それで、何があるのよ？」

「予想は付くのだろう？」

「……いや」

「まあいい、直ぐに分かるさ」

そうして同じ言葉を繰り返すまま何故か時がまた戻った

「……吉良の仕業？なら何故私は大丈夫なのか」

分からない、でも巻き戻った

「バイツァ・ダスト……その能力の本質は分からない」

このままじゃいけない……手遅れになる気がする……

どうにかする方法は……

「この弾なら……」

たった一発しかない、自分でも作った理由が分からない悪魔の弾

「ただ……このままだと2人は死ぬ……」

そのためなら、悪魔にでもなってやろう

「シノン先輩!!」

渚が呼んでくる、だから分かっている
シアーハートアタックが飛んで来ると
その前に一撃……

「シノン、それは読めている」

地面を凍らすが吉良は躱す
当然だ、彼にだって記憶がある

「なっ」

渚は驚いて一歩引く、躱されるなど思いもしないからね

「さらばだ、潮田渚」

「ここ」

弾を込めて撃ち抜く、飛んで来ると思わなかった吉良に直撃する

「がっ……だが耐えた!!これで邪魔出来るものは誰も居ない!!」

私の方へ爆弾が飛んで来る、スピードは速く避けれない
だが……

「なっなんだこれは?シノン貴様何をした」

「……ただ、特別な弾を撃っただけよ」

シアーハートアタックは痛みのあまりか消えていた
そこには倒れる吉良と理解が追い付いていない渚がいる

「どんな弾ならこの様なことが……」

「起源弾」

「なっその弾は」

自分の肋骨から作り上げた弾
書物に乗っていた通り作り上げた

「あの弾は……大罪の魔術師衛宮切嗣だからこそ」

「彼のようなものでは無い、私は魔術師じゃないし……でも」

そのせいで余計苦しむだろう

「なんだこれは……なんなんだ!!」

「私の起源は後悔、かつて人を殺めたその記録」

「何……」

「小さい頃に人を殺した、正当防衛だったとか自分が撃たれたからとか色々な言い訳はあった……でも間違いなく自分の手で殺した」

撃たれたときに欠けた肋骨でこの弾を一発だけ作り上げた

「そうしなければ、自分が死んでいた。それでも罪悪感が……他者からの目が後悔を積み上げた」

5年以上それに苦しめられた
今だって正直震える

「でも頼りにされたなら、それに答える」

「君も悪魔だったか」

そう言って吉良はうずくまる

もう声さえも届くか怪しい
……殺しはしない、ただ後悔に押し潰されるだけだ

「悪魔でいいよ、仲間を守るためなら」

「シノン先輩……」

渚の方を見る、バイツァ・ダストは既に解かれていた
それもそうか、シアーハートアタックも消えてしまったわけだし

「無事で良かったです、心配かけてしまってすみません」

「いや勝ったからいいよ」

「……そうですね」

悲しそうな顔をしている

こっちに迷惑を掛けたからだろうか？

「渚は凄いよ」

「え？何がですか？」

「私はモンスターとかならまだしも人を殺すのは今だって嫌だし、今回のだって、足が震える。でも渚はそう言った裏の仕事を顔色変えずにこなすから」

「それは……先生の死を無駄に、後悔もしたくないからですね」

「先生は凄い人だったんだね」

「はい、僕達の自慢の先生でした」

少しずつ落ち着いて来る
ならば今は動けない吉良より……

「マサムネ先輩を探しに行かないと」

「そうですね、行きましょう」

急いでマサムネ先輩を探しに行った
渚にとっては普通でも私は自信がない
それでも今回の様に……仲間のためなら引き金を引いてみせる

今まで後悔だらけだった少女は、そこから一歩進んだ

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

最終決戦：臨也編

ボンボルド、相変わらず厄介な事には変わりない
今回はⅣと一緒だったから戦えてるが……それでも多い

「臨也、結構な量倒したんだが多くないですかね？」

「と言ってもまだ４体目じゃん？」

「本当にストックを燃やしたんですか？」

「ああ燃やしたよ、ただ増やしたらしいけどね」

「全くファンサービスも楽じゃねえ」

「ほらⅣ、ファンサービスは笑顔だよ」

「喧嘩売ってんのか？」

「そんなことはないって。」

「喧嘩はいけませんねえ」

「だったらさっさと倒れてくれないかい？正直うんざりしてるんだ」

「残念ながらそうはいきません。私もいい加減学園長に怒られますので」

「いいじゃん、どうせ学園は無くなるんだし別の事に励めば」

「良くありませんね、これでも恩があるので」

「そんな、面倒じゃん恩があるないとか、アンタはそんなこと微塵も思ってないくせにさ」

「心外な、思っていますよ」

「そんな優しい先生が生徒をこうはできないでしょ」

「彼らは私の……」

「不快だからそれ以上この件で話さないでくれないかな？」

「……」

「俺はさ、喜んでるとかだけじゃなくて苦しんでるとかギリギリで生きてるのも好きなんだよね」

「……君も散々なこと言ってますよね？」

「でもそれは人間らしく足掻くから好きなのであって、これは違うでしょ」

「まあ確かに人間ではねえな」

「それこそⅣのギミック・パペットと何も変わらないでしょ」

「やっぱ喧嘩売ってないですか？」

「だから、本気で殺す。この前とは違って今回はアンタ用の準備して来たしね」

「俺も殺していいか？」

「ほらリラックスリラックス」

「っち、早いとこ倒しきって終わらせるか」

「いやはや……一見仲が悪そうに見えて、それでいて息があっている。素晴らしいですねえ……私もそんな友人が欲しかったですね」

「いつも殴りてえとは思ってるが、それでも残念な事に腐れ縁だからな」

「そんな風に思っていたのかい!?」

「ったりめえだろうが、臨也!!腐れ縁だからってなんでも許されると思うなよ?」

「まあ流石に限界になる前にラインは引いてるさ」

「分かってるならもっとボクを気遣ってくださいよ、ギミックパペット!!」

今3体のモンスターを出して戦っている
本当に優秀な人間だこと

「と言うか臨也、対策して来たなら早く手伝ってくれませんか?」

「うーん、もうちょっと待ってくれるかい？」

「……どれくらいだ？」

「分からない」

「……仕方ねえ」

またカードを取り出す、４体は消耗が激しいから避けたかったんだが

「Ｎｏ．１５ギミック・パペット―ジャイアントキラー―!!」

また巨大なモンスターを召喚する

魔力が正直尽きそうだが、そうも言ってられない

「流石にキツイですか」

「どう先生？もう諦めてくれると楽なんだけど」

「1人ではキツイですね仕方ありません」

今までの通り1人じゃなく数人のボンボルドが同時に相手になる

「嘘だろ……？」

あくまでストックのはずだ、だからこそ独立して動くなんて本来は有り得ない

そして……10人も動かされると捌き切れない

「臨也」

「ああ、運が良かったよ」

しかし臨也には弱気な心持ちは無くて

「は？」

「時間稼ぎ短くて良かったね」

それどころか自信満々にバッグからアイテムを取り出した

「なんだその符は？」

「Ⅳや先生は3枚のお札って知ってるかい？」

「知ってるが……それがどうしたよ、それただの魔術が込められてるだけだろうよ」

「ああ、その通りさでも人が困ったら助けてくれるからこそ3枚のお札だろう？」

「……何が言いたい？」

正直自分は限界だし早くなんとかしてくれって思ってるんだが

「小僧を助けるために、こんなことが起きたよね」

臨也が符を使うといきなり水が溢れ出した
そのまま流水がボンボルドを飲み込む

「危ねえ、やるなら言ってくれませんかねぇ?」

「バレたらダメなものだろう?」

「だからってこれは酷いだろこれは」

「しょうがないじゃん、吸血鬼は流水が弱点なんだからさ」

流水を浴びて動けないまま殆どのボンボルドが流されていった
敵が減ったのは嬉しいが……

「流水ですか、意外とマイナーなんですがね」

「知らなくても、オールマイト先生があれだけ流水対策してればバレるって」

「本当にあの人は私の足を最後まで引っ張りますか……」

「それじゃあ、他にも対策結構用意して来てるし、受けてもらえないかな？俺達のファンサービス」

――――――――――――――――――――――――――――――――

立派な生徒なことは嬉しいが、ここまで暴れる生徒にはならないで欲しかったとも思っている

特に折原君の方がここまで吸血鬼メタをしてくると思わなかった

メジャーなものだけではなく、マイナーなものまで……一体彼は何処から情報を仕入れて来たのやら

「武器どころか装備まで銀セットで揃えてくるとは思いませんでした。無駄に高いですし、普段より防御低いでしょうに……」

「先生だって知ってるでしょ？防御力よりも優れるものがあるってさ」

「それはバニラの物よりも効果がある方が優秀なのは有りますが」

「騎士団長の兜が突きをメタる、騎士の信条が鈍器をメタるみたいに、それに沿った防具ってのは存在する」

「確かに……私の所ではやってませんが、長谷川先生は属性相性とかやりそうですしねえ」

「まあそれ以前に必要ってことで俺も知ってるんだけどね」

防御力が高いってことは万能って意味で優秀だが、敵が分かるならそれをメタればい

い
　それが冒険者の鉄板だ
「それなら僕にも用意して欲しかったんですけどねえ」
「ごめんごめん高くてさ」
「……はあ」
「で、これだけ銀銀してれば迂闊なこと出来ないでしょ」
「本当に吸血鬼な事が悔やまれますねえ」
「豆もあるけど効くか試そうか？」
「臨也、何故そんなものまで……」

「え？だって吸血鬼って言うんだから鬼の弱点効くか気になるじゃない」

「命懸けの戦いなんですから、自分の知的好奇心を満たすのはやめて下さい」

「まっ俺もやることはやるよ、さて後何人だい？」

体力の都合上ジャイアントキラーは引っ込めたが、さっきの流水のせいでボンボルドも人海戦術が取れなくなっていて優位に進めている

……ただ、まだまだ数が分からないからⅣの体力が持つかがこの先の問題ではあるが

「また……壊れましたか」

「Ⅳがこれだけ優秀だと戦士コースの人間が必要なのか疑問に思うよね」

「……本当は召喚した人形だけじゃ無くて、戦士の後ろに隠れたいんですけどね」

「男は正面切って、じゃないの？」

「僕より後ろにいてよく言い出せますね」

「悪いことだって思ってないしさ」

「……はぁ、頭脳だけは頼りにしますからね」

「それが俺の役目だしね」

「ただ……臨也。この後どうしますかね？」

「一気に決めようか」

「一気にって厳しくないですか？」

「大丈夫、終わらせるよ」

バッグの中かから色々と取り出す、中身を使いながらストックを削る

「さてこれで29、もうそろそろ無いんじゃないかい？」

「……」

ボンボルドから言葉が消える

もう流石に余裕は無いと見る

「お見事ですね、これが最後です」

「そう言って手を抜くなんてしないから安心してくださいな先生」

「いえ……文字通りの最後です」

「わざわざ伝える理由は？全く無いけど？」

「それは簡単ですよ……私は少しズルをするからです」

ボンボルドは下に向けて魔弾を放つと、床が割れて化け物が出てくる

「今更援軍ですかぁ？遅くないです？」

「Ⅳ油断しない方がいい」

「するつもりはありませんが……何が？」

「狂神だ……」

「狂神？なんで学園に……」

「分からない、ここ最近は出てなかったんだけどね……相手するのきついかな」

「幸いなことと言えば暴れ回るので、逃げ回ればって所でしょうか」

「いや……他の人のもとに向かうとダメだ」

「面倒だ……」

「その心配はありませんよ」

「出したくせによく言えますね先生」

「ええ、これで完成なので」

「っⅣ止めるんだ!!」

臨也は急かすが間に合わない
狂神はボンボルドの中へと吸収されていく

「間に合わなかったか……」

「制御し切れるのですかねえ？」

「出来るだろうね」

「……マジですか？」

「だって神の研究を優先してやってた人物だぜ？」

「どうするんですか？」

「とりあえずは……様子見かな……」

「そんな弱気でどうにか出来るとは思えませんが……」

「現状どうにか出来ないしね……傷を増やさないと行けない」

「傷付ければいいんですか？」

「出来るかい？」

「はい、ただ時間をくれますか？」

「俺一人で時間を稼げって？無茶言うねえ」

「でも臨也なら既に方法考えてるでしょう？」

「勿論、あるけど決まるわけじゃないよ」

「分かりました、召喚しますので時間を稼いでください」

「だってさ、先生」

「……」

折原臨也の向く先に、長谷川泰三が立っていた

――――――――――――――――――――――――

「俺は手伝わねえと言ったはずだが」

「それはキル夫君にでしょ？彼を助ける利点は無いだろうしね」

「学園に牙を向く理由もねえよ」

「別に学園と敵対しないでしょ？狂神討伐だし」

「……」

「オマケに理性は今は消えてるはずだから先生を認識出来ないはずだよ」

「……だからなんだって話だな」

「どうせもう教師じゃないんでしょ?だったらやりたいようにやればいいんじゃないの?」

「やりたい事なんざねえよ」

「本当に?」

「……ああ、本当だ」

「助けたい人がいたからこそ、その剣で肉体を削りながらも戦ってた癖にね」

「知ったような口を聞くな。ガキが」

「ガキだしね、それに蘇るとかそう言った話じゃないよ」

「……本当にお前は話を聞かない奴だな」

「いいのかい？東風谷早苗を彼の餌にするような事になっても」

「……もう関係ないな」

「彼女は、生きては無いけど彷徨っているよ」

「それがどうしたんだよ」

「俺の言いたい事、もう分かるでしょ？」

「既に身体がボロボロの俺によく言うな」

「だって、それが男でしょ？」

「分かったような口を聞きやがる」

「それじゃ任せたよ」

「地獄に落ちろ」

悪態を吐きながら刀を抜く
形が変わっているが、ソウルイーターだ

「さて……時間を稼げばいいか……そこまで無理な事じゃねえか」

狂神相手に惜しむ事なく突っ込んでいく
覚悟の決まった男は強いか

「彼、居たんですねえ」

「間違いなく居ると思ってたしね」

「居なかったら？」

「狂神出ると思わなかったから詰みかな？まあ仲間祈りながら逃走ってね」

「……おい」

「居たからいいだろう？それより今は準備は順調かい？」

「もう少しかかる……その間は頼むことになるが……」

「ちょうどいいね」

「ちょうどとは？」

「まあ俺も悪魔になるってことさ」

「……1人で背負わせませんよ」

「……ごめんなⅣ」

「いえ、結局は腐れ縁ですし」

そうして2人は狂神を倒す最後の準備をする

「まだかⅣ!!」

「ありがとうございました、長谷川先生間に合いましたよ」

準備が完了し3体の人形を混ぜ合わせる

「人類の叡智の結晶で、悪魔よ蘇れ！エクシーズ召喚ＣＮｏ．４０ギミック・パペット―デビルズ・ストリングス!!」

まさに悪魔と言った羽の生えた人形を召喚する

その姿は全てを破壊するかの如く、憎悪に満ち溢れたように

「全てを破壊せよ！メロディ・オブ・マサカ!!」

その音楽は破壊する、狂神であってもその取り込んだ身は神ではないため、その身が崩れ始める

「……ガアアアアアア」

既に話す事の出来なくなったボンボルドはただ騒ぎ立てる

ただ、傷が増えていった

「……この不快な音は聞いてねえぞ？」

「我慢してください先生、後は臨也君がやってくれますので」

「そうか……」

既に座っている、体力どころか身体も限界そうだ
……本当に利用するだけ利用した形になった

「……さてと、対吸血鬼であって対神では無いけど……これも効くよね？」

大量の瓶を投げつける
流水が決まるなら良かったが、それはもう通用しないだろう
だから……本当は校長相手に残しておく気だったんだけどな

「全部使ってあげるよ、そっちはキル夫君に任せよう」

吸血鬼の最もたる弱点、日光を詰め込んだ
それを全部放り投げる
体内に日光が降り注ぐ

「……ガアアアアアアアア!?」

狂神の身体が崩れて行く、なんとか……足りたか

「やりましたねぇ」

「ああ、戦闘は正直ここまでしたくないんだけどね……」

「君も前線張らないと鈍りますよ」

「別に俺、戦闘員じゃ無いんだけど」

「それでもですよ、ただの情報屋のままだと本当に死にますよ？」

「Ⅳがいるでしょ？」

「人に頼り過ぎるのもどうかと思いますが……」

溜息をしながら後ろを見る、長谷川先生はいない

「本当にいいんですね？」

「ああ、俺達が焚きつけたんだから最後まで責任を負うべきだ」

そう言い合いながら、向かった方向を見た
自分達の戦いは終わったが、アンタは何をするんだと

…

ボンボルドは最後の身体で地下へと潜る
……その身体は狂神に憑依していたため、既に限界に近いが……それでも最後の手段を取りに

「貴女だけ無事で良かったですよ」

１０年前研究していた生徒、今も扱い切れていないが
間違いなく、それは狂神を超えている

「東風谷早苗、その力を私に……」

「ここか」

「!?」

後ろを振り向く前に刀が刺さる
元からのダメージも大きく、そのまま動かなくなる

「呆気なかったなボンボルド。まあ生徒もあれだけ成長してればそうか」

モンスターの目の前へと歩み寄る
そのモンスターは自分を認識しているとは思えない

「待たせちまったな、俺……結構迷子癖あるしな」

笑いながら目の前のモンスターに伝える
モンスターは何も答えず、攻撃してくる

「でもな、早苗……悪いな。結局お前をどうにかする方法が見つから無かったんだわ」

凪いだ一撃でソウルイーターが砕ける
砕けたところで問題ないが、もう使えないかもしれないな

「だから好きにしろよ、燃え尽きたって思われるかもしれないけどよ」

……腹に一撃が入る
さっきの戦い時点で消耗していたがそれでも致命傷となる

「やっぱ……俺も好きな奴のこと諦められねえよ」

最後はモンスターの方へと倒れる
それをモンスターは何もせずただ見ている

「一緒どころか俺が先になるなんてな……」

一瞬だけ早苗が見えた気がした
そのまま、長谷川は事切れる

『あん？早苗。死んでないだろお前？なんでここにいるんだ？』

『そんな事分かりませんよ、でもこれも奇跡の力かもしれませんね！』

『また奇跡かよ……相変わらずだな』

『別にいいんですよそれで、それが私ですから』

『まあいいや、行こうぜ早苗』

『……はい!!』

隠し研究室の地下、そこにはボンボルドの残骸だけが残っていた
長谷川泰三もモンスターの姿も無かった
ただ……それが一番なのだろうと、後にここに来た人物は言ったのだった

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

最終決戦：キル夫編

校長を侮ったつもりは無かったが、最初から激戦だった
初撃を避けるがオールマイトより早い拳を追いつけず一度喰らうものの、威力は低い
……か、これなら……あれ？

「なん……だ？」

殴られただけだよな……なのになんで血が出てるんだ？
それだけじゃねえ……血が止まらねえ

「君は吸血鬼を舐めてないかね？」

「んなわけねえだろうが……」

「何もオールマイトだけが吸血鬼じゃないのだよ」

なんだ……この血を吸われている様な感覚……まさか!!

「気付いたかねキル夫君、これが吸血だ」

「馬鹿な……血が出てるだけだぞ!?」

「我々に重要なのは接触しているかではない、血を吸える状況かどうかだ……」

「出鱈目過ぎんだろうが!!」

そのまま、だいぶ血が吸われてしまったようだ

正直……血が抜けて少しだるい

「きっ君落ち着いて、相手のペースに飲まれてるよ」

「っ……すみません!!」

「落ち着いてこ、今まで通りにやれば勝てる相手だから」

傷口を塞いで武器を構え直す

血は溢れてないな……よし

「流石に5人相手は骨が折れるし、誰かを仕留めたいのだが……」

即仕留めるべきは緑谷出久だ……

アイツは一撃性を持っている……

「さて……」

「こっちに来た!?」

「安心しろ緑谷、お主はお主のことに集中しろ」

「富樫先輩……!!」

「邪魔だ、パイルバンカー!!」

フェイントを入れながら強烈なストレートが飛んで来る
ガードは出来なかったものの意地で地を踏み、その場に留まる

「木偶かと思ったが」

「僕ですか!?」

「いいや違う、俺の事じゃろう。だが残念漢がそう易々と倒れると思うなよ?」

「……全く、先生方も教育に励んだものだな」

ステップで距離を取る
その姿は美しい……って見惚れてる場合じゃねえや

「行きます!!」

「おう!」

雪菜が加速して一瞬で距離を詰める
それに合わせてタイミングをずらすように突っ込む

「一閃!」

「甘い!」

「一撃!!」

雪菜が返されたタイミングで斬り込む

さてどうか……

「ギリギリだが……捌き切れるな」

思い切り振りかぶったクリは拳で流される
なんで腕に痛みはいらないんだと文句言いたくもなるが

「自分の役割をちゃんと理解しているようだが……純粋に身体能力の不足だ」

盗賊でスピード負けてるのは確かにまずいとは思うが……
悔やんだままではいられない、放り投げられた身体を修正し地面に足をつく

「まだだぜ校長!!」

俺は、大声で叫ぶ雪菜もそちらを見ている
俺の一撃が入ってれば安定したヒットになったろうが……それでも当たるように祈る

「っ!!」

次の一撃の警戒をしていてこちらを見ていた校長も気付く
……危険なのは俺じゃない

「デク!!行け」

「5％　……ワン・フォー・オール……フルカウル！」

散々釘付けにしてたんだ、当たってくれよ!!
その勢いは雪菜すらも超え一直線へと突き進む
そのまま衝突し、砂煙が舞う

「ごほっ……状況は?」

「デク!!当たってようが無かろうが急いで距離を取れ!!」

近くにいては危ないとそう伝え離れるように言う
無傷は無いと信じたいが、浅いとまずい
これで終わってるならそれはそれでいいしな

「ごほっごほっ」

「デク！大丈夫か!?」

「うん、僕はなんとか……」

「校長は?」

「当たりはした……けど分からない」

「当たったならＯＫだ、流石だデク!!」

「うん」

痛めた腕を抑えながらもやりきった顔をしている
油断は出来ねえな、腕を犠牲に決める覚悟を無駄にするわけにゃいかねえ

「全く……やはり優先するべきだったな」

校長が煙の中から這い出てくる
……結構なダメージなようだがまだ動くか

「……このまま詰めさせてもらうぜ」

よもや卑怯だとは言わないよなと
油断せずに数で詰める

「……仕方がない、方針を変えよう」

「方針なんて決めさせる間も無くな!!」

再び突っ込む、勿論囮だ
本命は今度はアカネ……読み切れるかな

「また単調な突撃か……」

「どうでしょうねと!!」

そのまま掴まれて下に叩きつけられる
痛いがこの程度なら大丈夫だ
問題はこの先

「追撃してくるよなっと!!」

追撃に合わせて至近距離で日光を浴びせようとする
これなら一瞬でも眩みはするだｒ　……

「は？」

しかし追撃などは来ずに既に距離を取られていた……
読まれたか？

「だから単純だと言っているんだ」

「遠い……？」

予想以上に距離を取られている
日光が弱点なのは分かっているが……ここまで距離取るか？

「ただその距離なら……」

一瞬で距離を詰め雪菜が校長の背後へと回る
待て、一人で勝手に……

「ふんっ」

後ろからの斬り付けにカウンターを入れられる

まずい……雪菜が……

「雪菜!!」

まずいあのままじゃ死ぬ……

「……え?」

しかしそのまま校長は距離を取る

……どう言う事だ?

「雪菜、急いで下がれ」

「すみません、先輩」

謝りつつこちらの方へと戻る

校長は構えを解かない……何が目的だ？

「なんだ？仲良くしましょうじゃあるまいしな」

「したいならそれでもいいがね」

「当然信じきれねえよ」

「だろうね、私も例え君が同意してきても信じる気がない」

「だったら何が目的だが……」

「教えてあげても構わないが？」

「信じられるかっての」

「ボスなりの余裕って奴だよ」

「けっ」

慎重に慎重を重ねるような奴がそんなこと言うわけねえだろうが

「別に信じなくてもいいさ……それだけドツボにハマると言うことだからね」

「……聞かなくていい、そのまま倒すぞ」

「人数差が酷いから冷静にカウンターで削る気だっただけさ」

「……止まれ!!」

相手の言葉に惑わされる

ただ……カウンターを狙っていられるなら面倒だ……雪菜を仕留められるとしてもダメージが蓄積してしまう事を恐れた……

「ただ……このまま構えててもしょうがないな……隙を見ないと……」

「……」

「アカネ……どうした？」

「おかしい……」

「何がおかしいんですか……？」

「うん……ちょっと待って……」

「いや……そんな余裕はないんじゃ？」

「……どうせ攻めてこないし」

「そうかもしれませんが……」

「待って……」

……何かがおかしい、いくら防御に専念だからって、そのままじゃ押し切られるのは見えているはずだ

だったら多少のリスクはあっても雪菜くらい仕留めても良いはずだ

と言うことは……まだ逆転の手筈が……

「きっ君!!急いで全員で攻撃して!!」

「でもカウンターが!!」

「罠だよそれ!!」

なんでこんな簡単な事を思い出せなかったんだ……
私達は理由があってここに急いでたじゃ無いか

「校長先生はさっきまでしてた儀式の時間稼ぎを……!!」

「でもそれ今してないんじゃ？」

「多分、もう完成していたんだよ……だから敵わないって思ったから今は時間を稼いで……」

「全員無我夢中でいい、数で押せ!!」

全員で校長の方へと突っ込む
統率なんざしてられねえ、本当なら止めないと

「遅い」

しかし既に校長の背後には大きな門があった

「なん……だあれ?」

「神を召喚する手筈は整った、さて終わりにしよう」

「一体何が……」

「キル夫クン!?」

「はぁ!?」

突然脳内に流れ出す声に戸惑う

狛枝……そもそもお前と話すことが出来たのか……教えといてくれよ

「なんのようだ狛枝……」

今のことだろうが、お前が出てくるほどなのか？

「逃げて今すぐ!!いや逃げた所で何処にも逃げ場はないかもしれないけど……」

「なっ……」

お前がそう言い出すほどなのか？それ程までって……何をする気だ!?

「僕達の親玉が召喚されかけている」

「親玉ってなんだよ!!」

狛枝の親玉!?狛枝は異世界の神だっけ？

だったら……校長もその世界から？

「寝ているあの方を起こすだなんて馬鹿げている……」

「そんなにまずいのか……？」

「あの人が起きて……そしたらこの世界はおしまいだ」

「……どうすりゃいいんだ？」

「どうしようもない、こればかりはボクも全力を出すけど……敵うわけがない」

この世界は滅んでおしまいだと

「ふざけんなよ……!!」

「残念ながら理不尽は存在するのだよ」

「アンタ!!何を召喚しようとしてるのか分かるのか!!」

「白痴の魔王だったかな」

「そいつが世界を滅ぼすとしても」

「神の力を得るためには、必要な犠牲だ。むしろ吸血鬼のための世界には一度滅んでもらった方がいい」

「そんなの!!納得出来るか!!」

護りたい人達がいる
行きたい場所がある
手に入れたい物がある
そんな大切な物に溢れているこの世界を滅ぼさせてたまるか

「残念ながら時間切れだ、今……このお方は目を覚ます」

そして門が開き始める、その姿を見てはならない

「皆目を閉じて!!」

「アカネ、でも目を閉じたら死ぬだけじゃ……」

「生きたいなら目を閉じて!!」

必死の声に目を閉じる
それを見てはならないと

「これで、どうするんです?」

「賭けるよ」

「何に……?この世界の神にですか?」

「そんなものを信じてはないよ」

「……だったら何を」

「世界の危機に黙ってられない人だよ」

「それは……」

「異世界じゃないけど、この世界の危機だよ……パパ」

「……全く、僕達の娘ってだけあるかな。気付いてたんだ」

「……立香さん？」

目を閉じているが、その声で気付く、そこにいるのはアカネの父親だと

「久しぶりだねキル夫君。ここで会うことになるとは思わなかったけど」

「一体何故ここに？」

「アカネに少し前に、世界の危機になる可能性があるから一応来て欲しいって」

「……」

アカネ先輩が実家に帰ってた時か……何をして来たのか聞いていなかったが、そんな話してたんだ

「話したいことはあるけど、それは後で……万が一の時はアカネを頼んだよ」

「立香さ……!!」

「アカネ。こっちはやるから、ちゃんと終わらせてください」

「ママ……!!」

２人の声が聞こえたと思うと、立香さんが大声をあげる

「カルデアの皆！今回の相手は異世界の魔王だ……初めてこの世界を護るため全力で戦うよ!!」

あちこちから大声が聞こえた、そのまま門が閉まる音が聞こえる

「皆……!!」

「大丈夫だよきっ君、皆絶対に帰ってくるから」

「……分かりました」

武器を構え直す、切り札は消えただろうけど……それでも油断している場合ではない

皆に託されているんだ……負けられない

「この世界を護る」

こんな事を俺が言うことになるとは思わなかった
でも、この大好きな世界を絶対に壊させやしない!!

続

キル夫編②

異世界の魔王については彼らに安心して任せられる
だから、今は目の前に集中すればいい

「まだ逃げてるんですか!!」

「さて、どうだろうね?」

今もまだ、時間稼ぎのように距離を取っている
逆転の目が隠されているとは到底思えない
だからって今回は引き伸ばさせはしないけどな

「富樫先輩!!」

「応!!」

2人で息を合わせて攻撃を仕掛ける
相手はまだ逃げ優先だし、そこまで仕掛けるのは怖く感じない

「だからと言って、私に攻撃が当たるとは思わないで欲しいがね」

相変わらずの体捌きで流される
人間じゃ無いとはいえ本当にどうなってんだよ

「流石じゃのぅ、校長だからこそ衰えってものが定番だと思うが」

「定番か、ただ愚直に振るしか能のない君には言われたくないがね」

「なんじゃと?」

「少しは戦いという物を覚えたまえ」

「生憎俺は遠距離は苦手でのぅ」

「……？」

聞いた話じゃ富樫先輩はなんでもこなすと言っていたがどういう事だ？

「だから、こうじゃな」

「なっ!?」

遠距離が苦手と言った途端何かを投擲する

唐突の行動に校長は躱しきれない

「なんだ……これは」

「正直俺もニンニクとか光とか用意出来れば良かったんじゃがのぅ、漢玉しかなかった」

「漢玉……？」

富樫先輩……何を用意したんだ？

「……これはまさか!?」

「勿論男塾名物よ!!」

手に持ったライターを放り投げる
必死にかわすが、それを見越した様に接近して近くで札を使う

「流石に、こう言ったミーハーな物には疎いんで生憎、火炎札しか用意してないが」

その途端校長の身体は燃える
ただ……その勢いは尋常ではない

「富樫先輩、何を?」

「油とガソリンじゃ、見事に燃えるわ」

「近くじゃ危なくありません!?」

だからこそ離れたんだろうけど……それでも引火して爆発しそうなんだが……

「これが男塾名物じゃ!」

「男塾ってなんですか!?」

「はっはっは、後でキル夫にも案内してやろう」

「要らないですよ!!」

そう返事を仕返していると大量の蝙蝠がこちらへと飛んで来る
一体なんだこれは!?」
「もう我慢出来なくなったんだ、早いね」
「アカネ!?」
「その蝙蝠全部が校長だよ、トドメを刺すよ」
「え!?ああ!!」
全員でそれぞれ蝙蝠を追う気だが……全部が纏まっていて攻撃に至らない
集団で飛び掛かられると武器を振るえすらしない
「きっ君、後任せていいかな?」
「アカネ、何をする気だ……?」

「私の領域、かなり体力を使うんだ」

「分かった、頼んだ」

「うん」

そうしてアカネは唱え始める

領域を見た事ないけど……ここで言うってことはどうにか出来るんだと信じられるしな

「展開」

その言葉とともに、巨塔のような物が聳え立つ

……いや、これは

「なんだこいつら……」

「怪獣だよ」

「怪獣……？」

よく見てみる、確かに生物だ

「これが私の能力って所かな」

「使いこなしてるのか……？」

「うん、まあ大丈夫かな」

「……」

きっ君が震えてる……やっぱり怖がらせちゃったかな？

流石に自分の何十倍も大きい物を用意したし……

だから出したくなかったんだよね

「乗れるのか？」

「え？」

「使いこなしてるってことは乗れるのかって!!」

「うんまあ……乗れるんじゃないかな？」

自分でもそんなこと試した事ないし分かるわけないじゃんと

「だったら後で……」

「……外でこんな大きい物出すわけにはいかないでしょ？」

ガーンって顔をしてる……正直怖がられるとしか思わなかったけど、これはこれで戸

惑うなあ

「それじゃあ任せたぜアカネ!」

「よし、どんどんやっちゃえー!!」

アカネがそう言うと蝙蝠の群れに突っ込んでどんどん喰らっていく……と言うより、アカネが急にはっちゃけた!?

「どうしたのさきっ君」

「いや、怪獣よりもアカネの態度の方が驚いたんだが……」

「あー、そうだっけ?まあ一応は真面目で通してたしねえ」

「こっちの方が素と」

「理想の優等生っぽくなくて幻滅した？」

「いや、どんなアカネでも好きだから自分がやりたいようにやってりゃいいんじゃねえの？」

「きっ君……」

「２人ともイチャついてないで行きますよ!!」

雪菜に怒られた、確かに今はこうする場面じゃねえか
ケリを付けようと残った蝙蝠を追いかけ始めた

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「これで……何匹だっけな!!」

１匹１匹丁寧に狩っていくが、それでも結構な量をやった気がする……

それでもまだ残ってるっぽいが

「うわあああ」

「デク!?」

デクが蝙蝠に襲われているが、それを駆除する

「助かった」

「大丈夫か?」

「うん……ただこう言ったことでデクがあたふたするのが予想外だな」

「だって……僕の攻撃当たらないし……」

「そう言われるとそうだな……」

「うん、ごめんね」

「適材適所だし、デクはやることやってんだろ」

「そう言ってくれると……助かるよ」

「それじゃあ他も助けに行こうぜ」

「分かった」

そのままデクと一緒に他のメンバーの元へと行く
大体は倒しきったか？

「……残りは何処にいるよ」

「すまねえ……見失ってる」

「冷静に追い詰めよう、ここで逃すわけにいかない」

全員で探しているが見当たらない……

「もしかして終わったか？」

「それはないと思う」

「そうなんですか？」

「だって、終わったならこの異世界も動きがあるだろうし」

「それもそうか……」

「時間を掛けるか、誰かを襲えば復活するだろうから油断は出来ないよ」

「そんな簡単に復活出来んのかよ」

「吸血鬼って非常にしぶとい生物だしね」

「しぶといで済むレベルじゃないんだが……勘弁してくれよ」

「こう言う時用のは何かないのですか？」

「何かって言われても……逃げ回る小動物を探すスキルなんて……」

冷静に考える、何か……方法が……

「あっ……」

もしかしたら……行けるんじゃねえのか？

「きっ君、何かあった？」

「はい、最初から違う考え方をすればよかったなって」

「違う考え……？」

「別に見つける必要なかったなって」

「……？キル夫君？」

「ちょっと辛いかもですが我慢してください」

アカネが展開したように次は俺の領域を広げる
その領域内の生物にダメージがはいる

「ちょっと……私まだ辛いんだけど」

「我慢してください!!」

辛そうなアカネを心配しながらも、領域を広げ続ける
そして……1匹の蝙蝠が落ちて来た

「見つけたぜ」

「この身体では……辛いな体力を奪って来るその能力は」

「悪いが、アンタ相手に最後まで油断出来ない……トドメ刺させてもらうぜ」

「……神に好かれた人間にやられるのは残念で仕方ないよ」

「何言ってんだ？俺は嫌われてたぜ？狛枝に助けられるまで」

「面白い冗談を言う物だ」

「なんたって俺にゃ神様の加護がついてねえしな。神を死ぬ程恨んださ」

「それなら……最初から君に声をかけるべきだったかもしれないね」

「巡り合わせが悪かったな」

武器を振り下ろす
しかしそれを止められる

「誰……」

慌てて後ろを振り向くと、殴り飛ばされる
一体何が……？
慌てて目を凝らすと

「カーミラ……？」

嘘だろ、オルガ先輩達が戦っていたのに……何故ここに？

「校長、遅れました」

「いや……よく来てくれた」

「時間が掛かってしまいましたが」

「おい……オルガ先輩達はどうした？」

「ああ、あの子達ですか……」

「どうしたって言ってんだよ!!」

「苦戦はしましたが、本気を出せば終わりました」

「嘘だろ……」

オルガ先輩だけじゃない、三日月先輩も義勇だって居たんだぞ？負けるわけねえだろうが

「皆は？」

「トドメを……」

「ふざけんじゃねえええ!!」

アイツらが死ぬわけねえだろ、怒りに任せて突っ込むそれをアカネがアイテムで引き留める

「死ぬ気？」

「アイツらが死んだって巫山戯た事言うから」

「トドメは刺していませんよ、時間が惜しかったので気絶させてすぐにこちらへと来ま

した」

「……」

良かったと言うべきなのだろうが
5人を相手して平然としてられる彼女に冷静を欠かされる

「校長先生、私の身体を使って復活してください」

「止めねえと!!」

ここで復活させるわけにはいかねえ、慌てて止めようとする
しかし……

「いいや違う、復活するのではないよ」

一瞬で校長の身体が消える

何が起きたって言うんだよ……

「校長先生……？」

「私ではない、君が神になる最終段階として私を使いたまえ」

そのまま校長はカーミラの中へと溶け込んでいった

「なっ……アイツが君臨するんじゃなかったのかよ？

「そんな事はどうでもいいよ。問題は5人で勝てなかったあの先生が更に強くなった事だよ」

「ふふふふ、有難うございます校長先生。力がドンドン漲って来ます」

禍々しいオーラが彼女を包む

本当に……倒せるのか？

「簡単な事でしたね、私が神になり貴方を復活させればいいんですね」

「……そうはさせねぇよ」

何があろうとも挫ける気はない
自分自身を励まして、絶対に勝つと雄叫びを上げた

ーーー

「くそっ……」

分かってはいたが、力の差が先程とは大違いだ
５人相手で優勢取って来るってどんだけだよ
傷も全然気にして無いように思える
それどころか喜んでるまであるぞ

「デク!!」

「何!?」

「お前の一撃頼りで動く、俺達じゃ無理そうだ」

「分かったよ」

「ただ……焦るなよ」

恐らくは出来て一撃、それならばミスは許されない

「分かった、皆ごめんね」

「問題ねえよ、皆帰るための策なんだからよ」

動けないアカネを除いて全員が囮だ

命を賭けて戦うが、勿論死ぬ気はねえ生きるためだ!!

「全員死ぬ事には変わりないのですが」

カーミラの鋭い爪が掠る
素早さは校長同等なのがかなり辛い
元々校長は時間稼ぎをメインでやっていたこともあって、それが一変して猛攻に変わった事は予想以上に辛かった

「キル夫!集中せんかい!!」

「え?」

目の前からカーミラが突っ込んできて近付いて来る
嘘だろ……掠って距離を取ったばかりだっていうのに……校長以上に早いのか?

「ぬぅ……!!」

「富樫先輩!!」

富樫先輩に爪が刺さる、だいぶ奥まで入ってそうだが……

「この程度なら問題は……」

「ドレイン」

「はっ……なんじゃ!?」

富樫先輩は慌ててカーミラを突き放す

ドレインは一瞬の筈だが……

「先輩……それ……」

「……気を付けい」

目に見えるくらい体重が減って痩せていた
筋肉質だったその肉体は虚弱とも言えるくらいに……一瞬だぞ!?

「どんだけ、規格外なんだよ……!!」

「これで富樫さんは戦えませんね」

「何を言うか!!俺はまだ!!」

富樫先輩は攻撃を仕掛けようとするが倒れる
障害物とかはないが何が起きたんだ?

「殆ど吸い尽くした事により、今まで慣れていた体重が、体型が根本から変わりましたので……無理だと思いますが」

「クソっ……無闇に近づけねえのか?」

「そうも言ってられないですね……」

「雪菜？」

「門が時折動いています……アカネ先輩の家族ですし負けはしてないでしょうけど」

「嘘だろ……？」

慌てて門を見る……確かに時折激しく揺れる

「立香さん達が大丈夫って言ってたし信じるが……」

また時間制限があるのかよ……どうしろってんだ

「私が……」

フラつきながらアカネが立ち上がる
ただ……無理だろう

「無理されても困る」

「私は無理でも怪獣達なら」

「一回でそれならもうこれ以上は無理だろうよ……」

限界なのは分かってる……だからやめて欲しい

「だったらどうすれば……」

「そりゃ俺が……」

「私がやります、デク君、合わせて！先輩は援護を」

「雪菜……？」

「黒雷……そして雪霞狼解放!!」

全身に雷を纏い、そして武器も解放されて光を放つ

「やっぱこれは……少しの時間しか持ちませんね……一瞬で行きます!!」

雪菜が突っ込……見えない
気付けばカーミラと競り合いをしている

「……よし！デクは準備をしろ」

「キル夫君は!?」

「合わせる!!」

「出来るの!?」

「俺なりにだ」

勿論、あの戦いに割り込む事は出来ない
だから……罠だ、それなら出来る
考えろ考えろ、何処に仕掛けるか

「……ここだな」

ありったけの日光を浴びせてやるよ……これで、どうにか……

「デク君！今!!」

雪菜の言葉と共に、デクは構え始める
そのまま雪菜はカーミラをデクの方へと蹴り飛ばした……競り合い勝ってるのかよ!?

「それに当たるわけには……いきませんね」

体制を立て直し、避ける準備をする

しかし……

「そこだ……!!」

「!?」

カーミラは罠に掛かる

今回の場合は俺よりも、合わせた雪菜がすげえな……

「デク!!」

「もう腕が壊れたって気にしない……今はこれで終わらせる!!１００％!!ワン・フォー・オールフルカウル!!」

「１００%!?」

腕が壊れるから１００%は出せないと言っていた
それでも……やる気かデク……

衝突の音と共に、また土煙が舞う
しかし……今回は逃げろと言葉が出ず……逆にデクのもとへと駆けて行った

「デク!!」

「キル夫君……」

「よくやった、お前のお陰で……」

「ごめ……ん」

腕が破裂したように血を流しながらそのまま気絶する
しかし……ごめんって……

「まさか!?」

慌てて煙が上がっている方を見る
そこから……無傷のカーミラが現れた

――――――――――――――――――――――――――――――

「なんっ……」

「結界が間に合いましたね」

「……は?」

神官とはいえ吸血鬼でデクの一撃を防げる結界なんて持たない筈だし……なにより

日光を浴びて動ける吸血鬼がいるはずが

「驚いていますね」

「当然だろ……どんなインチキだよ」

「私自身も驚きましたが」

「……」

「どうやら、校長の狙い通り……神になれたようです」

「……ふざけてんのか？」

「日光にもニンニクにも十字架にも怯える必要がない、最強の種族です」

「……嘘だろ」

止められなかったのか？
進化させちまったのか？校長と合体したから？戦ってる最中に？

「後はキル夫さんだけですね」

「っ!?」

周囲を見る
腕を抑えたまま気絶しているデクが居る
全部の魔力を出してぶっ倒れた雪菜の姿がある
栄養失調で血を吐いて倒れた富樫先輩の姿がある
消耗しきって立つのが精一杯のアカネの姿がある

「……だがまだ俺がいる」

「神に勝てる、英雄では無いでしょう」

「それでもやってやるよ!!」

退却なんてあり得ない、それが神が相手だろうと

「吸血鬼の神と言うものを教えてあげます」

「……貴女は神では無い」

「え?」

後ろから声がして誰かが通った
カーミラへと衝突し、少しだけ下がらせる

「かなで……?」

「キル夫、大丈夫かしら?」

「ああ……俺だけは大丈夫だが……かなでの方が不味かったんじゃ？」

1対2で……しかもあの檀が居たんだぞ!?

「問題ないわ」

「問題無いって……」

「私がここに居る、それ以上の理由はないでしょう？」

「そう言われるとそうだが……」

「聞かせてください」

「何を……？」

「何故私は神では無いのか」

「神は造る事が出来ない」

「……」

「外の世界から来る事は出来るけど、この世界の神は増えも減りもしない」

「だから私は神になれないと……」

「そう、だから貴女は成り損ない……偽神」

「ふざけるな!!」

「!?」

カーミラの威圧に気圧される

ここまでキレるのか

「校長が今までやって来たことを否定させなんてしない!!」

殺意が一層濃くなる……どうすれば……

「貴方達2人を殺せば全て否定出来る」

「かなで、逃げ……」

「大丈夫」

「なんで……？」

「神はこちらに付いているのだから」

「それは一体……」

「流出領域……Ｇｏｄ　ｂｌｅｓｓ」

そして光が俺達を包み込んだ

ＢＯＳＳ：偽神カーミラ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

続

キル夫編③

―――――――――――――――――――――――――――

ｇｏｄ　ｂｌｅｓｓ、この領域内にいた俺は傷が癒えているのを確認した
それどころか、倒れていたはずのデク達も起き上がる

「かなで……」

「キル夫、どうしたの？」

「かなでは……一体？」

「私は私よ」

「……そうだったな」

「……納得出来ません」

「は？」

「それで私が納得出来るとでも？」

「いや……アンタが納得しようがしまいがどうでも良いが」

「……神の分体」

「え？」

「私は神の分体だから」

「……」

分体ってアレだよな？神様が地上に降りる時の……
つまりかなではガチの神様!?

「キル夫」

「はっはい!!」

「私は私よ」

「……そうだな！」

かなでがかなでであることには変わりねえんだ、今更改まるのもおかしいだろう

「何故だ……」

「まだ何かあるのかしら？」

「何故神なら校長を助けなかった？」

「……」

「彼は誰よりも助けを求め、その時助けなかった癖に」

「否定はしないわ」

「それなのに!!それなのに何故私達が救済される為の神を作ろうとすれば邪魔をするんですか!!」

「……」

「答えなさい!!」

「元々神は下界に介入をそこまではしないわ。エリスだけは好き勝手やってるみたいだけど」

エリス……エリス神の事か？
第一宗教になる程規模が大きいのは分かっている……それぐらいしか知らないんだけど

「本来は下界に好き勝手に介入しないわ、助けを求められたら助ける、なんて事はしない」

……狛枝はまああいつ外の神だしな
後は自分を土着させるために利用する気だったし
……神様目の前にいるんだが良いのだろうか？

「だったら、加護はどうなんです？」

「加護は人間に付けてるけど、どうかしたの？」

「吸血鬼は、他の生物は？加護は存在しないんですか？」

「当然でしょう、人間がこの世界では弱いから。加護が無ければ簡単に死ぬ生き物だもの」

「……俺は？」

俺生まれてから一度も加護ついた事ないんですが、どう言う事なんです？

「本来であれば貴方にはニャル子神の加護が付くはずだった……」

「そのニャル子神はどうしたんだよ……」

「授けられなかったの」

「理由は……？」

「恐らくは狛枝君……未来で彼が貴方に介入する運命だったからって可能性があるわ

ね」

「……なんか予想外の理由があっさりと言われて悲しいんですが」

かなでには無理だろうけどさ!!

小さい頃からのコンプレックスをそう言う運命だったって流されてどうしろって言うんだよ!!

「じゃあ俺の加護は狛枝でいいのか……？」

「それと私よ」

「え？」

「私はニャル子神の分体として加護の不具合が生じた人物に加護を与えるシステムみたいなものだった」

「システム……かなでが？」

「ええ、分体の殆どがそんなものよ」

　幸せを掴めるのは一握りだけど
……神様は自分で生物として作っても物扱いかよ

「ただ、貴方の元へは辿り着けなかったの」

「まあ……海の上で不定住だったしな」

　それが理由では無いんだろうけど

「だから、貴方の存在を知らないまま次の任務が与えられた……この学園の吸血鬼達がやっている計画を止めろと」

「……かなでが、不憫な気しかしないが」

「それで貴方に会った、加護を与えられなかった人間に……その時はもう手遅れだったけど」

「狛枝か……」

狛枝の時は俺が命賭けだったし仕方ないけどさ……

「大体はそんな理由ね、キル夫も先生も理解してくれた？」

いやいや、カーミラがこれで納得するならこんな事になってないって……

「結局神は好き勝手と言うことが分かりました」

「……何故？」

何故じゃ無いでしょうが!!

「……私が神になるだけじゃ無い、他の神も滅ぼさなきゃいけない」

さっき以上に怒りが増している
当然だがどうするんだこれ……

「かなで!!どうするんだよこれ!!」

「……先生の奥底の怒りまで引き出したわ、これでただ殲滅だけになる……そうすれば隙が出来る」

「……かなで?」

かなでがそこまで考えているの……
ごめんやっぱ結果的にな気しかしないわ

「皆の治療も完了したわ」

「本当に出鱈目な領域だな……」

「エリスよりもマシよ、彼女は自分でルールを作る。なんでもありだもの」

「うわぁ……」

溜息を吐いていると黒い塊が飛んで来る
文字通り、闇を凝縮したもののように見える

「……さて、全員起きたな？仕切り直しだ」

元から絶望的なレベルの相手だが、アカネも起きたし、かなでが冷静さを欠いてくれたし
……やってやるよ!!

――

「……挫けてる場合じゃないんだけど」

緑谷出久は腕は治ったものの、立ち上がることが出来なかった
１００％を全開で出して、結界すらも破れなかった

「僕に何が出来るって言うんだ……」

他の皆と違って、考えたりは正直得意じゃなくて……戦うことしか出来ない
でもその戦いすらも不安しかなくて

「僕にこれ以上どうしろって言うんだよ……」

体の傷は癒えても、心に大きな傷が出来ていた
身体を壊すほどの全力を出してもどうしようもないと……だったら自分に出来る事はないと

「これ以上居ても迷惑かな」

ヒーローになりたかった、けど本当のヒーローはキル夫君のようにどんな相手でも逃げない人物で……

いるだけで足手纏いのような自分は……

「……」

そうして一歩下がると何かにぶつかる

「痛っ……」

「……」

慌てて後ろを振り向くと……

「……かっちゃん」

「おうデク、今お前は何しようとした?」

最初の場所で足止めに入った筈の爆豪がそこに居た

「どうしてここに?」

「終わったから来たんだよ」

「凄いねかっちゃんは……無事に終わったんだ」

「俺の事はどうでもいいんだよ!!」

どうしよう、いつも以上に機嫌が悪い

「えっと」

「デク!!お前は今何しようとしたか聞いてんだよ!!」

胸ぐらを掴まれる……苦しい……

「何って……邪魔にならないように……」

「……他の奴は戦ってんのにお前は逃げんのか!?」

「だって１００％でも……」

「あん？」

「１００％でもどうしようも無かったのにどうしろって言うんだよ!!」

姫柊さんの様に戦ってみようとするも、１００％じゃ張り合うどころか、傷つける事さえ出来なかった

この戦いでキル夫君は僕に何か起きそうなら全力で助けに来るだろう

それが災いとして……なんてあり得る

「テメエが目指すヒーローはそんなもんだったか？」

「……だったら、どうすればいいのさ」

「簡単だろうよ」

「え？」

簡単な事なんてある筈ない、勝っちゃんは何を？

「１００％でどうしようもねえなら、その上を行けばいいだろ？」

「１００％の上って……そんな数字は無いんじゃ」

「あるとか無いとかじゃねえんだよ、どうせここでとちったら死ぬんだ、だから死ぬ気で

限界を超えろ」

「そんな無茶な……」

「命を賭けてでも守るのがヒーローだろうが!!」

「……かっちゃん」

「あん?」

「僕はまだ、ヒーローでいいのかな?」

「……俺よりは劣っているけどな」

「……分かった」

１００％のその先、身体の負担がどれほどか分からない

正直四肢粉砕しても驚かない
それでも……仲間の為に、皆の為に
僕は皆のために!!

「……２００%!!」

「デク!?」

２００%と言う聞き慣れない数字に驚く
デク、お前何をする気だ?

「ワン・フォー・オールフルカウル!!!」

さっきも自分よりも強く、身体の限界を超えてつ早く、そして全力で

「なっ!?」

カーミラは見ていなかった
元々立華かなでに憎悪していた事に加え、デクでは肉体に傷を付けれないとそう思ってそちらを気にかけすらしていなかった

「……皆、守るんだ!!」

しかしその一撃は、結界を一瞬で破り、肉体を壊そうとしている
身体を覆う闇でデクを振り払ったが……既に肉体に綻びが見え、手遅れだと気付いた

「緑谷出久……」

まだ行動にあたって支障はない、身体を守るものは壊され、闇も穿ち心臓への道が出来てしまった

「デク……すげえじゃねえか」

「やったよキル夫君」

そのままデクは倒れ込んだ
腕は粉々どころか腱が切れもげかかっている

「無駄にするわけにはいかねえ」

偽神にトドメを刺す準備を……
しかしここで一つの問題と対面した
身体を闇で伸ばして、届かない位置にある心臓を……あの場所までどう届かせるか

――――――――――――――――――――――――――――――――

「かなで!!」

「何……？」

「どうにかする方法はあるか？」

「……あるわ」

かなでに方法があるかをすぐ尋ねた
このままじゃ近づけないし届かない、だからこそどうするかを

「キル夫、貴方は弓の自信ってある？」

「レンジャーは必須事項と言いたいが……不安だな」

正直そこまでの回数触れた事がない
ちゃんと規定の場所を撃てる自信は……正直ない

「どうしましょうか……」

「なんで弓なんです？」

「これを……撃ち込むから」

かなではそう言いながら一本のヤドリギを取り出した

「なんですかこれは……？」

「ミストルティン……神殺しの矢」

「神殺し……!?」

「その名の通り、私達も本体ですら殺す事が出来る」

「逆に言うとこれじゃないとダメなんですか？」

「ええ、先生……肉体は完全に神になっているから」

「そんな……」

本気で、神相手に戦えと言うのか？

「彼が結界に穴を開けてくれたから、その一撃を撃つ事が出来る」

「……デク、ありがとよ」

ただ問題は一つ……どうやって矢を当てるかだ

「きっ君」

「アカネ……どうした？」

「……きっ君がやるしかないわけだけど」

「責任重大っすね、と言うか今気付いたんですが、弓すらないんすけど」

「それなんだけど……」

アカネがかなでの方を見る

何をする気だ?

「既存の物を弓に出来る?」

「形状が似ているなら、無理ではないわ」

「形状って何が……」

「きっ君、持ってるでしょ?」

「……嘘だろ?」

「嘘じゃないよ、そのナイフならきっ君普段から慣れてるだろうし」

だからって、ククリナイフが弓になる？
どんな冗談だよ

「きっ君」

「マジなんですね？」

「今回巫山戯た記憶はないよ」

「確かに……相棒なら信じられますが」

入学してすぐから使い始めた相棒
手入れも欠かさず、今までもずっと使って来た
コイツの弓なら……確かに射抜ける気がする

「……簡易ルール」

かなでの手によって物質が無視して成長する
そして、弓へと変貌した

「斬れそうなのは危険だが……」

刃の部分は消えていない、少し手を怪我しそうと思いつつ矢を受け取る
一発だけ……外すのは許されない

「クソッ……動き回るな」

何か危険を察したのか動き回って狙いが定まらない
外すわけにはいかないのに

「ふんっ!!」

「富樫先輩!?」

気付けば偽神の足下に富樫先輩がいる……何やっているんだ!?踏み潰されるぞ!!

「俺だけのうのうとはしてられんからのぅ!!」

そのまま足を掴み全力で持ち上げる
闇を纏ったその姿は尋常ではない重さの筈だが

「富樫先輩!?」

「はよう狙えい、ダチのようには長くは持たん!!」

そんな重い物を長時間持ち上げられる奴がいるのかと思いつつも弓を構える

「大丈夫だ相棒、俺はお前を信じるからよ」

一発しかないと言うのに、信じられないほど落ち着いている
そのまま矢を放った

「当たれ!!」

矢は直線を進み、偽神の心臓へと飛ぶ

「よっしゃ!!」

当たったと喜んだが……偽神はまだ動く……

「なんっ……!?」

「浅かったですね」

「浅い……!?」

俺の力が……足りなかったのかよ……

「もう手は無いですね、終わらせます」

富樫先輩が闇に飲み込まれた
そのまま、偽神はこちらへと来る
もう……ダメなのか？

「……」

周りを見る、仲間が護りたい人がいる
だから諦めていいわけがねえ!!

「狛枝あああああああああああ!!」

全力で叫んで、敵目掛けて飛び込んだ
その瞬間俺の姿は消え、敵の目の前へと飛んだ
1人だけ、時が進んだ
その進んだ世界で

俺はヤドリギを掴んで
奥へと押し込んだ

「な……なんでなんであり得ないあり得ない!!」

その直後、偽神の身体は崩壊して行った

―――――――――――――――――――――――――――――――

「終わった……」

そこには倒れるカーミラの姿がある
既に神のような姿は無く、元の姿に戻っている

「お疲れ様キル夫君」

「デク、大丈夫なのか!?」

「大丈夫じゃ無いから、すぐに戻って治すよ」

「それがいいな」

「先輩、お疲れ様です」

「雪菜も本当に助かった」

「いえ……先輩程では」

「もっと誇れって」

「っぷはああなんとか出れたわ!!」

闇に飲まれていた富樫先輩も這い出てくる

「無事だったんですね!!」

「勿論、この富樫源次が死ぬわけないだろう」

「そりゃそうですね」

少しすると、ここまでの道を切り開いてくれた、他のメンバー達も次々にこっちへと来た

「キル夫君大丈夫っすか?」

「走り先輩……なんとか」

「オルガ達は回収して安全地帯まで連れて行ったので安心して下さい」

「それは良かったです……」

５人全員無事だったらしい、本当に良かった……

「キル夫君本当に全部片付けるなんてね」

「折原先輩のデータもためになりました」

先輩が、同級生が皆が次々に訪れ。ついには……

「門が……」

閉じていた門が開き、立香さん達がそこから出て来た

「大丈夫だったんですね!!」

「無事、元の世界にお帰りいただいたよ」

「この世界が滅びずに済んだか」

「命の覚悟をしてたけど、本当に良かった」

「立香さん達も有難うございました!!」

異世界の神も無事に終わった
これで後は帰るだけだ……

「かなでも有難うな……」

かなでの方を見る、身体が透けている

「え……?」

「どうしたの、キル夫」

「かなで!!身体が!!」

「私は役目が終わったもの、もう後は帰るだけよ」

「そんな、いいだろうまだこの世界に居たって」

「十分よ、楽しかったわ」

「いいや、まだ我慢出来ない!!今すぐは帰らせないからな!!」

狛枝にでも聞けば対策は出来るだろう
ここでお別れなんてさせるものか

「じゃあ一旦帰ろ……」

「ふふふ……」

「カーミラ……？」

まだ動けるのか……だがちょうど良かった、救助を

「全員認めません」

「まだ言ってるのか……残念ながら計画は終わりです諦めて」

「ええ、計画は終わります」

「それなら良かった……」

「全員と共に最期を迎えます」

「は？」

カーミラはそう言うと地面に衝撃を与える

そしてダンジョンのコアが砕ける

「なっ……」

「皆ダンジョンと共に、おさらばです」

「急げ!!ダンジョンを出るぞ!!」

全員で駆け出して、ダンジョンの外へと向かった

「……本当は貴方の夢を叶えたかったのですけどね」

皆が逃げた後、崩れるダンジョンに1人残る

吸血鬼の神は結局作れなかった

これからも吸血鬼の不遇な時代は続くだろう

「計画を止めれば良かったんですかね？」

校長の言う事は絶対だし、その計画を立てたならなんとしても成功しようとしたただ、カーミラは学園で教師をやる事も大好きだった

「私がもっと言えていれば、未来は違ったのかもしれませんね」

今となっては後の祭りだ
それに、この選択も後悔があるわけではない

「校長……私も向かいますね」

不遇と言われ続けた吸血鬼であっても楽しい人生だったと
降って来た岩に飲まれながらそう思うのだった

――――――――――――――――――――――――――――――――

「クソッ……!!」

先に進めない、ダンジョンが歪んでしまって外に出る事が出来ない
このままじゃ、全滅だ

「おい、誰か誰でもいいからなんか無いのか!?」

キル夫はそう叫ぶが、誰も挙手しない
それだけ異常な状況なのだ

「クソッここまでやって死ぬなんざ絶対にあっちゃならねえよ」

「キル夫」

「かなでか、待ってろよ……絶対にこの世界の楽しさを教えてやるからよ」

「それはもうたくさん教わったわ」

「かなで……何を……？」

「面白い事も、不思議な事も、意外な事も全部貴方から教わったの」

「何を言って……」

「少しだけ、生きてみたいって思ったの」

「だったら生きて……」

「分体がこんな感情を持つと思わなかったけど……初めて本当に好きな人も出来た」

「それ以上はいい、ここはなんとかするから!!」

生き埋め寸前な癖に一丁前にどうにかすると言い張る、しかしかなでは首を振る

「貴方を好きになれて良かった」

「かなで、やめてくれ……」

「大丈夫、私は生きるわ。私じゃなくても私は絶対に消えない」

「……」

その言葉に何も言い出せなくなる

「……アカネ」

「私だって寂しいんだよ、貴女を唯一認めたんだから」

「だから言ってるじゃ無い、消えないって」

「……どうする気？」

「私の権能全て貴女に渡すわ。これで私は貴女と同化する」

「それで、どうにか出来るの？」

「ええ、勿論」

「きっ君、かなでは私の中で生きるってさ」

「どうして……？」

「全く、私もきっ君同様神が嫌いだったんだけどな」

その言葉に答えず、淡々とかなでに言葉を返す

「ごめんなさいね」

「いいよ、やろう」

アカネの決意に合わせてかなでの姿が消える
そして、アカネが光を纏う

「アカネ!! 上!!」

アカネの上に落石が起きるが、びくともしない

「……神様、いや現人神かな？勝手に増えちゃ怒られるって話のばっかだったのに」

溜息を吐きながら詠唱を始める

「ダンジョンがもう持たない!!」

「〝創造神〟」

その言葉と共に、ダンジョンは消え、何もない空間が広がった
アカネ……？

「ほんと神の権能って出鱈目じゃん……」

「何をして……」

「世界全部を変える力は無いけど、世界を作れるようになった。文字通り創造神ってね」

「大丈夫なのか？」

「この力使う気ないしね、今回だけ。元の世界に戻るために」

「それならいいんだが」

「しかし面白いね」

「何がだ？」

「かなではここにいるし、神様嫌いの2人が、片方が神の眷属もう1人が神の一部になっちゃうんだもん」

「そう考えると凄いな」

「帰ろっか」

「そうだな」

アカネは扉を作り出し全員でその扉をくぐった
そこには元の世界が広がっていた
帰って来れたんだな

学園生活、俺の危機、あらゆる全てが終わりを告げたのだった

――――――――――――――――――――――――――――――

エピローグへ続く

エピローグ

「お！キル夫じゃねえか。最近調子はどうだよ？」

「オルガ先輩、久々です」

「もう先輩じゃねえんだぜ？」

あの戦いから1年程が経過した
勿論あの時点で学園は経営者がおらず、自然消滅したが……オルガ先輩や折原先輩の口コミのお陰で学園生活や吸血鬼討伐の功績が無駄にならずに済んだ
最下層冒険者からと思っていたが、そうならずに済んでよかった
Eランクとかだと、潜れるダンジョン制限されるし

「それでも、俺にとって先輩達はいつまで経っても先輩なので皆そう呼び続けますよ」

「好きにしな。それで、調子はどうだ?」

「ボチボチですね、相変わらず初見では組まれにくいですが」

ギルドではトレジャーハンターの職業で登録させてもらっている
知り合いとかからは優先して誘われたりするが、初見さんは職業を怪しんで近付かない人が多い

「その顔のせいもあるんじゃねえのか?」

「気にしてるんですからね!!」

「悪い悪い、それで今日はどうした?」

「ダンジョン攻略が終わって、休みも兼ねて友人達に会いに行こうって思いまして」

「良いんじゃねえのか？皆喜ぶだろうし」

「なんだかんだ、学園が潰れてから会えなくなった奴らもいましたからね」

「それじゃ、ミカも呼んでくるか」

「オルガ、俺はもうここにいるよ」

「おっとそうだったかすまねえ」

三日月先輩も後ろの部屋から出て来た

オルガ先輩とはなんどか財宝の買い取りのため会っていたが、三日月先輩は本当に学園以来だろう

「やあキル夫、今日もオルガに何か売りに来たの？」

「いや、今日は違いますね」

「ふぅん、キル夫ならいつでも買い取るってオルガが言ってたから」

「いつでもって……あまり無理していただかなくても」

「ここまで大きくなったのはキル夫のお陰だしさ」

周囲を見渡す、本当に大きな建物だ
オルガ先輩はあの後、宣言通り貿易会社を立ち上げた
三日月先輩はボディガードとして、部下達の事を心配していたが勉強させてなんとか今も会社で部下をしているらしい
俺の見つけた宝もここで買い取ってくれるから本当に助かる

「これから色々と回るなら邪魔しちゃ悪いな、楽しんでこいよ」

「はい!!」

まだ話したい気持ちもあったが、時間は有限だ
会う人だって沢山いる、少し名残惜しいが会社を後にした

「ねえオルガ」

「どうしたミカ？」

「キル夫って本当に不思議だよね」

「そうか？ただのすげえ奴だと思ったがな」

「約1年半前に彼と会ったけど、その時はやる気や諦めない気持ちはあったけど実力は無かった。だけど盗賊なのに半年で俺追いつかれたんじゃないかって思うほどだったし」

「ああ、それはだな……護るものがある奴はつえぇんだよ」

「……」

「アイツは新条の為に死ぬ気で強くなろうとした、だから時間なんて関係ねえ全力で成長してったんだ」

「俺だってオルガを護る気持ちで負ける気ないけど？」

「ああ、だからよミカは最強なんだ」

「そっか」

1人の少年を見送りながら、2人の男は笑い合った

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「キル夫？お前わざわざこんな所になんの様だ？」

「こんな所って言い方は無いだろうよ」

この国の中でも大型の病院、そこでカズマと会った

「もう、退院なんだろ?」

「そうだな、丁度今日が退院だ」

「だったら邪魔したか?」

「いや、なんだかんだお前のお陰でもあるし居た方がいいとは思うぜ?」

カズマの後方を見る、今日退院のウィッチ先輩とゆんゆんさんがいる

2人は軽く挨拶だけして家族等の元へと向かっていった

そうだな、そっちが優先の方がいい

「1年を長いと取るか1年で済んだと取るか難しいな」

「ウチとしては短いと思います」

「あっ日影さんも居たんですね」

「ゆんゆんの退院やしなあ、沙都子はんもおるで」

「久しぶりですわキル夫さん」

「よう沙都子、姉さんも無事そうで良かったじゃねえか」

「ええ……重体の方も多かったですし、ねぇねぇが無事退院出来て助かりましたわ」

魔術師コースはボンボルドに違法レベルの肉体改造を行われており、殆どの生徒が病院送りになった

この2人でさえ早い退院だったし他の生徒が不安ではある

「特にあの2人は退院出来るのか不安だがな……」

「馬鹿な兄はずっと病院の方が安心かもしれへんけど」

「はやて先輩……それは」

病院の方からはやて先輩がひょっこりと顔を出す
まどか先輩がトドメを刺さなかったため、兄も生きてはいるが……未だにタイタスがトラウマで退院出来ないらしい
タイタスってなんだろう?

「私の兄だって言うならもっと気張って欲しかったけどなあ」

「吉良先輩も含めて2人共かなりトラウマらしいですから仕方ないですよ……」

「入院代払う身にもなってや」

「それでもはやて先輩高給取りじゃないですか」

「そやけどさあ……」

現在はやて先輩は王国に仕え、宮廷魔道士をやっているらしい

「本当は討伐課とかでも良かったんやけどなあ……魔術が未熟な奴ら多過ぎて一々教えんとアカンのが……」

「講師雇えばいいと思いますがねえ」

「冒険者やってる人は引き抜き辛いし3年卒業間近の人間が居るならそこがベストだろうよ」

「カズマも道連れにしたかったなあ」

「なんで!?俺スティールくらいでしょうが!!」

「カズマと日影さんは自警団だっけ?」

「ああ、つっても国直属ではあるけどな」

「カズマならもっといい仕事出来た気がするけどな」

「ゆんゆんの治療費にすぐお金が必要だったしな」

「あぁ……手伝えば良かったか?」

「それは断っただろうよ」

ゆんゆんとかの治療費は最初は俺らも払う気だったが、カズマに断られていた

「それに、合法的に盗賊技能が使えんだから楽しいわけよ」

「なんで……？」

「ひったくりからひったくり返すとかな」

なんか無茶苦茶な事やってる気がする

「そして沙都子は確か……」

「ウチでありますね!!」

またどっからか次は秋山さんが出て来る

病院前だと言うのに、凄い人数になって来た

「あっ店長もいたんですの？」

「ええ、私だって退院を待っていましたからね!!」

秋山さんは気付けば店長になっていて、沙都子は店員として雇われたらしい
自作の罠も店で売り始めたようだが、好評の様だ

「生憎と、給料は多くは出せていないんですけどね……」

「十分貰えてますわ」

「それでも……治療費分を出せずにすみません」

「それは……悔しいですが彼が居ましたので」

「あれ？そういやニケ先輩は？」

「まだ依頼中ですわ」

「あの人、積極的に受けるイメージ無かったですがね」

「大方責任を感じているのでしょう、そのお陰で助かっていますが」

ニケ先輩は勇者……とは行かず冒険者になった。

持ち前の幸運で儲けが多かったらしいが、殆どをウィッチ先輩の入院費に費やしたらしい

「ほんっっっっっと悔しいですが認めるしかありませんの」

「ははははは……」

とにかく、費用が足りないなんて事がなくて良かった

吉良先輩だけは不明だったが、どうやらお金は同僚と言う人が払っているらしい

他の生徒達も問題ない、早く治ってくれるといいが

「それじゃ俺はそろそろ」

「ああキル夫、またそのうち会おうぜ！」

「ああ！」

一番の親友に手を振って別れ、次の場所へと向かう
一番心配だったここが不味い事にはなって無くて良かった

―――――――――――――――――――――――――――――

冒険者ギルド……では無く闇ギルド
そこで２人の友人と待ち合わせていた

「よう、なんか依頼かい？」

「いえ、友人を待っていまして」

「ああアイツらか、まっすぐにでも来るだろうな」

闇ギルドのボス、野原ひろしの歓待を受けながら2人を待つ
この人に持てなされても色々と困るんだが……

「折角だし、兼業とかどうよ？」

「だから俺は入りませんって」

「お前みたいなタイプが一番ウチに欲しいんだけどな」

「俺はアカネと約束したんですから」

盗賊としても技能やスキル等で裏ギルドに来るたびにスカウトを受けている
その度に断っているんだが……

「頼むよ、お前1人さえ居ればこのギルドは安泰なんだしよ」

「それじゃあ僕らはお払い箱って事ですか？」

ひろしさんの喉元にナイフが当たっている
いつのまにそこにいたんだか……と驚かされるばかりだ

「久々だな渚」

「うん、キル夫君も元気そうで良かったよ」

渚が気付けば目の前に、そして送れて藤堂も入って来た

「ほら、俺に恩あるだろうよ」

「確かにそうですが……」

暗殺特化の渚は自然と闇ギルドが一番だったが、問題が藤堂だった
彼女は元人間だが、長い間実験体だった事や、狛枝が何かしでかした事によりマジで

この国で住処がなかった
だからこそ、戸籍や経歴を問わないここで勤めさせてもらえる様になった

「お？俺に恩があるだろ？」

「あまり友人を困らせると刺しますよ？」

「待った!!俺ボスだろうが!!分かった止めるっての!!」

渚の強迫に屈し、勧誘を止めた
ただまた来たら勧誘されるんだろうな……

「２人とも元気そうで良かったな」

「うん、名前のせいでブラックなイメージあったけどそんな事はなかったしね」

「友人２人がいびられてたら俺もキレてたかもな」

「おいおい、勘弁してくれよ」

「ははは」

笑うながら藤堂の方を向く、こっちも元気そうだ

「本当に信じられないな」

「ん？何がだ？」

「私がこうやって……化け物じゃなくて、普通の人間の様に暮らしていけるって事がさ」

「あー……まっ出来てるしそれが当たり前なんだよ」

「その当たり前を作ってもらって本当に感謝しかないよ」

「それでこそ、あの時助けた甲斐があるってもんだ」

「本当にキル夫さん多くの人を助けましたもんね」

「当然、必要とされてたしな」

「本当にキル夫君のそう言う所は変わらないな」

「それでも、ここを頼る時は頼る。そん時は2人とも頼んだぜ」

冒険者をやっている以上綺麗事だけでは終わらせられない
その時こそ彼らの出番だ
そこにはただそう言った仕事をこなせる敬意だけがある

「勿論」

「キル夫さんのために私達が恩返しする番ですしね」

「恩返しなんざ考えなくていいよ、客と売り手だ」

「毎度あり!!」

「まだはええよ!!」

ひろしさんが唐突に毎度ありと言って皆爆笑してから、この場所を後にしたのであった

闇ギルドは正直不安だったが、２人とも笑顔で良かった

――

「キル夫!!勝負しろ!!」

「おっと」

折原先輩の元へと向かう途中にマサムネ先輩に絡まれた
力などは上がっているが、まだあしらえる程である

「ぐぬぬ……それで何の用だ!!」

「折原先輩に用がありまして」

「待ってろ！取り次ぐ」

そのままマサムネ先輩はとてとてと駆けて行った
そのまますぐに部屋へと通された

「呼んできたぞ！」

「有難うマサムネちゃん」

「ふふん、マサムネは優秀なのだ！」

案内するだけで褒められてるのは本当に褒められているのだろうか？

「やあ、久しぶりだねキル夫君」

「久しぶりです」

折原先輩、それに走り先輩がいる

「走り先輩もここで働いてたんですか!?」

「そんな驚く事っすか!?」

「正直走り先輩は闇ギルド行くと思ってましたし、居なくて驚きましたよ」

「そりゃあ、能力だけを見るならウチもそう思うっすけど」

「一体何が……？」

「必要だって言われたんで」

「それはもしや……」

「技術面っすよ、情報収集にちょうど良いって」

「ソウデスカ……」

なんだ走り先輩自身を必要と言ったわけじゃないのか……残念だ
折原先輩もⅣ先輩もいるしどっちかと……って思ったが

「ただ女性社員というのはちょっと問題があってね」

「折原先輩、なんかあったんです？」

「いや……寿退社とか育児休暇とか会ったら大変じゃない？」

「そこまでブラックにならんでも……」

「あーどうせ結婚はしないっすし」

「しないんですか？」

「まず、この職場結構機密あるから外部の人との関わりが減るっす」

「それは……そうか」

「そしてここのメンツとは結婚したくない」

「……分からなくもないです」

実際折原先輩と結婚とかマジで嫌でしかないだろうとは思う

「誰かと結婚するって言われたらキル夫君の方がいいっすし」

「え……？」

「一応師匠やってましたし気に入ってたんすよ？」

「そう言われましても……」

「ただ、後輩に蹴られる気はないんでキッパリ諦めてるっすけどね」

「何というかすみませんね」

「いや、キル夫君が気にする事じゃないっすし……この職場に入った以上は恋愛諦めてるっすしね」

「酷くない？」

「事実じゃないっすか」

折原先輩が開いた情報屋、そこに護衛としてマサムネ先輩、情報収集に走り先輩を雇っているらしい

「Ⅳ先輩は何を……？」

「ああアイツ？何させてたっけ？」

「えぇ……？」

そんな適当で良いのか？

「魔術とか使わせるわけにもいかないしねぇ、アイツのは特に目立つし」

「実際何かしてる気がしないんですけど」

「え？それでいいんすか？」

「そうは言っても、臨也も何かしてるっすか？」

「いや、俺客も対応してるよ!?」

「来るの後輩達だらけじゃないっすか……」

「まあそうだけどね」

「しかも殆ど対応してるのウチじゃないっすか」

「そうだね……」

「やっぱクビ……」

「いや、俺居ないとだいぶキツいよね？」

「まあそうかもしれないっすね」

「と言うわけで変わらずってわけでね」

「別に良いっすけどね」

「皆さんなんのお話で？」

「あっⅣ先輩、居たんですか？」

「今帰ってきた所ですよ」

「何してたんですか？」

「出張情報屋ですよ……臨也の元に来たくない人多いので」

「通りで収入が予想より多かったわけだ」

「そこは気付いてあげてくださいよ……」

先輩だらけだったしそこまで心配してなかったけど、無事に就職しているようで良かった

――――――――――――――――――――――――――――――

鹿目神社に訪れたのはあの時以来か、本当に世話になった

ただ性格的に、まどか先輩が神社の跡取りになると思わなかったけどな

「……」

「中嶋、最近はどうだ？」

「最悪だな」

「相変わらずだなおい……」

「考えてもみろ、あの先輩だぞ？」

「あぁ……」

俺に対しては優しかったけど、まどか先輩実際厳しいしな……

確かに中嶋にはキツいか……

「そもそもだ」

「ん？」

「俺に神道など分かるわけがないだろ？」

「あー……」

中嶋は教会の人間だもんな……そりゃ分からねえわ

「拾って貰ったのには感謝してるがな」

「もっと感謝してくれても良いんだよ？」

「!?」

慌てて中嶋は後ろを振り向いた

そこにはまどか先輩が……恐怖かよ

「キル夫……」

「いや気付かなかったって!!」

マジでぬるっと後ろから出て来たレベルだかんな!?無茶言うんじゃねえよ!!

「どうしたの正義君？何か悪い事でも言ってた？」

「急に後ろから出て来たら誰でも驚くだろ」

「それもそうか、ごめんね」

全くと中嶋が咎める
まどか先輩咎められるとかやべえなこいつ

「そういや中嶋、衝動はどうなった？」

「……だいぶマシになったな、正確にはアホらしいと思ったが」

「それなら良かったが……」

正義厨……もとい、過剰な悪殺をしていたが、学園内でも減って行って今は完全に抑えられているようだ

「まどか先輩のもとでやってたらそりゃ治るか」

「いや」

「ん？」

「貴様のせいだ」

「俺……？と言うかそれはお陰なんじゃ……？」

「認めん」

「えぇ……」

相変わらずツンデレだなこいつ
内容的には俺を認めてるんだろうけど

「所でなんで俺なんだ？」

「最初の頃に言ったはずだがな」

「言ったっけ……？」

「……」

「悪いって」

「……盗賊と言うものは完全な悪党だ」

「そうだな、ただあの学園は流石に悪党事してたわけじゃないけどな」

「……悪人は全て裁かれるべきだ」

「中嶋は確かにそう言ってたな」

「だが貴様は根っからの善人だった」

「よせや、照れるぞ」

「気色悪い」

「酷くない!?」

「キル夫君、それはないんじゃないかな」

「まどか先輩まで!?」

「そのせいだ、悪や善が分からなくなったのはな」

「そうか……だがこれ以上って考えると俺は良かったと考えるぜ」

「……ふん」

「ツンデレだねえ本当に」

「黙れ」

「あー雇い主にそんな事言うとどうなるか分かる？」

「……っち」

「キル夫君には学生時代感謝一杯だったね」

「こっちも色々とお世話になりました」

「私はもう戦場で戦う事がないだろうけど、それでも皆を応援してるから」

「有難うございます」

「これからもお宝探し頑張ってね、運試ししたいならウチでくじ引きもあるから」

「……凶引いた場合は？」

「……ウェヒヒ」

「……まあ俺も頑張りますんで」

中嶋が神社で働けるのかは今後も不安がある、ただ……アイツは器用だし大丈夫だろ

「俺も頑張らねえとな」

より一層やる気に火がついたのだった

続

エピローグ②

――――――――――――――――――――――――――――――

王国直属、吸血鬼討伐課
正直吸血鬼関連の出来事だったし、ここに勤める人達は多いかなって思ったけど実際に勤める事になったのは2人だけだった

「ここから先は立ち入り禁止よ」

「友達に会いに来たんですが……」

「職場には機密とかあるのに入れると思ってるの？」

呆れたような表情をする
銀髪で黒服、ただし世間離れしたようなその雰囲気は何処となく不思議ちゃんにも見

える
　ただし……予想外な事に彼女は真面目だった
「アムー、こっち手伝って」
「分かったわ。と言うわけで貴方は帰りなさい」
「いや……すぐそこに居るでしょうし会ってだけして帰るをしたいですが……」
「ああもう……」
　アムさんと呼ばれた少女の目が赤くなる
　まさか吸血鬼……？
『早く帰りなさい』
「ああ、会ったら帰るって」

「……効かない？」

「すみませんが吸血鬼対策はしてますんで……」

「吸血鬼じゃ無いわよ、ああもう……」

吸血鬼関連であろうと、違おうが彼には関係ない
神の眷属であるキル夫に洗脳や魅了は通じない

「ガタガタうっせえんだよ」

入り口で騒いでたのもあって、扉の方から爆豪とその後ろからひょっこりデクが顔を出す

「元気そうじゃねえか」

「ったりめえだろうが、吸血鬼にやられるかよ」

デクの方も見るが、傷という傷は見当たらなかった
こっちも無事そうで良かった

「貴方達の友人……確かによーく分かったわ」

「なんで!?」

デクが驚いたような表情をする
そりゃ俺も正直驚きたいが……

「問題児は問題児と仲がいいってわけね」

「僕問題児……なのかな?」

「デクウウウウウウウウウ!!」

気が滅入っているデクに爆豪が叫ぶ

「ちょっとかっちゃん!?そんな叫んじゃダメだってば」

「テメエだってやる事やってんだからいいんだよ、問題児でも成績で返しゃいいだろ」

「そりゃそうだけど……」

「ってわけで、さっさと行くぞ」

「ちょっとかっちゃん!?今キル夫君が……」

デクがそう伝え爆豪がこちらを見てくる

「世話になったな」

「ああ」

それだけ言い残して爆豪は去ってしまった

まあアイツらしいな確かに……

「あああもう……キル夫君次いつ来れるか分からないのに」

「別にいいだろ、無理している必要もねえんだし」

「それも……そうだけどさ」

「でだ、デクに聞きたい事があったんだ」

「どうしたの、キル夫君」

「なりたい物になれたのか？」

「うん！まだ先輩方には劣るけど……それでも皆を護るヒーローになるんだ！」

「爆豪も確か同じだったんだっけ？」

「うん、かっちゃんも本質はヒーローになりたいって」

「それじゃ、２人ともっと活躍してけよ、俺も負けないからよ」

「うん、僕だって有名なヒーローになるんだから!!」

「いい加減入口で話すのやめてくれないかしら？」

「すまねえ、ただ入れないから許してくれって事で……」

「直属部隊って言ったはずだし取り締まれるけど」

「やめてくれ」

「キル夫君逃げて!?」

少なくとも、この人が捕らえる気があるとは思えないが、それでも逃げたそんな気無くても牢屋に入る時間なんざ無いしな

「……全く」

「誰か来てたのか?」

「あっヘル兄お帰りなさい」

アムから先程までの険悪な顔は消えてニコニコしだした

「ちょっと問題児が増えてたのよ」

「……俺からしたら君も問題児なんだがな」

「流石に傷付くのだけど」

「……まあ、って事は偶に来る白い少年だろう？」

「偶に来るって？」

「ああ、討伐課に案内したりとかな」

「なんで入ってんのよアイツ……」

自分がいない時にやらかしてたのかと驚く

「しかし……残念だなアイツさえ討伐課に居れば俺も楽できたのに」

「これ以上問題児に入られると困るんですけどね……英雄の素質とか感じたんです？」

「いや、アイツは英雄じゃないよ」

「じゃあなんなんですか？」

「何事にも挑戦したがる最強のガキ、そう言った印象だな」

普段笑わない吸血鬼ハンターが少しだけ笑った様な気がした

――――――――――――――――――――――――――――――

「結婚するぞ！」

「？？？？」

いきなり何を言い出すんだこの人は

「いいから、いいだろう？」

「いや俺……恋人いるんですが」

「……え？」

「え？じゃなくてですね……」

「みっちゃん何してるんです？」

「シノア！ちょっと今忙しい所だから」

「キル夫君が迷惑してるじゃないですか」

「だって……」

「第一みっちゃんにはお見合い来てるでしょう？」

「だからキル夫にお願いしてるんだよ!!」

「だからって急に言われても戸惑うんですが!?」

姉さん達3人組は王都へと戻った、貴族だし当然と言えば当然だが……

それで……お見合いに困らされている様だ

「義勇はどうなんだ?」

「あっ家族の間でも私と本格的に交際が認められましたので」

「あーおめでとう」

「有難うございます」

「それで……姉さんは……」

「敗北者です」

「シノアあああああああ!!」

姉さんが叫んでいるが……事実なんだろうなあ……

「どうしろって言うんだよ……」

「お見合いすればいいでしょうよ……」

「嫌だぁ……」

「喚いたところでどうしようもありませんよ？」

「……重婚は？」

「俺貴族じゃないんすけど」

「いやいや……私と結婚すれば……!!」

「申し訳ありません、俺そんな何人も愛せる自信はないんで」

2人、でも正直多いくらいだ……半端になるくらいなら初めから別の相手を探してくれと

「ぐぬぬぬぬ……」

「俺も一応相手探しますので……」

「約束だからな!!」

「冒険者な以上依頼であると有難いですけどね……」

「キル夫さん、そうやって甘やかすからみっちゃんはつけ上がるんですよ?」

「見てられねえ……」

「そう言われるとそうですが」

「私はキル夫さんもみっちゃんも応援してますので頑張ってください」

「ありがとな……」

「なんですかその微妙そうな顔は、シノアちゃんの応援いらないんですか？」

「いや……義勇は結局今回も喋らないのかって……」

隣にいるのに何も喋らないのは正直驚くがらしいっちゃらしいけどさ

「言いたい事は既に済んでいる」

「ねえどう言う事!?どう言う事なの!?」

「……っふ」

「キメ顔しないでちゃんと話して!!」

義勇に正直不安を覚えたが、シノアさんがいるなら大丈夫だろう

問題は姉さんだ……俺も頑張って姉さんの恋人を探さねえとなって思った

当然だが見つからなかった……理想が高過ぎる……

――

「ってなわけで休日中はあちこち回ってきた」

「楽しめたか?」

「おう、わざわざ休暇取らせてもらった甲斐があった」

「そりゃよかったのぅ」

冒険者ギルド、休暇が終わってそこに集まっていた

「それで、今日はどうするの？」

「ってかマジでこのメンツで行くんです？」

「何か文句あるの？」

「いや……冒険者になって役職が変わったけど……元戦士３の盗賊１だよな？」

富樫先輩、シノン先輩、雪菜それに俺この４人が知り合いで冒険者になったメンツだ

勿論他にもいるっちゃいるが……正直あまり交友がなかったせいでトレジャーハンターである俺を警戒してる

「それで、元学園のメンバーを集めてどこへと行くんだ？」

「今日は簡単なのにしましょうか」

「ん？休み明けなのに簡単なのにするのか？」

「ええ、少し思った事があるんですよ」

「ん？雪菜何かあるのか？」

「いや……どちらかと言うと先輩の方ですが」

「え？俺？」

「会いに行ってたって事はアカネ先輩に暫く会ってないんですよね」

「……わざわざすまん」

「いいんですよ、キル夫さんが要ですし」

そのまま今日の冒険が始まった
いつも通り敵を狩りながらお宝を探す、そんな毎日が

「……キル夫、どのくらい貯まったんじゃ？」

「結構稼いでますよ、もうすぐ家建てれそうレベルには」

「まだ冒険者1年の筈なんだけど……」

「マジでお宝探しが優秀過ぎて……」

「ほんと、キル夫の能力を知らない人達は勿体無いね」

「それだけ言ってくれるなら有難いですけどね」
「今度銃のメンテ本格的にしたいからまた組んでね」
「俺を金ヅルとでも思ってません!?」
「その分私達も活躍してるでしょ」
「それはそうですが……」
「弟子が優秀で喜ばしい限りじゃ」
「幸せそうで羨ましいです」
「雪菜は良かったのか？」
「富樫先輩……何がですか？」

「いや、俺が言うのは野暮か」

「よく分かりませんが俺はもう待ってるんで行きますね!!」

そのまま宿へと帰っていった

「別にいいんですよ、先輩の幸せを邪魔したくないんで」

「お主は……？」

「私だって冒険者として頑張って幸せですよ、恋人はそのうち探しますが」

「そうか、俺は応援するぞ」

「はい！」

彼女は彼女なりの幸せを探して、冒険者としてこれからも続いていく

――――――――――――――――――――――――――――

「お帰り、きっ君」

「ただいま、暫く帰って来なくて悪かったな」

「いや、友人達と会えて良かったんじゃない？」

「そうだな、変わらない奴らが多かったけど会えて良かったよ」

「それなら良かった」

「かなでは？」

『貴方がいいのならいいのだと思うけど』

アカネの中から声がする。肉体は既に残っていないが、今でもアカネの身体を間借りしているらしい

『どうしたの？』

「いや……なんだかんだかなでもこの世界に残れて良かったなって」

『そうね、アカネには感謝しているわ』

「私も……かなでのお陰で生きていけたし」

２人とも仲良い様で良かった、喧嘩されたらこっちの胃が削れるし

「しかし、学園生活は不思議だったね」

「そうですね、最初から吸血鬼の学園に入ってしまって大変でしたが」

「それでも……ちょっとだけとは言え、私は仇をうちたかったからね」

「結局衛さんの死体は？」

「見つからなかったよ……それでも有難うって聞こえた気がしたし、ああ終わったんだなって」

「それなら良かったです」

「次はきっ君の番だよ」

「ん？俺から聞きたい事なんてありました？」

「勿論、友人達と話してきた事教えて貰うからね」

「そりゃそうだな……それじゃあまずは」

友人達の事、冒険者の事沢山話した
そして冒険者として数をこなして、子供を育てまた冒険者とお宝探しの毎日を過ごした

そして更に未来……

―――――――――――――――――――――――――――――――

あれから何年経ったか、俺は冒険者を辞めてとある爺さんから墓守を継いだ
正直俺も神が混じったアカネも不老長寿だしまだ冒険者を続けられるが……歳を取らないのを気味悪がられるだろうしな

「キル夫さん、いい天気じゃのぅ」

「ああ、〝やらない夫〟さんいい天気だな」

「正直墓守の後継が居なくて困っていたんじゃが……居て良かったわ」

「……」

やらない夫、この男を知っている
本来であれば英雄になるべき男だった
しかし俺のせいで……墓守で人生を終えることになった

「なあやらない夫さん」

「どうした？」

「もしも俺がアンタの人生を奪ってしまったと言ったらどうする？」

「俺の人生をか……？」

「ああ、本当だったらアンタは英雄になれたはずだったとかだったら」

「……俺には正直荷が重いだろうから墓守で十分じゃったな」

「冒険者になりたかったんじゃ？」

「確かになりたかった……が守るべき者も居たからこそ墓守って言う安定の職業で良かったとも思うのぅ」

「……守りたいって奥さんですか？」

「おぅ、２人いたんじゃ羨ましいじゃろう」

「居たって事は……」

「１人は歳でな……もう１人は神の分体らしくて歳を取らないらしくてのぅまだ寄り添ってくれている」

「歳を取らない……」

「その2人を娶って墓守として暮らしていた」

「楽しかったですか？」

「ああ勿論、響もクリスも本当に素晴らしい妻だった」

「それなら心配しなくて良かったか？」

「じゃあお前さんの方じゃ」

「ん？」

「少なくとも俺の代わりの人生だったのじゃろう？そう言う人生を行えてどうだった？」

「そりゃもう決まってんだろ?」

笑顔になって大声で叫ぶ

「楽しい人生だったぜ!」

キル夫は冒険者養成校で夢を繋ぐようです。

――

ここまで読んでいただき有難うございました

後書きに続きます

後書き、キャラ秘話

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ここまで読んでいただいて有難うございました
自分でも予想以上の長編となりましたが、無事走りきれて良かったです
事の始めはｐｉｘｉｖにて同人誌と言うていで支援ＳＳを書いていましたが、原作者の大豆氏と話すうちに違う形でのＳＳという事で今作が始まりました
見切り発車でしたが、自己満足とは言え完結できました
本当はもっと各キャラを掘り下げたかったのですが、コミュが自体が少なかったかもしれません
ダイスを自分で振って選ばれないってキャラが多かったですし
大豆氏の作品に出てきたキャラは一部のみで、ほぼ最終決戦のメンバーのみですが最後に軽くキャラ説明や過去等を話させていただきます
※つい物語中に語りきれなかったことから長くなったため2つに分割します、申し訳ありません

岡島キル夫（原作：２ｃｈ）

初期のやらない夫の職業候補から海賊が選ばれた結果、彼が適任かと思われて選ばせていただきました

海賊岡島緑郎の息子でお宝が大好きな少年となり盗賊コースになったのは必然な気もします

加護がないのは何重にも神に愛されたやらない夫と対比するようにこの世界では無い神に気に入られたと、基本対比にするつもりでしたが、１人で戦えず仲間と共にを考えましたが何故かオールマイトを１人で倒したりしました

原案ではコンプレックスの塊や多少の悪人寄りにしようとしましたが清々しい程善人を貫いてしまいました

それによって盗賊なのに善人と言う矛盾の精神が多くの人間に影響を与え絆を紡げたと思います

彼は神の力が身体に入り込んだ事により魔術では無く時を操る魔法を使用していました……それが原因で学園に目をつけられましたが

繋いだ絆を生かしながら手に入れた流出などと共にいつまでもお宝探しに励んだ一生を送ったのです

過去話

プロローグ参照

新条アカネ（原作：ＳＳＳＳ．ＧＲＩＤＭＡＮ）

本編のやらない夫と違い幼馴染みは海賊では作りづらい事と、学園付近まで流れ着く事をプロットに入れていたのでヒロインは最初悩みました

元はいなかったキャラを使おうか悩みましたが、脳髄に固執していた彼女が学園への復讐が目的と言う名目でキル夫に近づくヒロインに当てはめるのがいいかと判断し、その中でも神嫌いの彼に同調できる、設定で神と関わりある人間がベストと判断したため彼女になりました

本当は神の分体予定でしたが、分体が最初から本妻オーラはエリスと被るため神の力を持つ分体が最終的にアカネの身体に混じる方がいいと判断したためああなりました

原作ではもっと堕落的な性格の筈ですが、キル夫に感化されたのか真面目で冷静に近い性格になってしまった感があります

本編への分岐点ではまた大切な人を学園に奪われて心には復讐心だけが残りましたしかし、過去へと戻り学園を倒してこちらの分岐点では幸せになりました

過去話

本名は藤丸アカネ、元異世界の住人カルデアのマシュと立香の娘として生まれた彼女

は兄衛と共に英霊達と過ごしていました
しかし彼女は少し捻くれており、英霊がヒーローならその悪役も必要と考え、ヒーローよりも怪獣を気に入り、流出にも影響が出ました
ある日、兄が不吉な予感を感じ取り学園に臨時講師として潜入し探りましたが行方不明になりました
兄を探す事と学園の復讐のため学生として彼女は入学しました
効率化のため、脳髄を躊躇いもなく摂取してましたが、1年後彼と出会った事で大きく変わりました

佐藤和真（原作：この素晴らしい世界に祝福を！）
本編のカズマは少し悪ガキ的な先輩でしたが、1年前の話のため悪友になりました
性格はクズマさんでしたが、とある事件……めぐみんの死をきっかけに考え方が変わり、仲間を死なせないように真面目になりました
そして日影と共にゆんゆんに関わっていきますが彼女だけはめぐみんの死を未だ受け入れられず最終的に敵対し、なんとか説得しました
分岐点では、悪友である岡島キル夫の事をただ忘れ、普通の学園生活へと戻りましたどちらの分岐でも岡島キル夫と関係があったかどうかくらいで然程人生に変わりは

ありません

過去話

彼は平凡な家で生まれ冒険者に憧れたごく普通の少年です

学園に入学する前にはキル夫を利用して入学試験に受かろうとしましたが、彼の抜けている部分に呆れ自らの行動を恥じました

その後は特に闇はありませんでしたが、友人の死を前に歪みかけます

そこに岡島キル夫、中嶋正義の存在が彼を変えました

キル夫に負けたくないと言う感情と、友人の役に立ちたいとの感情を抱え友人としてずっと仲良くやっていました

狛枝凪斗（原作：スーパーダンガンロンパ2さよなら絶望学園）

その正体は全にして一、一にして全なる者とさえも呼ばれる外なる神の副王ヨグ＝ソトース

ニャルラトホテップ同様人と意思疎通を図ったり、人を試したりもする事からこの役を希望の試し子である狛枝凪斗のするのは決まっていました

彼がこの世界に訪れた理由は明かされていませんが、この世界には信奉者はおらず困り果てていました

そこで死に掛けていた少年、岡島キル夫を救いその近くで彼を見ていました
その中で彼に人間の可能性を信じて信奉者から眷属として欲し、分岐点にて彼に契約を用い岡島キル夫はヨグ＝ソトースの眷属となりました
本来であればベルモンド・バンデラス（ヒュプノス）とは仲が良いわけではありませんが、作品の都合と使いやすいキャラとしたため外なる神と旧神が仲良くなりましたが……多分そう言うケースも存在するでしょう……多分
その時点で世界は分岐し、本編の世界は彼がタイムパラドックスを起こさないために分けた世界です
過去話
神であるため彼の過去は不明です

立華かなで（原作：Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！）
狛枝凪斗が外の世界の神様である様に、彼女はこの世界の神の分体でした
三神であるニャル子、サンレッド、エリスの中のニャル子の分体、ただし性格は本体と全く似つかない物でした
彼女はクリスと違って、生まれたてでは無いのにも関わらず感情は当初殆ど有りませんでしたが……彼と出会って感情が徐々に生まれ始めました

その中には恋心も混じっていましたが、本人が理解してない上気付いていてもアカネの存在が大きすぎて彼女自身は諦めて居たでしょう
だからこそ最後は託し本体へと戻る……予定でしたがアカネに神の適性があったのな波長が合いすぎて消えずに彼女の身体の中に残り続けました
そのまま恋心と気付いた彼女は申し訳無さを感じていましたが、アカネが私はあなたと一緒と言ったことにより納得して幸せに生きました
分岐点では彼女は失踪しました、何処へ行ったのかは不明とされています
実際は岡島キル夫を盾にされ彼女もまた学園の闇へと消えて行きました
過去話
最終決戦：キル夫編③参照

中嶋正義（原作：断裁分離のクライムエッジ）
最終決戦でも話したように彼は正義に狂い犯罪者を一切容認しない人間でした
しかし盗賊や海賊と言う犯罪者なのに根っからの善人なせいで罪を裁くべきか悩んでしまい、結果的に悪人排除を貫いた自分とも言えるべき夜神月と真っ向から対立しました
彼については本来はキル夫やめぐみんを悪として裁く敵役の配置予定でした

しかし、めぐみんが器物破損や怪我などをさせているものの人を殺したことが無く絞首刑にまで至らないこと
下水道の任務達成を証明させるべきモンスターが存在しなくなる事を踏まえ急遽彼女を殺せなく、殺した犯人が他にいると味方となりましたが……予想以上の苦労人になって驚いています
途中でヘル兄のようにキル夫の禍々しい感情をぶつけたくなったのもあって完全な作者の被害者です……すまない
分岐点では彼を普通の人間に戻した岡島キル夫の存在は無かったことになり
また悪を裁き続けるも、やらない夫が入学する頃には息絶えていたでしょう
過去話
最終決戦：正義戦参照

オルガ・イツカ、三日月・オーガス（原作：機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ）
頼れる団長、それとミカの2人はオルフェンズの様に互いを信じ合って学園のリーダーとも言える存在となっていました
序盤にキル夫を支える先輩としようと思いましたが、予想以上に中核のメンバーとなってしまいました

ミカに戦闘訓練を教わる事なども考えましたが彼がそれ以前に弟子入りしてしまったために断念に、富樫先輩は先輩でキル夫らしい戦い方を伝授したと思います
本来であればオルガは死に、鉄華団を引き継いだキル夫が学園に宣戦布告予定でしたが1／10を引いた事に彼は生き残りました
あのダイスが引けてない場合、因果によって分岐した世界でも死ぬ予定でしたが、フリージアが全く流れない最強の団長でした
アカネやカルデアと昔からの知り合いでありましたが、そこを掘り下げられなかった事は悔やんでいます
分岐点では本編通り、怪我で動けないオルガは襲撃によって死に、ミカも同様に死にます
本来であればどうあがいても死ぬ予定だった人物が生きてくれた事にある意味喜びがあります
過去話
オルガ・イツカ達は過去に危険な時カルデアに救われその事に恩義を感じていました
その後アカネの兄である衛が学園に行った時彼らも入学し恩を返すつもりでしたが、それでも失踪してしまいました
その事を悔やみアカネに危険を伝え入学を止めようとしましたが、反発するアカネは

強引に押し切り結局彼女に危険が及ばない様に鉄華団を使って色々と裏から手を回していました

その後キル夫を何処からか拾ってきてアカネが気に入ったのを見て接触し始めてコイツなら任せられそうだと信頼し、色々とサポートする事を決めました

元より衛が失踪したのと、キル夫を仲間と認めた事から学園と敵対する事を決め始めて時魔法を見た時全力で隠す様に進言しました

その後はカルデアの恩義と彼の可能性を信じ自分の命すらも投げ捨ててこの2人を守ると決めたのです

冨岡義勇（原作：鬼滅の刃）

柊シノア、三宮三葉（原作：終わりのセラフ）

本編の方では既に2年であったため出番はほぼ無くみっちゃんだけがメインでしたが、物語は1年前の同級生だったため全員がかなりの出番となりました

みっちゃんには弟が居ない筈でしたが、他の人が知らない弟を求めて彷徨い続けてるって考えも面白そうだと思いキル夫を義弟にしました

義勇は喋らない、みっちゃんは弟扱いしてくる、シノアは常識人だけど関わりが薄いと色々と噛み合わなかった事件が起きましたが……それでも親友として心を開きあっ

たと思います
　みっちゃんは義弟を恋人として見れないと言っていましたが、エピローグでお見合いを嫌い助けてくれとせがみましたが勿論アカネ（＋かなで）一筋のために受け入れられない……仕方ないのでみっちゃんの恋人探しをする事になりました
　分岐では全員貴族であるため吸血鬼の血の対策は出来ていましたがみっちゃんがキル夫と親密過ぎる関係だったため既に手遅れである事を伝える事が出来ず、結果的にみっちゃんの為に忘れたフリをしました
　そのまま本編へと繋がり誰も知らない弟を探し求める人間となりました
　ただ分岐後では恋人探しはしたものの……結局明確な恋人が出来たか不明な以上、本編でお見合い結婚しましたしある意味こちらの分岐の方が不幸？なのかもしれません
過去話
本編参照

姫柊雪菜（原作：ストライク・ザ・ブラッド）
ダイスで選ばれた友人枠、戦士コースに相応しそうなメンバーから選ばせていただきました
根っからの真面目人間で、初めは盗賊コースであるキル夫に戦士コースとしての力の

差を教えようとしましたが……技能や小細工の差で負け、認めないのでは無く素直に感心して自分に欠けている戦い方だと彼を先輩と仰ぎ徐々に搦手も覚えていくようになりました

強くなるために戦士と盗賊コースを交互に繰り返していましたが、盗賊コースでの戦闘はほぼ無く戦士コースでのみ彼女と会う事ができることに……

彼女が学園を訪れた理由はとある組織からの依頼で学園の吸血鬼の調査、状況に応じて殺害でした

ただし調査はしていたものの学園生活を満喫しており学園崩壊後は顔にこそ出さないものの、少し残念でした

本編への分岐点では予め組織で吸血鬼対策をしていた彼女は記憶を失わず、復讐と任務の両立でオールマイトを殺害しようとします

しかし失敗し、命を落としました

こちらの世界では、討伐課とは別に冒険者と兼業で吸血鬼の調査を行なっていますが、楽しい毎日を満喫しているようです

過去話

姫柊雪菜はとある組織の見習いとして所属しており、その組織から吸血鬼が経営する学園の調査の指示が出た

しかし開始当初の彼女は組織の先輩達から戦闘や吸血鬼との戦いの話を聞いていたものの、まだ先輩達には戦闘能力の劣る見習いでした
見習いであるからこそ腕を上げるため学園生活をするのもいいと言われましたが、その実ただの捨て駒であった事を彼女は知りません
学園入学後彼女が思ったのは、先輩方は強いですが今までの経験がある以上同学年ではトップになりたいと言う上昇志向のまま多少の戦闘経験を持つ彼女は、冒険者になりたいと養成校に入った戦闘すら未熟な同級生達を追い越しあっという間に戦士コースの1年では上位になりました
自分の技が簡単に通じる事で正攻法を良しとする傾向に一時期陥りましたが、キル夫との対面で彼女の考えが変わり始めたのでした

富樫源次（原作：魁‼?男塾）
キル夫の戦士としての師匠になった存在
戦闘面ではケンカ殺法と言うステゴロをキル夫に教え込みました
元々やらない夫とは違い盗賊らしい武器をメインウェポンにしようと考え当初はナイフ予定でしたが、海賊と言う出で立ちの元もっと野蛮さを考えて振り下ろせもするククリナイフをメイン武器とし、武器種とキル夫の性格から彼を師匠にと考えました

最終的にククリナイフが弓になると言うだいぶ無茶をしましたが、まだゴリ押せそうだなと思えるあたりキル夫の武器はククリナイフで良かったかもしれません
単純な戦闘能力だけでは無く漢として磨いていく中でキル夫もより他人を思える善人となれました
それと同時にキル夫の戦闘スタイルがケンカになってしまったため、対人や小型中型モンスターとは殴り合いが出来ますが……大型モンスター相手は単独では手も足も出ないスタイルと変貌し、マイナス面もありましたが
当初の予定の仲間と共に戦うを後押ししたので結果的に良しとなりました
後悔といえば男塾のメンツ、特に剣桃太郎は出番があれば出したいと思っていたので出せなかったのが後悔です
分岐点では岡島キル夫と言う弟子がいた事を鹿目まどかから伝えられます
それによりまどかは学園と戦争を提案しましたが、富樫源次と言う男を見誤っていました
弟子を守れない人間は漢じゃ無いと腹を掻っ捌いてしまったのです
その事がまどかの後悔になりましたが、戦争する気は消えて結果的にまどかは生き残る事となりました
どちらの世界でも漢らしく生きたと言う点では変わりはありません

本編では死に、こちらでは生き残りましたがどちらの世界でも彼らしい事は間違いないです

過去話

スラム出身の彼は少年時代荒れていました

同様に悪ガキ達が集まってたびたび問題を起こしていたため国はスラムの掃除を考えましたがそこで1人の男、江田島平八がスラムの住民用の学校を作ると言い出し従いました

渋々スラムの悪ガキ達は従いましたが、卒業する頃には漢となっていました

各々が別々の道に進む中素行の荒い彼は冒険者になるしか無いと

冒険者になろうとした所、塾長から死ぬ前にキチンと学んで来い!!っとお金を貰い学園に通う事になったのでした

そのまま学園では3年のテリー・ボガードを師匠に付けて1年間学んで行きました

学んだ事を生かしながら独自の方法で戦士コース上位陣でしたが、ジェフ流ケンカ殺法でさえもかなり特殊なスタイルであり、その特殊な戦闘スタイルから弟子の類は全く出来ませんでした

諦めていましたが、1年後彼に弟子入りを志願する男キル夫と出会います

ニケ（原作：魔法陣グルグル）
キル夫の盗賊の師匠……も本来は考えましたが、後々出したいキャラを考慮して外れました
そのため勇者技を教えるかどうかと言った所ですが残念ながらダイスは勇者技を選びませんでした
そのため彼とは遭遇回数すら減りましたが、その分裏で色々と巻き込まれていました
（最終決戦：沙都子編参照）
彼は設定では魔王討伐後のⅡの開始時点状態
でしたがキラキラがほぼ最終決戦でしか使えなかったのは後悔です……選ばれないものの宿命でもありますが
分岐点では学園に敵対しようとしたものの、神に愛された少年やらない夫を見かけ自分以上の存在と認めひっそりと学園から消えました
面倒くさかったからでは無いでしょう……多分
こちらでは月を食べる龍の後遺症によりウイッチに責任を取らされて、ククリ以上に付き纏われるようになりました
過去話
原作：魔法陣グルグル参照

申し訳ありませんがマサムネ（原作：戦国スクナ）のみ本来は最終決戦に出す予定もなく、設定や過去話が無いため割愛させていただきます
他のキャラの説明等は次回以降とさせていただきます

続

後書き、キャラ秘話②

――――――――――――――――――――――――――――――――

続きましてもキャラ設定の紹介とさせていただきます

鹿目まどか（原作：魔法少女まどか☆マギカ）
キル夫君をいびる先輩枠、実際はそこまではいびってませんでしたが……
彼女の役割は吸血鬼に対抗する杭を管理する一族、神官の中で神社である彼女でいいのかとも悩みましたが、中嶋が教会を抜け出してきてしまっている
オルガは既にメインとしてガッツリキル夫と関わっていたため自然と彼女がその役にとなりました
神官なのに強い存在、並大抵での戦士でも敵わない程の存在となってしまい、序盤の雰囲気よりも後を追うような目標となる先輩となってしまいました
彼女は優秀でしたが、戦士としては弓のため近距離のキル夫とは相性が悪い
神官としてはそもそも適性がないそのためキル夫の師匠となる事は不可能でしたが、

全体を良く見ているためキル夫の師匠となるに相応しい人を即見つけてくれました
最初に当たったのが富樫先輩だった場合、キル夫もまだ色々と慣れておらず即弟子になる事は不可能だったと思われるため、流石はまどか先輩の慧眼と言ったところでしょう
分岐点では、富樫の所でも言いましたが
彼の死を止める事が出来ず、失意のまま神社へと戻り実家を継ぎます
そのまま外と関わりを持つ事なく、神社内で籠りその生涯を終えます
こちらでも卒業後は神社に戻りますが、まだまだやる気に満ち溢れており暇があれば誘えば一緒に冒険などもするような熱意に満ち溢れていました
何より神社で見習いとして中嶋を引き入れました、その後彼はどこまで成長するか
中嶋とまどかがその後どうなったかはまさしく神のみぞ知るでしょう
過去話
神社の跡取りとして生まれた彼女は、やらない夫のように聖気に満ち溢れていましたしかし独自ではそれを使いこなすのは難しく、ただ溢れるだけの聖気を勿体無いと感じた親はコントロールや使い方を学ばせるため学園へと彼女を入れました
しかし彼女の性格のせいかどうか、神官としては大成する以上に戦士としては名が売れ後輩をしごく立派な鬼コーチと化していました

今日も生意気な後輩は居ないかと探していると……盗賊コースで彼女を理解していなかったキル夫が見事騙されました……

走り鳰（原作：悪魔のリドル）

後輩をいびる系女子その2、こちらもまどかと同様に最初の数回でいびるのが少なくなってったと思います

ただしこちらはまどかとは違って盗賊であるためキル夫の師匠候補、1／2を勝ち取って師匠となりました

渚とは違い、盗賊技術は全体的に高いですがそれでも生粋の暗殺者であったため暗殺に秀でています

ただしキル夫は暗殺とかはそこまで好んで居なかったため、真っ当な技を教える師匠となりました

最初の選択肢でキル夫が脳髄を使っていた場合は暗殺メインで教えていた事でしょう

ダンジョンに行くメンバーは主にダイスとメンバーを見て1人追加するケース（主に趣味で中嶋が追加された）とミッション等で決めたメンバー（火垂のケース等）の2種類でしたが、海底洞窟は一部ダイスでメンバーを決めた中で彼女がキル夫の魔法の自覚

をさせる切っ掛けとなりました
　他にも盗賊技術を始め師匠として色々な技を覚える切っ掛けとなって欲しかった反面、絆を繋ぐのが目的だった以上色んなキャラから教わって欲しいなと本当に師匠していたのが序盤だけなイメージが強くなってしまいました、その一方で富樫はずっと師匠していたので、その差が今後は気をつけたい所です
　分岐点では彼女は記憶を失い、まどかに誘われますが記憶がない人間の復讐をする気が湧かずに断ります
　その後まどかとは確執が生まれ疎遠となってしまいますが、まどかが神社に籠ってしまい仲直りする機会が一切訪れませんでした
　そのまま闇ギルドに所属となり彼女も他の人間との関わりを断ちます
　本来であればこちらでも闇ギルド予定でしたが何故か臨也に引き抜かれました
　ブラックさはあるかもしれませんが、死の危険性は無く、安全さは闇ギルドよりも保証されています
　しかし闇ギルドでも臨也の元でも恋愛は厳し過ぎる外とは関われないし、臨也やⅣはごめんだと
　キル夫に断られたため恋愛をする事は不可能でしょう、それでも彼女は情報屋の1人として満足した人生を送りました

過去話

走り鳶は暗殺者一家に生まれ、親から暗殺技術を教わって来ました
しかし天才だった彼女は教えすらも余裕でこなし、物足りなく感じていました
そこで、家族の期待により一層応えるため更なる技術を手に入れるため学園へと入学し盗賊コースで特に暗殺を専門に勉強しました
学園はド違法な事を優先して覚える事に渋い顔をしながらも優秀な彼女に何も言い出せずに3年になりました
悪意だけで生きていた彼女は、友人であるまどかが気に入ったと言う少年の話を受け興味を持ち弟子入りさせました
そのまま、根っからの善意を持つ彼に自分が正しいのか悩み……実家では無く自分にとって正しい事を知る為に臨也のもとで仕事を始めます

折原臨也（原作：デュラララ‼?）
もう1人の盗賊の師匠候補、ただし鳶以上の問題児です
原作よりはまだマシかもしれませんが、それでも人間の全てを愛しており狛枝同様のタイプのやばい人間です
しかし盗賊3年となるとこれくらいのヤバい奴じゃないとこなせないだろうと思い、

先輩としてチョイスしました
まどかと鳰は関わった後輩にとっては関わりたくない人ですが学園としてはそこまで気にしていない
一方で臨也とⅣは学園に関わる皆が恐れる人間達でした
最初、彼の情報を集めたときは面白そうだから弟子入りさせようかな程度でしたが、彼を直接見て本当に面白そうな人間だったと師匠分を鳰に取られて本気で悔しがっていました
その後も、課外授業ではキレるのを分かっている爆豪を煽る
期末では学園側に付いて場所をリークするなど問題行動ばかりを起こしましたが、最後は人間大好きな彼は躊躇いもなくキル夫側に着きました
ただしこれは建前であり、お気に入りであるキル夫は相手が人間であっても力を貸していました
分岐点では彼だけは本編の話と異なり、ソウルイーターで身体がボロボロになった長谷川先生に代わり盗賊コースの教師となりました
しかし神に一切興味のない彼は学園の実験に興味は無く学園側から疎まれる事となりながら教師を続けました
一方の彼のでも生徒達には関わりが持てるものの、血によって縛られた人間に興味は

薄く正直つまらない人生と評価します
その意味では人間らしく自己中心的に反逆し栄光を掴み取った彼らを臨也は絶賛した事でしょう
過去話
豪商の家で生まれた彼は多くの人間の顔を見る機会がありました
普通に買い物する客と、笑顔で対応する父
お金を借りに来る申し訳なさそうにする人間と傲慢に振る舞う父
恨みを持つ顔を怯える顔をする父
様々な人間を見て育っていくうちに彼は人間に面白さを覚えて人自体に興味を持つようになりました
特に彼は狛枝のように窮地に陥った人間がどのような行動を取るかと、父親に情報収集との理由も兼ねて、学園に通うことを許可されそこで色々な人間を見る機会が訪れました
そのまま盗賊として成長しながら、3年になった時、1人の少年に興味を示し接触を始めました

Ⅳ（原作：遊☆戯☆王ＺＥＸＡＬ）

最後の序盤先輩キャラ
ぶっ飛んではいますが、正直４人の中では一番まともです
普段はまともな事が多いですが、臨也と共にいると暴走します
最初は、臨也のストッパーキャラ予定でしたが……何故か臨也と組むと暴走してしまい、結果的に最悪な事になりました
そのため次の路線であるキル夫に世の悪意を教えようと研究所に案内しましたが、それ以上の善人っぷりを見せられ、むしろⅣの方が折れました
魔術師、特に召喚士としては優秀な先輩でしたがキル夫の魔術が特殊であったため師匠になる事は出来ませんでした
しかし、その分解明の手伝いをしたりして役に立つ便利キャラくらいのポジションは取れたと思います
分岐点では、ボンボルドのマインドコントロールのヤバさを知っている彼は卒業後学園を離れて冒険者を始めましたが学園に今後関わりをもたないようにしました
それは腐れ縁である臨也すらともそれ以降関わる事がないように心掛けています
彼ほどの実力者なら冒険者として大成した事でしょう
彼自身はどちらでも悪くはなさそうですが、腐れ縁である臨也と今後も関わっていくかどうか、それで幸せが決まるでしょう

過去話

本名トーマス・アークライト

ただし本人はその名で呼ばれるのを嫌います

劇団の息子として生まれた彼は相手を楽しませることを学びます

しかしその真っ直ぐな心は懇意にされていた折原家の嫡男、臨也によって彼にとってのファンサービスは歪みます

本来ならば悔やむべきなどと考えますが、Ⅳは同時に世界の醜い部分も知り善意しか知らなければ死ぬのみと知ります

そのため口でこそ言わないものの臨也に感謝しています

その後も劇団に所属していましたがある日召喚魔術に目覚めます

本当であれば劇団で活躍させることも考えましたが、父親は命に関わる危険なものと考え、利用するよりも制御することを優先と考え劇団を売り払いその金で友人である臨也と同じ学園へと通わせました

そこでキル夫に会い、本来であれば根っからの善人であるキル夫を食い物とさせないため歪ませようと研究所へ連れて行きましたが

そこで折れる事のない善意を見て、彼の心も歪ませるじゃなくて歪まないよう自分達がサポートする方針へと変わりました

緑谷出久　爆豪勝己（原作：僕のヒーローアカデミア）
元々キル夫の話を全く聞かない存在が必要と考えかっちゃんは出演が決まっていましたが、その友人役としてデクも登場しました
ロマンを求め努力するキル夫に対して、努力家のデクはすぐに仲良くなりました
かっちゃんも盗賊なのに実力があるキル夫の事を認めてはいたものの、戦士が盗賊を認める事が納得出来ず認めていないように振る舞っていました
デクは友人として彼を助けるのではなく未熟同士彼と共に成長する
かっちゃんはライバルとして彼に真っ向から違う事は違うといい、戦いながら成長し合う
そう言った目的でしたが、彼がキル夫と絡む難易度自体が難しく急遽武闘大会1回戦で出番となりました
最終決戦に当たり、デクは予想通り自分から協力を申し出ましたが、かっちゃんもデクから言われたわけではなく自分から言い出しました
ただただ暴れたいだけではなく、かっちゃんとしても自分を倒したライバルを知らない場所で死ぬのは許せないと乱入を決意しました
分岐点ではデクは記憶を失いますが、直前まで死闘をしていたかっちゃんには彼の記

憶が残っています
死んだ事を悔やみながらも冷静でデクに危害が及ぶ事を恐れ彼の存在を無かったこととして扱いました
しかしその行動は自分自身が追い求めたヒーローに程遠く……いつしかかっちゃんはヒーローを目指すのを諦めました
一方のこちらでは2人とも吸血鬼討伐課に入り後にヒーローとなり2人とも満足した一生を迎えました
過去話
農村で生まれた彼達はいじめっこいじめられっこの関係でした
デクは平穏な生活を求めていましたが、一方のかっちゃんは刺激的な生活を求めて村から出ようと画策していました
そのまま一生が過ぎると思った中である事件が起きます
村がモンスターに襲われて壊滅しかけます
しかし偶々その日、冒険者が泊まっており一宿の礼にモンスターを退治しました
そこからデクとかっちゃんは村を出てヒーローになる事を目指します
親としては苦しいものでしたが、村からも名のある人物を出したいと思っていた村長は2人分の学費を出して学園へと通う事になりました

互いに切磋琢磨しながら成長し
デクは優しさと守る事、かっちゃんは強さと小細工をキル夫を見て覚えることとなりました

潮田渚（原作：暗殺教室）
盗賊コースのキル夫の友人、キル夫は同コースのメンバーとは仲が良く最初から呼び捨てする仲でした
盗賊のメンバーは最初は考えていませんでしたが、流石に同じコースの人間が少な過ぎるとまずいと考え増えたメンバーの1人です
盗賊よりも暗殺者寄り
1年生は盗み特化のカズマ、罠特化の沙都子、暗殺特化の渚などと一芸特化キャラが多いです（日影は隠密特化）
渚は暗殺一家など特別な家系でもない一般人ですが先生の教えもあって暗殺に躊躇いが無く、ターゲットを黙々と仕留めます
人を殺す事に関しては躊躇いのない人間は多いですが渚はターゲット殺害において使える手はなんでも使いますし卑怯な手でも使用します
本人も感情を躊躇いなく殺せる事もあり、敵対する可能性も十分にありましたが、渚

自身がキル夫と敵対したくないと言う感情が強く最後まで仲間でありました
闇ギルドに適任とも言えるべき才能はしっかりと就職して才能を万全に発揮できている事でしょう
分岐点では彼もまたキル夫の記憶を忘れます
そして彼の能力をよく知る学園は彼を執行人として雇い、先生からの教えが学園を助ける事に合っているか不安に思いながらも……徐々に裏の人間となるのでした
過去話
原作：暗殺教室及び、最終決戦：シノン編参照

北条沙都子（原作：ひぐらしのなく頃に）
ウィッチ（原作：ぷよぷよシリーズ）
渚と同じくキル夫のコース間での友人、姉であるウィッチ（北条憂）の後を追って学園に入学しました
初めにウィッチ、その後に沙都子の登場が決まりましたが口調や髪色からこの2人を姉妹にする事に決めました
罠特化と言えるべき彼女はかなりの努力家です
戦闘能力の才能が無かった彼女は自分の為に、味方の為に罠の多くを勉強し知り尽く

し、対策や対策している相手にどう決めるかなどの勉強を続けています
一方のウィッチは天才型であり、それが災いして闇落ちします
ボンボルドは魔術師コースの生徒を次々に実験材料にして行き、成功した生徒達に遅れを取り焦りからボンボルドに相談して負の感情が増幅し努力していたはずの妹を恨むようになりました
しかし嫌われながらも妹は姉の事を嫌う事はせず最後に仲直りをし、また仲の良い姉妹に戻りました
分岐点では、姉を止めれる人間がおらず本格的に妹を恨んでしまい最終的に妹を手に掛けます
殺した後、洗脳は解けますが彼女には後悔しか無く、怒りに狂いボンボルドを殺そうとしますが気付けば実験結果の化け物としてその姿を変貌させてしましました
キル夫の存在は、彼女達の亀裂を埋めるためには必要な存在だったと言えるでしょう
過去話
北条家は魔術師の家系であった
天才である姉憂に比べて妹の沙都子は魔術師としては落ちこぼれでした
しかしそれでも妹は凹まず、むしろ姉が立派な事を誇りに思い魔術師の姉の魔力を利用する罠や、姉をサポートする罠作りへと努力する方向へ向かいました

本来であればウィッチは即魔術師となるつもりでしたが、沙都子が一応周りを知っていた方がいいと学園への入学を提案します
それに従い学園に入りますが、1年時は魔術師トップで所詮こんな物かと思いましたが、翌年妹が入ってから大きく変わります
周りがドーピングや改造をしている事を知らず、1年目よりも劣り始めた彼女は焦りついにボンボルドに手を貸してしまいます
一方の妹は小さい頃から数多の努力をして来てその才能が開花し学園でも敵に回したくない程へと変わりました
しかしその開花が姉の目を曇らせるとは知らずに……

シノン（原作：ソード・アート・オンライン）
キル夫達の先輩で2年生、この世界では珍しい銃、それどころかスナイパーライフルを使っています
キル夫もライフルに惹かれましたが、残念ながら彼には銃の才能はありませんでした
登場理由は大豆氏と話し合い、出した方がいいとなったのが理由です
シノン、エリス、シュテル辺り本当によく見るなと思います
シノンは出すと決めてからルートが一本化したキャラでした

彼女の過去を含めて、後悔だらけの起源その弾を一発だけ持っていると
その過去で人を殺す事がトラウマになった彼女は、この世界ではゲームなどは存在しないため荒療治として学園に入学します
2年になった今でも銃の引き金を引くのは怖いですが、キル夫や仲間達と関わるうちに少しずつ改善して来ました
吉良先輩との戦闘は、バイツァ・ダストの攻略難易度の高さから彼を止める力が必要でしたが殆どの生徒には巻き戻る彼を前に太刀打ちが出来ません
そのため、起源弾の使い道はここだとシノンが彼と戦う事を決め最後に仲間の為に引き金を引き、トラウマを完全に払拭しました
それもあって仲間をより一層気遣うようになり、能力も含めて冒険者になってからはキル夫が一番組むのはシノンでした（アカネは結局冒険者にはならなかったのもある）
分岐点では彼女もまたキル夫を忘れましたが、既にトラウマは皆によって払拭しておりやらない夫が入ってくる頃には3年の先輩となりました
その後冒険者になりますが……彼女の中には何か忘れたモヤがずっと残っているのでした
過去話
原作：ソード・アート・オンライン及び最終決戦シノン編参照

八神はやて（原作：魔法少女リリカルなのは）
珍しい魔術師コースでありながら味方である先輩
最初は友人であるまどか達から面白い後輩がいると受け興味を持ちました
その後特殊な魔術を持つと言われて興味は増しましたが、解明し始める前に原理を理解してしまったようで不満が彼女にありました
しかし古城で頼られて喜んだ事から、純粋に先輩として後輩の手助けをしたいと言う気持ちが彼女の行動原でした
しかし本人の気付かないうちにボンボルドに弄られていた為、彼女がその内容を知ればボンボルドがより早く確保しようと動いた為気付かないで良かったとも言えます
兄が居ますが、味方になってないどころか中嶋正義と被るのでほぼ言うことはありません
その力はあったけど、使いこなせていなかったみたいな……
はやては兄を追いかけようとしましたが、とても高い壁で挫折しそうになるも……戦士コースで盗賊にも関わらず戦士に喰いついているキル夫を見てまた立ち上がりました
分岐点では彼女は出来損ないと見下されている兄に実験材料として利用されます

はやてを犠牲にして新世界の神になろうとしましたが……彼も学園の実験材料になり救われない兄妹となりました
はやては兄は悪い人間だし死んでも仕方のない人間だと思っています
しかし生きて帰って来て良かったとまだ兄に対して情のある少女でした
過去編
八神はやては小さい頃事故で全身に大怪我を負います
優秀な兄は妹を出来損ないとし反面教師として成長していきますが、はやては生死の境目をずっと彷徨っていました
親はそんなはやてを見捨てなかってため、生きていく事が出来ましたが他所の家なら間違いなく死んでいたでしょう
その後怪我は長時間は戦えないと言う後遺症は残ったものの無事に歩けるようになり普通の人達と同じ生活を送れるようになりました
その後、自分は何をすべきか悩みましたが……魔術師の才能があり親に心配されながらも冒険者になる事を決めます
その過程として兄と同様学園に通う事になりました

藤堂晴香（原作：寄生ジョーカー）

所謂追加キャラ、ボンボルドの研究所突入が決まり彼女の学園参加が決まりました
自分の過去が思い出せず、ただただボンボルドの指示通り失敗作の処分や実験などを請け負っていましたが、生きた人間を見るのは久しぶりで侵入して来たキル夫に興味を持ちます
そのまま彼の学園話を聞くたびに学園への興味が増して入学したいなと言う気持ちが強くなるも自分自身の事を理解しており諦めました
当初の予定では……と言うより最終決戦までは晴香にはボンボルドによって化け物になった東風谷早苗が彼女の中に埋め込まれている設定でした
そのまま長谷川先生が助ける路線でしたが、混じるのは最後のアカネと被ってしまう他彼女を触手の埋まっていない常人に戻したいのに早苗が中に眠っているとそれがし辛くなってしまうため彼女の中にいた生物は名もない化け物になりました
分岐点は彼女には存在せず、キル夫が居たから巡り合えただけで、居なければ彼女は化け物として消えていた事でしょう
既に彼女には戸籍も無く、学園が消えたため未来がありませんでしたが先輩やキル夫の提案のもと闇ギルドに所属出来、そこで仕事と共に生きていきました
過去話
彼女は年齢通りの人間では無く、学園が設立する前どころか学園周辺がまだ農村時代

の人間でした
藤堂晴香は農村で育った少女でした
多少貧しさはあったものの気丈に育ち、戦闘能力もありクマなども積極的に狩っていたため村では人気者でした
しかし悲劇は訪れます
この場所に興味を持った校長は村の住民全てをボンボルドに渡し、その土地で学園を設立しました
その時彼女以外は失敗作となり地下に捨てられます、そのため失敗した奴らは化け物であるにも関わらず、同郷である彼女だけが成功した事を悔やみ妬みました
彼女だけが運良く成功作で記憶はないの生き残りました
そのまま学園で幽閉された生活を送ることとなります……彼が来るまでは

以上が、主要キャラ達の説明となります
この後はその他のキャラ達の説明を軽く
父親である岡島緑郎（原作：ＢＬＡＣＫ　ＬＡＧＯＯＮ）は元海賊で、スタート地点では海軍となりました
昔からスリルジャンキーでしたが、子供が生まれだいぶ安定思考へと変わります

その時海軍からのお誘いがあり渡りに船と海軍になりました
その行動全てがキル夫に影響を与え今のキル夫があります
職場の先輩である秋山優花里（原作：ガールズ＆パンツァー）は店の娘で普段は仕入れしている父に変わって店の経営を行っています
明るい性格で自分の趣味に極振りの人間でキル夫も振り回されていました
彼女から得たアイテム知識がキル夫の罠を始め小細工に影響を及ぼしました
先生方はほぼ本編準拠ですが、その結末は大きく変わりました
オールマイトは原作同様死んだものの、混ざり合って消されたわけではなく戦いの中で死んだため満足した死に方だったかもしれません
ボンボルドは原作同様全滅しましたが、最後は長谷川先生の踏み台となりました
1つだけ言えることは本編以上に裏で暗躍しまくって厄介だったと思います
束は逃げました、見つかっていませんしその後は不明です
校長はカーミラのための礎となりました
どちらの分岐点でも神を造る事には変わりありませんが、こちらではその為に異世界の神を利用しようとしました
結果的に失敗しましたが、カルデアが存在しなければこの世界は滅びていた事でしょう

長谷川先生は本編では生きましたが、こちらでは死にました
しかし、1人では死なずに9年間待っていた早苗と共にこの世から去る事になりました
どちらの方が幸せだったのかは、彼によるでしょう
カーミラは校長の眷属化が解けず明確に不幸になったと思います
最後まで狂信し尽くせたので本人は満足でしょうが、それでもそれは作られた忠誠なので……
本当に申し訳ない事なのですが、彼女は聖気が無いキル夫には救う事が出来ず最初からラスボス予定でそのまま突っ切りました
本編では幸せを続けられる事を願います
最後になりましたが、キル夫をサポートした吸血鬼ロザリンド（原作：魔界戦記ディスガイア）は吸血鬼でありながらもダンジョンマスターで退屈していました
そこで出会ったキル夫に興味を持ち彼を眷属化させようとしました
しかし大いなる存在のせいでその計画を断念せざるを得ませんでしたが
彼女の血と、スカーフは後のキル夫の大きな手助けとなりました
彼女の血が無かった場合敵だらけになってしまったわけですし
最終的に吸血鬼討伐課に入った生徒が2人も居たことによりヴァン・ヘルシングに

よって討伐される未来は無くなり生き延びました　良かったね

キャラ紹介は以上となります
2話にわたる長文にお付き合いいただき有難うございました
今まで短編は書いていたものの長編は初めてで筆を折りそうになる事もしばしばありましたが、無事完結できてよかったです
これも全部原作への情熱が強かったことと見てくれた読者が居てくれた事が理由だと思います
改めて作者である大豆氏と読者様には多大な感謝を
約10ヶ月近くに渡りこの作品に付き合っていただき有難うございました！
東方二次創作である「幻想郷で死に戻る俺は」を読んでいただいている方は再びそちらの方で改めてよろしく申し上げます